
機甲生体捜査官事件ファイル vol.1 -弄ぶ、誰か-

日吉舞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機甲生体捜査官事件ファイル vol.1 - 弄ぶ、誰か -

【Nコード】

N6648K

【作者名】

日吉舞

【あらすじ】

西暦2041年冬。ヴァージニア州で発生した、被害者の身体を捻じ切り、血まみれの肉塊に引き裂く残虐極まりない連続猟奇殺人事件が、全米を震撼させていた。犯人は精神異常者なのか？死体の側に残される、手足のない人形は何を意味するのか？日本からの命令を受けFBI特別捜査官となった元軍事サイボーグの未来、同じくFBI犯罪科学研究所のDNA分析官となった杉田が、FBIの誇る特殊部隊「CVC」の一員として凶悪な殺人鬼の姿に迫る。

前作「SAMPLE」から雰囲気を一変した続編、2011年6

月10日完結。

続編作品ではありませんが、話としてはほぼ完全に独立しているため、前編の予備知識なしで読めます

プロローグ

今日も私は生きていられた。

しかし私には、今日が一体何日で何曜日なのか、今何時なのかもよくわからない。この記録も時間があるときに書いているから、もう何日分くらい書きっぱなしでいるかもわからない。

奴らに捕まり、ここに閉じ込められてから、そう何日も経っているわけではないのに。

ここにはカレンダーがなく、時計もなく、日の光を感じることができない窓もない。

あるのはただ、冷たいコンクリートに囲まれた空間とダンボールの匂い、そして埃っぽい空気の味だ。私に許されているのは、息をすることと食事をすること。それから眠ることとトイレに行くこと。それも奴らが許してくれたときだけだ。

私の命の主導権は、奴らが握っている。

今までに何人もの男女を殺してきたと、まるで昔の野蛮な英雄が語るみたいに自慢げにうそぶく奴らが。

私には自分がいつまで生きていられるのか、皆目見当がつかない。生き延びるためにはどうすればいいのか？

どうすれば、他の犠牲者のようにむごたらしく殺されなくて済むのだろうか？

助けを待つにしても、それまでに殺されたらおしまいだ。

何とかして彼らに取り入って、私が役に立つ人間だということをわからせなければならぬだろう。料理ができるとか、そういう特技を見せたり、話したりすることで。

こんなときに他に誰かがいて、これからのことを相談できたらどんなにいいだろう。

自分以外の味方が一人でもいるという有難さを、今ほど痛感したことはない。

一人でいる時間が長ければ長いほど気が狂いそうになって、誰もいから話をしたいという気持ちになってくる。それが奴らでも……その気になれば躊躇なく私をなぶり殺しにするだろう、奴らでもいいと思ってしまう。人間の心というのが本当に脆いのだと思わざるをえない。

ここに閉じ込められてからは、奴ら以外の誰とも話ができていない。

私が持っていた携帯電話は当然のことながら取り上げられているから、他人の話し声を耳にすることもなかったと思う。

いや、壁に耳を当てれば外の雑音くらいは聞こえるのだろうか。

と思ったが、それも無理だろう。ここは地下室なのだから。だから拷問された被害者がどんなに叫んでもそれが誰かに届くことはなかったし、奴らも安心して殺すことができたのだ。

正直、こんなことは文字にして書き記すだけでも、悲鳴を上げて泣きたくなるぐらいだ。

なのにこんなものを書いているのは、私が自分を保つためだ。

奴らが私に何をし、私が何を思ったのか。

それを忘れないために。

そして私がここから生きて戻ることができる時は、即ち仲間が助けに来てくれた時だ。

私をこんな目に遭わせた奴らを裁きにかけるとき、きっとこの記録が役に立つ。

そのためにも、私は自分のことを何一つ漏らさずに、ここに書かなければならない。

私の身体を通り過ぎるおぞましい嵐のような出来事を、本当は思いつきだけでおかしくなりそう。身体も心もずきずきと激しい痛みを訴えて、私から正気を奪おうとする。

しかし、それさえも感じられなくなってしまったとき、恐らく私は奴らと同じけたものにまで堕ちる。

それだけは絶対、あってはならないことだ。

私は、これ以上の犠牲者を出すことをくい止めなければならない。この部屋の隅に放り出されていた木箱の中に紙とペンを見つけて、ほんの少しだけ救われた気持ちになった。相談する相手が誰もいなくても、過去の自分と向き合うことができるようになるのだから。正気を失いかけてもこの自分が書いた記録を読み返せば、こころはまだ戻ると信じたい。

それに私には、帰る場所があるのだから。

……そう言えば、奴らは確かに言っていた。

「今にお前の友達も、ここに招待してやるよ」と。

奴らが知っている私の友達というのは、彼女しかない。

奴らは一度狙いをつけた獲物は、呆れるほどに頭を使って、何があっても必ず手に入れる。

そうなれば、願ってもいないチャンス……いや、だめだ。彼女をそんな危険に晒すような真似は断固としてできない。いくら彼女でも、うまく立ち回れる保障などどこにもないのだから。

それに奴らのことだ。女性である彼女を捕まえたら、もっと酷い拷問にかけた拳げ句、私よりも先に殺すかも知れない。

私がおかできることはないのか？

私が自ら命を絶てば……それもやっぱりだめだ。私を失えば彼女が一体どうなってしまうのか、自分が一番よく知っている。

考えがまとまらない。

落ち着け、自分。

そう言えば、昔こんな風にパニックに陥りかけたときは、とにかく花を眺めたり、触ることにしていたっけ。子どもの頃から大好きで、いつも側にあつた花たちに、まるで心ですがりつくみたいに。

花。

そうだ、必死に書いていて思いついた。

花には、形を取らないメッセージを託すことができる。

彼女が何も知らずにここへ来たときに私の存在を知らせ、助けを待っていることを伝えられる花がある。つい最近、彼女とそんな話

をした覚えがある。

退屈しのぎに、私の趣味である園芸で奴らの部屋をちょっと飾らせてくれと言えば、多分疑われたりしない筈だ。

でも、これは賭けだ。

もし彼女が、私が教えたことを覚えていなかったり、気づかなかつたりしたらそれまでだ。

……結局、私はやっぱり彼女を頼るしかないのか。

心底情けないが、何とかするためにはそうするしかない。

私は彼女を信じて待ち、それを伝える巧い手段をひねり出さねばならないのだ。

誰よりも大事な、そして私が愛する君へ、運命を託す。

どうか、どうか、気づいてくれ。

ドイツ語のメモより抜粋)

(ある連続殺人事件の証拠品、

11月頭。

同じ時期でも、東京なら冬の分厚いコートはまだ少し早いからいだろう。

しかしここアメリカ合衆国北ヴァージニアでは、自宅のキッチンにいても、羽目板張りの壁を通り越して、乾いた寒気が容赦なく肌を刺してくる。長袖のパジャマの上にウールのカーディガンを羽織らなければ、震えるほどだ。

もつとも、位置としては岩手県と同じくらいなのだから、それに気温が低いのは仕方がない。日本と大きく違うのは、空気に湿り気がなく昼夜の温度差がかなりあることだった。

時刻はまだ午前5時台で、夜も明けきっていない。このフレデリックスバーグは、窃盗とレイプ犯罪が合衆国の平均発生件数を上回るやや物騒な地区だ。が、薄暗く、まだ全てがひっそりと寝静まっている早朝は、そんな印象はみじんもない。

静寂を湛えた夜明けの空気で満たされたダイニングキッチンには、素朴な蛍光灯の照明に暖かく照らされていた。

「ふあ……」

間が抜けた声を広い部屋に遠慮なく漏れさせて、未来は盛大なあくびをした。冷たい水で顔を洗い、ミントの歯磨きで歯を磨いても、瞼はまだ睡魔の侵略に侵され続けている。重い目をこすって、彼女はごそごと朝食の支度を始めた。

ミルクパンに冷蔵庫から出した低脂肪のミルクを注ぎ、ガスレンジにかける。晩のうちにボウルに切っておいたセロリやトマトも出して、白い陶器の平皿に盛りつけてから、くし形に切ったオレンジを添える。次に冷凍庫から10ピース入りのアメリカン・ワッフルの袋を出し、何枚かをつまみ上げてソーセージと一緒にガスオーブンへ放り込む。

本当はいちいちこんな準備をしなくても、電子レンジで温めればいいだけの冷凍ブレックファスト・パックも安く売っている。どちらかと言えばそのほうが、今の安月給に見合った食事だろう。

しかし脂肪だらけで甘いだけのブルーベリーマフィン、水分ばかりで味が抜けたミックスベジタブル、チーズを入れすぎて強い香りがするスクランブルエッグの取り合わせは、一度食べただけでもう充分だった。アメリカで低価格の食品は原料がクローンのため、心なしか味があまり良くない気もする。

もっとも未来は、日本にいた頃は主にコンビニエンスストアで朝食を買っていたのだ。あまりアメリカの朝食に文句をつけられる立場でもないだろう。

が、ぱりっとした海苔を巻いたおにぎり、野菜を主とした具のサンドイッチ、甘さが控え目の菓子パン、コロツケや卵をはさんだ調

理パンなど、その種類は数えきれないぐらいに豊富だった。それにインスタントの味噌汁や、これも無数の種類があるお茶を合わせれば、それこそバリエーションは無量大だ。

それに比べて、ここには歩いて行ける範囲に食の宝庫たるコンビニエンスストアもなければ、様々なお茶を売っている自動販売機もない。一番近いところにあるのは、数マイル離れたショッピングセンターに建つ巨大倉庫よろしく、巨大なアメリカ人の腹を満たす冷凍食品を大量に売っているスーパーだけだ。

ああ！日本の食事の、何と豊かだったことか！

おにぎりの味を記憶の奥で確かめつつ、玄関に新聞を取りに出た未来の大袈裟な溜息が、フレデリックスバーグの寒気に冷やされて白くなる。

ワシントン・ポストを取り、ベロアのスリッパで音を立てつつ食器や調味料をダイニングテーブルに並べている間に、ワツフルとソーセージがこんがりといい具合に焼けて、ミルクも温まっていた。

そのホットミルクでカフェオレを作っている未来に、ドア2枚と廊下で隔てられたベッドルームから衣擦れの音が上がったのを、強化された鼓膜が教えてくれた。今起き出したらしい同居人が着替えて身支度を整え、ダイニングへ来るまでにまだ何分かかかるだろう。

未来が新聞と一緒に持ってきていた空間投射テレビの端末をダイニングテーブルの上に置き、マルチリモコンで電源を入れる。画面の大きさを調節していると、地方局のキャスターが今日は冷え込むがいい天気であることを告げていた。

天気予報のキャスターは、誰もがえてして早口だ。渡米してすぐは主に画面から天気や気温を調べていたが、ここ数ヶ月でこういった雪崩のような英語にもすっかり馴染んだ。あとは華氏表記の温度が瞬時に肌でどれぐらいかを感じられるようになれば、一人前と言えるだろう。

「おはよう、未来」

未来が白木のダイニングテーブルについたところで、思ったより

早く杉田が姿を現した。

のりの効いた白いワイシャツにダークカラーのズボンと細いネクタイを合わせ、綺麗に髭も剃った姿は、昨晚深夜の帰宅だったことをあまり感じさせない。軽く整えられた前髪のすぐ下にある細いフレームの眼鏡も、きちんと汚れが拭き取られているようだった。

「おはよ、先生。朝ごはん、できてるよ」

未来が挨拶を返してテーブルにつくよう視線で促した。しかし、彼はジャケットの袖を通してから、立ったままで真ん中の皿に盛ってあったワッフルを一枚つまんだ。

「ごめん。さつき電話があつて、今日は朝一番で届く証拠品がかなりたくさんあるらしいんだ。分析が立て込んでるから、研究所まですぐに来ていつて」

「また？昨日も遅かったのに。せめて、カフェオレくらい飲んでいきなよ。暖まるから」

「じゃあ、タンブラーに移すから。走りながら飲むことにするよ」
言いながら、杉田がシンクの脇に洗って置いてあつた愛用の保温式タンブラーを取り上げる。

ここ2週間くらいは杉田も未来も仕事が急に忙しくなり、深夜早朝の帰宅や出勤、徹夜も珍しくなくなりつつあつた。二人ともまだ新人であることを考えれば、余計な仕事を抱え込むのも仕方がないと言えれば仕方がない。

しかし、たまに朝に顔を合わせるときはせめて、一緒の食卓で同じ食事を食べたかった。

「折角毎朝準備してくれてるのに、最近はずっくり食べられなくてごめんね」

「ううん、いいよ。新米で忙しいのはお互い様なんだし、私も捜査で帰らないことがあるんだから」

湯気が立つカフェオレを、お揃いのマグから銀色のサーモタンブラーに移す姿を寂しげに眺めていた未来に気づいたのか、杉田が申し訳なさそうに肩をすくめた。先に謝られてしまった未来はむやみ

に不機嫌な顔を見せるわけにもいかず、小首を傾げて笑って見せる。「それにそのカフェオレ、猫舌の先生にはちよつと熱過ぎるかもね。運転しながら冷ませば、丁度いいよ」

その仕草が却って本心を隠そうとしたことを杉田に伝えたのか、彼は眼鏡の奥の黒い瞳を優しげに細めた。

「今度の非番のときに、リッチモンドまで買い物に行こうか。そろそろ冬の服も買い足さないといけないし、好きなコートを一枚買ってあげるよ」

「ほんと？じゃあ私は美味しい日本料理のレストランでも調べて、予約しとくね」

かりかりのワッフルにメープルシロップを少しだけかけ、かじりついている杉田が提案すると、未来の顔が柔らかくほころんだ。

「でも、安月給なんだから無理はしないでね」

「未来が頑張つて食事を作ってくれてるし、それぐらいの余裕はあるから。楽しみにしてるといいよ」

「……うん。ありがと」

パジャマ姿でセミロングの髪を一つに束ねた未来は、照れ隠しなのか視線を外してはにかんだ。

「なるべく早く帰れるように頑張るよ。今日は外部での実習もないから。クワンティコから寄り道しなければ、1時間ぐらいの距離だしな」

使い込んだブリーフケースを一度フロアリングの床に置き、靴を白いキャンバス地の室内履きからローファーに履き替えて、杉田はもう一度未来の方を向いた。

「うん……」

ところが、立ち上がった後も15センチほど下にある彼女の視線には落ち着きがない。短い間に杉田の顔と床、自分の手元と何度もあちこちへ飛びまわっている。かと思うと大きな瞳がまっすぐに彼の顔に向き、そのまま動きを止めた。

「どうかした？」

「あのね……」

明らかに何か言いたそうにしてもじもじと肩先を揺らす未来を、杉田は不思議そうに眺めた。彼から見つめ返されて、未来が一瞬きゅつと唇を結び、すぐに緩めて息を吐く。

「行く前に何かすること、あるんじゃない？」

拗ねたような口を利いてから、未来は杉田の顔をもう一度見上げた。

「……ああ。はは、わかったよ」

何とも可愛らしい同居人のねだり方に、杉田が暖かく笑ってから彼女の方へ身をかがめた。

未来の細い肩に手を回して、軽く目を閉じ唇を重ね合わせる。

「じゃ、行ってきます」

「うん。行ってらっしゃい」

肩下まである茶色っぽい、張りがある彼女の髪を撫でてから、杉田が玄関へと向かった。ドアを開ける前に互いに手を振り合い、もう一度挨拶を交わす。

未来が少しだけ耳の感度を上げると、ポーチを横切った杉田の足音が庭の芝生を踏みしめて隣のガレージに入り、彼の車である中古のシボレーに乗り込んだのがわかった。が、そこでふと聴力を通常に戻してみる。こんなふうにいっまでも未練がましく杉田の跡を追いかけていては、寂しい女になり下がってしまう気がしたのだ。

「はあ……」

未来が大きく吐き出した息が、がらんとしたリビングに散った。

彼が出ていってしまつと、この白い木造のこぢんまりとした平屋がやけに広く感じられる。

杉田の職場はクワンティコにあるFBI犯罪科学研究所で、FBIFレデリックスバーグ駐在事務所に勤務する未来よりも15マイル（約24キロ）は遠い。

未来は車で15分くらい走れば職場だ。一方、海兵隊の敷地内にFBIAアカデミーと併設されている研究所は、その3倍以上は余裕

で時間がかかる。しかもFBIの関連施設では始業時刻が朝7時と、かなり早い。自分も早く朝食を済ませて身支度を整え、中古のフォードに飛び乗らなければ遅刻だ。

今日も朝一番に出勤してオフィスのごみを捨て、デスクを拭き、様々な雑用をこなさねばならないことを考えるとげんなりしてくる。未来は右手で髪を梳きながら恨めしそうに、まだ暖かいワッフルが乗った皿を見つめた。

余ってしまった一人分のサラダとソーセージ、フルーツはランチボックスに詰めてデスクに持って行くことに決めた。どうせまた、昼休みは電話番をしなければならぬのだ。

警察やFBIは、小さな田舎街では未だに縦の人間関係が厳しい男社会だ。

駐在事務所にいる6人のエージェントで一番若く、ぴよびよ鳴く雛鳥と同じレベルの新人で、しかもただ一人の女性で元、日本人である。そんな未来の立場は従来の新米エージェントと同じく、モップについたごみと同じであった。

移民人口が爆発的に増加し、それに伴って壊滅的なまでに治安が悪化した嘗ての安全大国、日本。国が慌てて時代の変化に明らかに合致していなかった法律を変え、国民に自衛のための武器を持つことを許したが、それも焼け石に水だった。

武装グループによるテロ紛いの大量殺人事件や暴動、レイプ殺人、誘拐などの凶悪犯罪に充分に対応するだけの余力は、最早警察には残されていない。

各都道府県の管轄を越える独自の捜査権限と強力な武器を持ち、必要とあらば軍とも連動できるだけの機動力をも兼ね備えた法執行機関が必要と判断されるまで、それでも数年の時間がかかっていた。

警察と国防軍及び民間の軍事企業が手を携え、秘密裏にその準備を開始したのが2年前、2039年のことである。同じ頃、国内の巨大企業グループたるセラフィムがプロジェクト「AWP」で開発・製造した軍事サイボーグ実験体で、初の成功例が出て注目を集めた。

この実験体であるプロトタイプ3、つまり未来は実戦を経験し、行方不明となっていた旧型サイボーグとの戦いにも勝利した。が、その直後に同グループが所有する総合研究施設であるC-SOLで「ある不幸な事故」があり、当時の責任者だった大月玲華が巻き込まれて死亡した。

AWPは軍、警察と連動したプロジェクトであったが、サイボーグの軍事転用推進派筆頭であった大月が死亡したことがきっかけとなって、プロジェクトの方針がサイボーグの軍事利用から保安利用へと大きく転換した。これは、AWPと関わりが強かった国防軍陸戦部隊幕僚長、横山の発言に依るところも大きい。

主な理由は、未来がこれまでの戦闘と事故のシヨックから精神に大きなダメージを負っていたこと、サイボーグを本格的に軍事利用に組み込むには施設の移設等の下地を整える必要がある、それには

莫大な費用と時間がかかること、サイボーグを戦闘に投入するには独自の特殊部隊を作るしかないが、一人の戦闘員しかない特殊部隊は前例がなく現実的でない、といったことであった。

しかし実際のところは横山が一民間企業の女役員の口車に乗せられるのを断固として許さなかった、いや、体勢がきちんと整いさえすれば、彼はサイボーグの採用にやる気満々だが、軍の古い体制を壊すようなことをしては他の幕僚の心象を悪くするからだ………といった、様々な憶測が囁かれている。

保安機構設立補助という新たな役目を、未来は戸惑いながらも承諾した。

その手始めが、雛形となる組織に一時的に所属して現場のノウハウを学ぶことだった。

即ち今回の渡米であり、FBIの特別捜査官として5年間鍛えられてくることである。

世界最高峰の法執行機関であるアメリカ合衆国連邦捜査局、FBI。

未来と、彼女と同じく日本の機構設立サポート役の任を帯びた元AWPメンバーであり、サイボーグ手術執刀医でもある杉田。彼らは国からの命令を受けて一時的に国籍も変え、FBIに籍を置くこととなった特例中の特例だ。

通常FBIの捜査官は合衆国国民であり、且つ厳しい選考をくぐり抜けた一握りの者にのみ許される特殊な職業である。無論未来とで特別待遇などではなく、スタートラインは他の捜査官と同じで、FBIアカデミーから始まった。

アカデミーはヴァージニア州クワンティコにある施設で1990年代に一度閉鎖されたが、この10年ほどで再びその門戸を研究所と共に開け放っていた。競争率100倍以上の選考を勝ち抜いた新人捜査官がここで4ヶ月間寝食を共にし、捜査官の心得から合衆国憲法を始めとした様々な法令、捜査車両のドライビングテクニク、FBIが建設した訓練用の市街たるホーガンズ・アレイでの模擬戦

闘を通した逮捕術、重要参考人の面接や尋問について学ぶ。

未来はFBIアカデミーのカリキュラム開始から1ヶ月後に編入したが、本来ならここに遅れて入学することなどまずあり得ないため、同窓生たちから奇異の目で見られるのも仕方がないことだった。しかし彼女はそんな周囲の反応に動じず、最初の遅れを取り戻すため週末も寮に缶詰になり、補講と追試を受けながら教官に罵声を浴びせられ、勉強と訓練に明け暮れた。もしアカデミーで捜査官として相応しくないと判断された場合は直ちに日本へ送還する、と通告を受けていたせいもあり、優秀な成績で他の新人捜査官に追いつがろうと躍起になった。

授業が終わってから、未来はアカデミーのカフェテリアで夕食のチーズバーガーをかじり、連邦法や銀行法の分厚い参考書を睨んでいることがよくあった。これ見よがしに隣のテーブルで同窓生たちがビールを飲んで騒いでいたことも、お約束だった。苛立ちと情けなさに溜息をつきつつもペンをノートに走らせ続けたことは、多分50回は下らないだろう。

「ああ、ミキは日本人だけあって、勉強好きだよな。本にばっかりかじりついてないで、たまにはこっちでフレンチフライをかじればいいじゃないか」

と、男性の一部同窓生たちがビールの瓶を振りながら、よくからかっていたものだ。

「うっん、遠慮しとくよ。みんなに追いついたら、喜んで一緒に騒がせてもらうから」

やかましいと怒鳴りたい本心を抑えに抑え、未来もにっこり笑っていつもそう答えていたものである。

40人ほどの同窓生には白人が多かったが、黒人やヒスパニックもいた。彼らの出身地も北はミネソタから南はフロリダまで全米の各地に至り、女性もクラスの1割はいた。年齢も若い者で25歳、最年長者は37歳と幅が広がった。

皆は最初こそよそよそしく、未来の英語がぎこちないことをあげ

つらつたりもしたものの、もともとは連邦捜査官となって人々を守るといふ、同じ志を抱いて進むべく集まった男女だ。

未来が自分の立場を弁えた振る舞いを心得ていて、素直で真面目な人柄だったことも大きかったのだろう。身の丈2メートルはあるうかというごつい黒人男性の同窓生がノートを見せてくれたり、ヒスパニックの女性同窓生が補填試験時に色々教えてくれたりするようになるまで、そう時間はかからなかった。

同窓生たちの顔と名前を全て覚えてクラスの一部になれたことは、未来を心の底から安堵させてくれた。

最初の1ヶ月で落伍せずに差を埋め、勉強も訓練も何とか追いつけたのは、彼らの協力と励ましがなければ不可能だったと言っていただろう。高校生の時に1年間だけ語学留学していた未来の英語力も、いつしかネイティブアメリカン並みになっていた。

語学力については、通訳の母や外資系企業の専務だった父の才能を受け継いだことと、徹底した教育を受けたこともあり、問題になるのは時事英語と法令用語ぐらいだった。FBIでの研修は母の干渉を避ける目的もあるのに、何とも皮肉なものだ。

そんなこんなで未来は16週のカリキュラムを見事にこなして、射撃の最終技術検定では「最高点クラブ」の候補となり、銃保管庫外壁の人名簿にその名を刻んだ。

そして7月最後の週、アカデミー広場で行われた卒業式で真新しい身分証明書、金色の徽章を受け取るに至った。家族として出席した杉田が見守る前で、国内外のあらゆる敵から合衆国憲法を守るといふ宣誓に、誇らしく小さな右手を揚げたのだ。

その未来がアカデミーのカリキュラム中盤に受け取った辞令にあった任地が、ヴァージニア州リッチモンド支局だ。実際に配属されたのは、長期の仮住まいとなる借家があるフレデリックスバーグの駐在事務所で、借家から車で15分圏内という驚異的な近さだ。

しかし、未来のメンテナンステイクスがクワンティコのFBI犯罪科学研究所内に移設されているため、これはさして意外ではない。彼

女は少なくとも週に1度はメンテナンスを受ける必要があったし、検査官兼メンテナン担当となっている杉田の勤務地も研究所内だ。戦闘で負傷した場合などは緊急で行かなければならないこともあるし、未来は一般病院での治療が受けられないのだ。

もつとも、クワンティコからほど近いとされるそこそこに大きな街のフレデリックスバーグも、車では1時間ほどかかる距離である。実は研究所から最も近いのはワシントンDCにあるFBIの本拠地だが、ここは新米捜査官が勤務できるような場所ではない、と未来は勝手に思っていた。

渡米してフレデリックスバーグに移動する前、杉田と一緒に長官のルーカス・D・ブライトに挨拶しに行っではいる。が、あのお役所的な雰囲気と官僚的でどうにも堅苦しい空気は好きになれなかったのだ。

とにかく捜査官の朝が7時から始まることを考えれば、勤務地が近いのは有難いことだ。

未来がブルグレーのフォードでフレデリックスバーグ駐在事務所の駐車場に乗りつけたのは、6時45分ぴったりだった。その割に暗く感じるのは、厚い雲が空を覆い始めているせいだろう。強い風で、ポールに掲げられた星条旗が勢いよく翻っている。天気予報では晴れだと言っていたが、この時期はあまりあてにならないようだった。

助手席のコートを取り上げて車を降りた未来は小走りに駐車場を横切り、白っぽいコンクリートと赤煉瓦風のタイルを組み合わせた丸っこさが特徴の建物の裏を目指した。

小さな合皮のハンドバッグから胸に留めるクリップのついたカード入れを出すと、関係者入口脇の壁にあるスロットにセキュリティカードを通してロックを外し、重い金属の扉を開けて、まだ暖房が効いていない廊下へと足を踏み入れる。

「おはよう、ミキ。相変わらず早いな」

建物に入るなり、薄暗い廊下をのんびりとモップがけしていた初

老の白人に声をかけられてぎょつとした未来だったが、明るく挨拶を返した。

「おはよ、ベン。これも新人の仕事のうちだから、仕方ないんだよ」「オフィスのごみは、通用口の手前にもまとめておいてくれればいいよ。外は寒いし、ダンプスターに移すのは僕がやっておくから」「ありがとう。いつも助かるよ」

片手を上げて掃除夫のベンに礼を言い、べつ甲のバレッタのまとめ髪にベージュ系の薄化粧、黒いパンツスーツといういでたちの未来はオフィスへと急いだ。

FBIフレデリックスバーグ駐在事務所は病院や児童館、各種公共サービス事務局のオフィスが入っている複合ビルの一角にある。地方局の中には立派な外観を持つ建物全体をFBIが所有していることもあるようだが、少ない予算をやりくりせねばならない駐在事務所ではありえない。だから、ごみ捨てや観葉植物の手入れは新米捜査官（FNG）の仕事だ。

未来は誰もいないオフィスに入ると、ランチボックスが入ったキヤンバス地の手提げとハンドバッグをデスクに置き、スニーカーから黒いパンツに履き替えた。共用のキャビネットからごみ袋を出し、高さ5フィート（約153センチ）程の移動式パーティションで仕切られた個人スペースを回っていく。片手にしたビニールのごみ袋は、捜査官各自が小さなごみ箱に押し込んだくずであつと言つ間にばんばんになった。

日本の一般的なオフィスなら、こんな雑用はロボットにやらせるのが普通だ。軽作業用ロボットがとつもない贅沢品だった時代ならいざ知らず、今はHARのように小型で安価な、頭のいい制御プログラムを積んだアシストロボットが世界中で販売されている。日本で未来が開いている便利屋「ユースフル」の小さなオフィスでさえ、4台のロボットを使っているのだ。

しかしこのFBIの地方駐在事務所では、夜中に辛うじて絨毯敷きの床掃除専用ロボットを稼働させている程度だ。タンクにパッキ

ングしたごみを自動でダンプスターに捨てに行くほどの知能も授けられていないため、最後のごみ捨ては結局、人間の仕事になる。

先進国の中でも特にアメリカは、一般社会へのロボット導入が目立って遅れていた。

世界各国のロボット工場や研究所が多数にあるのに、オフィスの簡単な掃除や特に危険な場所での作業、宇宙開発、災害現場くらいでしか活躍の場は与えられていない。アメリカ製のロボットは、もっぱら輸出専門と言う印象すらある。

掃除や判断力を必要としない単純作業は、ブルーカラーの雇用機会を数多く生み出す。ロボットの導入によって、低所得層から仕事の機会を奪ってはならないと言うのが、ロボットの普及を阻む主な理由だ。

これはかなり前から議論されている社会的な問題でもあり、アメリカの議会でも度々保守派とロボット導入推進派とで意見を衝突させている。労働と格差の問題が一緒に解消されるのでなければ、恐らくロボット問題も片がつくことはないだろう。

そのくせ、人間を半分ロボット化したサイボーグやサイバーパーツの受け入れには柔軟なのだから、基準がよくわからない。サイボーグは臓器移植の進化版、とでも見なされているのだろうか。

未来は同じビルにあるホットドッグスタンドや、コンビニエンスストアで売っている食品のプラスチックパックで膨れ上がったごみ袋を、ベンに直接渡した。次に給湯室で加湿器の注水用カップに水を注ぎ、濡れ布巾も掴みあげて急いでオフィスに戻る。

「デスクはもう拭いたのか？」

各捜査官のデスクを拭き、窓際に並んでいる鉢植えに水をやっているところへ、オフィス入口の方から大柄な男性が声をかけてきた。「おはようございます。まだ主任室はやっていないんです。ちょっと待ってて頂けますか」

直属の上司である上級主任捜査官、デイビット・ノートンの方を振り返ってにっこり笑った未来は、カップと布巾を持ち替えてガラ

スで仕切られた主任室に入っていた。この駐在事務所では、ここが唯一一般の捜査官と責任者とを分けている部屋になる。

デイビッドはやや腹のせり出した50代の白人男性で、耳の横に黒っぽい髪が申し訳程度に残っているのを除いて、頭は禿げ上がっている。その頭と口髭をたくわえたせいかな年齢よりも老けた印象を抱かせる一方、淡いブラウンの瞳はベテラン捜査官らしく、鋭い光を閃かせることがよくあった。

基本的には無駄なお喋りを嫌う気難しい上司だが、オフィスに誰もいないときは気さくに声をかけてくれる意外な一面もある。

それは、この始業前のひとときに一番よく見られた。時折娘と話す父親のような調子になることから、ひよつとしたら24歳の未来と同じ年頃の娘がいるのかもしれない。が、配属されてまだ日の浅い未来は、デイビッドとそこまで個人的な話をするに至っていないかった。

FBI捜査官は例え自分のオフィスであろうとも、プライベートな情報が人目に晒されることに極端に気を遣う。だから家族がいても、デスクの上に写真を飾ったりするようなことはない。彼らがデスクの保護シートの下に挟むのは過去に自分、もしくは仕事仲間と撮影した記念写真や、局に関係した新聞記事の切り抜きなどだ。

一般捜査官のそれより少しだけ凝ったつくりのデスクを上を簡単に片付け、きびきびと拭き掃除をする未来を、デイビッドが目で追っていた。

「来月にはもうまた新米が入ってくる。そうすれば朝一番で出てこなくてもいいし、多少は旦那に手をかけられるようになってくるだろうからな」

「ドクター・スギタは夫じゃありませんよ。パートナーです」

「ふむ、そう言われると微妙に違うか」

素っ気ない未来の返答にデイビッドが肉付きのいい顎を撫でつつ、デスクを拭き終えた彼女と入れ替わりに椅子の前へと足を進める。

デイビッドは恐らくこの駐在事務所、未来が普通の人間ではな

いことを知っている唯一の捜査官だろう。FBI本部がどう説明したかは不明だが、そうでなければ今後の仕事に不都合が生じてくることもあるからだ。

故に、未来と検査官の杉田が同居していることも知っている。もっとも、これも本部がどう説明しているかは定かでない。

足元のパソコンの電源を入れ、脇に避けられていた書類の束へ手を伸ばしながら、彼は主任室から出て行くこととする未来を呼び止めた。

「ミキ。近々、CVCからの支援要請が入るかも知れんらしい。誰か他の奴に、今担当してる事件を引き継げるようにしておいた方がいいようだ」

「……近々って、どの程度です？」

振り返った未来の声は、緊張と訝しむ調子を含んでいる。

「さあな。いつ要請が入ってもいいようにしておくのも、仕事のうちだろう」

それに反して、デイビッドの口調はぶっきらぼうだ。上司の言葉に肩の緊張を解くと、未来は落ち着き払って答えた。

「わかりました。私の担当事件は、得意そうな人に振れるように考えておきます。後でメールを流しますね」

デイビッドが無表情に頷いたのを確認してから、彼女は主任室から退出した。その足で給湯室に布巾を置きに行き、自分のデスクに早足で戻る。

「やあミキ。今日も朝の掃除、ご苦労様」

その途中、日本の会社のオフィスと違ってパーティションで囲まれ、広さが取られた個人スペースの間を抜けようとした未来の前を塞ぐように、金髪の男が立ちはだかった。

淡いブルーのワイシャツに黒いVネックのセーター、軽くプレスしたベージュのズボンというややラフないでたちに、腰のリボルバーが釣り合っていないように見える。ぴかぴかの革のホルスターに納められたそれが、ベテラン捜査官が好む類の銃だからだろう。

一瞬、彼女の細い眉が僅かにしかめられた。

「……おはようございます、ジェイコブ・ランチエスター捜査官」

「おいおい、また朝の挨拶でフルネームかい？ 僕の名前は、日本人のミキには覚えやすいと思うんだけど」

挨拶を返そうという気がなさそうなのこの伊達男は、大袈裟に肩をすくめて笑って見せた。

「確かに、日本じゃ5音の名前はそうありませんからね」

こちらの頭のとっぺんを見下ろすほど高い背丈、筋肉の厚みが目立つ上半身という欧米人らしい体格のランチエスターには、それに見合うだけの圧迫感がある。負けじと、未来は彼の青い瞳を正面から見返した。

「うん、ミキの名前もあっさりしてるからね。ラスト・ネームは…ハザマだっけ？ おかげで、すぐに覚えられたよ。フレデリックスバーグじゃ、日本人は珍しいってこともあるし」

「元、ですよ。今も日本籍なら、私はここにいられない筈なんですから」

FBIで研修するに当たり、国籍はどうしても変える必要があった。だから今の未来と杉田は、正確にはアメリカ人であって日本人ではない。

「けど、外見が日本人そのものって感じだろ？ 君が捜査官として初めてここに来たときは、どこの中学生が紛れ込んだのかと思ったもんだけどね。今じゃ、態度は立派にいつぱしの捜査官だから」

「ランチエスター捜査官ほどではありませんけどね。来月には後輩も入ってくるようだし、きちんとしておきたいと思いますから。外見で人を判断するくらい目に遭うってことも、ちゃんと教えてあげたいかなって思ってます」

未来は確かにまだ配属されて3ヶ月のFNGで、ようやく一人で満足に事件の捜査をこなし始めることができる程度だ。しかし、彼女の耳と目の良さを活かした現場での活躍に驚き、殊に犯人逮捕時はそれを期待して現場に連れ出そうとする同僚も多い。

片やランチエスターは大学院を出てすぐ捜査官になったため、駐在事務所スタッフの間では「世間を舐めた小便小僧」とまで陰口を叩かれるようなメンタリテイの持ち主だ。

彼はベテランのような口を叩くが実際は未来の半年先輩でしかなく、年齢も26歳と、未来が配属されるまでは一番の若手だった。攻撃的な態度が単なる嫉妬と見栄に過ぎないことは、もうわかっている。

日本では移民ばかりの便利屋事務所所長を務め、一方で戦闘用サイボーグとして実戦経験もある未来にとって、ランチエスターは単に矮小な男でしかない。だから彼女は人種偏見者の雑言を控えめな皮肉で返したつもりだったが、ランチエスターは絡むのを止めようとしなかった。

「新米が入ってきたら、朝はそいつの仕事を見ながら編み物でもしてるといい。君の小さな手には、銃の手入れをするよりもそのほうがお似合いだよ」

「生憎ですが、日本にいる時はデザートイーグルを愛用してたんです。逆にグロッグは小さくて軽すぎで、ちょっと扱いに困ってるんですよ」

「……はは、いつもながらジョークが上手いね。あんな大きな銃、それこそ日本人女性には不似合いじゃないか。日本って、銃の携帯が許可されてからそんなに経ってないんだろ？火遊びするのは、やめといた方がいいと思うよ」

未来が口にした銃の名前を聞いたランチエスターは、短めの金髪に包まれた頭を軽く掻いてから再び肩をすくめた。

デザートイーグルは世界最強の威力を誇る50口径の拳銃で、射撃時の反動はその破壊力に比例する凄まじさだ。大人の男でも使いこなすには相当な訓練が必要な扱いが難しい銃を、小柄な未来が愛用していたなど信じられないに違いない。

今未来が持っているグロッグは、アカデミーで支給されたFBI標準の拳銃だった。各配属先でどんな拳銃を持つかは個々の裁量に

よるが、他の捜査官の10人前くらいの肉体能力を持つ未来は、人間相手にわざわざ高価な拳銃を持つ必要性を感じなかったのだ。

「似合う似合わないの問題じゃなくて、デザートイーグルが一番使いやすいかつたんです。重さに見合う安定感もありましたし、あれぐらいの反動は気になりませんでしたから」

「そういうことをあんまり自慢しないほうがいいよ。ただ銃を撃つて手柄を立てたいってだけの女だって、そういう勘違いをする奴らも多いことだし」

自慢じゃありませんよ、銃の話振ってきたのはそっちのくせに。それにそうやって日本人や女を散々コケにした拳銃に勘違いしまくってるのって、自分自身のことなんじゃないですか？

顎の筋肉をびくびく痙攣させているランチエスターに言い返したところを堪えた未来の視界へ、別の人物が割り込んできた。彼の背後でそれ以上に大柄で幅のある肩が揺れ、その先に伸びている左手に摘まれたワシントン・ポストが、軽く金髪の頭を叩く。

「ジェイコブ、ミキに絡むのもそれぐらいにしとけ。そろそろミーティングを始めるぞ」

反対の手にプラスチックのコーヒークップを持った黒人の特別捜査官、アーロン・クーパーが穏やかだが、有無を言わさない口調でランチエスターをたしなめた。オメガの腕時計を確認したランチエスターが、慌てて自分のデスクへと小走りに去って行く。

その背中を見送ってから、未来はアーロンの顔をほっとしたように見上げた。

「おはよう、アーロン。助かったよ」

「ジェイコブは相変わらず懲りない奴だな。まあ、ミキが本気で怒れば、あんなのは軽く一ひねりできるだろうが」

呆れたように首を振って、アーロンは度の弱い近視用眼鏡を太い指で押し上げた。

「私も、着任当初の奴からは色々言われたもんだ。ここの地域じゃ黒人捜査官は目立ちますよね、とか、聞き込みをするのに支障があ

りませんか、僕と一緒に行かなくても大丈夫ですか、とかな」

アーロンは元弁護士で今年44歳になる、FBI勤続15年のベテランだ。新人の分際でそんな口を利けるのだから、FBIはよほど白人に対して甘いのだろうか。

「オフィスの誰かに向かつて本気で怒るのは、遠慮させて欲しいですよ。でもランチエスターって、どうしてあんな風に人の神経を逆撫でするのが上手いんでしょうね？捜査官じゃなくて、政治家にでもなればいいのに」

「差別主義者は政治家になれないよ、ミキ」

「極右勢力ならなれると思いますよ。それにあいつ、美形だっただけで第一印象が誰よりもいいんだから」

未来が仏頂面で個人スペースに戻りながらぶつぶつと愚痴をこぼすと、アーロンも苦笑して頷いて見せた。

確かにここフレデリックスバーグの住民は7割以上が白人で、黒人は2割程度だ。アジア系やヒスパニックに至ってはもっと少なく、1割以下しかない。有色人種が目立つ地域だと言えばそうだろう。しかし近年のFBIはマイノリティーの人員採用に関して力を入れているし、仕事上で人種による待遇の差別は一切ない。とは言っても有色人種のエージェントは全体の3割もないのだから、合衆国全体の人口比からすればまだまだだった。

そして問題になるのはFBIという組織全体ではなく、現場の捜査官個人が人種や異性に対して偏見を持っている場合だ。ランチエスターなどは、その典型的な例だと言える。

どうしてあんな男が捜査官になれたのか、未来には不思議でならなかった。書類審査や面接で引っかかっても良さそうなものだし、もし自分が面接官なら、あんな鼻持ちならない言いようをする受験者は真つ先に落としているだろう。

だが、そういった人物とも一緒に仕事をしなければならぬのもまた世の中だ。実に様々な個性を持った者が様々な国にいることは、日本で便利屋を営んでいるときに嫌というほど実感していた。

こういったとき、未来は自分が日本人の国民性を持っていて良かったと心底から思うようにしている。「空気を読む」という独自の文化がなければ、自分の感情を遠慮なくぶちまけてランチエスターに喧嘩を吹っかけ、異国での礎を危うくすることになりかねないのだから。

「今朝の一面、見たか？」

「ああ、また例の殺人事件があつたらしいな。うちの管轄であつたんじゃないかと良かったよ。じゃなけりや今頃、ウジ虫記者どもがロビーに溢れ返つてたろうさ」

一般用窓口にはほど近い秘書兼受付係のデスクに捜査官たちが椅子を持ち寄り始めたとき、アーロンの問いかけにウィリアムが声楽家もかくや、という豊かなバリトンの声を響かせて答えた。

「例の殺人事件って、あのアジア人男性の？」

アメリカ人にしては小柄だが、がっしりとした体格をしたウィリアムの隣に椅子を引きずってきた未来が眉根を寄せた。

「まだ見てないのか？今朝の新聞もニュースも、事件のことで一色だぞ」

「ポストは持つてきましたけど、まだ見てなくて」

未来が自宅から持参したワシントン・ポストは、まだデスクの上に置いたままだ。いつも朝のミーティングが終わってから読むようにしており、今朝はランチエスターに絡まれたので見出しすら読んでいない。

話題になっている殺人事件は、ここ2年ほどでアジア系の若い男性ばかりが何人も暴行された末に銃で撃たれて殺害され、全裸の死体を遺棄されるという連続殺人である。最初の死体発見現場はメリーランド州だったが、それ以外はいずれもヴァージニア州のハイウェイに近い路地裏やごみ捨て場だ。

同一人物の犯行と思われる連続殺人が州を跨いで起こっているため、事件の捜査は州警察からFBIへ管轄が移っている。しかし、捜査の仕切りはあくまでヴァージニア州全域を統括するリッチモンド支局だ。未来のいるフレデリックスバーグ駐在事務所は管轄下の郡で死体が発見されたり、リッチモンド支局から協力依頼でもない

限り、直接捜査に当たることはない。

当然ながら事件と無関係の駐在所には当局も情報を流さないし、問い合わせても必要以上の情報を寄越すことはない。よってここにいる捜査官は新聞やテレビ、インターネットなどのメディアを通して発表されたことしか知らなかった。

「今回で確か被害者は5人目だ。多分リッチモンドの連中も検死局も、対応に追われてるだろう。もし俺たちのところでも回されたりしたら、朝っぱらからタマを搔いてる暇も……おっと、ミキには搔くタマがないんだっけな」

最近未来が実感したことだが、警察官出身の捜査官ほどこういう発言が多いような気がする。ウィリアムは彼女にじろりと睨まれても、悪びれている様子は全くない。

「まあ、男つてのは不便ですよ。急所を一つ余計に抱えてるわけなんだし。女もそれなりに不便だから、結局はどっちもどっちですけど」

そしてこういうことにいちいち目くじらを立てて、セクハラだの何だのと喚き立てるのは疲れるだけだった。犯罪捜査の現場にいれば誰かにそんな口を叩かれることもしょっちゅうだし、それなら相手に同調しない程度に流しておけばいい。

性別の違いをやり玉に上げることなく返した未来の隣に、ただ一人スーツをばっちり着込んだ特別捜査官、オリヴァー・ブラウンが椅子を引っ張ってきて座った。

「私は今日これから裁判なんだ。早く済ませよう」

オリヴァーは元会計士のはスパニックス系男性で、10月に37歳になったばかりだ。他の捜査官のように銀行強盗や逃亡犯を追い回すよりも、詐欺やマネー・ロンダリングのような知的犯罪の捜査や裁判を得意とする変わり種である。

「ええと。僕は、情報提供者との約束が午前中に何件かあります。

午後はハイウェイ・パトロールの連中に、轢き逃げ事件絡みの不審車両の件で話を聞きに行くので、戻ってくるのは夕方です」

「私は証言が立て込んでるから、一日連邦裁判所にいる。何かあったら携帯に連絡をもらえれば、時間を見てかけ直すようにする」

ランチエスターが駐在所のデータベース専用携帯端末の画面で予定を確認しながら先に言うのと、オリヴァーがむっつりと続けた。オリヴァーはミーティングが済み次第すぐに連邦裁判所に出かけるつもりらしく、書類がぱんぱんに詰まったブリーフケースを椅子の脇に置いている。

「私は午前中に裁判の準備の予定だ。午後にミキの研修の続きをやつて、合間に主任に提出する報告書を作る」

アーロンがやはり専用端末の画面を確認しながら言ったところで、未来が座ったまま辺りを見回した。

「あれ、そう言えば主任は？」

「取り込み中らしいが、ポストを読みながらの電話だから大した件じゃないな。ミキ、午前中の予定は空いてるか？」

「はい。データベース漁りと電話と、宣誓供述書を作る予定でしたから……」

ウィリアムから突然話を振られた未来が意外そうに目をしばたかせると、彼は二重顎に皺を寄せてにやりと笑った。

「宣誓供述書は……そうだな、ジェイコブが作つとけ。これから8を捕まえに行くから、ミキはそのちゃん靴を履き替えておくよ
うにな」

「え？」

異口同音に未来とランチエスターが声を上げたが、その後をむつとした口調で続けたのはランチエスターだけだった。

「どうして僕が？勉強になると思って、わざわざ彼女に頼んだって
いうのに」

「お前の方こそ勉強しとけよ、ジェイコブ坊ちゃん。毎回どれだけケツが拭ける紙を無駄にしてると思ってるんだ？」

相変わらず下品な物言いをするウィリアムに慥然となったランチエスターの肩へ、アーロンが手を軽く置いた。

「主任が尻拭いをしなくて済むよう、私がもう一度仕込んでやるよ」
アーロンは元弁護士だけに、書類の作り方に関してはおフェイスイ
細かい男だ。金髪の青年はプライドが傷ついたらしく、声を荒げて
煩わしげにアーロンの手を払いのけた。

「余計なお世話です。それぐらい、僕一人で完璧にできますよ」
「完璧にできるってな、お手本の通りに内容を写せることを言うの
か？」

完全にからかう口調で言いながら、ウィリアムが立ち上がる。ラ
ンチエスターは無言だったが、小さな舌打ちが漏れたのを、未来の
耳は捉えていた。

「じゃあミキは抗弾ベストを持って、俺の車まで来い。3分で支度
しろ」

ウィリアムは、無駄が嫌いな質だ。椅子を勢いよく床に滑らせて
片付けると上着を取り、さつさとオフィスを後にする。未来が慌て
てパンプスをスニーカーに履き替え、抗弾ベストとホルスターに突
っ込んだ拳銃をひっ掴み、駐車場にあるウィリアムの公用車の助手
席に駆け込んでドアをロックしたところで、丁度3分だった。

「よし。やっぱり元日本人は時間に正確だな」

ウィリアムは、のりの取れた白いワイシャツにくたびれたベージ
ユのジャケット、裾が擦り切れた黒のスボンという気を使わない身
なりに、タグホイヤーの腕時計がアンバランスだ。文字盤をちらり
と確認し、満足げに頷いている。

「後ろのやつに弾を込めとけ」

アクセルを踏む直前に、彼がリアシートを親指で指す。見てみる
と、レミントン870ショットガンが一挺、開封した弾薬の紙箱と
一緒に無造作な格好で放り出してあった。

「相手は武装してるんですか？」

未来が二人分の抗弾ベストを後ろに放り、入れ替えてショットガ
ンと弾薬を掴み上げる。

「ああ。二人組の強盗殺人容疑者で、奴らもショットガンを持って

る」
彼女がシートベルトを締めたのを確認してから、ウィリアムは車を出した。

88とは、FBI内部の用語でUFAF（訴追回避のための不法な逃避）を差す。州境を越えて逃げてきた逃亡犯を逮捕して最寄りの官憲に引き渡し、送還させるのが捜査官の役目だ。

「しかし、そいつはなるべく使わないつもりだ。奴らが郊外のハイウェイまで逃げて、撃ち合いにでもならない限りな。何せ、これから行くのは住宅密集地だ。治安はいまいちだから銃声なんかには誰も驚かないだろうが、一般市民を巻き込みでもしたら厄介なことになる」

「情報提供者からそこに潜伏してるって、たれ込みがあつたんですか？」

「いや、リッチモンド支局からの情報だ。俺も奴らの詳しいことを調べてるわけじゃないが、生粋のワルだってことは逮捕歴を見ればわかる。遠慮はいらんぞ」

未来の問いに答えつつ、公用車であるプリウスのナビに合わせてウィリアムがハンドルを切ると、やや使い込んだタイヤが軋みを上げる。道の舗装は酷いが彼が全くスピードを落とさないため、ナビの音声がぶれるほど揺れが激しい。

彼の捜査に何度も同行している未来は、その中でショットガンの弾を装填するのにも慣れていたが、来月入ってくるだろう新米は、車酔いを堪えるだけで精一杯だろう。ロボットが社会にあまり浸透していないアメリカでは、車の装備が最新式でも自動運転の機能がついていない、ヒューマンドライビング仕様のものも多い。

安全装置をかけたショットガンを凹んだリアシートに戻してから、次に未来は自分のホルスターを取り上げた。

「でもこんな時間に踏み込んで、大丈夫なんですか？相手は二人で武装してるんでしょう」

「交代で一人ずつが寝て、入れ替わりに外へ出てるらしい。だから、

今はどつちかが一人で高いびきの筈だ。そりゃ、女を引っかけちゃあヤクを決めてれば、疲れるだろうさ」

ある程度の期間同じ場所に滞在しているということは、現場に様々な証拠品があることになる。先に一人を逮捕したら現場に監視をつけ、夜にもう一人が戻ってきたところを逮捕するのだろう。

未来は日本で便利屋を経営していた頃、麻薬絡みの事件に巻き込まれそうになったことがあるのを思い出した。ウィリアムのジャケットから覗いているスミス・アンド・ウェットソンのリボルバーに、ちらりと目をやる。

「麻薬も常習犯なんですね」

「強盗もヤクも同じだ。一度やったら、そう簡単にはやめられない」吐き捨てるように言ってから、ウィリアムは大分短くなったタバコを灰皿に押し込んだ。警察官出身の彼はそんな現実を飽きるほど見て、感じてきたに違いない。

未来はシートベルトをつけたまま上着を脱いで、白いタートルの上にシヨルダーホルスターをつけながら頷いた。

彼女の身の上、軍事用サイボーグからFBI特別捜査官へと変わってから数ヶ月。

単身で犯罪者の潜伏先や犯罪現場に急行し、犯人を組み伏せて手錠をかけたことも何度もある。いざそいつたものに出くわすと、AWPにいた頃とはまた違った緊張感が漲った。

以前は手段を問わずただ敵を確実に殺し、倒すことだけを考えれば良かった。

しかし今は合衆国法の下、ある程度の権利を保障された相手の身柄を確保し、調査し、裁くことが目的だ。単なる戦闘よりもずっと複雑な手続きがつきまとい、何倍も頭を使う。

やっていることは警察と変わらないように見えても、FBI捜査官には警察官にない様々な特権が与えられている。ただし特権を駆使するには、その内容を暗誦できるぐらいに把握していなければ、痛い目に遭うだけだ。

それだけに最初は何もかもがうまくいかず、同僚たちを困らせることが多かった。

加えて、法執行官はアメリカでも男の世界だ。未だに女性捜査官に対しての偏見もあるし、未来の場合はアジア人だということもある。好奇の目で見られることも珍しくなかった。

「おい、アジアン・ドワーフ（東洋人のチビ）。ここはガールスカウトの遊び場じゃねえんだぞ！」

と、ウィリアムにもよく怒鳴られたものだった。

しかし未来が捜査の下地を掴み始めた頃、戦闘と銃火器の扱いに長け、状況判断や思考の柔軟さに優れていることをいち早く見抜いたのもまた、彼だった。

未来は元軍事用サイボーグなのだから当然と言えばそうなのだが、ウィリアムはそれ以来、ある種の使命感に目覚めたようだった。

即ち、未来を一人前の捜査官に育て上げることである。

彼は主に銀行強盗犯の追跡や殺人事件の犯人確保のような機動捜査、つまりはドアを蹴破って容疑者のところへ踏み込み、もみ合つて手錠をかけるような現場によく未来を連れ出すようになった。本当はアーロンが未来の教育係だったが、そんなことはお構いなしだ。未来のほうも新しい刺激に満ち、かつ便利屋時代の交渉術や調査方法が生かせるFBIの仕事に、確かな手応えを感じていた。何よりも社会のため、人のために役に立っているという充実感が大きい。もし戦闘用サイボーグとして軍に入れられていたなら、恐らく得られなかったであろう感覚だ。

「もうすぐだ。準備はいいか？」

「イエス・サー。いつでもどうぞ」

もう一度行き先の番地を確認したウィリアムの声が、若干低くなっている。

膝に置いたグロツグ17を腋の下に納めると、未来はおどけた答えに緊張を乗せてリアシートの抗弾ベストを取り上げた。

えんじ色のプリウスは、リーランド地区の狭い道をすり抜けるよ

うに進んでいく。

オフィスから30分ほど走った住宅街の片隅に、目指す場所があった。細い路地から更に狭い砂利道の私道が奥へと続くところに車を止め、黒い抗弾ベストを身につけた捜査官たちが降り立つ。

ぴりぴりと尖った空気が、彼らを包んでいるのが目に見えるようだった。体格も年齢も違う二人の男女は狭い私道を進み、小さな家を囲んだ木製の塀に身を寄せた。

逃亡犯たちがいるのは、未来の借家と同じような羽目板張りの平屋だった。しかしこちらは外見がかなりみすばらしく、壁を彩る薄いブルーのペンキが半分ほど剥がれ落ちており、玄関前のポーチに据えられたランプ型の照明は、ガラスにひびが入っている。

ウィリアムと未来は無言で各々のホルスターから拳銃を抜いて、荒れ放題の庭を抜けて玄関へ走った。ドアの右側でしゃがみ込んで眉間に皺を寄せたウィリアムが、反対側にいる未来に家の中の様子を探るよう、身振りで合図を送ってくる。彼は未来の戦闘能力の他に、優れた索敵力についても一目置いているのだ。

頷いて、彼女は左耳をドアに当てた。

常人のおよそ500倍という強化された聴覚は、こう言ったときに非常に有用だ。最初の頃は単に物音で誰がいるかを確認する程度しかできなかったが、何回も捜査に出るうち、呼吸音や心臓の鼓動が実に多くの情報を含んでいることに気づいた。

例えば浅く早く、空気が漏れるような息は相手が酷く負傷している可能性が高く、籠もるような呼吸はどこか狭い場所にいることが多い。また、あちこちに動き回る早い鼓動は子どもの特徴だし、音の位置でその主の身長もだいたいわかる。

鼓膜の感度を上げていくと、家の中の離れた場所に呼吸音があるのがわかった。調子は一定で低い位置から発せられ、それも極めて安定している。他に衣擦れや摩擦音もないことから、相手がベッドで熟睡中で、そう簡単には目を覚まさないであろうことが予測できた。

念のために右耳の感度も調整し、他の呼吸音がないかどうかも探ってみる。

するとほど近い場所にもう一つ、呼吸音があることに気づいた。しかもそれは徐々に移動しているらしく、次第に場所がずれていくのがわかる。興奮しているのか荒い印象だが、柔らかい芝生に落ちた枯れ葉を踏みしめる足音はやけに遅い。硬い音がしないところを考えると、相手の靴はスニーカーだろう。

そして足音が動く度に上がる、火器のものらしい僅かな金属の軋み。今までの捜査で何度も聞いた、武装した誰かの忍び足だ。

未来の頭の中で警報がけたたましく鳴り響き、アドレナリンが血流に乗って全身を巡り始める。ドアに背中をこすりつけながら、未来はウィリアムに囁いた。

「家の中には一人だけで、寝てるのは間違いありません。ですがもう一人が、こっちの後ろに回り込もうとしてるようです」

彼女の緊張した低い声に、ウィリアムは片方の眉を跳ね上げた。彼にとっても、予期しない容疑者の動きだ。

「……位置はわかるか？」

「塀伝いに、玄関の方へ忍び足で移動してます。恐らくショットガンも持つてるかと」

「そいつを押さえろ。俺は裏から突入して、中の奴を捕まえる」

早急に、武装した相手を取り押さえねばならない。

ウィリアムの命令は短かった。

未来に武装した方を捕らえられるか、確認もしない。配属時の自己紹介で日本国防軍の特殊部隊出身だと説明しておいて、正解だったと言えるだろう。

「わかりました」

頷いた未来の返事もまた、短い。

目で合図を送ってきたウィリアムが、犯人が潜んでいるのとは反対側の方へ低い体勢のまま、足を滑らせていく。その背を見届けてから、未来は構えていたグロツグをホルスターに差し込んだ。周囲

が住宅街で武装した容疑者がいるとなると、下手に発砲するわけに
いかない。ただ、素手の格闘で相手を押さえるなら、常人離れた
動きをウィリアムに見せるわけにはいかなかった。

「殺しちゃ、駄目なんだからね」

自分に言い聞かせるように呟いてから、彼女は中腰でいきなり走
り出した。

AWPにいた頃に司令官兼戦術指導担当のリューから教わった格
闘術は、戦場で相手を確実に、しかも短時間で仕留める軍隊式の殺
人術だった。FBIで逮捕用の格闘も習得したが、先に身体に覚え
込ませた格闘法とは全く違う。身体にしみついた癖はなかなか抜け
てくれず、とつさの場合はうっかりしてやりすぎてしまい、相手を
殺してしまう一歩手前まで行くことも多かった。

今の自分はFBI捜査官だ。合衆国法を守り、やむを得ない場合
を除いて相手を死に至らしめる攻撃手段を用いてはならない。

意識して力みがちな肩から力を抜き、再び耳を犯人の足音に傾け
る。

板塀の向こうの足音が一定の調子で進んでいることから、犯人は
まだこちらの動きに気づいていないようだった。

「3、2、1！」

その音から相手との距離が7.6ヤード（約7メートル）程度で
あると推測し、タイミングを計った未来が芝生を蹴って跳んだ。4
ヤードあまり上に跳躍して板塀の縁を下に見下ろし、飛び越す瞬間
に犯人を素早く観察する。

若い白人の男だ。

これといって特徴がない顔に中肉中背、黒いフリースの上着とジ
ーンズ。やはりショットガンを両手に構えている。

男の正面から1ヤードと離れていない枯れ葉の上に着地した未来
は、両足のばねを溜めて思い切り地面を蹴り、その面喰らっている
顔めがけて猫科の獣のように襲いかかった。

「何だこの……」

男の言葉が途切れる。

喚き声上がる前に未来は彼の口を右手で塞ぎ、左手でロックがかかったたショットガンをもぎ取った。そして男の顔を右手で掴んだまま、筋肉質でがっちりした上半身を力任せに地面へ叩きつける。空中で男の身体が半回転して枯れた芝生に投げ出され、両足が縦に孤を描いた。

一体こいつは、どこから現れた？

こんなチビ女のどこに、こんな馬鹿力があるのか！

彼女が戦闘用サイボーグであることなど知る由もない男は、そう思ったに違いない。彼と未来の体格は、筋骨逞しい成人男性と10代のか細い少女ほども違うのだ。

未来は彼の顔を地面にこすりつけて悲鳴を上げられないようにし、首の後ろに膝を決めて組み伏せた。奪い取ったショットガンを芝生の上に放り、そのまま太い腕を捻り上げる。

「FBIだ。逮捕する」

一言だけ威圧感を詰め込んだ声を発してから、未来は男の後ろ手に手錠をかけて錠を下ろした。

すかさず、ジャケットのポケットからハンカチを出して悶える男の口に押し込む。大声を出されると残る一人に気づかれてしまうからだ。

容疑者の逮捕は告知を読み上げて捜査官の身分証を提示してから行うものだが、それで大人しく縛につくのは余程の不意を突くか、諦めがいい者が相手の場合だけだ。緊急事態では、告知なしの逮捕もやむを得ない。

未来が捜査官となつてから様々なパターンの逮捕を経験しているが、容疑者が抵抗してこない場合の方がずっと少ない気がする。

彼女は念のため金属探知フィルターをオンにした瞳で犯人の全身をチェックし、足にも手錠をかけると、暴れる身体を素早く右肩に担ぎ上げた。驚いた男が、逃れようとして更に身をよじる。

「下手に暴れたら、あんたの頭を蹴り潰すかもよ」

未来がドスを効かせて凄むと、男はぴたりと動きを止めた。彼女の化け物じみた強さを身体に叩き込まれた後だけに、逮捕された怒りよりも恐怖心のほうが先に立つのだろう。

未来はそれを合図にして、弾丸の如く走り出した。僅か数秒で車に辿り着いて、呟く。

「アンロック！」

登録された未来の音声車両の認識システムに検知され、ドアが開く。彼女はリアシートに立てておいたレミントンと入れ替えて容疑者を放り込み、ドアを閉めた。

「ロック」

再び囁くと、自動で全てのドアにロックがかかる。

捜査用車両は各捜査官個人に貸与されるものだが、音声ロックの声紋はオフィスの捜査官全員分が登録してあった。運転にはキーが必要でも、音声ロックを解除すればドアとトランクの開閉が可能なのだ。

これでもう容疑者は逃げ出せない。

未来はトランクにレミントンを収めてから自分の銃を抜き、ウィリアムを援護するべく家の裏手へと向かった。

開け放たれた裏口のドアはウィリアムに蹴破られたらしく、錆びかけた錠の部分が壊れている。未来はグローブを下段に構えたまま中を片目で覗き、聴覚の感度を上げようとした。

「立て。今頃、相棒がドライブをお待ちかねだぞ」

が、そうするまでもなかった。聞き慣れた力強い声が、薄暗くて古いチーズのすえた臭いが漂う家の奥から聞こえてくる。ほっと息をついて、未来はバドワイザーの空き缶やピザの空箱で散らかっているリビングに足を踏み入れた。

「ビル？」

彼女が声をかけると、若く黒っぽい髪の白人男性を引きずるように行したウィリアムが、左手にあるドアから姿を現した。

「もう来たか。流石だな、レディー・コマンドー」

銃を下ろした未来の姿を確認し、ウィリアムが白い歯を見せてにやりと笑った。傍らの容疑者は足が安定しない様子だ。まだ目が覚めていないのと、酒かドラッグのせいではやけた思考でいるのと半々なのだろう。虚ろなブルーの瞳はしかし、これから始まる刑務所での苛酷な日々を思い描いて愕然としているように見えた。

このウィリアムが逮捕した相手も、先に確保した容疑者と同じくらしい体格のようだ。熟睡中のところに踏み込まれ、ろくに反撃もできなかったのだろう。未だ苦しげな喘ぎを漏らしている。

「そりゃ、お互い様ですよ。銃撃戦にならなくて良かった」

「しかしこんなでかい連中が二人増えたんじゃ、俺の車は狭いな。官憲の応援を呼ぶか」

グロツグを腋の下のホルスターに収め、未来が幼さを残した笑顔で頷いた。

「イエス・サー」

言い残して、彼女は荒れ放題の庭へと駆け出した。

証拠品のショットガンを回収し、最寄りの官憲に無線で連絡を入れるためだった。

ウィリアムと未来がオフィスに戻ってきたのは、ランチタイムが終わってからだった。未来がやる予定だった電話番号は、アーロンと受付係のマイケルがやってくれていたらしい。

本当はもっと早く戻る予定でいたが、官憲への容疑者引き渡しから戻る途中、手配中の銀行強盗犯が1マイルと離れていない場所で逃亡中との一報が入り、そのまま地元警察の応援に駆けつけていたのだ。

「すいません、すっかり遅くなっちゃって」

「電話番号くらいで謝るなよ。それより、そっちの方が大変だったんだらう?」

未来がアーロンの個人オフィスに顔を出して申し訳なさそうにするが、当の本人は全く気にする様子を見せずに彼女を労った。

「でも、私は出歩いているほうが好きですから。ビルなんか情報提供者との約束があるからって、もうまた出かけて行っちゃったんですよ。お昼は車でホットドッグでもかじるって」

「あいつは、一緒に機動捜査に行ける弟子ができて嬉しいんだらう。だから腹が減るのも気にならないんだな」

「こっちはちょっと低血糖気味ですよ。私より20歳くらい歳が上なのに、ビルの元気さには頭が下がります」

未来は苦笑いを漏らしつつも、ウィリアムの優秀さには心底感心していた。

彼は元警官と言うこともあるが、何より強く印象に残るのは、FBI捜査官という仕事を愛し、誇りを持っているということだ。

無論仕事は機動捜査だけではない。しかしウィリアムは自分に適した役目を心得て振舞い、才能を余すところなく発揮している。彼ほど生き生きとしている捜査官はそういないだらう。

「ビルの足とまともにつき合えるのは、このオフィスでミキくらい

しかないからな。これからも、彼のお守りを頼むよ」

「そんなこと！私がまだアローンの教育を受けきってないんですから。特に裁判については、教えてもらわなきゃならないことが山ほどあるのに」

「そうだな。日本の裁判とは違うところも山ほどあるが、是非腕利きの女性捜査官になってもらいたいよ。特にレイプ絡みの裁判では、陪審員の印象も違ってくるだろうから」

「……レイプ事件では何としても犯人を有罪にしてやりたいって、本当にそう思います」

未来の表情が曇り、視線がアローンの後ろにあるデスクにのった検死報告書に移る。

最近新たにエセックス郡で発生したレイプ殺人事件のもので、リッチモンドの検死局から送られてきた検死報告書は関係書類の一部だ。

強盗、殺人、レイプは合衆国で発生しない日がない犯罪である。未来の担当となった二つの郡、ウエストモアランドとキングジョージでは、担当以来FBI管轄のレイプ事件がまだ発生していない。しかし研修の一環で裁判の傍聴に行ったり、過去の事件ファイルを閲覧してはいる。事件のファイルには当然、生々しい現場や被害者の写真、詳細な報告書も含まれていた。

未来は日本で便利屋という荒っぽい職業を営んではいたが、こういった犯罪の現実を目の当たりにするのは初めてだった。報告書には「真珠のピアス、ハートのモチーフがついたシルバーペンダント」といった被害者のありふれた所持品の記述欄と並べて、「頬の右側の擦傷」「膣部粘膜の擦傷、うっ血」などの身体状態所見をこと細かに示す法医学用語が並んでいる。

被害者の身体の傷を写した写真とそれらを並べて見ると、犯人を許せない気持ちがいっつも未来の中に強く渦巻いてくる。

レイプは人の心を完全に無視して、自分の欲望を満たすためだけに行われる犯罪だ。

セックスをしなくても人は死なないし、精神的に追い詰められることもないのだから。そういった意味では、金目当ての殺人よりも卑劣な行為だと言えるかも知れない。

彼女が捜査官であるからには、いつか必ずレイプ事件を担当することになるだろう。

そのときは、絶対に犯人を無罪放免になどしない。必ず証拠を握り、己の利己的な要求で被害者の心と身体を踏みじった罪に相応しいだけの報いを与え、合衆国法の名の下に徹底的に叩きのめしてやる。

そう誓わずにはいらなかった。

「いい心がけだが、決して感情には飲まれるなよ。いつでも冷静に自分を抑えるのが、私たちの役目の一つでもあるんだからな」

「わかっていますよ。そういうストレスは、射撃訓練とかジムの運動で紛らわせますから」

未来の表情を見たアーロンの声が若干低くなるが、彼女の応えはあくまで穏やかだ。

自分たちは武装し、銃を撃ちまくって犯罪者を捕らえればいい、という存在ではない。生物の欲望にただ従うだけの人間の行動を理解し、それと向き合わねばならない自己を厳しく律することを要求される。

同じ要求を持つ誰かを時には武器の力を借りて捕らえ、裁きの場へと突き出し、関係する者全ての人生を狂わせる権利を持つ者。それが連邦捜査官である。この仕事はストレスに弱かったり、自分に甘い者は絶対に向いていない。いつ、どんな時でもプロフェッショナルに徹することができる人間だけが、この権利を行使することができる。

全ての捜査官は、アカデミーでそのことを徹底的に叩き込まれている。無論、未来もその一人なのだ。

「おっと。もう一人の特別捜査官がお出ましのようだ」

そのとき、受付係のマイケルが大げさに吐き出した溜息を、アー

ロンが聞きつけたようだった。立ち上がったアロンと未来がオフィスの仕切りからひよいと顔を出してみると、受付のカウンターの前で痩せた白人の男が一人、熱っぽい身振りを交えて唾を飛ばしているのが見えた。

「ああ。スポンジ・ボブの彼ですね」

それを確認した未来の声が、ややげんなりしている。

スポンジ・ボブとは、オフィスの誰かがつけたあだ名だ。月に一度、チーズの香りを纏ってとてつもないハイテンションで受付に現れ、宇宙人によるFBI長官の誘拐計画を短くても1時間はしゃべり続ける。

無論、スポンジ・ボブは特別捜査官でも何でも無い。

いつの頃からか現れるようになったこの変人の相手を一度はすることが、新人捜査官の通過儀礼にもなっていた。

マイケルのグレーの瞳が、助けを求めるように二人の方を向いている。

「もう……仕方ないなあ」

未来が半歩アロンのオフィスから踏み出そうとしたところで、後ろから伸ばされた大きな手に肩を押さえられた。

「ミキはランチがまだなんだろう？とりあえず食べてくるといい。彼の相手くらい、私がしよう。なに、気分転換くらいにはなるからな」

未来の小さな唇が「ここは私が」の一言を上らせるよりも早く、アロンは笑って見せた。立ち上がると同時に、手に持ったプラスチックのパックを彼女に渡す。

「ついでにこれも食べておけ。君はどうも食が細いようだから」

見てみると、彼が渡してくれたのはまだ封を開けていないピーナッツのクッキーだった。確かに身長160センチと小柄で細身の未来は、誰から見ても痩せすぎな体型に思えるのだろう。本当の体重は人工パーツと機械のせいで70キロあると言えないだけに、複雑な気持ちだ。

「ありがとうございます。休憩の時間まで、大事にとつときますね」
しかし、気遣ってくれるアーロンの厚意は純粹に嬉しい。未来は笑顔を返し自分のオフィスに戻る足で、隅のコーヒーメーカーからプラスチックカップ一杯分の熱いコーヒーを注ぎ、仕切の中へと入った。

デスクの上には個人用のパソコンと、まだ手をつけていない書類が無造作に投げ込まれたトレイが並んでいる。他は電話とペン立てメモ、花をつけたサボテンの小さな鉢植えがある程度で、置いているものは他の捜査官より遙かに少なかった。ジェイコブやウィリアムは色とりどりのスポーツドリンクのペットボトルを乱立させているし、アーロンとオリヴァーは分厚い合衆国法関連の書籍で埋め尽くしている。

彼女はやや型が古いデスクトップパソコンの電源を入れつつ、昼食用のサラダや果物を入れたタッパーを開けた。他に、ターキーのハムと野菜を挟んだベーグルも買ってきてある。男性捜査官たちはあまり食事に気を使わないようで、ちょっとしたスナックやステーキサンドをばくついていることが多い。しかし、未来はビルの中にあるスタンドで売っているホットドッグやフレンチフライの大味に、早くも食傷気味になっていた。自分が普段持参している食事がオフィスの中で一番健康的だと、自信を持って言えるだろう。

サラダのトマトやセロリを摘み、ベーグルサンドをかじりながら、未来はメールソフトを立ち上げて受信ボックスをチェックした。

殆どが情報提供者からのたれ込みや、駐在所のホームページで情報提供を求めている未解決事件に関する一般市民からのものだった。その中に時々、フィルタリングをくぐり抜けてきたダイレクトメールが埋まっている。

最近は英文のメールも殆ど日本語と同じように読めるが、それでも首を傾げるようなスラングはたまにある。

やはりそういうものは、インターネットで調べるのが一番手っ取り早かった。

「ミキ、今空いてるか？」

丁度インターネットブラウザを開いたところで、デイビッドが未来のオフィスに首を突っ込んできた。

「ええ。食事中ですけど」

「じゃあ、そのまま聞いてくれ」

ベーグルサンドを頬張っている未来がデイビッドの方へ椅子を回しコーヒーを一口含んだが、彼は特に気にした様子はない。改めてオフィスに入ってきて来ると、開口一番に告げた。

「今朝電話で、マックスからの伝言があった。明日の朝7時から、クワンティコの研究所へ出勤するようにとのお達しだ」

それを聞いた未来は、危うくベーグルを気管に詰まらせるところだった。慌てて喉の塊を飲み下し、冷めてきたコーヒーを流し込む。「マックスから？明日からって、本当ですか？」

「明日からだ。今日は他の仕事は後回しにして、引き継ぎの準備をしておけ」

「あと半年以上はここにいると思ってたのに、随分早いですね」

頷いたデイビッドの言葉が信じられない様子で、コーヒーのカップをデスクに置いた未来は呆然と呟いた。

「驚いてる暇はないぞ。明日からのお前は、もっと厳しい状況になるんだからな。CVCってのは、そういう部隊なんだろう」

「そりゃそうですけど……」

「心配するな。引き継ぎし切れなかった仕事は、資料さえあれば何とかなる」

短い通告を未来に伝え終えた主任は、早々に仕切の向こうへ出ていこうとした。直前、もう一度新米女性捜査官の方を振り返る。

「今回は多分、助っ人の要請程度だろう。お前の席を削れとはまだ言われていないから、あまり心配するな。戻ってくる場所は残ってるんだ」

と、言い残して立ち去ったデイビッドに、未来は自然と頭を下げていた。

そう決まったからにはあまりのんびりとしてはられない。

彼女は食べるスピードはそのままにして、担当している事件の資料にしているドキュメントが入っているファイルサーバのフォルダを開き始めた。

CVC。

その名を耳にするのは、今日だけで2回目だった。

2037年にFBIがプロジェクトをスタートさせた部隊、Special Mechanized Unit Correspondent to Vicious Crime（凶悪犯罪対応特殊機動分隊）の略称だ。暴力性の強い連続猟奇殺人や危険な重火器を装備したテロリストによる犯罪、ロボット絡みの犯罪、生身の人間による対処が困難な場所で発生した事件を担当する特殊部隊であり、未
来はここが擁する戦闘チームに配置されることが決まっていた。

同じFBIの特殊部隊であるHRTが人質救出を目的としていることに対し、CVCは武力行使による対応が許可された場合においても犯人を極力生きたまま確保し、事件が「なぜ」「どのように」起こされたのかを徹底的に追求し、全貌を究明して、将来の安全管理に役立てることに重点を置いた部隊である。

2040年以降は組織本格稼働を見据えた最終調整段階に入っており、試験運用として同年の年明けから幾つかの事件を担当していると聞いていた。

ただ、未来は少なくとも1年間は地方局の駐在事務所で捜査官としての経験を積んだ後、正式配属されることになっていたはずだ。それが覆されたということは、何か余程の事態が起こったのだろう。戦闘チームは必要があると判断された場合しか、捜査活動に参加しない筈なのだ。

CVCの本拠地はクワンティコにあるFBI犯罪科学研究所内で、戦闘チーム、証拠分析チーム、性格分析チームや特殊捜査チーム等、複数チームの総員数50名ほどがいる。杉田はFBI所属当初から証拠分析チームでDNA分析を担当しており、既に幾つかの事件を

手がけていた。多分、明日からは彼と一緒に仕事をするようになるのだろう。

そう考えると、不謹慎ながらも未来の気分は高揚した。

未来は戦闘チームの責任者であるマックス・レイヤードとしか面識がなかったが、他にあと4人のメンバーがいる筈だった。彼らとも明日、初めて顔を合わせることになる。

その中には未来と同じ存在、つまりサイボーグの捜査官が一人含まれているのだ。

未来にとって初めての、一緒に戦うことができるサイボーグの間である。そのことが、杉田と一緒に仕事ができる嬉しさに更なる期待感を上乘せしていた。

事前に情報は何も与えられていなかったが、どんな相手なのか考えを巡らせることは、いつの間にか彼女の楽しみの一つにもなっていた。

男なのか？女だろうか？

年齢はどれくらいなのだろうか？

何年も捜査官として活躍しているベテランなんだろうか？

もしP2が生きていたなら、どう思うだろうか？

そこまで考えて、未来はふとパンツのポケットに手をつ突っ込んだ。指先に触れた金属のチェーンを摘み、そのまま引っ張り出す。鈴のような音を立てて掌に収まったそれは、P2が残した唯一の遺品である認識票だった。

P2は嘗て彼女にとって最強の敵サイボーグであり、忘れられない存在だった。

幾度も未来を窮地に陥れ、苦しめた相手。なのに彼は、最期の瞬間に自らの命を盾として彼女を救ってくれた。生きていれば、恐らく唯一の理解者になっていたであろう男だ。

彼は今も、未来の心に生きている。

生粋の軍人で戦うことを生業としていた彼は、もし生き長らえていても、自分が保安用のサイボーグに立場を転ずることを承服しな

かったかも知れない。それでも共に戦う戦友ができるのには、きつと心強さを感じたことだろう。

未来は、亡きP2の分まで自分の意志で生き抜いていくと誓った。そのためには、FBIで新たに与えられた任務を責任を持って果たさねばならないのだ。

どんな事件が待ち受けていようと、必ず捜査官としての責務を果たして見せる。

未来はP2の名が刻まれた無骨な銀色のプレートを握りしめて頷き、引き継ぎの書類をタイプする指先に逸る気持ちに乗せた。

「あれ？もう帰ってるのか」

夜も11時を回った頃に自宅のガレージへシボレーを入れた杉田は、窓を覆うカーテンの隙間から暖色の明かりが漏れていることに気がついた。助手席に置いてあったデリの手提げ袋を取り上げると、買ったばかりのチキングリルと温野菜のサラダからオリーブオイルの香りが漂ってくる。

彼は冷え込んだ夜気の中に降り、やや伸びた芝生を踏みしめつつ防犯装置のリモコンを内ポケットから取り出した。玄関ドアのベルを解除してから鍵を開け、白木のドアの内側に身体を滑り込ませる。「ただいま」

奥にいるのだろう未来に声をかけると同時に、家の中が程良い湿り気とクリームソースが煮えるいい香りりで満たされているのに気がついた。

「あ、お帰りなさい。お疲れさま」

ガスレンジに向かっていた未来が、冷蔵庫の陰からひよいと顔を出して笑顔を見せた。杉田と未来の間にあるダイニングテーブルにはベージュのランチョンマットが敷かれ、二人分の食器がきちんと並べられている。

「待っててくれたのか？先に食べてても良かったのに」

「ううん、シチューが今できたところだから。今日は寒かったから、鶏のクリームシチューにしたよ。これなら食べられるよね？」

確認するように未来が聞いてくる。

杉田は被害者の遺体解剖や法医学の実習があったから数日は、所謂モツを調理したものが食べられなくなることがあった。他にも事件や事故の遺体を連想してしまい、二人して食べられなくなってしまうものも多い。例えばイクラは肌の裂け目から見える皮下脂肪組織にそっくりだし、ウニは割れた頭からはみ出て、時間が経過し

た人間の脳を思い起こさせる。

杉田はFBI犯罪科学研究所でDNA分析を専門に担当する検査官だ。悲惨な現場写真を目にしたり、被害者の血染めの衣服を扱うことが格段に多い。

犯罪科学研究所は危険から最も遠く、被害者の苦痛に二番目に近い場所なのだ。

だから未来は、準備した料理が食べきれずにごみ箱に捨てられることになっても、軽く溜息をつくだけになっていた。

「大丈夫だよ。ごめん、お腹がすいただろ？」

「ちよつとだけつまみ食いしてたから、大丈夫だよ。あ、それも一緒に出すね」

杉田がダイニングテーブルの上置いたデリの袋と入れ替えにして、未来がシチューの鍋を置いていく。これにクラッカーを加えたのが、二人ささやかな晚餐のメニューだった。

杉田はスーツから綿スウェット素材の部屋着に着替え、柔らかい室内履きの感触にほっとしてから、改めてダイニングテーブルを挟んで未来と向かい合った。

「未来も色々作れるようになってきたね。僕ももう少し、家でゆつくり食べられればいいんだけど」

「仕方ないよ、私も杉田先生も仕事が忙しいんだから。でも、家事ロボットくらいは欲しいかもね」

「ただ、日本からロボットを送ってもらうにしても、輸入規制に引つかかるだろうしな。家政婦さんでも紹介してもらおうことにしようか……これ、よくできてるね。野菜がたくさん入ってるし、これぐらいあっさりしてる方が日本人好みだもんな」

スプーンの上で湯気を立てているシチューをしつかり味わって、話の終わりに感想をつけ加えた杉田の様子を見ながら、未来は嬉しそうに頷いた。今日の冬野菜をたっぷり使ったクリームシチューは会心の出来なのだろう。

こうして彼女と二人で食事をするのが今は当たり前前の日常にな

っているが、渡米した当初はとんだ騒動があった。

杉田も未来も一つ屋根の下で生活を共にするとは全く聞いておらず、彼らは別々に聞いた自宅の住所が全く同じだったことにまず嘔然とした。そして居間の真ん中に予め運び込まれていた二人分の荷物の前にして、今一度嘔然とした。

しかもこの可愛らしい、小さな白木の平屋には寝室も一つしかなく、備え付けられていたベッドもキングサイズのダブルベッドだけという念の入れようだったのだ。

が、誰の仕業なのかはすぐに見当がついた。

荷ほどきをするよりも先に通信環境を整え、テレビ会議に使用する画面を介し、日本はC・S・O・Lに残っている生沢へ異口同音に抗議したが、

「お前ら、どうせ結婚するんだろ？今のうちに予行演習しとけば安心だろうが」

と、さも当たり前のように言われて、二人が絶句したところで一方的に回線を切られた。それ以後はリユウが対応したが、

「ああ。生沢先生なら、新しい銘柄のタバコが出たからってコンビ二に行きましたよ」

とか、

「うーん、トイレに行ったにしてはちょっと長いようですね」

などと普段の調子でのらりくらりととぼけられ、見え見えの居留守を決め込まれたのだ。

結局住居の件については解決を見ないまま、未来はFBIアカデミーでの寮生活に移った。が、訓練課程を終えて戻ってきた彼女をまたまた驚かせたのは、杉田が生沢の説得に応じて同居の支度をすっかり整えてしまっていたことだった。

もちろん未来のためのアパートなどは手配されておらず、服やお気に入りのインテリア小物などの日本から持ち込んだ私物は、借家のしかるべき場所にきちんと収められていた。

してやられた、と思うにはもう遅すぎたのだ。

もともと、杉田と未来の進展があまりにも遅いことに生沢が苛ついていたのは知っている。しかし、まさかここまでやられるとは夢にも思っていなかった。

なし崩し的に同居生活を始めるに当たり、未来は鼻息も荒く寝る場所を分けることを主張した。だが、杉田が彼女にベッドで寝るように言い、自分は居間にあるソファァーを使うことを提案すると、急に自分一人が広いベッドを占領することに罪悪感を持ったようだった。

数日間は別の部屋で寝るようにしていたものの、一週間の後に杉田の顔から視線を逸らしながらも、寝る前の一時にパジャマ姿で彼女は言った。

「……同じベッドで寝るだけならいいよ、寝るだけだったらね。でも寝てる間に変なことしたら、ただじゃおかないんだから」

かくして二人は同じベッドで寝るようになった。

そして更にもう一週間が経過すると、未来が杉田の腕に抱かれて朝を迎えるのが自然なことになっていたのである。

流石に夏の間毎晩そうしてはいなかったが、今は秋も深い。あまり密閉性が高くない木造の家で眠る夜、お互いの肌の温もりがありがたいのは事実だった。

最近では帰宅時間が合わず、寝る時間もまちまちなために「ただ同じベッドで寝ているだけ」ということも多い。そんな現状も、明日からは多少なりとも改善できるだろう。未来は弾みそうになる声を抑え、笑顔を作った。

「それでも、私も明日から杉田先生と一緒に仕事場になるからさ。帰る時間は、今までよりもわかりやすくなると思うよ」

「……同じ仕事場？」

杉田が持ち上げようとしたスプーンを空中で止めた。

「マックスから聞いてない？私、明日からCVCに行くようになって命令があったんだよ。ちゃんとした辞令は、多分明日もらえらると思っただけ。ただ、今回はまだ正式な任命じゃなくて、急場凌ぎの

ヘルプなんじゃないかって……」

未来が言葉を切る。

眉根を寄せ気味の不審そうな視線の先で、杉田は戸惑ったように焦点を散らしていた。

「先生。どうかしたの？」

「い、いや。何でもないよ。今日もずっと顕微鏡を覗いてばかりだったから、ちょっと疲れがたまってきたみたいでね」

「そっか。だったら今日はバスタブにぬるいお湯を多目に入れて、ちよつと長く温まるといいよ。バスオイルも後で出しとくから」

杉田ははつとしてまたスプーンを口に運んだが、動きが明らかにぎこちなくなっている。そんな仕草の端々に、以前アカデミーで習った内容そのままの、動揺した人間の色が見て取れるようだった。

「バスオイルなんだけど、この前新しいのを見つけて買ったの。ラベンダーの香りなんだよ。リラックス効果があるらしいから、きつと今日はよく寝られるよ」

「ああ、昔からよく言うよな。ポプリを枕の下に置いたりとか、アロマオイルもあるっけ」

「あれ。先生つてば、男なのによく知ってるね」
「ずっと華道をやってたからね。花や植物のことは、普通の人よりずっと詳しいよ」

未来がそれ以上突っ込んでこないことに安心したのか、杉田は肩から力を抜いて笑顔を見せた。

「あ、そくだよね。実は私、ラベンダーの生花って見たことないんだ。やつぱり、ポプリとかオイルよりもいい香りがするの？」

「そりゃ、花は自然に咲いてるときが一番だよ。僕は北海道に行ったときに大きなラベンダー畑を見たけど、見渡す限り淡い紫の花が広がっててね。あれはいつか、未来にも見せてあげたいよ」

植物の話は、杉田が仕事以外で一番得意とする分野だ。嬉しそうに言葉を続ける彼は、シチューを口に運ぶのも忘れそうになっているほどだった。

あれ以上、杉田を追及せずには正解だったと言えるだろう。以前の未来なら二言三言余計に立ち入っていただろうが、もしそうしていれば、シチューで温めた折角の食卓が気まずい雰囲気にならなくていいに違いない。

捜査官としてアカデミーで学んだ交渉術や観察術は、こういった日常でも役に立つものだと感じる。その一方で、彼女は心の隅に隙間風が吹き込んでくるような一抹の寂しさを覚えていた。

杉田先生は、私と一緒に仕事ができることが嬉しくないの？

未来は穏やかな表情を保って愛する男の話に耳を傾けながらも、心で声に出さずそつと呟いていた。しかし、今は不安を表に出すべきではないことぐらいわかっている。気持ちが落ち着いてからさり気なく、思い出しついでに聞くのが相応しい質問なのだ。

「じゃあ早速、お風呂の支度してくるね」

未来は心の端を曇らせた影を勢いよく追い出そうと、椅子から立ち上がった。明るく言った。

「あ、それぐらい僕が……」

「先生は、お皿を片付けて。オイルがどこにあるか知らないですよ」

言うのが早い。未来はベージュのペロアのスリッパをぱたぱた言わせて、キッチンのドアをくぐっていった。

ジーンズ姿の小さな背中が暗い廊下に消えるのを見送り、杉田は溜息を一つ漏らした。

「明日から、未来も僕と同じ場所で仕事か……」

新米のFBI検査官が無意識に眼鏡を直して呟いた言葉の調子は、お世辞にも明るいとは言えない。戸惑いと不安の色合いを濃く含んだものだ。

今自分が扱っているのは頭を銃で撃たれた上、両手両脚を凄まじい力でねじ切られて殺された被害者が身につけていた白いポロシャツとジーンズだ。

大量の血で茶色く固まり、肉片を繊維の裂け目に絡めた、残酷な

暴力の痕跡。

杉田の目的はそこから犯人のDNAを検出することだ。が、過去に起こった同様の事件の証拠品で、既に検査済みのものを彼が再検査しても、被害者以外のDNAを見つけることはできなかったのだ。恐らく今回も検出されないだろう。

犯人は狡猾で慎重な人物であることがわかる。

それとは別に、ヴァージニアを騒がせているアジア人男性連続殺人事件の証拠品も、杉田の元へ回されてくる。こちらは戦闘チームを除いたCVCの各チームが捜査を担当している事件だが、杉田はCVCが手がける事件の証拠品全てを取り扱っていた。

杉田の所属はCVCのDNA分析チームで且つ、戦闘チームメンバーも兼任し、未来のメンテナンスも週に一度実施している。他チームとの兼ね合いを気にしなければならぬ辺りは微妙な立場と言えるが、正直そんなことはどうでもいい。

未来には自分が調べている証拠品を作り出す、むごたらしい犯罪の事実を見せたくなかったのだ。できることなら彼女には人間がどこまで残酷になれるかなど知って欲しくないし、知る必要もないと思う。

二人がまだ日本におり、未来が心の傷から回復していなかった頃、杉田はいつも彼女の側においてその心を守ろうと誓った。ところが今は守るところか、人間の心におぞましいほどのどす黒さで淀む負の側面を毎日見せつけられ、自分のことだけで精一杯だ。

それに、本来の自分は医者のはずだ。

なのに、最近は生きた患者を相手にしたことがない気がする。

杉田の医者としての夢は、生まれつきの障害を抱えた者や、事故や病気で身体の一部を失った患者に、自由に動かせる身体を与えることだった。

その夢は軍事サイボーグ開発プロジェクトという非人道的な事業にかかわり、未来を作り出したことで、皮肉にも達成された。しかしそれは勿論不本意なことだったし、何よりも未来の心と体を散々

痛めつけたことが、今も彼を苦しめることがある。

本当は自分が築いた技術で、もっと人を救いたいのに。

苦しんでいる人たちの希望になりたいのに。

一体自分は、何をやっているのだろうか？

世界一と言われる犯罪の研究所の暗い部屋に籠もって、無惨に殺された被害者の断末魔を思い起こし、邪悪な犯人の遺伝子をあぶり出して、自分は何をやっているのだろうか？

こんなことがしたいわけではなかったのに。

もう何年も未来以外の患者を診ていないことに、彼は最近になってようやく気づいたのだ。今の自分が本来の医者という姿から遠く離れていることも、じわじわと感じている。

ただ、自分がやったことで未来の人生を完全に曲げてしまったこともまた、変えようがない事実だった。彼女は杉田と出会わなければサイボーグになることもなく、FBIで犯罪者と戦うこともなく、女性としての幸せを求めることができただろう。

こういった言い回しを未来は嫌っているため、杉田が口にするとはなかったが、彼はそのことに対して責任を取り、代償を払うことが当たり前だと考えていた。それが自分の夢を諦めるということだったのだ。

だが、自分もとつくに納得して決着がついたと思っていることが、時折下を向きたくなるような寂しさを伴って襲ってくることがある。その感覚も回数を重ねることに抑えることを身につけていき、心がくしゃみをしているようなものだ、彼は思うようになってきていた。

今日も同じようで、杉田はそこで考えるのをやめた。

自分がこんなことを考えていては、未来の支えになどなれるわけがないのだ。

未来は犯罪の現場で働く特別捜査官だ。

研究所と違って現場には音があり、温度があり、臭いがある。自分も現場に出向かなければならないことはあるが、彼女は自分より

ずっと多く苛酷な環境に心身を晒し、常に死の危険と隣り合わせの任務を遂行しなければならぬ。

一度彼女を救おうと決めたのだから、それを覆すわけにはいかないのだ。

小さく頷いた杉田が立ち上がり、食べ終わった皿やスプーンをシンクへを運ぶために重ねていく。

「ねえ、先生！このバスオイルなんだけど、見てみて。すごくいい香りなんだよ」

そこへ、笑顔の未来が戻ってきた。小さな足音を立てて駆け寄りながら差し出したのは、赤ん坊のこぶし大のバスオイルが収められた透明なプラスチックの箱だった。

中に並ぶバスオイルの粒は澄んだ薄い紫色で、アクリル珠のようにも見える。暖かい照明を受けて優しく輝いているそれを、杉田が一粒指先でつまみ上げた。柔らかい固形オイルはあまり顔に近づけなくても、ラベンダーのふんわりとした香りを運んできてくれる。

わざとらしさが無い印象は、オイルが天然物で質がいいことを物語ってくれた。

「本当だな。これなら、今日はよく寝られるよ」

「じゃあ、先生が先にお風呂に入っていていいよ。私は台所、片付けとくから」

「いや、後片付けは僕の分担だから」

重なった皿をシンクへ持って行こうとした杉田の前で、未来が再び笑顔で言った。

「いいよ。今日は先生の方が長く仕事してたんだから、先にゆっくりしてて」

そして、やや強引に皿を彼の手からもぎ取る。

少女つぼさを残した顔に広がっている表情には屈託がなく、無邪気そのものだ。彼女が戦闘用のサイボーグであることなど、初めてこの笑顔を見た者は信じられないに違いない。それほどにまで未来は純粋な心を持つ女性だとも言えるだろう。

「……わかった、そうさせてもらおうよ。でも、未来も疲れてるだろ？台所が片付いたら、好きなだけゆっくりするといいよ」

思わず彼女を抱きしめたくなる衝動を抑えて、杉田も笑顔を返しておく。

二人が上気した肌にラベンダーのほのかな香りを纏い、同じベッドの上に身体を沈めたのは、夜中を過ぎてからだだった。

「今日は僕が帰ってくるとき、外もかなり寒かったんだ。明日の朝は、かなり冷え込むかも知れないな」

ベッドに身を起こした杉田がりモコンで寝室の窓に雨戸代わりのシャッターを下ろすと、それまでうるさかった風の音がぴたりと止んだ。深夜に風が強いのが、早朝も気温が相当低くなるだろう。しんとした家の空気に、未来の眠そうな声が小さく乗る。

「そろそろ、毛布も出さないと駄目かな……」

杉田の隣でクリーム色の羽根布団とシーツにくるまり、必死に睡魔と戦っている未来の瞼は、今にも閉じそうになっている。彼が枕もとの間接照明を消すまでは起きていようと頑張っているのだろう。「明日出せばいいよ。お休み、未来」

杉田が低い声で優しく言い、枕に広がった未来の長く艶やかな髪をゆっくりと撫でてやる。口許に微笑を浮かべて頷いた未来は、目を閉じてから1分もしないうちに、子猫を思わせる安らかな寝息を立て始めた。

軽く目を閉じて穏やかに眠る未来の表情は、24歳とは思えないほどにあどけない。

「おやすみ。また明日な」

杉田はもう一度囁いてから彼女の柔らかい頬にキスをし、眼鏡をはずしてからスタンドを消した。

翌日、杉田と未来が各々の車に乗り込んだのは、まだ夜の寒気がそこここに残っている早朝6時前だった。杉田は通い慣れた道だが、未来は週に一度メンテナンスに通っているだけで不慣れた。だから、自然と彼のシボレーの後をついていくことになる。

郊外に向かう朝の道路は混雑と無縁で、杉田は未来が運転するフォードを常にバックミラーで確認することができた。二人の自宅があるフレデリックスバーグの住宅街には、ささやかな木造の平屋から鉄の門を構えた煉瓦造りの邸宅まで大小様々な家が建っていたが、ハイウェイに入ると景色は途端に単調になる。

どこまでも広がる鈍い色の枯れかけた野原に、道路際まで迫る黒い森。実りの時期を過ぎて冬支度を整えているヴァージニアの晩秋は、からりと澄んだ空を除いた自然の色も極めて控え目になっていた。

クワンティコにあるFBI犯罪科学研究所は、フレデリックスバーグから車でだいたい1時間くらいかかる距離にある。施設自体は海兵隊基地の中にあり、クワンティコの街の住人たちはほとんどが基地関係者かその家族だ。

インターステート95（州間道路）の出口から暫く森の中の道を進むと、480エーカーという広大な敷地を持つFBIの施設が忽然と姿を現す。職員専用の入口で守衛に身分証を提示して屋外駐車場に車を止めると、二人は連れだって簡素な正門をくぐり、噴水広場を抜けて茶色い煉瓦造りの建物へと入った。

FBIやDEA（麻薬捜査局）が共同で使う射撃場や演習場、運動場といった野外フィールドの片隅に建つ大学のキャンパスのように見える建物こそが、アカデミー兼犯罪科学研究所である。未来と杉田は受付のカウンターに今一度身分証を提示して奥へ進んだ。

朝日が射し込むロビーの向こうは教室や研究室、幾つものオフィ

すがガラス張りの廊下で繋がれたつくりになっており、今日の目的地である地下の会議室には杉田の案内で行くことになっている。

未来が耳の感度を上げると、遠くから自動小銃の連続した発砲音が聞こえ、装甲車のキャタピラが軋みを上げて土の上を走っているのがわかった。その中に非常時でも決して冷静さを失わない、抑えた号令と命令の声混ざっている。

HRTと海兵隊の合同演習だろうか。

彼女はアメリカでの研修の話聞いたとき、てっきり諜報機関であるCIAか、FBIが擁する特殊部隊である人質救出チームのHRT所属になるのかと思っただけのものである。

考えてみれば、もう1年近く重武装した兵士たちとの軍事演習をやっていない。

それだけに、アカデミーの廊下で擦れ違う新米捜査官や隊員たちが振りまく硝煙や銃器の手入れ用溶剤の匂いを吸うと、未来は身体のおちこちが疼き出すような気さえしていた。

ここ3年で心と身体に徹底的に叩き込まれた戦場での戦い方は、全身に余すところなく染みついていて、ドアの向こうに人の気配を感じたり、窓の外で物音がした時などは、意識せずに行動しやすい姿勢で構えてしまうほどだ。

「未来？今日はこっちだぞ」

やや歩みが遅くなった未来を振り返り、杉田が怪訝そうにする。

「ああ、ごめんごめん。ちょっと懐かしくなっちゃって」

列をなしてきびきびと廊下を行く新人たちをいちいち目で追っていた未来が、立ち止まっている杉田に慌てて追いついた。

アカデミーでは協力関係にある複数の法執行機関の候補生たちが訓練を受けており、彼らは服装で所属が判別できるようになっていた。警察、麻薬取締局、人質救出チーム。それぞれ身なりは違うが、合衆国の法を守ると言う使命感を抱いた彼らは皆、厳しい訓練の最中にありながらも誇らしげに胸を張り、期待に瞳を輝かせながらしっかりと歩いている。

まだ朝も早く、寄宿生活を営む候補生たちは皆起き出したばかりだのだから、行き交う男女の行動の節々に統制が行き届いた様子が窺える。

その中でブルーのシャツとカーキ色のパンツといういでたちのFBI新人捜査官たちを見かけると、半年前に自分がそこに混ざっていた時のことが、つい昨日のことのようにまざまざと思い出された。だが未来は、その彼らからも値踏みするような視線が飛んできていたのをひしひしと感じていた。見学者の中学生にしか見えない自分が捜査官であることを示すカードを胸に留め、研究所へとずんずん進んでいくのが奇妙なのだろう。

一部アカデミーの施設を通り抜け、廊下のかなり奥に位置する業務用エレベーターに辿り着くと、杉田が「LL」のボタンを押した。二人は陽の光が届かない、「防空壕」の異名を取る地下3階へと下りていく。

エレベーターを下りてすぐは殺風景なアイボリーの廊下になっており、地上よりもみすばらしく見える。杉田は更に廊下をまっすぐ行き、突き当たりにあったドアを開けた。このフロアは特にセキュリティを考慮していないらしく、ドアには普通の鍵がついているだけのようにだ。

「僕は荷物を置いて白衣を取ってくるから、未来はここで待っててくれ」

「……まだ誰も来てないの？」

古いが磨かれた机が置かれた、10人以上は入れそうな会議室を未来が覗き込む。

「ちよつと早かったからね。でも、マックスがもう来る頃だよ。他のみんなもすぐに来ると思うから、座って待ってるといい」

杉田は未来にコートとバッグは隅に置いておくように言ってから、慌ただしく会議室を後にした。

彼が出て行ってしまつと、急に会議室に残されたことが不安になった。

ここで、今までどれだけ捜査に関するミーティングが行われたのだろう。

その中には何人も犠牲者を出したテロや、被害者を苦しめるためだけに拷問した異常者が犯人の殺人事件も当然あっただろう。

自分もこれからそんな事件に、捜査官として立ち向かわねばならないのだ。

未来は短く息を吐いて、意識せずにやや縮こまってしまった背筋を伸ばした。

CVC本部は、以前「プロファイリング課」と呼ばれていた行動科学課と同じ場所に配置されている。杉田は自分のオフィスをこのフロアに持っていたが、主な仕事であるDNA分析は別のフロアにある分析室でしかできない。だからいちいち移動が面倒だと、よく未来にもこぼしていた。

そう言えば、CVCに正式配属されたら、自分もこのフロアに個人オフィスが与えられるのだろうか。今までメンテナンスは地下1階の研究室に設置されている機器でやっていたが、それよりも下のフロアに足を踏み入れるのは今日が初めてだった。

彼女がもう一度入口のドアを振り返ったとき、誰かがノブを回して部屋に入ってきた。

「マックス、お久しぶりです」

同時に椅子から立ち上がると、入室してきた人物に笑顔を作って会釈する。

「おはよう、ミキ。アカデミー修了以来のご無沙汰だな。暫く会わないうちに、すっかり捜査官らしくなってきたじゃないか」

「いえ、まだまだヒヨッコの身の上です。お恥ずかしい」

頭を上げた未来に手を差し出したマックスは、彼女と固い握手を交わした。

CVC戦闘チームの責任者であるマックス・レイヤードは、精悍さが何にも勝る印象をもたらす50代の大柄な白人男性だ。髪はすっかり色が抜けているが、贅肉が全くないすっきりとした体格の持

ち主で、HRT隊員だった頃の活躍ぶりを思わせる威厳と迫力を全身に纏っている。そのいかめしい空気は、地味なスーツぐらいではとても隠せないほどだ。

穏やかな笑顔を作っている今さえ、立ち姿にも全くと言っていいほど隙がない。加えて、先に廊下で捜査官の卵たちが浴びせてきたような分析の視線を未来の全てに巡らせていることを、嫌でも感じさせる。

FBIの施設にいる限り、この男の前では決して気を抜くまい。そう思わせる人物だ。

「飯のものになるが、後で君のオフィスに案内しよう。ミーティングが長引くかも知れんから、その後にもな」

「そう言えば、何の事件を担当するのもまだ聞いてないんですけど」

「詳しいことは、君を他のメンバーに紹介してからにする。とりあえず、座って待っているといい」

「……はい」

それ以上は追及せず、未来は素直に従った。

日本のAWPにいた頃は上司にも容赦なく突っ込んでいたが、FBIのような歴史ある警察関係の組織では上下関係が特に厳しい。基本的には上司や先輩には逆らえないし、マナーを欠いた態度一つが左遷や降格の原因になることもあるのだ。

マックスのように嫌でも実力を感じさせる相手には喜んで従うが、フレデリックスバーグ駐在事務所のジェイコブのような輩にはどうしても言い返したくなる。

未来自身も悪い癖だと自覚はしているが、戦闘チームのメンバーにはそんな仲間がいないことを祈るばかりだ。

「おはよう、マックス」

そんなことを考えていた未来の耳に届いたのは、ドアが開く音に混ざった落ち着いた感じの女性の声だった。

「おはようございます。本日よりCVC配属となりました、特別捜

査官のミキ・ハザマです」

未来が跳ねるように立ち上がり、入口に向かって反射的に笑いかける。

彼女の視線の先に小型の端末を抱えて立っていたのは、背が高い白人の女性だった。

軽く波打った豊かな金髪を頭の後ろで捻ってまとめ、フレームの細い眼鏡をかけた顔は彫りが深く、薄化粧なのに整っていて美しいと素直に思える。

茶色のコーデュロイのパンツに黒いセーターとカーディガン、足元が医療用サンダルという色気がない服の上に白衣を着込んだ冴えないでたちでいても、この女性が理知的な光を濃いブルーの瞳に閃かせていることは、一目でわかった。

「FBI流の挨拶ね」

微かな微笑みを浮かべ、女性は目の前に歩いてきた未来の全身を眺めた。

「でも、そんなに気負わなくてもらえるかしら？ 私はエマ・ドレイクよ。CVCへようこそ、日本のサイボーグさん……いえ、ミキ」

FBI流の挨拶とは、初対面の相手に何か言うよりも先に笑いかけ、席にかけたり名刺を交換する際にもう一度笑いかけるコミュニケーション術のことだ。相手に好印象を刷り込ませるためにこれもアカデミーで叩き込まれることだが、このエマという女性は未来のそんな緊張をも見抜いているのだ。

「私はこのチームにいるサイボーグの改造と、メンテナンスをメインで担当してるの。貴女のごことは、ドクター・スギタから色々と聞いているわ。そのうち、貴女のメンテナンスも手伝うことになると思うから」

「そうなんですか。よろしくお願ひします、ドクター・ドレイク」

「エマでいいわよ」

エマはにこやかに微笑んで、未来へと右手を差し出して握手を交わした。

しかし、目線が10センチほど上にあるこの美しい女性もまた、慎重な色を全身に薄く纏っていることを隠し切れていない。握手は手のひら全体でしてくれているが、どこか突き放したような冷たさを感じられるようだった。

そりゃ、異国のサイボーグなんて最初から信頼できなくて当たり前だよ。

まして私は、捜査官になるための書類審査を免除されたも同然なんだから。身元だって他の捜査官と違って、怪しいところがあると思われてもしようがないか。

未来は勝手に自分を納得させ、握手を終えたエマが席につく様子を見守っていた。

「……実際に見てみれば、トリスも驚くと思うよ」

再び椅子に腰を落ち着けようとした未来の耳に、今度は誰かと話をしているらしい杉田の声が届いた。間髪入れず、ドアが開いて彼が会議室に入ってくる。

「やあ、やあやあ！君がミス・ハザマ……日本から来たサイボーグの捜査官か。よくCVCに来てくれた！僕はトリスタン・ケンジ・オノだ。トリスって呼んでくれ。よろしくな！」

その杉田を突き飛ばさんばかりの勢いで入ってきたのは、未来とあまり背丈が変わらないくらいの小柄な東洋人男性だった。

「本日よりCVC配属になりました、特別捜査官のミキ・ハザマです」

彼の勢いに気圧されそうになりながらも立ち上がり直した未来は、完璧な笑顔を作り手を差し出した。

「へえ、見た目は本当に可愛い女の子なのに。確かに、ドクター・スギタが言った通りだ。君が拳銃一丁でテロリストの団を壊滅させた戦闘用サイボーグだなんて、本当に驚きだ」

未来の小さな手を力強く握り返したトリスは、まじまじと未来の顔や手足を見つめてくる。それに、未来がサイボーグだということをあからさまに口にして、好奇の目を全力で向けてくる人物は初め

てだ。

しかし本人に全く悪気はないようで、まるで見たことがない昆虫を捕まえたときの子どものように瞳を生き生きと輝かせていた。

彼が会議室にいるメンバーの中で一番ふくよかな体型と言える。小太りな背格好で童顔に眼鏡、チエツクのシャツの下に重ねたハイネツクと色褪せたジーンズ、スニーカーというファッションは、一昔前の「オタク」スタイルそのものだ。ケンジというミドルネームと少し伸ばした硬そうな黒髪からして、日系人なのだろう。

「え……ちよつと、先生！そんなことまで話してるの？」

「未来の戦闘データは、予めFBIに渡されてるよ。知らなかったのか？」

相変わらずハイテンションのまま手を離さないトリスに初めて自分の身一つで戦ったときのことをさりとられ、慥然とした未来が声を荒げる。が、白衣を羽織った杉田は困ったように肩をすくめただけだ。

「ところでミキ、君は武器を内蔵してたりはしないのか？」

「……は？」

「ああ、いや。僕はこのチームで、戦闘用ボディースーツと武器開発と管理を担当してるんだ。君がどんな武器を使ってるのかとか、すごく興味があつてね」

未来が面食らい笑顔を引きつらせて半歩退いたところへ、トリスが更に踏み込んでくる。

未来は体内の電池ユニットに蓄積された電力を両手から放出することができ、それが生身のときの強力な隠し武器だと言えるだろう。スタンガンを内蔵しているのと同じだ。

しかし、今それをトリスの前で口にするのは憚られるような気がした。

「トリス、それぐらいにしとけ。ミキがびっくりしてるだろう」

「やれやれ、と言いたげにマックスが頭を振った。

「えと……また後で、そういうことは話しますから」

「うん、是非ともね。ミキにも僕が準備した武器を使ってもらうことになるから、時間があるときにじっくりと話をさせてくれよ」

まだ引き気味の未来へ、目を細めて人なつこさたつぷりの笑顔をもう一度投げかけてから、トリスが会議室の奥の方の席に移動していった。

「あいつはいつもあんな調子だが、毎日会ってればすぐ慣れる。あまり気にするな」

そこへ、不意に威圧感がある低い声ごく近くからかけられた。驚いた未来が振り向くと、いつの間にかすぐ後ろに別の男性が控えていた。

「ベルナルド・スペンサーだ。ここでは戦術コンサルタントをやっている。何かあるときはバーニイと呼んでくれ」

他の仲間と違った、心地よいが感情をあまり乗せていない声だ。彫りが深めの顔だが黒っぽい髪と瞳から察するに、白人ではないようだった。歳は40代くらいに見え、エマよりは年上でマックスより若い、という辺りだろうか。

未来は今日何度目かになる笑顔に自己紹介の言葉を添え、改めてバーニイの方を向いた。

「特別捜査官のミキ・ハザマです」

二人は同じタイミングで右手を差し出したが、未来はバーニイが室内なのに白い布の手袋を外していないことに気がついた。だからと言って特に構うことなく、握手を交わす。

彼女の手を握ってきたのは人間の皮膚と明らかに違う、硬質で冷たい感触だった。

「そんなに驚くことはないだろう？俺の両手は、お前と同じだよ」
僅かに表情を変えた未来に、バーニイは平坦な調子で言い放って手を離れた。

彼の両手は、金属製の義手なのだ。だから室内でも手袋を外さないのだろう。

「そうですね、貴方が……」

「いや。残念ながら、俺はサイボーグじゃない。期待を裏切つて悪いがな」

未来はてつきり、完全に気配を殺す技を平気でやってのけたバーニーがサイボーグなのだと思つたが、彼はあっさりと片手を振つて否定した。

「いえ、そんなこと！すいません、失礼しました」

慌てて彼女は頭を下げる。

それでも彼が戦術コンサルタントということは、実戦の際に指揮を取るはずだ。FBIの特殊部隊に当たるCVCにいるのだから、バーニーも他のメンバーと同じかそれ以上のスペシャリストであることの予測はついた。マックスと同じく特殊部隊隊長クラスか、それ以上の出身と考えられる。

しかしバーニーは、そんな輝かしい戦歴を残している者に特有の闊達さが、どこか欠けている印象だった。それは彼が黒いジャケツトと黒のデニムにグレーのハイネックシャツという沈んだ色調の服に身を包んでいるからでも、話し方が抑え気味だからでもない気がする。

未来は握手を終えたバーニーの考えを図るかのようになり、大きな瞳でその仕草を追つた。

確かに椅子にかける動作一つにも無駄がなく、軍出身者によく見られるぴりつとした空気があり、未来に気づかれないくらい見事に気配を殺す術も身につけている。

その一方で何を考えているかわからない、因縁めいた陰のようなものが表情の裏にある気がしてならない。

それにしても、一番しっくりきそうなバーニーがサイボーグではないのだとしたら、一体どんな人物がサイボーグなのだろうか。

「あとここにいないのは、ジャクソンだけか？」

「そうみたいね。今日は遅れないように散々注意しておいたのに、寝坊でもしたのかしら？まあ、いつものことではあるけど」

持ち込んだ端末をデスクに置いてから再び立ち上がり、未来の隣

まで来たバーニイが会議室の中をぐるっと見回すと、エマが眼鏡を上げつつ困ったように溜息をついた。

「ジャクソンって？」

「ああ、戦闘員のサイボーグだ。今日は奴をミキと会わせるのが一番の目的だと言うのに、また遅刻のようだ。後でしごかなければならんな」

未来がバーニイの顔を見上げたとき、彼もエマと同じく溜息を漏らした。

「遅刻ですか？ 捜査官なのに」

決められた時間を守れないなど、捜査官として言語道断だ。他の事件の捜査などの納得が行く理由があるなら仕方ないかも知れないが、エマやバーニイの様子を見ると、ジャクソンなる人物はどうもそうではないらしい。未来は眉をひそめざるをえなかった。

「不良捜査官がいるとすれば、あいつはそれにぴったり当てはまるだろう。しかしFBIでは唯一のサイボーグだからクビになることもないし、実際の捜査のときは目立った違反行為もしない。あれで普段の態度をもう少し……」

バーニイの言葉が途切れる。

そこにいる一同の耳へ平等に、廊下をどたばた走ってくる賑やかな足音が届けられていた。皆が顔を上げて、ドアへ注目する。

「おっ！ まだ、ミーティングは始まってないようだな。やれやれ、セーフってことか」

「安心する前に、遅れたことをまず反省するのが先だ。今日は遅刻するなどみんながあれほど言っただろう、ジャクソン」

呆れて首を振ったマックスの視線の先で、会議室のドアを荒っぽく開けてきた黒人男性が息を弾ませながら、茶目っ気のある笑顔を振りまいていた。

「……でかつ」

ジャクソンと呼ばれたその人のすぐ脇に立った恰好になった未来が、思わず目を丸くして呟いた。

ジーンズに襟元を開けたシャツ、Vネックのセーターを重ねた身の丈は、優に6・5フィート（約193センチ）を超えているだろう。未来の背丈は、彼の顎よりも下だ。

黒人特有のしなやかで細く、むらのない筋肉に覆われた体つきは、草原を疾走する猫科の獣を思い描かせる。しかしその顔は迫力よりもどこか少年つぼさが抜けておらず、明るさを溢れさせている表情の上には、優しい瞳が温かく笑っているかのような印象が勝っていた。

「まあ、堅いこと言うなよ、マックス？ 結局はぎりぎりで間に合ったんだから、いいじゃないか。ところで」

額に浮かんだ汗を拭い、ジャクソンは会議室全体に黒い瞳を巡らせた。

「今日は日本から来たサイボーグの捜査官が、初めて来るんだろ。日本人なら、時間には正確なんだよな。どこだ？ どこにいるんだ？」

相変わらずジャクソンはきよるきよると部屋の中を端から端まで見渡すが、彼の視線は全てが見事に未来の頭上を通り越していた。

「お前のすぐ横だ。気づかんのか？」

「……ん？」

バーニーに無表情に言われてからようやく、ジャクソンが顎を下げて自分の近くを視界に入れる。その中に、明るい茶色の髪に包まれた未来の頭のとっぺんがあった。

彼女は目一杯上を向き、驚いたようなジャクソンの顔を正面から覗き込むようにして笑顔を作った。

「貴方が、CVCのサイボーグ……」

「おいおい、ここはお嬢ちゃんみたいな中学生が来ていい場所じゃない。誰に頼み込んでここまで入ってきたのか知らないけど、警備員に見つかる前に、とっとと見学者コースに戻ったほうが身のためだぞ」

今度はジャクソンが何てこった、言いたげに自らの顔をぺちんと叩いて首を振った。一方的に言葉を遮られた未来は、一瞬啞然とし

てそのまま固まりかけたが、彼女の口から漏れたのは鋭い怒号だった。

「ちょっと、何すんの！このスーツが破けたら、弁償ものなんだからね！」

ジャクソンが彼女のスーツの襟を掴んで、強引に会議室からつまみ出そうとしたのだ。

「親切な俺が、エレベーターまでは連れてってやるよ。不審者として、撃ち殺されたくはないんだろ？」

「だから、私は！」

声を荒げる未来の言うことなど聞こうともせず、ジャクソンは彼女の襟首をがっちりと掴んだまま小さな身体を引きずるうとしていく。杉田が慌てて席を立ち、二人の間に割り込もうと駆け寄った。

「よせ、ジャクソン！彼女は君と同じサイボーグ捜査官だ。一発食らう前に早く……！」

杉田が事実を告げたそのとき、未来が下から思い切りジャクソンを睨みつけ、自分を押さえている太い右腕に手をかけた。

「ぎゃっ！」

突如、右腕全体が激痛に襲われ奇声を上げたジャクソンが、弾かれたように右手を上げて未来を解放する。

遅かったか、と諦めた杉田は足を止めて肩を落とした。

「人の言うことを聞こうともしないで手荒に扱うなんて、レディーに対する態度がなってないんじゃないの？失礼にもほどがあるでしょ！」

「……お前、一体俺に何をしたんだ？」

ジャクソンの右腕には未来の指先が少し触れただけなのに、思わず叫びを上げるほどの痛みと、逆らうことのできない衝撃が走っていたのだ。

怒りに任せて頬を上気させている未来は、彼女を捕まえていた右手を庇っているジャクソンに向き直って無意識のうちに身構えている。

「別に何も。あんたのおいたが過ぎる右手に、ちょっとお仕置きしてやっただけだよ」

むすつとして言葉を繋ぎ、未来はまだ仰天している様子の大男を睨んだ。

「彼女は電池ユニットのエネルギーを、外部に向けて手から好きなときに放電できるんだ」

「それは……スタンガンを食らったようなもんなのか？」

杉田が二人の方へゆっくりと歩み寄り、ジャクソンの右腕に軽く触れる。

「そう。かなり痛かっただろうけど一瞬のことだったし、彼女が意識しなければ電流もそんなに高くはならない。今ちゃんと動かせるなら、別に問題はないだろう。その程度で済んで良かったよ」

「昔のニンジャみために、隠し武器を持つてることか。こんなのが日本式の挨拶だとは思わないけど、こりゃまた随分ときついな」

未来から電撃の洗礼を浴びせられたことにはちっとも腹を立てず、ジャクソンはむしろ面白そうに目の前の小柄な女性を眺めた。

「どっちが？あんたこそ、いきなり私をつまみ出そうとしたくせに。私はれっきとした特別捜査官で、あんたと同じサイボーグなんだから」

「いやあ、ミキがあんまりキュートなもんで。つい、小さな女の子扱いしちゃった」

と、快活に笑うジャクソンの表情に全く悪気はなさそうだ。

「あ、俺の挨拶が遅れちゃったな。俺は特別捜査官のジャクソン・トルーマン。CVC戦闘チームの戦闘員でサイボーグだ。これから、捜査や戦闘のときにコンビを組むことになるよ。よろしくな」

そしてすかさず、手を差し出してくる。未来は大きな目をしばたかせると、軽く息をついた。一騒動起こしたことをここまで綺麗さっぱり流されてしまうと、怒りが募るのを通り越して毒気を抜かれた気分だった。

「ほら、未来。君もジャクソンに挨拶がまだだろうか？」

ほっとしたように見える杉田が、苦笑しながら促してくる。吊り上っていた眉の端から力を抜いて、未来はジャクソンの手を握り返した。

「私は今日からCVCに配属になった、特別捜査官のミキ・ハザマ。まあ、仲良くやって行きましょうか」

「すごいな！ミキは体内の電池ユニットから、自在に電気を引き出せるのか？そんなギミックをその小さな身体の中に持つてるなんて、流石は日本の最新技術を集結させたサイボーグだ。よし！こうなったらジャクソンにも、これに負けないような隠し武器を持たせるしかないな」

ひどく興奮し、椅子を蹴飛ばさんばかりの勢いで立ち上がったタリスタンが、未来とジャクソンとの間に割り込んでくる。先よりも明らかに高い調子で弾んでいる声を耳にして、しまった、と未来の顔が引きつった。

「お前たち、いい加減にしろ。それは後回しだ。もうミーティング始めるぞ」

怒鳴りたいのを抑えているのがわかるマックスの低い声は、未来にとっては天から響いてくる救いの声に聞こえた。

ミーティングにはあと2人の捜査官、行動分析チームのポール・アンダーソンと特別捜査チームのウォーリー・クラークが加わり、総勢9名で開始された。

「では、捜査の状況だが」

改めて未来の紹介を済ませ、このミーティングがコードネーム「ティアーズ」という事件の捜査のためのものであることを説明した後、マックスがもう一度口を開いた。

「今日からメンバーも増えたことだし、おさらいを兼ねてもう一度全体像を見ていこうと思う。更新した報告書を送るから、手元のターミナルを確認してくれ」

その場のメンバーが各有各の専用情報端末の画面を覗き込む。すると、携帯ゲーム機の倍くらいある画面に、資料作成用ソフトで作られたドキュメントの頭を飾る、素っ気ないブロック体の題字が現れた。

「まずこの事件は、手口及び現場で発見された微物類の一致から、同一犯による連続殺人事件と断定されている。最初の被害者の遺体が発見されたのが、2年前の2039年7月上旬。場所はウエストバージニア州、ホワイトサルファースプリングス」

未来がマックスの進行を聞きつつスタイラスペンでドキュメントのページを次に進めると、事件の詳細が記載された報告書のページになった。

被害者はモイラ・マックスウェル、11歳の白人で女性。直接の死因は頸部圧迫による窒息と記されている。

未来は報告書に添付されている遺体発見現場の画像ファイルを広げてみて、思わず顔をしかめた。草むらの上に横たわっている遺体は姿勢があまりに不自然で、よく見なければどうなっているのかわからなかった。

長い髪を耳の下で二つに分けて結んだ少女は上半身が仰向け、下半身が上半身より斜め左にずれた位置でうつ伏せになっていた。

生前はさぞ愛らしかったのだろう顔は腐敗のために変色し、むくんでばんばんに膨れ上がっていて、目は糸のように細くなっていた。僅かに開いた口からは体液が流れ出したあとがあり、頬には黒っぽく、固まった血がこびりついている。

そして少女の小さな身体は文字通り、真っ二つに引き裂かれていた。

臍の少し上から下腹部にかけてが夥しい量の赤黒い血にまみれ、大量の蠅と蛆がたかっている。そのせいで、彼女の穿いているデニムが一体何色だったのか、見当もつかなくなっていた。黒く固まったデニムが覆うウエストの皮膚は引きちぎられたように裂けていて、痩せた腹部に収まっていた腸が地面にだらしなくこぼれている。

その下半身から伸びた血まみれの消化器官が、1メートルほど離れた場所に放り出された上半身をロープのようにつないでいた。

「モイラはロアノークの自宅で両親と喧嘩をして家から飛び出したが、夜中になっても帰ってこないし連絡もなかったため、その日のうちに家族から搜索願が出されている。4日後に遺体が発見されたが、自宅と遺体発見現場が離れているし、周辺で不審な人物の目撃情報もなかった。恐らく車で誘拐されて殺された後に、胴体を切断されたと思われる」

口を片手で覆い、画像を見つめたままやや青ざめている未来をよそに、マックスは淡々と先を続けている。

「確か、性的暴行を受けた形跡はなかったんだよね？」

先はあれほどふざけた口を利いていたジャクソンが、感情を交えない静かな口調で杉田に確認する。

「解剖結果では口腔内や膣、それに肛門から精液反応は出なかった。服からも体液は検出されていないし、発見時の着衣に乱れもない」

杉田が眼鏡を無意識のうちに指で押し上げると、マックスが頷いて先を続けた。

「そう。それが、この一連の事件での特徴だ。二人目の被害者の遺体が発見されたのが2040年1月、ヴァージニアのアビンドン。一人目の被害者とは性別も年齢も違うが、連れ去られて殺害された後に身体を切断された手口は同じだ」

未来はぎこちない手つきで、報告書のページを2件目の被害者詳細ページまで送った。

被害者は27歳の日系人、ギブスン・ハヤシ。死因は胸部の刺し傷による大量失血とされているが、遺体はモイラと同じくまともな形をしていなかった。

草むらに放り出された身体は胴体が切断されており、頭は爆弾に吹き飛ばされたかのように碎けて、頭蓋骨に混ざった黄色っぽい脳が露出している。顔はどこに目鼻があるか判別できないほどにまで潰された肉片となって、血の海に沈んでいた。

「ギブスンは妻とうまくいっていなくて1ヶ月ほど前から別居状態にあつたが、こちらも連絡が取れなくなったことがあつて、実家の家族から搜索願が出されていた。彼が死んだ後、彼の妻は50万ドルの保険金を手に入れている」

「その妻つても、結果的には喜んでたのかも知れないな。厄介者がいなくなつた末に、大金が手に入ったんだから」

マックスの声は相変わらず感情が込められないが、行動分析官らしくない感想でポールが口許を歪めた。すると、遺体の詳細や捜査の状況を一番把握している特殊捜査チームのウォーリーが、彼をじろりと睨んで口を挟んだ。

「保険金殺人の面からも捜査はしたが、元妻に怪しいところはなかった。それに離婚したがつていたのは被害者のほうだし、保険がかけられたのも5年以上前の話だ。ついでに彼女は今も独身で、恋人の一人もいないらしい。暮らしぶりも変わったところはない」

ギブスンの妻については捜査し尽くした、とウォーリーの薄いブールの瞳が語っている。

ポールとウォーリーは、二人とも30代半ばの白人だった。

痩せた身体にぼさぼさの金髪で無精髭を生やし、研究所にいることが多いポールのほうが、白いワイシャツに地味なネクタイで、やや神経質そうな印象だ。

ウォーリーは、明るい茶色の短髪がきつい天然パーマで頭に張り付いており、生え際が後退している。彼は国内のあちこちを捜査で飛び回るため、ラフなジャケットにデニムといういでたちで、好奇心旺盛そうな表情をしつつ、的確な状況分析をやったのける冷静さを持ち合わせているようだった。

彼らは戦闘チームの要員ではなく、CVC内部の共同捜査チーム代表者としてミーティングに参加しているのだ。

特殊捜査チームのウォーリーはもともと皮肉屋らしかったが、今はそれが顕著に出てきているらしい。短く縮れ気味の髪に指先を埋もれさせながら続けた。

「ギブスンには他に女もいなかったようだ。もちろん、この妻が犯人ということもありえない。彼女はロボットを家に持っていかないし、彼女の職場で大型のロボットを使っていたという事実もない。まあ、彼女がサイボーグだというのはなら犯行が不可能ということもないが」
「えっ、この事件って……ロボットが絡んでるんですか？」

現場の捜査官代表であるウォーリーがポールへ皮肉を重ねたところで、未来が驚いて顔を上げた。

「ええ。ミキはまだ知らなかったかも知れないけど、この事件は犯行にロボットが使用されている疑いが強いよ。一連の事件の被害者は全員が体の一部を切断されていて、そのどれにも切断時に刃物が使われた形跡がないの」

「遺体の皮膚が引つ張られたみたいに裂けた具合とか、骨折してる場所なんかを見ると、全ての傷口はこう……ねじ切られてることかわかってるんだ。胴体を引きちぎるなんて、人間の身体の大きさとか力じゃ不可能だからな。ロボットを相手にした立ち回りも予想されるから、俺たち戦闘チームも捜査に参加したってわけだ」

エマが答えたのに続いて、ジャクソンが両手で雑巾を絞る仕草を

やっつて見せる。

「……それじゃあ、ロボットのアームで遺体を掴んでねじ切ったってこと？」

「今のところその可能性が一番強いんだけど、それにはどうも不可解なところがあるんだよ。アメリカ国内で流通している重機ロボットでこんなことが可能なのは、せいぜい土木工用か道路工用のやつで、種類も限られる。けどそういうロボットは、人間の身体を潰さずに持ち上げることなんかできないんだ。建築や道路の資材は硬いからね」

「他の国から輸入されたロボットが使われた可能性はないの？」

未来が続けて投げかけた疑問に、戦闘チームのメンバーではロボットについて一番詳しいトリスタンも続けて答えた。

「多分それはないと思う。特殊捜査チームの捜査官たちが過去5年間の輸入ロボットの記録を全部調べて一体ずつ調査したけど、登録されていないものや行方不明になったものはなかったんだ。それに輸入されたものについても、安全対策の緊急避難用システムを組み込むからね。アームの内側にはセンサーがあつて、生物を掴むと停止するようになってる。もっとも、多少知識があるエンジニアならシステムを改変することはそう難しくはないんだけど」

トリスタンが一度息をついて、デスクの上で手を組み直してから未来の方を向いた。

「それから、遺体は恐らくロボットが掴み上げて遺棄しているらしいことがわかつてる。現場の土の地面にはロボットの足らしい、車輪の跡の一部が見つかつてるところもあるからね」

「全部の遺体がロボットを使って遺棄されてるの？」

「跡が全部の現場から出たわけじゃないから、そうとは言い切れない。でも、確率が高いと思う。今のところ、見つかった車輪の跡は同じものようだから。現時点ではこれが数少ない証拠の一つではあるけど、有力なものとは言えないかもな」

未来の疑問に答えたトリスタンの言葉にウォーリーが頷き、特殊

捜査チームの資料ファイルを見ながら補った。

「そして全ての遺体には、アームが挿んだと思われる箇所皮下出血があった。だから直接遺体を挿んでねじ切ったことは間違いないし、この事件での鍵になるとも言えるだろう。だがアメリカ国内で使用されている重機口ポットは、人間の身体を破壊せずにそつと持ち上げるなんて、器用な手作業ができるほど繊細にできてない。そうになると、違法に改造されたものが使用されている可能性が極めて高くなる」

「その通り。だから犯人は知的職業に就いている、もしくは就いたことのある……」

ウォーリーに次いでポールが行動分析チームの見解を述べようとしたところで、今度はマックスが口を挟んだ。

「まあ待て。それぞれのチームの捜査経過については、とにかく事のあらましを最後まで説明してから聞くようにする。ええと、残り3体の遺体が発見された場所はダイアスクンドにディストリクト、それからミネラル。全部ヴァージニアの街外れだな」

彼は、途中から困惑したような表情に変わった未来に考慮してくれたらしかった。手短に、残りの被害者と遺体発見状況を全員で簡単に確認していく。

3人目の被害者は、2040年6月中旬にダイアスクンドで遺体が発見された34歳の女性、セシル・ジョーンズ。プエルトリコ人の売春婦で、直接の死因は頸動脈断裂による大量出血だった。彼女は頭部を切断されていたが顔面はつぶされておらず、代わりに生前に鈍器で顔面を激しく殴打されて紫色に腫れ上がっていた。この顔面の打撲以外に目立った外傷はなく、首をちぎられた際に死亡したのだ。つまり、首をちぎられた時点ではまだ生きていたということになる。

4人目の被害者が当時20歳のヒスパニック男性で、フリッツ・ウッドエンド。2040年12月上旬に死体がディストリクトで発見されており、こちらは腿から下の両脚がちぎられていた。彼は上

半身を中心に20箇所以上の鋭利な刃物による刺し傷があり、そのうちの一つが心臓に達したせいで致命傷となった。また、彼は両腕の内側に刃物から身を守ろうとしてついた防刺創も認められていた。5人目の被害者はヘレン・ホワイト、17歳の白人女性で2041年10月上旬、つまりごく最近にミネラルで死体が発見されていた。彼女の死因は頭部の銃創だったが、肩から下の両腕と膝から下の両脚が切断されている。

「以上が、連続殺人事件の被害者だ。遺体発見現場の詳細な状況や死亡推定時刻は、各自報告書を確認してくれ。それから」

そこでマックスが顔を上げる。

「公表していない情報だが、それぞれの死体発見現場で壊れた人形が発見されている」

「人形？」

未来が怪訝そうな声を上げると、マックスが頷いた。

「報告書の最後のページに画像がまとめてある」

彼に言われた通り、未来はドキュメントを急いで最終ページへと送った。そこには5枚の画像が並べて貼りつけられており、それぞれの下に簡単な説明が記されていた。

画像の中心に写っている人形は「ジューン」という名前のアメリカ全土で売っている、柔らかいビニールでできた女の子用の着せかえ人形だ。が、画像のそれはいずれも服は着せられておらず、土で汚れた状態で放り出されていた。

更に、全てのジューンが無惨に壊されているのが一目でわかった。手や足がもがれているものもあれば、顔が外された上にぺちゃんこにされているものもある。

「その人形は、全て遺体の側に転がっていたものだ。そして次の殺人が起こると、被害者は前の現場で発見された人形と全く同じ状態にされている」

マックスの説明に、未来は息を飲んだ。急いで人形の画像のページを端末画面の隅に待避させ、それぞれの被害者の死体発見現場の

様子と見比べる。

モイラの事件で発見されたジューン人形は上半身と下半身が外されて、頭が踏みつぶされたようにひしゃげていた。ギブスンの事件では首が転がされており、セシルの遺体発見現場では引き抜かれた両足が胴体の上に重ねられている。フリッツの現場でのそれは両腕が外され、膝から下の両足は刃物ですっぱり切られているようだった。

そして最後、ヘレンの遺体の脇に置かれていた人形の首は辛うじて繋がっているが、丁寧に描かれた顔は塗装が剥げて酷く汚れており、頭部全体が凹んで原型を留めていなかった。

「じゃあこれは、犯人からの殺人予告だと？」

「そうとは言い切れない面もあるが、可能性は大いにあることを認めざるを得ない。そんなところだ」

未来の問いに苦々しく答えたマックスがデスクの上で手を組み直すと、報告書の写真を見比べつつウォーリーが口を開いた。

「しかし連続殺人にしちゃあ、手口にも被害者の選び方にも一貫性が全くないな。こういう犯人の特徴として同じ殺し方をしたり、被害者の人種が決まっていたりするもんなんだが」

「そう、その点が不可解だ。被害者の人種どころか性別も年齢も統一性がなくて、殺し方にも決まったパターンがない。恐らく奴に殺しに至るまでの筋道にこだわりはなくて、殺した後のの方が重要なんだろう。殺害は、あくまで相手を支配するための手段でしかないってことなんじゃないかと思う」

ウォーリーの疑問に、ポールが無精髭だらけの顎を指先で撫でる。ウォーリーは特別捜査チームの責任者になるぐらいなのだから、捜査官としてかなり優秀な人物のはずだ。行動分析が専門でなくとも、ある程度犯人像に共通点が見いだせるところはあるのだろう。

ポールが述べたのは行動分析チームの見解だったが、彼の口調にもどことなく訝しんでいる響きがあった。

「犯人の欲求を満足させるのは、死体を破壊して相手の全てを支配

する行為そのものにあるんだろう。屍体性愛ネクロフィリアの一種だと言えなくもない」

「ネクロフィリアって、確か異常性愛の一種でしたっけ？」

未来がアカデミーの講義内容を思い出しながら、首を傾げるような仕草をする。

「簡単に言うと、死体とセックスすることだ。まともな神経の奴がすることじゃないよな、まったく。冷たくて硬い女の穴なんざ、ぞつとする」

ウォーリーが吐き捨てると、ポールが続けて口を開いた。

「概ねウォーリーの言う通りだけど、レイプしながら相手の首を締め殺したり、直接の性行為以外でも、死体に何かすることに對して性的な興奮を覚える場合は、ネクロフィリアの一種と考えられる。この事件ではその後者に当たるんだ」

気味の悪い話だが、日本の事件でも似たような事例がないわけではない。年に一度くらいの割合で、そういった猟奇的な事件のニュースが週刊誌の見出しを一色に染めることがある。顔をしかめた未来がポールに頷いて見せると、彼は眉の辺りにこぼれてきた艶がない金髪を払いのけつつ、犯人像の分析を続けた。

「それから遺体を遺棄した場所についてだけど、ちよつと探せば見つかるような場所を選んでる辺り、自己顕示欲も強い人物だとも推測できる」

ポールは爪でコンコンと端末の画像を軽く叩いた。

「犯人の行動の源は、強烈な空想だ。他人を痛めつけて支配すること、かなり昔からたとえようもない性的な興奮を覚えていた。けどそんなことは世間一般に許されることではないし、本人もそれは理解してるから、普段は何食わぬ顔で生活してる」

「そういう連中は第一印象が両極端で、見るからにおかしいか、全くそんなことをしでかすように見えない、大人しそうな奴のことが多いんだよな。まあ、俺が今まで担当してきた事件での感想だけだな」

溜息半分でウォーリーが口を挟むが、他のメンバーは押し黙っている。沈黙があまり好きではないのか、ポールは更に続けた。

「で、そういう強烈な欲求が抑圧されているから、大きなストレスを感じるようなことがあったりすると、それがきっかけになって爆発する。そうなったらどうしようもなくなつて、犯行に走るというのがパターンなんだ」

「大きなストレスつていうと、仕事をクビになつたりとか？」

未だ報告書を細かく見ていた未来が、再び髭だらけの顎を掴んで眉根を寄せながら続けているポールへ視線を投げた。

「そうだな。親しい身内を亡くしたり、仕事で昇進したりするのもストレスになる。あるいは、鬱積してきたものが妻や子どもと喧嘩したり、上司に叱られたり、お気に入り入りのフットボールチームがライバルチームにこてんぱんにやられたり、犬に吠えられたりするよ。うなちよつとしたことで爆発したのかも知れない」

特殊部隊CVC - 2 - (後書き)

。。。。長さの関係上、ちょっと変なところで場面を区切ってしまいました。
すみません。

「そんなことで、人を殺したりするようになるの？」

未来が再び疑問を口にする、ポールは敵めしい表情を崩さずに頷いた。

「人間はストレスがたまってくると、本当に些細なことが引き金になって爆発することがあるからな。一般の殺人事件の犯行のきっかけだって、ちよつとした口論から発展していくことが実に多いんだ。ミキだって、苛ついているときに誰かから気に障ることを言われて、怒鳴ったことぐらいはあるだろう？」

「そりゃ、まあ……」

未来がちらりと杉田を見やると、ポールはゆるんだネクタイを片手で直しながら端末の画像を次々と切り替え、遺体発見現場の画像にざつと目を走らせた。

「死体発見現場の様子から見ると、処刑とか殺人の儀式とか、そういった類の感情も読み取れる。抑圧された感情を被害者にぶつけて誇示し、自分の存在を世間に知らしめてやろうとしてるんだ。ただ……」

「ただ、何だよ？」

ジャクソンが焦らされているように、ポールの先を促す。そろそろ、ポールの講義じみた口調に退屈してきているのだろう。

「どうも犯人の内面に、色々矛盾するところがあるみたいなんだよ。この事件は、自分の欲望を実現させるためのセックス殺人的な要素が強いことは間違いないんだが」

「そうね。確かにこういふ事件で一番多いケースのような、犯人の異性に対する激しい怒りみたいな感情を被害者にぶつけているのは、ちよつと性質が違うような気がするわ」

そこでエマが初めて口を開いた。

「そう言えば、エマは法医学もやってたんだっけ？」

「少しだけね。昔、検死官をやったこともあるし。ただし、プロファイリングはちょっと講義を受けたことがある程度よ。あくまで私個人の感じたことを言っただけ」

トリスが思い出したようにエマの方を向くと、彼女は自然と窘めるような口調になった。

「でも、少し知識があるくらいの貴女がそう感じるくらいに不自然なところがあるのなら、恐らくそれは正しいと言えると思う」

一旦エマの瞳を覗いたポールは、彼女が眼鏡を押し上げて視線を逸らしたのを合図にまた、端末の画面を見つめた。

「例えば死体の損壊や、ジェニー人形みたいに象徴的な遺物を残したり、被害者のタイプが決まっていなかったり、殺人の方法がばらばらだったりするのは、行き当たりばったりで犯行後何も対処をしない、無秩序型の犯人の特徴なんだ」

「無秩序型か……」

未来が、再びアカデミーでの講義内容を頭の隅から引つ張り出しつつ呟いた。

確かプロファイリングの講義で、殺人のタイプは無計画で現場に多数の証拠を残すことや、自分の犯行であることがばれるのを全く気にかけない無秩序型と、綿密な計画を立てて被害者を選び、周到に準備をして犯行に及ぶ秩序型、両者の特徴の双方を併せ持つ混合型に分類されると習った。

もちろんこれは、時の犯罪心理学や社会学の研究者たちが犯罪者たちに面接を行い、統計学的なデータを取った上で、ある程度の傾向を示したものに過ぎない。だから絶対にそれが正しいということはないが、犯罪捜査の上である程度の指針を打ち出すため、必要なものにもなっているのだ。

未来は続いて秩序型の例を説明し出したポールの言葉に、注意深く耳を傾け続けた。

「……しかしその一方で、証拠になるようなもの……例えば指紋とか精液とか、そういうものは何も残されていないだろうか？」

「確かにな。どの被害者にも犯人の体液はついていなかったが、被害者全員は酷い出血を伴う傷を負ってる。服や皮膚から、潜在指紋の一つくらいは検出できてもおかしくはないが」

ウォーリーが、ポールとさり気なく目を合わせて頷いている。

「そうなんだ。恐らく犯人は、最初から指紋を残さないように細心の注意を払っているか、被害者を殺してから死体を処理するまでの間に、証拠隠滅を図っているんだろう」

自分のハンドターミナルの画面を切り替えたポールは、フリッツの検死結果に視線を走らせた。

「それと、被害者はフリッツ・ウッドエンドを除いて防御創がない。ここからは犯人が被害者をコントロールして、抵抗できないようにした上で殺害していることがわかる。周到に準備をして綿密な計画を立てた上で犯行に及んだような、非常に秩序だった印象があるんだ」

「犯人の気まぐれで、犯行のパターンを変えているだけじゃないんですか？」

未来が両手を組んでその上に顎を乗せ、素直な疑問をポールに投げかける。

「うん、勿論その可能性もある。フリッツだけに防御創があるのも、何か不測の事態が発生して、激しく抵抗されただけだったのかも知れないしね」

「被害者が、何か犯人の逆鱗に触れるようなことを言ったとか」

未来に続いてウォーリーが発言し、ポールの方を向いた。

「もし犯人が被害者の遺体を破壊することにしか興奮しないのなら、その前段階のことはどうでもいいことになるな。だから被害者の人種や性別にもこだわっていない、と言うのなら、それはそれで筋が通るかも知れない」

「そうかも知れない。ただ、いずれにしても言えるのは、犯人は頭が良くて狡猾で、慎重な人物だったことだ」

ポールが犯人像の一つの形を導き出そうとしたところで、ジャク

ソンが怪訝そうに眉根を寄せた。

「死体を見つかりやすい場所に捨てたり、妙な人形を手がかりとして残しているのか？」

顔を上げたポールと視線が合ったところで、ジャクソンは続ける。「本当に頭が良くて警察に捕まらないようにするなら、死体は絶対に見つからないように処分したり、隠すなりするんじゃないのか？それに被害者だって、もっと身元がわかりにくそうな奴だけを狙うようにするだろう。少なくとも、俺だったらそうするぞ」

「それが普通の殺人事件とは違うところなんだよ、ジャクソン」
大げさに首を振って、ポールは溜息を一つ挟んだ。

「犯人には、絶対に捕まらないという自信があるんだろう。現実問題として、最初の殺人からもう2年も経っているのに、警察やFBIはまだ決定的な手がかりは何も掴んでいない。奴は殺人を通して自分の価値を世間に認めさせるために、逮捕されるか自分が死ぬかするまで人を殺し続けるかも知れないんだ」

不快なポールの分析を聞いて、今までに一度も発言していないバーニーが顔をしかめた。年齢の割に皺が多く寄った顔の眉間に、更に深い筋ができる。

「それにあの人形は手がかりには違いないけど、あそこからは指紋も出なければ、犯人特定につながるような証拠は何一つ出てこない。あれは犯人のマーキングであると同時に、僕らを挑発する姿勢を示すものでもあるんだ。ここまでやっているんだから捕まえてみる、とね」

「反吐の出る最低野郎だ。これじゃ、俺たちは世間から後ろ指を指されっぱなしだな」

ポールが行動分析チーム全体の見解でもある描いた犯人像を受け、ウォーリーは端末の画面から顔を逸らして吐き捨てた。

そこへ、未来が捜査情報を頭の中で整理しつつ質問を投げかける。「他に何か現場に残されてなかったんですか？確か最初の説明では、発見された微物の一部に一致が見られたってことのようにですけど」

「ああ……そうだな。何種類かの繊維と被害者の衣服から検出された植物の種、砂利の成分、それに動物の糞。それと全員から出た訳じゃないが、変わったところでは野菜の皮と食品の屑、ホチキスの芯くらいか」

「食品に……野菜の皮と、ホチキスの芯？」

捜査情報に一番詳しいウォーリーから答えを受けた未来は、意外な答えに目を丸くした。

「そう。他の微物類はさして珍しくもないが、この3つについてはちよつと驚きだよな。こいつは、5人中3人の被害者の傷口から採取されたものだ」

ウォーリーは端末を操り、微物類に関するドキュメントのページを開いた。

「ええと。詳しくは、玉ねぎの皮とキウイの皮の一部にブロッコリーのかけら。クッキーの粉にオーツ。ホチキスの芯は、スリーエム社のものだってことはわかってる」

「どれも、一般的なものばかりですね」

決定打と言うには内容が薄い検出物に、未来の声の調子が落ちる。「被害者は、ごみ捨て場みたいところで殺されたのかな？」

ジャクソンが両腕を組んだところで、ウォーリーは顔を上げた。

「いや。それなら誰のかわからない髪の毛とかティッシュの屑とか、微物担当の連中が嫌になるぐらいの別なごみがもつとくつついてるはずだ。だからもう少し違う場所だろうというのが、俺たちの見解だ。今はずつと、事件現場周辺の食品倉庫を調べてる」

聞くだけでげんなりするような捜査内容だ。

ヴァージニア州全体で、一体何万軒の食品倉庫があるのだろうか？そして、玉ねぎとブロッコリーとキウイを売っていて、伝票をまとめるのにスリーエム社のホチキスを使っているところなど、そのほぼ全てに当てはまるのではないか。

だが、こういった地道な捜査が実は一番大切だった。例え得られるものが宝くじに当たるよりも低い確率でしかないとわかっていて

も、現場に残された手がかりと同じものは、どこかに確かに存在するはずなのだ。

未来は特別捜査チームのメンバーが背負う苦勞を考えると、思わず低めの天井を仰がずにはいられなくなった。

「傷口にごみがくつついてるってことは、被害者は身体をちぎられてから床の上に倒れたか、引きずられたかしたんだな。怪しそうなスーパールの倉庫で、片っ端からルミノールをぶっかけてやりたくなら」

「殺人現場がはっきりと特定できれば、是非やってみたいところだな。夜になればきつと、それは見事なミルクィ・ウェイが見えるだろうさ」

ジャクソンの推測に頷くと、ウォーリーは再び報告書の画面を睨んだ。

ルミノールは血液中のヘモグロビンに反応し、暗い場所で青白く発光する化合物だ。古くから科学捜査で使用されている薬品で、現場の血痕が洗い流されている場合などは特に有効とされる。一度床や壁に染み込んだ血液を洗浄だけで完全に除去することは不可能であり、ルミノールは分解が進んだ古い血液のほうがよく反応するのだ。

「でも、結局は地道に捜査していくしかないわけですね。やっぱりさしあたっては、食料品倉庫の捜査を続けることですか」

「ミキには途方もなく思えるかも知らんが、この事件はまだましな方だぞ。砂漠の真ん中で白骨化したた死体が見つかった場合なんぞ、何もなさすぎて泣けてくるくらいだ」

「まあ、この事件はまだCVCの担当になったばかりだからね。僕らで捜査を進めれば、もっと色々見えてくるようになるさ」

ウォーリーに続き、ポールも両肩から力を抜いて椅子の背もたれに体重を預けた。

「では、特殊捜査チームは引き続き倉庫を中心に調べてくれ。戦闘チームでは主にジャクソンとミキで死体発見現場を回って、何か取

り残した手がかりがないか調べることにしよう」

最後にマックスが頷いて立ち上がると、他のメンバーも端末の電源を切り、机の上を片付け始めた。未来も、背が高いメンバーたちに埋もれるようにしながら立ち上がったが、どこに行けばいいのかわからず視線が泳いでしまう。

「ドクター・スギタは、ミキをオフィスに案内してやってくれ」

彼女がきよろきよろしているのを見て、マックスが杉田を促してくれた。

「じゃあ未来。一通り教えることがあるから、一緒に行こうか」

杉田の声は優しくかったが、フレデリックスバーグの自宅にいるときと違ってどことなく他人行儀な響きだ。

その様子にくくと頷いて、未来は白衣姿の背中のことについていた。

「へえ。ここが今日から私の部屋なんだ」

未来が杉田に案内されて入ったのは、スチールの事務机と小さな本棚が奥にぼつんと置かれた殺風景な部屋だった。地下にある古い壁紙のオフィスには窓がなく、天井は低い、その分電灯は明るい。

部屋の広さは10畳程度だろうか。個人用オフィスとしては十分な空間がある。アイボリーの机にはディスプレイとキーボードが置かれ、やや型式の落ちたデスクトップ型のパソコンが脇にあった。

「こいつの初期導入はもう終わってるから、あとは仮想端末接続用のソフトをインストールして、個人パスワードだけ設定すればいい。マニュアルがそこに置いてあるから」

「事件の情報も、ここから閲覧できるの？」

「ああ。CVCが受け持つてる事件の情報は、ポータルサイトを通れば全部見られるようになってるよ。内容の編集は、自分の担当以外はできないけどね」

未来は杉田が指し示してくれた紙ファイルに挟まった薄いマニュアルに手を伸ばし、早速モニターとパソコンの電源を投入した。

しかし画面に落とされた黒い瞳は、やや萎れているように見える。

「どうかした？何だか、いつもみたいなの元気がないように見えるけど」

「……うん」

未来は落ちてきた前髪を指で梳きながら呟いた。

「もう大分慣れたつもりだったんだけど……あんな酷い事件もあるんだなって」

未来は、ティアーズの事件がヴァージニア中を騒がせているのは地元のニュースで知ってはいたが、報道されていない詳細を知ったのは今日が初めてだったのだ。

「そうか。フレデリックスバーグ駐在所の管轄外での事件だから、未来は今まで全部を知らなかったんだよな」

「うん。そう言えば、戦闘チームの他のみんなもそんな感じだったけど……先生は知ってたの？」

「ああ。戦闘チームにこの事件の担当が正式に回されたのは先週だけど、僕はDNA分析チームとの兼任だからね。前から現場の遺留品を検査してるし、アジア人男性の連続殺人事件も担当してるよ。」

そっちは、戦闘チームの担当じゃないけどな」

短く息を吐くと、未来は椅子を引いて座った。

「ティアーズの現場写真見て、ちよつと参っちゃって。暫くは、夜に眠れなくなるかもね。早く慣れないと」

「いや、無理に慣れる必要なんかないよ」

「え？」

OSが起動しかけているモニターの白い文字を見つめていた未来が、思い詰めたような杉田の口調に思わず顔を上げた。

「こういうことに慣れるっていうのは、それだけ被害者の痛みに鈍感になるって言うのと同じことなんだ。でもそれは、突き詰めれば感情の働きを鈍くして、誰かを思いやることを……」

「わかってる。大丈夫だよ、先生。被害者に感情移入し過ぎないよ。うに気をつけて、ストレスもちゃんと何とかできるよに考えるから」

未来は杉田の苦しげな色を僅かに帯びた言葉に、落ち着いた口調で返した。

特別捜査官となつてから3ヶ月間、彼女は悲惨な事故や殺人事件の犠牲者の死体をそれなりに見てきたし、遺族がモルグで遺体の身元確認をする現場に立ち会つたこともある。

モルグは冷たい壁に囲まれた、甘つたるい消毒薬の臭いと死臭に満ちている施設だ。その例えようもない無感情さは、人をあらゆる優しさから突き放すように、訪れる者に対して残酷な現実を見せつける。

愛する者を奪われた悲しみの慟哭に胸を抉られ、加害者に対する怨嗟の聲が耳に響くその度に、人が持つ多くの負の面を痛感させられた。

残された者に、お気の毒です、としか言うべき言葉を見つけられないのが辛くて、一刻も早くその場から立ち去りたいと感じたことも、一度や二度ではない。

しかしだからこそ、彼らの役に立ちたいという気持ちも持ち続けることができるのだ。医者である杉田が患者のために全力を尽くすのと、同じ気持ちなのではないかとも思う。

未来は静かな調子を崩さず、目の前の優しい青年へ言葉を紡いだ。「闇と戦う者は、その深淵から覗き返してくる邪悪な瞳があることを常に忘れてはならない」

「……え？」

「アカデミーで、プロファイリングの講義の時に口を酸っぱくして言われてたこと。凶悪な事件を扱うことで、捜査官はその影響を受けて、普通じゃ考えられないような精神的ストレスを抱えることになるって。だから、それとうまく付き合っていかなきゃならないんだってさ」

使い込まれた椅子を軽く軋ませて、未来は再びパソコンの方を向いた。

「私、自分が強くないってことぐらいわかってる。だからこそ、何

とかコントロールできるようになりたいて思ってるんだ」

呟くように唇を動かしていた未来の腕に、杉田がふつと肩の力を抜いてから手を触れた。

「あまり一人で抱え込むなよ。僕だっついてるんだから」

「うん。先生もね。今度の休みには、どっかに出かけよう……」

未来が杉田の暖かい手に自らのそれを重ねたとき、ノックもなしにオフィスのドアが荒っぽく開けられた。

「ミキに、ドクター・スギタ。今日この後のスケジュールだが」

慌てて離れた二人の様子など目もくれず、入ってくるなりきびきびと用件を告げたのは、戦術コンサルタントのバーニイだった。

「10時から模擬戦闘訓練だ。それが終わってから、各々のタスクに手をつけるようにしてくれ」

「模擬戦闘訓練？僕もですか？」

杉田が首を傾げると、バーニイは白い手袋を嵌めた手に持った書類を確認しながら頷いた。

「ドクターは、俺たちと一緒にデータ収集だ。ミキは、ハヤテを着てからホーガンズ・アレイの指令所に来い。訓練用の武器を渡して、注意事項を頭に入れておいてもらわなきゃならん」

「ハヤテ（疾風）」は、未来の専用パワードスーツへ新たに与えられたコードネームだ。武装した上で模擬戦闘用の市街であるホーガンズ・アレイに来いと言うのだから、本格的にやる予定なのだろう。

渡米して以来、完全武装しての訓練はやっていない。未来は、身体に自然とアドレナリンが巡り始めたことを感じて軽く身震いした。「わかりました。遅れずに行きます。先生、手伝ってください？」

瞬く間に戦士の顔になったアジア人の若い娘が、杉田の方を振り返る。

その凛々しさに一瞬見入ってから、彼は眼鏡を直し頷いた。

ホーガンズ・アレイは、FBIアカデミーが有する広大な敷地の一角にある市街だ。綺麗に舗装された道路に沿って雑貨屋やレストランに劇場、モーターなどが並び、銀行の裏手に現金輸送車がたまに来る街並みは、アメリカに散らばった小さな街の典型である。

とは言っても、ここに普段人は住んでいない。よく見ると、道路には普通に運転していたのでは決してつかない車のタイヤ跡が斜めや円形に走り、建物の壁は古いペイント弾のけばけばしいオレンジ色で汚れている。

ここはアカデミーの候補生や、場合によっては陸軍や海兵隊の兵士たちが実戦さながらの訓練で使用する半マイル（約800メートル）四方の箱庭だった。数ヶ月前の未来も、プロの俳優が演じる銀行強盗に習いたてのドライビング・テクニクで追いつき、武装を解除させ、初めて手錠をかけた場所でもある。

街の入口に当たる煉瓦造りの門の横に、指令室の名目で3階建てのみすばらしいプレハブ小屋が構えられている。その横に杉田が運転するピックアップ・トラックが止まると、ハヤテを着込んだ未来がヘルメットを抱えて荷台から飛び降りた。

彼らが10時50分にプレハブ小屋の一階のドアを開けると、ジヤクソンとマックスを除いた戦闘チームのメンバーが、雁首を揃えていた。

「へえ！これが噂に聞く、日本の先端技術を集めた『ハヤテ』か！」
蒼い科学の鎧で武装した未来がドアを開けて杉田と共に入ってくるなり、トリスが歓声を上げた。素顔だけを晒している未来は、首から下の全てが硬質な輝きを放つ金属と、滑らかな人工繊維に覆われている。外見がほぼロボットだと言っただろう。

杉田にとっては見慣れた未来の姿だが、CVCメンバーが完全武装の彼女を目にするのは初めてだった。

「ジャクソンは？まだ来てないの？」

「彼なら、もう奥で待機してるわ。『オーデイン』を着てね」

ヘルメットを脇に抱えた未来が戸惑ってきよるきよると室内を見回すと、エマがクリップボードを胸に抱え直しつつ窓の外を向いた。

「オーデイン？」

「ジャクソンが着てるスーツのコードネーム。貴女のハヤテと同じよ。見た目やつくりはかなり違うけど」

「オーデインか、確か北欧神話の神様でしたよね。強そうな名前なんだ」

微笑を浮かべたエマが、素直な感想を口にした未来に笑いかけてくる。

「あら、ハヤテだってかなりのものじゃないの。普通その状態の貴女を見れば、誰も勝てるって言う気がしないと思うわ。スーツの材質はチタン？随分頑丈そうに見えるけど」

「ええ。実戦では、9ミリ口径相当のガトリング砲をフルオートで浴びせられても、数秒間は大丈夫でしたよ。ちよっとは痛いけどそれだけで、怪我はしませんでした」

「ふうん。それなら、耐久度はオーデインよりもかなり高いことになる。流石は、軍事用に作られたスーツだなあ。装甲も厚いし、関節部分の露出は最小限。首から顎にかけての急所まで、しっかりカバーできてる。日本企業らしい、細部まで行き届いた配慮がある。実に見事だ」

未来の返答に対し、トリスはハヤテの細部までを頭に刷り込もうとするかのようにしげしげと見つめてくる。

ハヤテは、戦場で戦うサイボーグ専用の装甲強化服として開発されたパワーダースーツだ。そのためチタン製の装甲は厚く、手榴弾や狙撃用ライフルの銃弾のような対人兵器からはほぼ完璧に防護してくれる。着用者の筋力も10倍程度に増強し、視覚や聴覚といった感覚能力も全面的に増幅するのだ。

更にこれも専用の武器である12.7ミリアサルトライフルと、

35ミリ機関砲という2種類の重火器を装備すれば、単身でも軍の一個中隊に相当する戦闘力が期待できる。

加えて、通信が確保できればリアルタイムで視覚の映像を外部に送信でき、状況を見ながら仲間との連携が確実に取れるのも強みだ。まさに戦場を縦横無尽に駆け抜け、確実に軍務を遂行するための能力を秘めた科学技術力の結晶と言えるだろう。

それでいて流線型を多用した華麗とも言えるフォルムに、トリスは嘆息を漏らした。

「トリス、あまり事前情報を漏らすような感想は控える。それより早く訓練用の銃をミキに渡して、ターゲットを仕込んでおけ」

そこへ、無愛想にバーニイが低音の言葉を割り込ませた。広い背中は壁面にずらりと並んでいるモニターを調整するのに忙しそうで、皆の方を振り向きもしない。

「イエス・サー、指令殿。ミキ、ここではこの特殊警棒と、銃はこれを使ってくれ」

「……これが、訓練用の銃？光線銃を使うの？」

トリスに差し出した警棒とホルスターとを受け取った未来は、ホルスターに差し込まれた拳銃の方を確かめてやや高い声を上げた。

黒い金属製の訓練用光線銃は、44口径のセミ・オートマチック拳銃と同じくらいの大きさと重さがある。AWPでは威力を殺いだアサルトライフルに火薬を減らした実弾を使用していたため、彼女にとっては新鮮な驚きだった。

「光線銃を使うのは初めてか？」

「あるのは知ってましたけど、実際に使うのは初めてです」

胡散臭そうにバーニイがちらりと視線を未来へ送ると、彼女は銃を眺め回しながら答えた。確か、日本でも警察の特殊部隊であるSATの訓練では、同じタイプの光線中が採用されていると聞いたことがある。

「安全装置を外すと、電源が入るようになってるんだ。あとの扱い方は、普通の銃と同じだと思ってきていい。でもそいつを使うに

は、光弾に反応するターゲットをつけないとだめなんだ。これをハヤテに貼るから、ちょっと待ってくれ」

言うが早いのか、トリスがズボンのポケットから直径5センチ程度ある黒っぽいシールの束のようなものを取り出して、未来の後ろに回った。

「枚数が多いから、誰か手伝ってくれる？」

「私がやるわ。ドクター・スギタもお願い」

エマが二人に近寄りながら、杉田にも声をかける。未来は短くたたまれた金属の警棒を腰に下げ、光線銃を右の太股の装甲に仕込まれた隠しホルスターに収めてから、皆の作業がしやすいように両腕を肩の高さまで上げた。

「それがこの光線銃のターゲットになるの？」

「そう。それぞれのダメージ情報が銃を経由して、専用のサーバに送信される。そこで全体のダメージ量を計算する仕組みなんだ。それだけじゃなくて、直接の打撃で与えられたダメージも計測できるようにしてる」

トリスが得意げに説明する横で、エマと杉田もシールの表面に書かれた配置場所に従い、黙々とターゲットをハヤテの表面に貼っていく。少なくとも、腕一本に対し5枚以上はつけているだろうか。全てが設置し終わると、まるで全身に黒い水玉模様がペイントされたかのようなだった。

「なんか、変な感じ」

抱えていたヘルメットまでが水玉模様にされているのを見て、未来が口を尖らせる。

「でも、普通は顔に直接貼ったりとかするんだぞ？それに比べりゃ、かなりましだと思うけどね」

トリスがにやにやしながら言うと、未来の仏頂面に拍車がかかった。

「……で、今回の訓練って、何をやるんですか？まだ詳しく聞いてないんですけど」

「デスマッチだ」

「え？」

バーニイの一言に、アンダースーツのフードを髪の毛の生え際まで引っ張り、長い髪をたくし込んでいる未来の手が一瞬止まった。

「ジャクソンも、オーデインにターゲットをつけている。各自のスーツの耐久度が限界に達したと見なされるまで、存分に戦ってもらおう。銃は44口径のマグナム弾相当の威力だとして計算する。弾は16発で打ち止めだから、その後は格闘戦だ」

ようやく身体を振り返らせたバーニイが、杉田から呼気マスクを受け取って身につけている未来の仕草を目で追いかけた。

「ただし、実際の現場で使用する以外の武器は使わない。お前たちが今回持てるのは、その光線銃と特殊警棒だけだ」

「アサルトライフルも、ナイフも使わない？」

「当然だ。いいか、ここは戦場じゃない。大勢の一般市民が暮らす街だ。それを常に忘れるなよ」

未来の低い声に対するバーニイの言葉は抑え気味で、そして鋭い。「建物の内部に入って戦うのは？」

「最初から窓が壊れているところや、ドアがないビルは許可する。もしそれ以外を壊した場合は減点対象だ」

「……わかりました」

未来は口でそう答えたものの、やりにくさを感じずにはいられなかった。他の者も演習で使用する場所なのだから、なるべく壊すなということなのだろう。

彼女がジャクソンのオーデインを見たことがないように、ジャクソンもまたハヤテを見たことがないはずだった。スーツそのものの強度に差はあれど、使用する武器同じで、条件としては互角である。

この訓練が意味するところは、二人を戦わせることでその基礎的な能力を見ることにある。戦えばお互いの癖や特性もわかるし、弱点を補い合うにはどうすればいいのかといった、今後の課題も見

えてくる。

何と言っても、未来とジャクソンは以後行動を共にするバディー（二人組）だ。不要な危険を招かないために、相手のことはよく知っておく必要がある。

ならば、気遣いは無用だ。

バーニイが言ったとおり、遠慮なく戦うことにしよう。

得意のナイフコンバットやアサルトライフル、アサルトライフルにナイフを取り付けたバヨネットを使用する戦術が封じられるのは物足りないが、与えられた武器を使いこなすのも戦闘員に必要な技量の一つだ。

未来は特殊繊維でできた黒いフードの中に髪をまとめてマスクをつけ、頭をヘルメットに押し込むまでの短い間に腹を決めた。顎の上までを覆うハヤテ本体の、無数にあるケーブル結線部にヘルメットが触れ合うと、細い線の全てがコネクタで自動的に繋がる。かちり、と小さく金属的な響きが耳に届いた。

「ミキは門のところからスタートだ。何かあるときは無線で連絡する。外に出てから一度、こちらを呼ぶように」

「了解」

バーニイが最後まで不愛想な態度を崩さないのと同じように、未来もまた事務的な返答に終始した。蒼い金属に覆われた指先で左顎の下にあるセンサーに触れると、しゅつと軽い音がしてフェイスガードが飛び出し、呼気マスクの上を覆う。仕上げて右側の顎の下にあるセンサーに触れ、ヘルメットのバイザーを下ろした。気圧調整のためにマスクの中の空気が少し抜かれて、視界が真っ黒になる。

それも一瞬のことで、すぐに眼前のモニターに視点カメラの映像が映し出されてヘルメットの内部が明るくなり、様々な電子部品が起ち上がる駆動音で満たされていた。

人工的な音と光に全身が包まれて外界から遮断され、戦うためだけの要素が身体の中をニューロンのように駆け巡り、普段使っていない感覚が隅々まで呼び起こされていく刺激的な感覚。

一人の人間が戦士という別のものに変わっていく実感が、こころよい。

日本を離れて以来久しぶりに味わう、神経へ直接響いてくる興奮だった。

「じゃあ、位置につきますから」

ヘルメットに内蔵されたマイクに繋がった小型スピーカーが、未来の声を指令小屋にいる戦闘チームのメンバーたちに伝える。彼女は力を入れすぎないように細心の注意を払ってプレハブの床を歩き、ドアを開けた。靴の裏は大きな音がしないよう、金属板の上にも一枚特殊な樹脂が貼られて加工されている。ホーガンズ・アレイの舗装道路を意識せずに歩いて、派手な足音が響くことはなかった。彼女が足を踏み出すその度に、ハヤテの鈍く輝く装甲が秋の陽光を埃っぽい空気の中へ抑え目に跳ね返す。煉瓦づくりの門の脇まで来ると、未来は通信用に切り替えたマイクに向かって言った。

「門のところに出ました。私はもうスタートしていいですか？」

「ああ。今、ジャクソンにも開始を伝えた。お前たちの様子はこちらで全てモニタリングしているが、基本的に行動を指示することはない。行け」

「了解」

バーニイとの平坦な会話に、未来は頷いた。腰の装甲の陰に指を差し入れると、右脚の隠しホルスターが開いて銃のグリップが覗いた。デザートイーグルに比べ、やや小振りなそれを掴んで両手に構えてから、未来は聴覚の感度を上げた。

遠くのほうからだろう、装甲車らしいキャタピラの音が土を削り、号令の音が空気を震わせているのがわかる。加えて、様々な方向から複雑に響く人の話し声や足音が包み込んでくるように聴覚を刺激してきた。

そこから徐々に感度を下げていき、足音に近い調子にのみ意識を集中させる。すると、明らかに普通の靴音とは質が異なった鋭さを持つものが、程近い場所から広い空間に散っていつているのがわか

った。

「……あつちか」

呟いてから踵を僅かに上げ、未来は左の路地へと走り出した。小さなスーパーマーケットと倉庫に挟まれた狭い道に入り、スーパーマーケットの屋上に飛び上がる。そこから更に、3階建ての劇場へと飛び移った。

先に捉えた足音は、まだ追跡したままだ。恐らくジャクソンもこちらの動きを探っているだろうが、建物の間から響いてくる足音の早いリズムは崩れていない。反響の具合から狭い路地を頻繁に曲がっているのはわかるが、音を特に抑えようと意識している様子はなさそうだ。

未来は徐々に近づいてくる音に向かい、再び走り出した。低いアパルトメントや雑居ビル、レストランの屋上に次々と足をついてはまた別の建物に跳ぶことを繰り返す。

「80キロのハヤテをつけてるのに、あの身軽さを保っていられるのね。日本で戦ったときは、更に専用装備を持っていたんでしょ？」

モニター画面の中を影のように横切っていく未来のシルエットから目を離さずに、指令室のエマが低い声で漏らした。無意識に頷きながら、彼女の隣で杉田が答える。

「ええ。12.7ミリアサルトライフルに予備の弾丸、それと35ミリ機関砲を同時に装備したこともありました」

普段のやかましさのかけらも見せないトリスが、杉田を挟んだエマの反対側で肉付きのいい両腕を組む。

「まるで走る砲台だな。でもあの動きは、アクション映画に出てくるニンジャみたいじゃないか」

「未来は、敵地における偵察と隠密行動、破壊工作に最も適した設計になっているんです。日本での訓練内容も、主に対テロを意識したものになっていました」

「だからハヤテなしでも、テロリストたちを叩きのめすことができ

たんだな。強化された感覚を頼りにして敵の位置を探って、普通の兵士では考えつかないような位置から正確な攻撃を行い、反撃から身を守る……なるほど」

顎に指先を当てたトリスの声は、心なしか警戒するような色を帯びていた。

エマ、杉田、トリスの3名は、バーニイの後ろに置いた折り畳み椅子に並んで座っていた。前にいるバーニイは、壁一面にずらりと並んだモニターの目の前に据えられている椅子に腰を落ち着けている。

戦闘時に司令官の役割を果たすバーニイは、ジャクソンと未来へ別々に通信ができるレシーバーをつけ、押し黙ってモニターを睨んでいる。その黒い瞳は鋭く的確に、二人のサイボーグを視界の中心で捉え続けていた。彼が時折専用の端末に折り畳み式のキーボードでタイプすると、薄手の手袋に包まれた金属の義手が硬い音を立てる。

その時、モニターに映った未来が足を止めた。ホーガンズ・アレイの真ん中よりもやや北に位置した雑居ビルの屋上で拳銃を片手に構え、下に向けている。

その銃口の先に特に変わった点はなかったが、彼女にはすぐ近くの路地でジャクソンが息を潜めていることがわかっていた。

未来は市街での戦闘を、昨年と同じ時期に既に経験済みだ。殆ど同じ状況である今、当時の光景が頻繁に脳裏に浮かんでくる。あの時は重機関砲、各種手榴弾を装填したグレネード・ランチャーを仕込んだアサルトライフルを携えていたが、それが拳銃を模した光線銃になっており、これが訓練だということが異なっている。

逆に言うと、ただそれだけの違いしかない。あの頃、最大の敵である旧型戦闘用サイボーグのP2と死闘を演じた未来は、まさかアメリカでFBIが作り出したサイボーグと戦闘訓練を行うなど夢にも思っていなかった。

だが、先にバーニイが言ったとおり、今自分が立っている場所は戦場ではない。

そのことを忘れてはならなかった。

未来の眼下およそ10フィート（約16メートル）下の位置を走る狭い路地を、人の形をした大きな影が突っ切ろうとした。狙いすまして光線銃の引き金を絞り、光の弾を叩き込む。モデルとなる銃の威力に相当するだけの発砲音が銃から上がる。同時にターゲットであるジャクソンの身体で、着弾を知らせる小さなブザーが重なった。

「頭を狙う奴があるか、馬鹿者！」

「えっ？」

ジャクソンに位置を悟られまいとして反射的に隣のビルへ飛び退いた未来は、通信越しで怒鳴るバーニイへ、はつきりとした反抗の色を表した。

「でも！一発で仕留めなきゃ、意味が……」

「我々CVCの目的は容疑者を殺すことではない。動きを抑えて確保することだ。それを忘れるな、未熟者が！」

バーニイに怒鳴り返す途中で遮られた未来は、舌打ちが漏れそうになるのを堪えねばならなかった。彼女は確かに、癖でジャクソンの側頭部を無意識のうちに撃っていたのだ。

存分にやれと言ったくせに！

心の中で悪態をつきつつ、未来がビルの裏側へと飛び降りる。

その間に背後で鉄筋の壁を2度蹴った音が上がった。数秒前まで自分がいたビルの上に、今度はジャクソンが飛び上がったのがわかった。

刹那、3発分の発砲音が重ねられる。

が、街路を蒼い風の如く走り抜けた未来には掠りもしない。ただ、オーデインに身を包んだジャクソンは、未来が予想したよりも高い跳躍力と素早さを持っているようだった。

「くそ！なかなか速いな」

そして、ジャクソンの未来に対する感想も同じらしい。

悔しさがにじんだ呟きを耳にした未来の顔に驚きが走る。ひとりがことが聞こえるということは、オーデインは顔が露出するつくり

なっているのだろうか？

それにしても、野生動物以上の感覚器を持った未来を相手に、聞こえるような声を立てるのは危険だと思わないのか。いや、自分が聞こえないのだから、相手もまた同じだと思っっている確率の方が高い。

それならば、油断している分だけ手痛い反撃を食らわせてやろう。不敵な笑みが未来の口許に上る。

彼女が聴覚のレベルを少し上げ、動物の息が聞こえる範囲までフィルタリングを甘くする。すると、ジャクソンがしゅっと短く息を吐いたのがわかった。次の行動に出る気なのだ。

彼に対する蒼い鎧姿が疾走の体勢から片足を突っ張らせ、急激なブレーキをかけて立ち止まった。特殊耐熱樹脂の靴底が、アスファルトをこする音上がる。半分程度に勢いを殺いで、未来は今までと逆の方向に向かって地面を蹴った。弱い反射光をビルの谷間に投げかけて、暖かな日差しを纏ったハヤテが宙を走る。

彼女は路地の両側にそそり立つ古いビルの片方に足を叩きつけ、反対側の壁に跳ぶことを繰り返した。空中をジグザグに舞っていくその間、高さはほぼ変わっていない。

途中、足場になっているビルの屋上を動く人影が視界に入る。

未来が空中で器用に身体をひねり、続けざまに3発の光弾を撃ち込んだ。

「2発目！」

そのうちの1発がジャクソンを捉えたことを確認し、彼女はヘルメットの中で低く呟いた。今度は肩と思しき部分を狙ったからか、バーニイから怒声は飛んでこない。彼女は動く速度を緩めず、別のビルの谷間へと姿を消した。

「可愛い顔してくせに、やるじゃねえか」

未来に下から攻撃を浴びせられる羽目になったジャクソンは、笑みがこぼれるのを抑えられなかった。

瞬く間に路地の向こうへ姿を消した未来の動きには、これまでに

積んできた訓練や実戦の経験を頼りにするのでは歯が立たないと痛感する。それに聞いたところでは、彼女は既に二人のサイボーグと戦い、勝利してきた実績の持ち主だ。ジャクソンにとって、今までの敵の中で一番手強い相手だと断言できるだろう。

しかしだからこそこの訓練は刺激的で、どうやって彼女と戦うか判断を下すことが楽しくすらある。

それほどの強敵が仕事上のパートナーであり、生死を分かち合っ
て危険と戦っていくことになるのだ。性別など関係なく、ジャクソンは未来を大好きになれそうな気がしていた。

主よ、彼女と巡り会わせてくれたことに感謝します。

久しく礼拝にも行っていないジャクソンの胸に、自然と祈りの吐
きが浮かんだ。銃を持ち直す僅かな間にだけ、心で頭を垂れること
にする。

彼は未来を追うべくビルから飛び降りた。両足の発条を最大に使
って着地の衝撃を殺し、勢いを落とさずに走る動作へと繋げる。

未来がこちらの姿を見ていないにも係わらず、正確な射撃ができ
ることは間違いない。優れた感覚器の成せる技なのだろう。だとす
ると、一方的に居場所を掴まれてしまうこちらが圧倒的に不利なこ
とになる。

それなら、彼女の能力が役に立たないようにすればいい。次に攻
撃を受けたときに、こちらも同時に攻めの姿勢に転じるのが一番だ。
僅か数歩踏み出した時点でジャクソンの腹は決まったが、自らの
決断に酔って路地から飛び出すような迂闊な真似はしでかさない。
銃を下に構えるとビルの角に背中をつけ、慎重に陽の光が満ちるメ
インストリートの様子を窺った。

途端、僅かにビル陰から突き出たオーデインの肩にある2つのタ
ーゲットが、着弾を告げて小さなブザー音を鳴らした。

「ちっ！」

ヘルメットから露出したジャクソンの口許から、思わず派手な舌
打ちが漏れる。

この光線銃の射程距離はそう長いものではない。せいぜい11ヤード（約100メートル）だ。そしてこのメインストリートで、建物の外から全く隙を見せずに攻撃するには、再びビルの上に登るしかないはずだ。

ジャクソンが顎を上げる。6・2フィート（約188センチ）を超える位置にある両目が、メインストリートの反対側でそびえる銀行の屋上に、頭のようなものが一瞬現れてすぐに消えたのを捉えた。「土地勘だったらこっちにあるんだぜ、ミキ」

今度は胸の内を声に出さず、ジャクソンは猛然とメインストリートへ飛び出した。

ホーガンズ・アレイの市街は未来もアカデミーの訓練で使っただろうが、ジャクソンは陸軍の特殊部隊であるデルタ・フォースにいた時代も、幾度となくここで演習を行っていた。FBI捜査官の訓練より、頻度はずっと高かったと断言できる。

未来が撃ってきた銀行の屋上は、周辺で一番高い場所に位置するところだ。デルタ・フォースの演習では、絶好の射撃ポイントとして知られている場所だった。その頃は、射撃ポイントを早く潰すことが如何に重要か、上官が口を酸っぱくして叩き込んできたものがある。

だから、ジャクソンも遠慮なく未来を潰すことにした。

未来が下のほうへ動いたということは、暫くは高所から撃つてこないということだ。そして、彼は未来が次に移動するであろう、射撃ポイントへ先回りするルートを知っていた。

大柄な身体がメインストリートを突っ切り、猫科の獣を思わせるしなやかな身のこなしで、狭い路地へと駆け込む。やや暗く細い道には、奥の目立たない位置に地下へと潜るコンクリートの階段があった。ここは複数の建物を一気に突っ切る隠し通路で、奇襲の際に使われる。ホーガンズ・アレイにはこういったギミックが仕掛けられた場所が幾つもあるが、これは主に軍の演習に使われるもののため、FBIでは教官すら知らない場所も多いのだ。

ジャクソンが路地裏で地下道に飛び降ると、それまで未来の耳に届いていた足音の質が変わった。

「どっか、建物にでも入ったのかな……」

明らかに籠もった音に、未来は走る速度をやや落として警戒した。ジャクソンは、建物の中から撃つてくるつもりなのだろうか？

しかし彼の位置は音からすぐに判別できるし、今のところ自分の被弾は0、ジャクソンは4発だ。多少戦法を変えてきても怖くはない。

「……あれ？」

走りながら、未来が疑問形に言葉尻を上げる。

彼女がほんの少し前のことを思い返した僅かな間のことだった。足音から注意を逸らしたため、ジャクソンの正確な位置が掴めなくなったのだ。地下にいる相手の活動音は遠く聞こえる上、閉鎖空間での反響もあるためわかりづらい。

これだから、屋内を使われるのは厄介だ！

未来が唇を噛みしめ、それでも注意を怠らずにビルの裏を走り続ける。

その蒼い背中中、不意にターゲットが着弾を告げて耳障りなブザー音を上げた。

後ろだったか！

そう思う前に、彼女の脊髄は反射の動きを全身に送った。跳ねるように横へ飛んで、続いて発射されてきた光弾を避ける。同時に空中で振り返り、報復を同じ形の銃から見舞った。

実体のない弾丸の軌跡が二本、空を裂いて互いの身体に命中する。しかし、攻撃を避けるために後退している未来とは逆に、ジャクソンは猛然と走り込んできた。

未来がその好機を見逃す筈もなく、連続でトリガーを引き絞る。

「ダメージなんか気にしない、つてわけ！」

弾が全て命中しているのも構わず突進してくるジャクソンに、彼女は半ば叫ぶような声を上げていた。彼は装甲の強度に余程、自信

があるに違いない。

「こいつが、オーデイン……」

雄牛のような猛々しい気迫と共に間合いを詰めてくるジャクソンとの距離を保ちつつ、武装した彼と初めて相對した未来は、声に出さずに呟いていた。

オーデインを纏ったジャクソンは、まるで昔観たことがある古い映画に登場したロボット警察官そっくりだと、素直に思った。

スカイブルーに近い鮮やかな色のアンダースーツがぴったりと浅黒い肌に張り付いて、口許を除く全てを覆っている。下地となる装甲のベースアーマーはその上に装着され、色はアンダースーツと同じくらい明るい印象があった。ベースアーマーは腕や急所を中心に身体を保護する金属の鎧だが、未来のように装甲が全身を覆っているわけではない。二の腕や太股の一部などは、アンダースーツが剥き出しになってさえいる。

が、逆にヘルメットと上半身の装甲、膝などの関節部分には露出度の高さを補うかのように、白銀に輝く装甲が更にもう一重につけられていた。そのせいか、彼の体格は先に会議室で見たときよりも体格がかなりごつく見える。未来のハヤテが全身を満遍なく金属で覆って保護するのに対し、ジャクソンのオーデインは急所の保護に重点を置いた装甲だと言えるだろうか。

ハヤテとオーデインの決定的な違いは、その色合いもさることながら、オーデインの装甲が鏡面加工に近い、派手な反射光を放つところにあった。

もしオーデインが戦場にいたら、悪い意味で目立つこと受け合いだろう。

長身ながらもすらりとしたジャクソンの身体は、重機関車と呼ぶに相応しい厚さと重みを兼ね備えた、けばけばしい装甲車となっていた。

曲がりくねった狭い路地で発砲しながら後退を続ける未来と、追いつがるジャクソン。

二人の距離が縮まるまでに、数秒とかならなかった。

ただ、振り返りながら射撃を続ける不自然な体勢を取り続けたとは言え、追いつかれたことは未来にとって不本意だった。

彼女は隠密行動と遠距離からの正確な射撃攻撃に主眼を置いて作られたサイボーグであり、近接格闘にはやや不向きだ。だからこそハヤテも目立たない色で、素早さが損なわれることなく動けるよう考慮されていた。

しかし、お互いの顔がまともに確認できるほど近いこの距離だと、それも意味がない。

再び距離が開くまでこのまま後退を続けるか、それとも銃による攻撃は諦めて、格闘戦に持ち込むべきか。

未来に次の選択肢が浮かび、銃を構えていた右手が下がったとき、ジャクソンが彼のすぐ側に迫っているビル壁に向かって跳んだ。三角跳びの要領で、煉瓦造りの壁に穴を穿たんばかりの勢いに任せて足を叩きつける。

ジャクソンの巨大とも言っているいい体躯が、16フィート（約5メートル）の上から未来に掴みかかった。

未来はそれを体術で迎撃することなく横に体を捌いて避けた。彼女を捕まえ損ねたジャクソンが地面に手をつき、体勢をやや崩して着地する。すかさず、未来が連続で銃のトリガーを絞った。

白銀のオーデインにつけられた黒いターゲットが三度、着弾を知らせるブザー音を散らす。

が、やはりそれをものともしないジャクソンは、しゃがんだ姿勢から再び未来に襲いかかった。

恐ろしい勢いで肉薄するジャクソンが銃身を掴もうとしてくるのを後退しつつ避け、未来は素早く太股の隠しホルスターに銃を突っ込もうとした。

「……あつ！」

彼女の口から、小さな叫びが上がった。

光線銃がホルスターに届く直前、横合いからジャクソンの膝蹴り

を浴びせられたのだ。不意を突かれ、衝撃で緩んだ手から銃が弾き飛ばされた。

瞬間、未来はそれ以上下がるのを止めて急ブレーキをかけた。

当然ジャクソンは物理法則に逆らうことはできず、スピードを落とさないで未来に突っ込むことになる。未来は僅かに反応が遅れた彼の腕を捉え、そのまま背負い投げの要領でアスファルトの道路へ投げつけた。

鮮やかな青と銀の巨体が半回転し、金属の足先が宙を舞う。

が、ジャクソンは背中を打ちつけることなく、見事な受け身を取って着地した。その膝をついた体勢から、追い打ちを加えようと走り込んできた未来の足首を狙い、腕を突き出す。

未来は襲いかかってきた右手を跳んでかわしたが、ジャンプで彼の身体を越えるの見せかけて、踵を背中に打ち下ろした。鈍いが強烈な衝撃でジャクソンのしゃがんだ身体が前につんのめり、衝撃を感知したターゲットがブザーを鳴らす。またダメージを負わされたことに舌打ちしながらも、ジャクソンは道路に膝と手を叩きつけて無様に倒れるのを堪えた。

彼が立ち上がったところへ、走り込んできた未来の特殊警棒による突きが襲いかかってきた。肩の関節部分を正確に狙ってきた一点攻撃をかわし、今度はジャクソンが未来の懐へと踏み込む。

そのつもりが、未来は巧妙な足捌きでそれを許そうとはしなかった。自分のリーチの短さを心得ている彼女は、特殊警棒の長さを計算して有利な間合いを操っているのだ。ジャクソンの掴みかかってくる腕をするりと抜け、長い脚から放たれる蹴りをくぐり、近寄ろうとする巨体から離れようとも、それ以上近づこうともしない。

「そんなんじゃ、私のスピードの敵じゃないよ！」

特殊警棒を奪おうとする手を巧みに払い、お返しに蹴りを食らわせた未来が低く、ヘルメットの中で眩きを漏らした。

P2との戦いを通して、格闘戦ではどうしても体格が劣る自分のほうが不利だと、未来は痛感していた。が、そのことを自覚した上

で戦い方を考えれば、十分に他の能力で弱点はカバーできることもまた、知っていた。ジャクソンにはP2以上の素早さがあるが、それでもまだ自分のほうが勝っているし、その分手数も多い。全体のダメージ量からすれば、勝機はこちらが握ったも同然だ。彼が攻撃してくる隙を突き、反撃していれば自然と勝てるだろう。

「ちっ。奥の手を使うしかねえか」

その時、未来を攻撃し続けていたジャクソンが呟いて後退した。

奥の手？

何か隠し武器でもあるのだろうか？

ジャクソンの言葉に警戒した未来も動きを止めず、間合いを開き気味にして防御の姿勢に移ろうとする。

未来からそれ以上離れまいとして、ジャクソンは逆に詰め寄る形となった。

「アームパージ！」

短い呪文のような一言が、ジャクソンの口から発せられた瞬間のことである。

彼の身体が爆ぜた。

いや。

正確には、彼が纏うオーディンのオーバーアーマーが全て弾け飛んだのだ。

銀色に輝く金属パーツが放射状に撒き散らされて陽光を乱反射し、光の嵐を巻き起こす。

ジャクソンから6フィート（約2メートル）という至近距離にいた未来は、アーマー爆弾の直中に巻き込まれる格好になった。飛んでくるパーツをいまいましてげに特殊警棒や蹴りで叩き落としつつ、やむなく退こうとする。

そこへ、スカイブルーの疾風がと化した何かが飛来した。

「……くっ！」

瞬時の反射に従い、それを腕の装甲で弾いた未来の唇から、思わず低い唸りが漏れる。

確かに防いだ筈の一撃は、強化された両腕にさえずしりと響いた。脚を軽く踏ん張らねば、後ろに倒れるかと思っただけだ。

とてつもない重さを持ったそれがジャクソンが繰り出した拳だったのだと理解するのに、彼女でも一瞬の間が必要だった。オーバーアーマーを外したジャクソンの攻撃は、それほどまでにスピードが上がっていたのだ。

速い！

自身を圧倒するほどにまで素早いジャクソンの動きに驚愕した未来の頭には、その一言しか浮かばなかった。

「よく俺の一撃を正面から受けられたな、ミキ。流石だ。これなら、遠慮なくいけるぜ！」

最初の一発を当て損ねているのに、ジャクソンの声は少しも悔しさを帯びていない。むしろ、ずっと会いたかった相手に再会した子供のように弾んでおり、嬉しさが滲み出ている。

未来に拳を跳ね返されたジャクソンは最初と同じ間合いで構え直したが、その姿はほんの10秒前と全く様変わりしていた。

銀の僅かなラインを残して全身が明るいブルーの色調になり、より鮮やかさが増している。一方、厚いオーバーアーマーを脱ぎ捨てた分だけ身体の幅と厚みがなくなり、シルエットの印象が重機関車からリニアモーターカーに変わっていた。目立つ装甲も頭と胸、腰回りに肘と膝の先くらいだ。

ちよつと見たところでは、アメリカン・コミックのヒーローのようである。

重装甲の未来は、さしづめ悪の組織に雇われた殺し屋ロボットというところか。

などとくだらないことを頭の隅で考えていた未来に、ジャクソンが遠慮なく仕掛けた。ここまで来るともう妙な小細工をしようと言う気はないようで、拳と蹴りを織り交ぜた打撃を雪崩の如く浴びせかけてくる。

その全てをかわし、受け、流した未来であったが、彼の腕や脚が

装甲を掠る度に、身体に貼られたターゲットがいちいちブザーを鳴らすことに神経を逆撫でされた。

「くっそ……ずるいよ。こんなの、反則じゃない!」

次第に上がりがちになってきた呼吸に苛立つて、未来は悪態をついた。

オーバーアーマーという重い枷を外されたジャクソンの攻撃は、スピードが上がっただけではない。確実に威力も倍増されていた。ハヤテを身につけた彼女の身体にまともに響き、痺れさせるくらいなのだから、自動車の衝突かライフルの銃弾並みの破壊力だろう。

自分よりも頭一つは大柄で筋肉質な男が、文字通り目にも止まらないスピードの体術で追いつめてくる。

動態視力が常人の数十倍に強化されているはずなのに、相手の攻撃を目で追うのがやっと。

防戦するのにもほぼ、反射神経に頼るしかない。

この世で自分が最も強靱な戦士であることを自負していた未来のプライドに、その事実は少なからずダメージを与えていた。

「トリス……何だい、あれは?」

指令室のプレハブにあるモニターから彼らの様子を見ていた杉田が呆然と呟くと、殺風景な部屋に声がこもった。

未来というサイボーグの製作者でもある杉田にとっても、これは驚愕の現実であった。

嘗て未来は二人のサイボーグと戦い、そのいずれにも勝利した。うち一人に当たるP2は、未来に匹敵する性能を持つ優秀な軍用サイボーグたる個体だった。

しかし今、杉田の目の前にあるモニターで彼女と技の応酬を繰り返しているジャクソンは、それ以上の能力を持っている。二人は外見を極めて人間に近づけた、同じタイプのサイボーグだ。杉田は未来に対して、自らが持つていた技術の託し、最も優れた個体を作り上げたつもりでいた。

なのに、ジャクソンのスピードとパワーは未来を上回っている

ことがはっきりとわかるほどののだ。

「ジャクソンのアームパーズは、本当に最後の手段さ。オーデインのオーバーアーマーは耐久性が高いけど、代わりにとてつもなく重い。身軽にならなければどうしようもないとき、こいつは使用者の意思で装着を解除できるんだ。しかしオーバーアーマーがなくなれば、パワーとスピードが格段に上がっても、拳銃弾程度しか防げない状態になる。究極の二択を迫られたときの、逃げ道ってわけなんだ」

皮肉そうに息をつくとき、トリスは眼鏡を上げて杉田の顔を見直した。

「純粋な肉体の基礎強度と能力だけでいけば、恐らくミキよりジャクソンの方が上だろう。でも、彼にはミキみたいな抜群の視覚とか、内蔵式スタンガンはない。あの二人……訓練次第で、本当にいいパートナー同士になれると思うよ。どんな重大な犯罪にも対応できる、特別捜査官として」

モニターに再び見入ったトリスの声は、感慨深げなものに変わっていた。

ジャクソンは保安用のサイボーグだ。

そのため基本的な身体能力と、時には生身であつても身体を盾とし、市民を守る強靭さが特に重要とされた個体でもある。小細工が一切されていない強化人間と言えるだろう。

加えて専用の装甲強化服であるオーデインも、保安任務において市民に威圧感を与えず、逆に犯人の目を引くような派手さがあるスタイルだ。闇に紛れて隠密に行動し、情報収集や偵察、破壊工作を行うのに適したハヤテとは全く反対なのである。

しかし対極の位置にいる両者だからこそ、協力することによって弱点を補い合い、強力な力を産み出すことになる。有事の際にどんな危機的な状況に陥っても、彼らが二人揃っていることで、活路を見出せる可能性が高まるのだ。

そういった意味では、二人の戦闘力に歴然と差があるのは好まし

くない。

互角に戦えるくらいで丁度バランスが取れるという、微妙な位置だと言えるだろう。

もつとも、負けん気が強い未来には、予想外にストレスがたまりそうな力関係だと言う気がしないでもない。一方で、一緒に戦う仲間ができて心強いことに間違いはないはずだ。

軽く頷いて、杉田が隣のトリスからモニターへ再度視線を移す。

「そこまで！」

そこで、バーニーが鋭い号令を放った。

モニターの中で間合いを離し、睨み合おうとした二人のサイボーグが同時に顔を上げる。

「たった今、ハヤテのダメージが限界値に到達した。訓練はここまです。二人とも、直ちに指令所まで戻れ」

バーニーが手元にある端末の画面で、双方の装甲に与えられた損傷の度合いを示す監視アプリケーションの表示を念のために確認してから指示を出した。

『了解』

『……了解』

ジャクソンは荒い呼吸の元でもすぐに応答したが、未来は一呼吸置いてから返していた。

彼女の表情が不服そうにふくれているのが、杉田にはすぐに想像できるような声であった。

肩を並べて指令室に戻ってきたジャクソンと未来は、それぞれヘルメットを外して素顔を外気に晒していた。二人とも額に汗が光っていたが、金属の手甲で顔を拭うわけにもいかず、乾くのをそのまま待つしかなかった。

「二人とも、少しは相手のことがわかったか？」

武装した二人のサイボーグの前に立ったバーニイが、感情を乗せない声で質問する。彼は生身であるにもかかわらず、大型ヒューマノイドのようにごつい外見の二人の前においても不思議と貧相に見えなかった。

「ああ。ミキは予想以上に手強い相手だった。わくわくして楽しかったよ」

「私も、ジャクソンの戦闘能力の高さには驚きました。特にパワーは、私以上のようですし」

未だ興奮冷めやらぬジャクソンに対し、未来の口調は落ち着いている。しかし、彼女の刺々しさを隠せずにいる言葉はまだ続いた。

「でも、オーデインの形態が二段階の武装だったなんて。そんなこと、聞いてませんけど」

「知らせずについて当たり前だ。全く未知の敵を相手にしたときも、事前に情報がるくはないんだからな。それぐらい、とっさに何とかできずにどうする」

不満を剥き出しにしている未来へ、バーニイが無遠慮に返す。

確かに、それもそうだった。

それに訓練前、互いのことについて何も知らないのは同じなのだから条件は同じだと、未来自身も考えたはずだ。だから探知能力を駆使すれば勝てるはずだ、と踏んだのだ。

今回装甲により多くのダメージを負い、敗北という面白くない結果に終わったのは、結局は未来がジャクソンのことを甘く見ていた

ことが大きな原因だ。相手の能力を見誤り、判断を誤り、戦い方を誤ったのだ。

バーニイの一言にぐうの音も返せなくなった未来が、唇を噛みしめて押し黙る。

構わずバーニイは、手にしている小さなノートをめくって先を続けた。

「とにかくだ。明日からの訓練は一日おき、二人の連携を重視したメニューのものを中心にやっていくことにする。場合によっては、演習相手を実弾を使ってくることもあるからな。覚悟を決めておけ」「へえ。つてことは、海兵隊やHRTの連中が相手つてことか？だとしても、俺たちは実弾は使えないつてことなんだろ。銃の反動が全くないと勘が狂うから、せめてラバー・ショック弾くらいは使わせてくれよ」

実弾を使用した訓練という内容に少しも驚くことなく、ジャクソンの様子は明るい。

ラバー・ショック弾は、文字通り硬質ゴムで作られた銃弾である。貫通力は皆無だが、通常の弾丸よりも大振りなそれを特殊な銃から撃ち出すことで、標的となった人間に激しい苦痛を与えて行動不能に陥れるのだ。物理的破壊力は乏しく、用途によって通常の銃との使い分けが必要なため、使いどころが難しい武器とされている。

逆に、犯人を生け捕りにすることに主眼を置いたCVCにはうつてつけと言えるだろう。近年、警察のSWATや軍の一部でも採用が広まりつつある銃器でもあり、こちらは暴動鎮圧時に主に使用されていた。

「詳細は隊長が各部隊と交渉中だ。訓練のない日は、通常の捜査に当たるようにしろ。捜査には基本二人で行け。くれぐれも外部の人間に、お前たちがただの人間ではないことを知られないようにな」

「へいへい」

ジャクソンがヘルメットを弄びながら返事をして、バーニイのむっつり加減は変わらない。未来から見ればこの大柄な黒人青年の

態度は呆れるほど不真面目だが、戦闘チームの面々はもう慣れているのだろう。

「それから、ミキ」

「はい？」

バーニイから不意に名を呼ばれ、応えた未来の声音が上がる。

「お前は明日から、NOTSの基礎カリキュラムに参加しろ。一日おきにしておいてやるから、1ヶ月程度みっちり鍛え直してこい」

「え？基礎訓練って、そんな……」

未来は思わず眉の端を吊り上げて、憮然とした顔になりかけた。

NOTSはHRT、つまり人質救出チームの入隊試験をパスし、これから戦い方のノウハウを学ぼうとする新人戦闘員たちの訓練クラスである。

勿論HRTは、過酷極まりない2週間の選抜試験をくぐり抜けた猛者にもみ所属が許される、FBIでもエリート中のエリートが集う部隊だ。新人隊員とは言っても、元プロのアスリートや軍、警察出身者がそのほとんどを占める。

そんな屈強を絵に描いたような彼らでさえ頓挫する者がいるのが、5ケ間に渡るNOTSの訓練だった。肉体訓練を始めとして、爆発物を使用した突破や要人警護、戦術ヘリコプター作戦までをここで仕込まれるのである。そうして彼らは、一介の捜査官から一流の戦闘員へと脱皮していく。

が、未来は既に海兵隊特殊部隊流の戦闘術を身につけている。今更基礎訓練など、全く必要ないはずなのだ。少なくともその程度の自覚はあった彼女がまだ文句を言おうとしたのに先んじて、バーニイが低く言い放った。

「今の訓練で、お前が何度相手を殺したか知りたいか？」

義手の戦闘コンサルタントの態度は普通に話している時と全く変わらなかったが、武装した未来を一瞬たじろがせるほどの威圧感を含んでいた。

唇の手前まで出かかっていた単語を飲み込む未来を、バーニイが

冷ややかに見やる。

「同じことを何度も言わせるな。我々CVCはの目的は、事件の犯人や首謀者を生け捕りにすることだ。もしお前の不手際で犯人が死んだら、そのせいで他の捜査官たちがどれだけの痛手を被ると思う？」

未来は何も言い返せなかった。

バーニイの言ったことが正論だったせいもある。

だが、彼が全身に纏っている厚い岩のような空気が、固く彼女の喉を塞いでいたのだ。

「FBIは重大な事件でも最大の手がかりを失わないために、CVCを作った。そのために、我々はこのにいる。それをもう一度、頭に叩き込んでおけ。お前一人のミスのために、FBIの信用を失墜させるわけにはいかん」

静かな強面の男が続けて発する言葉全てに、重い響きがあるようだった。

彼は決して怒っているわけでも、強く命令しているわけでもない。どちらかと言えば静かに相手を諭しているだけなのに、その場に
いる人間全てを黙らせるほどの迫力を感じさせるのだ。

それでいて少しも嫌味に感じたり、反抗心が湧き起こらないのは、職務にひたすら忠実であろうとする姿勢がしつかりと見えるからなのだろう。

「お前はまず、軍隊式の戦い方を全て忘れることから始める。いいな？NOTSの主任教官には、俺から話を通しておく。午前のプログラムは朝5時から開始だが、詳細は後でメールを送る。忘れずに確認しておけ」

ここで要求されるのは、相手を殺すことではない。

犯人の捕捉と犯罪を調査すること、そして市民を守ることだ。

最後は未来の瞳を射るように見据えて命令したバーニイは、CVCの理念を言葉を用いずに今一度伝えてきたのだ。

「返事は？」

まだ何も返せずにいた未来に、バーニーが無表情に問う。

「了解しました」

未来が慌てて答えても、やはり彼は感情を見せずに頷くだけだった。そして、さっさと一人で指令室を後にする。

その背中を全員が見送っていたが、軽く息をついたエマが眼鏡を直し、クリップボードのスケジュール表を確認しながら口を開いた。「じゃあ、午後はランチの後に個々の作業ね。ミキがNOTSに行くならメンテナンスの予定も調整が必要だから、ドクター・スギタと少し相談がしたいんだけど」

「ああ、そう言えばそうだな。後で貴女のオフィスに行くよ」

やれやれ、と言いたげながらも杉田はほっとしたような様子だ。

彼はこういった場の緊張が苦手なのだ。

「それにしてもミキ、所属早々災難だな。でもまあ、最初はジャクソンだってバーニーに全く同じことを言われてたんだ。通過儀礼だと思えばいいよ」

「……え、そうなの？」

「おいおい、トリス！余計なことは黙っててくれよ。折角、先輩として適切なアドバイスをしてやろうかと思ってたのに。格好がつかないじゃねえか」

ほんと肩を叩いてきたトリスと一緒に未来がジャクソンの方を振り返ると、黒人の大男はひょいと肩をすくめた。オーデインを纏った姿のおどけた仕草に、ぴりぴりしていた雰囲気は柔らかくなる。

「もう昼だし、みんな一緒にオフィスへ戻ることにしよう。僕がピックアップトラックを運転するから、ジャクソンと未来は荷台に乗るといい」

「ああ。有り難く、そうさせて貰うことにしよう」

杉田の言葉にジャクソンが明るく答え、未来が頷いた。

「ジャクソンのパージしたパーツはもうロボットが回収してくれてる頃だろうし、僕とエマはこのままランチに行くよ。食堂のピザはなかなか旨いからね」

腹を空かせた様子のトリスは、もうピザをかじる自分を想像しているのだろう。涎が垂れそうな顔を見せている。

「私は食事をしたら、娘の様子をちょっと見てくるわ。ドクター・スギタは、1時半くらいにオフィスに来てちょうだい」

エマが娘のことを口にしたことに、未来は驚きを隠せなかった。一見すると仕事か恋人のキャリアウーマン風に見えるエマに、小さな子どもがいるというのは意外だった。

エマとトリスが退出した後に残った杉田と未来、ジャクソンは、指令室の現状復帰を確認してからピックアップトラックに乗り込み、ホーガンズ・アレイを後にした。

穏やかな秋の空気の中を、3人が乗るトラックがアカデミーの建物を目指しのんびりと走っていく。

「いい天気だな。あのまま、もうちょっと訓練をやってたいぐらいだったぜ」

「ごとごとと揺れる荷台で、仰向けになったジャクソンが運転席の方に寄りかかり、雲一つない空を仰いだ。大柄な彼が頭の後ろで手を組むと、ただでさえ幅がないピックアップトラックの荷台が余計に狭く感じる。」

「私だって、装甲に限界が来なければ続けたかったよ」

その隣でヘルメットを抱えてちんまりと座っている未来も、晴れ渡った空を同じように見上げた。荷台の横幅は狭いが、何とか足を伸ばせるのが有難い。

「悔しいけどさ……あなた、強いよ」

やや口を尖らせてそっぽを向きながらも、未来はジャクソンに対して素直にそう言わずにいらなかった。

彼はP2以外の本格的に改造されたサイボーグで、初めて戦った相手だ。

P2のあらゆる面に躊躇しない戦い方は見事だったが、相手の特性を短い間に把握して柔軟に戦うジャクソンの腕にもまた、素直に感心できた。

が、それをそのまま伝えるのもどこか癪に触る。

これが今の未来が表現できる、ありったけの賞賛だった。

「嬉しいこと言ってくれるじゃねえか。けど、お前も十分強い。素人上がりだなんて、信じられねえよ」

未来の方を向いたジャクソンは、屈託がない笑顔を浮かべている。その純粹な感情を隠さない正直さに、思わず毒気を抜かれてしまうくらいだ。特に意識せず、未来も力んでいた口許を緩ませる。

「日本で私を鍛えてくれたのが、元海兵隊の特殊部隊出身の人だったからね。だからここまでになれたんだよ。彼には感謝してるんだ」
「リーコンの出身者なのか。本当かよ？バーニイと一緒にだな。ひよつとしたら、お互いに顔ぐらい知ってるかも知れないな」

「バーニイも、海兵隊の特殊部隊出身なんだ」

未来の声には驚きと言うよりも、やっぱりそうなのかと納得する響きがあった。それならば、最初に会ったときや訓練後に感じさせられた強烈な気迫があったことにも頷ける。

「ああ。俺も詳しいことは聞いてないけど、大尉かその辺りだったらしい。あんな身体になったのも、現役時代のことみたいだし」

「両腕が義手になってること？」

「腕だけじゃなくて、内臓も大部分が人工臓器だそうだ。CVCに来てからは、エマに時々診てもらってるらしいけど。俺たちと違って、マスプロ製の人工パーツだからな。メンテナンスも色々大変らしいぜ」

ジャクソンは軽い口調で続けていたが、バーニイが両腕のみならず内臓までも自前でないと驚きだった。恐らく、戦地で地雷に巻き込まれたか何かしたのだろう。

「身体があんな状態になったから、軍にいられなくなったの？」

「さあな、俺もそこまでは知らねえから。でも、FBIの新設特殊部隊のここにいるぐらいなんだし、腕がいいのは確かなんだ。俺もバーニイにしがかれて、だいぶましに動けるようになったからな。彼の下にいればお前も間違いない。まだまだ強くなれるし、捜査官と

しての腕も磨けるさ。それは保証する」

「ずいぶん買ってるんだね、バーニイのこと」

「チームメイトを信用するのは当たり前のことだろ？」

逆に不思議そうな顔でジャクソンから言われた未来は適切な返事を見つけられず、複雑な思いでその言葉を噛みしめた。

FBI捜査官に限らず、保安官や警官も含めたアメリカの法執行官たちは、非常に横の連携が強い。特に一度信頼した相手は絶対に裏切らないという信条があるし、法執行官の一人が殺害されたというニュースが流れれば、職種が違う皆が一丸となって怒りに震える。そして仇を討つために組織を越えた協力関係を築き、犯人の逮捕を誓い合うのだ。

そのときの結束力の固さは、軍隊といい勝負だろう。

未来がFBIアカデミーで最初にその話を聞いたときは、ちよつと大袈裟だと思ったものだ。が、フレデリックスバーグ駐在事務所に配属されてからは、それが事実であることを日々実感させられることも多かった。

チームメイトを信用して当たり前。3年前にサイボーグになってから様々な負の感情を一度に背負った彼女には、シンプルだがまだ重い言葉だった。

「それよりミキ、どうしてお前はサイボーグになったんだ？」

「……いきなりな質問だね」

話題の矛先を突然こちらに向けてきたジャクソンに、未来は軽くジヤブでも喰らったかのようにだった。あまり真面目になりすぎないように気をつけて、言葉を選ぶ。

「でもさ、人に何か聞く時は、先に自分のことを話すのがマナーじゃない？」

「俺がサイボーグになった理由か？」

「そう。私、自分以外のサイボーグとまともに話したのは初めてだもん。敵以外ではね」

「そりゃあ勿論、ヒーローになりたかったからだよ」

「……ヒーロー？」

ジャクソンの答えは、アメリカに生まれた少年なら誰でも一度は夢見たことそのままだ。

予想もしていなかった意外な答えに、未来の鸚鵡返しにも一瞬の間が必要だった。

「ああ。アメリカで誰よりも強くて、悪人を捕まえられるだけの権限があつて、弱い一般市民を守るヒーローだよ。俺はガキの頃から、Xメンやバットマンになりたかったんだ。もともと俺は運動神経だけが取り柄だったから、陸軍に入ったんだけどな」

未来の方を見ていたジャクソンは再び空の向こうへと視線を飛ばし、懐かしそうに目を細めていた。

「軍でデルタ・フォースに入って暫くしてから、FBIがサイボーグの志願者を募集してるって聞いたのが最初だった。サイボーグ手術が成功するかどうかのリスクはあつたけど、これだ！つて、俺は思ったね。だから選抜試験に残れたときは、本当にイっちまうくらい気分が良かったよ」

「そっか。テストをパスした人だけが手術を受けられたんだね」

「他にも合格した奴はいたけど、結局最後まで手術を受け続けられなかったの俺だけだったんだ。途中で色々あるにはあつたが、俺はようやくヒーローの夢を叶えられたんだ。天に昇るくらい嬉しかったよ」

そこで、鋭く未来が口を挟んだ。

「ちよつと待つて！手術を受け続けられたつて、どういうこと？」

「改造は、段階を踏んで徐々にやっていくことになつてたんだ。身体を強化したはいいいけど、それを使いこなせない奴だつているわけだろ？最初に腕、次は脚、その後は心肺機能つて感じだつたと思う。で、それぞれの手術の間にまた選抜試験をやつて、一定の基準をクリアした奴だけが次に行けるつて寸法なわけだ」

「……じゃあ、身体の一部だけが強化された人たちもいるつてことなの？」

「そついう奴らは、多分軍のどつかで働いてるさ。異動はあつただ

るうけどな。サイボーグに志願した時点で、一生政府機関の所属になるってことは同意を取ってるし、どんなところでも活躍の場はあるだろうから」

ジャクソンから選に漏れた志願者たちの話を聞いて、未来は胸を撫で下ろした。もし当時のAWPが同じことをやっていたら、機密保持の観点から失格者を処分しかなかっただろう。こちらは流石にアメリカ、更に国家単位のプロジェクトだけのことはある。

「で、お前はどうかんだよ？」

自分の過去を語り終えたジャクソンが、興味津々といった様子で見つめてくる。

「ええと……私は、偶然みたいなもんだよ。サイボーグになったのは」

「偶然？」

「うん。私が乗ってた車が高速道路の高架から落ちて、燃えたんだよ。当然私は瀕死の状態だったんだけど、助かるにはダメになった部分を全部人工のものに変えて、サイボーグ化するしかなかったんだ。ただ、当時は軍事用の試験パーツしかなくて……」

未来の話に、ジャクソンは真剣な眼差しを向けてきている。目を逸らさず、しかし彼の瞳を正面から見ることは避けて、未来は続けた。

「言ってみれば、私が助かるには軍事用サイボーグになるしかなかったってこと。だから戦うことに関しては全くの素人だったんだけど、まさかここまでになるなんて思ってたよ。私がここにいること自体が、全くの奇跡なんじゃないかと思ってるくらい」

「奇跡なんかじゃないだろ。お前が自分の能力をちゃんと伸ばせなかったら……何か一つだけでも欠けてたら、俺たちはこうして会うことも、パートナーになることもなかった。お前は多分、自分が考えてるよりもつとすごい奴なんだぞ？ 自信を持てよ」

ジャクソンが金属の手甲に包まれた手を未来の頭に乗せて、くりくりと撫でた。

相変わらず彼は屈託がない笑顔を見せているが、声の調子は僅かに下がっている。恐らく、未来が本当のことを話していないのに気がついているのだろう。彼もFBI捜査官だ。根はお人好しなのかも知れないが、馬鹿な男ではない。

それに、相手が真実を話していない点に敢えて突っ込まないだけの配慮も、きちんと弁えている。未来を仲間と認めてくれたからこそ、細かい気も回してくれるのだろう。

事実を伝えても、多分ジャクソンは他言など決してしないだろう。しかし未来は、必要がある時に話せばいいというくらいの気持ちでいたほうが楽だった。これまでの紆余曲折をありのままに話すのは、日本の仲間たちの暗い側面を教えることにもなる。

「今日は午後から一緒に捜査だ。ウォーリーから、最後の被害者の交遊関係を洗ってくれて頼まれてるからな。ランチが終わったらオフィスまで迎えに行くよ」

「うん、ありがとう。これからは訓練だけじゃなくて、捜査でもよろしくね」

CVCでは、どうやらいい仲間にも恵まれそうだ。

ジャクソンの言葉に未来が笑顔で頷いた頃、杉田が運転するピックアップトラックは、アカデミー兼研究所の業務車両用駐車場にさしかかっていた。

ジャクソンと未来がクワンティコを発ったのは、軽めのランチもそこそこに終わらせた13時だった。ジャクソンの個人捜査用車両であるダークグリーンのプリウスに乗り込み、ティアーズ最後の被害者の捜査に二人で向かう。

「被害者はヘレン・ホワイト、17歳の白人。死因は頭部の銃創。両腕及び両足切断。遺体は2041年10月7日にミネラルの森の中で発見……」

未来がこれから捜査する対象である被害者の情報を携帯用ハンドターミナルで確認し、ぶつぶつ呟いていた。小さな声は、車両に搭載されているスキャナーからひっきりなしに聞こえてくる無線にかき消され、ジャクソンには届かないようだ。

生前の画像で見るヘレンは、波打った肩まである金髪とブルーの瞳を持つ、笑顔が無邪気そうな感じの少女という印象だ。麻薬や窃盗などの10代の荒れた若者にありがちな犯罪歴はなく、ごく普通のティーンエイジャーで、アメリカ全土のどこにでもいるありふれたタイプの高校生だったらしい。

「今日はヘレンが通ってた学校に話を聞きに行った後、死体発見現場を確認することにしてる。多分、今日中にはクワンティコに戻って来られるだろう」

「ヘレンの高校はオレンジ・ハイスクール？自宅モラピダンだし、遺体発見現場から随分遠いみたいだね」

ハンドルを握るジャクソンの隣で、未来はハンドターミナルの画面に表示された住所と、プリウスのナビに表示された広域地図とを見比べた。死体発見現場とヘレンの自宅とは、直線距離で20マイル（約32キロ）は離れているだろうか。

「彼女、ヒッチハイクが好きだったらいいからな。今回も、恐らくその時に事件に巻き込まれたんだろう」

最初の目的地であるオレンジ・ハイスクールへは、クワンティコからインターステート95をフレデリックスバーグまで南下して、そこからゲルマニア・ハイウェイを西に抜けてコンステイテューション・ハイウェイに入り、20マイルほど更に西へ走るとようやく辿り着く。高校の生徒たちに話を聞くのには丁度いい時間に到着できるだろうが、戻ってくるのはかなり遅くなるだろう。

もし家族にも話を聞くんつもりでいるのなら、日を改めたほうがいいのではないだろうか。

「家族には話を聞かなくていいの？」

「死体が発見されてからすぐ、地元警察が聴取に行ってるんだ。その時の録音とかの資料は全部CVCに提出されてるから、本部に戻って調べるといい。それに何度も捜査関係者が話を聞きに行ってたりにしてたら、遺族の感情を逆撫でしかねないしな」

運転を続けるジャクソンの横顔の奥にある窓を、抜けるように青い空と様々な木々が通り過ぎていく。11月頭とは言っても、ヴァージニアでは初冬だ。もうあと1カ月もすれば、この辺りは真っ白な雪が積もることもあるのだろう。

未来は、自分たちと同じように南を目指して前を走っている黒のサバーバンを目で追った。運転席では、若い白人の男がくつろいでいるように見える。サバーバンは、世界で標準装備に近くなっているオートドライブング仕様なのだろう。運転手は目的地をナビに入力するだけで、あとは車が勝手に運転してくれるのだ。

「ヘレンだけど、暮らしぶりはどんな子だったの？」

「非行歴もないし、両親も揃っていて、家庭内に問題はなかった。学校では、どっちかと言えばあんまり目立たない方だったらしい。ただ、少し素直すぎるくらいがあったそうだ」

ジャクソンが緩やかにハンドルを切りながら、前にいたサバーバンを追い抜く。そのとき、彼の脇の下からバードソング仕上げでラバー・ショック弾を装填した44口径のグリップが覗き、ちらりと未来の目に留まった。

バードソングは銃を一度分解し、パーツにテフロン加工を施した防水仕様だ。泥にまみれたときや豪雨の中など、どんな環境でも銃が確実に動作するため、非常に信頼性が高い。

FBIや警察では特に過酷な任務に当たる者におなじみの仕上げだが、未来はこの銃をまだ支給されていなかった。

これは、すぐにトリスが手配してくれるだろう。ラバー・シヨック弾は通常の弾丸よりずっと柔らかいために通常の拳銃では撃ち出すことができず、銃も特注品になるのだ。

「素直すぎるって、人の言うことをすぐ信用したりとか？」

「根も葉もない噂を信じたりはしないけど、顔がいい奴に引つかつちゃあ、二股をかけられたりはしてたようだな」

「素直すぎるといふよりは、人の悪意を見抜けないタイプだったのかもね。よくいるよ、そういう子って。だから犯人の口車に乗せられたのかな」

未来が僅かに眉根を寄せ、まだまだまっすぐ続いているインターステート95の先を見つめた。

「そういう性格の割には、ヒッチハイクが趣味だったんだからな。あれじゃいつか危険な目に遭うんじゃないか、って周りも心配してたらしい。その矢先の事件だったわけだ」

被害者の個人的なことにまで話が及ぶと、ジャクソンの声の調子が先より少し落ちた。10代の子どもが犠牲者となるような事件が大嫌いなのだろう。

「家族が最後にヘレンの姿を見たのは、女友達が車で迎えに来て、そこに乗り込む時だったってことだ。その友達の家からの帰りに行方がわからなくなってるから、やっぱりヒッチハイクした相手が犯人だった可能性が一番高いな」

「どうして、その友達はヘレンを送ってあげなかったんだろ？」

「ヘレンと最後に会った女友達の聴取についても、記録が本部に届いている。その子の家の近くも行ってみることにするか。オレンジ・ハイスクールのすぐ近くのようにだし」

「賛成」

黒人青年の言葉に、未来は頷いた。

ジャクソンもまだこの事件の担当になって日が浅いはずなのに、質問には淀みなく答えてくれたのが彼女には驚きだった。勤務態度がいいとはお世辞にも言えないが、事件を早期解決するという志は強いのだろう。ジャクソンは戦闘だけでなく、捜査でも頼りにできそうな一面を持っているようだった。

問題のオレンジは小さな郊外の街で、渋滞がなければ所要時間はここから2時間程度だろう。未来が住むフレデリックスバーグからは、40マイル（約64キロ）程度の距離だ。帰りにわざわざクワンティコまで戻る必要もない。

「私、フレデリックスバーグに住んでるんだよ。帰りは本部じゃなくて、家で下ろしてくれない？明日の朝は、ドクター・スギタと一緒に来るから」

思い出したように未来が提案したが、ジャクソンが驚いて視線だけを向けてきた。

「おいおい、何言ってるんだよ。お前は明日からNOTSの連中と早朝トレーニングだろ？まさか、4時にドクターを叩き起こして送らせるつもりじゃねえだろうな」

そうだった。

できたての自分のオフィスで、出発直前にバーニイからのメールを確認したばかりだというのに、ころっと訓練のことを失念していた。たちまち、未来の顔が場都合が悪そうに曇る。

「……そうだった、うっかりしてたよ。でも本部まで戻ってたら、家に帰っても寝る時間がちょっとしかないんだもん」

「だったら、アカデミーの宿舎に泊まればいいだろ。身の回りのものは無料で貸与、飯だって格安なんだからな」

確かにジャクソンの言うとおり、アカデミーの別館であるジェフアーンソン棟には職員用の宿舎がある。とは言っても、部屋にはベッドと机、シャワールームといった必要最低限のものしかない。

それにNOTSの訓練を受けるなら事前にカリキュラムにも目を通し、防弾ジャケットやゴーグル、訓練用の自動小銃などの個人装備一式も、HRTの教官から借りねばならないだろう。考えるだけで頭が痛い。

未来は一ヶ月間だけとは言え、明日からそんな緊張した場に一日おきに行かなければならないのだ。せめて、訓練がない日は自宅でリラックスしたかった。

「それでも、やっぱり自分の家が一番落ち着くんだもん。帰ることにするよ」

「そりゃあ家に帰れば、ドクターだっているもんな？」

ジャクソンが清掃サービス会社のバンを追い越しながら言った言葉には、明らかにからかう調子が含まれている。

「まあ、もうちょっと残り香には注意した方がいいぜ。お前ら、二人ともだ」

未来はそこでやっと、自身が肌や髪から振りまいているほのかな甘い香りを意識した。

今更ながらに、昨晩は杉田と同じバスオイルを使った湯を楽しんだことが、頭の奥から引つ張り出される。

凶星を突かれた未来の頬にさつと赤みが差したが、ジャクソンは全く気にかけている様子を見せない。

「お前が言うとおり、パートナーと仲がいいのは悪いことじゃねえよ。むしろその逆だ。俺だってエマのことを信用してるから、安心して動くことができるんだしな」

「その割には、彼女はあんたのお姉さんかお母さんみたいな感じに見えたけど？」

負けず嫌いな未来は、今度は自分の番とばかりに茶化すような口振りに変えるが、ジャクソンは平然と答えた。

「ああ、そうだろう。彼女には小さな娘がいるし、俺のことは弟か、大きな子どもみたいに思ってるんだらうさ」

「……そう言えばさっき、娘の様子を見るとかって話してたっけ」

「研究所の中に、託児所もあるからな。仕事が終わるまではそこで子どもを預かってもらえるから、ベビーシッターを頼んで家で留守番させるよりも、遙かに安くて安全なんだ。お前も、子どもができればあそこを使うといい」

ジャクソンの何気ない言葉が、ちくりと未来の胸を刺した。

だが、ここで自分が子どもを作れない身体であることを喚き立てても仕方がない。未来は当たり前障りのない質問を続けた。

「子どもがいるってことは、彼女結婚してるんだよね？」

「正確には結婚してたんだ。俺も彼女が旦那と別れた理由までは知らないけど、CVCに来た頃にはもう独り身だったみたいだな。今のチームで家庭を持つてるのは、お前たちと隊長だけだよ」

「だから、私とドクターは夫婦じゃないって」

未来に軽く睨み返されても、ジャクソンは動じない。

「家族を大事に思うのはいいとして、NOTSの訓練を甘く見ねえほうがいいぞ」

「甘く見てなんかないけど、私たちが体力や戦闘能力で普通の人間に負けるわけじゃないでしょ」

むっとしたまま返した未来であったが、ジャクソンの窺めるような口振りは変わらない。

「そうじゃねえよ。HRTの連中は、仮にもFBIのエリートだ。

自分たちに対する自信もそうだが、仲間に対する信頼と横の繋がりが何よりも強い。NOTSにしたって、10日以上の厳しい選考を勝ち抜いてきた奴だけしかいねえんだからな。お前、HRTの選抜試験がどんなものか知ってるか？」

彼は未来が首を横に振ったのを横目で確認すると、今一度口を開いた。

「あれは受かるための試験じゃなくて、落とすのが目的の試験だ。試験は2週間続けて、その間ろくな睡眠も、食事も取らせない。飢えと疲労で極限状態に追いつめて……下手すりゃ死ぬんじゃないかってぐらいの状況で、それでもお互いに助け合ったり、銃を撃たな

いだけの冷静さを保てる奴だけを選ぶんだ。重い装備を背負ったままで全体の長さを教えないランニングとか、模擬戦闘でな。審査するのは現役の隊員たちで、奴らが一緒に戦ってもいい、命を預けてもいいと思う奴だけに投票する。受験者たちはずつと何人かのチームで動くから、自然に強力な仲間意識が芽生える。そんな連中のところに、俺たちみたいに何も知らない奴が放り込まれてみる。1日で音を上げること、受け合いだぜ」

インターステート95の先を見つめるジャクソンは、いつの間にか過去を噛みしめるような表情に変わっていた。

きつとその選考過程で、何にも勝る強い絆が受験者の間で生まれ、お互いが固く結ばれるのだろう。恐らく、部外者など入る隙もないに違いない。未来はバックミラー越しに、ジャクソンの顔を見返した。

「つまり、選考試験も受けてないような奴は絶対にみんなと馴染めないってこと？」

「それにお前は女だ。過去でHRTに女性隊員の前例はないし、そこが心配なんだよ。多分、周りの奴に認められる頃にはもう抜けなきゃならないしな」

「そっか、忠告ありがとう。まあ、そう言うところでのハンデがあるなんて、正直来考えつかなかったよ。確かに、法執行機関は男の世界だもんね」

未来は、ジャクソンがこちらの身を案じてくれていることが嬉しかった。一度目を細めて笑うと、彼女は戦闘パートナーである黒人青年の顔から視線を外した。

「覚悟だけはしておくよ。私は無理して馴染もうと思わないで、自然体でいて認めてもらえればいいかなって考えるようにする。邪魔者扱いされなくなれば、儲けものぐらいだって程度にね」

穏やかな言いようにジャクソンが驚いたのが、気配でわかる。

「意外とものわかりがいいんだな。てつきり噛みついてくるもんだと思ってたのに」

未来の素直な反応は、彼にとっては不意打ちだった。こういつた保安関係の職業に就いている女性は皆気が強く、男に負けるのは屈辱だと強いコンプレックスを抱えているものだとばかり思っていたのだ。

「あなた、私を一体どういう女だと思ってたわけ？」

「もうちよつと、ひねくれ者なんじゃないかって気がしてたんだよ。未来の直線的な問いに、ジャクソンも思わず隠さずに述べてしまっ

う。」「ああ、ひねくれ者だつてのは当たってるよ。でも、現実的でないよ。うって努力してるからね。認めなきゃならないことは受け入れるようにしてるだけだよ」

「そうか、そりゃ良かった」

未来の話す内容には軽い皮肉が込められているが、声は怒ってはいなかった。そのことを受けて、ジャクソンもまた率直に頷いてから言った。

「不思議と、女つてのはそれができないのが多いからな。お前のことは、余程のことがなけりゃ女だつて思わずに済みそう良かったよ」

「……褒めてんの？それ」

「勿論じゃねえか、相棒」

ハンドルを操るジャクソンの最後の一言に、未来が再び穏やかに笑った。

オレンジまで先は長いが、退屈はしないで済みそうだった。

オレンジは東を平原、西を森で囲まれた内陸の小さな街だ。コンステイテューション・ハイウェイの周辺は、街のすぐ手前まで何もない草地が続き、中心部で少しだけ建物の密度が高くなるという塩梅である。

大型スーパーマーケットや衣料品店が入った郊外型のショッピングモールがある以外、商業施設も密集していない。同じヴァージニアの街でも、未来の住むフレデリックスバーグとは全く違った雰囲気があった。時刻は午後3時で道は空いており、吹きすさぶ乾いた寒風が、裸の木の枝と小さなカフェや雑貨屋の看板を揺らしている。ティアーズ最後の被害者であるヘレン・ホワイトが通っていたハイスクールは、東の外れに位置していた。広い敷地を構えている割には質素なコンクリートの門を車のままぐり、ジャクソンが詰め所にいる守衛に身分証を提示して、用向きを告げる。

「来客用の駐車場は、ここをまっすぐ行って左だ。校長にはあなたたちが来たことを連絡しておくから、通用口から校舎に入ってくれ」
 プリウスの下ろした窓から運転席を覗き込んだ浅黒い肌の守衛は、白髪混じりの頭にのった帽子を直しながらぶっきらぼうに言った。

珍客を通した後は、黒いコートの襟を立ててすぐに詰め所の窓を閉めて引っ込んでしまう。ジャクソンは言われた通り、スクールバスが通ってくる傷んだアスファルトの道を暫く進んだ後、安いフォードやシボレーが並ぶ駐車場の隅に車を停めた。

「ふうん。小さな街の高校なのに、結構立派なんだね」

「アメリカじゃ、地方の学校でもこれぐらいが普通だ。日本が狭すぎるだけだろ」

「私も高校時代はアメリカに語学留学したけど、 Wisconsin の高校はもっととごんまりとしてたんだよ」

辺りをちらちらと見回しながら車を降りた未来の先にジャクソン

が立ち、二人のFBI特別捜査官はポーチのガラス扉から見える受付へと足を進めた。受付はガラスで仕切られたカウンターになっており、その内側で事務員の若い白人女性が熱心にパソコンを操っているのが見える。

「こんにちは。学校見学の方ですか？よろしければ、そちらの入学案内をお取り下さい。案内の者もお呼びしますが」

ジャクソンが受付の窓越しに声をかけようとしたところで、顔を上げた女性に営業用の笑顔で言われた。隠れるように彼の後ろにいた未来が、中学生の親戚にでも見えたのだろう。

「連邦特別捜査官のミキ・ハザマです。こちらはジャクソン・トルーマン特別捜査官。そちらの校長にお話を伺う旨、お伝えしてあると思うのですが」

笑いをこらえているジャクソンの横に進み出て、未来はスーツの内ポケットからつまみ出したFBIの身分証を提示した。何食わぬ顔できちんと礼儀を通した彼女とは反対に、一瞬呆気にとられた受付の女性のほうが、慌てた様子を覗かせている。

「それは、大変失礼しました。ええ、伺っております。校長は応接室で待っておりますので、どうぞお入り下さい」

女性は椅子から腰を浮かせて廊下の奥を差し示すと、小さく咳払いをしてからパソコンに向き直った。

「もし高校で何か事件が発生したら、お前は誰にも怪しまれずに潜入捜査ができるってわけだな」

「まあ、そういうことだね。あんたは、体育の教師にでもなつてけばいいんじゃない？」

にやにやしているジャクソンに、未来は別に腹を立てている様子はない。

「俺が体育なんて教えたら、ついて来られるのがお前だけになつちまうだろ」

まだにやけているジャクソンとアイボリーの廊下を進んで応接室の前まで来ると、自動でドアが開いて二人を迎え入れてくれた。校

長がもう中におり、廊下を確認するモニターでこちらの様子を確認したのだろう。

ジャクソンと未来が中に入ると、大人5人が入れれば一杯の小部屋で黒いソファアールに座っていた二人の白人男性が立ち上がるのがわかった。

「こんな辺鄙なところまで、お疲れ様です。校長のビリー・ニーミッツです。こちらは、ヘレンの担任だったロジャー・グラム」

彼らと握手を交わしつつジャクソンと未来も自己紹介をするが、二人の教師もまた、未来が特別捜査官であることに少なからず驚きを覚えているのを、隠し切れないようだった。

校長のニーミッツは恰幅のいい中年男性で、せり出した腹がベルトの上に乗っており、ワイシャツのボタンがはち切れんばかりになっている。耳の上の金髪を残して禿げ上がった頭をしているが、顔には黙っていても温かみかじみ出てくる印象があった。笑えば、さぞかし優しげに見えるのだろう。

しかし今は彼の顔はやや青ざめて、心労から若干やつれている様子だった。

「まさか、あの事件の被害者がこの学校の生徒から出るなんて、夢にも思っていないませんでした。今は多少落ち着いていますが、先週は生徒も教員も動揺が激しくて、授業どころの騒ぎではなかったのです」

4人が古い木のテーブルを挟み向かい合って座るなり、校長が溜息混じりに切り出した。

「事件以降、全体のカリキュラムや人員配置に変更はありますか？」
「授業は平常通りですが、シヨックを受けている生徒たちのために、スクールカウンセラーを3倍に増やしています。放課後の部活動も4時で切り上げさせて、その後は校内に残っている生徒が誰もいないことを確認してから、教員たちの帰宅を開始するようにしました」

未来の質問に、ニーミッツが頷いて答えた。彼女は、テーブルに置いた携帯端末のボイスレコーダー機能が正常に作動しているのを

確認してから顔を上げて質問を続けた。

「学校の周囲で、これまでに不審者の目撃情報はありましたか？」

「全校生徒にアンケートを取っていますが、事件前後は特にこれといった不審者の情報はありません。ここは、そのう、ご覧のように小さな街ですから。もし良からぬことを企んでいる余所者が入り込んだりしたら、すぐに噂になったり、不審者リストのトップに出たりするんですよ」

小さく、ぼそぼそと返してきたのはグレアムである。

彼は長身だが痩せて血色が悪く、薄手のセーターにコーデュロイのパンツを合わせたひよる長い身体からは、如何にも不健康そうな空気が漂ってくる。高めの声なのにはつきりしない話し方も、おどおどして神経質そうな印象を強めていた。

「その不審者リストが最後に更新されたのは？」

「ええと、半年くらい前ですね。うちの学生に乱暴されたとしよっちゅう喚き立てていた、虚言癖があった女です。今は別の街にある精神病院に収容されていますよ」

「なるほど。では次に、ヘレンについてお聞きします。彼女は学校生活ではどんな学生だったんです？」

今度はジャクソンが話の優先を変えた。

「どちらかと言えば大人しくて、あまり目立たない子でした。人前で意見したりするのを見たことはありませんし、彼女が他の学生と騒いだりするのも、やっぱり見たことがなかった気がします。友達もさほど多くなかったようですが、いつも仲のいい女の子と一緒にいましたね。あんな静かな子がこんなことになるなんて……今でも信じられないくらいで」

ヘレンの担任だったグレアムが組んでいる手が震えている。彼は辛そうに目を伏せると、指先で目頭を拭った。

穏やかな調子で、ジャクソンが質問を続ける。

「彼女が何かトラブルを抱えていたような様子は？友達と喧嘩をしたとか、誰かにつきまとわれて困ってるとか、家族ともめたとか。」

最近の出来事で気づいたことがあれば、何でも結構ですから、教えて頂きたいんですが」

「特に、私の耳に入ってくるようなことはありませんでした。ヘレンは少ない友達を本当に大切にしていたようですから、もめごとを起こさないように気を使っていたんじゃないかと思います。それに何かあれば、彼女はまず友達に先に相談していたでしょうし」

グレアムはそこでもう一度目をこすると、軽く鼻をすすった。グラウンドからは、フットボールや野球などの部活動に打ち込んでいる生徒たちの元気な声が響いてくる。

今度は未来が質問をつないだ。

「ヘレンは、部活動を何かやっていたんですか？」

「いいえ。体育の成績もいい方ではなくて、運動は苦手だったようです。それでも、図書館で本を読んだり、友達と一緒にいたりして遅くまで学校にいることはよくありましたね」

「文化系の部活もやってなかったんですね？」

「小さな学校ですからね。運動系はフットボールと野球とチアリーダーくらいしかありません。今季の活動も、そろそろ終わりです。文化系の活動では、正式な部でも美術部と吹奏楽部くらいしかありませんよ。ヘレンは、そのどちらにも入っていませんでした。あとは、ボランティア活動をそこそこにやっていた程度かと思います。ただ、ボランティアは課外活動になるので、我々ではあまり詳しいことは把握していないんですが」

「では、男の子の友達との付き合いはどうだったんでしょうか？」

未来がグレアムの顔を覗き込むように目線を上げると、彼は軽く首をひねった。

「さあ。生徒たちの噂話くらいしか耳に入ってきてませんからね。ヘレンも誰かと付き合い出したとか、別れたとか、たまにそういうことを聞いたりする程度でした。これといって派手な話はなかったと思います」

「恋人とトラブルになっている、というようなことも？」

「彼女が入学してからこれまでに多少あったかも知れませんが、最近は聞いたことがありませんね」

グレアムは眉根を寄せて必死にヘレンの姿を思い出している風だが、何か重大なことが喉の手前まででかかっている、という様子ではない。

恐らく彼も、ごくごく平凡な生徒だったヘレンについてはあまり多くを知らないのだろう。もしまだここで聞くことがあるとすれば、趣味のヒッチハイクについてぐらいだろうか。

「ところで、彼女がヒッチハイク中に事件に巻き込まれた疑いが強い、というのは本当なんでしょうか？」

未来とジャクソンが同じ考えに至ったところへ、校長のニーミッツが割り込んできた。

ヘレンの事件については新聞やテレビ、各種ニュースサイトの記者たちがこぞって大々的に取り上げている。捜査の妨げになる恐れがあることから、警察やFBIでは捜査過程の詳細について一切を公表しない方針だ。

しかしそれでも無遠慮なマスコミ関係者たちは、情報提供者からの情報や近隣の住民たちの噂話など、正しいとは言えないこれらの話に勝手な憶測を加え、好きなように記事を書き散らしている。

報道が加熱してセンサーシヨナルになるほど犯人を刺激し、次の犯行へと駆り立てる可能性も高まる。そのためジャクソンや未来も、ニーミッツが振ってきた話について迂闊な返答をするわけにはいかなかった。

「まだそうと決まったわけではないですよ。歩いているところをいきなり襲われたのかも知れないし、口の巧い奴に騙されて車に乗せられたのかも知れない。この事件については、今の時点でまだはっきりわかつていることがあまりないんです」

「もう2年も前から似たような事件が起こっているのにな？」

ジャクソンの丁寧な説明を流せなかったニーミッツの口調に皮肉な色が込められたが、黒人青年の丁寧な物腰は変わらない。

「どんな可能性も排除できません。我々は、様々な角度から事件の捜査に当たっています。考えられることには全て、疑いを持つてかからなければなりませんから」

「では、当面ヒッチハイクは禁止しなくてもいいと？」

「いいえ。ヒッチハイクは、素性がわからない人間と関わることになりません。状況がはつきりしない以上、考えうる危険からできるだけ離れるように、生徒たちを指導してください。もし可能なら、家族の誰かに迎えに来て貰って下校するのが一番です」

まだ嫌味が抜けないニーミッツ校長に、今度は未来が答えた。

「一刻も早く、こんなことをしてる奴を捕まえて頂きたいものですね。またうちの生徒が襲われたりしたらと思うと、気が気じゃありません」

「それは勿論です。我々は全力で犯人の逮捕に取り組んでいます。ですから、ヘレンについて何か少しでも思い出したことがあったら、最寄りのFBIの窓口までご連絡頂けますか？あと、今日まだ学校に残っている生徒たちとも、少し話をしたいのですが」

頭を横に振って溜息を漏らしたグラムに、ジャクソンはもうここで集める情報はないと踏んだらしい。グラウンドから聞こえてくる声を気にする素振りを見せながら、校長の顔を下から見上げるように姿勢を低くした。

「今日はもう運動部の生徒たちくらいしか残ってないと思いますが、それでもよろしければ構いません」

「運動部の学生に、ヘレンと仲が良かった子はいますか？」

同じ高さに視線を持ってきたジャクソンの横で、未来がジャケットのポケットからボールペンと手帳を取り出した。

「そうですね。チャリーダーに、そこそそ仲が良かった同級生のポリー・ウォードがいるかと思えます。男子については特に親しい学生がいなかったようなので」

「わかりました。お忙しいところ、ご協力に感謝致します」

未来がヘレンの友人の名前と所属部を手帳にメモする間に、ジャ

クソンが頷いて机の上に手を伸ばし、携帯端末のボイスレコーダーを停止させる。彼らは軽くニーミッツとグレアムに頭を下げた後、ソファーから立ち上がった。

「チアリーダーは、体育館でトレーニングをやっている筈ですから。帰るときには受付に一言お願いします。私たちは、ここでもう少し話をしてからオフィスに戻るのよ」

大人と子どもほどに体格に差があり、しかも男女で人種も違う珍妙な組み合わせの捜査官二人をもう一度しげしげと眺めてから、ニーミッツも会釈を返してくる。教師たちは結局、ジャクソンらが廊下に出ても立ち上がるうとする気配を見せなかった。

「どうもヘレンは、大人しくて先生の印象にも強く残ってないって感じみたいだね」

応接室の前からワックスが綺麗にかかった廊下を奥に少し進み、未来が口を開いた。体育館に通じている出口があると思しき方へ進みながら、ジャクソンも頷く。

「友達も少なかったようだから、その分話を聞かなきゃならない奴も限られてくる。しかしそんな地味な子がチアリーダーの子と仲がいいなんて、ちょっと驚きだな」

「でも担任のグレアムの話じゃ、そこそこに仲が良かったってだけじゃない。ひよっとしたら、ヘレンはポリーって子の引き立て役だったのかもよ」

晩秋の陽光が射し込む廊下を二人が歩き、小声で言葉を交わしているとき、時折テニスウェアやジャージ姿の生徒たちと擦れ違ふ。彼らは見慣れない男女の姿をじろじろ見たり、あるいは気にしないふりをしながら、ロッカーに急いでいるように見えた。

未来が卒業以来久しぶりに足を踏み入れた高校という場所は、子どもたちの汗とグラウンド土の匂いに満ちているように感じられた。「引き立て役か。つくづく、女つてのは怖い生き物だよな。自分の利益になるからってだけで、平然と友達を利用してしようと思に至るんだから。それもこんなガキどもでさえ、そういうことをするっての

は……」

「私はものたとえで言ったただけだよ。まだそうと決まったわけじゃないって」

未来が口を尖らせてジャクソンを見上げる。

主にスポーツの試合で華々しく活動するチアリーディング部は、アメリカの高校だと女子の花形になれる部活動だ。チアリーダーで活躍していたとなれば、卒業後も何かと優遇される。当然憧れて入部を希望する生徒は多いが、その際は基本的な運動能力のみならず、外見までもが厳しく問われるのが普通だ。

ポリーがどんな生徒かはわからないが、少なくとも並以上の容姿で運動もできることは間違いないし、学校の中でも目立つ存在だろう。そういう子が目立たないヘレンと仲がいいのは、正直未来にも意外だった。

「とにかく、会って話をしてみることにしようよ。でも、そうだね。彼女には私一人で話を聞きに行くことにしようかな」

「何でだよ？」

廊下の突き当たりの壁に貼られたカラフルな案内図で未来が体育館の場所を確認したとき、ジャクソンが素っ頓狂な声を返してきた。「だって、あんたは女の神経を逆撫するようなことばっかり言ってるんだもん。難しい年頃の女の子に、うまく話ができるわけ？」

「あのなあ。俺は相手がお前だから、遠慮せずに喋ってるだけだよ。考えてもみる、捜査官歴は俺の方がずっと長いんだぞ」

未来からそんなことを言われるのは心外だ、と言いたげに、ジャクソンが大きな身体を縮めるような身振りをして見せた。

「……そう言えば、そうだった」

「まあ、黙って見てろよ。一通りの年代や人種の連中に、少なくとも一度は聴取したことがあるんだからな」

ジャクソンは白い歯を見せ、これまでに何度も浮かべた人なつつこい笑顔で自信ありげに言った。多分、似たような状況で似たような相手と話をしたこともあるのだろう。

が、どうもジャクソンは、自分が女性と話をするのがあまり上手くないということに自覚していないのではないかと、未来は直感的に思っていた。これもまた根拠がないことだが、とりあえず彼女は頷いて黒人の大男の後に従った。

体育館に行くには校舎の端から端までを歩くことになり、その間の二人は大勢の子どもたちの好奇の視線を浴びることになった。ヴァージニアの田舎町に黒人やアジア人はほとんどいないし、余所者がこんな場所にまで入り込んで来ることが滅多にないせいだろう。

手入れが行き届いた校舎の廊下をどん詰まりまで歩いた先に、渡り廊下でつながった体育館があった。ジャクソンと未来が入口の自動ドアをくぐると、途端に生徒たちの元気な号令や後輩を指導する声が響いてくる。

深いグリーン色の床に幾つかのコートが赤や黄のペンキで描かれた体育館では、複数の団体がトレーニングをやっているようだった。

「チアリーダーのポリー・ウオードを探してるんだ。どこにいるかわかるか？」

一番手近なバスケットコート隅でドリブルをしていた細身の少年に、ジャクソンが声をかける。

「ああ。ポリーなら、ほら。あの一番背が小さい子。でも、あなたたちは誰だい？」

暗めの短い金髪をつんつんに立てた少年は答えながら、ジャクソンと未来に不審そうな視線を向けてきた。その間も、リズムカルにドリブルを続ける手を止めることはない。

「俺と彼女は、こういう者なんだ。ポリーに聞きたいことがあつてね」

ジャクソンは未来を隣に呼んでからなるべく目立たないように、しかしポケットから出した身分証に入ったFBIの文字がはつきりとわかるよう、少年に見せた。

「……へえ。ポリーと話がしたいなら、直接声をかければいいよ。今は顧問がいらないみたいだから」

二人がFBIの捜査官であることを知った少年の目に好奇の光が

満ち、ドリブルの調子がやや乱れたものになる。が、わざと素っ気なくもう一度ポリーの方を振り返ってから、いかにも関心がないように彼は言った。テレビでしか見たことがないFBI捜査官に興奮するような、子どもっぽい振る舞いを嫌ったせいだろう。

ジャクソンは礼代わりに軽く右手を上げてから、少年が示した人物の方へ向かった。

体育館の一番奥でストレッチをしている女子の集団が、チアリーダーング部だった。全員が学校指定の赤いトレーニングウェアで、二人一組になって身体を伸ばしたり、捻ったりしている。皆、均整が取れた体つきに適度な筋肉をつけていて、お互いの指導に余念がない様子だ。

「ポリー・ウオードさんだね？」

ジャクソンが先に少年が示した少女に声をかけると、彼女は両足を開いて床に座っている後輩らしい相手の背中を押すのをやめた。

「そうですか……何か？」

怪訝そうな表情で上げられた顔にかかる前髪を押さえ、少女のダークブルーの瞳が捜査官たちに向けられる。

大きな目に鼻筋が整った顔、無造作なポニーテールに結った髪は艶がある赤茶色で、豊かに波打っている。背は未来と同じくらい小柄だったが、細い身体は体操選手のようにしなやかで、バランスの取れたスタイルであることがトレーニングウェアを着ていてもわかるほどだ。

ポリー・ウオードは、目の覚めるような美少女だった。

「俺はジャクソン・トルーマン。FBIの捜査官なんだ。友達のヘレン・ホワイトについて、少し話を聞かせて……」

「すみませんが、あたしは話すことなんて何もありませんから。まだ練習があるので、帰ってもらえませんか？」

側に来たジャクソンの身分証が提示された矢先に、ポリー顔つきが険しくなった。敵意を湛えた視線で彼をきつと睨み、冷たさを露わにした言葉を投げつけてくる。

「ヘレンがあんなことになって、俺たちも気の毒に思ってるんだ。これ以上の犠牲者を出したくないんだよ。だから少しでも早く犯人を捕まえたい。捜査に協力してくれないか」

今度はジャクソンもポリーに最後まで遮られることなく言えたが、小柄な少女は黙々とストレッチを続けている。

「これからもつと寒くなってくるのよ。その分関節の動きが鈍くなつて、怪我もしやすくなるんだから。もうちょっとストレッチを続けた方がいいかも知れないわね」

床に開脚して座っているショートカットの後輩部員に、彼女はてきぱきした調子で言葉をかけている。まるで隣に誰もいないかのよう。に、黒人捜査官のことは完全に無視しているのだ。

頑なな美少女の態度に溜息をついて、ジャクソンは後ろで待つていた未来のところへ引き返した。

「ダメだな。取りつく島もない、って感じた。時間と場所を変えて出直すか」

「まあ、待ちなよ。今度は私が話してみるからさ」

早くも体育館の出口を目指そうとしたジャクソンを止めて、未来はチアリーダーの団を振り返った。

「大丈夫かよ？こういうときにあんまりしつこくしたら、後々響いてくるかも知れねえぞ」

「私だつて、日本じゃ私立探偵に近い仕事をしてたんだよ。交渉なら、多少は自信があるつもりだから。ジャクソンは、男子生徒に話を聞いて回つてみたらどう？女の子からの情報収集は、私がやることにして」

ジャクソンはまだ心配そうな様子だったが、未来の提案には賛同してくれられたらしく、最終的には首を縦に振った。ジャクソンがグラウンドに出ていく間に、チアリーダーたちは小休止に入ったらしい。15人ほどの女生徒たちは、タオルやポーチを手に散っていた。

その中からポリーの背中を見つけて、未来が後を追う。身体を冷やすためだろう、渡り廊下に出たポリーに彼女は続いた。

「チアリーダーって、こんなに寒くなる時期まで練習してるの？大変だね」

壁際の床に座ったところでさりげなく声をかけてきた東洋人の女性に、ポリーはスポーツタオルで額の汗を拭いながら吐き捨てた。

「あんたも、さっきの奴の仲間なの？」

「そう。私は特別捜査官のミキ・ハザマ。信用できなければ、身分証を見せるけど？」

未来はポリーから少しだけ身体を離れた場所にしゃがんで視線の高さを合わせ、穏やかな笑顔を作った。

「別にいいわよ。何も話さないのは変わらないから」

未来を一度だけちらりと横目で見たポリーはそっぽを向いて、足下に置いたスポーツドリンクのペットボトルを取り上げた。

「どうして、私たちに何も話してくれないの？」

未来は優しい調子を崩さないが、ポリーは答えない。うるさそうに額の前髪を払い、ペットボトルの中身を一口飲む。

「言いたくない？」

「当たり前でしょ。FBIだか何だか知らないけど、あたしにヘレンのことを聞きたがる連中なんか、嫌な奴ばかり……」

ポリーの表情が悲しみに曇り、後半の言葉が震えた。

「嫌なことを聞いてきたのは、地元警察？それとも新聞記者とかのマスコミ連中？」

「話したくないって言うてるでしょ！」

語気も荒く未来に言い返したポリーは、先と同じようにきつと睨みつけてきた。視線に怒りが込められているのがわかる。

「……ポリー、貴女は本当にヘレンのことを大切に思ってたんだね」「どうして、そうだって言えるのよ」

「何とも思っていない相手のために、泣くほど怒ったりできないでしょう？悲しいことを思い出させるのは、本当に申し訳ないと思ってる。私も、被害に遭った人のことを誰かに聞いていて、その場から逃げ出したいと思うことだってしょっちゅうあるから」

未来はあくまで静かに、穏やかでいる姿勢を保ったままだ。

ポリーは瞳から零れそうになっている大粒の涙をタオルで拭い、大きく鼻をすすった。

「もし警察の人たちが貴女に不愉快な思いをさせたんなら、私からも謝らせてもらうよ。辛いよね。本当にごめんね」

「あんたに謝って欲しいわけじゃないわよ。どうして赤の他人のこととで、あんたがあたしにそんなことを言ってくるわけ？」

声の調子を落として謝罪の言葉を口にした未来に、ポリーは尚も食ってかかった。

やはりこの少女は、警官からの聴取に対して怒りを感じていたのだ。

今回彼女の友人であるヘレンが巻き込まれたのは、性的な要素が絡んだ連続殺人事件だ。そのような場合は、被害者の人物像のかなり深いところまで踏み込んだ捜査が必要となる。性格や基本的な生活習慣、家族構成や友人関係は勿論のこと、現在付き合っている相手がいるのか、その相手は男か女か、風変わりなセックスの経験があるか、または付き合っている相手にそんな嗜好があったかどうかなど、普通は聞くのを憚られるような、極めて個人的なことも多い。そしてそういった質問は、やり方によっては相手かなり不快な思いをさせる。対象が年頃の女の子ともなれば、なおのことだ。犯罪捜査に携わる者は、あらゆる年代の者に対する聴取のテクニクも一通りの訓練は受けるが、残念ながら全員がそれを実践するとは限らない。

「私たちは法の番人なの。警官や保安官みたいに細かい違いはあっても、基本はみんなそう。だから全員が貴女たちのような市民を守らなくちゃならないし、仲間が犯した間違いは自分たちが責任を背負わなきゃならない。その代わり誰かが殉職すれば、みんなが犯人の逮捕を誓い合う。それぐらい、仲間を大事にしてるってこと」

「仲間を大事に？」

鸚鵡返しにポリーが繰り返したところに、未来は頷いた。

「そう、貴女が友達を大切にすると同じようにね。だから謝らせてもらったの」

未来がポリーと視線を合わせようとしたが、彼女はそれをすつとかわした。少女の様子は明らかに落ち着かないが、敢えて立ち上がり未来の前から去ろうとはしないようだった。

「それにね、事件を解決したい気持ちはみんな同じなんだよ。だから、私は貴女とこうして話をしてるわけなんだけど」

言いながら、未来はしゃがんだ体勢から腰を地面につけた。その際にもう少し身体を寄せて、ヘレンのすぐ隣に座るようにする。

「もうこれ以上、ヘレンみたいな犠牲を出しちゃいけないんだよ。でも、犯人を捕まえるためには、どうしてヘレンが狙われたのかを調べなきゃならない。そうすれば犯人がいつどこで、どんな状況で人を襲う奴なのかってことがわかるからね」

ポリーは話を続ける未来に何も答えず、目を伏せていた。形のいい唇がきゅつと固く結ばれており、視線の先には膝を抱えながら握り締められている、小さな拳がある。少女は、必死に涙を堪えているようだった。

痛ましい様子に未来は正直、これ以上事件のことについて聞き出すとするのが心苦しいくらいだ。が、今学校にいる生徒の中で一番有用な情報を持っているのが、恐らくポリーであることに間違いないだろう。

未来はポリーを刺激し過ぎないように、少しだけ顔を近づけて低く囁いた。

「犯人が捕まらなければまた誰かが殺されて、苦しむ人たちが増えることになる。それを防ぐためにも、ポリー。協力して欲しいの。お願いだから」

そのとき、苦しげに胸を押さえたポリーの青い瞳から涙が溢れ落ちた。

未来がそつと両腕を広げ、嗚咽を漏らす少女の上半身を軽く抱いてやる。この相手を抱きしめるといふ行動は日本では馴染みが薄い

行為だが、相手に掛けるべき言葉が見つからないときは効果的だ。どんなときにこうすればいいのか、未来もようやく慣れてきたころだった。

未来は腕の中の少女の思いを受け止めてやりたくて、自然にそうしたのだ。

暫し女性捜査官の肩に顔を預け、ポリーは声を押し殺して泣いた。「……あたしだって、ヘレンを殺した奴を捕まえて欲しいわ。あんなことをする奴なんか、絶対に許せない。でも男の警官に、ヘレンが変な場所で遊んでたんじゃないかとか、ドラッグをやってたんじゃないかとか、そんなことを聞かれる筋合いなんてない。あいつら、まるで殺されたヘレンのほうが悪いんだって言ってるみたいだったの」

ポリーが顔を上げないままで、悲しみに喘ぎながら本音を漏らし始めた。今まで友人を失った悲しみを抱え込んで、辛い思いをしていたのだろう。そこへ警察とは言え、男性からの無遠慮とも思えるような聴取があったのだ。多感な年頃の少女は、友人を汚されたように感じたに違いない。

やはり、未来がポリーに話を聞いて正解だったようだ。

彼女は優しく少女の引き締まった背中を撫でて、安心させるようにゆっくりと言った。

「警察も、本当は興味本位でそんなことを聞いたんじゃないよ。ただ、大人に話をするのと同じように貴女に聞いたのは間違いだと思う。そういうデリケートなことには、もっと配慮しなくちゃいけないのに」

「配慮って、どうしてくれるの？」

「まず、貴女に不愉快な思いをさせないような工夫をすること。今みたいに、女性の担当者が話を聞くようにすることかね。それにこれは捜査で大切な情報であることをわかってもらった上で話をしてもらうようにすること。最後に、必ず犯人を捕まえることを誓うってことぐらいかな」

ポリーが首にかけたスポーツタオルの端で涙を拭いつつ、上半身を未来の肩から離す。今度はポリーが未来の顔を正面から覗き込むように、じつと黒い瞳を見つめてきた。

「本当に……」

少女はそれだけ言いかけてから、改めて女性捜査官と目を合わせてくる。ひたむきな思いが込められた視線から、未来は顔をそむけなかった。

「本当に、犯人を捕まえてくれるって約束して」

「きつと捕まえて見せる。貴女の大切な友達を奪った奴を、このままにはできないからね」

頷いた顔に、暖かさと誠実さを見い出せたのだろう。ポリーは大きく息を吐いて肩を落とし、余計な力を振り落とすように軽く頭を振った。

「わかったわ。あたし、何を話せばいいの？」

「ありがとう、ポリー。貴女の話は後で纏めやすいように録音させてもらうけど、いい？」

先に穏やかな笑顔と共に礼を述べてから、未来は話を切り出した。ポリーが頷いたのを確認し、ポケットから出した携帯端末についているボイスレコーダーをオンにした。

「じゃあ、まずは……貴女にとって、ヘレンはどんな友達だったの？」

「仲のいい友達。ほんとにそうよ。ヘレンは運動が苦手だったけど、それ以前に身体もあんまり丈夫じゃなかったみたいだから、運動部に入りたくても入れなかったの。だから、しょっちゅうチアリーダーの練習も見に来てくれてたわ。あたしは補欠なのに、たまに差し入れもくれたりして。ヘレンに仲がいい友達は他にもいたけど、あたしもその一人よ。家に遊びに行ったこともあるし、お互いに悩み事の相談なんかもしたわ」

胸の奥にしまった想いを表に出し、少しは楽になったのだろう。

ポリーの語り口は静かになっている。そこに、ついこの前に起きた

ことを懐かしむような響きも混ざっていた。

「彼女は本が好きだったから……たまに、どんなのが面白いかとかも聞いてたわ。今は紙の本なんて本好きな人じゃなきゃ読まないけど、ヘレンは特に恋愛小説が好きだったみたい」

身体を動かすのは不得手で、静かに読書をするのを楽しんでいた大人しい少女。そんなヘレンが活発なポリーと接するようになったのは、自分がないものを持っていくポリーに憧れ、羨んでいた側面もあるのだろう。

未来の質問は続く。

「ヘレンは、積極的に友達を作る方だった？」

「ううん。あたしから彼女に声をかけなければ、こんなに仲良くなることもなかったと思うし。性格的に合わない人とは、あんまりうまくつき合えてなかったみたいだから」

「男の子の友達もいた？」

「多くはなかったけど、いたみたい。クラスの男子とは普通に話してたし、誰かと一緒に買い物に行ったりとかしてたもの」

ということとは、ヘレンもポリーも同性愛者ではないと言うことが未来の中で捜査から不要なポイントが削られ、整理されていく。

日本ではまだ稀なケースだが、アメリカでは少年少女の同性愛関係も珍しくはないのだ。

「さつき貴女は悩みの相談もしたって言ってたけど、恋愛の悩みなんかもあったの？」

「ええ。ヘレンが好きになるのは大体運動部で、ちよつと顔がいい男子が多かったの。あたしがやめた方がいいんじゃないか、ってアドバイスしたこともあったけど……」

対象の男子の顔を思い出しているのか、ポリーは小首を傾けるような仕草を見せた。

「やめたほうがいい、って思ったのはどうして？」

未来に突っ込まれると、ポリーは一瞬困ったように詰まってから、小さく溜息をついた。

「彼女、自分が少し知っている人なら誰でも信用しちゃうところがあつたから……その、女好きだつて言われてる男子も好きになることがあつて。騙されるだけだからやめたといった方がいって、言ったこともあつたの」

ポリーが話してくれたのは、先に未来がジャクソンから聞いたのと大体同じ内容だつた。ヘレンが大人しい性格で、騙されやすかつたのは間違いなさそうだ。

しかしそれならば、趣味のヒッチハイクでも危険な目にあつたことがあるのではないか？

未来の頭に至極当然の疑問が浮かんだが、いきなりその話をポリーに振る前に、もう少し話しやすい空気を作っておく必要がある。

未来は、ヘレンの男子との付き合いについての質問を続けることにした。

「ヘレンが最近何かにつつたとか、男の子のこととかで揉めたりとかはしていなかった？それ以外にも誰か、例えば家族とトラブルを抱えてたとか」

「前はちよこちよこ、誰かと付き合つたり別れたりはあつたけど。夏に最後の彼氏と別れてからは、特に好きな人ができたとは聞いてないわ。それに、誰かと喧嘩したつて言う話もしなかつたし」

「じゃあ、男の子と知り合うために、どこかへ行つたりなんてこともなかつたんだね」

「ないわ。ヘレンが全く知らない誰かと付き合つてことは、確かになかつた気がするの。大体が顔見知りとか、クラスメイトの男の子だつたもの」

ポリーがもう一度、軽く鼻をすすつた。

彼女はチアリーダーの練習で汗をかいており、そろそろ身体が冷えてきたのだらう。あまり長引かせずに切り上げた方が良さそうだつた。

「例えば車から知らない男に声をかけられても、そう簡単には乗らないってこと？」

「そう。ヘレンはヒッチハイクが好きだったけど、怪しい奴の車に引つかからないように気をつけてたみたい。だから、いつも女の人の車に乗せてもらって話してたわ。男の車には絶対に乗らないって、いつも言ってたもの」

その回答だけで十分だった。

ヘレンは、自分の知らない異性に対しては警戒心が強く働く方だったのだ。素早く頷いて、未来はポリーの聴取を終わらせることにした。

「じゃあ、最後。この街で、誰か怪しいと思える奴はいる？」

「そりゃあ……喧嘩っ早いのか、小さい子どもに声をかけたりする奴が、全くないってことはないと思うけど……ぱっと思いつかないわ」

「動物をいじめたり、殺したりするような奴もいない？」

「少なくとも、あたしは聞いたことがないわ」

事件現場近隣に住んでいるだろうポリーが言うのだから、そうなのだろう。

犯人は、少なくともこの街の人間ではないと言うことだ。

「わかった。どうもありがとう、ヘレン。寒いところを、長々と悪かったね。連絡先を教えるから、もし何か私に話したいことがあったら連絡してね。私がオフィスにいないときは、後でこっちから連絡できるようにしておくから」

ポリーは部活用のトレーニングウェア姿だから、当然携帯電話は持っていない。電話の通信の代わりに未来が少女に渡したのは、クワンティコの連絡先だけをとっさに走り書きしたメモだった。

「じゃあ、部活も勉強も頑張ってるね」

「あの……ハザマ捜査官」

締めくくってから立ち上がった未来に続いて腰を上げたポリーが、先とは違った遠慮がちな声を後ろからかけてきた。

「なあに？」

校舎の方へ数歩歩き出しながらも振り返った未来を、ポリーは一

瞬黙って見つめた。

そして意を決したように、少女は真摯な視線と言葉をぶつけてきた。

「ヘレンの仇を討って。お願い」

それを受け止めて、未来は力強く頷いた。

自分が事件に立ち向かう背中を見て、純粹無垢な少女が少しでも勇気づけられればいい。

そう願いながら、捜査官は足取りを確かめて体育館を後にした。

未来がジャクソンと合流したのは、校舎1階にあるカフェテリアのテーブルだった。

「へえ、大学のキャンパスにある学食みたい。新しく綺麗で、いいね」

派手なオレンジ色の椅子を引いて二人掛けのテーブルにつきながら、未来は秋の陽光が射し込む室内を見回した。

温かみがある色のインテリアに纏められたカフェテリアは、ランチタイムがとくに終了した今、殆どの食べ物がカウンターから引っ詰められている。が、食欲旺盛な子どもたちの要求に応えられるよう、マフィンやサンドイッチ、小さなピザなどを売っている一角はまだ営業しているようだった。

しかし今は帰宅時間が早められているせいで、カフェテリアの近隣からも子どもたちの声は聞こえてこない。午後4時を回った後の時間は、職員のために開けているようなものなだろう。

ここでは3ドル程度払えば、誰でも軽食とドリンクのセットを買うことできた。

「それでミキ、そっちの首尾はどうだったんだ？」

「まあまあだよ。ポリーにも話を聞けたし、図書館の職員とかからも、ちよつとしたことは聞けたから」

「ポリーから話が聞けたのか。どうやったんだ？」

目の前にある紙カップ入りのコーラを一口飲んでから、向かい合って座っているジャクソンが意外そうな顔をした。先に自信ありげに話していたのとは逆に、彼は10代の女の子からの聴取は難しいと感じているのだろう。

「あれぐらいの女の子って、複雑な年頃だからね。女の私が話すほうが、素直になってくれるってことだよ」

「ちえ。それじゃ俺は、男だっただけでもう負けが決まっちゃったって

わけかよ」

「勝ち負けとかじゃないでしょ。逆に私は、体格とか雰囲気で相手をびびらせるってことができないんだから。おあいこだよ」

ポケットの小銭を確かめた未来がそこで一度立ち上がり、売店のカウンターでホットコーヒーを買ってから戻ってきた。

「ジャクソンはどうだったの？男子から何か聞いて、わかったことはある？」

「ああ。運良く、ヘレンと付き合ったことがあるって言うフットボール部の奴を捕まえられたんだ。ただ、彼女と付き合ってた間のこととはあんまりよく覚えてないらしい。何回か食事やドライブには行ったけど、そのうちヘレンの方から連絡が来なくなって、そのまま別れちまったみたいだな。それ以上の関係にはならなかったそうだし」

ジャクソンは未来が熱いコーヒーを一口分を含むのを見ながら、手元の端末の小さなキーをいじっている。彼の声は、車の中で話していた時に比べてかなり抑え目になっていた。カフェテリアには自分たち以外誰もいないとは言え、周囲を警戒しているのだろう。

もともとやや低い声の未来も、更にトーンを落として返した。

「ヘレンは相手の外見からまず好きになって、それで付き合っつて言うパターンだったみたいだからね。付き合っつうちに相手は嫌になっつて、それで別れたんじゃないのかな。ポリー以外の女の子にも話を聞いてみたんだけど、どの彼氏ともあんまり長続きはしてなかったみたいだし」

「男をとつかえひつかえだったつての？大人しい子だつて評判なのに」

「そういうわけじゃないみたいだけど。さっき言つてたよね、ヘレンは素直過ぎるくらいがあつたつて。だから、相手の思わせぶりな態度を真に受けたりとか、よくしてたんじゃない。でもまあ、周りから見れば、しょっちゅう連れてる相手が変わるとも思われてたかもね」

ヘレンは純粹な分だけ惚れっぽかつたのだろう、と未来は考えて

いた。

とは言っても、遠くから見つめて想いを募らせ、それを友人に相談してから行動するのが精一杯だったようで、相手にいきなり告白するような大胆さは持ち合わせていなかったようだ。きつと、プラトニックな恋で満足しているところもあったのだろう。

そこが、少年と少女の恋が異なるところだ。

少年は未熟でも男であることに違いがないため現実的、肉体的な問題として恋愛を意識する。しかし少女は現実との間に繊細なヴェールをおろし、恋をまず精神的なもの、ロマンチックなものとして捉えるのだ。

「女の子たちから聞いた感じだと、ヘレンは男を連れて派手に遊ぶタイプじゃないよ。恋愛小説が好きだけど、現実の恋には疎いって言うような……」

「恋に恋する少女か。やれやれ」

ジャクソンは辟易としたように、両肩の横で手のひらを上に向けてかぶりを振った。

「だったら、うかうかと騙されて殺された可能性も否定できないな。相手が小汚い身なりで如何にも怪しい奴だったら警戒されるだろうが、スーツにネクタイで営業から戻る途中の会社員だって言えば、大抵は信用される。相手は世間知らずの子どもなんだから、簡単だったろうさ」

「そこなんだけど、ヘレンはヒッチハイクじゃ、女の人の車にしか乗らないっていつも言ってたみたいなんだよ。顔を知らない男に対しては、普通に用心深かったみたいなんだよね」

未来の指摘に、ジャクソンは驚きと疑いの色をない交ぜにした視線を向けてくる。

「まさか、犯人は女だとも言うのかよ？ 今回の事件じゃ、女の連続殺人犯の犯行パターンには当てはまらないぜ」

世界の犯罪史上、女性による連続殺人事件も例がないわけではない。ただしどの事件でも毒物の使用、放火、子どもへの暴行や高所

からの突き落としなど、単純な殺害が殆どだ。ティアーズのように、性的な目的で死体に過剰な暴力を加えるケースは皆無に等しい。

それに一連の犯行では、死体の処理に専門知識が必要なロボットの操縦が不可欠だ。アメリカのロボット工学やロボットを扱う職場は従業員の殆どが男性で占められていることを考えると、女性が犯人である可能性は更に低くなるだろう。

だが、今の段階ではどんな可能性も捨てきれない。未来は考えを巡らせながら、ゆっくりと顎の下で両手を組んだ。

「あるいは、女の共犯がいるかだけだ。カップルの車になら、ヘレンだって安心して乗っただろうしね」

ヘレンがよくヒッチハイクをしていたと思われる界限では、既に地元警察による聞き込みが徹底的に行われたが、彼女を過去に乗せたことがあるというドライバーにはまだ巡り会えていない。加えて、今のところ目撃者も見つかっていなかった。

「それに犯人が男だったとしても、自分が非番の警官とか、保安官だって言ったらわからないじゃない。制服なんかはネットで本物も流通してるし、身分証だって偽造しようと思えば出来なくはないんだから」

「犯人が知り合いだった可能性も、否定はまだできないが……正直なところ、犯人がこれまでの被害者全員と顔見知りだったとは、どうしても考え辛いんだよな」

チームの新人りがもつともらしく述べるのに負けじと、ジャクソンが別の可能性を示して見せたが、すぐさまそれを自分で否定した。一連の事件での被害者は人種も性別も、年代や職業までも全てばらばらだ。比較的若い被害者が多いとは言えるが、外をうろつく頻度が若年層の方がずっと高く、そのため犯罪の犠牲者となる確率が高いというだけだ。大した根拠にはならないだろう。

CVCの性格分析官であるポールも触れていたが、ジャクソンにも犯人の行動には一定のパターンというものがないように思えてならなかった。

犯人はどんな基準で被害者を選んでいるのか？

殺人に至るまでの間、一体何をしようとしたのか？

捜査を進めていく上で、犯人像をこういった情報から絞るのは非常に重要だ。

しかし、最初の殺人から一向に捜査が進展しないのは、いずれのケースでもここで引つかかっているせいだった。犯人の人物像がある程度掴めなければ、何を捜査の糸口にすればいいのかが見えてこないのだ。

被害者の身体についていた目に見えない微物の共通点から、辛うじて同一犯による犯行でありことは断定できる。しかし、犯人を特定できる情報に結びつきそうなものは今のところ、見つかっていない。

微物類も、バージニアではごくありふれた植物の種やクマネズミの糞、扱っているスーパーパーがそれこそ五万とあるキウイの皮やオートミールクッキーのかけらなど、どれも決定力に欠けるものしかなかった。

クッキーのかけらについては犯罪科学研究所の化学班が分析を進め、成分からメーカーを割り出そうとしているが、これについてはまだまだ時間がかかる。そしてメーカーが特定できたとしても、それを足がかりにしてやはり地道な捜査を続けるしかないのだ。

つまり、しらみつぶしにそのクッキーを扱っている店を調べ、他の遺留品との関係を調べるのである。この作業には、地元警察の協力も不可欠だ。そしてこういった捜査には、基本的に戦闘チームは関わらないことになっている。

地道な捜査が続けられている間に、何か他の手がかりを探し出すしかないのだ。

ジャクソンは面白くもない堂々巡りに陥りそうになことに小さな苛立ちを覚えたのか、深く腕を組んで背中を椅子の背に預けた。

一瞬の沈黙の後、薄めのコーヒード喉を湿らせた未来が口を開く。「ヘレンはバーみたいに危ない場所に入入りもしてなかったし、ド

ラッグを売るような不良とも付き合いがなかったんだよね。普通なら、最も犯罪の被害から遠いところにいる子なのに」

「こんな事件の被害者になったのは、本当に不幸だとしか言えないな。犯人は、どっか頭がおかしい野郎だ。こういう連中は、人を殺すのが楽しいから犯行を重ねる。誰もが殺される可能性を持つてるわけなんだからな」

未来の溜息をつくような言葉の後ろに、ジャクソンが余計に気分が重くなりそうな内容を重ねてきた。コーラを飲み干して空になった紙カップを大きな手で握り潰し、8ヤード（約8メートル）は離れたごみ箱へと投げ入れる。

「他の被害者も同じことが言える。後の5人も危険な仕事をしていたり……例外は売春婦のセシル・ジョーンズぐらいだが、事件に巻き込まれた当時は全員が、顔を知ってる奴とは一緒にいなかった。そこは確かだ」

ジャクソンが投げた紙カップは、ごみ箱へ見事に吸い込まれた。未来は自分のプラスチックカップを投げることはせず、一旦席を立つてごみ箱に捨てに行った。

「そこでまた振り出しに戻っちゃうんだよね。犯人は頭が良くて慎重、被害者は行き当たりばったりではなく、ある程度は狙いやすい相手に目をつけて狙う」

「そして、被害者や現場にははつきりとした痕跡を残さない。何一つな」

戻ってきてテーブルの横に佇んだ未来の顔を見上げながら、ジャクソンが立ち上がった。たちまち、二人の目の位置関係が上下逆になる。

「生徒たちとの話は録音してるか？」

「当たり前でしょ、そんなの」

大柄な黒人捜査官から頭のとっぺんよりも高い位置から見下ろされて、未来はむっとしたように答えた。

「携帯端末か、お前の身体のメモリーか、どっちだ？」

ジャクソンは茶化した調子でなく、真面目に聞いてきているようだった。未来は首の後ろにあるスロットにメモリを挿せば目で見たものはそこに記録できるが、ジャクソンは聞こえた音を記せるのだろうか。落ち着かない調子で未来が答える。

「私、そんな機能ついてないよ。あんたにはあるの？」

「あるわけねえだろ、そんなもん」

あっさりと返し、ジャクソンがカフェの出口を指して歩き出す。

「じゃあ、わざわざ聞かないでよ」

「見た目じゃわからないから聞いたんだよ。エマやトリスならわかるかも知れないけどな」

「あのねえ。見た目でわかったら、何のためのサイボーグかわかんないでしょ」

未来は自分より16インチ（約40センチ）近く背が高いジャクソンの歩調に追いつこうと、慌てて彼の後を追った。彼女がカフェテリアの洒落た自動ドアから廊下に出たところで、立ち止まっていたジャクソンからとぼけた言葉がこぼれる。

「言われてみりゃ、それは違わねえな」

頷いたジャクソンの向こう側で、怪訝そうな顔をした若い白人の警備員が通り過ぎた。もう生徒たちは殆ど下校済みなようで、校舎内は静かなものだ。あの警備員は最後の見回りをしていたのだろう。未来が聞き耳を立ててみても、子どもらしい話し声は聞こえてこなかった。

警備員からしてみれば、ばかでかい黒人男性と子どものようなアジア人女性の組み合わせなど、FBI捜査官でなければ不審者以外の何者にも見えないに違いない。

「まあ、携帯端末に録音してるなら、クワンティコに戻っても確認できるな。あんまり遅くまでここにいっても追い出されるだけだし、とつと次の目的地に行くとするか」

その警備員に手を上げて挨拶を送ると、ジャクソンは最初にくぐった職員用の出口の方に伸びる廊下へと踵を返した。

「そつだ。帰りに、俺の情報提供者の店に連れて行ってやるよ。そこで一杯やりながら、飯でもどうだ？なかなか旨いチキングリルを食わせるんだ。ちょっと辛めのバーベキューソースがまたいけてて、ビールをの飲まずにいらなくなるんだぜ」

職員玄関の窓口にいた受付嬢に帰ることを告げ、暮れ始めた陽光の中に踏み出すなり、ジャクソンが振り返って言った。

「そりゃいいけど、クワンティコまでちゃんと送ってくれなきゃ困るよ。私、飲んだときには運転したくないから」

未来はもともと酒にあまり強くなく、肝機能まで強化されているわけでもない。バージニア州は日本と違って飲酒運転の罰則がないが、少しでも酒気を帯びたときはハンドルを握りたくなかったのだ。「ああ、それなら心配するな。俺はクワンティコに住んでるから、目をつぶってたってお前をアカデミーまで送って行けるよ」

駐車場までせかせかと歩きながら、屈託なくジャクソンは笑った。もう足元がかなり暗くなってきたが、二人のサイボーグは闇視フィルターをオンにすることで、周囲を昼間と同じように見渡すことができる。

目指すジャクソンの捜査車両であるダークグリーンのプリウスは、土埃が舞うグラウンドを背にして黄昏に溶けるようにひっそりと佇んでいた。その周囲に怪しい人影はなく、瞳のズーム機能を使ってドアを確認しても、特に不審な点はない。そして感度を上げた聴覚にも、妙な音は聞こえてこなかった。

ジャクソンは、車に乗る前はいちいち異常がないかどうか確認することが日常の一部になっていたが、未来もようやく習慣として一連の動作を身体に馴染ませつつあった。

こういう時、普通ならもっと車の側に行って車体の下を覗いたり、ドアや窓に何か仕掛けられていないかを見るものだが、サイボーグの二人は身体のセンサーをちょっと使うだけでいい。その点では便利な身体だと言えるだろう。

どちらからともなく無言で頷き、二人のサイボーグ捜査官はプリ

ウスに乗り込んだ。

彼ら二人をまとめて殺そうと思うなら、対空機関砲並みの破壊力がある重火器と軍の大規模部隊が必要になるだろう。

しかしそれでも犯罪を未然に防ぐことはできないし、何人も人を惨殺しながら、まんまと逃げおおせている犯人を易々と捕らえられるわけでもない。

このジレンマは、ジャクソンと未来が揃って感じていることでもあった。

バー「ホワイトクロウ」は、スタットフォードの中心を外れた街道の奥にぼつんと構えられた店だった。

周囲には何年も前から使われずに放置された、埃を湛えた倉庫しかない。店の入り口である錆びた地下階段への降り口にも、トン板に緑のペンキで店名を書きなぐった粗末な看板が出ているだけだ。知っている者でなければ、路地の暗さに溶けた文字を見過ごして素通りしてしまうだろう。

しかし階段の突き当たりにある頑丈な鉄のドアをくぐると、客は内と外とのギャップにちよつとした驚きを覚える。小さなDJパーティが開けるくらいの広さと音響設備があるホール、古いながらもしつかりとした木のカウンター、食欲を刺激する肉料理の香りが漂う厨房を備えたバースペースが出迎えてくれることは、いい意味で客を裏切るのだ。

そして席はホールを埋める小さなテーブルとスツールのセットの他に、壁際を埋める仕切りつきのボックス、オーナーであるルイと話せるカウンターとがある。

夕食時を少し過ぎた今現在、店内は男たちが低く囁き合う声と有線放送のジャズ、たばこや葉巻から立ちのぼる紫色の煙、そして酒と料理の匂いに満ちていた。

その空気で胸を一杯にしたいのだろうか。カウンター席についていたジャクソンが深く息を吸い、飲み干したビールのグラスを置いた。

「それにしても、本当にここはいつも通りで変わりばえしねえな。ほっとするぜ」

「メニューは毎週、お勧めを変えてるわよ。お酒だって、あたしの好みで色んなのをちょこちょこ入れ替えてるんだから」

薄手の白いブラウスにえんじ色のサロンエプロン、細身の黒いズ

ボンといういでたちでカウンターに立つオーナーのルイが、ジャクソンの言い種に濃いルーージュをつけた唇を尖らせた。

「褒めたんだよ。酒も料理もいつも最高だって思ってるんだからな」
「それなら、もうちょつと言いい方を素直にした方がいいわよ。そのうち、彼女からも怒られかねないからね」

笑って返してきた黒人青年にルイが言ったことは文句に近いが、顔と声は怒っていない。その間も休まずに手を動かしてグラスを拭いて逆さまにし、カウンターのの上にかかったグラス台へ次々とかけていく。

「ドクターは、初めてよね。ジャクソンのお連れ様だし、あと一杯はあたしの奢りにするから。何でも好きなのを飲んでちょうだい」
「いや。僕は30分くらい運転して帰らなきゃならないから、コークでいいよ」

ジャクソンの隣に座っていた杉田が、妙に愛想とサービスがいいルイに困ったような笑顔で答えている。彼は、まだ半分ほど残っているジンジャーエールのグラスを持って余しているようだ。

「ドクターを酔わせようと思って、ラムを入れても駄目だからね。そしたら、私がもらっちゃうんだから。あ、私はボストン・クーラーがいいな。私もジャクソンの連れで初めてなんだから、当然奢りなんでしょ？私、甘くないほうが好きだから、ガムシロップは少なめにしてもらってもいい？」

「やあね、あたしはそんな回りくどいことしないわよ。睡眠薬を入れた方が手っ取り早くていいじゃないの。お嬢ちゃんのボストン・クーラーは今作るから、ちょっと待っていてくれる？」

更に杉田の横に座っていた未来が突っ込んでくると、ルイは白い歯を見せて笑ってから新しいグラスを取り上げた。

バー担当兼オーナーのルイス・フィードラーは杉田と同じくらいの背丈だが、体格のごつさが目立つ若い黒人だ。

それも、肩まで伸ばしたボリュームのある髪をひつつめたルイが男性であることを考えれば、当たり前だろう。しかし店内が暗いの

と、アメリカでは彼くらい体格をした女性も珍しくはないため、声を聞くまで性別がわからないくらいだ。

そしてこの店はオーナーと同じく女性になりたい、あるいは女性になりきった男性と、主に同性愛者たちの溜まり場になっている。店構えは小さく辺鄙な場所にあるが、同好の志の間では名の知れた店でもあった。週末でもないのにフロアが人で溢れ返っているところを見ると、それも嘘ではないことがわかる。

ゲイたちの本場としてはフロリダ州のキイ・ウエストが有名だが、アメリカのどこにでもそういった愛の形を持つ人々はいる。彼らも本当なら楽園とも言われるかの土地で暮らしたいだろうが、なかなかそうはいかないのが世の常だ。周囲の人々から向けられる偏見と差別の目を避けて愛する相手を見つけたり、語らったりするには、どうしても場所が限られてしまう。

ホワイトクローは、そんな場所の一つだった。

ジャクソンと未来は、フレデリックスバーグとクワンティコの間に位置するこの店で夕食を食べるにつけ、電話で研究所にいる杉田を誘っていたのだ。

「二人とも、現場まで行ってきたんだ。何かわかったことはあったのか？」

ルイがラムのボトルキャップを捻る傍らで、杉田はジャクソンと未来を交互に見やった。

「特に何も無い。俺たちに言えるのは、ヘレンが最後に友達と別れた場所以外じゃ、もう目撃者は期待できそうもないってことだ」

ジャクソンが杉田と未来の方に顔を寄せて、それでも大きめの声で言った。そうしなければ、周囲の喧噪に負けて隣にさえ声が届かないからだ。彼らが座っているカウンターは椅子が4つしかないため、話の内容は他の客に聞こえる心配がないし、客たちも他人のこととは全く気にかけない。

もっとも、客がジャクソンたち3人のことを気になる相手として見ていれば話は別だが、異性同士の組み合わせで来店している時点

で、その可能性も極端に低くなる。

そういった点で、ホワイトクロウのカウンターは密談に向いているのだ。

そしてオーナーのルイは、ジャクソンの情報提供者の一人でもあった。彼は気を使ってくれているのだろう、3人で話し始めてからは少し離れた場所で未来のボストン・クーラーを作り、杉田のコーラと一緒にカウンターの隅へ置いた。

「ヘレンが友達と別れた場所は、ウエスト・メイン・ストリート沿いのところだ。車はそこそこに通るけど人気はないし、店もないんだよ。今のところ、警察からも情報が入ってきてないし」

未来が店に来る前に確認してきた景色を思い出しながら、空になったサンドイッチプレート皿のカウンターの隅に押しやる。入れ替えに、ボストン・クーラーとコーラのグラスを取った。

彼女がジャクソンと最後に立ち寄ったのは、ヘレンが犯人と出会ったのであろう場所の近隣だった。ウエスト・メイン・ストリート沿いに二人で暫く歩いてみたが、時折工用大型ロボットを積んだトラックが通る以外に人通りがない住宅街の外れで、暗くなってから一人で歩くには遠慮したいと思えるような道なのだ。秋も終わりのこの時期は日が暮れるのも早し、街灯もろくになかった。

ヘレンがそんなところで車を拾おうと思ったのは、そこが抜け道になっていて、地元のドライバーがよく通るのを知っていたせいだったらしい。今は厳しい検問と警察の捜査のために流れが悪くなっているが、そうでない時は意外に車が多い道だというのだ。

ただし車は多くても、街灯が少ない寂しげな場所であることに変わりはない。ヘレンが今まで幾度となく同じ場所から無事に帰っていたのは、単に運が良かっただけだったのかもしれない。

「あの道は地元の奴しか知らないような場所だ。だからやっぱり、ある程度は土地勘がある奴の犯行じゃねえかと思う」

「それじゃ、犯人は自分がよく知っている土地で被害者を拉致するっていうリスクを冒したことになるけど、僕にはとてもそうは思え

ないな。少なくとも犯人は被害者を無傷のまま、全く抵抗できないようにするだけの頭と、慎重さがあるんだ。ヘレンを襲ったのはたまたま条件が整っていたからで、全くの偶然なんじゃないか」

ジャクソンが上目遣いで顎を撫でたところへ、杉田が考えを率直に述べた。彼らも目の前にあるステーキとチキングリルの空になった皿を重ね、カウンターの隅へ置いている。

「勿論それはそうなんだけど、被害者が最後に目撃されたのが今回はたまたまそういう場所だった、っただけじゃない？そもそも彼女がウエスト・メイン・ストリートで犯人と接触したかどうか、はっきりしないわけなんだし」

意見の違いから交互に視線を交わす男たちの間に、未来が割って入る。

「それに、あの道の寂しさだもん。歩いてるうちに急に心細くなって、たまたま来た犯人の車に乗ったっただけかも知れないんだから」
ウエスト・メイン・ストリートは、10分も歩けば少し大きめの通りであるサウス・マディソン・ロードに出る。監視カメラの画像やヘレンの目撃情報がないのだから、このことを問題にするのは多少筋が違う気がしたのだ。

それはジャクソンも同じだったらしく、まだ瓶に残っていたビールをグラスに注ぎながら、溜息をついて見せた。

「くそ。この調子で色々考えてても、本当に埒が明かねえな」

「そりゃ、この状況なんだから仕方がないさ。まずは、はっきりわかっていことから整理するのがいいだろう」

杉田も心情としては似たようなものらしかったが、研究者らしい発言がその場の空気の流れを変えた。幸いここにいるのは、起こった事実全てを証拠から再構築し、理論で説明するプロたちなのだ。

「じゃあ、まずは犯人の目的だよな。彼は、一体何がしたいのか？」「犯人はまず男だと思っただけなの……」

「今回の事件じゃ、犯行のパターンが女の連続殺人犯に当てはまらないんだ。彼でいいだろ」

未来が改めて口火を切ったところで杉田が口を挟んだが、ジャクソンが制した。

「うん。彼の目的は、まず被害者から金品を奪うことじゃないよね。札入れとかは盗られてたけど、小銭しか持ってなかつたような被害者の財布まで漏れなく、なくなってるんだから。むしろ、物盗りの犯行にみせかける小細工なんじゃないかな」

「それに金目当てにしちゃあ、被害者への暴力が半端ない。金欲しさついでに殺した相手の身体をちぎる奴なんざ、今までお目にかかったこともねえよ」

未来とジャクソンは、そこで揃って自分の酒に口をつけた。未来のポストン・クーラーは、ホワイトラムをジンジャーエールとレモンで割った、爽やかな酸味があるカクテルだ。残念なことあまり知られていないカクテルだが、それでも間違いない味を出してくれるルイは、知識も心遣いも一流だと言えるだろう。

「となると、やっぱり目的は殺人そのものってことになるな。その辺りはポールに詳しく聞いた方がいいだろうけど、少なくともまともな神経の奴じゃない」

二人に倅い、杉田もレモンがグラスの縁に飾られたコーラを飲んでから口を開いた。

隣にいる彼を見やって、未来が頷く。

「で、被害者は必ず身体の一部を切断されてるんだよね。でも性的な暴行を受けた形跡はないし、直接本人に繋がるような証拠を残していないってことも共通してる」

「やることなすこと無茶苦茶な異常者なら、まずそんなことはないはずだ。そういう奴は自分のDNAが残ろうが、指紋が残ろうが、気にするってことを一切しないんだから。むしろ、こっちが何を手がかりに捜査するかをある程度は知ってるんだろう。だから証拠を残さないよう、異常なまでに気を使ってるんだ」

杉田の口調がやや、荒っぽくなる。考えてみれば、彼はDNA分析官として毎日血染めの衣服や、人間の組織がこびりついた岩とい

った証拠品を扱っているのだ。被害者が味わった苦痛の跡を嫌と言うほど目にはしているのだから、犯人に対して怒りが募るのも当然だった。

そして杉田は、研究所で他の検査官たちと話をする機会も多い。この犯人像も、CVC性格分析チームの主任検査官であるポールから幾度となく聞いた話なのだろう。

「そう、指紋がないのも妙な話だよな。遺体があんなに血まみれなのに」

「死体はロボットのアームを使って切断された可能性が高いんですよ？確か、ポールがウォーリーが言ってたじゃない。犯人は指紋を残さないように、もしくは残ったものも処理したんじゃないかって」ジャクソンが眉根に皺を寄せ、未来が幾つかの現場画像を思い出しつつ煙で汚れた天井を見上げた。

やはり犯人はかなり計画的で慎重、そして冷酷という人物像が浮かび上がってくる。遺体に何も残していないということは、犯行中もそのことに対して極度に気を使っていたということに他ならないのだ。

被害者が上げていたであろう断末魔の悲鳴や命乞いの絶叫、大量に飛び散っただろう生暖かい血液と、気分が悪くなるような内臓の臭いも全く気に留めることなく、である。

今ここにいる大勢の人間と姿形は変わらないのに、殺人鬼の心の中は考えたくないほどにおぞましい。人の皮を被ったモンスターという表現がこれほど相応しい人種は、他にいないだろう。

思わずぞくりとした未来は、鳥肌が立っている両腕を手で擦った。今までに凶悪犯と何度も相対しているジャクソンは、もう慣れているのだろう。グラスで泡立っているビールの表面を見つめ、低い声で漏らした。

「そうだな。刃物を使って切断すりゃ、何を使ったかが傷口からばれるかも知れない。それに、折れたり欠けたりした刃が残るかも知れない。場合によっちゃどのメーカーかも特定されて、そこから

足がつくことだってある。考えてみりゃ、死体を痛めつけるために引きちぎるって言うのは最適な手段なのかもな」

酒を飲みながら続けるにはあまりにも陰惨な話題だとは思うが、全くの素面ではやっていられないとも思う。古い木のカウンターをさまようジャクソンの視線には、そんな気持ちが読み取れた。

「建築用や工事用のロボットは、バージニアだけで何万台とある。違法に作られたものなんかは州のデータベースにも正式登録されないから、仮に犯行に使われたものがあつたとしても、特定するのが難しくなるしね」

「確かに本体を綺麗にしちゃえば、見た目は少なくとも怪しくはならないもんね。汚れた工事用のロボットを洗ってたって、誰も疑う人なんかいないだろうし」

杉田が一気にコーラを飲み干してから言った隣で、未来は舐めるようにポストン・クーラーをちびちびとやっていた。

ホワイトクローに辿り着くまでの道すがら、彼女はトラックの荷台に積まれた大型ロボットを何度か見ていた。大体は、ブルドーザーやクレーン車のアームを細かい作業が可能なロボット用にすげ換えたようなつくりで、人型をしていなかった記憶がある。そのアームも建築資材を挟めるように大型のクリップ状になっているか、互い違いに組み合わせた半円状の金属を開閉させる方式になっているかのどちらかだった。

そういったロボットは操縦席も一人用のみとなっており、個々の違いは土台が4輪以上の車輪か、複数のキャタピラになっているかぐらいだ。もしアームが違法なものだったとしても、素人目にはわからないだろう。

アメリカでは寒暖の差が激しい地域も多く、そういったところは道路の補修工事が頻繁に行われ、使われているロボットも相当な台数に上る。真っ当でない業者は違法製造された安価なロボットを多く導入しているだろうし、そういった意味では工事用車両を調べる以上の手間となることは間違いなさそうだった。

「逆に、血の汚れを泥でカムフラージュすることだって可能だ。それにそういうロボットは、工用だけでも限らないだろ。改造されて、食肉処理場とかで使われてるのだってあるかも知れない」

「もしそんなのがあったとしたら、本体が血や肉にまみれてたつて別におかしくはないってことになる。僕みたいな医者だって、血液の成分は検査しなければ人間のものだとも言い切れないし」

そこへ、ジャクソンと杉田のげんなりするような推測がねじ込まれてきた。

こうなるとますます、犯行に使われたロボットを特定することは容易ではないと一同に思えてくる。ふと思いついたらしく、未来が言った。

「遺体には、アームで掴まれたところに傷があったんでしょ。その形とかから、機種だけでも特定することはできないの？」

「僕もちよつとトリスに聞いてみたけど、どの種類のロボットもアームは取り外しが利くようなんだ。恐らくは改造されたアームが使われたんだろう、って話なんだよ」

杉田は被害者の身体についていた傷を思い浮かべた。

身体をちぎられた際に掴まれていたと思しき傷は皮下出血と擦過傷、つまりは痣とすり傷だ。

大型ロボットのアームは、大半がスチールに錆止め用の塗装が施されたものだが、被害者の皮膚や衣服からは何の痕跡も見つかっていない。普通、皮膚や服を強く掴んで擦れば、そこにアームの塗料や錆のかけらなどが残る筈なのだ。それが見つからないと言うことは、アームに何か特殊な加工が施されているか、死体処理時に皮膚や衣服に触れる箇所が保護されていたと言うことになる。

杉田が調べた限り、どのロボットのアームもゴムの部分的な滑り止め加工がある程度だった。市販されている一般的ものでは、全面が保護されているものは手に入らないのである。

「本体は違法製造、アームも改造品だったら、もう完全にお手上げってことになるな。銃や刃物を使われるよりも厄介だ」

「多分メーカーに問い合わせをしても、協力は期待できないだろうしな」

「……何で？」

むっと角を立てたくなるような杉田の一言に、未来が顔をしかめた。

「簡単だよ。自社で開発したロボットが連続殺人に使われてるなんてことがわかれば、それだけでメーカーのイメージはがた落ちするのが目に見えてるだろう？どこの会社でも、自分のところの製品じゃないって言いたいだろうから」

「そうだな。ただでさえ、ロボット絡みの犯罪はいい目で見られることがない。まあ、そんなのを捜査する俺たちもそうなんだけどな」杉田に続いてジャクソンからも意外と言える話が出たことに、未来は驚きを隠せなかった。

「CVCはメーカーからも、市民からも嫌われるってことなの？」
「いや、市民からの理解はまあまあ得られてると思う。問題なのは一部の政治家だよ。ロボット導入推進派の議員には、ロボットが使われた犯罪を暴きたてるなんてもってのほかだ、って言う連中もいるってことなんだ。彼らのスポンサーには、大手のロボットメーカーがついてるから」

パートナーの青年医師から説明されたことは一見矛盾しているように聞こえるが、ちょっと考えれば実はそうではないことわかることだった。

一般的な理念から行けば、国が十分な下地を準備してから新たな制度に踏み切ることが理想とされるが、残念ながら現実はそのをよしとしない者も多い。とにかく周囲に自分のやることを先に認めさせ、不都合なことにはお茶を濁しつつ態勢を整えるほうが、コストも少ないし時間も早いのだ。

アメリカ社会へのロボット本格導入は、ここ数年ずっと議論が繰り返されている社会問題だ。ロボットの悪用が疑われる今回の連続殺人事件には、当然社会からの関心も極めて高くなる。コストを抑

えた早期の政策を打ち出した議員にとって、CVCはジレンマの固まりのような組織だとも言えるだろう。

「確かに、今までになかったタイプの犯罪だもんね。少なくとも、ロボットが世の中に出始めたのはここ10年くらいの話のわけなんだし。でも、何か新しいことをしようとすれば、それなりのリスクが付きまとうのは当たり前のことなのに。車や飛行機が初めて出てきたときだって、同じような状態だったと思うんだけどな」

頷きながらも、未来の表情には納得の色がない。

昔に比べれば社会のインフラ機構は飛躍的に発達し、新しい技術の導入もスムーズに進めることはできる。しかしだからと言って、途中課程を飛ばせるわけではない。市民や、その代表である政治家たちの理解を得るのは、資金調達と同じウェイトを占めるのは変わらないはずだ。

そのことから敢えて目を逸らす者たちの、何と多いことが。

「もし俺と未来がロボットみたいな外見の捜査官だったら、そりゃあ世間からの風当たりも強かったろうさ」

ジャクソンも皮肉を交えてうそぶいたが、今は政治に対して文句を言っている場合ではないことは、一同が承知している。未来が顔を上げ、意識して声のトーンを高めた。

「話を戻そうよ。ええと、犯人が自分に結びつくような証拠を何も残してない、って辺りだっけ？だから、それなりに犯罪捜査に関して知識がある奴だっるところ」

「しかし考えてみれば、犯罪捜査で指紋やDNAが重要な手がかりになるってことぐらい、今日び中学生だって知ってることじゃねえか？だから、さして知能が高いとも言えない気もするけどな」

「でも今までに5人も殺されていて、誰からも何も見つからないんだ。ちよつと普通だとは……まあ、人を殺してる時点でまともだとは到底言えないけど、とにかく特殊だと僕は思う」

ジャクソンと杉田もそれ以上は話を引かず張らずにいってくれたが、やはりどうも同じところと同じ壁に当たってしまうような気もして

いた。

未来はまだ担当になった初日だし、ジャクソンや杉田も似たようなものだ。結局はもつと様々な資料を揃え、現場に足を運び、人に話を聞いて、様々な角度から分析を進めなければならぬのだ。

「とりあえず今はつきりしてるのは、異常者の犯罪だってことぐらいか。面白くねえな」

「明日本部に出勤したらもう一度、証拠品や現場の画像を見てみよう。何か見落としてることがあるのかも知れないし」

オレンジ・ハイス쿨のカフェテリアで未来と交わした会話から全く進展がないことに、ジャクソンが本当に面白くなさそうな仏頂面を見せていた。その後には杉田がスツールの背にかけてあったコートを取り上げ、10ドル札を財布から取り出す。

「私は明日NOTSの訓練だから、今晚中に見られるところは見ておくようにするよ」

「訓練は5時からだっけ？あんまり無理しないで、早く寝るんだぞ」「わかってるよ。私だって、子どもじゃないんだから」

帰り支度を始めた杉田に倣い、黒いジャケットの内ポケットを探った未来だったが、心配そうな様子を見せた彼に思わずむきになりかけていた。

しかし、次の瞬間には平静な表情に戻ると、まだ離れた場所に立ってカクテルを作っているルイを呼んだ。未来もいっぱしのFBI捜査官らしく、オンとオフをきっちり使い分けることにどんどん慣れていっているのだ。

「物騒なお話は終わったのかしら？また、いつでもいらっしやいな」
各々からチップを含めた代金を受け取ると、彼はハスキーな声と共ににっこりと笑って見せた。その笑顔が美しいかどうかは別な話だとして、まるで古くからの友人のように接してくれたルイには、初対面の杉田と未来も好感を持ったのだ。

ところが、がっしりした鉄のドアを後ろ手で閉めて店から数歩歩いたところで、ジャクソンが杉田の脇を肘で小突いた。

「おいドクター、ルイには気をつけるよ」

「……何を？」

「あんた、ルイの好みのも真ん中ストライクなんだよ」

ジャクソンの声と表情は真剣だった。

「あいつは、男も女も平気で食っちまう奴なんだ。ほいほいついて行かないようにな」

次にジャクソンが発した言葉には多少からかうような響きが混ざりながらも、顔が完全に笑っているわけではない。

眼鏡をかけた細身の青年の繊細な顔から、軽く血の気が引いたようだった。

翌日から参加することとなったNOTSの訓練は、間違いなく未
来の心身をすり減らした。

訓練自体は開始から5週を過ぎた辺りで、教官から短く素っ気な
い紹介をくつつけられただけで、彼女は猛者たちの中へと放り込ま
れたのだ。当然のことながら、人質救出チームの新人たちがそんな
ちびのアジア人女とまともに付き合おうとするわけがない。

NOTSはHRTの新人訓練課程と言っても、先輩隊員からの評
価が低ければ振るい落とされる過酷なものだ。

迷彩服を纏い、実戦時の装備と同じ重量の砂袋を背負って、仲間
と行うマラソン。

2階建てのコンクリートの建物に敷き詰めた濡れ藁に火をつけ、
黒煙が立ちこめる中に強行突入し人質を救出する火災訓練。

チームメンバー全員で、ヘリコプターから森林にロープ一本で次
々と降下するラペリング。

ずっと単身で破壊工作や戦闘訓練を受けてきた彼女にとって、1
日16時間の訓練は、いずれも生まれて初めての経験だった。まる
で軍隊さながらの内容だが、HRTが軍と決定的に違うのは、「人
命最優先。可能であれば一発の弾丸も撃たず、事態を収束させるこ
と」の一言に尽きるだろう。

テロリストや、女子どもを盾に取る犯罪者を殺すことが任務では
ない。

状況を瞬時に判断し、発砲しないだけの冷静さを身につける。
常にプロフェッショナルであり続ける。

自分たちが放つ一発一発の弾丸にどれほどの重さがあるのか、国
家権力の下に武力を振るうことが、全米を始めとした世界にどれだ
けの影響をもたらすのか。

それを常に忘れるな。

訓練を受け出した未来が、初日に叩き込まれたことである。

先日ジャクソンと行った模擬戦闘で、軍隊式の戦い方は忘れろとバーニイが言った。

そのことを身体に、心に染み込ませるために、彼は未来をFBIで最も厳格なHRTへと蹴り入れたのだ。

HRTは個人の戦闘能力だけでなく、チームメンバー同士の結びつきが何よりも重要なファクターとなる。皆との協調と信頼を築くことを通して、隊員たちは組織の中で自分の確固たる地位を意識するのだ。

バーニイには、まだアメリカという国に完全に馴染んではない彼女にそんな課程を辿らせて、更なる忠誠心を育ませようと言う魂胆もあつたのかも知れない。

しかし、未来が思ったよりも苦心したのは、「仲間と共に戦う」ことそのものだった。

マラソンのときは、本気で走れば自分一人が突出してしまう。強行突破時にドアに鍵がかかっていたら、とっさに壁を素手で破壊しようとしてしまい、専用の装備を持った突破係を呼ぶのが遅れる。遠方の敵を狙撃するときも単身で始末し、仲間へのフォロー依頼を忘れる。

個人の勝手な行動があると、チーム全体の秩序が乱れて作戦も失敗しやすくなり、メンバー全員の点数に響く。そして、なし崩し的に信用がなくなり、ますます皆と足並みを揃えることが叶わなくなる、という悪循環だ。

HRTの新人隊員たちはFBI捜査官でもエリート中のエリートとは言え、生身の人間である。ジャクソンと組んで戦うときは、まるで勝手が違っていった。周りの力に合わせ、チームに溶け込むことが如何に難しいかを、彼女は痛感させられる羽目になったのだ。

しかもNOTSにいる他の男たちは、既にHRTでの選抜試験を通して固い結束で結ばれている。途中編入などまずあり得ないそこへ、しかも女のくせに肉体能力だけは抜き出ている未来が放り込

まれば、「いけ好かない女」「体力だけの役立たず」の烙印を押されるのは当然のことだった。

その上、NOTSメンバーと訓練を行うのは一日おきで、期間もたった一ヶ月しかない。

それまでに何とかチームの皆と目を合わせ、まともな会話をすることを目標に据えることぐらいしか、今の未来には思いつかなかった。

「……はあ」

自宅のリビングにあるキャンバス地のソファで浅い眠りを漂っていた未来は、まだぼんやりとした頭を軽く振って背もたれから身を起こした。意識せず、溜息が漏れてしまう。そんなに長く寝ていないと思っただが、背中に軽い痛みがあった。

「やあ。起きた？これから掃除でもしようと思っただところだから、まだ眠いならベッドに行っただ方がいいよ」

「……先生」

そこへ、リビングのテーブルを拭いていた杉田が手を休めて笑いかけてきた。

白木の壁にかかったオレンジ色の丸い時計は、午前10時を差したばかりだ。今日は久しぶりに二人揃って非番だったが、8時まで寝坊して全粒粉のパンと目玉焼き、果物とサラダの簡単な朝食を済ませた後、うっかり寝入ってしまったようだった。未来には、キッチンを片づけた覚えもない。

「洗い物は？」

「もう済ませたよ。いいから、未来はゆっくりしておいで」

杉田がかけてくれた薄いブルーのストールをたたんで脇に置いた未来は、心底申し訳なさそうな顔になってうなだれた。

「そっか……ごめん」

「何だよ。君は普段の仕事にプラスして、NOTSの訓練だっただけじゃないか。それがどんなに大変なことかなんて、僕もわかっているつもりなんだから。そんな顔しないでくれよ」

叱られた小動物がしゅんとしている様子にそっくりな未来を見て、杉田が慌てる。

「でも先生だって、仕事が大変なのは一緒じゃない。特に、精神的にはかなりきついのに」

「僕はもう慣れたよ。気にするなって」

多少語弊はあるが、杉田が言ったことは本当だ。彼の担当するDNA分析にはある程度決まった手順があり、特に検出が難しいケースを除いては、それほど神経を擦り減らさなければならぬ仕事、というわけでもない。

ただ、子どもの頭皮がこびりついた岩や、女性の性器を貫いた筈の柄、血まみれのステークナイフといった証拠品そのものには、永遠に慣れることがないだろうと思うだけだった。

「でももう半分の期間は終わってるんだし、私も多少は慣れてきたからさ。その分、訓練がない日は頑張らなきゃって思うんだけどね」
「ティアーズはあれ以来、進展がないんだろ？NOTSの訓練課程が終わるまでは、ジャクソンが中心になって捜査を進めればいいじゃないか」

未来は訓練を1日おきに行っているが、その度に爆薬や、壁材が燃えたときの臭さを髪からぶんぶんさせ、くたくたになっただけで帰ってくる。そして翌日は捜査官として朝から出歩くのだから、激務もいとろろなのだ。ティアーズの事件について、これといった状況の変化がないことに、内心杉田はほっとしているぐらいだった。

「でも、今こうしてる間にも、犯人が誰かを殺してるかも知れないんだよ？あんまりくだくだしてらんないよ。調べたいことも色々あるし」

ゆっくりと立ち上がった未来がうーんと上半身を反らし、細身のジーンズに包まれた足も続けて爪先を伸ばし、軽くストレッチさせ

る。

「あれ、どこ行くんだった？」

「書斎。昨日やり残したこともあるし、過去の事件も調べてみたい

から。端末、借りるね」

杉田が寝室とは逆の方向に消えようとした未来の黒いチュニツク姿に問いかけると、まだ間延びしているように聞こえる返事が返ってきた。

書斎は寝室の隣にある7畳ほどの部屋で、日本から持ち込んだ杉田の医学書や、未来がアカデミーで使った連邦法等の専門書籍類と判例集、仕事専用の端末が置いてあった。木製の本棚やデスクは落ち着いた暖色でまとめ、カーテンとラグはそれに調和するクリーム色にしてある。リラックスして作業に集中できるよう、観葉植物の置き場所にも気を使った空間だ。

CVCから貸与された二人のパソコンは、OSに必要な最低限のアプリケーションをインストールした安価なものだ。これを特殊形式の暗号化通信で本部のサーバーに接続し、巨大容量ハードディスクの集合体たるストレージ上にある、個人用仮想デスクトップにログインする運用になっている。

仮想デスクトップとは、ハードディスク上に作られた実体を持たないパソコンだ。ユーザーはそこに接続さえすれば、職場にいる時と同じように仕事ができ、FBIの各種データベースにも接続することができる仕様である。

その分セキュリティには厳格で、ユーザーは自宅端末のハードディスクやキャッシュにデータを落とすことも、FBIの事務所以外でプリンターを使うことも、決まった端末以外から外部デバイスを接続することも一切許されていない。

自宅用の個人端末をこのようなシンククライアント形式に切り替えているのは、FBIの中でもまだ一部の部署のみだ。それをあと数年で組織全体に普及させることが、システム部に籍を置く技術者たちの目標にもなっている。

広い木のデスクとお揃いの椅子を引き、未来はやや硬いクッションの上に腰を据えた。厚さが数センチしかないデスクトップ型端末の電源スイッチを入れ、本部サーバーへの接続用プロンプトがプラズ

マディスプレイに表示されるのを待つ。

素っ気ないグリーンの壁紙の上に出てきたIDとパスワード、接続先サーバの指定を促すボックスに必要な情報をキーボードで打ち込むと、CVCの個人オフィスでは馴染みの画面が10秒程度で現れた。早速ブラウザでポータルサイトを開き、幾つかのアイコンを順にクリックして事件記録データベースの検索用画面に移動する。

「ええと、検索対象は……」

検索キーワードを指定する画面で、未来が意識せず呟いた。

このシステムは国立凶悪犯罪センター（NCACV）のデータベースを検索するもので、FBIが関与した事件だけでなく、全米各州の警察や連邦裁判所が有するデータベースとも連携していることが最大の利点であった。

検索の仕組みはかなり昔からあったが、システムそのものとユーザーインターフェースがずっとUNIX系のシステムで運用されていたため、専門知識がある者しか扱えないのが泣き所だった。しかしそれも近年になってようやくこ入れされ、グラフィカルなOSに徐々に切り替わっている。

そのおかげでシステム担当者たちはかなりの苦勞をさせられる羽目になったが、それまで日に何百件とあったデータ検索依頼が激減したのだから、結果は良しと言うことだろう。

未来は技術者たちの汗と涙の結晶たる検索システムで、過去5年間にヴァージニア州で発生した身体欠損を伴う事件、事故を調べることにした。事件事故の解決状況は不問、当事者の生死も問わず、人種と年齢、性別も指定せず、損傷の度合いや原因、部位も、数ある種別の中から何も選択しないでおく。

一通りの条件を指定した後、画面の下の方にある「Go」ボタンをクリックすると、たちまち画面一杯に検索結果が表示されてきた。件数を確認すると、過去5年間で条件に該当したものは2000件以上あった。日数を気にしなければ全てに目を通せそうだが、途中で心が折れそうな件数でもある。

それでも背筋を伸ばして気合いを入れ、レコードを古い順に確認していく。すると、大半は車両や工業機器の事故で手や足の一部を失い、当事者も生存しているケースであることがわかった。目的のものとは明らかに違うレコードを除外しようと、慎重に言葉を絞っていく。

できれば *machine*、*car*、*factory*、*industrial*（工業の）と言った一般的な単語は除外したかったが、被害者が車で運ばれたり、工業用ロボットが *industrial machine* と表記されている場合もあるため、迂闊に弾くべきではなかった。

胸が悪くなるような現場や遺体の画像はなるべく見ないように心がけつつ、未来は黙々と作業を続けた。気になったレコードについては検索ツールの個人ページ内にショートカットを作って、後でいつでも見られるようにすることも忘れない。

1時間は検索とショートカット作成を繰り返し、ようやくレコードを50件程度に絞った。

これらは原因がはっきりしていない死亡事件、事故で、いずれも遺体の一部が失われていたものである。ざっと内容を見たところでは、被害者の死体が野生動物に荒らされたものが多いようで、明らかに人の手で切断されたものは3割もないように見える。そしてその3割のうち大半は、鋭利な刃物を使って死体を切断されていると断定されていた。

過去の事件では、被害者の遺体が機械で故意に傷つけられた事件はないようだったが、俗に言うバラバラ殺人事件は、ヴァージニアのみでも高い頻度で起こっている。そのことに、彼女は慄然とした。日本も移民が流入するようになってから目立って治安が悪化しているが、アメリカに比べればまだかわいいものだろう。

彼女がわざわざ自宅で過去の事件や事故を調べようと思いついたのは、それなりの理由があった。

ティアーズの犯人のように、計画的に殺人を犯して死体を引きち

ぎるといふ異常な行動は、ある日突然思い立つような類のものではない。それまでに何百回、何千回と空想を繰り返し、ある時それを現実にしようと行動を起こす。精神的にその段階に至るまで、通常は何年もかかるのが普通だ。そしてそういった犯行方法は回を重ねる毎に秩序を失っていき、次第にめっちゃめっちゃになっていくことがしばしば見受けられる。

だから今までに発生した死体損壊事件を調べ、必要なら当時の警察関係者や検死局に確認する必要も出てくる可能性もあった。

そして他人に凄まじい暴力を加える者は、前段階として動物を虐待し、死に至らしめることも頻繁に見受けられる。州の獣医師協会や動物愛護のボランティア団体に、傷ついた動物が連れて来られたケースの問い合わせもしなければならぬだろう。

と未来が考えつつ、モニターを埋め尽くした英単語を睨んでいると、不意にその視界を「本日、クリスマスプレセール開始」という赤と黄色のけばけばしい文字が遮った。

「あ、ちよっと！何すんの！」

気づかないうちに後ろに立った杉田から目の前に新聞の広告を広げられ、未来は思わず声を荒げた。

「うちで仕事するのはそこまでだ。未来は普段よりもずっと疲労がたまってる筈なんだから、休みの日はしっかり休まなきゃ駄目だよ」「だけど……」

言いかけた未来の目の前で、杉田は広げたショッピングセンターの広告を盾のように構えた。

「忘れたのか？僕は今でも、君の主治医なんだ。だから、ドクターストップがかかったんだと思うように」

未来が仏頂面になっても、彼は言い聞かせようとする姿勢を緩めない。

「それに、未来だって言ってたじゃないか。捜査官は普通じゃ考えられないようなストレスを受けるから、それと上手く付き合っていかなきゃならないんだって。自分の家でも現場写真を見るなんて、

とんでもないストレスになるんだぞ」

先から血だらけの凄惨な現場写真をなるべく見ないようにしている未来は、ぐうの音も出なかった。

「前にも話しただろ？ 非番の日に、リッチモンドまで買い物に行こうって。今日からセールが始まるみたいだから、未来の冬物のジャケットか、コートを買に行こう」

「……レストランは予約できてないけど、いい？」

杉田が先日アウターを買ってくるとい話をしていたのと一緒に、自分が日本料理のレストランを予約しておく、と申し出たことをようやく未来は思い出した。杉田がきちんと考えていてくれたのに、自分にはちっとも余裕がなくて何も準備していない。

流石に申し訳なく思っではいても、つい拗ねたような口調になっ
てしまう。

それでも杉田が笑顔で頷いてくれたので、未来の気持ちも若干軽くはなった。確かに仕事ばかりでは、本人にその自覚がなくとも息が詰まってしまう。つい仕事に没頭して寝食を忘れてしまう未来は、本来であれば一番気をつけねばならないタイプだろう。

同居人からの誘いが嬉しいものであることを行動に出そうと、彼女は早々に検索システムからログアウトし、個人用仮想デスクトップからも抜けて端末をシャットダウンさせた。

若い2人の同居人はそれから10分の後に、少しくたびれた黒のシボレーに乗り込んでいた。未来も杉田もジーンズとスニーカーにウールの暖かいトップス、コートという軽装だ。未来はメイクもせず、ポニーテールのまとめ髪にシルバーのピアスのみで、全く飾り気がない。

杉田がハンドルを握る車の外では、もう乾いた冬の風が強く吹きすさんでいる。気温は10度もないが、この風では体感温度が5度以下になっているだろう。彼らが進むアスファルトの道路には細かい砂埃が舞い、空は曇りがちでどんよりとしている。

インターステート95号線から遠くに望む森の端が風に踊るのを、

未来はぼんやりと眺めた。

「そうだ。ついでに、僕の買い物にも付き合ってもらっていい？」

「そりゃもちろん。何買うの？」

久しぶりに二人が揃って迎えた休日に浮かれているらしい杉田の声が、いつになく明るい。振り返った未来の瞳に映った彼の姿は、声と同じく楽しそうだった。

「この先のファーマーズ・マーケットで、春の花の球根と種と、ガーデニング用品一式を揃えようかと思ってね。ほら、うちの周りって、芝生だけで何もなければちょっと寂しいだろ？今から庭に花壇を作るのは無理だけど、プランターに植えるんだったら次の休みまでにできるから」

ファーマーズ・マーケットは、日本で言うところの園芸店だ。

うきうきと語る杉田の心にはきつと、春に色とりどりの花を咲かせている庭先の光景が浮かんでいるに違いない。日本にいるとき、彼の趣味は華道と茶道だったが、渡米してからはどちらもやる機会と道具がなかった。せめて、自宅の庭くらいは自分好みに作り上げたいのだろう。

「どんな花を植えたいの？」

園芸全般に対してまるで疎い未来は、春に花を咲かせる植物の種類もちんぷんかんぷんだ。咲いている花は好きだが、種や球根を植えてから何をするのかも、小学校の理科の授業程度の知識しかない。「そうだなあ……今の時期だと少し遅いかも知れないけど、一般的にはチューリップにアネモネ、スイセンとか。苗が買えるなら、パンジーとかもいいかな。この辺りは雪も多いし、雪避けを作る必要があるかも知れないけど。それから大きめのプランターと園芸用の土、肥料と……道具が何もないから、全部買わなきゃな。春にいいのが咲いたら、株分けもできるかも知れない」

「ごめん。チューリップとスイセンとパンジーはわかるんだけど、アネモネってどんな花？」

話がだんだん止まらなくなってきた杉田に、未来が遠慮がちに割

り込んだ。

「日本でも普通に栽培されてるから、君も見ればわかると思うよ。切り花として一年中取り扱いがあるし、何より色んな色があるんだ。色によつて花言葉も違うから、プレゼント用の花束にしたい時は気をつけなきゃならないけど」

「花言葉か。私、そういうの全然知らないからなあ。やつぱり、あんまり良くない意味のものもあるの？」

そう言えば未来の会社のオフィスで、事務担当の翔子がたまに花を活けてくれることもあった。よく手入れを施したジャスマミンの鉢植えも置いてあつたし、翔子も花言葉に気を使つてくれていたのだろうか。

「そりゃ、あるよ。例えばユリは、白なら『純粹』とか『純潔』って意味だけど、黒は『呪い』って意味になる。他にも、赤のシクラメンは『嫉妬』で白が『清純』って具合なんだ」

「へえ、そうなんだ。それだと、気にする人は気にするだろうね」
運転しながら淀みない話を続ける青年医師に相づちを打ちつつ、未来が持つてきていた携帯端末を開いた。揺れの中でも構わずに文字を打ち込む未来の傍らで、杉田はそのまま内容を撃いでいく。

「春の花では、チューリップが『博愛』。パンジーは『思慮深い』で、スイセンは『うぬぼれ屋』。あくまで代表的なものだけど」

そこで穏やかにハンドルを切り、ピックアップトラックに追い越し車線を譲つてから、彼は話を続けた。

「アネモネは、全体的に切ない恋を意味するものが多いんだ。僕は好きな花なんだけどね」

「今調べてみたよ、アネモネ。可愛い花なんだね。これなら、確かに私も見たことあると思う。やつぱりこれも、色によつて花言葉が違ふの？」

未来は携帯端末でインターネット検索をかけ、愛らしい花束の画像表示を見て軽く小首を傾げていた。可憐な少女に似合いそうな小振りの花束はかすみ草と一緒にまとめられていて、柔らかな印象が

ある。

「そう。代表的なものは『儂い恋』『恋の苦しみ』とか。色でいけば白は『真心』、赤は『君を愛す』、紫は『貴方を信じて待つ』って意味があるんだ」

「へえ。確かに割と華やかに見えるのに、切ない意味が多いんだね」杉田に答えながらも未来は外を食い入るように見つめていて、どうも話半分だ。窓の外の対向車線を、工場用ロボットを積載したリーダーがかなり早いスピードで通り過ぎたのだ。

「うん。この花は稀にアドニスとも呼ばれることがあるんだ。アネモネには、ギリシャ神話にまつわる伝説があつてね。愛の女神のアフロディテの……」

杉田はまだアネモネの花について熱心に語っている。

彼の話には適度に相槌を打ちつつ、未来は事件のことを考えていた。

ホワイトクロウのカウンターで意見を交わして以来気になっていたのは、犯人の遺体の遺棄方法についてだった。

事件現場付近では、ロボットのものらしいタイヤ痕があった。全ての事件から発見されたわけではないが、恐らく同じロボットを使って遺体を置いたと思ってもいいだろう。

どの遺体も半ば投げ捨てられたようであり、実はそうではない。現場捜査担当である特殊捜査チームの捜査官たちも、切断された身体の位置関係や組織の損傷の軽さから、遺体が乱雑に捨てられたものだとどうしても言えなかった。

雑に扱ったような姿勢をわざと取らせた死体は、どれもそつと置かれていたのである。力づくで引きちぎった死体をわざわざ丁寧に置くなど、明らかに矛盾を孕んだ行動だ。

加えて、そんなロボットを使って死体を置くなど、明らかに目立つ行動だ。遺棄現場はいずれも人気がない場所だとはいえ、目撃情報の一つくらいはあってもおかしくない。

犯人は、一体どうやって人目を避けたのだろうか。

「僕の話、つまらない？」

「えっ？」

杉田の寂しそうな一言に、未来は現実に戻された。気がついてみると、シボレーはもうリッチモンド郊外のファーマーズ・マーケット「マーガレット」の駐車場に入るところだった。

「そ、そんなことないよ。私だって花、好きだもん」

「いいよ。僕も、自分の趣味のことばかり一方的に話しちゃって悪かったよ」

明らかかな作り笑いで慌てる未来は、取り繕っていることを隠し通せる器用さなど備えていない。言葉に溜息が混ざっている杉田の沈んだ瞳を見て、未来はますます何を言えればいいかわからなくなった。「だから、違うんだって。私、先生の話を知っているのは好きだし……」

「無理するなつてば。僕は買い物してくるから、未来はその店でアイスクリームでも食べて待つてるといいよ」

車をがら空きの駐車場に止めながら、杉田は笑顔を作っている。しかし、声にはいじけた感情が滲み出ているかのようだった。車から降りた未来が戸惑っているうちに、後ろを振り返らず店の入口へ向かって歩き出していく。

「……参ったなあ、完全に怒らせちゃったか」

彼の背中を追いかけるのもわざとらしい気がした未来は、取り残された車の横に佇んで溜息をついた。

杉田は怒りの感情を爆発させたり、相手にぶついたりするのではなく、内側に溜め込んで思い詰めてしまうタイプだ。今のように一旦沈んでしまうと、なかなか浮上してきてくれない。

未来が話を聞いてくれなかったのは、自分が好きなことばかり一方的に押しつけてしまったせいだと、責任の所在を自らの内に求めているのだ。

確かに杉田には多少植物オタクの気があって、話し出したら止まらなくなることがよくある。しかしそれも、アニメのDVDを生沢

にさえ勧めるリユーに比べればかわいいものだ。

そして未来も杉田と同じく、熱中すると寝食を忘れるほどのめり込むきらいがある。その対象がFBIの仕事であり、ティアーズの事件なのだ。

が、それが精神衛生上好ましくないこともわかっている。残酷な事件にのめり込んで捜査するほど、その事件が孕む毒に心がじわじわと侵されていくことになるのだ。

杉田が未来を心配しているのは、彼女が凶悪事件の影響を受けて心にダメージを負う可能性が高いからだ。彼の暖かい心遣いを蔑ろにしたくはないし、するつもりもない。

くよくよ考えていても仕方がなかった。

未来は勢いをつけてシボレーから離れ、走り出した。

マーケットの屋内売場に続く広い自動ドアをくぐるなり杉田の姿を見つけた未来は、思っていたより大きな声を出していた。

「先生！それ、私が持つよ」

杉田の返事を待たず、彼が重そうに抱えた腐葉土の大袋を掠め取る。20キロ分くらいは入っていきそうだったが、未来はまるでポテトチップの袋でも持つように、片手でひょいと肩に担ぎ上げた。

「いや、いいよ。重いだろ？それに、僕が好きで買ってるものなんだし」

「私の馬力がどれくらいあるか、先生は知ってるでしょ？戦うばかりが能じゃないんだから」

土を包む厚手のビニール袋を破かないよう丁寧に傍らのカートへ移し、未来はまだテンションの低い杉田に向かって笑いかけた。

「こういうことの何が楽しいのかってことは、正直あんまりよくわかんないけど……とにかく、手伝わせてよ。一緒に暮らしてるんだから、二人で色々やるのは悪いことじゃないでしょ」

「まあそうだけど……」

未来は顔を逸らそうとした杉田の前に回り、上目遣いで眼鏡の奥にある黒い瞳を覗き込んだ。

「だったらさ、楽しく買い物しようよ。暗い顔のままじゃ、面白くも何ともないじゃない。ね？」

元はと言えば、未来がティアーズ事件にかかりつきりになっていくために気まづくなったのだが、いつ状況が変わるかわからない。休日には事件のことは考えない、そのための行動を起こさないなどと約束することもできなかった。

だからこうやって笑顔と言葉でお茶を濁すしかなかったのだが、それでも雰囲気を変えるだけの効果は多少なりとも期待できる。

「まあ、それもそうか。折角気晴らしに、買い物に出てきたんだし

な」

「でしょ？重いものは、私に任せていいから。先生は種とか球根を選んで、私が何を持ってくればいいのか教えてよ」

「じゃあ……中くらいのプランターと、丸い植木鉢をそれぞれ5つくらい。植木鉢はチューリップを一輪ずつ植えようと思ってるから、少し小さめのがいいかな。それから、この腐葉土と同じくらいの赤土と如雨露。カートはあそこにあるから」

未来にあれこれ指示を出す杉田の声には、もう明るさが戻りかけている。未来は頷いて、カートを取りに行く前に言った。

「必要なものが集まったら、確認してもらいに行くから。好きな花の種とか、ゆつくり選んでね」

多少強引に明るさを見せられた気はしたものの、重い空気を和らげようとした未来の態度は、杉田にとつて悪い気はしなかった。むしろ、彼女に気を遣わせて申し訳ないような気持ちになって、落ち着かなくなってくる。

未来がタフな精神を持つ一方で繊細で危うげな一面があることを、彼はよく知っている。いざというときに支えとなれるのが担当医たる自分であることもまた、経験からよくわかっていた。

未来が折角、笑顔で暗さを紛らわせようとしてくれているのだ。ちよつとしたことでもいつまでも機嫌を悪くしているのは、大人げない。

杉田が自分の好みに合った花の種や球根、花の種類に合わせである化学肥料を選び終えた頃には、すっかり心がほぐれていた。久しぶりに大好きなものに触れたおかげで、ささくれ立った気持ちも穏やかになったのだ。

花を未来と一緒に育てていき、春には殺風景なポーチを優しいパステルカラーで彩ろう。

植物は人を癒すのだから、彼女の精神も潤してくれる筈だ。

頼まれた物をカートいっぱいに積み上げた未来とレジの前で合流し、言葉を交わすうちに、杉田は早くも数ヶ月先の美しい玄関を想

像していた。

「こつちに来てから家の周りに手を入れるようなことなんて初めてだけど、いい物は見つかった？」

「ああ、お陰で楽しい買い物できたよ。次の休みに植えてから頑張って手入れして、春にはうんと綺麗な花を咲かせなきゃな」

未来の質問に答える杉田の声は快活だ。30ドル程度の代金をレジに立つ恰幅がいい中年白人男性に支払い、二人でサッカー台へ向かう。

「あとはリッチモンドまで行って食事したら、今度は未来の買い物だな。他にも行きたい場所があれば、付き合っけど」

「ほんと？実はね、リッチモンドで前から行きたかった場所があるんだけど」

未来がサッカー台で花の種をビニール袋にまとめる手を止め、杉田の顔を見上げてきた。

「いいよ、どこでも一緒に行くよ。どんなところに行きたいんだ？」

「フィットネスクラブ」

未来と一緒に運動しようと言っているのが、杉田には彼女の嬉しそうな調子からわかった。

リッチモンドのイースト・リー・ストリート近くにあるフィットネスクラブ「7デイズ・フィットネス」は、各種設備の充実ぶりにおいて市内で1、2を争うほどの施設だった。基礎的な体力作りが効率的にできる最新式のエクササイズマシンからダンススタジオ、屋内テニスコートに温水プール、地下射撃場までが揃っている。この有料会員になれば、自分の能力に合わせた運動を的確に指導してくれるインストラクターがついてくれるのもまた、売りの一つだった。

FBI職員である杉田と未来は、ここを格安の料金で使うことができるのだ。

2人はダウンタウンのカフェで軽い食事を澄ませ、未来の冬物ジ

ジャケットを買った後にここへ来ていた。

「ジャクソンから、ちよつと前にここの話を聞いててさ。一度来てみたいと思ってたんだよ」

レンタルウェアの黒いシャツとハーフパンツ、白いソックスにスニーカーといういでたちの未来が、満面の笑顔で肩のストレッチをしている。

「あのさ、未来」

「何？」

ロッカールームの前に広がる明るいロビーで、杉田が長椅子の一つに浅く腰掛けている。彼も未来と同じ服装だが、表情は冴えない。「休みの日なんだから、身体をきちんと休めた方がいいと思うんだけど？」

「でも今日は、本当ならNOTSの訓練日なんだもん。何もしなかったら、身体がなまっちゃうから。軽い運動しかないつもりだし、射撃もそんなに長くはやらないつもりだから大丈夫だよ」

サイボーグの未来が言うところの軽い運動とは、30キロのジョギングや80キロのベンチプレス、10キロの水泳のことを指す。

「頼むからトレーニングマシンを壊したり、人間離れしたことをしでかさないでくれよ」

「わかってるよ。それに、今日は先生と一緒に運動するのが主な目的だから」

「僕と？」

察してはいたが、やはりそうかと言う確認の意味を込めて杉田は小首を傾げた。

「うん。アメリカに来てからは車で移動することが多いし、先生も運動不足でしょ。私も自分の好きなように運動できなくて、ストレッチが溜まってたから。じゃ、まずは準備運動からね」

そこで嬉々としていた未来がストレッチを止め、杉田の片手を引いて立ち上がらせる。

杉田はまだトレーニングをすると自分から一言も言っていないの

だが、仕方なく未来に引つ張られるままにトレーニングルームへと連れだつて行つた。様々なマシンが置いてある部屋の片隅にあるフリースペースで、彼女の指導のもとにストレッチを行つていく。

「いてて、もつと優しく！」

ベージュの絨毯が敷かれた床に開脚状態で座つて背中を軽く押された途端、眼鏡の青年医師は悲鳴を上げた。

「先生、身体が固いよ。まだ若いのに」

「プロアスリート以上の未来に言われたくないよ。君から見れば誰だつて……ぎゃあ！」

力加減を間違えて上半身に当てられた未来の手に耐えかね、両足の筋が切れそうなくらいの痛みを訴えてくる。堪え切れず、杉田はみつともない大声を上げた。

「あ、ごめん！でも、もうちょっと我慢しててよ。きちんとほぐさないと、怪我するから」

申し訳なさそうにしながらも、未来は楽しそうである。一方彼女に身体の節々を伸ばされる杉田は、それだけでもうへとへとだ。

医師である杉田が運動は苦手な上に最近運動不足に陥っているため、未来は心配してここへ連れてきたのだ。

彼自身、確かに運動量が全く足りていないのは認めるところだ。

が、あまり好きではなくしかも自ら進んでやるわけではないトレーニングは、ストレッチになりそうだった。

「じゃあ、最初は軽く行こうか。私も隣でやるからさ」

大騒ぎのストレッチ終了後に未来が勧めてきたのは、エアロバイクだった。

固定式の自転車であるこのマシンはペダルの負荷も調整がきき、膝に負担をかけることもない。故に体力に自信がない者や、肥満傾向の者にも向いているとされている。ウィークデーの昼間である今の時間帯だとトレーニングルームはがらんとしており、二人は並んでエアロバイクをやることにした。

「心拍数120くらいになるのが、丁度いい負荷なんだつてさ。先

生は辛くない？」

「大丈夫だよ」

壁際に10台並んだエアロバイクを漕ぎ始めて3分程度経過した頃に未来が話しかけると、杉田は穏やかに頷いた。個々のエアロバイクのハンドルには小型のプラズマテレビがついていて、付属のイヤホンで音声を聞くことができる。画面は司会の白人男性が大袈裟な身振りで白々しく盛り上げているトークショーや、バージニアの天気予報を流していた。

「僕に合わせてくれるのはいいけど、未来は退屈じゃないのか？」

「ううん。私は、先生と一緒に運動できるだけで楽しいから」

杉田は答えた未来のマシン設定をさり気なく確認したが、負荷の強さは彼の10倍以上にしてあるのがわかった。恐らく、それでも彼女には物足りない筈だ。こんな状態で運動していても、お互いに気を遣いすぎて疲れるだけなのではないだろうか。

杉田がそう考えた時だった。

「貴方たちは、無理に一緒にトレーニングしない方がいいと思うけど。こなせる運動量に差がありすぎるように見えるから」

不意に、後ろから若い感じの女性の声が出た。驚いて二人が振り返ると、赤のポロシャツに黒のトレーニングパンツを身につけた、体格がいい白人女性が片手を腰に当てて立っていた。

「このインストラクターの方ですか？」

「ええ。ナタリア・マーティンよ。気に障ったらごめんなさいね。」

今日はお客様も少なく、ちよつと気になっちゃったから」

年齢は未来より少し上だろうか。ナタリアと名乗った女性インストラクターは、不揃いなショートカットの金髪を揺らして気さくに笑った。

「貴女はその負荷の強さでも全然堪えないみたいだから、相当心肺と足の筋肉が頑丈なのね。運動、かなりできるんでしょう？最初の体力テストも普通の男性以上だし、彼と一緒にやるのはなかなか大変だと思うけど」

更にナタリアは未来と杉田を見比べて、的確に身体能力の差を言い当てた。

「え……そりゃ、まあ」

凶星を突かれ、未来が思わず認めてしまう。未来もただ杉田と一緒に好きなことをしたい一心で誘っただけで、運動をきちんと指導できる自信はなかったのだ。

「そのまま一緒に続けようとしたら彼がへばっちゃうか、怪我をするかのどっちかになっちゃうんじゃないかって心配なのよ。的確に身体を鍛えたいなら、それぞれに別の担当者がつくほうがいいと思うんだけど。どうかしら？」

未来は女性インストラクターの提案にすぐには答えず、エアロバイクの設定をリセットしてペダルから足を外し、サドルから下りた。「わかりました。そうしようと思います」

そして振り返って言った表情は、やや硬かった。本音ではなかったが、トレーナーやインストラクターではない自分が感情的に反論しても、見苦しいだけなのはわかってる。

勿論インストラクターも商売なのだから、断ればこれ以上何か言ってくることもないだろう。が、本当に杉田の身体のことを考えるなら、提案を受け入れるのがベストだった。

「じゃあ先生、また後でね。私、残りの時間はプールにでも行ってくるから」

そう判断した未来に意外そうな顔を見せた杉田は、ナタリアに軽く頭を下げて去っていく彼女に声をかけられず、黙って見送ることにできなかつた。

「じゃ、始めましょうか。彼女も私の担当だから、一緒に指導させてもらうわね。ソフィーも、最初はエアロバイクにするから。ええと……」

「マサト・スギタです」

青年医師は名乗って、ナタリアの後ろに視線を向けた。

今まで気がつかなかったが、彼女の後ろにはもう一人、別の女性

がいたのだ。ナタリアが未来の使っていたエアロバイクの設定を直し、その女性に20分間のトレーニングになることを軽く説明してから立ち去っていく。

「ソフィー・アイコ・フジミです」

はにかむような控えめな笑顔で頭を下げてきたのは、やや緑がかった瞳に赤っぽい髪をひつつめた、小柄な若い女性だった。活発そうな外見に反して声は小さく、サドルに跨る様子もあまり機敏ではなかった。

「あ……」

彼女の顔を改めて認めるなり驚愕して息を飲み、次いで吐き出した杉田から掠れた声が漏れた。

「どうかしましたか？」

隣のエアロバイクで足を止めたまま固まりかけた眼鏡の男性の様に、ソフィーと名乗った女性は不思議そうに辺りを見回してから、杉田の表情を見返した。

「い、いえ。失礼しました。僕はマサト・スギタです。よろしく」

杉田はペダルに足を置いたままでソフィーと軽く握手を交わすと、正面に向き直った。我ながら素っ気ない挨拶だと、少し反省する。意識して深呼吸を繰り返すと、激しく乱れた鼓動を刻んでいた心臓も、次第に落ち着きを取り戻してきたようだった。

「あの……ここにいらっしやるのは初めてなんですか？」

ソフィーと並んでエアロバイクを始めてから一分もしないうちに、おずおずと彼女から声がかけられてくる。

「ええ。運動不足なものですから」

杉田の返す調子はまだぎこちなく、顔が赤らんでいるのも隠せていないが、それでも努めて平静な態度を保つ。

ソフィーは、嘗て杉田が淡い恋心を抱いた相手によく似た面影を持っていた。

彼がまだ10代の少年だった頃、10年は昔のことだ。

ロサンゼルス郊外に1年間語学留学していた時、同じハイスク

ールのクラスメイトでデボラという少女がいた。

赤毛で緑の瞳を持った彼女は控えめな感じではあったが、異国の留学生である杉田のことを何かと心配し、気にかけてくれたのだ。いつも暖かい微笑みと優しい言葉を絶やさず、杉田のたどたどしい会話も熱心に聞いてくれた。

しかし女性が苦手だった当時の杉田は必要最低限のことしか話せず、帰国の途に着く時まで自己嫌悪と恋心のジレンマに悩み続けていた。

ソフィーはそのデボラが成長すればこんな女性になっただろうと思えるほど、物腰や雰囲気似ていた。

が、2人はあくまで別人なのだ。

表に顔を出してきた懐かしい思い出をもう一度心の底に沈めようと、彼はエアロバイクの下に広がるベージュの絨毯を意味もなく見つめた。

「私は今年の夏からここに來てるんですけど、そう何回も通ってるわけではなくて……友達もいないから、今日は一緒にやってくれる方がいて、ちょっと安心してらるんです」

その杉田に気づいていないらしいソフィーは、再び遠慮がちな笑顔で言った。

未来よりも僅かに背が高いくらいの彼女は色白で、胸も腰も豊かだし、確かにあまり運動が得意そうには見えない。丸い瞳に小造りな童顔も手伝って、子犬を連想するころっとした第一印象だった。

話し方も穏やかで大人しそうな外見は、みる者に対して彼女が見るからに「女の子」というイメージを残そうとする。

しかしそれでいて、不思議と男に媚びている様子は全く感じさせない。

「貴女は、学生さんですか？」

「バージニア・ユニオン大学で、社会学をやってます。犯罪心理学のゼミに入ってるんです。最近は大学の書庫に籠もってばかりですから、ちょっとは身体を動かさなきゃって思って。さぼりがちだ

つたこのジムにも、真面目に通おうと思っただんです」

そこで一息ついて、今度はソフィーが杉田に向かって小首を傾げた。

「すみません、自分のことばかり話してしまつて。ミスター・スギタは働いてるんですか？それとも、私みたいな学生？」

「僕は医療分野の研究機関で働いてます。なかなか休みが取れないから、こんな変な日にここに来ることになつちやつて」

流石に、初対面の人物にFBIの職員だと自己紹介するのは憚られた。

「え、お医者さんなんですか？すごいですね！どつりで、何だか雰囲気が違うと思ひましたよ」

ソフィーが仕事についてそれ以上突っ込んでこなかったため杉田はほつとしたが、引つかかることがあつた。

「それは、ここにいるのがそぐわないつて言うことですか？」

「いえ、そんな。ごめんなさい、失礼なこと言つちやつて！その、物静かで優しそうな方だつて思つただんです。本当にすみません」

「いえ、気にしてませんよ。本当にその通りですし」

今度は、ソフィーが顔を真っ赤にして慌てていた。その様子を見て、思わず杉田が笑いをこぼす。

「僕は運動がからつきし駄目で。本当は庭で花をいじつてる方が好きなんですよ。男のくせに、趣味は園芸ですしね」

「あら。じゃあ、お花のことにもお詳しいんですか？」

「植物マニアだつて、よく仕事場でも言われてます」

まだ笑顔でいる杉田の言葉を聞いて、ソフィーが緑色の瞳を輝かせた。

「本当ですか？実は私、今アロマセラピーに凝つてるんです。是非、色んなお花のことをお聞きしたいわ」

「うーん、実は香りの効能についてはあまり僕も知らなくて。それについては、貴女のほう詳しいんじゃないかな」

嬉しそうなソフィーに答える杉田の声に、親しみが込められ始め

てきた。

知り合っただばかりの女性とここまで盛り上がったことなど、初めてではないだろうか。初恋の相手に面影が似ていることもあってか、緊張は殆ど感じない。

それに、花や園芸のことについて遠慮なく話ができるのもまた、新鮮だった。ある程度の予備知識があるソフィーは、こちらが言うことに興味を持ってくれ、更に突っ込んだ質問もしてきてくれる。他の身近な友人たちにこんなことはできないだけに、楽しさもひとしおだ。

2人があまり話に熱中していたので、トレーニングの続きを指導しに戻ってきたナタリアが呆れたほどだった。

「ここに来てこんなに楽しかったことなんて、初めてよ。マサト、またここに来るんでしょう?」

「ああ。担当のインストラクターも同じだし、そしたらまた話ができるよ」

そして90分ののトレーニングが終了する頃、杉田とソフィーはすっかり打ち解けていた。

「マサトは、一緒に来てる女の子がいるんでしょう？迎えに行かなくて大丈夫なの？」

「あ、そうだった。多分、プールにいると思うから……」

肩を並べてロビーへ向かう途中、ふとソフィーが問いかけてきた。指摘されて思い出したように、杉田は慌てて小走りになった。ロビーを横切り、直接プールサイドへ抜けられる自動ドアへと急ぐ。

彼がガラスのドアをくぐると、温水プール特有の暖かい湿気と、消毒薬の臭いにむせ返った。

目の前に広がっている25メートルプールのコースロープ内には、誰もいない。

プール内に塗られた青いペンキのために澄んで見える水面を見渡すと、プールサイドにただ一人、競泳水着姿の女性が上がってきたところだった。

未来だった。

「杉田先生？」

近寄ってくる眼鏡の青年の姿を視界の隅に認め、未来は水泳用ゴーグルと白いシリコンのキャップを取った。

「今までずっと泳いでたのか？」

「うん。ほら私、身体が重くて浮かないでしょ。でも隊の訓練じゃ、水泳なんてやらないからね。どれぐらい泳げるのか、一度ちゃんと確認したかったんだよ」

確かに、未来は身長160センチに対して体重は70キロ以上ある。主に内蔵された機械や人工筋肉、人工骨の重さが上乘せされているせいだ。それらは肥満のためについた脂肪とは違って比重が重いため、その分だけ水に浮かばなくなってしまうのである。

プールサイドに並んだプラスチックの椅子からタオルを取り上げた未来の素肌では、滴り落ちる水滴が幾つもの透明な筋を作ってい

る。鍛えられた腕や足は細く、筋肉が程良い丸みを型造り、プロのアスリートのように全身が素晴らしく均整が取れていた。

彼女の息はまだ弾んでいたが、さほど疲れている様子はなさそう
だ。

「どれぐらい泳いだんだ？」

「数えてないからわかんないけど。5、6000メートルってこと
じゃない？」

杉田の問いに、未来はこともなげに答える。

90分かそこらでそれだけ泳げて疲労しないのだから、本当に未来はサイボーグなのだ実感する。一方、濡れた肌にこぼれた長い髪をタオルで拭う姿には意識しない女らしい艶が溢れており、美しい肢体と相まって蠱惑的でした。

「すごいですね。私なんか、25メートルも泳ぎ切れる自信がない
のに」

杉田がつい黒い水着の未来に見入ってしまいそうになったところへ、後ろにいたソフィーが割り込んできた。

「……先生、こちらは？」

赤毛の女性を一瞬まじまじと見た未来の眉が、片方だけ僅かに上
がる。

「ああ。一緒にインストラクターにトレーニングしてもらった……」

「ソフィー・アイコ・フジミです。ソフィーって呼んで。貴女は、
マサトの彼女？」

ソフィーが先に名乗り、未来の胸から上に視線を巡らせてきた。

「いえ。ドクター・スギタは、私のホストファミリーの兄なんです。
私はヨーコ・イシダ、日本からの留学生です」

対する未来は満面の笑みを浮かべてソフィーの瞳を受け止め、タオルで水気を拭った手を差し出して握手を求めた。

「新しい友達が増えて、嬉しいです」

「こちらこそ、ヨーコ。私、貴女みたいにスポーツができる子って
すごく羨ましいわ」

ソフィーが笑顔を見せて握手に応えた際に、未来はもう一度笑いかけていた。

ヨーコ・インダと言うのは、未来が仕事以外の時に使う偽名だ。実在する大学の偽の学生証に、でたらめな住所を記載した偽の国際免許証まで、精巧に作られたものがFBIから支給されている。これらは常時手元に置いてあり、彼女は必要に応じて使い分けるところに慣れていた。

どの捜査官も例外なく、非常時を除き自分の管轄外の場所で身分を明かすことをタブーとしている。

杉田は捜査官ではないため本名をそのまま使うが、未来が偽名を名乗っている場面にはよく出くわしていた。が、兄だと紹介されたのはいささか不本意だ。

「じゃあ、そろそろ行かないと。ママたちが夕食に遅れるとうるさいの。じゃあね、ソフィー」

「ええ。また今度、ゆっくりお話しできるのを、楽しみにしてるわ」と、二言三言交わした2人の女性は、互いに手を振ってさっさと別れた。未来が杉田の手を取り、いささか強引に出口の自動ドアに向かって行く。

「ちよつと未来、そんなに急がなくてもいいだろ」

「今日、うちで日本とのテレビ会議があるじゃない。早く帰らなきゃだめだよ」

抗議してくる杉田に返す未来の口調は、どこか刺々しい。素足でプールサイドを歩いているのに、歩調もかなり早くなっていった。おかげで、手を取られている杉田は小走りにならなければ引きずられそうだった。

「先生、まさか自分がFBIの関係者だって言っていないよね？」

「言っていないよ。さつきから、何をそんなに苛ついてるんだよ」

杉田もつい、未来の荒っぽい質問に語調がつっけんどんになる。

未来はそこで口をつぐんだが、プールから出てロビーを横切り、ロッカールームの前まで来たところで足を止めて振り返った。

「先生があの子と随分親しそうにしてたから、余計なことまで喋ってないかって心配になったんだよ。それに先生、女の子は苦手じゃなかったの？」

「初対面の相手に、そんなこと話すわけないだろ。それに、未だに女性は苦手だよ。ソフィーとは花とか園芸のことについて話してただけだって」

未来は唇の両端を下げて杉田の顔をじっと見上げ、片手に下げたゴーグルとキャップを軽く振り回していた。やがて、頷いてから抑え目の声で言った。

「……そっか、ならいいや。私、着替えてくるから。先生は先に車に戻っててよ」

無理矢理自分を納得させたようで、未来の笑顔には無理があることがわかる。

それでも杉田は敢えて彼女を呼び止めるようなことはせず、自身もすぐに男性用ロッカールームへ向かった。

彼がコートを着込み、だだっ広い屋外駐車場に出てくると、もう夕方近くになっていることに気がついた。増え始めてきた車の並びから自分のシボレーを探し出し、コートを後部座席に放り込んでから運転席に座ってドアをロックする。使い古されたシートに身を沈めてシートベルトを締め、未来を待つことにした。

ふと窓の外に目をやると、雲が覆っている西の空が赤くなりかけているのがわかる。フデイズ・フィットネスはダウンタウンにあるため周囲を建物に囲まれているが、それでも空は東京より遙かに広く見える。

高校時代にロスにいた頃も、同じことをよく感じていた。

やはりここは日本から遠く離れた異国の地なのだと、心細さと不安がない混ぜになった気持ちに襲われることもよくあった。

そんなとき、デボラの優しい笑顔にどれだけ慰められたらう。

彼女は純粋な白人ではなく、祖先の血筋はもうわけがわからないくらい混ぜこぜになっていると、茶化してよく言っていた。赤毛に緑

の瞳だった割に東洋人的な印象もどことなくあって、親しみが持てたのもそのせいかも知れない。

ソフィーはデボラとよく似た雰囲気を持っていたが、ソフィーはフジミというラストネームからして、日系人なのだろう。それであるの髪と瞳の色は珍しかった。一般的に赤毛の女性は気が強いと言いが、杉田の印象はむしろ逆だ。デボラもソフィーも、一步下がって誰かの後をついていくような気がする。

そこで、新しいジャケットを着た未来が運転席側の窓をコンコンと叩く音に気づいた。ドアのロックを解除する間に彼女は助手席側に回り、寒そうに身を縮めて乗り込んでくる。

ジャケットを着たままでシートベルトを締める未来の濡れた髪からは、まだ水滴が滴つてきそうな気さえした。

「髪、乾かしてこなかったのか？風邪ひくぞ」

「車に早く来たかったんだもん。それより、早く帰る」

未来が有無を言わさない、しかし明るさが戻った口調で、杉田の気遣いを流す。それでもやはりまだ気になるのか、彼女は大きめのバッグを漁ってタオルを出すと、肩にかかる黒っぽい毛先の水気を拭き始めた。

「いくら君がサイボーグだからって、感染症への耐性が高いわけじゃないんだぞ。あんまり心配させるようなことはしないでくれよ」

「あれ、心配してくれるの？」

「当たり前だろ。僕は君のパートナーなんだから」

茶化すような未来の一言に杉田はつい、呆れて応えてしまった。

彼の操るシボレーが、フィットネススクラブの駐車場から帰宅ラッシュの始まったイースト・マーシャル・ストリートに急カーブを切って潜り込む。車体の傾きに合わせ、未来の小さな肩も揺れた。

「……そうだよ。仕事上じゃ大切な身だよ」

一呼吸置いてからこぼした未来の横顔に、ふと寂しさが横切ったような気がした。

小さく寄せていた期待を裏切られた少女のように、切なげな面影

だ。

最強のサイボーグ戦士であり、FBI特別捜査官であるその身から垣間見える、ガラス細工を思わせる一面であった。

こんな時の未来は、ひどく繊細で危うげな印象を見る者に刻みつけていく。

だからこそ杉田は彼女を全力で守り、支えてやりたいと感じる。

透明で儚い未来の脆さはデボラやソフィーの女性らしさとはまた違う魅力であり、他人を惹きつける要素でもあった。

「ソフィーだっけ？ 今日、先生と一緒にトレーニングしてた女の子」

「ああ。フルネームはソフィー・フジミだったかな」

口元をきゅつと結んで前を走る車を見つめていた未来が、視線を動かさずに訊いてくる。杉田は頷きながら、ソフィーのフルネームを思い出した。

「日系人ばいのに、わざわざ髪と目の色を変えてるみたいだね。黒い髪と目が嫌いなのかな」

「どうしてわかるんだ？」

ダウンタウンの道路は、インターステート95に近づくにつれて交通量が増していく。運悪く、2人の乗るシボレーの前を走っているのはドーナツチエーンの冷蔵トラックだった。高さがあるコンテナに視界を遮られ、信号が見えなくなる。

車間距離に注意を払いつつ、杉田が未来の感想に突っ込んだ。

「髪は根元がちょっと黒かったし、毛先が傷んでたみたいだからね。ブリーチして色入れたのになって思ったの。それに、どこを見ても瞳の大きさが全然変わらなかったんだ。カラーコンタクトをつけてると瞳孔の大きさが変わらないから、不自然な印象になるんだよ」

さすがは人を疑うのが仕事の捜査官と言うべきか、それともパートナーに近づく敵を値踏みする女の洞察力が成せる技と言うべきか。2人が話していたのはほんの数分もなかったのに、未来は杉田が気づかなかったことまでよく観察していた。

しかしそこまで微に入り細な分析は、一つ間違えば相手の気分を

すこぶる害する。

「あんまり、初対面の人について分析しないほうがいいと思うけど」
「捜査の練習になるからね。無意識のうちについ癖で、やっちゃうんだよ」

杉田は一言未来を窺めたが、当の本人はあっけらかんと悪びれない。

「僕はプライベートに仕事を持ち込まないで欲しいってあれほど言ってるのに、すぐ忘れるんだな」

杉田の疲れが濃く出た口調だったが、内容は未来にとって嫌味だと感じられても仕方がないものだった。しまった、と言い終わってから気づいた杉田であったが、助手席の未来はすぐには言い返してこなかった。

ちらりと様子を横目で窺うと、いつもなら口を尖らせて声高に反論してくる未来が、押し黙って目を伏せたのがわかった。彼女は無言で顔を上げて横を向き、渋滞のためゆっくりと流れていく車窓の景色に視線を滑らせたようだった。

「……ごめんなさい」

続いて、消えに入りそうな一言が低いエンジン音に紛れた。

「君が謝ることはないよ」

慌てて杉田が空気を換えようと試みたが、未来は乗ってこない。彼女は癩に触ったり、怒りを堪えているわけではないようだった。ただ肩を落として、こうなってしまった状況にただ、心を痛めて沈んでいるのだ。

重たい沈黙が車内を支配しかけ、息をすることさえ遠慮したくなってくる。

本来なら謝ってきた未来に何も非はないし、杉田が慌てることもないはずだ。が、このまま黙っていては、お互いに気まずさが増すばかりだ。

「僕が言い過ぎたよ、ごめん。折角仕事以外でできた知り合いだから、未来もソフィーと仲良くできればいいと思って……」

焦った杉田は、信号待ちから走り出したおんぼろシボレーのエンジン音に負けないよう、大きめの声で続けようとする。未来は一度だけ杉田に視線を向け、再び窓の外に広がる初冬のリッチモンド市街の様子をぼんやりと眺め直した。

暗くなり始めた今はレストランやバーに明かりが灯り始めており、店先に飾られたクリスマスツリーに絡みついた色とりどりの豆電球が、ちかちかと点滅を繰り返している。

「いいよ、別に。今日はこれから会議なんだし、お互いに機嫌直さなきゃ」

納得した口振りで言いながらも、未来の表情からは暗さが拭い切れていない。

この時期ならではの暖かな風景も、未来の心を照らすのに足りていないようだった。

時差の関係から、どうしても自宅で日本のスタッフとテレビ会議をしなくてはならない以上、仕事とプライベートを完全に分かつことは不可能だ。

杉田はふと、未来との関係が現実という悪魔に皮肉っぽく笑われているような気がした。

日本に残っているスタッフとのテレビ会議は、毎週水曜日に行われる。ヴァージニアでは20時だが、日本では翌朝の10時という時間だ。元AWP中核メンバーの会議のため、日本からの参加者は未来の担当医である生沢と、装備メンテナンス担当のリューだけである。

会議の内容は主に定期報告で、杉田たちからFBIでの状況と未来の定期メンテナンス結果を、生沢たちからは日本での引き継ぎの状態と機器や人員移動のスケジュールを伝え合うのが主なものだ。

FBIアカデミーにある未来のメンテナンス設備は日本から部分的に移設されたもので、足りない機器についてはジャクソンの設備を共同で使用している。未来とジャクソンは性別も違えば体格も大

大きく違うため、専用設備の速やかな移設が望まれてはいるが、人員についても機器についてもなかなか融通が利かなかった。

「日本の現場は、先週と大して変わらないみたいだね」

「まあ、良くも悪くもそんなところだな。俺たちも早くお前らのところに行きたいのはやまやまなんだが。CVCじゃ、連続殺人事件の担当2件か？相変わらず、アメリカは物騒だな」

未来が報告に使った書類をまとめているところへ、白衣姿の生沢が率直な感想を漏らした。

未来のもう一人の担当医である生沢慎吾が、熊を思わせるのっすりとした雰囲気が無精髭だらけなのは、彼女が日本にいた頃と少しも変わっていない。おおよその医師というイメージから遠い彼の風貌が近い者に安心感を与えてくれるのも、今までと同じだった。

その横に座すリユーこと田原隆三も、黙っていれば美青年にしか見えないのは相変わらずだ。茶色の巻き毛に彫りが深い西欧的な顔立ちは、彼が白人系アメリカ人とのハーフであるためだった。が、口を開けばアニメとホビーのオタクトークが止まらないのには、未だにしっくりこない。

プラズマモニターの中にいる生沢とリユーの背景は、東京湾沿岸部にある複合研究施設の中にあるAWP棟の会議室のようだった。白っぽいつや消しの壁を疲れ目の状態で見ると、たまに生沢の白衣と同化して見えることがある。

対する杉田と未来は、自宅リビングルームの壁際に設置してあるパソコンのモニターにカメラを据えていた。ダイニングセットの椅子を引つ張っていき、その前に座っているのだ。生沢とリユーが見ている画面には、背後にある食器棚やポット、麻織りのタペストリーといった、生活感がある日用品がごちゃごちゃと映っているのだろう。自宅にいる杉田と未来は、揃ってニットの着にデニムという普段着だった。

「戦闘チームが担当してるのは、ティアーズだけだけだね。杉田先生は、えーと……コードネームがブラックヘアだっけ。アジア人男

性連続殺人事件の方も担当してるよ」

CVCは専門性が高い各チームが、それぞれで事件を担当している部署だ。故に同じCVCのメンバーであっても、抱えている事件の数はチームによって違う。

杉田がDNA分析を担当しているブラックヘアは、特殊捜査チームや化学・毒物検査チーム、DNA分析チームなど、戦闘チーム以外が共同で捜査を担当している事件だった。

「ただ、証拠品の分析依頼は全米の各地から来ますから。それ以外にも、受け持つてる事件は結構あるんですよ」

杉田と同じように検査官として所属するFBIの職員は、皆同じような状況だ。

各州の警察や研究機関から依頼を受けて送られてくる証拠品についても、DNAや毒物などの分析は行われる。そのため、一人で複数の事件を扱うことも珍しいことではなかったし、杉田も同時進行で作業を進めている証拠品があった。

それでも、干からびた人間の右手がフライドチキンの容器に入られて送られてきたのを最初に開けたときには、流石にぎよっとした。

「俺たちもそつちに行ったら、似たようなことになるってか？そつとしねえな」

「犯罪捜査は、私たちにとって未知の分野ですからね。非常に興味深いところではありますよ。まあ、装備のメンテナンス担当の私としては、実際の事件にかかわるようなことはあまりないんでしょが……」

苦笑している生沢に続き、リユーも頷いた。リユーは日本に帰化しているが、元は海兵隊の特殊部隊に在籍していたアメリカ人だ。軍属の頃とは仕事内容が全く異なるとは言え、再度の移住については複雑な思いがあるのかも知れない。

こうしてテレビ会議で近況を報告し合うようになってから、半年以上が経つ。最初は画面の中にいる相手とリアルタイムで話すこと

に違和感を覚えていたものだが、皆それにも慣れた。

今はWebカメラの映像でも通信速度は安定しているし、画質も悪くない。

そのせいなのか生沢が、杉田と未来の間に漂う空気が違うことを見咎めた。

『お前ら、今日は2人であんまり話さないな。いちやつき方が足りねえじゃねえか。何か変な感じがするが』

『別に変じゃないよ、いつもと変わらないもん』

画面の生沢から目を逸らして未来が応えた。

『相変わらず隠すのが下手ですね、未来は。喧嘩でもしたんですか？』

『だから、喧嘩とかじゃないってば。先生もほら、何とか言ってるよ。未来が後半は小声になって、隣に座っている杉田の脇腹を肘でつつく。しかし、

「え？あー、いや……別に、僕たちの間に何かあったわけじゃないですよ」

と、眼鏡の青年医師の反応は鈍い。

『じゃあ、それ以外のところなんだな』

『浮気ですね、わかります』

生沢とリユートの鋭い突っ込みに、杉田は思わず口に含んでいたコーヒートを短い息と一緒に吸い込みかけた。噎せて咳き込む杉田の隣で、未来が思わず腰を浮かせかける。

『ちよつと、変なこと言わないでよ！第一結婚してもないのに浮気とか、あるわけないでしょ』

『……突っ込みどころはそこなんですか。未来のツンデレ具合も、理屈っぽさと絡むと複雑ですね』

リユートとしては未来の違った反応を期待していたらしいが、彼女のやや上気した頬に、含み笑いを隠せないようだった。

『何だよ、ヤキモチかなんかか？大方杉田が他の女とちよつと仲良くしたからって、お前がふくれてるとかそんなところなんだろう』

「違うよ」

生沢から意地の悪い笑顔で更に追及され、未来は却って落ち着きを取り戻していた。木の椅子に敷かれたクッションから離れていた腰をくつつけて、身体に入りすぎていた力と共に語調もゆるめている。

『ふうん……』

生沢は、まだ咳き込みながらも何食わぬ顔をしている杉田と座り直した未来を見比べ、一呼吸置いてから再び口を開いた。

『お前たちがお互いに気を遣うのはいいんだがな。たまには言いたいことを言つとかないと、精神衛生上良くないぞ』

「大きなお世話だよ。それに、親しき仲にも礼儀ありつて言っじゃない」

未来の台詞は強気だが、視線はそわそわとあちこちを泳いでいる。

『それは、生沢先生の経験上から言えることなんですか？』

『うるせえよ。お前も大きなお世話だ』

リユーからの不意打ちに、今度は生沢の場都合が悪そうな声がスピーカーから響いた。

生沢は離婚した妻と、10歳の息子がいる身なのだ。

やや緊張感が漂っていた空気が和むと、杉田が困ったような笑いを交えながら口を開いた。

「早くこんなモニター越しじゃなくて、顔を合わせて話ができるようになるといいですね」

「そうだよ。私たち、もう随分待ってるんだからさ。こっちの日本人スタッフが、早く生沢先生やリユーと飲んで語りたいてよく言ってるよ」

未来が同調して頷く。

杉田と未来は今年の4月にアメリカに渡っていたが、それよりも早く移動している元AWPスタッフもいた。彼らは未来たちの住居の準備や渡米に必要な手続きをやってくれていて、その後は基本的に犯罪化学研究所の検査官として働いており、住まいも近い場所に

構えている。

それぞれ勤務時間がまちまちなため、なかなか顔を合わせる機会に恵まれない。それでもたまにホームパーティーを開いて、親交を持つていた。

『それは全くだ。まだ具体的な渡航の時期は見えてないが、必ず行くから首を洗って待つとけと伝えといてくれ』

「首を長くして、でしょう？」

杉田が生沢の表現を訂正すると、リユーが補足した。

『首を洗って、でいいんですよ。生沢先生は焼酎を事前に大量に送りつけて、みんなを潰す気満々でいるんですから。まあ、私も日本酒と一緒に送っておこうと思ってますが』

「2人とも、こっちに何しに来るわけ？」

吹き出したくなるのを堪えて未来がモニターの中の男たちに問いかけると、生沢からは大真面目な答えが返ってきた。

『決まってるんだろ、足りないものを補いに行くんだよ』

横でリユーがチョコレート菓子をつまみ上げて口に放り込んでいなければ、きつとその台詞も数段決まって見えたのだろう。

『それまでは辛抱して下さい。文句やお土産の注文は、まとめて引き受けておきますから』

「じゃあ、日本のお菓子もたくさん持ってきてよ。こっちのやたら脂っこくて濃いスナックにはもう飽きちゃったからさ」

ぼりぼりと音を立てて口を動かすリユーの様子を見て羨ましくなつたらしい未来が、画面の端に映っているお菓子の箱を凝視している。につこりと笑って、元アメリカ軍人の青年は言った。

『良ければ、ダース単位で色々送りますよ』

じゃあお願いするから、と未来が応えたところで定例テレビ会議は終わりだった。いつも雑談で締めくくられるのも恒例だったが、今日は少し長く話すぎたかも知れない。リビングの壁にかかったオレンジ色の時計は、午後9時半を回ろうとしている。

会議中は賑やかだったリビングも、家人以外の声が途絶えた途端

にしんと静まり返ったような気がする。冬の冷たい夜気がひしひしと忍び寄るヴァージニアの晩秋は、澄んだ静寂を2人の間にももたらそうとしていた。

「未来」

テレビ会議用のパソコンの前からダイニングセットに椅子を戻してから、杉田は未来に声をかけた。

「何？」

対する未来の声はぎこちないが、これまで端々に見えていた棘は感じられなかった。

「さつき生沢先生が言ってたことって、本当なのか？」

杉田の妙な言い回しをしない単刀直入な問いは、未来が「ヤキモチ」を指摘されたことについてだ。細かい内容が何なのかを追加せずとも、杉田の言葉は未来の核心を突いたらしい。

ためらいがちに視線を泳がせてから、彼女は杉田の顔を見上げた。「だったら、ダメ？」

主語を抜かして呟いた未来の黒い瞳は、本音を漏らすのが不本意だと言いたげだ。嫉妬などという女に特有の醜い感情など見せるべきではない、と思っているのだろう。

しかし男からしてみれば、適度なヤキモチにはむしろ可愛らしさを感じてしまうものだ。そしてこの場合の杉田とて、例外ではない。彼は軽く息を吐いて肩から力を抜き、穏やかな笑顔で未来の頭を手を置いた。

「……そうか。気づけなくてごめん」

「ううん、こっちこそごめん。先生だって、私がそういう気持ちでいるのは嫌でしょ。私もソフィーと仲良くできるように頑張るよ」

同居人がようやく見せてくれた普段と同じ表情と仕草に、未来の表情からもおかしな力みが

消えたようだった。今まで漂わせていた尖り気味の空気も和らいでいて、杉田の前でだけ見せている無垢な娘の姿に戻ったのがわかる。「別に、無理しなくもいいんだぞ？ 違うフィットネスクラブに行っ

たつて、僕は構わないんだから」

「無理じゃないって、大丈夫だよ。それに、初めて仕事以外でできた友達なんだからさ。そういう関係は大事にしなきゃ」

杉田と同じように椅子をダイニングテーブルに戻すと、未来は彼に背を向けた。

「まだ調べ物か？」

「うん」

咎める調子でない杉田の言葉に、未来は廊下に出るドアの手前で足を止めて振り向いた。

「正直に言つとき。勤務時間だけじゃ、私には足りないんだよ。私は正規の審査に受かった捜査官じゃないから、才能が足りなくて要領が悪いだけなのかも知れないけど」

やや自嘲気味に言った未来は、杉田の顔から視線を外して続ける。「私だつて、自分の家にまで仕事は持ち込みたくないよ。でも、そうでもしないとわからないことも多いし、捜査をちゃんと進めていく筋道も立てられないから。ただ、なるべく先生の前で事件の話はしないようにするから……」

「そんな調子でいて、この仕事が嫌にならないか？」

「え？」

未来が目目を丸く見開き、声のトーンを高くする。思いもよらない杉田の割り込みに、彼女は驚きを隠せないようだった。

「未来は自分が望んでサイボーグになつたわけでも、FBIに来たわけでもないだろ。言ってみれば捜査官の仕事だつて、押しつけられたみたいなものなんだから。君がそこまでして仕事に打ち込まなきゃならない理由なんか、ないんじゃないかって……」

彼の眼鏡の奥にある瞳は、仕事のことを片時も忘れられない未来に対して怒りを湛えているのでも、呆れた色を浮かべているのでもない。純粹に彼女のことを心配しているのだ。きつと、今の慌ただしい状況を作る一因を自分が持つてしまったことに、負い目を感じているのだろう。

未来は杉田たちの手によって誕生した、元軍事用サイボーグだ。そもそもサイボーグにならなければ、捜査用車両で張り込みを続けて夜を明かしたり、こんな陰惨極まりない事件の捜査をすることなどなかったはずなのだ。

しかし、未来は静かに杉田を見つめ返した。

「私、この仕事に就く機会に恵まれて良かったと思ってるんだ。今の私の生き甲斐になってるし、便利屋でやってたことも結構、役に立ってるもの。そりゃ、確かに大変なことは多いけど。人や国のためになるって実感があるし、私はFBIに来たことを後悔してないよ」

そこで杉田に一步近寄ってから、未来は笑って見せた。

「それに、先生が側にいてくれるもん。だから私はいつでも元気でいられるの。嫌になるなんてことはないよ。大丈夫」

諭すような口調から一転すると、彼女は足取りも軽やかにフロアリングの床を跳ねるように歩き、廊下へと続くドアを開けた。

「1時間くらいで終わらせるつもりだから、寝る前にワインでも飲もうよ。先生はゆっくりしててね」

そしてそのままくると身を翻し、暗い廊下に姿を消していく。

彼女の小さな後ろ姿を見送った青年医師は小さく息をついてリビングに戻る、キャンバス地のソファに深く腰を下ろした。

未来が辛さに耐えて仕事をしているのではないかという心配は徒勞に終わりそうだったが、それでも彼女が本来望んでいたものとは違う人生を自分たちが押しつけたのは確かだ。

それに、それは杉田自身にも同じことが言える。

自分が思い描いていた夢は、身体が不自由な人のために新しい身体の一部を作り、健康者と同じ人生を与えることだったはずだ。

今の自分は技術を持っているのに、夢からあまりにもかけ離れた場所にいる。そこに違和感を覚えずにはられないのだ。

しかし未来は自身の身に起こった変化を受け入れて順応し、今の自分が叶えられる範囲での目標を見つけ出して歩み続けている。加

えて、結果として無理をしなくてはならないとしても、甘んじて今の自分自身を否定するようなことはしない。

そんな素直さと純粹さこそが、彼女の強さの源だ。それが杉田とは決定的に違うところでもあり、見習わねばならない長所であった。それとも、過去の自分にこだわるか否かは男女の違いに拠るところなのだろうか。

考えてみれば、未来に対して自宅に仕事を持ち込むな、というのはやはり杉田の単なる我儘にしか見えなかった。そんなことを言う資格は自分にはないのだ。

とは言え、鬱屈した感情を抱えたままではいずれ自分がパンクしてしまう。

CVCの体勢が軌道に乗りつつある今、杉田にもやらねばならないことが山積みになっていた。

杉田と未来がそれぞれ胸にくすぶらせている想いとは関係なく、事件の捜査は進んでいた。

彼らがソフィーと出会ってから丁度一週間後の午後には、タイヤズではこれまでに課題とされてきていた調査のうち、二つが完了していた。

複数の遺体に付着していたクッキーのかけらの分析結果からメーカーが特定されたことが、そのうちの一つである。更に現場から見つけたジューン人形は、手足や顔の形から製造時期が割り出され、いずれも2039年の4月から6月に出荷されたものであることが判明した。

「人形の出荷ロットがわかったからって、そこから先に捜査が進むものなんですか？」

「勿論、そこから先はまた地道な人海戦術だ。その時期に人形を扱っている小売店全てを洗ってみて、他の証拠品との関連性を見ながら犯人の足取りを追っていくんだ」

杉田がプラスチックのコピーカップに口をつけると、横に立つ特殊捜査チームのウォーリーが持っているファイルをぱらぱらとめくった。

「この人形だが、最新の被害者が出た今年8月にも同じものが使われている。しかし、一般の小売店にはこのロットのものはもう出回ってはいない。犯人は人形を大量買いしているか、もしくは店を持っていてその在庫から拝借している可能性が高いと言えるな」

「こんなような物的証拠に乏しい事件では、地道な捜査が何よりも大事なんだ。カプセルに入った薬の一粒や、動物の毛一本から解決の糸口が掴めるケースも過去にあったからね」

そこへ横合いからくしゃくしゃの金髪を指先で弄びながら、休憩を取りに来たポールが口を挟んできた。

3人の男たちがいるのは、CVC全体に割り当てられた60平米ほどの「ルーム」と呼ばれている部屋だった。ここは各々のオフィスと同じ犯罪科学研究所の地下3階にあり、オフホワイトに統一されたインテリアには会議用のデスクと椅子、コーヒーポットとテレビしかない。日本の一般的なオフィスと違い、お茶を淹れてくれたりごみを片付けるロボットは備え付けられていなかった。

ここは休憩や少人数でのミーティング、ちょっとした雑談をするのにもよく使われている。部隊は50名を数えるメンバーで構成されるため、ここはいつも誰かがいて食事をしながら話したり、広いデスクの上に資料を広げて作業をしたりするのが常だった。今現在も特殊捜査チームの女性捜査官がハムサンドをかじり、化学分析チームの検査官2人が立体OHPのスクリーンを睨みながら熱心に話し込んでいる。

杉田とウォーリー、ポールはたまたま一息入れに来て鉢合わせしたのだ。

「そう言えば、ブラックヘアの方はどうなってるんだ？」

「DNA分析ですか？」

杉田が確認すると、話の矛先を変えたウォーリーが頷いた。

ブラックヘアは、杉田やウォーリー、ポールらCVCの複数チームが担当しているアジア人男性連続殺人事件のコードネームである。アジア系の若い男性ばかりがレイプされて殺害された後、死体を遺棄されるというもので、これまでの犠牲者の数はここ2年の間に5名を数えている。新たな死体が発見される度に新聞やテレビ、ネットニュース等のメディアは騒々しく喚き立てた。

凄まじい暴力が生前に加えられていることが特徴の事件だが、これにも公表されていない情報は幾つかある。

まずどの被害者も眼鏡を常用しており、遺体発見時は全裸に眼鏡だけを身に着けていたこと。仰向けになっていたり、膝を曲げた状態でうつ伏せにされ、誰かに尻を突き出しているかのような屈辱的なポーズを取らされていたこと。そして身体を拘束された上、性的

暴行及び激しい殴打による暴行を複数回に渡って受けた形跡があること。直接の死因が、至近距離から胸を撃たれたことによる失血死であることなどだ。

最初の被害者の遺体発見は2039年12月だが、2040年のCVC試験運用開始と同時に捜査担当が移された最初の事件でもあった。

「最後の被害者であるハンク・ナカノの体内から、犯人のものらしき体液が検出されましたからね。STR分析を行って、これまでの被害者から検出されたDNAと型の一致が見られましたよ」

杉田が手にしたプラスチックカップの中で揺らぐ、ぬるいコーヒーを見つめながら言った。

STR分析とはDNA鑑定方法の一種で、遺伝子のある領域において短いDNAが繰り返し返している数を調べる方法だ。この分析方法の最大の利点は検査結果を数値で表せることであり、FBIのDNAデータベースであるCODISシステムを作成するのに採用されている方法でもある。

更に精度を高くする場合は別の検査法も用いられることがあるが、今日ではSTR分析法が最も一般的なそれとなっていた。

「検出の部位は？」

軽く溜息をついてウォーリーが質問を続けると、杉田は淡々と答え続けた。

「肛門と口腔内ですね。検死報告書によると、肛門には裂傷を伴っていました」

「やはり同一人物によるレイプ確定ってことか。確か、犯人のものらしい短い体毛も検出されてるんだよね？」

ウォーリーは検死局からCVCに回されてきた検死報告書の内容を思い起こしながら、無精髭が濃くなつた顎を撫でた。

「ええ。そちらもDNAの抽出を行っているところですけど、微妙ですね。毛包部がなかったところを見ると、自然に抜け落ちたものなんでしょう。体液の検査結果が一致しているんだから、恐らくこ

れも犯人のものかとは思いますが。逮捕後にもう一度サンプルを採って体毛自体を比較する方が、建設的だと思いますよ」

体毛から行うDNA鑑定は、実は一般的に言われているほど確実な方法ではない。

DNAサンプルを毛髪から取る場合は、毛を皮膚から強く引き抜いたとき根元に付着してくる毛包部を使う。しかし、自然に抜けたものにはこれがない。よって、STR分析が行えるDNAサンプルは運が良ければ抽出できる、という程度の成功率に留まる。

犯罪捜査における毛髪の証拠は、DNA採取の対象ではないのだ。専ら色、形、付着したごみの成分分析等による法医学的な個人識別に使用されるのである。

「しかしこのブラックヘアの犯人は、被害者の人種や身体的特徴に見事なまでの共通点が見られるな。指紋やDNAも残っているし、一見すると物証には事欠かないように見える」

「一見すると、と言うのは？」

物証が残っているのは幸運なことなのに、ウォーリーはしかめ面を崩そうとしない。つられたかのように、杉田もやや眉をひそめた。「被害者はいずれも全裸で所持品も全て奪われているし、犯行場所を特定できるような証拠が出てこないんだ。それにこいつは前科がないみたいで、FBIのデータベースに合致する容疑者がいない。DNAや指紋だけがばっちり残っていても、照合する相手がいないければ役には立たないんだ。そして、犯行時の目撃情報が一つもない」そこへ、くわえたパイプから立ち昇る煙をくゆらせたポールが口を挟んできていた。

「DNAや指紋については、宝の持ち腐れですか。やっぱり、ティーズと同じように厄介ですね」

「逆にブラックヘアは、容疑者を特定しさえすれば解決は早いんだがな。指紋は眼鏡や被害者の肌からも検出されていることだし」

杉田の素直な感想に、ウォーリーは苦笑気味に頷いた。

「若いアジア人男性ばかりを狙うんだ。犯人は恐らく彼等と歳が近

くて、警戒心を持たせないような立場と外見にあった人物の可能性が高いな。そのためにはある程度身なりもきちんとする必要があるし、見た目は全く普通の紳士に見える男じゃないかと思う。そして過去にこんな感じの……身体が細くてやや幼い外見の東洋人男性と性的なことでは何かあったんだらう」

ポールもウオーリーと同じように、指先で顎を撫でた。

この2人は意識していないだろうが、同じようなポーズを取っていることがしょっちゅうある。これは親しい者の間でよく見られる心理的な同調を示す行動だ。彼らは表面上は皮肉を言い合ったりしているが、実は仲がいいという同僚同士の典型なのである。

「全く、世の中には金と色に絡んだ事件しかないんじゃないかと疑いたくなるな。どんなに複雑な事件も、根本を探ってみればみんな同じに見えてくる」

「その二つは、人間がこの世の中で生きていくための根源的な要求に直結するものだからね。社会のシステム自体がひっくり返らない限り、犯罪は絶対になくならないさ」

「社会の構造と共に犯罪も変化していきますからね。だからこそ、CVCみたいな特殊な組織が生まれてくるんですし」

ウオーリーの呟きにポールが同調すると、杉田も頷いた。

「で、世の中から犯罪がなくなれば、俺たちはおまんまの食い上げってわけだ。やれやれ、俺は犯罪の撲滅を願ってFBIに入ったはずなのに、犯罪者を飯の種にしてるんだからな。とんだ皮肉だよ」

なお続けられたウオーリーのぼやきは、恐らく全ての法執行機関職員が抱えているジレンマそのものだろう。やはり、こういった悩みは誰でもが持つものなのだ。

日頃、自分が悶々としているのと同じように皆が悩んでいることを初めて知った杉田は、却って安心できたような気すらしていた。

その時ルームの自動ドアが開いて、数人分の足音がどやどやとかましく進入してきた。

「あれ。ポールやウオーリーだけじゃなくて、ドクターまでさぼり

か？」

茶化した口調は、泥や煤で汚れたオーデインを纏ったままのジャクソンだった。ルームの自動ドアがごつい肩幅より狭いため、彼は身体を横にして中へ滑り込んでいた。巨大な体躯に隠れるようにして未来、バーニイ、エマも続けて入ってくる。

「お前と一緒にするな。俺の場合は、休憩するのも仕事のうちだ」

「そっちは、今訓練が終わったところか？」

ジャケットの胸ポケットからマールボロの箱を取り出しつつ、ウォーリーがジャクソンをじろりと一瞥すると、ポールがやや驚いた様子で口を開いた。訓練終了直後の姿で一同がここへ立ち寄るのが珍しかったのだ。

「ああ、今日はHRTの連中と合同訓練だったんだよ。片付けまでこの格好でやってたから、遅くなっちゃったんだ。俺も仕事の続きで、休憩といくかな」

喉が渴いているらしいジャクソンがコーヒーポットへ直行すると、未来やエマたちも彼に続いた。一人バーニイだけが一団から外れ、ウォーリーたちに混ざる。

「お前はさぼり過ぎだ。とっととスーツを脱いで、捜査に行つて来い」

そして愛想のかけらもない言葉を残し、ジャケットの内ポケットからつぶれたラッキーストライクの箱を出す。隣に立つ格好になったウォーリーが、言われなくてもライターの火を貸した。

ルームの一角でウォーリー、ポール、バーニイの3人が一度にタバコをふかし始めたため、くせのある煙で狭い空間に並んだインテリアの輪郭がぼやけた。

近くのテーブルでまだ食後のコーヒを飲んでいた女性捜査官が、抗議するような視線を戦闘チームの面々に送ってくる。が、構わずに無言で煙を吐き続ける中年男性3人に対しては強く出られないようだった。彼女は軽く咳払いして席を立ち、結局は何も言わないままでルームを出て行く。

1トンを超える握力で薄いプラスチックのカップを器用に持ったジャクソンが、足早に去っていくスリッ姿の女性の背を見送りつつ、薄い紫色の霞の向こうでむくれていた。

「ちえ。バーニイこそちつとは肩の力を抜かないと、そのうち体中の部品にいつぺんにガタが来るぜ。俺やミキと違って、気の利かないマスプロ製品なんだろ」

「大丈夫よ、私が見てるんだから」

ジャクソンの隣でコーヒーに口をつけていたエマは自信たっぷりだが、間髪入れずにバーニイが合いの手を入れた。

「エマの仕事は完璧だからな」

彼の言ったことは短く、感情は込められていない。しかし逆に気難しいバーニイが皮肉を込めずに他人を褒めるなど、滅多にない。平凡な一言には、同僚への信頼が凝縮されていた。

バーニイの意外な態度に、未来が思わず目を丸くする。

こんな場合は日本人なら必要以上に謙遜したり、照れ隠しに話題を変えるものだが、エマは笑って頷いただけだった。自信と誇りを持っていることを引き合いに出されたら、アメリカ人は正直にそれを受け止める。

如実な国民性の違いは、こんなさり気ないところにまで表れるのだ。

ただ、同じ自信に満ちた笑顔でも、未来の嘗ての上司であった大月とエマとは全く違う。

大月は一方的に自分のことを知ってもらおうとする自己顕示欲が見え見えで、押しつけがましい印象しかなかった。比べてエマは、確固たる技術と経験に裏付けられた、多少のことでは揺るがない自分の姿があることを、ちゃんと知っているように思える。

自己というものをしっかり持っているからこそ、その見せどころを心得ているのだろう。

最初はよそよそしく感じていたこの同僚女性であったが、最近の未来は好意を持って見るようになってきた。

その魅力的なエマの笑顔が、今はジャクソンに向けられていた。
「将来的にジャクソンにも、マスプロ製品を改良したパーツを使う時がくるかも知れないのよ。今のうちにきちんとノウハウを知っておかなきゃ」

「おいおい、バーニイまで研究対象にしてるのかよ？しつかりしてるな、エマは」

対するジャクソンは、やや苦笑気味だ。

「私は現実的なよ。それに、マスプロ製品の方が汎用性が高いわ。沢山の人の身体に使ってもちゃんと適合させられるんだから、そういう点では専用パーツよりも優れたところがあるって言えると思うけど」

「そういう点では、アメリカの技術は日本よりも進んでると言えますよね。確か、もう大手の医療機器メーカーが参入しているんですよ？」

そこで、喫煙者の輪から抜けた杉田が話に加わってきた。煙が沁みたのか、眼鏡の下で細めた目を指先でこすっている。非喫煙者の彼は、今まで煙から逃れるタイミングを窺っていたのかも知れない。「ええ。でも、ベースになってるのは日本の技術よ。だから、ミキのメンテナンスを担当させてもらえるのはすごくためになるわ」

二人のサイボーグのメンテナンス作業は、この休憩後に控えていた。

通常は地下一階にある専用の医療設備を用いて身体の状態を確認し、必要があれば体内の各パーツに乗せられているプログラム修正や、生体部品の場合は薬剤の投与等も行われる。

外傷によるパーツの損傷が認められた場合などは手術での交換作業を行うこともあるが、未来がFBI捜査官となって以来、一度も手術を行うような事態に陥ったことはなかった。

「ただ、ミキ自身はドクター・スギタがメンテナンスを単独でやるほうがいいみたいだね」

ハヤテを着たまま苦労して握力を調整しコーヒーを飲まんとして

いた未来は、そのエマの一言で薄いプラスチックカップを握りつぶしてしまった。

熱いコーヒーが蒼い金属に包まれた手から絨毯の床に滴り落ち、湯気がタバコの煙に混ざる。未来は慌ててコーヒーポットが据えられたキャビネットの下を開け、棚からペーパータオルを取り出した。「そ、そんなことありませんよ！エマもドクター・スギタも同じくらい、いい腕してるんですから。お二方のどっちでも、私の身体を診られるのが理想なわけですし」

重ねたペーパータオルを叩きつけるようにして床を拭き始めた未来の顔が、明らかに紅潮している。急に床にしゃがみ込み、血が頭に上ったためだけではないようだった。

「あら、そこまで動揺しなくていいじゃないの。それに、私は技術のことを言ってるんじゃないわよ。貴女はドクター・スギタの言うことはどんなことでも素直に聞いている気がするから」

「まあ、相性が悪い奴とは一緒に暮らせないもんな？お前たちが必要以上に仲良くしていることぐらい、俺たちだってちゃんとわかってるんだからよ」

更なる追い討ちをかけてきたエマとジャクソンは、これも明らかに面白がっている。力加減を誤りそうになった未来は、コーヒーの滲んだペーパータオルを当てた平手でコンクリートの床を叩き壊してしまうところだった。

「だからさういう……」

「大体日本人は、『愛』って言葉を生活から遠ざけすぎなんだよ。ありとあらゆる感情の中で一番素晴らしいものを、なんだってお前たちは相手に言わねえんだ？お前ら、お互いのことを愛してるんだろ？」

流石に声をやや大きくして顔を上げた未来を、ジャクソンが遮った。

アメリカ人が「愛」という最も荘厳でかつ、重みのベクトルが違う単語を何故日常生活の中でばんばん連発できるのか。未来からし

てみれば、その方が余程理解できない。

これも文化の違いだと言ってしまうはそれまでだが、明言しないからと言って杉田と未来との間に愛がないわけではない。むしろ、同じ日本人の若者から見れば「バカップル」の典型であろう。

もう一人の話の種である杉田はと言えば、何食わぬ顔で冷めたコーヒーをすすっているだけだ。敢えて聞こえないふりをしているのだろう。

「私は……その」

「ミキ！いるかい？」

どうやって日本人ならではの愛情表現を説明しようか話あぐねる未来にとって、ルームに駆け込んできたトリスはまさに救いの神だった。

「何だよトリス、今休憩中だ。後にしろよ」

「たった今、君専用の銃が完成したから届けに来たんだ。バードソング仕上げに時間がかかったちゃってね。どうだい、見るよ！この素晴らしいフォルムをさ！」

トリスを追っ払おうとするうるさそうなジャクソンの言葉は、見事なまでに当人の耳を通り抜けていた。ハヤテを着込んだ姿で床に這いつくばっていた未来の横へしゃがむトリスの勢いは、ホームベースへ滑り込む野球選手さながらだ。

「もうできたのか。また徹夜か？」

「いやあ。作業に夢中になってたらつい、家に帰るのを忘れちゃってね。気がついたら、朝になってたんだ」

トリスは屈託なく笑いながらバーニイの無表情な顔を見上げ、脇に抱えていた木箱を未来の手に押しつけてくる。

「残業の申告は都度出さないと、またマックスからケツを蹴られるぞ」

「わかってるって、バーニイ。でも僕にとっては武器やスーツを触ってる時間が、一番幸せなんだよ。それは知ってるだろ？別に残業代なんか出なくて、それはそれで構わないんだ」

トリスを相手にしているとどうもバーニイは調子が狂うようで、息をついて無言で頷くだけだった。僅かに目元が脱力したらしく、仕方のない奴だとそこが語っている。それでも文句を言わないのは、この機械オタクとも言える仲間をそれなりに認めているからなのだろう。

バーニイの言い種は誰に対しても突き放した印象があるが、ここまで自分のペースで会話ができるのはトリスくらいだ。未来はまだ一歩引いた位置からバーニイの胸の内を探るようにしながらでないと、まともな言葉が交わせない。

トリスのマイペースぶりは、色々な意味で尊敬できるものだった。「ほらミキ、早く開けてみてよ」

金属に包まれた両手の上に鎮座する白っぽい木箱をまだ開けない未来に、トリスは待ちきれないようだ。

一度しげしげと全体を眺めてから、未来は木箱の蓋を持ち上げた。中に収められていたのは、日本で未来の戦術指導担当だったリユ一の愛銃であるコルト・ガバメントに近い外見を持つ黒い拳銃だった。

「そいつのベースになってるのは、コルト・ガバメントのスプリングフィールド・FBIスペシャル・ビューローモデルなんだ。勿論ラバー・ショック弾を撃ち出せるように色々と手は加えてあるけどね」

トリスの説明を聞きながら、未来は銃を取り出した。

ガバメントがベースなだけに、45口径程度だろうか。彼女が日本で愛用していた50口径のデザートイーグルより小振りではあるが、FBI標準の拳銃であるグロッグより大きい。

スプリングフィールド・FBIスペシャル・ビューローモデルとは、確か連邦政府がSWAT用として1996年に正式採用した拳銃であり、かなり大型のそれであることに変わりはない。ジャクソンくらい大柄な者ならいざ知らず、小柄な未来はシヨルダーホルスターに入れて上着の下に隠すことは無理そうだ。

慎重に箱から銃身を持ち上げ、指をトリガーにかけずに握ってみる。グリップの太さは、通常の45口径と変わらない印象だ。弾丸が50AE弾よりも小さくゴム製なのだから、弾丸を充填したマガジンを装填しても、デザートイーグルより軽いことは間違いないさそうだ。

「この銃、名前はあったっけ？」

「勿論。ホーネットさ」

トリスが胸を張って未来の問いに答える。

ホーネットとは、スズメバチの英語名だ。

スズメバチは世界中に生息している大型の蜂で針に強い毒を持っており、人間を死に至らしめる場合もあることで知られている。拳銃自体は非致死性兵器なのに名前が一撃必殺の蜂とは、何ともちぐはぐだ。

が、犯罪者を威嚇するには適切な名前だろう。

未来は矛盾を指摘するより自分専用の銃が出来上がったことの嬉しさが勝り、自然と笑顔がこぼれていた。

「へえ、いい感じだね。私の手にもちゃんと合うみたいだし」

「だろ？ちゃんとミキの手を3Dモデルに起こして、グリップを設計したんだ。これで合わなかったら、僕は首を吊らなきゃならないよ」

関心する彼女の言葉に、トリスは嬉しそうな笑顔を絶やさない。

しかしこれを一から作り上げてテフロン加工を施すのは大変な手間だった筈で、熟練工に匹敵する技術がなければ短期間で仕上げることは不可能だ。

彼だからこそ、笑いの種にできることなのである。

一通りホーネットを眺め回していた未来が、ふと首を傾げた。

「でも、ジャクソンのとは色が違うんだね」

「ああ。ミキは隠密行動タイプのサイボーグだろ？だから、銃身が目立たないように黒くしたんだよ。ジャクソンは逆に派手にする必要があるから、ステンレスモデルなんだけど」

いつもジャクソンが腋の下に忍ばせているホーネットは銃身が銀色に輝くステンレス製だったが、新たに作られた未来のそれは黒い鉄製なのだ。

パワー重視型で市民の盾となることがある保安型サイボーグのジヤクソンは、銃も人目を引く方が都合がいい。

闇に紛れて破壊工作や諜報活動目的で動くために設計されている未来は、その反対だ。

このように各々が身に纏うパワードスーツの特性や改造の特徴を考慮すると、銃もそれに合わせたカスタマイズにするのがベストということになるだろう。

「じゃあ、早速試射といこうか。あ、ハヤテは着たままのほうがいいな。この先の訓練や実戦じゃ、スーツを着た状態で使うことも多いだろうから」

「よし、俺が撃ち方を教えてやるよ。普通の銃とはちょっと違うからな」

絨毯の上にぺたんと座っていた未来の横に膝をついていたトリスが立ち上がると、ジャクソンが片方の唇の端を吊り上げて笑った。

黒人の青年は、まだ腰を床につけている未来の腕を上につっ張り上げて立たせようとする。

「ちよつとジャクソン、押さないでっば。銃が落ちちゃう！」

先輩風を吹かせているジャクソンの強引な行動に抗議しながらも、未来の声は明るかった。

パワードスーツ姿のサイボーグ二人と小太りな東洋人という珍妙な取り合わせの一団は、賑やかなやりとりの余韻をルームに残しながら屋外射撃場へと向かっていった。

3人が目指す屋外射撃場は銃保管庫のすぐ隣にある施設で、射座の数は50以上に上る。射撃場としては、かなり規模が大きいものだと言えるだろう。そしてここが一般の射撃場と異なるのは、フェンスや廃車となった車両、バリケードが設置された一角があり、ここでも実弾を使用した訓練ができることだ。

ジャクソンと未来が候補生だった頃、ここで幾度となく教官の罵声を浴び、あらゆる天候の下で昼夜問わず訓練を受けたものである。未来はアカデミー卒業以降CVC配属になるまで、射撃訓練をリッチモンドの民間射撃場でやっていた。そしてCVCに所属してからは、ホーガンズ・アレイで取り組むHRTとの共同訓練が中心だった。そのため、アカデミーの射撃場に来ること自体が久しぶりだ。そして、パワードスーツを纏って他人の目に晒されながらの射撃は初めてだった。

派手な光沢を放つジャクソンも、鈍く沈んだ蒼色に包まれた未来も、一般の捜査官からは当然、奇異の目で見られることになる。まるでコミックヒーローの仮装をしたマニアがPRイベントのため紛れ込んでいるようで、居心地が悪いことこの上ない。普段着でここに来ればぴんと張り詰めた独特の空気に背筋が伸びただろうが、今は何だか赤面して身を縮めなくなるような思いだ。

未来はこんなことならヘルメットをルームに置いてくるべきではなかったと、真面目に後悔した。それでも身体中がむず痒くなるような視線を浴びている中で、まともに目を合わせようとする者がいないのがまだ救いだらうか。

それに観光客よろしくいつまでもにやっついていたり、凝視したま

まの者がいないのも、自己を厳しく律することを要求される法執行機関の職員ならではと言えるだろう。

「このホーネットは、お前の相棒の一人になるんだからな。まずは保存用のグリースを拭き取って、潤滑油を塗り込むんだ」

片や、ジャクソンは慣れているのかお構いなした。自分の銃を脚の隠しホルスターから取り出してから壁際にある木の長椅子に座り、その横に山積みになっているぼろ布で擦る仕草を勿体ぶってやってみせる。

「いいか？できれば300発は試射しろよ。新品の銃の場合は可動部分を磨耗させて、部品を馴染ませなきゃならないからな。十分に動作の特徴を掴んでからじゃないと、いざって時にまともに撃てないんだぜ」

そして、ラバー・ショック弾を装填したマガジンを装填してから未来の方を向いて顔を上げる。彼の得意げな顔に、未来は早くも呆れ気味だった。

「わかってるってば。私だって、素人じゃないんだからさ。拳銃だけじゃなくて、アサルトライフルや機関砲だって使ってたんだよ」

未来がぼろ布を一枚取り上げ、ホーネット本体のグリースを拭いながらジャクソンの隣に座る。すると、付き添いで来たトリスと入れ違いになって彼は立ち上がった。

「撃つときは左腕を曲げて構えるウィーバー・スタンスだ。試射は立射だけじゃなく、伏せ撃ちや膝射もやるんだぞ。有効射程は50ヤード（約50メートル弱）程度だが、俺たちならそれでも命中させることはできるはずだからな」

「はいはい」

ジャクソンは未来の言うことなど全く聞かず、偉そうに講釈を垂れ続けている。

実戦的とされるウィーバー・スタンスで射座に構えたジャクソンであったが、実際には発砲せず腕を下ろした。そしてすかさず、苦笑と共にマガジンを装填しつつ歩み寄って来た未来に場所を譲る。

未来は防護眼鏡だけをかけると、聴力を落としてホーネットを構えた。

やや大きな銃身を両手で目の高さに固定し、安全装置を外してゆつくりと引き金を絞る。

日常的に腋の下に携えているグロッグの発砲時よりも大きな破裂音がざわめいた空気を打ち、他の射座から上がるショットガンや拳銃の射撃音と混ざった。

火を噴いた銃口から吐き出された弾丸が、ターゲットに描かれた黒い人影の中心へ吸い込まれるように命中する。注意して見ると、潰れたゴムが木製の板に放射状の模様をかたどっているのがわかる。普通の弾丸ならターゲットに穴を穿つが、ホーネットに装填されたラバー・ショック弾は木の的を貫いていないのが大きな特徴だった。そして発砲時の反動を全て押さえ込んだ未来の腕が微動だにしないのも、この場にいる者たちと違うところであろう。ベースがSWATに正式採用されている45口径の拳銃なのだから、本来なら鍛え上げた男性捜査官でも全く腕が跳ね上がらないことはありえないのだ。

未来はそのまま、マガジン1つ分に当たる7発分を撃ち終えた。

全ての弾丸は、マントーゲット中央の数センチ以内に命中していた。

「どうだい？」

腕を下ろした未来の横に、ヘッドホンを首まで下ろしたトリスがやってくる。

「普通のガバメントよりも、やつぱりちよつと軽いみたいだね。それに引き金の絞りが少し甘いみたいだから、これは自分で直しておくよ。新品だから、サイトにも問題はないと思う。あとは練習を慣れるまで何回もやるだけかな」

未来は安全装置をかけたホーネットから空のマガジンを取り出すと、射座の先にあるマントーゲットを見た。

「撃った感じは普通の拳銃とあんまり変わらないんだね。それより、

マントーゲットに穴が開かないのにちよつとびつくりしたよ。こんなので本当に、犯人を一撃で行動不能にできるの？」

彼女が渡米するまで愛銃としていたのは、自動拳銃の中で最高の威力を誇るとされるデザートイーグルだった。その強力さは身に沁みてわかつているだけに、木の板ですら撃ち抜けないこのホーネットにはいささか不安を感じるのだ。

トリスは全く問題ない、と言いたげな顔で首を振った。

「ラバー・ショック弾に当たったらどうなるか知ってるかい？身体に穴こそ開かないけど、潰れた弾丸がある程度まで皮膚にめり込むのさ。酷い内出血を起こして傷が3倍くらいに腫れ上がるし、どこに当たっても我慢できないぐらいの激痛が走る。ただの打撲傷じゃ済まないんだ。一発でも撃ち込めば、大人の男だってショックで気絶するのは確実なんだよ」

ぼつちやり体系の日系人男性が説明する口調は得意げだ。

だからこそ名前通りのラバー・ショック弾なのであるが、それ故に注意しなければならないこともある。先のジャクソンと同じように、トリスは真面目な顔で続けた。

「一つ言い忘れたけど、こいつは非致死性兵器とは言え拳銃なんだ。5ヤード（約5メートル）以内から撃った場合、当たりどころによつては相手が死ぬ可能性もあるから気をつけてくれ。それから、心臓や脳は不意の衝撃に弱い。離れていても狙わないようにね」

通常、FBIの捜査官は容疑者の急所を故意に外して発砲することとは許可されていない。

しかし人間離れた正確さの射撃が可能なサイボーグのジャクソンと未来は、このホーネットで発砲するときのみその例外が適用される。逆に急所を外して犯人を撃つからには、取り逃がすことや死に至らしめることが断じて許されない。

肝に銘じて、この新しい相棒を手なずける必要があった。

「癖で狙わないように気をつけるよ。手足とか肩に当てるってことだよ」

説明に納得した未来が頷いたが、気まずそうに辺りを見回した。

少し離れた射座へ射撃訓練にやってきたアカデミーの訓練生たちの集団が、好奇心を隠し切れない視線でちくちくと身体をつつき回しているのだ。

「それにしても、CVC専用の射撃場ってないの？これじゃ、目立つてしょうがないよ」

「警沢言っつな。そんな予算があると思っつてんのか？」

ジャクソンが、軽く未来の後頭部を指先で小突く。

「ホーネット1丁作るのだって、カスタムオーダーなんだから高いんだぞ」

確かに、ベースとなっつているスプリングフィールドも1丁2500ドルは下らない。それを使用者の手に合うように型から起こして改造も加えていくのだから、コストは青天井のはずだ。

「……いくら？」

生唾を飲み込みかけた未来に、トリスが低くぼそりと呟いた。

「聞いたら多分、金庫にしまっつておきたくなるような値段だよ」

「やっぱりやめとく」

未来も意識せず真面目な顔になっつて、低く言っつていた。

知っつてしまっつたら、きつと遠慮なく撃つことが罰当たりな気がしつて使えなくなっつてしまっつたろう。もつとも、未来やジャクソンの肉體改造やパワードスーツ製作には何億ドルもかかっつているのだから、今更気にするのも詮無きことではあっつたが。

ジャクソンたちがホーネットの試射を終えてルームに戻っつてきたのは、1時間後だっつた。

「お前たちも来たか。丁度いい、そのまま聞いっつてくれ」

硝煙の臭いを振りまきながらルームに入っつてきた3人の耳へ最初に届いたのは、戦闘チーム責任者であるマックスのいかめしい声だ。ルームには戦闘チームの面々に加えてポールとウオーリーもおり、皆ずつとここから動いっつていなかっつた様子だ。雑談から本格的なミー

ティングに、ずるずると話が続いてしまったのだろう。

「へえ、隊長がこんな時間にいるなんて珍しいな」

他の者と一緒にマックスの方へ行きながら、ジャクソンが呟いた。マックスは戦闘チームの責任者でありCVC部隊長ではないから、隊長という呼び方は本当は正しくない。が、バーニヤジャクソンら軍隊出身者が「隊長」と呼んでいるため、徐々にそれが当たり前となりつつあった。

「よし、主な者は揃っているな。ティアーズ事件の捜査についての進展を簡単に説明する」

周囲に集まった男女の顔を簡単に見渡してから切り出したマックスが、樹脂製の黒いクリップボードに挟んだ書類を見ながら説明を始めた。

「複数の遺体に付着していたクッキーのかけらだが、物質分析チームに依頼していた成分の分析結果から、マイスターフーズ社のオートミールクッキーであることが特定された。こいつは油脂の酸化具合や水分の含有量を見ると、出荷されてから遺体に付着するまで、少なくとも3ヶ月以内であったことが推測される。そして遺留品のジューン人形だが、全て2039年の4月から6月に出荷されたものであることが判明した。以後は、この二つをごく最近まで扱っていたスーパーマーケット及びショッピングモールの倉庫を中心に、捜査を進めていくこととなる。他の果物の皮やクマネズミの糞は、大した特徴はない。だが、比較したところでは全て出所が同じ場所である可能性が極めて高いということだ」

マックスが皆の前で言ったのは、先ほどウォーリーたちの話題に出たこととほぼ同じ内容だった。これで捜査対象となるスーパーの倉庫はある程度絞られるだろうが、それでもまだまだ絨毯爆撃方式で調べていくしかないことは変わらない。恐らくこれから先も、有力な目撃証言や新たな証拠物品が見つからない限りは、地道にやるしかないだろう。

「全体的な捜査の指揮は、引き続き特殊捜査チームが中心となって

進めることになっている。戦闘チームの者は、ロボットとの戦闘の準備を万全にするようにしておいてくれ」

その場にいた関係者全員に話の内容が伝わったことを表情で確認すると、マックスは本当に短い話をあつと言う間に終えて、ルームから退出した。

「いつものことだけど、忙しい人だよな」

「マックスは、予算や必要物資の確保のことでも忙しいからな。ただ戦ってればいい俺たちとは違う苦労があるんだよ。CVC部隊長との板挟みで、苦労する立場だからな」

マックスがきびきびと廊下へ足を運んで行ったのを目で追っていた未来が呟くと、ジャクソンがやや気の毒そうに頷いた。

「マックスも元HRTの隊員だったんだ。本当なら現場で戦いながら指揮を執るのが性に合ってるんだろが、経験が浅い他の奴には任せられないって言い張ってるらしいからな」

「へえ、そうなんだ。今度一度呑みながら、ゆっくり話でもしてみたいもんだけど」

未来も日本では経営者の立場であった故、様々な軋轢に揉まれた経験がある。マックスの話は他人事に思えなかった。

「やめとけ。ああ見えて隊長は絡み酒なんだ。一度捕まったら1時間離さねえもんだから、俺なんかはその間ずっと呑みっぱなしなんだよ。まあ、そういうときは隊長の驕りだからいいんだけどな」

黒人のサイボーグ青年が茶化して白い歯を見せると、未来は心底意外そうに目を丸くした。あの自制心の塊のようなマックスが酔っ払って饒舌になるところなど、想像もつかなかった。

「アルコールの摂り過ぎは身体に響くわよ。ミキもジャクソンも、肝臓まで強化されてるわけじゃないんだから」

いかつい二人の隣に佇んでいたエマが、眼鏡を白い指で押し上げながら窘めと冗談を混ぜたような視線を送ってくる。姉に叱られた弟のように、ジャクソンが口を尖らせた。

「わかってるよ。わかってるけど、エマだって結構な酒豪じゃねえ

か。たまには俺と呑みに行こうぜ」

「そうね、今度娘の機嫌がいいときにね。最近忙しいものだから、あまり構えなくて色々大変なのよ。その分、空いてる時間はなるべくあの子のために使いたいから」

「そういえば、エマの娘さんっていくつなんですか？」

素朴な問いを、未来がエマに投げかける。

「5歳よ。昼の間はこの施設に預けられるけど、小学校に上がったからのほうが却って難しいわね。このご時勢だから、娘を一人で家に置いておくのも不安だし。信用できるベビーシッターを探すのも、結構時間がかかるから」

未来が思っていたよりも、エマはすんなりと答えてくれた。

エマは捜査官ではないとは言え、FBIの職員であることに変わりはない。プライベートな情報を表に出すことには神経質なはずだ。それでも未来の質問に答えてくれたのは、多少は気を許してくれるようになってきているということなのだろう。加えて、エマの眼鏡の奥にある青い瞳に、どこか母親らしい優しさがにじんできているような気さえした。

未来も和んだ空気に触れて、マックスの残っていた気配にまだ緊張していた肩の力が抜けていく。

娘にも向けているのだろう、穏やかな笑顔でエマは二人のサイボーグに言った。

「でも、私にとっては貴方たちも手のかかる家族みたいなものよ。

二人一緒にメンテナンスをやるから、ドクター・スギタと一緒にいらっしやい」

「エマ、メンテナンスのことでちょっと提案があるんだけど」

一緒にいたポールやウオーリーが退出した後も残っていた杉田が、エマたち三人の方に歩み寄ってくる。

「そろそろ担当をたまに入れ替えて、個人でのメンテナンスをやり始めた方がいいと思うんだ。さっきもそういう話が出たけど、お互いに未来とジャクソンの二人を診られるのが理想だからね」

杉田が二人のサイボーグともう一人の生体メンテナンス担当者の顔を交互に見やりながら、やや遠慮がちに提案すると、エマが頷いた。

「そうね。設計図の内容は大体頭に入っているし、もう実際の作業で二人の違いを知っておいた方がいい頃かも知れないわ」

ほっとしたように、杉田の眉尻が少し下がる。

「未来も、エマになら身体のこととは相談しやすいだろ？同性なんだし」

「うん……まあね」

メンテナンス時はいつも通りに二人で過ごせるものと思っていた未来も、彼の様子を見て反対意見を出し辛くなった。不承不承ながらも、同意して見せる。

「へえ。ドクターは男の身体にも興味があるのかい？」

「ああ、あるとも」

早速ルームの外に足を運んでいくジャクソンに追いついて、杉田はからかいても思える言葉を含み笑いで受け止めていた。

「勿論、医学的な意味でね。例えば、君の発電ユニットや電池ユニットが実際にはどんな感じで収まっているのかとか。骨の強化のやりかたがどんな風にされていて、移植後に男女間で差が出るのかとか。エマが日本の技術に興味があるのと同じように、僕もアメリカの技術には興味深々だよ」

と、彼はジャクソンの横に並んでオーデインを纏った胸板を右手でぽんと叩く。

歩幅がかなり違うため、ジャクソンの歩みに杉田がついていくのは大変そうだったが、それでも杉田は笑顔を絶やさないでいる。

「それにジャクソン以外にも、部分的な改造を施されたサイボーグたちもいるんだろ？そもそも、プロジェクトとしての観点が僕らとは全く違うからね。その点も興味深い」

「ドクター・スギタは、どうも学者っぽいところが抜けてないみたいだな」

眼鏡の青年医師につられたのか、ジャクソンも少年ぽさが抜け切らない笑顔を返していた。

「抜けてないんじゃないかと、僕の本質は研究者だよ。医者なのはその手前の段階みたいなもんさ。だから、一つのことをとことん追究していきたくてね」

「そんなもんか？じゃあ、俺を題材にしたらしい論文が書けそうかい？」

「論文か。もうかなりご無沙汰だな」

子供っぽい面が要所に見受けられるジャクソンだが、杉田も一つのこと熱中してしまうと周りが見えなくなるほうだ。この二人には、目立たないところで共通するところも多いのかも知れない。だから話も合わせやすいのだろう。

人種も職業も違う二人の男は、テンポが良い会話を続けている。

彼らの後ろをゆっくりと歩くエマと未来は男性二人の背中を眺めながら、同じようにメンテナンスルームを目指していた。

「何だかんだあの二人、意外とうまが合ってるみたい」

「そうね。ドクターは私みたいな女が苦手なようだから、ほっとしてるのかも知れないけど」

意外なエマの言葉に、未来は思わず隣を振り向いた。

端正で美しく、知的な白人女性の横顔がまっすぐに前を向いているのが、未来の視界に入ってくる。

そう言えば、エマの印象には故人である大月玲華にどこことなく似た香りを見つけることができる。

大月は、サイボーグたる未来を生み出したプロジェクトたるAWPの責任者であり、未来や杉田の直属の上司に当たった。知性と美貌を武器として、国内有数の製薬会社で役職の地位にあった女性である。

彼女はキャリア志向気も強くつつきにくかったが、気の強い姉3人に小さい頃からいいように使われていた杉田が最も苦手とする女性でもあった。

杉田の苦手意識をとことんまで利用していたのもまた大月だったが、エマは自分を強く持つているという点が共通するだけで、決して彼のことを蔑ろにしているわけではない。

エマが芯のしつかりした女性であることは未来も感じていただけに、この美しい白人女性と接する時間が未来よりも長いはずの杉田が苦手意識を未だに残しているのは驚きだった。

「どうしてそう思うんですか？」

思わず素に戻ってしまったらしい未来の甲高い声を、エマは落ち着いて受け止めた。

「彼は私とあまり打ち解けようとしないうか、いつも緊張してみたいなの。少し慣れてからも、仕事のこと以外は殆ど話さなかつたしね。だから彼、いつもミキのことばかり話してたわ」

未来にとっては、これも意外なことだった。

やはり杉田は、未来以外の女性に対して心のガードが極端に固いということなのだろうか。

が、そこで引っかかってくるのは、最近フィットネスクラブで出会ったソフィーのことだ。

彼女に対してのみ杉田はとことん饒舌になっているように見えだし、ほとんど緊張もしていなかったかのような感じさえある。

面白くもないことを思い出してしまった未来は、軽く視線を逸らして心の中に広がりそうになった醜い感情の雲を払った。

「それに男同士の仲って、女の私たちにはわからないところもあるから」

ふとこぼすような口調になったエマは、どこか寂しそうになっている。

いくら彼女が担当医であると言っても、性別が違う以上、ジャクソンの心根を奥底から理解することは難しい。勿論、それは杉田にも言えることだ。

つい先ほど、彼女は未来とジャクソンのことを「手間がかかる家族のようなもの」と言っていた。付き合いの長いジャクソンが自分

の手から少し離れたところに行つた気でもしたのだろう。

逆に、未来は杉田が自分だけを見てくれなくなったという幼稚な錯覚を覚えており、少し胸の中がと口が重くなっていた。

二人の女性はどちらからともなく会話をそこで終わらせて、変わらないペースで殺風景な廊下を進んでいく。

その奥にある業務用のエレベーター前に辿り着いたところで、エマは再び口を開いて未来の顔を見つめた。

「私たちも、そろそろお互いをきちんとしたパートナーと思わなきゃならない時期に来てるんじゃないかと思うわ」

「え……」

エマから言葉の不意打ちを食らつた未来は今一度、驚きの色を目に浮かべることとなった。エレベーターを呼ぶボタンを押す指も、その直前で止まる。

「私も今まではちょっと離れた場所からミキのことを見てたけど、流石に貴女は日本で何回もの実戦を生き抜いてきただけのことはあるわね。自分の身体のことがよくわかつて、精神的にもタフなようだし。何より、ドクター・スギタとは強い信頼の絆で結ばれてるのがよくわかるわ」

エマの顔を見て目をしばたかせた未来は、何も答えずにエレベーターのボタンを押した。

この生体メンテナンス担当女性の目は、研究者のそれであることがよくわかる。

しかし、部分的に大月と同じ印象があつても、彼女の青い瞳には優しさと穏やかさがあつた。そして今しがたの言葉が示すように、相手のことをきちんと認めてくれている。

実験動物を見る、自分自身を必要悪として断罪し冷めたそれではない。

そこが一番の違いだった。

未来が考えを図りかねていると思つたのか、エマは更に続けた。

「もし、今まで意図的に貴女との距離を置いていたことに気を悪く

してるのなら、謝るわ。でも、初対面の相手といきなり親しくならないのは、法執行機関に身を置く人間の癖みたいなものなの。たとえ捜査官でなくても、私たちは信用している人から暴力を振るわれたような、悲惨な事件に巻き込まれた人たちのことを知っているものだから」

「いえ、そんなことは……貴女は小さな娘さんの母親なんですし、私は得体の知れない東洋人なんですから。警戒されるのは当然だと思っただけです。それに他人をまず疑ってかかるって言うのは、私だって同じです」

職業柄、疑り深くなるのはどうしようもないことだ。逆に未来は、杉田のほうが警戒心がなさ過ぎるのではないかと不安に思っていることもある。

地下3階に下りてきたエレベーターの扉が開き、二人の女性は一旦口をつぐんで中へ乗り込んだ。が、今度は沈黙が続いてしまわないうように、未来が先に口を開いた。

「でも、そうやって話して頂けたのは嬉しいです。こういう場では数少ない女同士になるんですから、仲良くやっていきたいとずっと思っていました」

笑顔と共に出た未来の言葉も、落ち着いた声に乗せられている。

エレベーターはすぐにメンテナンスルームがある地下1階に着き、彼女らは連れ立って下りた。少し遅いペースで再び歩き出した未来に、エマが歩調を合わせる。

そして、やや高い位置にあるパワードスーツの肩に優しく手を置いた。

「ありがとう。なら、そんなかしこまった言い方はしなくていいわよ。普通に話してごらんなさい。丁寧な口の利き方は、マックスに對してだけでいいから」

「ええ。じゃあ……わかった。そうするようにするよ、エマ」

「これからは、ドクター・スギタに言い辛いことは私に話してくれたら嬉しいわ」

ぎこちない未来のしゃべりかたに、エマがくすりと笑ってみせる。
「もちろん、彼との間に何かあったときに相談してくれても結構よ。
女性としては私の方が先輩だから」

「うん。困ったことがあつたらね」

頷いて見せつつも、面倒見がいい部活の先輩を思わせるエマの態度の変わりように、未来はまだ違和感を覚えていた。

「どうやら彼女は一度信用した相手のことはとことんまで、という性質らしい。」

その点でいけば、非常にアメリカ人らしいとも言えるだろう。

未来は戸惑いながら、まずはエマに対して気を使わない話し方をしないようにするのが先決なような気がしていた。

定期メンテナンスは、ジャクソンと未来の二人が同時に違う設備を使って行う。アカデミーの地下一階に常設されたメンテナンスルームはただっ広い印象で、各検査機器があちこちに設置されているスペースが仕切りカーテンや特殊なパーテーションで区切られたつくりとなっていた。

ちよつと見たところでは医療研究所の検査室といった趣で、これとは別の部屋に最新型の医療機器を備えた手術用設備もある。

日本ではレントゲンやCTスキャンを使用した検査が度々あったが、アメリカではこの二つを控えている傾向がある。あまり頻繁に放射線に身体を晒さないよう考慮しているのだろう。よつて、内臓類の検査はMRIとエコーが主なものとなっており、身体に対して放射線の影響をもたらす機器を用いた検査については、必要最低限とされていた。

それに加えて血液検査や通常の検診も加わるが、こういった一通りの検査項目で異常があれば適宜外科的な処置を行ったり、薬剤やサプリメントを処方したりする。大きな損傷や予測しなかったパーツの劣化があった場合は手術によってパーツ交換をすることもあったが、今回は特に大きな問題はなさそうだった。

「え、右膝にヒアルロン酸の注射？膝、別に痛くないよ？」

「まあ、今の段階ではそうでしょうけど。酷くなるとかなり激しい痛みが出るようになるから、そうならないうちにね」

薄いブルーの袖なし検査着姿でベッドに身を起こしている未来の顔が、ひきつっている。その傍らで未来の右足の産毛を剃刀で剃り、施術準備を進めているエマは、有無を言わさぬ口調だ。

「でもあの注射、痛いんだもん。もうちよつと後にしてよ、ね？」

サイボーグの関節は常人と造り自体が異なるため、手入れもこまめにしなければならぬ。ヒアルロン酸の注入もその一つだが、医

療現場で使用されている針が細い注射器は、人工筋繊維に適合した
ものではなかった。

そのため、針が太い一昔前の注射器が用いられるのである。無論、
針の太さに比例して苦痛も増すのだ。

「駄目よ、膝の痛みが出てからでは遅いの。大丈夫、注射するところ
を今冷やしてるから。これで少しは痛みが和らぐわ」

大きな瞳を潤ませて未来は懇願するが、エマは未来の右膝外側上
部をビニールの冷却パックで冷やすばかりで、注射をしないという
選択肢は頭にないらしい。

白衣姿のエマの右手には針がやや太い注射器が握られており、そ
の先から粘りがある薬剤を少しだけ噴水のように出して針の具合を
試している。そんな作業を目の前でやられると、これから金属の鋭
い先端を数センチも打たれる人間としては、余計に恐怖心を煽られ
るだけだった。

以前にもこの処置を受けたことがある未来は、脂汗をかいて泣き
たいぐらいの激痛があることを知っている。心臓の鼓動が激しくな
り、顔から徐々に血が引いていくのがわかるほどだった。

「どうかしたのか？」

未来の哀れな雰囲気を感じたのか、杉田が仕切りカーテンの向こ
うから顔を覗かせた。ジャクソンは異常がなかったため、先にメン
テナンスが完了していたのだ。

「ああ。ミキが注射を嫌がってるだけよ」

「だって、関節注射の時は麻酔もできないからさ。誰だってあれは
嫌だよ」

未来がすぎるような目を杉田に向ける。

確かに関節注射では感染防止のため、余計な注射をしないことにな
っている。未来は杉田が処置を中止してくれることに一縷の望み
をかけているようだったが、彼も医師だ。異常が認められたのであ
れば、処置をしないわけにいかないという点ではエマに賛成なのだ。
「仕方ないわね。じゃあ、ドクターと何か話でもしてるといういわ。」

その方が気が紛れるでしょうから。お願いできる？」

「わかったよ。さあ未来、こっちを向いて。僕が手を握ってるからね。自分の足は見ないようにするんだぞ」

杉田がエマの提案をあっさりと受け入れたことで、未来は流石に覚悟を決めたようだった。エマの横に椅子を引っ張ってきて座った愛しい男に右手を握ってもらい、起こしていた上半身を治療用のベッドにすくとんと横たえる。

「あ、そうだ。さっき、私の専用拳銃の試射をしてきたんだよ。名前はホーネットって言ってさ……意味はスズメバチなんだよ」

「ふうん」

未来が杉田に振った話は、実は彼もルームにいるときに聞いていた話だったが、怖さに混乱しているのだろう。

その話の途中で未来が一瞬顔を強張らせ、言葉に詰まった時があった。

エマが注射針を膝に刺したのだ。杉田は未来が話す内容には気のない返事しかできないが、それでも彼女は痛みを堪えて何とか先を繋いでいく。

「でもさ、スズメバチの毒は一撃必殺でしょ？銃のほうは非致死性兵器だから、ひ、人を殺せないってのに。名前が矛盾してるよね」

杉田が手を握ってやっている未来の口元が明らかに歪んできて、力んでいる肩までがぶるぶる震え出した。エマの手元をふと見ると、ゆっくりと慎重に未来の膝関節に薬剤を注入しているのがわかる。

針の先が関節の内側にまで達しているのだ。相当な苦痛を伴うことは、想像に難くない。

「そうだね」

それでも必死に耐えている未来が気の毒になってしまい、杉田は頷くしかなかった。

「ホーネットで撃たれると、とても痛いどころじゃすま、済まないんだって……トリスが、言ってたんだ……大人だって、一発食らったら、即……即、気絶するらしいよ」

未来の額にじつとりと汗が滲んで、どもり方も酷くなってきた。

その数秒後にやっと、力が入っていた彼女の肩が緩んでベッドに落ちる。エマが針を抜いて、処置を終えたのだ。未来は深く息をついたが、まだ痛みはあるのだろう。顔をしかめて仰向けになつたまま、呻くようにこぼした。

「……これ、いつそホーネットを一発食らって気絶してる時にやる方が楽かも」

「子どもみたいなこと言わないの。来週と再来週のメンテナンスでも、注射する必要があるからね。そのうち、この痛さにも慣れると思うから」

注射を終えた右膝に滅菌した脱脂綿とガーゼを当てて固定するエマの口調は、ほとんど母親のようだ。

「慣れないよ、泣きたいほど痛かったのに」

ベッドから身を起こしながら額を腕で拭う未来の瞳には、本当にうつすらと涙が浮かんでいる。小さな怪我は日常茶飯事の未来が泣くほど痛いと言うのだから、やはり大人でも耐えかねるくらいの激痛なのだ。処置を終えた右膝には包帯が巻かれており、怪我をしたわけでもないのに痛々しい。

「でも、泣かなかったじゃない。その分、ミキは我慢強いわよ。後でチョコレートでもあげるから」

「もう！娘さんと一緒にしないでよ」

右膝をさすっていた未来はエマからの完全な子ども扱いに、儼然として言い返す。

「はいはい。もう今日のメンテナンスは今ので終わりだから、今日は自分のオフィスで大人しくしてなさいね。それから、私の娘はジリアンって言うのよ」

対するエマは微笑みを絶やさない。彼女は手早く注射用の器具を片付けながら、今度は杉田にも声をかけた。

「ドクターも知ってるだろうけど、まだ右膝は暫く痛むはずだから。

ミキに手を貸してあげてね。メンテナンスの片付けは、私がやっておくわ」

「え……あ、すみません」

普段よりも未来に気を使った様子を見せているエマに杉田が戸惑い、二人の顔を見比べた後に慌てて頭を下げる。杉田の肩を借りた普段着姿の未来がメンテナンスルームを出たのは、それから優に15分後のことだった。

「大丈夫か？」

「うん、まあね」

エレベーターに向かう途中も気遣ってくれる杉田へ、右脚を引きずっている未来は笑って見せた。

体重70キロ以上の自分を支えてもらうのは申し訳ないが、それでも心配してくれるのは嬉しい。未来は、つい必要以上に寄り添いたくなる気持ちを抑えるのが大変だった。

しかし杉田は、不意に片方の手を離れた。

「もしもし……ソフィーか？ごめん、後ですぐかけ直すから」

彼は白衣のポケットから携帯電話を取り上げて耳に当て、何気なく知り合ったばかりの女性の名を口にした。未来の顔が途端に曇るが、さしもの杉田もすぐに電話を切り、再び未来をしつかりと両手で支え直した。

「ソフィーから電話だったの？」

「ああ。何だか、慌ててるような感じだったけど」

「へえ、そう」

先まではこころよかった杉田の手に感じていた温もりも、一瞬で白々しくなってしまった気がする。未来の見事なまでに棘を含んだ一言が、気まづい雰囲気を生んでいた。

結局エレベーターに乗り込んだ後は、二人とも未来のオフィスの入り着くまで会話を凍りつかせてしまった。未来をオフィスのデスクにある椅子に座らせて、杉田が一息つく。

「電話、するの？」

「ソフィーにか？するけど……どうかした？」

いつの間に、携帯番号なんか交換してたの？

すかさず彼にソフィーの電話のことを聞いた未来だったが、一番聞きたいと思ったことはぐっと喉の奥に押し込めた。この程度のことを見咎めるなど、自分が嫌う「鬱陶しい女」そのものの行動のように思えたのだ。

それにソフィーとも仲良くするようにすると、つい先日宣言したばかりである。

「いや……何でもないよ。かけ直すなら、今もうかけ直しちゃえば無理に笑顔を作ってそう提案したものの、未来は内容の不自然さに後悔した。これも、杉田がどんなことを話すのか監視するようなものではないか。」

「うん。そうするか」

しかし、白衣の乱れを直していた杉田は彼女の微妙な心の動きまで読めていないらしく、普段と全く変わらない口調で明るく返してきた。今ばかりは、彼の鈍感さに感謝するのみの未来であった。

反面、デスクから少し離れた場所に立ち、何の躊躇もなく携帯をリダイヤルして見せている杉田のことが恨めしい。

ところが、携帯を耳に当ててすぐ話し出した彼の行動は予想外のものだった。

「もしもし？さっきはごめん。どうかした？……え？……ヨーコに？ああ、わかったよ。今代わるから」

ヨーコとは、未来が使っている偽名だ。杉田の口からその名が出たのは、未来の顔を驚きから上げさせるのに十分だった。

更に杉田は未来のデスクに歩み寄ってくると、マイク部分を指で覆った携帯電話を差し出してきた。

「ソフィーが、君と話がしたいそうだよ」

「私？」

未来は一瞬面食らったが、電話に出ないわけにもいかないだらう。彼女は杉田の携帯電話を受け取ると、遠慮がちに名乗った。

「もしもし。ヨーコですが」

『ヨーコ?ごめんなさい、突然。本当は貴女に直接連絡したかったんだけど……私、マサトの連絡先しか知らなかったから。今、少し話してもいいかしら?』

ソフィーが狼狽して声が震えているのが、電話越しでもわかるほどだった。未来がフレデリックスバーグ駐在事務所勤務していたときも、幾度となく聞いたことがある音声と同じ印象だ。事務所に通報や何か厄介事を持ち込んでくる時の市民のように、怯えているのだ。

「いいけど」

先まで尖っていた未来の声のトーンが、若干落ちる。

『実は、貴女に相談したいことがあって。どうしよう……怖い』

「どうしたの?何かあった?」

『ううん、今はもう大丈夫。でも、とにかく怖くて。家の中って、一番安心できる場所だって思ってたのに。もしかしたら、そうじゃなくなるのかも知れないわ。どうしたらいいかわからないの』

震えながら電話を握っているのが目に浮かぶような、ソフィーの口ぶりであった。未来は職業上の癖で、会話の相手が冷静でない時ほど度胸がすわってくるのが常だ。とにかくソフィーを落ち着かせようと、子どもに優しく語りかける話し方を意識する。

「落ち着いて。何があったのか、詳しく話してもらえる?」

ゆっくりとした同性の声に、ソフィーは多少安心したのだろう。

次に伝えてきた内容には具体性があった。

『今日大学から帰ってきたら、郵便受けに変な手紙が入ってて。消印がないの。直接誰かが入れたみたいなのよ。でも、表書きには私の名前が書いてあるの、男の人が書いたような字で。それより前は私が外に置いておいたごみが誰かに漁られてたりして、他にも電話とか……ああ、もう思い出すのも嫌だわ』

ソフィーの話の最初は必死で自分を律しようとしている努力が表れていたが、最後はまた取り乱した様子になっていた。この手の相

談は、未来が今までに扱ったことがある事件でも度々ある。彼女はボールペンを手に取ってくるりと椅子を回し、デスクに向かった。メモを一枚破り取りながら確認する声が、更に低くなる。

「誰かにつきまとわれてるってこと？」

「ええ、そうだと思うの。私、どうしたらいいの？ここを出て、家族がいる家に帰った方がいいのかしら？」

未来は怯え切っているらしいソフィーに、具体的なアドバイスするかどうか迷った。最初からあまり的確なことを教えると相手を過度に刺激してしまい、却って彼女を危険に陥れる可能性が高まってしまうのだ。やはりここは一度、地元警察に対応を回した方がいいだろう。

電話の内容の要点となる単語だけをメモに走り書きして、未来はもう一度ソフィーを落ち着かせようとした。

「まず落ち着いて。早く警察に連絡して一度来てもらったほうが……」

「駄目よ！ああいう奴らって、私が男の人と話そうとしただけでも怒り狂うのよ。それが警察だろうと、誰であろうと」

ソフィーの哀れな訴えに、未来のメモを取っていた手が止まった。あの大人しそうな女性は以前にも、ストーカー被害を受けたことがあるのかも知れない。だからここまで辣み上がっているのだ。

泣き出しそうになっているのを必死に堪えたのだろう。ソフィーは大きく息をつくと、くぐもった声で続けた。

「だから私、ヨークに相談したくって。ごめんなさい。大学では、女の子の友達がほとんどいないの。ゼミのクラスは男の子ばかりだから」

ソフィーの言うことはある程度正しかった。

歪んだ愛情を異性に向けるストーカーは、少しでもその対象が自分以外の異性と親しい素振りを見せようものなら、逆上して暴力的な手段に走る者が少なくないのだ。

そして、あることが未来の頭に引っかかった。

「ちょっと待って、この電話はどこからかけてるの？」

『うちの電話からよ。携帯電話じゃないわ』

固定電話からだ、盗聴されている危険も考えられる。

一般常識でいくと大げさに考え過ぎかも知れなかったが、FBIの事件資料では対策が遅れたストーカー被害者が、最終的に殺人事件の被害者になったケースが幾つもあった。

本当であれば今この時点から対応を警察に任せたいところではあるが、ソフィーが拒否するのだから仕方ないだろう。直接会って詳しい話を聞いてから、警察に相談することを説得した方がいいようだった。

「詳しいことは、明日別の場所で直接話したほうがいいかも知れないよ」

『わかったわ。それじゃあ明日また7デイズで、4時頃にどうかしら？』

未来の提案に、ソフィーが頷いた気配がした。待ち合わせの時間と場所を素早く書き留めて、アドバイスと共に返事を返す。

「うん、わかった。今日は窓とドアの鍵をしつかり閉めて、家族の誰かに来てもらうほうがいいよ。一人でいちゃ危ないから」

『ええ、そうするわ。また明日ね。きつと来てね、お願いだから』
明日は出勤の予定だったが、捜査の合間に時間を割くことはできない。

未来は明日のスケジュールを考えながら終話ボタンを押すと、傍らに立つ杉田へ携帯電話を返した。

「ソフィーに何かあったのか？警察とか何とかって言ってみたいだけ」

「ちょっと聞いたところでは、ストーカーみたい。詳しく聞いてみないとわからないけどね。電話は盗聴されてる可能性もあるから、明日また7デイズで会うことにしたよ」

「ストーカー？本当に大丈夫なのか、彼女」

流石に驚いたようで、杉田の白衣のポケットに携帯電話をしまう

手が思わず止まっていた。

「だから、詳しく聞かなきゃわからないんだよ。警察に連絡するのは嫌だつて言うから、とりあえずは家族を呼んだほうがいいって言っておいたけど……」

未来が言葉を濁すと、杉田が聞き咎めた。

「警察が嫌だつて？」

「そう。そういう連中は、相手がどんな男でも、会ってるのがわかっただら逆ギレするからつて。前に被害に遭ったことがあるんじゃないかって気がするけど」

「警察に女性の警官をよこしてもらうとか、できないのか？」

「さあ。場所によっては応じてくれるところもあるだろうけど、とにかく本人がそう言ってるんだから。仕方ないんじゃない」

メモをデスク横の壁に吊ったコルクボードに貼り付けた未来の説明に、杉田は一応納得したような表情を浮かべてはいたが、自分の顎を細い指で撫でてから再び彼女の方を見た。

「明日ソフィーに会うのかい？」

「うん、フデイズだね。今日は私も膝がこんなだから、運動は無理だし」

未来が右膝に手を当てる。ほつそりとした足には、ついさっきまでデニムを穿くにも苦労するほどの痛みが残っていたのだ。

「何だつたら、今日僕が連れて行ってあげても良かったけど」

「男が来ると、話がややこしくなるんだつてば！」

椅子から立ち上がれもしない未来は、思わず杉田を見上げて声を荒げた。

彼はソフィーを純粹に心配しているのだろう。

が、未来が膝の処置のせいでまともに歩くことすらできないのもまた、知っているはずだ。以前であれば未来のことを最優先に考え、来ていたのに、怪我をしているのと同じ状態になっていることを、気にもかけてくれなくなってしまうたのだろうか。

「わかったよ。そんな風に怒鳴らなくなつていいだろ」

謝りつつも、杉田の顔は不服そうだ。人の心配をしているだけに何が悪いのか、と言いたげである。

「大体私、今日は大人しくしてろってエマにも言われたから明日にしようって思ったんだよ。もし何かあっても、対処できないかも知れないし」

自分に対してまるで気を使おうとしない杉田に、未来の口調がますます攻撃的になる。弁解するように態度を和らげて、彼は同居人を宥めようとした。

「でも、警察より未来が行った方があてになるだろ？君は足が一本動かなくても、ハンドレにはならないような身体なんだし」

「私にソフィーの盾なれってわけ！」

その言い種に、未来は今度こそ怒りに任せて怒鳴り、椅子から立ち上がりかけた。

自分は身体を動かすこと自体が辛いのに、それでもソフィーを優先させると言うのか。

加えて、サイボーグであることを引き合いに出されて一般の女性と比較されるなど、未来にとっては杉田に一番やって欲しくないことだった。第一、未来が望みもせずサイボーグにされたことをいつも悔いていたのは、杉田だったではないか。

いくら彼が人の心の動きに鈍感だからと言っても、やって許されることとそうでないことがある。

「いつて……！」

未来の顔が歪み、上げかけた腰がどすんと椅子に落ちた。思わず右足に体重をかけてしまい、負担のかかった膝に鈍い波のような苦痛が走ったのだ。

流石に未来の逆鱗に触れてしまったことに気づいたのか、杉田は慌てて未来の肩に片手を置き、努めて優しい口調で怒りを静めさせようとしてくる。

「そうじゃないよ。僕はそんなつもりで言ったんじゃないよ、彼女が君を僕よりも頼りにしてるみたいだから……」

しかし、未来は勢いよく彼の手を払いのけると、椅子ごと背を向けた。

「もついい、知らない。それに、相談されたのは私なんだから。杉田先生には関係ないことでしょ」

貴方には関係ない、という台詞は女が聞く耳を持たないときに放つ絶対拒否のサインだ。

杉田もそこまで言われるようなことではないと思っただけだが、すぐに返す言葉を見つけれず口をつぐむ形となる。

「ミキ、いるかしら？」

その時、エマの声と共にドアがノックされる音がオフィスに響いた。数秒おいてからドアがそと開かれ、眼鏡をかけた白衣姿の女性が顔を覗かせる。

「あらドクター、まだ一緒にいたのね」

彼女の言い方は呑気だったが、すぐに二人の間に漂っている、重苦しい空気を見て取ったようだった。杉田と未来の顔を交互に見比べ、お互いが目を合わせないようにしていることにも気づいたらしい。

「ええ。それじゃ」

杉田が先に動いてエマの横をすり抜け、未来の方を振り返らずにオフィスから出て行った。対する未来も、彼の白衣に包まれた背中を目で追うことはせず、デスク横のコルクボードを所在なげに見つめている。

「どうかしたの、貴方たち？」

後ろ手でオフィスのドアを静かに閉め、エマは怪訝そうな顔を未来に向けた。

「何でもないよ」

「そう？ならいいけど」

未来はそっぽを向いたままでいたが、エマはそれ以上突っ込んでこようとはしなかった。彼女は多少お節介焼きなところがあるように思えたが、流石に大人の女性らしく、他人の仲にまで余計な口を

挟んでこないところは有難い。

「あ、そうそう。ミキにチョコレートを渡そうと思って、持ってきたのよ」

そして細い腕に抱えていたクリップボードから何か引つ張り出し、医療サンダル履きの足が未来のデスクに歩いてきたときには、もう普段の調子に戻っていたようだった。

エマが言う「チョコレート」とは、二枚のチケットだった。

「これは？」

差し出されたチケットを受け取った未来がしげしげと眺め回す。

上質の紙にセピア色のイタリック体で印刷されているクリーム色の小さな紙は、ジャズライブのものだった。場所はリッチモンドの7デイズ・フィットネスクラブのすぐ側にある小劇場で、開催日は11月30日となっている。演目は、クリスマスソングが主のようだ。

「知り合いに、楽器をやってる人がいてね。ライブのあまったチケットをよってくれるの。今度二人一緒に非番の日に、行ってらっしゃいな」

「でも……」

「大丈夫よ、他のみんなのシフトをうまく調整しとくわ」

乗り気ではなさそうな未来に、エマは軽くウインクをして見せた。そして未来が座る椅子の横まで来て、小さな肩に少し荒れた手を置く。

「たまには、二人だけで心の洗濯をしておかなきゃ。お互いに余裕がなくなると、色々なことがうまくいかなくなってくるものなのよ」

エマは、本気で未来と杉田のことを心配してくれているのだ。

確かに杉田との微妙な険悪さはよくある男女のちよつとしたすれ違いだが、何しろ二人は他に頼る者も身近にいない日本からの移住者だ。このまま放っておくと、どんどん良くない方向へ行くのが目に見えているのかも知れない。

「で、そういうときは二人共通の趣味か、逆に全然関係ないことで

息抜きした方がいいのよ。私も経験があるけど、どっちかの趣味で何かやるうとすると、もう片方にとっては全然息抜きじゃなくなっちゃうから」

彼女の未来を見る青い瞳が、やはり娘を見る母のそれであることは、この際気にしないことにしよう。このライブチケットは、ちょっと早いクリスマスプレゼントだと思えばいい。

「……うん。ありがとう。楽しんでくるから」

エマを見上げた未来は、ようやく安心して微笑みを浮かべることができるようになっていた。

7デイズ・フィットネスにはジムやプールだけでなく、カフェテリアも併設されている。そこで出されるのは白身だけのオムレツ、油を使わないチキンソテー、豆腐のサラダなど高タンパク質で低脂肪、低糖質なのが売りのメニューだ。ドリンク類を見てもコーヒーやお茶はカフェインレス、使用するミルクも無脂肪か低脂肪、もしくは豆乳という徹底ぶりだ。

未来はNOTSの訓練後に捜査に出かけたが何とか空き時間を作り、ここで飲み物を取りながらソフィーと話をすることにしていた。正直、事件以外の厄介ごとに巻き込まれるのはごめんこうむりたかったが、未来が相談相手になることを渋れば、杉田に火の粉が降りかかりかねない。捜査官でもなく犯罪行為への対応方法も知らない彼を、そんな面倒の渦に流し込むわけにもいかなかった。

ただ、相談相手になるにしても、こちらの身分がばれないように細心の注意を払う必要がある。ソフィーは早くも未来を信頼できる相手と見ているようだったが、未来はそうではないのだ。だからソフィーとフィットネスクラブのロビーで待ち合わせたときも、何となく肩に力が入っているふりをした。

カフェテリアのシルバーに黒でアクセントがつけられたカウンタ―で、未来はダイエツトジンジャーエールを、ソフィーは砂糖を使わないキウイジュースを注文した。白いテーブルと黒いスツールが並んでいるカフェテリアには暖かい照明が灯り、暗くなり始めたりツチモンド市街のビル裏に淡い光を投げかけている。

二人はトレーニングを終えた健康そうな男女がくつろいでいるテーブルの脇を幾つもすり抜け、一番隅に位置する二人がけのテーブルのスツールに座った。

「来てくれて本当にありがとう、ヨーコ」

「いいよ。私も気分転換になるから」

ソフィーの笑顔は、どことなくぎこちない。緑色をした瞳の視線はそわそわとカフェの中を彷徨い、指先ではキウイジュースに突き立てられた赤いストローを弄んでいる。

「早速なんだけど、ストーカーにつきまとわれてるの？」

「ストーカーって言うていいのかわからないけど、もう怖くて」

やや声のトーンを落とした未来につられ、ソフィーの声が小さくなった。犯罪に関係がありそうなことを話すときに抑えた調子になるのは、未来の職業からくる癖である。

彼女はややもすれば事務的になりがちな態度に気持ちを乗せるようにしながら、慎重に探りを入れた。

「どれぐらい前から、何をされてるの？」

「昨日も電話で話したと思うんだけど……最初は、二週間くらい前だったかしら。私の携帯電話に非通知の無言電話がかかってきたの」「どんな？」

やや震えているように見える手をストローに沿え、ジュースをすすするソフィーの方へ、未来が僅かに身を乗り出す。

「夜中近くだったと思うわ。私が出ると、すぐに切れちゃったんだけど。次の日も同じよ。寝る前の時間にかかってきて、出ると同時に切れるの。てっきり間違い電話かと思ってただけ……電話を取らないと、ずっと呼び出し音が鳴りつ放しなのよ。それが1週間くらいずっと続いて。おかしいでしょう？」

口の中が緊張で乾いたのか、ソフィーはそこでもう一度、爽やかな香りのする生ジュースを口に含んだ。

「それで私が学校から帰ってきて、郵便物を見たら……アパートの私のポストが、ごみでいっぱいになってたの」「ごみ？」

頭の中にあるメモに細かいことも書き留めようとする未来は、つい返事も鸚鵡返しになる。

「ええ。台所でするような生ごみだったと思うわ。気持ち悪かったから、すぐ捨てただけけど。その代わり、郵便物がなくなってたみ

たいなの。電気とか水道の請求書、そろそろ来る頃だと思つてたのに」

思い返すのにも恐怖が伴っているのだろう。やはりソフィーは視線があちこちを泳いでいて定まっていな。まるで、自分を攻撃している者が側にいないか警戒しているようだ。

無言電話とごみの投入を行ったのが同一人物とは限らないが、これはもう嫌がらせの域を越えるところまで来ていると思わざるを得ない。立派なストーカー行為である。

現在のアメリカでのストーキングは「特定の人物に向けられた、理性的な人間に恐怖を感じさせるに十分な一連の行動」と定義されている。こういったケースでは客観的な情報が何よりも重要なため、もう少し詳しく話を聞いておく必要があつた。

未来は更に、昨日の記憶から手がかりとなる言葉を紡ぎ出した。

「他には？ごみを漁られたつて言つてなかつたっけ」

「ああ、そうだわ。ヴァージニアではごみ収集つて週に一度しかないけど、収集日までは私、自分のごみを袋に入れて、ポーチのごみ箱に置いてるの。でもそれを収集日にごみ捨て場まで持つていこうと思つたら、袋が開けられて誰かが引つ掻き回したみたいになつて」

「袋は破れてたの？」

「いいえ。結び目がほどいてあつたわ」

ということとは、ソフィーの家庭ごみを荒らしたのは、野犬や野良猫の類ではない。誰かが汚物の中から彼女の個人情報という宝物を探し出すために、袋を開けて一心不乱にその中を漁つていったのだ。

「そういうことが今まで続いてて。気持ち悪いし、怖い。でも…
…警察には相談し辛くて」

ソフィーは相変わらずおどおどとした喋り方だが、そこまで怯えているのに警察を頼れないのはおかしい。

未来は疑問を直球でぶつけた。

「警察に言えば、巡回だつてしてくれると思うけど？」

「それが……その、こういうことをしてくる人に、心当たりがあるのよ」

「ほんと？」

ソフィーの意外に思えて実はそうではない返答を聞き、未来は素直に驚いたように目を丸くして見せた。

「先月、彼と別れたの。その時、彼が怒って暴れ出して。彼の家で話をしてただけど、あのままじゃ殺されるって思つて、必死で逃げてきたわ」

「殺されるって……」

「お前が言うことを聞かないなら殺してやるって、ナイフを出してきたのよ！」

ソフィーは強く未来の言葉を遮り、涙を必死に堪えているようだった。

ストーカーの被害経験者はアメリカの成人人口で約1パーセントという統計があり、そのうちの40パーセント程度が顔見知りによる犯行とされている。元配偶者や恋人というのはとりわけ一番多い例なのだ。

「警察つて、これぐらいじゃ動いてくれないんでしょう？前に別の人からも暴力を振るわれて、警察に行ったことがあるの。でも、相手にしてくれなかったわ。全く知らない他人から暴力を振るわれたんなら立件もしやすいけど、恋人同士の場合は難しいって」

「ひどい話だね。その警察の担当者、どれだけ仕事してないんだか」
ハンカチを出して目頭を押さえたソフィーに、思わず未来の本音がこぼれた。

現在殆どの州でも制定されているストーキング防止法は、裁判所の命令で一定距離以内に被害者に近寄らないことを明文化し、州知事宛に申請した個人での警察力執行を許可するものだ。が、これだけではストーカーの抑止力にならないというのが、正直なところだ。加えて裁判所命令はすぐに下りるものでもないし、手間もかかる。

一般の警察でも通報すれば近所を巡回し、被害者に具体的な対応方法を指示する程度のこととはしてくれるが、門前払いというのは腹の立つやり方だ。

「社会学部って、男の子の多い学部なのよ。ゼミも男子しかないし、女の子で相談できる相手がいなくて。だからどうしよう、って思ってるの」

だから自分を頼ってきたのだ、と未来は頷いた。

ならば、放っておくわけにはいかないだろう。

「実家には相談したの？」

「ううん。心配かけたくないから、話してないわ。昨日は弟に来てもらったけど、話し相手が欲しいからって説明したの」

今やソフィーはすすり泣いており、話すのがやっつという状態だ。それでも、心のひだに挟まっている不安を吐き出したいのだろう。涙を拭い、声を震わせながらも再び口を開く。

「学校にいるときはいいのよ、みんなが一緒だから。でも、家に帰ると怖くて。いつ電話が鳴るのか気が気じゃないし、そのうち家にも押しかけられるんじゃないかって。夜もちゃんと寝られないし、最近は食欲もなくなっちゃって。運動できるほど元気じゃないから、ここにも通えないのよ」

「そいつ、合鍵は持ってるの？」

「渡してないわ……そこまでの仲になる前に、別れたから」

さめざめと泣き続けるソフィーがいるこちらのテーブルを、カフエテリアの他の客が不審そうに振り返り始めている。未来も、自由にいられる時間がもうあまりない。そろそろ具体的なアドバイスをして、切り上げたほうが良さそうだった。

「そっか、よく話してくれたね」

穏やかに未来が言うと、顔を上げたソフィーと目が合った。

緑色の瞳をしたの女性が、涙で頬に張り付いた赤い髪を払い安心したように頷く。

「やっぱり、一人でいるのは良くないよ。できれば誰かに来てもら

って、しばらく一緒に住んでもらうとかしたほうがいいと思う。で、その間に、つきまとわれてる証拠を全部残しておくんだよ」

まだ涙を拭っていたソフィーが、やや驚いた様子を見せた。

「証拠つて？」

「例えば、無言電話がかかってきた日付と時間の記録。もし相手が喋ったんなら、その録音もね。それからメールとか、ポストに入れられたごみとか、全部捨てずに取っておく。時間が経つと腐るものとかは、日付入りの写真で残すとかして。証拠の量が多ければ多いほど、警察も動きやすくなるから」

「彼が何をしてきたのか、誰の目にもわかるものを集める、って言うこと？」

「そう。まずはそこからだよ」

未来の最後の口調は、宥めるものから励ますそれに代わっていた。普通の神経の持ち主であれば尻込みしてしまうような出来事にも、毅然とした態度を崩さない未来の姿を見て、ソフィーはようやく口元をほころばせた。

「怖いけど、やってみるわ。でもヨーコ、随分詳しいのね」

「私も犯罪学に興味があるから。それに、日本の探偵事務所でするバイトしたこともあるし」

未来はしれつと答えつつも、突っ込みのかわし方もそろそろプロだな、と胸の内で呟いた。

日本で便利屋をやっていた頃、実際にストーカー対策の依頼は何件もあった。

勿論渡米してからは、FBIアカデミーの講義でその心理や対策も学んだ。だから自信はあるが、これ以上のお節介は避けたほうが賢明だろう。

未来はソフィーの右手を両手で包み込むように握ってやり、低く、しかし力強く言った。

「困ったことがあったら、いつでも言ってくれていいから」

「ありがとう。少し元気になれたわ」

先よりも明るさが増した声と笑顔でほのかに彩られたソフィーが手を離してから、未来が腕時計で時間を確認する。

「あ、ごめんなさい。私ったら、思ったよりも長く話しちゃったみたいで……ほんとにありがとう、ヨーコ」

未来が時間を気にしていると思っただろう、ソフィーが慌ててスツールを降り、コートを羽織り始める。どちらからともなくその片手間に、二人はお互いの携帯電話番号を交換した。

未来とソフィーは身支度を整え、飲み物のプラスチックカップをごみ箱に捨てると、連れ立ってカフェテリアを後にした。

ロビーで出入り口の自動ドアに向かった未来が、ソフィーを制して振り返る。

「念のためにフロントに言って、裏口から出たほうがいいと思うよ」「ええ、そうするわ」

足を止めたソフィーは、素直に未来の提案に従ってフロントへ踵を返した。

去り際に手を振り、ソフィーの典型的な若いアメリカ人女性を思わせる後姿を見送った未来から、小さな溜息が漏れる。

とりあえず、緊急のストーカー対策はこれでいいだろう。あとは渋るソフィーを、証拠が溜まり次第警察へ行くように何とか説得するだけだ。これ以上の深入りはどうにか避けたい。

しかしそんな未来のささやかな願いを邪魔をする、悪戯が過ぎる神様はいるものだ。

真新しいコートのポケットに入れた車のキーを握りしめ、駐車場を急ぎ歩きで横切る彼女の前に、全く見知らぬ白人男性が飛び出してきて立ち塞がったのだ。

「おい、あんた！」

未来が念のために後ろを振り返るが、ずらりと車が並ぶ駐車場には誰もいない。未来が黒いスニーカーの足をずらして、男から5歩ほど下がった位置にさり気なく後退する。密かな臨戦態勢を整えたのち、彼女は静かに返した。

「私ですか？」

「そう、そのチビのあんただ」

男は未来の頭のとっぺんを見下ろす位置から、威圧的に言い放った。

その間に未来は素早く瞳のセンサーを切り替えて、金属探知をかけた。男の身体の要所から淡い紫色の光が浮かび上がるが、銃やナイフの形をした光は見えない。

スキャン終了後に今度は彼の全身へ視線を巡らせて、特徴を頭に入れる。

波打って油っぽい、暗い茶色の頭髪は生え際が後退しているが、皺が目立たない顔は30歳前後であろうことが窺える。ただし、濃い無精髭を生やしてはいても、顔の印象は決して悪くない。むしろ野生的で躍動感に溢れた美形男性と言ってもいいくらいだ。

擦り切れた薄手のジャケットにくたびれたデニムという、身だしなみに気を使わない格好だが、大きな体軀は厚みがありかなりの筋肉質であることがわかる。恐らく、肉体労働の従事者だろう。

生沢がツキノワグマなら、こちらはグリズリーとでも形容するべきだろうか。

この男性の乱暴なもの言いから迫り来る嫌な予感に胸を刺され、未来は僅かに片方だけ眉を動かした。

だが、こんな男から乱暴な調子で言葉を浴びせられても、未来の態度そのものは見た目に微塵も変わらない。却って冷静に、彼女は男の視線を受け止めた。

「私に何か？」

片手でちよっと押しのければ飛んでいきそうに見える貧相なアジア人の女が、全く臆していないことに驚いたらしい。男は一瞬言葉に詰まったが、すぐさま自分のことを右手の親指で指した。

「あいつは俺のことをお前に何て言ったんだ？」

「……あいつって？」

「あの女だよ。ソフィーのことに決まってるんだろ！ さっき、あんた

が話してるのをずっと見てたんだ」

やはりと言うべきか、未来の予想は的中したことになる。

この男こそが、ソフィーに付きまとい行為を繰り返している問題の男だったのだ。ソフィーと会っている時、こんな男がカフェテリアにいた覚えはない。おおかた、ロビーの隅から監視して、駐車場に先回りしてきたのだろう。

「へえ。あんたが、ソフィーにつきまってるって言うストーカー？」

相手の反応から人物像を探るため、未来はわざと男を小馬鹿にするような嘲笑で挑発した。

「ストーカーじゃねえ！知ってるだろうが、俺はラルフ・バーンズだ」

当然自分のことは知っているだろう、と得意気な様子でラルフな男は告げる。

その名前は初めて聞いたが、有名人気取りで個人情報を考えなしに垂れ流してくれるのはありがたい。

夕闇が迫る駐車場で大げさな声に大げさな身振りを交え、ラルフの話は続くようだった。

「あの女、俺をコケにしやがって。このまま終わると思ったたら大間違いなんだよ」

と、足元に転がっていた小石を勢いよく蹴り飛ばしてから地面に唾を吐く。

それが強い男のしぐさだと思っっているのだろうが、未来の反応は冷淡なままだ。

「ふーん。それで？」

「あいつは俺のことなんかこれっぽっちもわかってないんだ。どれだけ世の中を舐めてるのか、わからせてやるんだよ」

世の中を舐めている、とはいきなり大きく出たものだ。

確かに、ソフィーはまだ大学生である。だから多少世間知らずなのも仕方がないが、それを許せるのが大人の嗜みというものではな

いのだろうか。それに、振られたからと言って相手の女性に付きまとうことは、どう考えても相手からの理解を得る、という目的に結びつかない。

未来は突っ込みたくなる気持ちを抑え、本来の目的に話を戻そうと試みた。

「ソフィーがあんたのことを何て言ってたかって、私に聞きたいんじゃないかったの？」

「あんたはあいつに騙されてるんだよ」
「はあ？」

また、いきなりな飛躍である。

しかし、ラルフたる男の人となりを知るためには続きを喋らせるのがいいと判断し、未来は呆れるふりをして口をつぐんだ。

「あいつはヤクの売人だし、とんでもない売女だ。ソフィーの相談なんか聞いてたら、そのうちあんたまでおかしくなる」

これもまた、妙な話の飛び方だ。

ラルフがソフィーとどれくらい親密だったのかは知らないが、少なくともソフィーには妄想や顔色の悪さといった症状や、注射痕のように薬物依存症でしばしば見られる特徴がどこにも見られないことは確かである。

ソフィーが売春をやっていたかどうかはまた別の問題だが、薬物依存という発想に関しては、一体どこに根拠があるのか、聞いてみたいものだ。

「私には、あんたのほうがよくばどおかしく見えるけど？」

ソフィーの友人としてはもっともな反応を見せ、うんざりしたような色を浮かべた未来に、なおもラルフは食ってかかる。

「それはあんたがソフィーに毒されたせいだ。ソフィーのことなら、俺は何だって知ってる。だから職場連中はみんな俺の味方なんだぞ」
一歩詰め寄ってきたラルフの語気の荒さに警戒心を掻き立てられ、未来は一歩下がった。

「……いえ、私はあんたの職場のことなんて興味ないんですけど」

彼女は一応そう言っではみたが、案の定ラルフは聞いていない。

「ソフィーは売春して、それで酒やヤクもやってる。バカな大学でも極めつけのバカで、アルコールとヤクの中毒者なんだよ。だから運動もできないし、家の中はゴミだらけで酷いもんだ。職場の連中はみんな知ってるんだよ。俺がどれだけあいつに尽くしたかってことも」

と、ラルフの唇は見事なまでに踊り、次から次へと嘗て愛した女性に対する蔑みを撒き散らし続けている。よくもまあ、これだけ一人の人間を悪く言えるものだと妙な感心さえ覚えてしまうところだ。「俺は何度もソフィーを立ち直らせようとしたし、家だって掃除してやったんだ。それなのに、あいつは俺を裏切った」

彼の言う裏切りとは、ソフィーが自分を捨てたということだ。

しかし、初対面の人間に対して自分を持ち上げ、他人を徹底的にこき下ろす者が信用できないことなど、世の常識である。未来が人を疑うプロであるということ差し引いても、普通はこれだけ元恋人のことを悪く言えば、間違いなく異常だと感じるだろう。

もうこれ以上ラルフの話聞くのは収穫がないと判断し、未来は低い温度の言葉で言った。

「私、仕事の途中なんですけど。どいてくれませんか？」

大声で言ったのではないが、犯罪現場で幾人もの強盗犯や殺人犯を相手にしてきた者ならではの迫力を孕んだ口調だ。これには、さしものラルフも口の動きを一瞬止める。

それにラルフのような虚言を呈するタイプの人間が、常に冷静さを失わず動じない者を一番苦手としていることを、未来はよく知っていた。

「ソフィーはあんたのことを怖がってるよ。それだけは伝えておくけど」

せめて一言でもソフィーの意思を伝えたくて、未来はラルフの顔から目を逸らさずに言い放った。が、やはり次の瞬間にラルフの思考回路の違いを思い知らされた。

「俺が怖いって？あいつ、やっと俺のすごさを認めたんだな。やっぱりソフィーは俺がいないとダメなんだ」

「いや、迷惑がってるから」

どうしてそうなる、とまたも喉まで出掛かった突っ込みの言葉を、未来は苦勞して他のものに置き換えて吐き出した。

「何だ、あんたは俺のほうが悪いと言いたいのか？」

怪訝そうなラルフにようやく言葉ではなく話が通じたのかと、未来が頷いて見せる。

「そりゃ百歩譲って考えても……」

「俺はFBI捜査官ともコネがある。その気になれば何だって調査できるぞ。俺が正しいってことだって、調べりやすくにわかるんだ」

FBI捜査官という単語を耳にした未来は、呆れた気持ちが悪く不快さに上書きされ、危うく本気で眉を吊り上げてしまるところだった。

一体どこの組織に、こんな得体が知れず信用も置けない男に身元を明かすエージェントがいるというのだろうか？勘違いも甚だしい。各種メディアを彩る様々な番組のお陰なのか、FBIも随分と軽く見られたものである。

ラルフを一発殴りたい衝動を理性で抑え込み、未来は彼の話を断たせよう早足で歩き出した。そして、脇をすり抜けるべく大きな身体を左腕で押しやる。

「ほんとに時間がないんで、いい加減通してくださいって」

「おい！まだ話は終わっちゃいねえんだよ」

その細い腕を、ラルフが掴み上げた。

反射的に未来が手首を捻って、ラルフのごつい腕を関節とは逆方向に回転させる。

彼が唸り声を上げて手を離れたところで、未来は走り出した。

「危ない、危ない」

広い駐車場を一気に走り抜けて自分の車を見つけ、運転席に滑り込んだ未来は、ドアをロックしてから呟いた。

ラルフは未来の足についてこられなかったのだろう。後を追って

きている気配はない。

よっぽど身分を明かして公務執行妨害の現行犯で逮捕しようかとも思ったが、捜査と無関係の場所で警察を介入させずに逮捕するのは、非常事態でもない限り控えるべきだという自制心が発した声に従ったのだ。

それに話を聞いてみてわかったが、ラルフがソフィーについて言っていることにはかなりの割合で嘘が含まれているのが確実なようだ。ストーリーに最も多いとされる人格障害の一種、自己愛性人格障害者なのかも知れない。

ソフィーが悪女であるとひたすら貶め、自分が悲劇の主人公であるかのように第三者である未来に言ってみたり、FBI捜査官とコネがあると豪語する辺り、かなり可能性は高いと見てもいいだろう。そうなるとうますます厄介だし、余計に放ってはおけなかった。ストーリーカーは性犯罪や殺人事件にまで発展することが珍しくないことを、未来はよく知っている。

それにあんな凶体の大きな男が、全てを都合のいい解釈で固めた訳のわからない理論を振り翳し、拳げ句に刃物まで持ち出して殺すと脅迫したのだ。被害者であるソフィーは、どれだけ怖かったことだろう。もし自分が無力な一市民だったなら、彼女と同じように夜も眠れないほど怯えるに違いない。

暴力で弱い者を脅すのは、未来が最も憎む行為の一つでもあった。このままあの男の暴拳を、許しておくわけにはいかないのだ。

彼女は運転席で舌打ちを漏らしそうになる自分を律し、ドアが口ツクされていることを確認してからプライベート用の携帯を取り出した。交換したばかりのソフィーの番号を呼び出して、発信ボタンを押す。

30秒ほど呼び出し音が鳴った後に通話がつながった。

「ああ、ソフィー？」

「ええ。ヨーコね。どうかしたの？」

つながるまでに時間がかかったのは、ソフィーも帰宅途中で車を

路肩にでも止めていたせいだろう。間髪入れず、未来は質問した。

「元彼の名前、ラルフ・バーンスって言うの？」

「え……そうだけど、どうしてヨーコが知ってるの？まさか……」

未来が言わんとしていることを察したソフィーがそこで絶句しかけたが、未来はそれよりも早く言いたいことを割り込ませる。

「ああ、気にしないで。私ならうまく逃げられて、大丈夫だから」

無事を伝える一方で、ラルフの傲慢な態度を思い出した未来の顔が不快そうに歪んだ。が、彼女が発する警告は低く、はっきりとしたものになっていた。

「やっぱ、警察にすぐ連絡しなね。あんな話を通じない野獣みたいなもの、野放しにしてちゃ駄目だよ」

未来の心なしか荒れた話しぶりには、ソフィーが顔色を失くすしているのが目に見えるような、沈黙が返ってくるばかりだった。

未来が捜査からフレデリックスバーグの自宅に戻ってきたのは、午後11時を回った頃だった。7デイズ・フィットネスの駐車場でソフィーのストーカー、ラルフに引っかけられて足止めされたのが原因でインターステート95の事故渋滞に巻き込まれ、捜査の進捗がずれ込んでしまったのだ。あと数分早く出ていれば巻き込まれなかったことがわかると、余計に腹立たしくなってくる。

捜査予定の現場で待ち合わせをしていたジャクソンは怒らずに待っていてくれたが、それでも私的な理由で遅れたことは申し訳なかった。

「お帰り、未来」

それでも、寒さが厳しくなってきた屋外から暖房が効いた自宅に入ると、幾らかはほっとする。今日は先に帰っていた杉田がキッチンから出てきて、いつものように笑顔で迎えてくれた。昨日、未来のオフィスで気まずい別れ方をして以降は顔を合わせていなかっただけに、安心感もひとしおだ。

「ただいま」

杉田が買ってくれたコートを玄関脇のコート掛けに引っ掛けながら、未来も笑顔を返していた。

「先生は食事、もう済ませてるんだよね？」

「ああ。悪いとは思ったけど……」

最近デニムの私服姿で街中や林の中を捜査をしている未来は、臭いが気にならない限り帰宅しても着替えないことが多い。ウールのガウンを上羽織ってからキッチンを覗くと、杉田が摂った夕食の皿が、きちんと食器棚に納まっていることがわかった。

「いいよ。先生だって、お腹が空くんだもん。冷凍しといた作り置きシチューでも食べるからさ」

「じゃあ、僕が準備するから。座ってなよ」

未来がスープの深皿を取ろうとしたところを優しく止めて、杉田が冷凍庫を開けた。

何気ないが、彼のこういう日常的な気遣いが一番、犯罪捜査でささくれ立った神経を癒してくれる。有難く彼の厚意に甘え、未来はダイニングテーブルの自分の席についた。

電子レンジで解凍してから鍋で暖めた冬野菜のホワイトシチューは、ほんのり甘みが出ていて柔らかい味だ。愛しき同居人が準備をしてくれたと思うと、未来の心も一層温かくなる気さえする。

「今日、ソフィーに話を聞いてきたんだろ。彼女、どんな様子だったんだ？」

「やっぱりストーカーだったよ。ソフィーの元彼が犯人。心ならずも、私も会うことになっちゃったけどね」

未来がシチューをすくったスプーンを一旦置いて、皮肉っぽい笑いをこぼす。

「会ったのか、そんな奴に？」

「うん。外見は悪くないけど、どこかおかしいって感じの奴だったよ。何もかも、自分が都合がいいように頭の中で翻訳してさ。私が何か反論しても、『それはあんたがソフィーに騙されてるからだ』とか『俺は全部知ってるんだ』とか言ってきた。しまいにや、FB Iにまでコネがあるなんて言い出すんだもん。正直、呆れたよ」

「そうか……やっぱり、そういう奴っているものなんだな。ぞつとするよ」

心なしか、杉田は身震いしたようだった。

未来ほどではないが、杉田も人格異常者についてある程度の知識はある。そしてそんな者たちが犯してきた罪の痕を、くまなく調べるのが仕事なのだ。被害者が暴行された時の苦痛も、自分が感じられるほどに知っているのである。

「まあね。便利屋の仕事でも、頭のおかしい奴……というか、考え方がおかしいって言うべきかな。そういうのにはよく当たることがあったから、私は慣れてるんだけど。何の予備知識もないと、あり

「やキツイと思うよ」

「何か、対策方法とかは教えてあげた？」

未来の向かいに座っている杉田が尋ねると、未来は熱いシチュウをクラッカーですくいながら頷いた。

「一通りは。送られてきたものとか電話の記録に、会話の録音。一人でいないこと。すぐに警察に連絡した方がいいとも、言っておいたよ。彼女、話しながら泣いてたんだけどね。その辺りはちゃんとやると思う」

逆に言うと、当事者であるソフィーがそれぐらい毅然として対処しなければ、根本的な解決には至らないだろう。最も効果的と言える法的手段に訴えるまでの間はひたすら証拠集めをし、安全を掴み取る最後まで決して気を抜かないことが肝心だ。

そしてそれは、周囲の者がいくら口うるさくアドバイスをしたとしても、本人の意思が弱い場合はどうしようもない。犯人が接してくるのが被害者だけであり、他の人間が知る由もないところで事実が積み上げられていくのだから、第三者が直接の手助けをするのが極めて難しい類の事件になるのだ。

「ソフィー、銃は持つてるのかな」

「うーん、持ってないんじゃないかな。確認したわけじゃないけど、なんとなくそんな気がする。それに持ってたとしても、練習なしにちゃんとは撃てないよ。例え、どんなに照準が安定した小型拳銃でもね。撃つときには、それ相応の覚悟だつて必要なんだし」

杉田が首を傾げると、未来がソフィーの様子を思い返してから答えた。

ソフィーがもし銃を持っており扱いに慣れているのなら、この状況では肌身離さず持ち歩いている射撃練習も欠かさないはずだ。

しかし彼女は銃を携帯している様子がなかったし、身を守るのに家に立てこもると同時に武器が必要だ、という発想自体がないように見受けられた。

銃を扱ったことがない者はまず、襲われそうなきは予め武装し

ておいて反撃する、というところまで思い至ることができないのである。

「今日は未来が泊まって、様子を見た方が良かったのかもな」

「やだよ、まだそんなに親しいわけでもないのに。ソフィーが本当に信用できる相手なのかどうか、まだわからないんだから」

最近の杉田は、どうもお節介になってきているような気がしてならない。

ぼつりとこぼれた彼の意見に賛成しかねる未来は、溜息交じりだった。

勿論ソフィーが親友なら、そこまで世話を焼いても罰は当たらないだろう。が、わざわざ危険を冒してよく知りもしない人物のために動く気にはなれなかった。便利屋時代のように相応の料金が支払われるなら話は別だが、杉田はこういった性悪説に基づく考え方を嫌っている節がある。

生沢から時々「お坊ちゃん」と揶揄されていたように、もともと杉田は上流の家庭に生まれ、何不自由なく成長してきた温室育ちだ。FBI犯罪科学研究所で、悲惨な事件の犠牲者に絡んだ証拠品を調べる仕事をしているのにもかかわらず、まだ人が抱える歪んだ闇というものに対する認識が甘い、と言わざるを得ない。

誰かを疑わずに済む環境にいて、相応の理由もなしに他人を信じられるところで一生を全うするのであれば、それが一番いいだろう。しかし、世の中の秩序を保つために犯罪と戦う身であるからには、そうはいかない。

その気になればどんなに恐ろしく、おぞましいこともできるのが人間だ。

犯罪者と向き合う未来は日々それを痛感し、ある種諦観したところもある。

人間の敵は人間なのであり、心の底から全てがどす黒い闇に覆われた、邪悪な者は確かに存在する。

そして彼らは何が邪悪なのかも理解せず、どんなことをしても自

らの心を正せない。

良心というものを、どこかに置き忘れてこの世に生まれ落ちたてきた存在なのである。

人を何人も殺し、周囲の人々をとことん痛めつけるだけの犯罪者は、間違いなく人間を喰らう『捕食者』なのだ。

未来は一步引いた位置からそうやって醒めた眼で事件を、犯人を見つめなければ、本当に人間そのものを信じられなくなる気さえした。

しかし杉田は、FBI特別捜査官という職務に適応した彼女の精神が、犯罪の影響を受けて毒されてしまったようにでも感じているのだろうか。

次に彼が未来の顔を正面から見つめてきた時、その黒い瞳はどこか寂しげな光を湛えているように見えた。

「でも、怖がつて人前で泣いたりしてたんだろ？そこまで怯えてたんなら、もうちょっとできることがあったんじゃないかって」

「私はできるのは、警察が動きやすいように適切にアドバイスするところまでだよ。彼女には、私が捜査官だって教えてないんだし。それに私がただの人間じゃないってことが、ソフィーにばれたらどうするの？」

もしそうだったら、ただごとでは済まないだろう。

人の口に戸は立てられないし、もしソフィーが信頼を置けない人物ならば、全米中に日本から来たサイボーグ捜査官のことが知れ渡ってしまうだろう。そうなれば当然二人は日本へ強制送還されるだろうし、帰国したところで一生監視つきの生活を強いられるのがおちだ。

もちろん、日本に警察の新機構を作るという目的も果たされないし、最悪国家プロジェクトの頓挫に繋がりがかねない。

が、杉田の見通しは至って楽観的なものだった。

「未来は今までの生活で、ばれたことがないじゃないか。大丈夫だよ」

彼の軽過ぎると思える言葉に、未来は本心からむっとした。

「あのねえ、先生。私、今日はNOTSの訓練を朝5時からやって、午後からずっと捜査に行つて、それでも時間作つてソフィーの話を聞いたんだよ。それで今晚、彼女のボディガードをやる余裕なんてあると思う？爆薬の臭いがまだ髪から取れてないし、膝から下は変な泥で汚れてるところだつてあるんだよ」

湧き上がる怒りが態度と話しぶりに出るのを、未来は抑えられない。

昼は訓練が終わると、演習場にある古いシャワー室でCQB（近接戦闘）訓練時に髪に絡んだ爆弾の粉末や、アンブッシュ（待ち伏せ）訓練で顎まで泥に浸かった身体を急いで洗った。その後は昼食を急いで食べながらオフィスでメールと捜査資料をチェックし、それが終わったら一息つく間もなく急いで車へ飛び乗った。そしてソフィーと話をした後は、今の時間までジャクソンと捜査で外を回っていたのである。

訓練があるときは午後の捜査を休みたいのが本音だが、そうも言うてはいられない。

この頃の杉田は未来の身体がタフなのを当て込んで、ソフィーを支えてやりたいと考えているようにしか思えないところもある。

そこに思い至った未来は、胸の奥の痛みを覚えるとともに目が熱くなり、涙がこみ上げてくるのがわかった。

彼女は慌てて表情をごまかすために鼻をすすり、皿に残っていたシチューを熱さも気にせず一気にかきこんだ。

「ああ……そうか、そうだったんだよな。ごめん」

杉田がはっとしたように謝ってくる。ただ、彼が突然行動が乱暴になった未来の本心に気づいたかどうかはわからない。

「最近の先生、そういうことをよく忘れるじゃない。私、心までメカでできてるわけじゃないんだよ。仕事以外の厄介ごとは、なるべく関わりたくないんだから」

自分で言ってみてはっとしたが、杉田はどうもソフィーのことを

やたらと心配しているような気がした。

が、女の勘に近いその感覚を、未来は慌てて頭から追い出した。自分は疲れているせいで、何もかもがマイナス方向に動いていると勘違いしているだけだ。ソフィーは、自分たち二人が仕事以外で初めてできた、共通の友人なのである。杉田がやけに積極的なのも、生沢から「人の心をもう少し深いところまで見る癖をつける」と叱責されたことがあるせいだろう。

それに、杉田が一度友達だと思った相手に親切なのは、今に始まったことではないのだ。

「それは、ちよつと冷たいよ。ソフィーは仕事以外のところで、初めて僕らにできた友達じゃないか。なるべくなら、できる限りのことをしてあげたいんだよ」

「だからって、ごたごたに進んで首を突っ込むことはないでしょ。今できる限りのことは、全部してきたつもりなんだし」

冷静に自分に言い聞かせて落ち着こうとした未来も、あくまでソフィーのことにこだわる同居人に対し、段々と苛立ちを覚えてきていた。

ソフィーはただの友人に過ぎないはずだ。

どうして、そこまで気になければならないのだろうか。

「そうかな。ソフィーは未来と同じで、誰かに頼ったりするのが苦手みたいだし。女の子同士、もう少し話してれば……」

「いい加減にしてよ。ソフィーと知り合って、まだ日が浅いんだよ。親友でもないのに、これ以上の深入りは嫌なんだってば」

未来は乱暴に、シチューを食べ終わったスプーンをテーブルへ叩きつけた。

思ったよりも大きな音がダイニングに響き、杉田の動きが一瞬固まる。

しかし、彼は怒りを募らせている未来の考えには賛同しかねると、不服がありありと伺える表情で見返してきた。

「聞いたところだと、放っておけば犯罪になる可能性が高いみたい

じゃないか。予防線を張っておくのは、深入りとかそういう問題じゃないと僕は思うけど」

「そんなにソフィーのことが心配なら、自分で何とかしてよ。私に相談相手なんかさせないでさ。先生が一人で、ソフィーのところに行けばいいじゃない！」

売り言葉に買い言葉であった。

未来が思わず椅子を乱暴に蹴るように立ち上がってしまい、途端に杉田の傷ついたような表情が視界に入ってくる。

彼女が言い放ってから自分の言動を後悔するまで一瞬もかからなかったが、体が同居人に対して謝ることを拒んだ。視線を彼の顔からすつと逸らし、食事をした皿も片付けずに足を廊下に続くドアへと向ける。

床板をつるさく踏み鳴らすスリッパの足音は、そのまま寝室へと向かった。

杉田は追ってくる気配がない。

シャワーを浴びるため、クローゼットの引き出しからパジャマと下着を取り出す未来のしぐさは、まだ怒りっぽい熱を乱暴な音に変えて発散させている。二人揃って明日が休みのため、今夜はワインでも傾けながらゆつくりしようと思っていたが、こんなにかんかんに沸いた頭ではそれもできそうにない。

それでも、熱いシャワーを浴びれば少しは溜飲が下がるだろうと思っていたが、清潔なバスタブで暖かい湯に全身を打たれても、怒りは少しも洗われてくれない気がした。

頭から丁度いい温度の湯が流れ落ちていく未来の考えに上がったきたのは、自分の中に渦巻いている女としての感情のことだった。

自分はソフィーに嫉妬しているのだ。

彼女が現れるまでは杉田は自分のことを最優先に考えてくれ、大切にしてきてくれた。

それなのに今の彼は、悩むソフィーに手を差し伸べることで頭がいっぱいになっているように見えて仕方がない。

その事実は未来の心を灰色の風船でじわじわと押しつぶすように締め上げ、息苦しささえ覚えさせていた。が、彼女が顔をしかめなくなるほどの嫌悪感を感じているのは、そんな醜い思いにさいなまれている自分自身に対してである。

ソフィーは一つ間違えば、ストーカーに殺されかねない危険な状況にある。

それを助けたいと思うのはごく自然だし、人間として当たり前前の感情だ。

なのに自分はソフィーを助けたいと思う一方で、杉田がこれ以上彼女に近づかないで欲しいと願っているのだ。

未来はそんな自分を認めたくなかった。

私はそんな面倒な女じゃないはずだ。

未来の喉を塞ぐ心の叫びは、重たげな苦痛となって胸にのしかかり、黒い大きな瞳から涙となって溢れた。

心底から自分が情けなかった。

いつから、こんなに弱い人間になってしまったのだろうか？

少し前までは誰にも頼らずに考え、自分の目指す場所に走って行けたのに。

未来は身体に残った火薬と泥の臭いを落としてからも、暫く湯が肌を伝うに任せてばんやりと考えた。当然、答えなど出るわけがない。

暗さを表情に淀ませたままシャワーを止めて身体を拭き、パジャマを着てドライヤーで髪を乾かす。一連の作業は殆ど機械的に未来の身体を流れ、はっと気づいたのは歯を磨き終わった時だった。

「未来……」

そしていつの間にか、開け放ったバスルームの扉の側に立つ杉田の姿が、未来が立つ洗面台の鏡に映っていた。いつもの眼鏡の奥にある優しい瞳に、不安と心配の色がありありと浮かんでいる。

「ごめん。君があんなに怒るなんて思わなくて……その……」

未来の激しい怒りの理由が、はつきりとはわからないのだろう。

杉田は、かけるべき言葉を探しあぐねて視線を鏡の中へと彷徨わせていた。

「おやすみ」

敢えて杉田の揺れている声には触れず、視線も合わせない未来は彼の脇をすり抜ける。

寝室の電気は、杉田が彼女の背中を黙って見送ってからすぐに消えた。

暖かいベッドに冷えた心で横になった未来の意識が完全に暗転したのは、明け方近くだっただろうか。彼女が寝てからすぐに隣に杉田が来たのはわかったが、彼は一言も話そうともしなければ、手を伸ばして身体に触れてこようともしなかった。

そのことも未来の内側にどんよりとした暗雲を吹き込ませており、初冬であるのに寝苦しい夜をもたらしていたのである。

それでも徐々に訪れつつあったけだるいまどろみに心を委ね、疲れ切っていた心身の休息が終わったのは、時計の針がもう昼近くを差す頃だった。が、まだ表が暗いと寝ぼけ眼の未来が勘違いしたのは、窓のシャッターが下りっぱなしになっていて、陽光が寝室に全く入らなかったせいである。

未来は手探りでリモコンを見つけてシャッターを開け、寝返りを打ちながら穏やかな陽の光に眼を細めた。まだ夢の中に半分意識を残していた彼女が隣に杉田がいないのに気づくまでには、それから更に十数秒を要した。

今日は杉田も休みのはずだ。こういう時、彼は未来よりも寝起きが悪い。

なのに、どこへ行ったのだろうか？

未来はまだうまく考えられない頭のままでマットレスから起き上がる、パジャマの上にブルーのガウンを羽織ってスリッパに足を突っ込み、ダイニングキッチンへ向かった。

ダイニングキッチンのカーテンは開け放たれ、暖かい日差しに満たされていたが、そこに杉田の姿はない。身体が目覚めよりも遅れてついてきた頭を働かせて気配を探ってみるが、家の中に人の気配はないようだった。

腫れぼったい目を片手でこすって肩先で乱れている髪を指先で梳き、未来が今一度辺りを見回す。すると、ダイニングテーブルの上

に日本語で記されたメモがあるのがわかった。

普段はテレビ会議に使用しているプラズマモニターの横に据えつけてある薄いベージュのメモ用紙に、杉田の男性の割に整った字でしたためられていた。

未来へ

ソフィーから相談に乗って欲しいと連絡があったので、7デイズ・フィットネスに行つて来ます。夕方には戻るから、夕食は一緒に食べよう。

昨日はごめんね。

リッチモンドでデザート用にケーキでも買ってくるつもりだから、楽しみにしてるというよ。

P・S・ 僕が作った朝食が、冷蔵庫の中にあります。

最後にはメモを記した時刻が10時半と書いてあるのが、几帳面な杉田らしい。

「先生つてば……これじゃ、夕食を私が作らなきゃならないのかわかんないじゃない」

黒いボールペン書きのメモ用紙を摘み上げた未来が呟くと、がらんとしたリビングに思ったよりも大きく声が響いたのがわかる。

喧嘩をした翌朝、杉田が折れて謝ってくるのはいつものパターンだ。

二人が穏やかならぬ空気に隔てられる原因を作るのは未来の方が多いが、その根本はと言えば、女心に対する杉田の有り余る疎さにある。それを彼本人も自覚しているらしく、原因をはっきりとは自覚できなくても、自分が何かまずいことをしたのではないかと振り返る癖があるのだ。

そして素直な詫びの言葉の後には、気遣いを見せてくれる。

単純と言えば単純な仲直り方法だが、そこに別の女性の影がちらついているのは今回が初めてだった。

故に、杉田が未来に心を込めて作ってくれたであろう好物のフレンチトーストも、よく味がわからなくなって始末であった。一緒に白いプレートに添えてあったほうれん草のソテーや色鮮やかな生のフルーツ、ガラスの器にミントの葉と一緒に盛られたヨーグルトも、2人で食べているときと味が違う気がする。これらはアメリカ人の主食である冷凍食品でなく、全て食材から調達したものに味気ないのだ。

一通り朝食を平らげて一人分のドリップコーヒーを淹れた未来の口から、大げさな溜息が漏れた。

この借家に一人過ごす朝は、実に久しぶりだ。

故郷である日本から遙か遠く離れたアメリカでは、一番身近な男性がちよつといなくなっただけで、何とも家の空間が広く、涼しく感じられる。それだけ、未来の中では杉田と言う存在が大きいことを示しているのだ。

しかし同時に、そんなことで寂しさを感じてしまう自分が悔しい。「……仕事行こ」

熱いブラックコーヒーを一気に飲み下すと、パジャマ姿の未来はダイニングテーブルの椅子から立ち上がった。気分が塞ぐときは、自宅以外の場所で思い切り仕事をして忘れるに限る。

NOTS訓練に参加しており、他の捜査官たちよりも仕事に費やせる時間が短い未来は、幸いクワンティコのCVC本部オフィスまで出向く理由に事欠かなかった。

今後を決めた後の未来は、行動が早い。キッチンで朝食の後片付けをしてから身支度を整え、愛車であるブルーグレーのフォードに飛び乗るまで、30分はかからなかった。

「あれ、ミキ？どうしたんだ。今日は非番のはずだろ」

そして約1時間後、本部に到着しルームに顔を覗かせた未来を真っ先に出迎えたのは、さぼり中と思いきジャクソンであった。いきなりうるさいのに会ってしまった、と感じたのだろう。未来は作り笑いをして取り繕った。

「うん、ちょっとね。ハヤテなしでホーネットの射撃訓練ももうちょつとやつときたいし、事務作業もたまっちゃってるから」

足を組んで座り、コーヒーを飲んでいたジャクソンに軽く手を振ると、彼女は急いでルームを後にした。小走りで自分のオフィスに入るとキャビネットの鍵を開け、中に納まっていたホーネットをナイロン製の黒いホルスター、ピストルベルトごと引っ掴む。弾倉が空になっていることを確かめてから、ラバー・ショック弾が入った紙箱もテーブルの上に出し、予備のマガジンとともにキャンバス地の素っ気ないトートバッグに放り込んだ。

未来は今度は誰とも会わないようにこっそりとエレベーターに駆け込み、なるべく急いで屋外射撃場へと向かった。屋外射撃場に近づくとつれて耳慣れた発砲音が大きくなってくると、幾らか落ち着いた気持ちになり、彼女は歩みを少しだけ緩める気になった。

普通なら争いの場でしか聞かない銃声は、本来であればひどく人を不安にさせるものだ。

しかし特徴ある発砲音は、今の未来にとっていつもと変わらない空間がそこにあることを教えてくれる薬のようなものだった。

屋外射撃場の古い屋根の下に入ると、屈強な男たちがずらりと並び、種類も口径も様々な銃でマンターゲットへ弾丸を叩き込んでいるのが目に入ってくる。中には白人の女性捜査官もいるようだったが、日本人である未来は、その中に混ざると子ども同然の貧相な体格に見えるのもいつものことであった。

未来は防護用眼鏡とイヤープロテクターをつけてから空いている射座に入り、装備一式が入ったトートバッグを台に置いてからいそいそと準備を始めた。

ホーネットは口径が大きい分大型で、小柄な未来はショルダーホルスターに入れて服の下に隠し持つことができない。そのためヒップホルスターをピストルベルトに通し、腰に下げる必要があったのだ。

そうしている間にも周囲の射座から続けざまに銃弾が放たれ、マ

ンターゲットに描かれた的の中に吸い込まれていく。射撃音がイヤ
ープロテクターをつけた耳に籠もるその度に、未来の全身は内側か
ら滲む奇妙な落ち着きにじわりじわりと支配されていった。

彼女がホーネットを両手に構えたときには既に、個人的に抱えて
いる人間関係の問題はあまり気にならなくなっていた。杉田が嫌う
暴力の象徴たる銃が持つ火薬や手入れ溶剤の臭いが精神安定剤代わ
りになるなど、皮肉なことである。

と、再び湧き上がってきた邪念を弾丸に込め、未来はホーネット
の引き金を続けざまに絞った。簡素な人型をしたターゲットの心臓
部に5発、頭に2発、首に1発、直径10センチ程度の黒い波紋の
ような痕が叩きつけられる。

時間にしてみれば、ほんの数秒のことだった。

「やあ、その銃はゴム弾用なんだな。暴動鎮圧用の試作品なのかい
？」

1弾倉分を撃ち切ってホーネットを下ろした未来に、隣の射座に
いた白人の男性捜査官が声をかけてきた。中肉中背の若い捜査官で、
しげしげとホーネットを見つめている。

「ええ、そんなところですよ」

「でもこれだと、いざって時に車の窓も割れないよな。意外と使い
どころは限られるんじゃないか？」

純粹な興味からか、彼は未来の射座へと身を乗り出して来る。

硬い果実が潰れた時を思わせる銃痕は、一発も木のマントーゲッ
トを貫いていない。これが、非致死性兵器であるホーネットの特徴
だった。

現場で働く捜査官らしい疑問を口にした男性に、未来は笑顔で答
えた。

「そうですね、もう1丁は普通の銃が必要かも知れません」

「こんな重たそうなの、僕は持ちたくないけどな。銃はやっぱり、
小型のが使いやすくていいと思うよ。まあ、そのでかい奴を持ち歩
くつもりでいるんなら、肩や腰を痛めないように頑張れよ」

自分の拳銃であるシグP229をショルダーホルスターに収め、未来の肩を軽く叩いてから、彼は手を振ってその場をあとにした。やはりこういうやり取りがあると多少、心がほぐれていく気がする。

だがこの類の会話は杉田を相手にはできないし、お互いが求めているのはもつと違うことなのだ、とも同時に思い知らされた。

未来は杉田に癒しを与えられる存在でありたいし、共に生きていく上で勇気を与えていきたいとも思う。そのためには仕事に理解を持って欲しかったが、そんなものは癒しの対極にあるものだと言わなく断言できるだろう。

結局邪念をちつとも振り切れていない自分に気づいた未来は、10弾倉分は撃つつもりでいたラバー・ショック弾の8割をオフィスに持って帰る羽目になった。心がぐらついている時は、射撃も至って雑になる。サイボーグの自分が散々たる成績でマンターゲットに記録を刻んでしまつては、落ち込む度合いも倍になるというものだ。面白くもない結果に不機嫌な色を混ぜ、未来はホーネットと射撃用具をトートバッグごとオフィス据付のキャビネットに放り込み、乱暴に鍵をかけた。ホーネットの手入れをしないとトリスに叱られるだろうが、今は手先を使う作業をして苛つきを倍増させたくはない。

代わりにたまっている仕事を少しでも減らそうと、未来が椅子にどすんと腰を落としてデスクに向かったときである。オフィスのドアから上がった軽いノック音が、来客を告げた。

「どうぞ」

座りつばなしで身をかがめ、足元にあるパソコンの電源を投入しながら、未来はぶつきらぼうに応答する。スチール製デスクの間から見たのは、タイトスカートから伸びた細く、白い脚であった。

「エマ？」

姿勢を戻した未来が思わず名前を口にすると、驚いたのは不在と思っていた未来のデスクに定期メンテナンス結果のコピーを置きに

来たらしい、エマのほうだろう。

「あらミキ、来てたの？今日は休みだと思ったけど」

「うん、ちょっとね」

ジャクソンに應對したときと同じように、未来は作り笑いを浮かべてごまかした。が、エマは何気ない風を装って聞いてくる。

「ドクター・スギタも一緒？」

核心を突かれたような気がしたが、未来は素直に主観を交えない事実を述べた。

「ドクターは出かけて、いないの。私一人だよ」

気をつけていても、元気がなさそうなのは隠せていないだろう。

未来は自身に対して舌打ちしたい気分だったが、エマが寄越す視線は気遣わしげなものであった。

「貴方たち、昨日から様子がおかしいじゃない。何かあったのね？」

「別に何も……」

エマの鋭い問いに対して未来が再びごまかすが、答えるときに視線を逸らしてしまったことといい、相手を欺くのが得意な筈の捜査官のしぐさは不自然極まりないこと受けあいだ。

エマが濃いブルーの瞳を向けてくる。

再び、未来はもじもじと目をそむけた。

「話したくないならそれでいいけど、あまり溜め込んでると精神衛生上良くないわよ」

まるで日本にいる未来のもう一人の担当医、生沢のような物言いのエマである。

この二人が時折見せる、心配と保護者としての責任が働いている態度には、居心地の悪さを感じざるを得ない。隠し事をしていると悪戯を言い出せないでいる子どものような、むずがゆい気分させられるのだ。

しかし生沢とエマの違いは、エマが女性であり、同性として人生の先輩であるということである。未来はデスクに両手で頬杖をつきながら、日頃思っていたことを自然に唇へと持ってきていた。

「ねえ、エマ。一つ聞きたいことがあるんだけど」

視線を外してそっぽを向いている未来の側に、エマが近寄ってくる。

「何？」

「エマの旦那さんのこと」

医療サンダル履きの足が、そこでぴたりと止まった。

「私の夫？」

別に怒ったり、不機嫌さが見える様子のないエマに、未来は視線を合わせて頷いた。

再び白衣姿の白人女性がデスクの側まで歩み寄ってきて、デスクに書類を置く。

「別れたのよ、ジリアンが2歳のときにね。私がシャーロットビルで検死官をたまたまやっていて、激務に追われてた頃なんだけど。家のことが何もできないし、担当地区で不審死がある度に真夜中でも呼び出されるような生活だったから、愛想をつかされたのね」

度が弱い眼鏡の奥にある青い瞳は、天井にはめられた蛍光灯を見つめているような気がしたが、話しぶりは完全に昔の思い出を語るそれとなっていた。そこに懐かしさや温かみが滲み出ていない辺り、エマの結婚生活の終焉は穏やかならぬものであったことが垣間見える。

「旦那さんの仕事は？」

「医療関係の研究所で、研究員をやってたわ。多分今も続けてるんじゃないかしら」

未来の質問にも、エマの視線は動かない。

彼女にとって夫との生活はもう、たまに振り返ることがある過去のものにしか過ぎないのだろう。確か娘のジリアンは5歳のはずだから、離婚したのは3年前ということになる。

「幸い家事はできなくてもベビーシッターを雇って、なるべく娘と一緒に過ごす時間を作ってたからね。娘も私に懐いてたし、親権は手放さずに済んだのよ」

話を続けるエマはしかし、どこことなく寂しげに見えることは否めない。3年という歳月がもたらす時間も、人の心を癒すにはまだまだ短いと言えた。だから彼女には別の男性の影も見えないし、とにかく今は娘のことを一番に考えるべきだと自分を納得させているのだろう。

この美しい同僚女性に比べて、未来は自分の人生など浅いものだと思います。知らされているような気がした。

「でもミキ、どうして突然そんなことを聞いたの？」
今度はエマが訊ねる番だ。

不躰にも、彼女の私生活の最も内側に首を突っ込むような真似をしたのだ。未来は当然、答えねばならない立場である。

「……ドクターと喧嘩しちゃって。彼、昨日の夜から口をきかないうちに出かけちゃったの。何となく、私一人じゃ家に居辛くて」

先と同じように、未来は同性の家族に悪戯を告白するような心細さと気恥ずかしさを感じた。が、不思議なことに私生活を表ざたにする嫌悪感を感じない。むしろ、胸の奥から開放されたがっていた黒い棘の塊が、薄らいでいく気がする。軽くなった心からは、本当に感じていた痛みも消えていくようだった。

素直になれた自分に驚いた未来だが、口調だけはまだ沈みがちである。

「だから仕事しに、ここに来てただけ……射撃をやっても、事務仕事してもうまくいかないんだよね」

「そうだったの。よく話してくれたわ」

悩みをようやく打ち明けた未来に、エマは微笑んで見せた。

その穏やかさが意外だったのか、未来が思わず顔を上げる。

「まあ、それぐらいはよくあることよ。あまり気にしすぎちゃ、貴女もドクターも疲れちゃうでしょ？」

そして椅子に座る未来の肩にさり気なく置かれた手もまた、表情と同じように暖かい。

加えて、同性として重ねてきた人生に悔いはないと語る表情は頼

もしかった。

「でも何か原因があるのなら、一度二人でちゃんと話し合ったほうがいいと思うけど。貴方たちはパートナー同士なのよ？何かあったときに二人の意思疎通ができてないと、結局は自分たちに跳ね返ってくるんだから」

二人の意思疎通ができていない。

他人から言われると今更のように身に沁みるが、今回の杉田と未来の行き違いはまさにそれが原因だった。

仕事のこと、ソフィーのこと、どちらかが怒り出してしまつとそこで会話が中断され、とことんまで話し合つてお互いが納得する、ということが最近はなかったのだ。

勿論、互いに納得がいくというのはあくまで理想であつて、結論が落ち着かないことも多々あるだろう。

しかし大事なのは、相手のことを理解しようという姿勢を見せることなのだ。

相手が努力してくれている姿を見せられて怒る者など、いないに等しいのだから。

「ミキは、ドクターのことが好き？彼を愛してる？」

「え？」

これまた、意表を突かれたエマからの質問だ。

アメリカ人にとってはここまで直球な言葉でも、ごく当たり前のものなのだろう。が、もともと日本人である未来は「愛しているか？」といきなり問われて即答できるほど、まだ文化のギャップ補填が完全ではなかった。

かと言って、答えずにいたらあらぬ誤解を招くのもここ、アメリカ力である。

「嫌いな人とは、同居なんかできないと思うけど」

と、正しい解釈ができる程度の返答にとどめるのが、赤面を隠せない未来には精一杯である。未来は未だに「愛」という単語のために唇を動かすことを、杉田の前ですら躊躇してしまうほどなのだ。

強く、ダイレクトに相手へ決めるアメリカ式の表現方法に慣れるには、もう少し時間が必要だった。

「そうね。それなら、もうちょっと素直になるべきだと思うわ。相手のことをどう思ってるのか、言葉にして伝えることも含めてね。思ってるだけじゃ伝わらないことだって、たくさんあるんだから」

日本人のシャイとも言える国民性を知っているのだろう、エマも控え目なアドバイスにとどめてくれるのありがたい。

未来はこの時、ふっと表情を緩められたのが今日中で初めてのよくな気がした。

「考えてみるよ」

この時既に、未来の頭は杉田の好物を夕食で作ることを考え始めていた。

彼女がクワンティコを後にしたのは、エマがオフィスから去ってすぐのことである。

杉田が特に好きなのは魚料理だが、生憎とフレデリックスバーグでは和風に調理できるような魚はなかなか手に入らない。そのため未来は、クワンティコの市街にある大型の食料品店へまず車を走らせた。

クワンティコは、住民の大半が海兵隊員とその家族だ。街には当然様々な店もあり、その中には海兵隊基地の食堂へ食材を卸している店もある。そして生鮮品を扱う店では一部、一般消費者に小売をしてくれるところもあるのだ。

未来は大型のスーパーにも見える生鮮食料品店の混雑した駐車場に車を滑り込ませ、切り身してもらった鱈を買い、一路フレデリックスバーグへと返した。

鱈は二人分としては多過ぎる量しか買えなかったが、冷凍にしておけば日持ちする。出汁の粉末、味噌や醤油、味りんのような和風調味料も、渡米してすぐに一通りリッチモンドで買い出しておいた。野菜も大根以外なら日本料理でも頻繁に使うものはそこそこにあるし、一食作るくらいなら問題ない。

自宅まで帰り着いた未来が車をガレージに入れて玄関をくぐり、ドアにロックをかけたのは16時半過ぎだった。靴を室内履きに履き替え、急いで買ってきた食材をキッチンの調理台に広げる。献立はご飯と鱈の照り焼きに豆腐の味噌汁、ほうれん草のお浸しに南瓜の煮つけと決め、すぐに準備に取りかかるうとした。

が、その前に杉田が何時頃に帰宅するのか確認しなくてはならない。

可能ならできたてをダイニングテーブルに並べて彼を喜ばせたいし、その方が会話も弾むだろう。うきうきとして未来は自分の携帯

電話をバッグから取り出し、杉田の番号を呼び出した。

しかし期待に外れて呼び出し音が一度も鳴らず、留守番電話の機械音声を聞かされることになった。携帯をバッグの底に入れ、フィットネスクラブのロッカールームでも奥の方に置いておいたのだろうか。仕方なく、夕食は用意しておく旨を録音して準備を再開する。

日本にいるときは外食が多かった未来であったが、昨年末の騒動の療養生活を終えた後は、リハビリも兼ねて料理を作ることもあった。そのおかげか、長年苦手だと思っていた料理が実はそんなに苦ではなかったことに、気づき始めてもいた。

南瓜を洗って切り、鍋に湯を沸かしてほうれん草をゆがき、照り焼きのたれを作って切り身を漬け込む。たちまち、家の中に暖かい湿り気が満ちていくような気がした。

こうした一連の流れも滞りがなく、もし杉田がいたらその上達ぶりに驚くだろうと断言できる。米もといで水に漬けてあったが、やはりこれは杉田が戻る時間がわかってから、炊き上がりの時間を炊飯器にタイマーでセットするのがいいだろう。

短時間でできるお浸しや味噌汁があとは盛るだけとなり、南瓜の煮物が鍋の中で甘辛い香りとともにぐつぐつと煮えているのを確認すると、時間は17時半を回ったところだった。

杉田が出かけた7デイズ・フィットネスのあるリッチモンドのダウンタウンからフレデリックスバーグの自宅まで、道が空いていても1時間半以上はかかる。休日の晩はいつも7時まで夕食を食べるようにしているから、遅くともリッチモンドを出発している頃だ。未来はもう一度、杉田の携帯電話番号を呼び出した。が、結果は先と同じく、受話器から無機質な留守番電話の応答音声が聞こえてくるだけだった。

多分携帯電話の電源を入れ忘れてるか、電池が切れたかしているのだろう。

思わず、小さな溜息が漏れた。どうもうまくいかないようだ。

これ以上の頻度で電話をかけるのも、夫の浮気を過剰に心配する

妻のようで気が引ける。

先に照り焼きを仕上げることにして、彼女はガスのグリルに鱈を並べて火をつけ、汁気が少なくなった煮物の鍋を下ろした。

キッチンのカーテンがかかった小窓から外を見ると、外はもうすっかり日が暮れて暗くなっているのがわかる。近所の家々のポーチを飾るランプや、クリスマスツリーを彩る宝石のようにカラフルなライトが、曇った窓越しで闇に浮かび上がっているのが見えた。アメリカの住宅街ならではの光景と言えるだろう。

そして、空っ風がびゅうびゅうと音を立てて吹いているのも聞こえてくる。

フレデリックスバーグは、11月末の今も雨が降ればみぞれに変わることもある。こうしている今も、車をガレージに入れた杉田が寒さに背を丸め、「ただいま」と玄関から入ってくるのが待ち遠しかった。

まるで初めて待ち合わせをした時のように、未来は落ち着かなかった。

大して広くもない家を地下の洗濯室から書斎まで歩き回ってあちこちを片付け、グリルの様子を見にキッチンへ戻り、ベッドを整える。そして度々携帯電話の着信履歴を確認して落胆し、玄関の覗き窓から外の様子を窺って、変化のないことにまた、がっくりとくる。少しはのんびり構えていようとリビングに戻った未来は、もう19時を回っていることに気がついた。常時ニュースをやっているテレビのチャンネルを見ても、時刻は同じだ。

いくら何でも、ここまで連絡がないのはおかしいのではないか？ 何度も電話をかけているのだから、心配していることぐらいはわかるはずだ。あと一回、どこにいるかを確かめてみよう。

そう思った未来は再び携帯電話に手を伸ばしたが、途中で止めた。杉田は子どもではない。それに渋滞に巻き込まれれば、遅くもなるだろう。

「もう！夕食は寝る4時間前に済ませなきゃ、身体に悪いのに」

腰を下ろしたりリビングのソファで一人ごちた未来であったが、待つ以外になかった。仕方なくニュースに集中しようとコーヒーマンを入れて再度、ソファに陣取る。

しかし内容は全くと言っていいほど頭に入っていない。壁時計が時を刻む音がやたらと耳につくばかりだった。結局ニュースを見ていても、10分に一度は時計を見る有様だ。19時半にはまた玄関ドアの覗き窓から外を確認し、20時にはガレージに車がないかどうかまで見に行ってしまった。

20時半になって、未来はようやくフデイズ・フィットネスのフロントに確認の電話を入れることを思い至った。問題は未来のラストネームが違うのに家族だと告げて杉田の所在を確認しようとすることに思えたが、登録した住所が同じものであったことと、初回時にFBIの身分証を提示していたことが効力を発揮していた。

『確認いたしました。ミスター・スギタは14時にお帰りになったようです』

「えっ？」

予想もしていなかったフロント女性の返答であった。

頭の中が一瞬白くなり、言葉が出てこなくなる。

杉田が午後の早い時間にフィットネスクラブから出たのなら、今彼がここにいない理由は一体何なのか。

『入退場時に記録された会員番号はご本人様個人の会員証のもので、すし、間違いはないと思います』

「そ、そうですか。わかりました」

対応してくれた女性が丁寧に伝えてくれたことにどう反応しているのかまでもわからなくなり、未来は喉を詰まらせて電話を乱暴に切ってしまった。

ならば、一体杉田はどこに行ってしまったと言っのか。

呑気にまだリッチモンドのダウンタウンにいるのか？

それとも事故に遭ったのか？

もしかしたらソフィーと二人、モーターにでもしけ込んだのか？

一気にそこまで考えて、未来は慌てて頭を振った。

例え杉田がソフィーに強引に迫られたとしても、隠すつもりならこんな時間まで外で過ごしたりしないだろう。それにあんなメモをダイニングに残しておいたのだから、彼の方からごまかしのために連絡を入れないというのは不自然極まりない。

それならば、それ以外で連絡ができない状況であると考える方が理にかなっている。

しかし、本当にソフィーは関係ないのだろうか？

気づいたときには既に、未来はソフィーの携帯番号を呼び出して発信ボタンを押していた。最早躊躇している場合ではない、という本能的な判断に身体が従ったのだろう。

『もしもし、ヨーコ？こんばんわ』

ソフィーは呼び出し音が鳴ってすぐに電話を取ったようだが、未来がすぐに声を出さなかったため、不審そうな響きを控え目な声に織り混ぜていた。

「あ……ソフィー？」

『ええ』

確認するように、未来が電話口で名前を口に出す。間違いなく、最近聞き慣れたソフィー本人の声だ。雑音が聞こえてこないところから、自宅にいるのだろう。

未来は立ち上がりながら、声の震えを抑えて尋ねた。

「あの、今日ドクターに会ったんだよね？」

『ええ。ちよつと話をして、その後家まで送ってもらったの。彼、ヨーコに頼まれてたお土産を買うから、もう一度リッチモンドまで戻るって言ってたけど』

未来の心臓の鼓動が大きく、強く、そして激しく乱れた。

携帯電話を持つ右手が震え、呼吸にも空気が漏れるような音が混ざる。きつと、顔色も真っ青になっているに違いなかった。

力が抜けて落ちそうになった携帯電話を握り直し、逆の手を胸に押し当てて細く息を吸い、吐き出す。未来は平静を装うことに、全

神経を集中させねばならなかった。

「それ、何時くらい？」

『そうね、3時半くらいかしら。でもどうして、そんなこと聞くの？』

「……わかった、ありがとう」

『どうしたの、何かあったの……』

ソフィーがまだ何か言おうとしていたが、未来は終話ボタンを素早く押していた。

杉田は、ソフィーと一緒にいるのでもなかった。

もし一緒にいるのなら電話に出るわけがない。

いや、ソフィーまで電話を取らなかつたら、まだ多少は安心できたかも知れない。

杉田は14時にフィットネスクラブを出て、15時半までソフィーと一緒にいた。その後リッチモンドまで戻って買い物をしたとしても、まだ戻ってこないのはいくら何でも異常だ。それに何かあって予定よりも遅れる場合、杉田は必ず連絡をしてくれた。

一体、彼はどこへ行ってしまったのだろうか？

帰宅途中に事故に遭ったのだろうか？

それとも、トラブルに巻き込まれたのか？

昨晚最後に見た、心配と不安がない交ぜになった黒髪の青年の顔が未来の脳裏を横切る。

同時に、最も思い出しなくなかった単語が意識の中に弾けた。

ブラックヘア。

CVCの担当事件で杉田がDNA分析を担当している、ヴァージニア州内で発生中の連続殺人事件のコードネーム。

被害者は全て眼鏡を着用した若いアジア人男性で、犯人はまだ捕まっていないはずだ。

未来の視界が端から黒くなっていき、危うく全てが支配されそうなところで踏みとどまった。尻餅をつくようにソファーに腰を落とすと、震えが激しくなった手で、ソファーに置いてあった仕事用の

ハンドバッグを探る。

焦りを露にした彼女がやっとの思いで仕事用の携帯電話を手にして呼び出したのは、ジャクソンの番号だった。

コール1回で、ジャクソンは電話を取ってくれた。

「……ジャクソン？」

『ああ、ミキか。どうした？何か新しい証拠でも見つけたのか？』

黒人青年の陽気な声は、普段と変わらない。まだ表を出歩いているらしく、後ろががやがやと騒がしいのがわかる。

「ドクターが……」

『何だよ、のろけたけりや俺よりも適任者がいると思うぜ』

その騒音で未来の声が揺れていることに気づかないのか、未来の声を遮った彼は笑い声を上げた。多分、ホワイトクローウで酒と食事を楽しんでいるところなのだろう。

「ドクターと連絡、連絡が取れないの」

『……何だつて。いつからだ？』

未来のうまく出てこない言葉と息が喉につかえたような様子に、一瞬でジャクソンの陽気さが影を潜める。

ただごとではないと気づいてすぐに店の外に出たらしく、落ち着こうとしていた未来が次に話し出したときには、先までの喧騒がもう聞こえてこなくなっていた。

「ドクターの顔を見たのは、昨日の夜中が最後だけど……今日昼に起きたら、もういなくて。ダイニングに私宛のメモがあつて、それが書かれたのが朝の10時半」

未来は混乱しあちこちに飛びがちな記憶を掘り起こし、なるべくわかりやすく順に説明していく。ジャクソンは余計な口を挟まず、彼女の話に集中して耳を傾けているようだった。

「ドクターの携帯に何度も連絡したけど、コール音もしなくて全く通じない状態なの。彼、今日は知り合いの女の子に会いに、午前中からリッチモンドまで行ったんだ。彼女と会ったフィットネスクラブは2時に出て、3時半くらいに別れてたらしいんだけど」

『ドクターは、女をたらしこんでどつかのモーターに行くような奴じゃないよな』

ジャクソンは、電話口の向こうで頷いたようだった。

この黒人サイボーグ捜査官はアメリカで未来より長く、杉田と一緒に仕事をしているのだ。同僚である杉田の性格もよく知っているし、公私の区別は嫌になるぐらいはつきりつける男である。電話から再び聞こえてきた声は、未来がデイトゥームにいつも耳にしている色へ完全に変わっていた。

『今は……もうすぐ9時か。とりあえず地元警察に連絡して、朝になったら捜索願と言いたいところだが、俺やミキは、あまりおおっぱらに情報を開示できない事情があるからな。隊長と相談して、今後の対応を決めることになるだろう。地元警察や駐在事務所にも、ある程度の根回しが必要になってくる』

確かにジャクソンの言う通りだ。捜索願を出す際は、かなり個人的に立ち入ったことまで書類に記載し、警官の質問も受けねばならない。杉田と未来の関係や職業について突っ込まれたら、答えられないことが多々あるのだ。そして未来がサイボーグであることや渡米の目的など、国の機密条項に触れる情報も一切、明かすことができないのである。

緊張したジャクソンの声はしかし、焦りや逸りを感じさせない。あくまでFBI捜査官であることを前面に押し出した、歯切れよく低いそれである。言っている内容は、未来も普段事件被害者の家族に伝えていることと殆ど同じだが、今は他人の口から聞く具体的な言葉がありがたかった。

「まさかドクター、あのアジア人……」

『落ち着け。あれこれ余計なことは考えないほうがいい』

未来が口の上らせようとした最悪な想定を、ジャクソンが鋭く遮る。

『心配するな。多分明日の朝、警官と所轄の捜査官をそっちにやることになると思う。調書が必要になるからな。俺が今からすぐ隊長

と連絡を取って、どうするか決まったらまた連絡するよ。とりあえず、ミキはそのまま待っていてくれ。今夜中に必ず、また電話するか
らな』

何かが起きても変わらないジャクソンの態度は、電話が切れるまでの僅かな間ではあったが、少しだけ未来を安心させてくれた。

しかし彼が電話を切ると同時に訪れた初冬の静寂は、未来の心をどんよりとした不安で凍てつかせ、鋭い破片に砕くのに十分な恐ろしさを、静かに押し迫らせつつあった。

ジャクソンから未来に再び連絡があったのは、日付が11月27日に変わった頃である。

その間未来は、キッチンで冷めるばかりとなっていた料理を手当たり次第にジップロックに突っ込んで、冷凍庫に入れていた。そしてあちこちをうろつくと動き回っては、携帯電話の着信履歴を確かめることを繰り返していた。

シャワーを浴びたり、食事をするとは思わず、自分の気を休めることに気が回らなかった。テレビをつけても、書斎でネットサーフィンしても、1分後には椅子を立ち上がる始末だった。そして耳の感度を最大にした拳げ句、強い風で玄関のドアが音を立てる度にすっ飛んでいくことが何度もあった。

結局、何をしても気を紛らわすことはできずに3時間を過ごしたのである。

書斎で携帯電話を取った未来に、ジャクソンはまず杉田からの連絡の有無を確認したが、状況が変わっていないことに小さく溜息を漏らした。

最初に未来が彼から聞いたのは、準備が整い次第捜査官を未来の自宅に向かわせ、調書を即時作成することと、戦闘チームの責任者であるマックスから、自宅待機命令が出されたということだ。

調書を取る捜査官は事情を知っている者なので、杉田の捜索で有用と思われる情報は全て与えること、FBIで身元を預かっている者の失踪のため捜査は極秘とし、必要な情報のみを警察と共有すること、マスコミには一切情報を流さないことも、合わせて早口に説明された。

そして、ブラックヘアの捜査についても一言があった。今までの被害者が持つ特徴である「眼鏡をかけた若年のアジア人男性」がヴァージニア周辺で行方不明になった場合、同事件に巻き込まれた可

能力ありとして、捜査対象に組み込まれるというのだ。

『マックスも声にこそ出さなかったけど、かなり驚いてるみたいだった。現場で動く捜査官の失踪はたまにあっても、研究所の職員がいなくなるなんてことは、今までになかったからな』

「そりゃ、犯罪科学研究所は危険から一番遠いところだもん。普通ならね」

ジャクソンの声は感情を極めて抑えたものであったため、未来もなるべく自分の気持ちを出さないように答えた。

犯罪科学研究所は危険から最も遠く、被害者の苦痛に2番目に近い場所だ。

未来は捜査官である自分が犯罪者から恨みを買いやすいことを自覚し、普段の生活も安全を最優先する癖がついていたが、残念ながら杉田はそうではない。

犯罪の調査を生活の糧としているものの善良なアメリカ市民である杉田は、その人の良さが災いしてトラブルに巻き込まれた可能性もなくはなかった。

『ドクターはアジア人で眼鏡をかけてるから、ブラックヘアの捜査対象にも入るけど、俺たち戦闘チームは積極的な関与ができないんだよな。とりあえずは特殊捜査チームの連中や警察が、何とか彼を見つけてくれるように祈るしかない』

「私も明日、調書を取ったら探してみることにするよ。それにドクター、車がエンコして動けなくなつて、タイミング悪く携帯の電池も切れてるだけかも知れないだし」

普段ならジャクソンに苦笑して言ってみせるところだったが、未来の顔は笑うことを拒否しているようだった。どう頑張っても口角が上がらず、疲労し切つたような声だけが自覚される。帰宅後にメイクを落とすことも忘れていたせいで、リップもファンデーションも剥がれているだろうし、自分が想像しているよりもずっと惨めに見えるに違いない。

もし杉田の車が故障したり、事故に遭つたりしているのなら、ま

ず間違いなくロードサービスや保険会社、病院から未来に連絡が来ている筈だ。可能性としては薄いだらう。

『お前が明日、家から出るのはまずいだろ。自宅待機命令が出てるんだからな。気持ちはわかるが、明日一日は我慢しとけ。もし命令を破ったら、謹慎処分でまた何日か出勤できなくなるかも知れねえぞ』

未来の自ら動く、というのにジャクソンは反対のようだった。

縦の人間関係が強力な警察機関であるFBIでは、当たり前のことである。

それに現段階では、未来も取り調べの対象として見られても仕方がない身だ。誰かが殺されたり行方不明になったりする事件で、まず疑われるのは家族や恋人など、被害者に最も近い人間なのである。自ら疑惑を招くような行動は避けねばならない。

例えその近い人間が前科持ちの無職だらうが、教師だらうが、警官だらうが、そんなことはまるで関係ないのだ。完全に犯行とは無関係な人物であると判断されるまで、積極的に何かをするべきではない。

それも理屈ではわかるが、未来の感情は納得ができなかった。

「でも……」

『そうだ。明日の朝までに、ドクターが行きそうな場所をメールで送ってくれよ。捜査の合間に、俺も探すようにするから』

不満と不服を混ぜた未来が反論しようとする前に、ジャクソンが制する形で言葉を重ねる。

『ドクターが今夜中に何食わぬ顔で帰ってきたら、すぐに連絡しろよ。俺も一緒に怒鳴りたいからな』

ジャクソンも、口調は明るいが恐らく目は笑っていない。

微妙な響きの違いを感じ取って、未来は礼を言ってから電話を切った。

念のために携帯電話の留守番電話サービスを確認してみたが、何もメッセージは残っていないし、今の通話の間に他から着信した履

歴も一切ない。

外を吹き荒れる強風の音以外聞こえなくなった小さな家の中で、未来は改めて途方に暮れた。不安と心細さに押しつぶされそうになっている自分が、心底情けない。

すっかりしろ。

自分はFBI特別捜査官だ。

それも、強靱な肉体を与えられたサイボーグだ。

何かできることがあるはずだと、力強く自身に言い聞かせる。

が、生憎と犯罪捜査の仕事で現場に立ち向かうときのように、その最強の肉体を働かせるような気力はどこにも引つかかかってこない。ただ、愛する男が今どこで何をしているのか、それしか考えられないのだ。

もし明日の朝、隣で黙って帰宅した杉田が寝息を立てていたら、自分はまずどうするだろう。

怒って彼を叩き起こして怒鳴るだろうか？

それとも彼の首にすがりついて、無事で良かったと泣くだろうか？

恐らく、そのどちらでもないだろう。悪い夢がやっと終わってくれたと、安心するだけだ。これが悪夢ならば早く醒めて欲しいと、藁にもすがりたい思いでいるのは本当なのだ。

しかし悶々と考えているだけで時が無情に刻まれていく事実が、これが厳然たる現実であることを彼女へ否応なしに突きつける。それが無駄に時間を過ごしているような気分させて、焦らせるのだ。時計の針は、もう間もなく午前1時を差そうとしているところだ。未来は結局、ジャクソンに言われた通りにするしかなかった。食事をし、杉田が行きそうな場所をメールで彼に送り、眠ることにしたのだ。

杉田の搜索は今夜中にも開始されるだろうが、顔写真や所有している車の種類とナンバーなど、基本的な情報は既にFBIにある。更に詳細な調書の作成のために捜査官がこちらに出向いて来るのは、時間帯を考慮して多分明朝になるだろう。

調書の作成には、言うに憚る個人情報に深く突っ込んで聞かねばならないことを、未来はよく知っていた。それが被害者の家族にとつて苦痛になることも、嫌というくらいにわかっている。明日削り取られるだろう精神力に余裕を持たせるためにも、身体を休めておかねばならないのだ。

未来は、朝食用に作り置きにしていたサンドイッチと野菜ジュースをキッチンの冷蔵庫から出すと、書斎に向かった。

壁のスイッチに手を伸ばして明かりをつけると、デスクの上ののったキーボードの横に、杉田が使っていたマグカップが置きっぱなしになっているのが見えた。その下では、最近彼が買ったらしい園芸雑誌の最新号が、春のガーデンの特集ページで開いたままになっている。

未来は鈍く、強い痛みがずきりと胸に響いたのを黙って耐えた。

雑誌を閉じてマグカップを脇にどかし、端末を起動してから椅子を引いて座る。個人仮想端末を呼び出して接続すると、メールソフトを起動させた。

30通ほどあった新着のメールをざっと確認してみたが、CVC全体のメールリングリストに送られている通達が殆どだった。忘れ物や落し物の通知に端末のメンテナンススケジュール、アカデミーで実施される心理学や各種法令の講習会案内などだ。

未来はのろのろと、ジャクソンへのメールをしたためた。

杉田が行きそうな場所と例えば、園芸用品を買ったファーマーズ・マーケットである「マーガレット」に近所のウォルマート、小さな個人経営食料品店、コンビニエンスストア、リッチモンドの7デイズ・フィットネスくらいしか思い当たらない。他は銀行や郵便局などの公共機関に行く程度だし、彼は酒もギャンブルもやらない男だ。そもそも休日が合わないときの彼は一日中家にいることが多かったため、それ以外の場所のどこに行くのか見当もつかなかった。

軽い夕食を摂りながらそのことをまとめるのに、未来はたっぷり30分はかけていた。文章だけでなく、各所の住所と地図のリンク

までも本文につけておく。最後にタイトルには「His Favorite Place (彼のお気に入りの場所)」と打ち込んで送信ボタンを押下した。

ジャクソンにメールを送り終わった時点で、既に時刻は午前2時近くになっていた。

今日、調書を取る捜査官がこちらに来るのは何時ごろになるのだろうか？

ジャクソンが準備が整い次第、と言っていたが皆目見当がつかない。

調書を作成する必要項目を全て聴取するには時間がかかる。飲み物やお茶菓子の買い置きはあっただろうか？確か紅茶のティーバッグにインスタントコーヒーはあったはずだ。アメリカ製の甘ったるいクッキーやチョコレートは、杉田や自分の好みに全く合わず買ったことがないから、クラッカーにジャムでもつけて出せばいいだろうか。

メイクを落とし、服を脱ぎ捨ててシャワーを浴び、パジャマに着替える間、未来の頭はどうでもいいことで占領されていた。そうしなければ、不安で心が破裂してしまいそうだったのだ。

これから半分が空っぽのダブルベッドに横になっても、恐らくらくに眠れはしないことはわかっている。

いつもいつも、手を伸ばせばそこにあった温もり。

朝の気配で目覚めたあとに寝返りを打ち、張りのある短い黒髪を指先で撫でると、うつすらと目を開けて優しく微笑んでくれた、愛する男。

「先生……」

家中の窓の鍵を確認して電気を消し、ベッドで毛布にくるまった未来の唇から掠れた声が漏れた。

「今、どこにいるの……」

涙が一筋白い頬を伝い、右手が杉田の枕をそっと撫でる。

彼のおいが感じられない日など、未来は想像したこともなかった。

た。

まして、これからいつまで眠れない夜が続くのかということも、
考えたくなかった。

未来の仕事用携帯電話に着信があったのは、冷えた秋の大地を太陽が弱々しく照らし出した、8時を回った頃だった。

浅い眠りをうるうるとうろたうと彷徨った拳げ句に、結局6時には起きてしまった彼女が、3杯目のコーヒーを淹れようとしてキッチンにいたときである。

携帯電話につけた黒い革のストラップを引っ張り、受話ボタンを押して本体を耳に当てると、太い男性の音が響いてくる。それは確かに聞き覚えがある声だった。

『ミキか？久しぶりだな』

『……ビル？ビルなの？』

ディスプレイに通知されてきた番号を確認せずに電話に出てしまったが、聞こえてきたのはフレデリックスバーグ駐在事務所の先輩捜査官、ウィリアム・タイラーの声であった。駐在事務所からCVへ異動になってから1ヶ月も経っていないのに、ひどく懐かしい気がする。

『ああ。ついさつき、主任から事情は聞いた。あと30分ほどでそっちに行きたいんだが、大丈夫か？』

ウィリアムが持つ、バリトンの豊かな声は相変わらずだ。

そしてその声は平静を保ちつつ、心配そうな様子を隠し切れていないのがわかる。まるで、何かに怯えて泣いている娘の身を案ずる父親のような口調だった。

未来の鼻がつんと痛くなり、思わず涙がこぼれそうになる。

『うん、大丈夫』

声の震えを押さえた未来は、鼻を軽くすすってから付け加えた。「濃い目のコーヒーを用意しとくよ。車は、ガレージが1台分空いてるからそこに入れて」

『了解。コーヒーは楽しみにしてるぜ。事務所のポンコツコーヒー』

メーカーのは、薄くてクソ不味いからな』

ウィリアムは抑えた声で伝えると、すぐに電話を切った。

考えてみれば、ここはフレデリックスバーグ駐在事務所の担当地区だ。所轄の捜査官にCVC本部から連絡が行き、協力を要請するのは当たり前と言えは当たり前だろう。

それからぴったり25分後にえんじ色のプリウスが未来の自宅ガレージに吸い込まれ、そこから下りてきたウィリアムが玄関の呼び鈴を押した。

防犯ベルを解除した未来がドアを開け、顔を覗かせる。

「どうぞ、入って」

白木の玄関ドアの隙間から、素早くウィリアムが中に滑り込む。

意外にも、彼は一人で来ていたようだった。所轄の警官も、他の捜査官も伴っていない。この家には今まで他人を入れたことがなかったため、ウィリアム一人だけなのは却ってありがたかった。

彼をリビングのソファに案内すると、未来はキッチンに準備していたコーヒーポットとティーセット、ブラックベリーのジャムを塗ったクラッカーとチーズの皿にペーパーナフキンを沿え、金属のトレイにのせた。それを持ってリビングへ戻ると、ウィリアムはブリーフケースから調書用の書類とリーガルパッド、ボールペン、ポイスレコーダーを取り出しているところだった。

「スナックがちょっと多かったかも知れないかな。警察も一緒に来ると思ってたから」

「いや、朝飯を食ってないからな。丁度いいさ」

未来が邪魔にならないように食器を一通り並べると、ウィリアムが頷く。

「お前、寝てねえだろ。本当に大丈夫なのか」

コーヒーを注ぐ未来の顔に疲労が濃く出て、やつれ気味になっていることをウィリアムが見咎める。どんなに過酷な捜査の後でも、彼は未来のここまでげっそりとした顔を見たことがなかったのだ。コーヒーを各々の前に置いてから、彼女はウィリアムが座るソファ

ーの反対側に腰を下ろした。

「少しは寝たよ。まあ、睡眠不足なのは確かだけど。私のコーヒーも濃いし、大丈夫」

何が大丈夫なのか、自分でもよくわからない。

ウィリアムは黙々と調書作成の準備を進めながら、さり気なく室内の様子を観察している。未来も関係者の家へ聴取に行くと必ずやることだが、自分の家が他の捜査官から見るとどんな生活をしている者に見えるかなど、今まで考えたこともなかった。

2LDKで地下に洗濯室があるごんまりとした平屋というのは、アメリカの若いカップルに典型的な住まいである。借家のため内装がいじれない分、インテリアは明るくしてくつろげるように気を配っているつもりだった。

しかしキャンバス地のソファやオレンジ色の文字盤の壁時計、日本にいた時の写真を入れた額などを飾った棚などを、他人からまじまじと見られるのは気恥ずかしい。

「ドクターから連絡はあったのか？」

大きな音を立てて濃いブラックコーヒーを飲み、ウィリアムが未来に視線を向ける。小さく息をついた未来がゆっくり首を横に振ると、彼はコーヒーカップをテーブルに置いた。

「さて、面倒なことは、さっさと終わらせちまおう。ミキは今日、その後にゆっくり休んでるよ。いいな」

調書用の質問事項のプリントアウトを手にしたウィリアムは、チーズをクラッカーの上にひよいとのせて口に放り込んでから、ボイスレコーダーのスイッチを入れようとして手を伸ばした。

「待って。ビルはどこまで知ってるの、私たちのこと？」

「お前たちのこと？同居人やお前が、日本でやったこととかか」
ためらいがちに質問した未来に、スイッチに指をかけた彼の動きが止まる。

「そう。私が捜査官になった理由と、どうしてドクター・スギタと同居してるかってことも」

「主任が知ってることは全部聞いた。お前が今CVCの戦闘チームにいることも、俺たちとはちょっと違った身体をしてるってこともな」

ウィリアムが一度手を引っ込めて溜息混じりに言うと、用紙の束を所在なげに片手で弾いた。彼は憔悴した未来を見るのは初めてだったが、未来もウィリアムの当惑した様子を見るのは初めてだった。彼はFBIに来る前、ロサンゼルス市警の警官だったと聞く。そこで痴話喧嘩から発展した殺人から児童虐待に起因する傷害事件、麻薬密売組織との銃撃戦まで、ありとあらゆるトラブルや事故を経験したのだ。だからFBIでどんな事件を担当しようとも驚きはしない、という話をよくビールのつまみにしていた。

が、流石にアジア人の同僚が軍事用サイボーグだったというのは、仰天したに違いない。それも彼が熱心に世話を焼いた、親子ほどに歳が違う女性捜査官ともなれば尚更だ。

「そっか……それなら、気兼ねなく話せるよ」

未来は、ここに来たのがウィリアムで良かったと安心していた。

最初の配属先であったフレデリックスバーグ駐在事務所で未来の教育担当はアーロンだったが、何と言っても現場で鍛え、叩き上げてきたのはウィリアムだ。捜査車両の中で昼夜を問わず張り込み、一緒にドアを蹴破り、犯人を逮捕し、一番多くの時間を一緒に過ごしてきた先輩捜査官なのである。

未来はこの小柄で無骨な男を尊敬し、信頼してもいた。

勿論彼女はCVCの仲間も信頼はしているが、まだ異動になって日が浅い。

未来の元上司であるノートン上級主任はそんな点も考慮して、ウィリアムに事情を説明した上で聴取するようにしたのであろう。

ウィリアムは伸び放題の無精髭に覆われた顎を軽く搔くと、コーヒーに口をつけている未来の顔をまっすぐに見つめた。

「心配するな。今回の調書は極秘扱いだから、機密に触れるようなことは一切書かないし、特定の人間にしか閲覧を許可しない。お前

たちの関係も、内縁関係つてことにしておくさ。とにかく、捜査に必要な情報はそういうことに関係ないところにあるし、FBIから警察に回す情報も限定する。そこは約束されてるからな」

そしてウィリアムの視線からは、何よりも誠意が溢れ出しているのが感じられた。

一見すると粗野、下衆で乱暴かもしれないが、その裏では細かい気配りを忘れずに、本当に何が必要なかを鋭く嗅ぎ取るのに長けた捜査官。それがウィリアムという男だ。だから派手な立ち回りをしているのも同僚から煙たがられることはないし、腕利きとして一目置かれる。

ウィリアムを嫌っていたのは、ジェイコブくらいのものである。」「警官が一緒に来なかったのも、同じ理由なの？」

「ああ。マスコミにべらべらと余計なことを喋る警官もいるからな。パトカーなんかを引き連れてきて、この近所で噂になっても困るし。逆に、FBIの内部では大騒ぎになってるみたいだが」

通常、FBIの捜査官は地元警察と密に連携して事件の捜査に当たる。一方で、静かな住宅街にパトカーの群れが来たりすれば、必ずどこかで捜査の情報はマスコミに伝わってしまう。それも警察回りの記者は、外で見張りをしている警官の他愛のない雑談などを鋭く聞きつけ、間違った情報を間違った形で世に出してしまうのだ。

それを防ぐためには、限られた情報のみを与えることで回避するのが一番だ。地元警察官の心象を悪くしてしまうとしても、今回はかりはやむを得ない。

ブラックヘアのことは、ただでさえセンサーショナルにインターネットや新聞、テレビで既に報道されているのだ。行き過ぎたマスコミの情報は例外なく犯人を刺激し、犯行をより大胆に、エスカレートさせてしまう。

まだ杉田がその被害者と決まったわけではない。

そう。まだ彼は行方不明になっただけで、生きている可能性があるのだから。死体が発見されない限り、情報を絶対に漏らしてはな

らないのだ。助かる命を、むざむざ失わせるわけにはいかない。

未来は自嘲気味に呟き、手にしたマグカップの中で揺れるコーヒーへ目を落とした。

「……驚いたでしょ、私やドクターのこと」

「最初はな。けど、聞いたところで何も変わりやしねえよ。ミキはミキだ」

対するウィリアムは素っ気ない。まだ湯気を立てているコーヒーを取って、口に含む。

「お前は今だって俺の後輩で、俺が育てつつあった捜査官なんだ。後輩を先輩が助けなくてどうするんだ？」

コーヒーカップをテーブルに置いてから、ウィリアムは未来の肩に手を置いた。少し袖を捲り上げたワイシャツから伸びた毛深い腕から、暖かさと力強さが伝わってくる。

「わかっていとは思いが、今回の調書では色々と突っ込んで聞かなきゃならんこともある。興味本位で聞いているわけじゃないから、そこは理解してくれ」

「そんなの、十分すぎるくらいわかってるよ。私だって何度もやってるんだから」

未来の顔に次に入ったのは、悲しげな微笑だった。ウィリアムの青い瞳に、一瞬当惑の色が浮かぶ。彼は静かに手を引き、ボイスレコーダーのスイッチを押した。

「じゃあ、まず最初に。音声から起こすのが面倒な情報は、テキストでここにあるよ。ドクターの……マサト・スギタの名前と住所、性別に人種、顔写真、身長とか体型とかの基本データがまとまっているから。これを見ながら、調書を作るといいよ。プリントとデータの両方を準備してるの」

「ああ、こりゃありがたいな。喜んで預からせてもらおう」

未来がコーヒーテーブルの下に据えつけられた棚から取り上げたのは、一般的な調書を作成するのに必要な項目をテキストファイルにまとめた小型メモリとプリント、最近撮影した杉田のスナップ写

真をクリアフォルダに入れたものだった。写真もデジタルデータを落とし込んである。

テキストデータは歯の治療記録や着用していた眼鏡の詳細、身体の傷跡や服装など、細部に渡っている。どれも、外見から判別できる特徴について記述したものだ。

「歯ブラシに髪の毛と、服なんかは後で渡すよ。それ以外で必要な情報は、直接話すから」

歯ブラシと髪の毛はDNA鑑定と毛髪鑑定、服は警察犬を使用した臭跡の追跡に必要なものになる。DNA鑑定は、主に身元不明の状態で見つかった死体を鑑定するのに役に立つのだ。

こんなものを提出するのは、まるで杉田がもう死んでいるのが前提だと認めるようなもので、被害者の家族はここでも傷つけられるいくら必要性があると頭ではわかっている、感情的にはどうすることもできないものだった。

ウィリアムがプリントした紙を確認しているのを見ながら、未来は心が次第に鈍い反応しかなくなってきているのを感じていた。

「それじゃあ、最後にドクターを見たのはいつだ？」

「11月26日、つまり昨日の午前0時くらい。寝る前に挨拶したのが最後。昨日の昼ぐらいに私が起きたら、もう家の中にいなかったの。代わりに出かけてくるってメモが残ってて、それが書かれたのが午前10時半。メモの後ろに、時刻が書いてあったから」

「そのときのメモは、まだあるのか？」

「うん。後でブラシとかと一緒に、渡すようにするから。それからドクターの携帯に何度電話しても、コール音が一度も鳴らずに留守番電話の応答になって。おかしいとは思っただけ……チームメイトに連絡したのが、昨日の夜の9時くらい。その後はまだ頑張ってみたけど、結局ドクターの携帯は同じ状態だったよ」

昨日の夜、ジャクソンに連絡してからチーム責任者のマックスに話が行き、検討の後にフレデリックスバーグ駐在事務所に協力が求められ、ウィリアムが来たのだ。その流れは、いちいち説明しなく

てもわかってるだろう。

ウィリアムが、達筆過ぎて読めない字でリーガルパッドにメモを取り始める。

「その出かける用事ってのは何だったんだ？」

「最近行くようになったフィットネスクラブでできた女の子の友達がいって、その子から相談したいことがある、って連絡があったらしいんだ。私は寝てたから、連絡があった時間はわからないけど」

「連絡は携帯にあったんだな。ドクターは仕事じゃなくて、休みだったのか？」

「昨日は、私たち2人とも非番だったから……」

未来が口ごもるのを、ウィリアムは見逃さない。しかし、追及はあくまで不快感を持たせない語調であった。

「ドクターとお前は恋人同士なんだろ。なのに、起きるタイミングは別々とは珍しいな。一緒に起きて食事をしたり、どこかに行ったりとかはしないのか」

「昨日はたまたまだよ。私が戦闘訓練と仕事で疲れてたってのもあるし。多分、起こしちゃう悪いと思ってそっと出かけたんだと思う」

彼女は嘘は言っていないが、全てを話したわけでもない。

ウィリアムは、またペンをリーガルパッドに走らせながら続けた。「その女友達とドクターは、どこで会って言ってたんだ？」

「リッチモンドのダウンタウンにある、7デイズ・フィットネス。フロントに問い合わせたら、ドクターは2時に退出した記録があるって言われたよ。彼女にも直接確認したんだけど、ドクターと別れたのは26日の午後3時半くらいだって。自分の家に、車で送ってもらったって言ってた」

そこでふとウィリアムの手が止まる。

「彼女、自分の車で7デイズに来たんじゃなかったのか？わざわざドクターに送らせる必要はなかったんじゃないのか」

「さあ。彼女がどこに住んでるか私、知らないから」

未来は質問に当惑した顔になっていた。

確かにソフィーは、杉田に送ってもらったと言っていた。自分の車はどうしたのだろうか？昨日ソフィーに連絡したときは、気が動転していて気がつかなかったことだ。

「ドクターの姿を最後に見たのは、彼女というわけだな」

「そうなると思う。結局昨日、私はドクターの顔を見てないし、声も聞いてないから」

「彼女に詳しい話を聞く必要があるな。連絡先を後で教えてくれ」
メモを取り続けているウィリアムに、未来は黙って頷いた。

しんとした室内には、ウィリアムのボールペンが紙を滑る音と、時計の針が時刻を刻む音がやたらとはつきり聞こえてくる。

外からは、子どもたちが賑やかに騒ぐ声が響いてきていた。何気なく窓の外を見ると、隣家の私道までやってきたスクールバスに乗り込む子どもたちに、白人の母親が手を振っているのが見える。

「で、その女友達の特徴を教えてくださいんだが」

「ソフィー・アイコ・フジミって名前。日系人の大学生だよ。背は私と同じくらいで、赤い髪と緑の目をしてる。でも髪は染めてて、目はカラーコンタクトみたい」

未来は説明しながら、ソフィーの顔を思い浮かべた。

カラーコンタクトをしていると瞳の大きさが変化しないため、まるで顔が作り物のような印象になる。初対面のときの違和感を、未来はよく覚えていた。女性が髪の色をいじるのはよくあることだが、彼女は何故、わざわざ瞳の色まで変えているのだろうか。

「外見的特徴はよく見てるな。ミキも会ったことがあるのか？」

「私とドクターの共通の友達だから……知り合ったのも、2人でいたときだし」

「彼女の人となりはどうだ？」

やや訝るように、ウィリアムの口調が僅かに変わった。顎と視線を上げ、未来がつい最近会ったソフィーから受けた印象を英語にのせていく。あまり主観的なものにならないよう、できる範囲で言葉を選んだ。

「大人しそうな女の子って感じかな。話し方も控え目で、運動もあんまり得意じゃないみたい。スポーツをやってるような体格に見えなかったし、アロマテラピーが趣味だって言ってたからね。つい、手を貸してあげたくなるタイプって言えばいいのかな。最近は別れた彼女につきまとわれて困ってるらしくて、私も相談されてたの」

「ソフィーは、お前が捜査官だつてことを知ってるのか？」

ウィリアムがリーガルパットからちらりと視線を上げ、ソフィーの端に座っている未来の顔を見る。未来は素直に、横に首を振った。「ううん。それどころか、本名も知らないよ。外では私、ずっと偽名で通してるから。ドクターもFBIの職員だとは、教えてないみたい」

「その前の男とのトラブルについても、話を聞いておく必要があるな」

ウィリアムが頷いた。

恋人が浮気した場合、男は純粹に浮気した女を恨むが、女は恋人の男よりも浮気相手の女を目の敵にする傾向がある。男が恋人の浮気相手の男を恨むことは、あまりあるケースではない。

今回は恋人同士にソフィーとラルフ、浮気相手に杉田を当てはめられる。

厳密に言えば杉田は浮気相手ですらないが、怒り狂ったストーリーカの思考は予想の斜め上に行くことがしばしばある。考慮しておくべきことだろう。

「男の名前はラルフ・バーンズ。白人で30歳前後かな。私も7デイズの駐車場で出くわしたの。腕を掴んできたから、公務執行妨害で逮捕でもしてやろうかと思っただくらいだよ」

「腕を掴まれただと？穏やかならざる話じゃねえか。何があった」
ウィリアムが眉を顰めた。

「一昨日、ソフィーからそのラルフの件で相談があるって言われて会ったんだ。ストーリーカー紛いのことをされてるから、どうすればいいかって。7デイズのカフェで話をしたんだけど、そいつが駐車

場で待ち構えてたみたいで。ソフィーが私に自分のことをどう言っていたのかとか、お前はソフィーに騙されてるとか。まあストーリーカーにお決まりの台詞のオンパレードだったけど。私が話を止めさせて帰ろうとしたら、まだ話は終わっちゃいないって、腕を掴んできたんだよ」

当日のことを思い返した未来が無意識のうちに、左の二の腕を押さえている。

腕っ節については、素手の状態で未来に勝てる男などジャクソン以外にいない。が、掴まれたときの痛みはあるし、身体がずっと大きな男が迫ってきた生理的な嫌悪感はある。

丸腰のラルフなど怖くはなくても、顔をしかめたくなる不快感は残っていた。

「ラルフとソフィーの写真はあるか？」

ウィリアムの問いに、未来は首を横に振った。

「ソフィーとは、まだ知り合って日が浅いし。ラルフの画像なら、ソフィーが持つてるかも知れないけどさ」

そこで、ウィリアムの言葉が一旦途切れた。右手に持った黒の安っぽいボールペンの柄を、くるくる回している。これまでの話を整理しているのだろう。

更に二言三言書き留めてから、彼はリーガルパットを一枚めくった。

「話が逸れたな。ドクターの話に戻ろう。最近、誰か変な奴につけられたことがあるとか、家の周りに不審者がいるのを見たとか、話してなかったか？」

「特にそんな話は聞いてないよ。それにもし妙なのがうるついてたら、ドクターより私の方が先に気がつくはずだもの。クワンティコの本部はセキュリティが厳しくて部外者は入れないはずだから、言わずもがなだし。海兵隊基地関係者とかなら、別かも知れないけどね」

「変な電話があったりとかも、なかったか？」

「ない。留守電や携帯にも、おかしい電話はなかったよ」

再びウィリアムが無言になる。調書の質問項目を見ながら数秒間は沈黙していたが、一度息をついてから、彼は覚悟を決めたように顔を上げた。

「じゃあ……」

未来の顔に視線を定め、一旦言い淀む。

「今度は、もうちょっと個人的なことについてだ。済まんが、嫌な話さなくてもいいというわけじゃないんでな」

「わかってるって。私だって、さっさと終わらせたいんだから」

ウィリアムが気遣ってくれているのは、未来にもわかつている。それだけで十分だった。

「お前たち2人のことだが、借金とかのトラブルはなかったか？」
「一切。FBIからの給料はちゃんと出てるし、日本からの援助金もあるから。生活に困ってるとか、そういうのはない。カードの買い物も、殆どが日用品ばかりだし。必要なら、財政記録を提出してもいいよ」

経済状況については誘拐に限らず、ほぼ全ての事件において質問される項目である。これに関してはやましいことがないため、堂々と答えることができた。

「ドクターが何か趣味を持っていて、金に困ってたりとかはしなかったか？」

「彼の趣味は園芸だし、最近まで忙しくてそんなことをしてる暇もなかったから。第一、この庭全部を掘り起こして花壇に変えようと思わない限り、卒倒するような金額にはならないよ。私は休みの日は、家でゆっくりしてるだけで過ぎちゃうしね」

「酒やドラッグはどうなんだ？」

「お酒はたまに飲むけど、ドクターはほとんど下戸だから……ドラッグなんか、手をつけたこともないと思う。遺伝子分析なんて頭や手先を使う仕事、禁断症状が出たらできないわけだし、何より彼は医者だもん。ドラッグがどんなに怖いかって、知ってるはずだからもしやってたら、CVCの誰かが気づいてたはずだよ」

無論未来とて、ドラッグを一度もやったことはない。

職業上、ドラッグが身の破滅しか招かないことは2人ともよくわかってる。犯罪現場から押収したドラッグを使用したり、横流ししたりする法執行官のことも話題には上がるが、個人的な欲望のために大きすぎるリスクを抱え込む気にも当然ならなかった。

ウィリアムが今まで取っていたメモを見直して、率直な感想を漏らす。

「ふむ。今までの話をまとめるとドクター・スギタは極めて真面目で、犯罪に巻き込まれるリスクはかなり低い人物のようだな」

「そりゃあ、犯罪科学研究所で物騒な証拠物品を扱ってるんだから、犯罪の被害者が何をされたか、手に取るように知ってるはずだよ。でも……」

「でも、何だ？」

ここから先は未来が個人的にいつも感じていたことだが、話しておいたほうがいいだろう。ウィリアムの視線からすと目を逸らした彼女は、幾分か控え目な口調になっていた。

「ドクターは、その割に認識が甘いところがあつて。根っからの悪人なんて滅多にいるもんじゃない、人間は誰だっていい面と悪い面があるんだから、何でも疑ってかかるのは良くないって考えてるところがあつたと思う。だから私、心配だっただけ」

ウィリアムが頷いて見せる。

「性善説って奴か。医者らしい考えだな」

医は仁術というように、医師は普通善意で以て患者の治療に携わる。

その中でもとりわけ、杉田はお人好しな方だろう。経済的に恵まれた家に生まれ育つたお坊ちゃんだった彼は、人を疑うのは悪いことだと未だに心の奥では思っているのだ。

今日何度目かの溜息とともに、未来は続けた。

「だから、私がうちで仕事するのもいい顔はしてなかったの。家は身も心も休めるための場所なんだから、殺人事件現場の画像を見たりするのはもつてのほかだった」

「そのことで、お前たち2人が揉めたりはしてなかったのか？」

鋭く指摘されて、未来は息が喉に詰まったかのような苦しさを覚えた。

「が、客観的な事実を隠していたら事態は好転しない。」

「……実は、私がCVCに移ってからはたまにそのことで喧嘩することがあつて。私は戦闘訓練があるから、その分捜査にかけられる

時間が短い。だから仕方なく、家でも仕事することがあったんだけど……ドクターはストレスになるから、余計な仕事は家に持ち込むなってうるさかったんだ」

「お前たち2人は、うまくいってなかったってことなのか？」

追及でも糾弾でもないウィリアムの静かな調子の言葉だが、未来は胸を突かれたことを隠せず、視線をうろつろとテーブルの上に彷徨わせた。

「そんなことはない、ないって思いたいけど……だって、サイボーグの私の身体を一番知ってるのはドクターなんだから。彼が私の人工パーツを作ったんだもの。彼がいないと、きちんとしたメンテナンスができない可能性があるんだよ。CVCにいるもう一人のドクターは、まだ私の体の全パーツを把握できてるわけじゃないし。彼がいなくなったら一番困るのは、私なんだから」

一気に言った未来は、つい語調が強くなってしまふのを抑え切れない。

ウィリアムは捜査官だ。

当然あらゆる可能性を考慮しており、その中には未来が犯行に係している可能性も含まれる。そして、彼もそれを全面否定しているわけではないだろう。未来も彼と立場が同じだったなら、全く同一の推測を辿った筈だ。

が、そうとわかってはいても、不安に胸の鼓動はかき乱され、背中と額に嫌な汗が滲んでくるのが感じられる。

未来の場合は単なる色恋沙汰絡みの事件とは事情が違う。被害者である杉田の支えなくして、彼女は文字通り生きていくことができない。そんなことは言わなくてもわかるはずと思いたくても、客観的な情報が全てとされる犯罪捜査では、形に残らないものは無視される。

普段決して言葉にしない心の内側を他人に表してみせるという行為には、精神力がじりじりと削られていく実感さえあった。

「それはそつだ。日本でも、ミキの身体をずっと診ていたのはドク

ター・スギタなんだろ？」

その意図を汲んでか、ウィリアムの態度はあくまで柔らかい。感情的にならざるを得ない元同僚の女性捜査官を、気の毒に思っている様子だった。

ウィリアムもベテラン捜査官にしては、この辺りの詰めが甘いと言えるだろう。

しかし人情派を自負する彼は、今回ばかりは自らの感情にある程度までしか逆らわないと決めているようだった。

「さっきお前が言ってくれたソフィーって女だが、彼女のせいで2人の仲がうまくいかなかったってことはないのか？」

話の切り口が変わる。未来は躊躇った後に、弱く頷いた。

「多少はある、かな」

主な仲違いの原因は未来にある。ソフィーに対する嫉妬心を、認めないわけにはいかなかった。

「ソフィーは、私たちに仕事以外で初めてできた友達なの。だから、ドクターも頼まれたことは嫌だって言えないだろうし……」

「それは、昨日の話のことだな？」

確認してきたウィリアムの方を見て、未来は再び頷いた。

「多分、ストーリーカーのことについてだったと思う。男手だって借りたときもあるだろうから。ドクターは、彼女を純粋な親切心から心配してて……でも私、他人のトラブルに首を突っ込むことは反対だった。よく知りもしない人の味方をするのは、特に危ないから。」

私がそう思っていることは、ドクターだって知っていたのに「
どうしても口調が弁解がましいと思えるのは、自分が持つ女としての醜い一面を曝け出さざるを得ないからだだったが、男女間で起こる事件にこういった感情はつきものだ。その中の一つとして数えられてしまうことが、未来にとっては腹立たしくあり、悲しくもある。
「ソフィーとドクターが、2人でどこかへ行ったって可能性はないのか？」

「え？」

「日本語ではカケオチ、と言っただけ？2人が逃げ出すってことだ」

その質問に、未来は少々面食らった。そんなことは今の今まで、頭の隅にさえ引っかからなかったのだ。

「それはないと思いたいよ……多分。私、昨日ソフィーに連絡したんだもの。2人で逃げたんなら、彼女が電話に出たのは不自然だし」杉田の性格を知っている未来は、普段なら笑いの種にできるぐらいのことである。が、今は悲しげな笑みを浮かべることぐらいはできない。

「ドクターと定期的なセックスはあったのか？」

一番プライベートな情報について、出し抜けにウィリアムは聞いた。

普通ならそんなことまで聞くなと、怒鳴るところだろう。人によつては心が深く傷ついて侮辱されたと感じるだろうし、そうでなくてもこんな質問は尊厳を踏みにじられたと思つて当たり前だ。

しかしブラックヘアのように性的要素が絡む殺人において、被害者と疑われる人物のセックスについての嗜好や傾向という情報は、極めて重要なのだ。それによって、被害者が犯人と接触した場所の情報や、人物像に結びつけることができるからだ。

膝の上に置いた未来の両手は、反射的にきつく握りしめられていた。

彼女は力んでいた手と肩、口許から意識して力を抜いた。

「週に1回か、2回は」

淡々と低い声で、彼女は事実のみを短く答える。声は震えていない。

「最後は？」

「11月23日の土曜日」

ウィリアムの質問は短く、未来の返答もまた、短い。

「……そっちでの彼の趣味は？」

「特に変わったことはしたがらない。全くのノーマルだよ。私もね。」

彼、仕事のせいもあってか暴力的なものは大嫌いだつたみたい」

未来はさり気なく、杉田が過激で暴力的なポルノの趣味がなかったこと、そういった内容のメディアに嫌悪を感じていたこともつけ加えていた。

「ドクターの方で満足できないとか、そんな風に言ったことはあるか？」

「特にないよ」

これも本当である。

彼は2人でいちゃついたり、共同で何かすることは好きだったが、セックスそのものに執着するようなことはなかったのだ。

「他に、ドクターが男から言い寄られるようなことは？そういう場所に、一人で行ってたような節があったとか」

「たまに冗談で、バーの店長にからかわれることはあったけど……でも、そこはチームメイトの情報提供者がやってるお店だから。いくらドクターでも、一人でそんなところに行くわけがないよ。危なそうな場所を避けるくらいの危機感があったんだし」

杉田はジャクソンの情報提供者、ルイが経営するバーで話の種にされることはあったが、実際の誘いがあったとしても決して乗らないだろう。杉田は多様なセクシャリティを認めて嫌ってはいなくとも、興味は全くなかったのだ。

「そもそも、彼にそういう趣味はないよ。よく知らない女の子と話すのだから、緊張するくらいなんだから」

「知らず知らずのうち、未来の口調に力が込められていく。」

「じゃあドクターは誰かから誘われても、うかうかと車に乗るような真似はしないってことだな。それが男でも女でも、反応は変わらないってことか」

「そう。誰とでも仲良くなれるってタイプじゃないから。日本人の中でもシャイな方に入ると思うし、まず警戒すると思う。声をかけたのが警官とかなら、わからないけど」

「自分から声をかけるようなことは？」

「困ってる人を積極的に助けることは、多分あるって言えるくらい。もし好みの女の子がいても、不純な目的で声をかけることはまずないんじゃないかな」

これも、未来が日頃から懸念していることだった。

杉田は相手がどんなに凄味がある外見をしていようが、困っている人には手を貸さずにいられない性分だった。もう随分前から、車がパンクしたから電話を貸して欲しいと訴えて携帯電話を借り、その際に仲間が財布を抜き取る類の詐欺が横行しているにも関わらず、である。どんなに未来が言い聞かせても、根本的な人柄は変えることができなかったのだ。

「それだけ、ドクターはお前に首っ丈つてことだな」

和ませるつもりで言ったに違いない、ウィリアムの一言である。

しかし、未来は胸の傷を深く抉られたかのような痛みを覚え、反射的に俯いた。

「それから、昨日のお前の行動を漏らさずに話してくれ」

「……昨日は、非番だったから昼まで寝てたよ。それからすぐに机の上のメモを見て、ドクターがいないことがわかって。一人で家に行ってもしょうがないから、クワンティコのCVCのオフィスに行つて、仕事してた。家を出たのは、午後1時くらいだったと思う。で、結局クワンティコにいたのは3時半くらいまでかな。その後は街の食料品店で魚を買って、家に帰ったのが4時半くらい。それから後は、ずっと家にいたよ」

顔を僅かにしか上げられなかった未来の声は、くぐもっている。

「わかった。俺からの質問は、大体これくらいだ。本当は女性の捜査官を寄越すべきだったんだろうが、駐在所には新人が入ってこなかったもんでな」

自分の発言が不適切であったと気づかなかつたらしいウィリアムが、手元の書類をテーブルに打ちつけて揃え始める。

気づかないうちに緊張していた全身から力を抜き、未来はゆっくりと息を吐いた。決して暖房が効きすぎているわけではない室内で

かいていた汗も、新たに滲み出てくることはなくなったようだ。

ウィリアムができる限り気を使ってくれていたのは伝わってきたし、本当なら感謝してもいいぐらいだろう。しかし未来の頭は鉛の芯が打ち込まれたように重く、胸にはどんよりとした空気が淀み、身体の外に出て行つてくれない気がしていた。

ボディブローを何発も食らった後のように、疲れ切ってしまったのだ。

「いいよ、気にしないで。いやったらしい聞き方じゃなかったから、大丈夫だよ」

言いながらも、未来は事情聴取がここまで苦痛を与えるものだという事実打ちのめされていた。自分も被害者の家族に、今までこんなことを強いていたのだろうか？

意識せずに、重苦しい吐息とともに視線までもが落ち込んだ。

「まあ、ロスにいた頃と同じやり方をしてちゃあな。娘にも嫌われちまうから」

ウィリアムの口許を苦い微笑が横切っていく。

無骨な男が発した何気ない一言に、未来は驚いてちらりと視線を上げた。

「結婚してたんだ、ビル」

「ああ、そう言えば言っていなかったかもな。娘のチェリーはまだ10歳だよ」

彼はボイスレコーダーを止め、未来が提出したクリアフォルダと自分の書類をブリーフケースにしまっていく。その間、未来は重い身体を引きずる思いで立ち上がり、バスルームに置いてあった杉田のヘアブラシと歯ブラシ、脱いだままになっていたアンダーシャツ、卓上に残されていたメモとソフィーの連絡先の走り書きを持ってきた。アンダーシャツは密封できるタイプのビニール袋に入れ、ブラシ類も同じように別のビニールに入れる。紙類は、持ちやすいよう大き目の封筒に入れた。

未来からそれらをまとめて受け取るウィリアムの手に、結婚指輪

はない。捜査官にとって、家族とはアキレス腱だ。仕事の間は指輪をしないようにしているのだろう。

彼は全ての荷物をブリーフケースにしまつと、クラツカーとチーズをもう一つずつ口に放り込んでからコーヒーを一気に流し込み、ソファアールから立ち上がった。

「ビル、私はまだ容疑者のリストに載つてると思う？」

ガレージまでウィリアムを見送るため、未来が後ろからついていく。

「今のところは載つてるだろうけど、早ければ今日中に外されるさ。お前も自分で言つてたが、ドクターがいなくなつて一番困るのはお前自身だ。そんな奴が、わざわざ誘拐を企てる可能性はない。いくら妙な女の影があるとは言つてもな。自宅待機さえ解ければ、動きようはあるだろう」

未来が玄関のドアを開けたところで、ウィリアムはここでいいと彼女を制した。

「調書はすぐに作つて、主任のところに戻すようにするからな」

未来は、彼が捜査車両と自分の足で動き回ることを好む捜査官であることを知っている。なのに調書作成を最優先にしてくれると言ふのだから、彼が何とか役に立とうとしてくれることを感じた。その暖かさが、今は一際身に沁みる。

「ここに来たのがビルで良かったよ」

「俺はこんなことで、お前の家に来たくはなかったがな」

ふつと表情を緩めた若い女性捜査官に、ウィリアムは複雑そうな顔を見せた。

「今度ここに来るときは、もっと旨いコーヒーかビールが飲めることを期待したいぜ」

「私のコーヒー、まずかった？」

いつもと同じ淹れ方をしているのに、コーヒーの香りが落ちていたのだろうか。ウィリアムの言い種を気にして当惑の色を浮かべた未来に、彼は目元に皺を寄せてもう一度笑った。

「そういう意味で言ったんじゃねえよ。ミキは少なくとも、女房よりは旨いコーヒーが淹れられるみたいだからな」

杉田が戻ってきて落ち着いたら、ウィリアムの家族もここに呼んでお茶を楽しもう。

ここ数ヶ月間、未来は誰かの家族とも積極的に付き合う機会に恵まれていなかったが、彼の妻や娘には是非会ってみたい気がした。

「無事解決したら、喜んで招待させてもらおうよ」

「その時は、灰皿も用意しといてくれよ」

ウィリアムはデニムとニットというラフな格好にすっぴんの未来へ、挨拶代わりに軽く手を振ると、そつと白木の玄関ドアを後ろ手で閉めた。

動かせなかった。

指先から爪先に至るまで、全てを。

薄汚れたコンクリートの床と壁の境目を見つめる、曇った視線さえも。

身体全てが感じることを拒否しているかのようで、長い長い時間、冷たいコンクリートの床にうつ伏したまま身動きができなかった。

もう何時間、そうやっているのかわからない。

この体勢になる直前、自分の身に何が起きたのか。

覚えているのは、銃を突きつけられてここまで運転させられてきたこと。

この建物の中に連れ込まれるなり後ろから突き飛ばされ、全裸になるよう強要されたこと。

ベッドの上に追いやられた後に大柄な白人の男が裸でのしかかってくる、されるがままに体中を何度も陵辱されたこと。

「俺の言うことを聞かなかったらぶつ殺して、死んだ後も辱めてやるからな」

犯されている間もそう耳元で凄まじると、恐怖で身体が竦み、動くことができなくなった。

生けるぬいぐるみか人形さならだっただろう。

「また遊んでやる」

どのぐらいの時間が過ぎた後にこう言われ、ここに放り込まれたのかも思い出せなかった。一緒に投げ込まれた服と眼鏡をいつ身につけて倒れこんだのかも、覚えていない。

ひょっとしてあれは夢ではなかったのか？

最近面白くないことが立て続けに起こっているせいで、自分の脳が勝手に作り上げた荒唐無稽なシナリオを、イメージの中で感じて

いるだけではないのか？

このまま眠りに落ちて再び目が覚めたら、寝室のベッドに洗剤の香りがするパジャマを着て横たわり、隣では未来が眠っているのではないだろうか？

だって今の自分の状況は、あまりにむごいではないか。

男が男に犯されるなど、ひどすぎて現実だと思えないではないか！

しかし、埃が積もった床から流れ込んでくる空気のざらついた味や、凍てつくほどに寒々としたこの部屋の温度は、この空間が実際に存在するものであることを、嫌でも感じさせる。

「僕は……」

青ざめた唇から漏れた咳きは、弱々しい吐息とともに床の砂埃を吹き散らした。

発した声が、耳の奥で脈打つ鼓動の音が、自らの内に響く。

杉田は黴臭い空気の中に身体を起こした。床に顔をつけていたために頬についた砂の塊が、その拍子にはらばらと落ちていく。

何故動く気になったのかはつきりとはわからないが、このまま倒れていれば体温が床に奪われて凍えるという、ごくありふれた防衛本能のせいなのだろう、とぼんやり理解できた。

上を見ると、パイプが剥き出しになっている天井から裸電球がぶら下がり、弱々しく室内を照らしていた。少し動く度に煙のような砂埃が淀むこの空間は、天井の一角に上げ蓋式の出入口がある。その下に粗末な木製の階段があると見ると、地下室のようだ。

窓が作られておらずコンクリートで塗り固められたこの部屋の広さは、1.5畳程度だろうか。家具はなく、奥の方にダンボールが乱雑に積み上げられているのと、砂で汚れた毛布が丸めて放り出しているくらいしか、目につくものはない。

多分自分は、この上に位置する部屋で屈辱的な行為を強いられた後、ここへ閉じ込められたのだ。押さえつけられた腕や肩には指の形をした赤い痣がつき、他者が力づくで侵入してきた下肢はずきずきと熱い痛みを訴えるが、身体を蹂躪した行為そのものについては、

不思議なことにぼんやりとしか記憶にない。

精神に深刻な、気が狂いかねないほどの傷を与える出来事については、自己防衛本能が働いて記憶をロックしてしまうと聞いたことがある。確か、心理分析官のポールが言っていたことだっただろうか。

そして脳が思い返すなど警告していることなら、今細かく思い出すべきではないのだろう。

とりあえず、自分は殺されずに済んだのだ。

とにかく生き永らえることを第一に考えなければならぬ。

この上の部屋にいる男は「また遊んでやる」と言っていた。気が向いたときにここに足を運んで自分をベッドに上げ、犯すつもりでいるのだろう。言うことを聞かなければ殺す、と脅したぐらいなのだ。大人しく相手の言うことを聞き、もしくは喜ばせるぐらいのことをしなれば、あっさりと命が奪われる羽目になるのかも知れない。

しかし、とそこで杉田は立ち止まった。

先の陵辱は身体が引き裂かれるような激痛を伴い、口から内臓を吐き出してしまつと錯覚するほどの苦悶を味わった。

あんな思いをまたせねばならないとしたら、いつそ自ら命を絶つてしまったほうが楽だし、ましなのではないだろうか。自分がいなくなつてしまえば、少なくともこれ以上尊厳を踏みじられることは防げる。そうすれば、あの男も存分に悔しがるだろう……
「先生が側にいてくれるもん。だから私はいつでも元気でいられるの」

唐突に、未来の声が聞こえた気がした。

彼女の無邪気な笑顔のイメージが一瞬弾けた後、雨と涙に濡れたくしゃくしゃの泣き顔が鮮明に浮かび上がってくる。

思えば未来のあんなに悲しそうな泣き顔を見たのは、昨年彼女に撃たれて昏倒し、暗くなつていく視界に留めたのが最後だった。あの時彼女は、杉田の命が消えてしまったと思つて泣いていたのだ。

杉田は失いつつあった意識の中でも、未来に暗闇のどん底に突き落とされたように悲痛な泣き顔などもう二度とさせたくない、心から感じた。

もし自分が舌を噛みちぎったり、首を吊ったりしたら、彼女はそれどころでは済まないはずだ。FBI捜査官でありサイボーグである自分が、何故パートナーを守れなかったのかと悔い、自責の念にさいなまれ、自らを攻撃し、自分だけがのうのと生きていることに罪悪感さえ抱くだろう。

未来は一般女性と違い、自殺が決して見過ごされることはない。科学の力で何度でも生き返り、背負い切れない罪の意識を胸に生き続けなければならぬのだ。

恐らく一度死んでしまった心を、無理やり墓から掘り起こして。そんな生き方を、未来にさせていいのか？

自分が必ず守ると誓った女性に。

未来が人間の身体を失うことで心に受けた大きな傷は、自分が与えたものなのに。

望んでいなかった機械の身体を受け入れ、大きな苦痛を伴うメンテナンスに耐え、犯罪現場で戦うことを強いられ、それでも彼女は笑顔を失わないでいるというのに！

その未来を置いたまま死を選ぶなど、ありえない裏切りではないのか。

そして、杉田の意識にまた一つ、浮かんできた記憶があった。

「死んだ後も辱めてやるからな」

と、男に脅されたことだ。

死んだ後も辱めるといっものは何のことだろうと、普通ならぴんときかないところだろう。

だが、杉田は犯罪科学研究所の検査官だ。被害者の身体を切断した鋸や、体液と血液でぐっしょりと濡れたジーンズなど、手にしなかった日はない。死してなお理不尽な暴力に晒された犠牲者たちが発する無言の叫びは、瞼の裏に焼きついて離れないほどだ。

その中でもとりわけ世間の関心を惹きつけていたのは、ブラックヘアと呼ばれる連続殺人事件だった。被害者は全員が若いアジア人男性で眼鏡をかけており、生前複数回に渡って性的暴行を受けた形跡がある、と検死報告書にあったのを覚えている。

黒髪。

眼鏡。

複数回に渡る性的暴行。

「また遊んでやるからな」

「最後の被害者であるハンク・ナカノの体内から、犯人のものらしき体液が検出されましたからね……」

「検出の部位は？」

「肛門と口腔内ですね。検死報告書によると、肛門には裂傷を伴っていました」

「やはり同一人物によるレイプ確定ってことか」

裸で仰向けにされ、大きく足を広げられた死体の写真。

全裸のままうつ伏せで膝を立てさせられ、尻を突き出した死体の写真。

ぼんやりと開いた目でどんより淀む、生命のない瞳。

赤黒い穴が開き、火薬の残留物で汚れた胸の傷の写真。

犯罪科学研究所で目にした単語、しゃべったり聞いたりした話、ラテックスの手袋をした指先で触れたもののイメージが、一気に頭のスクリーンへめちやくちやくに映し出された気がした。

まとまりがなく、高熱の時に見る悪夢にも似た極色彩の映像の氾濫。

杉田がいる薄暗い室内に、そんなものが本当に見えた気がした。その濁流に飲み込まれる感覚に、理性をさらわれかけた。湧き上がる恐怖が喉にこみ上げ、胃までもが圧迫される。口から溢れそうになった絶叫と嘔吐感を飲み込むのに、全身全霊を傾けねばならなかった。

自分を犯した男が、あの犠牲者たちを作り出したのだ！

想像することだに恐ろしい、一つの結論。

悲鳴を上げるな。

下手に騒げば奴の気に障り、今すぐここで殺されかねない。

堪える。

堪える。

未来を悲しませないために。

何よりも、自分の命を守るために。

口を固く両手で塞ぎ息を止め、埃の舞う中にうずくまる。

冷え冷えとした寒気が包む中、杉田の全身はべとついた汗にまみれ、両の頬には涙の筋が浮かび上がっていた。

未来の自宅待機命令が撤回されたのは、11月27日の午後9時頃だった。連絡は戦闘チームの責任者であるマックス・レイヤードから直接携帯電話で、素っ気なく伝えられた。

「明日から捜査に復帰だ。詳しいことは直接話すから、NOTSには行かんでいい。出勤したら、私のオフィスまで来るように」

必要事項のみを平坦な調子で告げたマックスはすぐに電話を切り、それっきりだった。

無論それだけでは、すつきりと彼女の心が晴れたわけではない。容疑者リストからは外されたと言うことだけで、実質的な問題は何も解決していないからだ。

この一日は自宅で仕事をして何かケチがつきそうな気がしたため、仮想端末にログインもしていなかったが、とにかく明日からは何かしなければ気が済まない。

とは言え、ブラックヘア事件の捜査担当に戦闘チームは入っていないのだ。未来が捜査に加わることが許可されるとも思えないが、マックスに進言だけはするつもりでいた。

栄養さえ取ればいいと、クッキータイプの栄養補給食品に野菜ジュースだけの夕食を済ませた彼女は、床についても予想通り眠りを貪ることはできなかった。ベッドから起きて下らないジョークや

アダルト情報が満載された深夜番組を観たり、日本から持ってきたレシピの本をめくっていたりしたが、一向に情報は頭に入ってきた。なかった。

結局、彼女はほとんど眠らずにダークブルーのフォードに乗り込んで、インターステート95を翌朝6時には北上し始めてしていた。もう12月まで数日しかないため、ここヴァージニア北部では日に日に冬の色が濃くなってきている。乾いた寒風は灰色っぽく色あせた大地を鋭い音とともに吹き抜け、空を鈍色に染めることがある。雲は、雨雲でなく雪雲になる可能性の方が高くなってきていた。そしてまだ街全体が眠りから醒め始める今の時刻は薄暗く、生活の匂いがしてこない。

ラジオから聞こえてくる天気予報によると、気温は摂氏10度程度で寒くなるが、その分天気は良いとのことだった。早朝の州間道路に車は少なく、未来はスピードを上げてクワンティコに急いだ。

彼女がアカデミーの職員用駐車場に車を置いて時間外通用口から施設に入り、直接マックスのオフィスのドアをノックしたのは6時半のことである。マックスはもう中におり、仕事を始めていたようだった。昨日は帰宅しなかったのだろう。

「大分疲れているようだな」
オフィスに入ってきた未来を一目見るなり、デスクの向こう側に座っているマックスは低い声で感想を口にした。

彼も白いワイシャツののりが取れかけて、袖口が汚れている。昨日一日、杉田が失踪した件で対応に追われていたのだろう。しかしマックス本人はさしてくたびれている様子も見せず、いかつさに包まれた身体にはやはり、隙がない。

「……はい。身体を休めておこうと、努力はしたんですが」
未来の口調が言い訳がましく聞こえるのも仕方ないこととは言え、マックスに比べれば自分はまだまだだ、と思う。

肉体能力は彼を遙かに彼を凌駕しているのに、精神的なダメージが顔に出ているのを隠し通すこともできていないのだ。普段より時

間をかけてメイクしてきたのに、情けない。

彼女がオフィスの中ほどで足を止めると、マックスとはデスクを挟んで向かい合う格好となる。彼はチェックしていたらしい書類と飾り気はないがどっしりとしたつくりのボールペンを置くと、両手を組んで顔を上げた。

「ドクター・スギタのことについてだが」

「はい」

未来は緊張した肩から力を抜き、意識して背中を伸ばしておいた。「ジャクソンから聞いた通り、彼の捜索についてはブラックヘア事件捜査の一環として扱うことになる。何かあればお前にも連絡は行くだらうが、我々戦闘チームで直接は関わらない。お前はこれまでと同じように、ティアーズの捜査と訓練を中心に当たれ」

そこで彼は、敢えて表情を動かさないでいる未来の顔に視線を合わせる。

「ドクター・スギタはお前と同じく、連邦政府が日本から身柄を預かっている人物だ。死体が発見されようがされまいが、マスコミにこの失踪と捜査の件を知られるわけにはいかん。これもわかっていることだとは思いますが、関係者以外に情報が漏れないよう、細心の注意を払うように」

「警察にも、ですか？」

未来の疑問に、マックスは頷いた。

「捜査は我々FBIと、一部の信頼できる警察関係者のみが独自に行う。彼が連続殺人事件の被害者になったとあっては、国際問題に発展しかねない。安易に情報を開示して徒に犯人を刺激するような真似は、断じてできん」

未来と同じように表情を動かさないマックスの声は重い。

通常であれば速やかに失踪者の詳細を公開して、情報を幅広く募るべきなのだろう。だが、連続殺人事件被害者の可能性ありとされた場合はそうはいかない。

犯人は主にマスコミの情報を通して自分が世間をどれだけ騒がせ

ているかを知り、邪悪な空想をより凶悪に膨らませる。

更に悪いことに、マスコミというのは憶測で囁かれたことや誤った情報を誇張し、あたかもそれが真実であるかのように騒ぎたてる。今回の事件で言えば、犯人がアジア系の男性ばかり狙うのは歪んだ少年性愛を持っているからだとか、死体発見現場はいずれもウエストポイントから半径40マイル以内の場所だが、犯人はまたこの範囲で犯行に及ぶのではないか、といったことだ。

猟奇的な殺人を犯す者の一部は強い自己顕示欲を持つが、ブラックヘアの犯人もまたその傾向があると推測されている。彼がマスコミの情報をどう捉えて反応するか予測がつかない以上、迂闊なことを報道させるわけにはいかない。

しかし、いくら極秘捜査にするとしても、杉田の家族に連絡しないわけにはいかないはずである。日本にいる彼の家族のことが、未来には気がかりだった。

「日本には連絡が行ったんですか？」

「政府を通して、家族とAWPの一部関係者には伝えている。日本のマスコミは、この件についてはどこも報道していない」

一部AWP関係者とは、生沢とリユーのことだろう。

マックスの返答に未来は半分安心、半分不安という相反する感情を同時に味わうことになった。杉田の失踪を知って、家族はどれほど心配しているだろう。

「ドクターの姉と母親が、アメリカに発つ準備をしているという連絡も入っている。彼女たちは、ワシントンの本部に近いホテルに滞在してもらおう予定だ」

「滞在期間は？」

「2週間程度の予定だが、本人たちの都合次第で前後はあるだろう」「私がお会いする必要がありますか？」

「彼女たちが望めばな」

未来の肩がずんと重くなる。

一体、どの面を下げて杉田の家族に会えと言うのか。彼を産んだ

母親や血を分けた姉妹の苦しみは、未来の比ではないはずだ。今まで幾度も目にしてきた、被害者の肉親が悲嘆にくれる姿が、渡米前最後に会った彼女らと重なる。胸が冷たく重い塊に締めつけられ、未来は息苦しさを感じた。

「いつそ、機密保持のため面会するなと命令される方が気が楽だった。」

「……ドクターの家族になんて、私は会わせる顔がありませんよ」吐き出すような未来の言葉を耳にし、マックスは眉を僅かに動かした。

「お前は、自分のせいでドクターが失踪したとでも思っているのか？」

「私は彼と一緒に住んでたんです。私はずっと彼の側についていれば、こんなことには……」

「お前はドクターの保護者でも、ボディガードでもない。彼がお前の目の前で何者かに連れ去られたなら別だが、それで責任を感じるのはお門違いだ」

マックスが彼女を遮って静かに言ったのは、立場を思いやり、庇ったりするような内容ではない。単に事実としてそこにあることを示し、客観的に責任が追及されるものではないことを説明しているだけだ。

そうとはわかっていても、若い娘でもある未来の心でさざ波のように揺らぐ感情は、現実をそのまま受け入れようとはしなかった。瞬間的に目の前の相手が誰であるかを忘れ、苛立ちがつい口を突いて出ることとなる。

「しかし、私がドクターに対して日常の安全管理を徹底し切れていなかったことは事実です」

「びしゃりと言ったのける羽目となってしまった未来は、もう引っぱみをつけられなかった。」

「ですから、私をブラックヘアの担当に加えてください」

どんな形であっても一度言わねばならないと思っていたことでは

あつたが、マックスは未来が感情の勢いに乗せて口走った、という印象しか持たないだろう。同じことを願い出るにしても、もつとタイムリングを計るべきだったはずだ。

未来が無理な頼みを不用意に口にしたことに後悔するまで、ほんの一瞬だった。

「お前はそれで責任を取ろうと思っっているのか？」

「責任が取れるとは思っていません。彼を無事に保護するために、何かしたいだけです」

とりあえず内容を受け取ったマックスの声は、平坦なものだ。

怒鳴られなかっただけましと思えるが、ここまでくると下手な言い訳をするよりは率直に自分の考えを伝えたほうがいい、と未来は判断した。人質救出チームに長らく在籍していた彼の前では、下手な小細工を利かせた言い回しは却って逆効果だ。

無言で、マックスは正面から未来の大きな黒い瞳を見つめた。

深くゆっくりしたりズムの呼吸を保つような心がけた未来は、彼の視線から目を逸らさなかった。

10秒程度の沈黙が、10分ほどにも感じられた時である。

「正直なのはいいことだな」

一つ一つの単語を噛みしめたマックスは、憤った様子は見せていない。それでも相変わらず彼の態度からは、何を考えているのかが全く読めなかった。

もしかしたら、と未来の心が高揚しかける。

「だが、それは無理な相談だ。ドクターの家族に限りなく近いお前を、捜査チームに加えることはできない」

「しかし……!!」

それを挫かれた未来はつい荒っぽく言い返しかけたが、マックスは平静なままだ。方や時化に揺られる小船、方や凧で動かぬ水面に佇む停泊船の如き趣である。

「仮に、ドクターが死体で発見されたとする。その後犯人を前にして、お前は自分を完璧に抑えられる自信があるのか」

どつしりと構えたマックスが発する言葉はやや和らいであり、説得の色を含み始めてもいるようだ。これ以上ないほど具体的な例え話に、未来は口をつぐまざるを得なかった。

もし杉田を助けることができなかつたら。

もし彼が死んでいたら。

そんな結果は恐ろしくて、考えたことすらないというのが正直なところだ。

最愛の人を奪った犯人を目の前にし、むごたらしく殺してやりたいと思うほど憎んだとしても、自分は捜査官なのだ。法の下に権利を保証して、裁きの場で断罪するのが義務である。理性で感情を圧倒し、如何なるときもプロであることを忘れてはならないのだ。

ただ同時に、捜査官も人間だ。

恐怖心から想像もできない状況に陥った場合、自分の行動について断言することは極めて難しかった。未熟だと言ってしまえばそれまでだが、自分の精神を奈落の底に突き落とされてまで法を遵守せねばならないのかと、きつと自問してしまつたろう。

自分たちはそんな理不尽さに歯を食いしばらねばならないことを承知の上で、この仕事を選んでいるはずなのだ。

「捜査に加わるということは、事件に対して責任を担うということでもある。ドクターの死亡が確認された場合でも、まともな捜査活動を続けることができるか？」

続いたマックスの問いは、更に未来の胸を突いてくる。

杉田が死んでいる場合でも、犯人を逮捕し裁判を終えるまで、捜査官たちは動く。

犯罪被害者の家族や恋人、親友たちは、事件のショックから精神に深い傷を負い、日常生活をまともに送れなくなる場合もあるほどだ。酷い事件の詳細に積極的に関わらねばならない捜査官のストレスは、ただでさえ肉体にも影響を及ぼすくらい深刻なものになる。

それが近親者であった場合のダメージは、それこそ計り知れない。捜査官の関係者が巻き込まれた事件に本人が関われない理由も、

そこにあるのだ。

「もとより、近し過ぎる関係の者を捜査チームには加えられない。わかったら、もう自分のオフィスに戻れ。ジャクソンも待つてるだろう」

そしてその結論は、未来にも前もってわかっているはずだった。

が、彼女はマックスの人となりはまだよく知らないし、どれぐらい自分を買ってくれているかも図りかねている。その分だけ特例として認めてくれるかも知れないと僅かな希望も持っていただけに、失望は大きかった。

戦力外通告を受けて2軍落ちしたメジャーリーグの選手の気持だが、今の自分ならわかる気がする。ある程度は考えうる結果ではあっても、それぐらいのダメージは軽く受けていた。

「了解しました」

何とか納得して自分の口から出たことも、まるで他人の意識が口を借りて勝手に発した心地がする。マックスに一礼してから背を向けてオフィスを退出し、自分のデスクまで戻ってきてはまだ、身体が操られているようで実感がなかった。

そして次に気がついた時、未来はアカデミーの演習場を見渡せるテラスにいた。

テラスとは言っても、オフィスがある建物の最上階を貫く廊下の外側に当たるベランダ部分だ。椅子も何も無いが、風が気持ちよく見晴らしもいいため、研修生時代にも気分が落ち込んだりしたときによく来た場所だった。

2041年も、あと一か月少々で終わりを迎える。アメリカ全土がクリスマスで浮かれ始める頃だが、果たして自分は明るい気持ちでクリスマスを祝えるのだろうか？

最後にここに来たのはアカデミー終了間際の暑い頃だったが、今は笛の音を思わせる鋭さで吹きつける風が、頬を冷たく刺してくる。思わず身震いしてデニムのポケットに手を突っ込むと、硬くて冷たい金属が指先に触れた。

未来は鈍く光るステンレス製の小さな板がついたボールチェアを引つ張り出し、目の前に翳した。お守り代わりにいつも持ち歩くのが習慣となっている、P2の認識票だ。

P2はAWPのコードネームで、本名を岩元徹三という。AWPのプロトタイプ3号、つまりP3である未来よりも前に作られたサイボーグの男性だった。元軍人だった彼は破棄が決定された直後に開発者に連れられて逃亡し、未来の破壊を企てた。

しかし未来に敗れ、結果として彼女を庇い命を落としたのである。未来にとって最強で最悪の敵だったP2だが、忘れることのでき

ない人物として、その姿は今も彼女の中に生き続けている。彼は皮肉にも純粹な自分の意思で生きることの価値に気づいた途端、冥途へと誘われた。

そのP2が今も生きていて仲間になっていたとしたら、この状況をどう思うだろう？

「命令には逆らうな」

とても冷たく言い放つだろうか。いや、彼は未来との戦いの最中、彼を作った人間に決然と逆らって見せたのだ。

「自分が後悔しないようにやれ」

とても言いそうな気がする。

鼻先で強風に揺られる認識票の動きを目で追いながら、未来は咳いた。

「もつけない人間のことをあてにするなんて、私もヤキが回ったかな」

自暴自棄な、自身を嘲る調子だった。

結局誰かの支えなしでは自分が何もできないことを、今更ながらに痛感させられる。情けなくて笑いたくなるぐらいだった。

「よ！暗い変な笑い声がすると思ったら、ミキだったのか。探したぜ」

そこへいきなり場違いに陽気な男の声が割り込んできて、背中に誰かがどすんと体当たりしてきた。上半身が勢いに負けてつんのめり、認識票のチェーンが宙に躍る。

実際は大きな手のひらで背中を強く叩かれただけなのだが、小柄な未来はテラスの柵の下に危うく身体を持って行かれるところだった。うっかり手から離しそうになってしまったP2の認識票を慌てて掴み直し、後ろを振り返る。

「ちよつと、いきなり何すんの！びっくりさせないでよ！」

大切な遺品が紛失寸前になったことにかつとなつた未来の剣幕に、同じ男の声が慌てたようだった。

「わ、悪かったよ。謝るから、そんなに怒るなって」

元氣なくうなだれていた彼女に喝を入れようとしたらしいジャクソンは、怒りをストレートに顔に出し、拳を振り上げかねない小柄な同僚に全力で謝罪した。

「あれ？そのドッグ・タグ、アメリカ軍のじゃないみたいだな。仲間の形見か？」

と、自らを庇おう上げた手の隙間から見えた未来の認識票が、彼の注意を引いたらしい。はたと気づいた未来は、銀色のプレートを頭上に翳す格好になっていた腕を下ろした。

「違うよ」

「じゃあ、もしかして恋人か？」

「そんなわけないでしょ」

拗ねるような口調から不機嫌なそれ変えて、未来はジャクソンを横目で睨みつけた。

些細な茶目つ気からやったことに対し、いちいち反応が過剰な未来に抗議しようとしているのか、今度はジャクソンが拗ねて見せる。「なら、何だよ」

「……私が倒した敵。いや、ライバルかな」

認識票のチエーンを手繰り寄せ、未来は右手の中に傷だらけのプレートを収めた。故人の品を見つめる黒い瞳は寂しげで、見る者を切ない、落ち着かない気分させる。

未来をからかって元気にさせようというジャクソンの目論見は、相手のテンションが一向に上がってこないことで早々に取りやめられたらしい。

「で？そいつの声は聞こえたのか？」

気持ちの切り替えが早いジャクソンは、言うことを切り替えるのも早い。意外そうに、未来は隣に並んだジャクソンの顔を見上げた。「そんなセンチなこと言うの、初めて聞いたよ」

「いくら俺でも、たまには感傷に浸ることだってあるんだよ。それよりお前、そいつは何て言ってると思うんだ？」

同僚の黒人は、アカデミーの敷地に広がっている常緑樹が生い茂

った森の端を見つめている。未来も彼と同じ方角を視界に入れ、何気なく耳を澄ました。静寂の中からはつきりと、自動小銃の発砲音や低い声の短い会話が聞こえてくる。本来ならば未来も参加している筈の、NOTS訓練だろう。

マックスから未来の処遇について話を聞いたかどうかは知らないが、ジャクソンは彼女が杉田の捜索のために動きたいと願っていることを察しているのだ。

しかし、だからと言って何になると言うのだろうか。

彼もまた捜査官だ。やりたいこととやらねばならないことが別なのは、未来以上に知っているはずだ。

「さあ。本人はもういないんだから、聞くわけにいかないんだし」
小さく息をつき、未来は認識票をポケットにしまった。

「でも、お前の心にはまだ生きてるんだろ」

その仕草を見守るジャクソンが続けたことは、やはりセンチだが、未来も茶化す気になれないのはジャクソンと一緒にだった。

「多分、お前がやりたいようにやってみろって言うてるかもね」

「じゃあ、決まりだな。そうしてみろよ」

「え？」

未来の目が丸く見開かれ、驚きの色を浮かべた顔がジャクソンに向けられる。

まさか、堂々と命令に背けとでも言うのか。

ジャクソンはただ、白い歯を見せて笑っていた。いつものようにいたずらっ子を思わせる邪心のなさが見て取れる笑顔だ。

「そいつが言ったのは、今ミキが一番言っただけで欲しいと願ってることだ。誰かに聞くまでもなく、お前の取るべき道はもう決まってるんだよ」

「そんなこと……私、ブラックヘアの担当じゃないんだよ。どうやって捜査しろって言うの？」

「やっぱりそうなんだな。本音が出たか」

戸惑いを隠し切れないのと、ジャクソンが言ったことをにわか

信じがたい気持ちはない混ぜにした未来は、落ち着かなげにテラスの床へ視線を彷徨わせている。

「いいことを教えてやるよ。確かにお前は担当じゃないが、担当外の事件の捜査に関する罰則は、CVCじゃどこにも規定されてないんだ。隊長は、お前が動くのを止めさせようとしてるわけじゃない。ただ、大っぴらに背中を押すことができないだけってことだ」

ジャクソンの言葉に、未来ははっとした。

確かにマックスからは「通常の捜査に戻れ」と命令された。戦闘チームではブラックヘアの調査に直接関与しない、未来を担当にしないと言われただけである。捜査活動をするなどは一言も聞いていないのだ。

ジャクソンは再び顔を正面に向け、森の木々と夜が明けて間もない空の境目を見つめている。彼の顔からは先までの少年っぽい笑顔が引っ込み、代わりに鬨りがある男が持つ厚みがうかがえるようだ。「ここから先は俺の独り言だ。黙って聞いてるよ」

未来の方を向かない彼は、彼女が頷いたことを気配で察してから口を開いた。

「俺には、5つ年上の姉貴がいた。俺とは違って頭が良くて、レンセラー工科大学の工学部に奨学金で通ってた。理屈っぽくて、口喧嘩じゃ俺が勝てたことはなかったんだが、いつも俺が落第しないように心配してくれてた。そんじょそこの家庭教師に勉強を習うよりも、よっぽど教え方が上手かった」

ジャクソンは息をつくくと、テラスの手すりに肘をつき体重を乗せた。彼の視線が、地平線から早い速度で動いている雲へと移る。

「俺がハイスクールの学生だった時だ。姉貴は、地元の友達のパーティーパーティーに行くから帰りは遅くなるって、8月の暑い土曜日の昼に家を出て行ったんだ。それが、生きてる姉貴を見た最後になった」

未来が僅かに眉を動かしたが、口を挟むことはしない。

「姉貴は、家からも友達の家からもかなり離れた森の中で、裸にさ

れて死んでたんだ」

僅かに鼻をすすりつつも、ジャクソンは感情を完全に抑制していた。

しかし、その黒い瞳には決して癒えない悲しみと苦痛とが宿り、今なお彼を苦しめる記憶を心の奥にしまいこんでいたことがわかる。未来が促さずとも、黒人の青年は淡々と語り続けていった。

「でも警察は姉貴が殺されたのを、薬物セックス絡みの事件として片付けようとしやがった。その当時は似たような事件が周辺で頻繁にあっただし、姉貴の死体からコカインが検出されたからってな。親父やお袋、俺だって、姉貴がドラッグなんかやってたって信じなかった。姉貴の部屋からは、その痕跡は一切発見されなかったんだ。なのに」

言葉を切る直前、ジャクソンの声がほんの僅かに揺らいだ。

彼の話は理不尽極まりないが、実はアメリカでそう珍しい話ではない。

アメリカでは担当の警官が白人で被害者が黒人だった場合、それが例え殺人事件であっても、おざなりな捜査しかしないことが多々あるのだ。奴隷解放宣言から180年程度経つと言うのに人種差別は完全になくなっておらず、未だまかり通ることが許されている、忌まわしき社会的暴力の最たるものという認識なのである。

ジャクソンは一旦息を深くついた後に空を仰いでから、もう一度視線をまっすぐに戻した。

「その後、姉貴は連続レイプ殺人事件の被害者だっただけじゃなかった。姉貴の遺体の残留物と犯人のDNAが一致したし、ヤクも無理やりやらされた可能性が極めて高いとされたんだ。でも、俺の姉貴は死んでからもなお傷つけられた。俺たち家族は、それでどんなに苦しんだかわからねえ」

未来はとっさに何も言うことができなかった。

何と言うことなのだろう。

いつも陽気なジャクソンも、愛する家族を奪われた過去を抱えて

いたのだ。

しかも彼の姉はむごたらしく殺された上に売女として扱われ、警察からも半ば見捨てられたのだ。社会的に二回殺されたと言ってもいい。

家族であるジャクソンの苦しみと悲しみ、そして憤りは、察するに余りある。

若くて将来もあつた彼の姉は、どれだけ無念だったことだろう。彼女を愛した人たちは、まともに対応しようとしなかった警察をどんなに恨んだだろう。

未来は胸に圧迫感を覚えて呼吸が苦しくなったが、ジャクソンの顔から視線を逸らすことはできなかった。

彼の横顔は静かなる強さを湛えている。強靱な精神を宿して前を見据える瞳には、自分の守るべきものを悟り、戦う者が内に秘めている覚悟が垣間見える気がした。

「だから、陸軍からFBIに来るときに思ったんだ。被害者が誰であろうと、無念は絶対に晴らしてやるべきだと。俺の目に見える範囲の事件では、同じような人間を二度と出さないようにしようってな」

そして過去を語り終えたとき、ジャクソンには普段の明るさが戻ってきていた。

力んでいた両肩から力を抜いて、ゆっくりと未来の方を向く。

まだ言つべき言葉を見つけられないでいる彼女に、彼は暖かな視線と手のひらを送った。

「だから、ミキ。お前にできることをまずやってみるよ。俺もあんまり目立った動きはできないけど、何とか応援するから」

大きな手が置かれた肩に、優しい温もりが感じられる。

ジャクソンは何があつても味方でいてくれようとする、信頼すべき仲間だ。この瞬間に心からそう思えた未来は、ここ数日間是完全に忘れ去っていた安心感が戻ってきたことを感じた。

心底から安堵する、というのはこういう気持ちなのだろう。

未来はせり上がってくる涙を堪え、笑顔を作って頷いた。

安息なき夜 - 5 - (後書き)

こんばんわ。

作者の日吉舞です。

今回は話の流れ上、少し短めの掲載とさせて頂きました。
以降もこういった感じで一回の掲載分量にばらつきが生じるかと思いますが、温かく見守って頂ければ嬉しいです。

これからも、よろしくお願い致します。

自分はこのCVC戦闘チームで、本当にいい仲間恵まれている。そう思ったからには、未来はいつまでも落ち込んではいないわけにはいかなかった。愛すべき仲間たちは皆、行方不明となった杉田のことが心配でならないのは同じなのだ。

先程ジャズのクリスマススライブチケットを返すためにオフィスを訪れた際、優しく抱きしめてくれたエマ。

廊下で顔を合わせたとき、やつれ気味の印象がある未来の労わってくれ、落ち着くまで個人武器のメンテナンスまで引き受けると申し出てくれたトリス。

敢えて事件のことは何も言わなかったが、必要があれば緊急出勤をいつでも受けると呟いたバーニイ。

パートナーであるジャクソンや責任者のマックスは言わずもがなである。

チーム全員のことを考えて、自分は動くべきだ。

自分のオフィスに戻ってデスクに腰を落ち着けた未来はきつく腕を組み、前方に位置するドアを睨みながら考えを巡らせた。

杉田はブラックヘア被害者の可能性ありとして捜索されているが、あくまで可能性であってそれに固執するべきではない。これまでの事件の全貌を頭に入れておく程度にして、まずは通常の行方不明者と同じように捜査を進めていくべきだろう。

未来はデスクに据えてあるパソコンの電源を投入すると、個人仮想端末にログインしてブラウザを起動し、CVCのポータルサイトにログインした。ここを通せばCVCが担当している事件の情報は全て閲覧でき、最新情報も担当の捜査官により随時書き込まれていく仕組みとなっている。

検索用のテキストボックスから事件のコードネームでデータベースをスキヤニングすると、「各種報告書」「被害者情報」「容疑者

情報」「証拠物品一覧」「遺体発見現場画像」などの項目に分かれた詳細な情報が一覧表形式で表示された。

とりあえずは検死報告書と被害者の情報について閲覧し、頭に入れていくことに決めた。

ブラックヘア事件第一の被害者はスコット・ヤン。今から2年前の2039年4月中旬に死体が発見された、当時21歳の中国系アメリカ人である。職業は大学生で、遺体発見場所はハンプトンのチャイナレストランの駐車場にあるダンプスターの裏とされている。

死因は至近距離から胸を撃たれたことによる失血死で、薬莖は回収されていなかった。死体は全裸で仰向けに寝かされた状態で発見されており、足を大きく広げるといふ屈辱的な体勢を取らされていた。犯人の精液は口腔部と肛門から検出されており、複数回に渡って性的暴行を受けた形跡があったが、不可解なのはわざわざ眼鏡をきちんとかけさせられているという点である。

続く第二の被害者は日系人で17歳の学生ケビン・ヤマダだった。2039年11月下旬に死体が発見されている。遺体発見場所はコロニアルハイツのごみ捨て場だ。

彼はメカニクスビル・ハイスクールの生徒であったが、素行は極めて真面目で女子生徒にも人気があった。しかし胸を撃たれ、全裸に眼鏡をかけた彼の遺体からも精液が検出され、尻を突き出すポーズを取らされていたことが、彼と親しい生徒たちにも大きなショックを与えた。

第三の被害者であるフィリップ・チャオは、翌年の2040年8月下旬に死体が発見されている。彼は25歳の中国系で、リッチモンドにある雑貨屋に勤めていた。遺体発見場所はホープウエルの路地裏で、やはり胸部に弾丸を受けて全裸に眼鏡のみを着用、尻を突き出すポーズを取らされている。フィリップについては勤務中に何度かスピード違反で罰金刑に処されているところから、あまり勤務態度が良くなかったのかも知れない。

第四の被害者、ブライアン・リーは今年、2041年4月中旬に

グロスターのごみ捨て場で死体が発見された。彼は中国系で30歳のエンジニアだったが、遺体からは精液と共にアルコールとドラッグが検出されているため、交友関係について詳細な調査が現在も進行中となっている。また、この時から犯人による遺体への暴力もエスカレートする傾向が出ていて、撃たれた上に眼鏡をつけてポーズを取らされているのは今までと同じだが、肛門にデッキブラシの柄が突き刺されていたとある。

そして最後の被害者であるハンク・ナカノは3ヶ月ほど前の2041年8月上旬、ヒースズビルのサンドイツチエーン店駐車場で死体が発見されていた。彼は24歳の日系人で文具メーカーに勤めるごく普通のビジネスマンだったが、死の様態は他の被害者と同様に無残なものであった。胸を撃ち抜かれて絶命し、全裸に眼鏡をつけ仰向けに寝かされた上、肛門に所持品と思しきボールペンが何本も突き刺された状態になっていたことが、報告書に記されている。

未来が一気にこれらの情報に目を通したところでは、各被害者の共通事項はアジア系の外見で、22口径の銃弾で胸を撃たれていること、失血死した後に屈辱的なポーズをさせられ、眼鏡をかけさせられているということぐらいだ。全ての遺体から弾丸は回収されており、線条痕が酷似している点から、全て同一の銃から発射されたものと断定されている。

被害者の年齢は17歳から30歳の間ではらつきがあるため、少年愛好者であるとは一概に言えそうもない。

そして、遺体発見場所は全てヴァージニア州内のウェストポイントを中心とした半径40マイル以内だが、被害者の住居はこの範囲から外れているものもある。それにこの被害者たちは職業もまちまちなため、互いに面識があるとも到底思えなかった。

杉田がブラックヘアの被害者の疑いがあるとされていることの判断基準も、「眼鏡をかけたアジア人男性」ということだけだ。果たして本当にこれが正しいのかどうか、首を傾げたくなってくる。何せ、アメリカ全体での失踪者は年間80万人にも達しているのだ。

しかしいくら前日に喧嘩をしたと言っても、生真面目を絵に描いたような性格の杉田が仕事を投げ出し、家出をするつもりで外出したとはどうしても思えない。もしそうならきちんと準備を整えた上で、未来に残す書置きも内容がもっと違ったものになっていただろう。

問題は、どの時点で彼が行方不明になったかだ。

とりあえず未来が最初にできることと言えば、その日の足取りを辿ることぐらいだろう。既に他の担当者がやったことではあるだろうが、彼の癖をよく知っている者が見れば、意外なことに気づくかも知れない。

ジャクソンに予定だけ知らせてから動くこと、デスクの充電器に差し込んであった業務用携帯電話に手を伸ばしかけたときである。その隣にある内線電話が鳴った。2コール目が鳴る前に、受話器を素早く取る。

「CVC戦闘チームのミキ・ハザマですが」
「クラークだ」

ぶつきらばうに名乗ったウォーリー・クラークは、特殊捜査チームの責任者である。

どくん、と未来の心臓が高鳴った。

『今日の午前中、予定は空いてるか？』

「うん。特にまだ決まってないけど」

これまでに、ウォーリーが戦闘チームの捜査官に直接連絡を取ってくることは一度もなかった。戦闘や集団での銃撃戦が予想される場合は別だが、ウォーリーの落ち着いた口調からはそのどちらでもないことが窺える。

嫌な予感に、未来の大きくなった鼓動は乱れた調子を刻み始めていた。

『ドクター・スギタの乗っていた車のことだが。シボレーのオプトラワゴン、色は黒で間違いないか？』

「そう。中古車だから、全体的にちょっとくたびれた感じで。特徴

とナンバーは、ドキュメントにして出したと思うけど」

杉田の車のことを尋ねてくるウォーリーの声は、まるで違う世界から響いてくるように頭に入ってこない。それでも何とか内容を理解して返した自分の声はきつと、心の不安定さがそのまま出たようなものだろう。次の彼の言葉を聞きたい気持ちと、電話を叩き切りたい衝動が一瞬、未来の中でぶつかった。

『リッチモンド・タバハノック・ハイウェイ沿いにある雑貨屋の駐車場で、乗り捨てられた同型の車が発見されたんだ。つい30分ほど前に、店員から駐車しつ放しの車があると通報されたらしい。ナンバーは一致してるが、現物を確認してもらおうと思ってる』

ウォーリーの言葉は淡々としたものだったが、杉田の死体が発見されたという最悪な結果を伝えるものではなかった。力が入って上がってしまった肩を落とし、未来がメモとボールペンをつまみ上げる。

「住所はどこ？」

『マンキン、リッチモンド・タバハノック・ハイウェイ2159だ。州警察が見張って、現場の保存を先にやってる。俺も今から現場に向かうところだが、一緒に乗っていくか？』

「ううん、私も午後には自分の捜査があるから。自分の車で行くよ。また後で現場で会おう」

くぐもって聞こえるウォーリーの声にきびきびとした調子で答え、未来は受話器を置いた。メモを取ったのは、ほとんど条件反射のよくなものだ。普段の仕事で取るのと同じ、少し癖のある字体で書かれたメモを手早くたたんでデニムのポケットに押し込む。

未来はポータルサイトの予定表に手早く予定を打ち込んでからパソコンを落とし、椅子を蹴るように立ち上がってからコートを取り上げた。

杉田のものと思しき車が見つかった住所は、キングウィリアム郡である。FBIでは本来なら以前未来が勤めていた部署、フレデリックスバーグ駐在事務所の管轄だ。

杉田の失踪について中心となつて捜査を進めていくのはあくまでCVCだが、警察に最低限の情報しか提供しないこともあり、地方局との連携は必須事項である。

しかし、誰がキングウィリアム郡を担当していたかまでは流石に未来も覚えていない。以前の勤務地の捜査官と現場で顔を合わせるのには気まずかったが、自分でも動くとした以上四の五の言つてはいられなかった。現場に誰がいても被害者の家族としてではなく、捜査官として振舞うべきなのだ。

一度腹を決めれば、身体の中を通る空気も揺るぎがないものに変えられる気がする。

捜査車両である黒のプリウスで現場に乗りつけるまでの3時間という時間は、彼女の気分を落ち着かせるだけの余裕を与えるのに十分だったと言えよう。11時を回る頃、未来はインターステート95を経てキング・ウィリアム・ロードに入り、リッチモンド・タバハノック・ハイウェイを走っていた。

問題の雑貨屋は住宅も商業施設もまばらにしか見えない郊外にぽつんと佇み、ホットドッグやコーヒー、雑誌などを売っている、典型的なドライバー相手の小ぢんまりとした店だった。

隣には煉瓦と化粧漆喰づくりの郵便局があるが、駐車場自体は雑貨屋と共有しているらしい。10台分のスペースも備えていない小さな駐車場は、本来なら駐車場所とされていないところまでパトカーと捜査用車両で埋まっていた。

遅れて来た形となつた未来は郵便局を通り越した道の脇に何とか車を止め、傷んだ埃っぽいアスファルトの駐車場に降り立った。FBI指定の青いブルゾンを着用した捜査員や制服の警察官が車の間でせわしなく歩き回り、その奥では犯罪現場であることを示す黄色いテープが風に揺れているのが見える。

「お嬢ちゃん、近所の子かい？ 済まないけど、今日ここは閉鎖されてるんだよ」

コートを羽織りながら雑貨屋の駐車場を目指す途中、縦も横も幅

の広い警官が人の良さそうな笑顔を浮かべ、彼女の進路に割って入ってきた。顔は筋肉だけで笑っているのが見てわかるほどで、何が何でもこの先には行かせないとその目が語っている。

「連邦特別捜査官のミキ・ハザマです」

20センチほどは上にある警官のくすんだグレーの瞳を見上げつつ、未来はコートの内ポケットから身分証を取り出して名乗った。警官は言おうとしていた言葉を飲み込み、未来の顔と身分証の写真を交互に見比べる。彼はたっぷり5秒ほどかかってから、ようやくこの子どものような女性が同僚に近い人間であることを認識したらしかった。

未来は黒っぽいデニムに真新しいベージュのコート、赤いタータンチェックのマフラーとスニーカーといういでたちである。近所の中学生が親に頼まれてお使いに来た、と思われても仕方がないだろう。

警官は未来の立場を把握してからも、か細い全身を穴があくほど無遠慮に眺めた。

「あんだ、この事件の担当かい？」

「そうとも言えますけど、おまけみたいなもんですよ」

「なら、あそこの連中に言ってくれ。こっちにいい加減な情報しか寄越さねえんなら、威張り腐った顔するなっつてな」

中年の警官は未来についてくるよう手を振ると、駐車場の奥へと顎をしゃくる。大股で歩く彼の後に未来が追いついたのを確認し、黄色いテープの端を持ち上げて中へと通してくれた。

未来は大勢の男たちや車の間を縫って、でこぼこしたアスファルトの駐車場を歩いていく。雑貨屋の前に数台固まって停まっている車の中に、見慣れた黒いワゴン車が見えた。

「ずきん、と彼女の胸は痛みを訴えた。」

やや歩く速度を落として車に近づいていくと、運転席のドアの側にウオーリーが立っていた。彼は制服警官の一人と、もう一人の捜査官と思しき白人男性と何事かを話している。

「来たか、ミキ。早かったな」

ウォーリーが気づいて、未来の方を振り返る。

「あれ……驚いたな。被害者の家族って、ミキのことだったのか？」
不躰な言葉と半ばからかうような調子を混ぜた言いように、未来の足が止まりかける。

ウォーリーと話していた白人男性はフレデリックスバーグ駐在事務所の捜査官、ジェイコブ・ランチェスターだった。

「うわ、マジ最悪なんだけど」

駐在事務所を離れる前日に聞いた、彼の女性と有色人種への差別感情が込められた嫌味が耳に蘇る。思わず顔を背けて悪態を日本語のスラングに乗せた未来は、瞬間的に嫌悪感を露にしていた。

この時ジェイコブが日本語を全く理解しなかったのは、幸運だったと言えよう。

「この車なんだが、昨日の朝にこの店の店員が出勤してきた時には既に停まってたんだそうだ。今朝になっても誰も戻ってくる様子がないから、不審に思っ警察に通報した」

未来の反応は気に留めず、シボレーの側まで来た未来へウォーリーが状況を説明し始めた。

「この車両は、州警察にもナンバーが送られていたからね。すぐに警官が駆けつけたけれど、僕らが来るまでは殆ど触っていないそうだ」

ジェイコブはその場から動かず、親指を立てて運転席の方を指して見せる。

「キーは挿しっ放しになってるんだ。こんなところに置いたままでよく盗まれなかったもんだよ」

彼は未来が運転席に近寄ると、場所を譲ると言うようりはあからさまに彼女を避けるように身を引きつつ続けた。

「警察連中はこの駐車場付近を封鎖すると、近くにドクター・スギタがいなかどうか搜索を開始してるよ。今はそれ以上のことはできないからね」

「お前には、なるべく誰も手を触れてない状態の車を見てもらおう
と思っただけ」

ジェイコブがどいた場所にウォーリーが立ち、念のため未来に白
い布製の手袋を渡す。彼女は頷いて手袋をつけ、普段は助手席から
眺めてばかりいた運転席を左側の窓から覗いた。

薄いグレーを基調とした革張りの内装はやや汚れた感じがしてい
るが、フロントガラスに僅かについている傷の形、ダッシュボード
に浮かんだ白っぽいファンデーションの跡には、確かに見覚えがあ
る。

リアシートには見たところ何もなく、ひっかき回したり争ったり
したような形跡は見当たらない。

少し身体をずらし、違う角度から改めて運転席を覗く。

視界のやや下に入ってきた挿しっ放しのエンジンキーに、彼女の
注意が一気に向けられた。

エンジンキーからは、鮮やかなブルーに染められた本革の洒落た
キーホルダーが下がっている。それは紛れもなく、今年1月に杉田
の退院祝いとして未来が贈ったものだった。

ひゅっ、と鋭い音を立てて未来の息が吸い込まれた。

頭の中が真っ白になり、上半身が反射的にびくつと震える。

空気の流れが、自分の周りだけ止まってしまったように感じた。

「ドクター・スギタの車に間違いないんだな？」

未来の様子を見て取ったウォーリーが低い声でそっと尋ねると、
彼女は黙って頷いた。

見たところシートに血痕や銃痕、切り傷はないし、荒らされたよ
うな跡もない。

この車の持ち主である杉田は、ここから離れた時点で出血するよ
うな傷を負っていたわけではない。そんなことは気休めにしかなら
ないとわかっていながらも、未来は自分を鎮める材料としてその事
実にすぎるしかなかった。

「中も見たいんだけど、ドアは開けちゃいけないの？」

彼女は努めて平静に振る舞おうとするが、声が震えるのはどうしても抑えられない。

胃と心臓がしくしく痛み、手足に鉛の重りが括りつけられたかのように重い。鋭いはずの全身の感覚が全て鈍くなり、事務的な自分の言葉も他人が口を借りて言っているかのようだ。

心が現実を拒否していることを、未来は理性でぼんやりと感じ取った。

「この後警察犬が来ることになってるんだ。残念だが、それまでは俺たちもドアを開けるわけにはいかないんだよ」

「見たところ、ドクターの財布がないみたいだけど。運転するときには、いつもシフトレバーの横に置いてたのに」

まだ運転席から視線を動かさうとしない未来は、ウォーリーが隣に来て姿勢を変えようとしなない。

「彼、クレジットカード類は持ち歩いてたのか？」

「家を見てみると、持って出たかどうかわからないけど。使われた形跡があるかどうか、カード会社に連絡して調べてみるよ」

行方不明者の家族である未来が必死で取り乱すまいとしているのを、ウォーリーは長年の経験から感じ取っているのだろう。彼の口調は淡々としたものだが、感情が込められていない話しぶりは却ってありがたい。

「しかし、東洋人の男ばかりを狙うとは。物好きな殺人犯もいるもんだな」

そこへ、離れた場所から2人の様子を見ていたジェイコブの声が割り込んできた。

誰に向けたものでもない言葉だったが、彼の素振りには被害者のことを酒の肴にする下卑たごろつき警官と同じように、歪んだものに見える。

「まだそうと決まったわけじゃないでしょ」

身を起こした未来は、突如として沸いた激しい怒りが、遠くに行きかけていた心を現実に引き戻してきた気すらした。ゆっくりと視

線をジェイコブに向けるが、どう頑張ってみても睨みつけるような鋭さを含んでしまう。

「勿論さ。でも、あらゆる可能性を考えなきゃならないだろ？別の女と駆け落ちしたってことだって考えられるわけだしね」

「彼は、よく知りもしない相手についていくような人じゃないんだよ」

身体ごとジェイコブに向き直った未来は、彼の軽い言葉を自分への敵意として受け取っていた。プロに徹しなければならぬとはいえ、未来も人間だ。どうしても我慢ならないことはある。

「が、彼女が許せないのは、ジェイコブが自分をあげつらったからではない。彼の被害者をあからさまに貶め、蔑む態度だ。これは対象者が誰であろうと、現場に立つ捜査官として許せるものではない。到底ない。」

「へえ、ミキは随分と自分の魅力に自信があるみたいだね。自分よらずつと若くて色っぽい女が誘惑してきたとしても、男が見向きもしないと思ってるのか？結構なことだね」

その未来の反応をむしろ面白がるように、ジェイコブの舌は回る。何故こんな男が連邦捜査官なのか、未来はこの時ほど審査官を責め立てたいと思ったことはなかった。

「それに、捜査官の家族が犯罪に巻き込まれるなんてね。何より彼は検査官なんだろ？法執行機関に勤める人間としての自覚がなかったとしか言えないね。君の教育が足りなかったんじゃないのか？」

「個人情報撒き散らすようなお喋りは控えて欲しいんですけどね、ランチエスター捜査官」

しかし、彼と同じ目線で喧嘩をしては自分の器量もそこまで思われて当然だ。

未来は一つ息をつき、周りに警官たちがいるのをわからせることで、彼の茶化した言動が大きなりスクを孕んでいると思わせる戦法に切り替えた。

「ミキ、もうそれぐらいにしとけ」

そこで彼女の後ろから、ウォーリーの抑えた声とともに小さな肩へ手がかけられた。

「お前の役目は、この車がドクター・スギタのものかどうか確認するってことだけなんだ。後は俺たちで進める。お前は自分の捜査に戻れ」

そう、自分はこの事件の担当捜査官ではない。

あくまで被害者の家族として呼ばれただけなのだ。

警察犬が臭跡の追跡に使うためのものは予め渡してあるし、未来がもうここにいる必要はない。そして、ウォーリーは自分をこの現場から遠ざけたがっている。

ここでやるべきことは、もう何も無い。

そう悟った未来はぐっと押し黙ってウォーリーとジェイコブに礼すると、自分自身にそう言い聞かせながら踵を返した。

ジェイコブの瞳が優越感に浸ったものに、ウォーリーのそれは気遣わしげなものになっていたことが、視界の隅にちらりと捉えられる。他の捜査官や警官たちは、振り返らずまっすぐに自分の車へと向かっていく小さな背中を、しげしげと見つめていた。

足早に駐車場を横切った未来は口をきゅっと結び、険しい表情を隠そうともしていないが、その黒い瞳は決して逸つたものではなかった。

ここでやることがないのなら、次にやることはもう決まってる。

声に出さず呟いた彼女は、捜査車両の運転席に乗り込んでドアをロックし、個人用携帯電話をコートのポケットから引っ張り出していた。最近よく見る番号をディスプレイに呼び出して、本体を耳に当てる。

『もしもし？ヨーコなの？』

5回程のコール音の後、やや躊躇っているようなソフィーの声が聞こえてきた。

「うん。突然ごめんね。今、電話は大丈夫？」

『別に構わないわ。どうかしたの？』

未来が落ち込んでいる、浮かない気分であることを目一杯抑えた調子の声に込めるが、ソフィーの控え目な態度は変わらない。

溜息を一つ挟み、未来は思い詰めた様子で言った。

「今日、会えないかな。どうしても、ソフィーと会って聞きたいことがあるの。」

『ええ……いいわよ。あの、私はいんだけど……貴女はその、大変なことがあったんじゃないの？大丈夫？』

即答したソフィーは、元気が全くない未来のことを気にかけている様子だった。

大丈夫か、と確認してきたと言うことは、ソフィーが未来の精神が酷い状態にあるのを知っていることを示している。つまりその「大変なこと」が、世間一般には公表されていないはずの杉田の失踪であることを認識しており、未来がそのショックを受けていることもわかってきているのだ。

ソフィーは杉田の失踪直前、最後まで一緒にいた人物だ。当然、警察かFBIの捜査官が昨日のうちに聴取済みなのだ。

「平気だよ」

もう一度溜息をついて、未来は少し力強く言った。

この時点でソフィーが何も知らなかったり、はぐらかしたりするようであれば、別の口実を使って彼女と会うつもりでいた。

が、それはないようだ。不審な素振りを見せることなく会うのをすんなり了承したのだから、恐らく彼女が杉田と一緒にいるのを隠していることはありえないと見ていいだろう。

『じゃあ、また7デイズでいいかしら？』

「ううん。できれば、違う場所がいいんだけど。ソフィーの学校で、どこかいい場所はない？」

ソフィーの提案に、未来は別案を持ち出した。

この機会に、ソフィーの人となりをもう少し詳しく知っておきたかったこともある。

彼女が自分の素性を隠したり、嘘をついていないか。本当に信用

に足る人物であるのか。

ソフィーと接したが故に、ラルフという面倒な男のことを知る羽目にもなってしまったのだ。新しい友人が出来たのは喜ぶべきことだが、諸手を挙げて歓迎するべきことではない、というのは未来も十分過ぎるほどわかっているのだ。

正直、こんな状況なのにまだ冷静に考えられる頭を持っている自分が恨めしいと、本気で溜息をつきたくなる。FBI捜査官になつてからと言うものの、心の底から本気で悲しんだり、怒ったりすることができなくなっているような気がするのだ。

『本当は、学生以外入っちゃいけないんだけど……でもまあ、ヨークなら大丈夫かしら。メイндаイニングだったら』

ソフィーは二呼吸の間ほど考えを巡らせたらしかつたが、あからさまな拒否はない。未来は頷いて、プリウスのナビ画面に手を触れた。

「ヴァージニア・ユニオン大学だったよね？」

『ええ。キャンパスに着いたらまた、電話してもらえるかしら』

ソフィーに礼を言ってから終話ボタンを押し、未来は個人携帯電話をシフトレバーの横に置いた。ナビの画面に目的地の名称を打ち込みながら、今度は助手席のハンドバッグを探つて偽装された学生証を取り出す。

リッチモンド大学教養学部1年、ヨーク・イシダの姿がそこにある。

これをたまに眺めないと、「作られたもう一人の自分」の詳細を忘れそうになることが度々あった。

マンキンからリッチモンドまで直線距離だと20マイル程度のため、未来は午後3時前にヴァージニア・ユニオン大学に乗り入れる道路脇からソフィーに連絡することができた。

大学はリッチモンドのダウンタウンにあり、フデイズ・フィットネスからも1マイル半程度しか離れていない。日本の大学に比べて遥かに広大なキャンパスは、ショッピングモールや病院などの人が集まる施設に囲まれているが、東京と違って高層ビルが林立し見下ろされているわけではないので、街中にある割に閉塞感がなかった。一面を芝生に覆われた敷地には常緑樹が景観を保てるよう考慮して植えてあり、その間に相当な築年数を経た古典建築様式のものからモダンなものまで、様々な教室棟が点在している。ソフィーからは、メインダイニングがあるヘンダーソン・ホールで待つようことづかっていた。

未来はコートに羽織ってプリウスから降りると、早々と陽が傾いてきている初冬の空気の中を歩き出した。目的のホールに向かう途中、講義が行われる教室を目指している学生らしい男女の姿がコートやジャケットに身を包み、せかせかと歩いている姿が目に入ってくる。

ヴァージニア州は白人人口が多いとされているが、このキャンパス内に限っては黒人の学生が多いことに驚かされた。

それもそのはずで、ヴァージニア・ユニオン大学には黒人大学基金の本部があり、ここも歴史的黒人大学、つまりブラックカレッジとして有名なのだ。人種偏見を隠そうとしていないジェイコブが捜査でここに来ることがあつたら、色々な意味で見ものだろう。一度、教養の高い黒人たちの前で吊るし上げにでもしてみたいものだ。

ヘンダーソン・ホールはキャンパスのほぼ中央に位置しており、最寄の駐車場からは5分とかからない位置にあった。堂々たるゴシ

ツク建築の威厳を放つその姿は、薄闇の中にぼんやりと輪郭を浮かび上がらせている。冷え始めてきた空気に、ステンドグラスを通じた窓から暖かな光を投げかけているのが印象的だった。

メインダイニングのダイナータイムはまだ始まっておらず、フードカウンターにはシャッターが下りている。しかし、クリーム色のプラスチックでできた椅子とテーブルが所狭しと並ぶ席に陣取るのは自由だ。広いメインダイニングに広がるテーブルのあちこちでは、学生たちがレポートを広げたり、ノートパソコンのキーを叩いたり、友人と他愛のないお喋りをしたりと、思い思いに過ごしている。コート姿の未来も入口の自動ドアから近いところに腰を落ち着けると、その中にすつと溶け込めた。

「遅いな……」

愛用のダイバーズウォッチを確認した未来の唇から呟きが漏れた。先に連絡したとき、ソフィーは5分で来ると言っていたのだ。足音くらいここから確認できないだろうか、ほとんど習慣で耳の感度を少し上げた時である。

「……ればいいんだよ！」

聞き覚えがある乱暴な、激昂した男の声が未来の鼓膜を打った。

反射的に、彼女の細い身体がプラスチックの椅子から立ち上がる。

「やめて、みんな見てるわ。お願いだから、もう帰ってちょうだい」

メインダイニングの入口を振り返った未来の耳へ次に届いたのは、震えながらそう懇願しているソフィーの声だった。

「お前に拒む権利があると思ってるのか。黙って言う通りにしろ」

高圧的に続ける男の声の主は、ソフィーにつきまとい行為を繰り返しているラルフだ。言っている内容と口調からしても、かなり切迫した状況であることは間違いないさそうだ。

未来は手足に緊張感を漲らせると、出入口の自動ドアへ向かった。そのまま廊下を走り抜けて一步屋外へ出た彼女の頬を、きりりと冷えた空気が刺激してくる。更に耳の感度レベルを上げていくと、すぐ右手の方から複数の靴底が芝生を擦る音と激しい息遣いがある

のがわかった。

弾みをつけた未来の足が、音が上がっている建物の影の部分に走り込む。弱々しい陽光に囲まれた暗い空間で、ソフィーの両手に紙袋を押し付けているラルフの姿があるのがわかった。

「てめえ、何やってんだ！」

未来が子どもっぽさの残る外見に似合わない、ドスを効かせた低い声を放つと、素早くラルフが振り返った。

「ヨーコ！」

同時に、今にも泣きそうな顔のソフィーも声を上げる。よほど怖かったのか、ラルフに押し付けられていた紙袋の持ち手を手首に引っ掛けたまま、固まっていた。

ラルフは片手でソフィーの肩を掴み、もう片方の手で彼女の手首を掴んでいる。

「手を離しなよ。今すぐ離さないと、警察に通報するよ！」

低い声ではつきりと言い、未来はゆっくりと2人に近寄った。

突然現れた未来の姿に驚いているらしいラルフの動きを注意深く探りながら、金属センサーをオンにする。ジーンズにも汚れたジャケットにも、刃物や拳銃らしい形の金属反応はない。注意するべきは、彼が後ろに手を回したときだろう。

が、彼は意外にも舌打ちしただけであっさりソフィーを開放し、こちらに背を向けて走り出した。捨て台詞も何もなく、大きな身体が濃さを増していく夕闇の中へと消える。

以前と同じしつこさを予想して身構えていた未来にとっては、あまりにもあっけなかった。ソフィーに何かを渡して目的を達成したからなのだろうか？

「ヨーコ……」

ふらふらと近寄ってきたソフィーの足取りはおぼつかない。

色褪せたデニムに包まれた足は見てわかるほどがくがく震え、幼い子どものようにべそをかいている。酷く怯えているようで、とにかく早くどこかに座らせねばならないようだった。

未来は倒れかかるようにすがりついてきたソフィーの肩を抱き、しつかりと身体を支えてやる。

「ホールの中に行こう。もう大丈夫だから」

青い顔でまだ震えているソフィーを未来が優しく諭すと、横顔を覆う赤毛を揺らして彼女は何度も頷いた。そのまま二人で寄り添ってホールに入り、先に未来が座っていたテーブルにつく。上着を脱いで椅子に座ると、不安定な呼吸をしていたソフィーもようやく落ち着いたらよかった。

「殴られたりとかしなかった？」

「ええ、大丈夫よ」

きちんと話せるようではあるが、ソフィーの視線はおどおどと辺りを彷徨っている。無理もないだろう。

「あいつ、とうとう学校にまで押しかけてくるようになっただね」「いまいましてに、未来が吐き捨てる。

数日前にソフィーから相談を受けた時点より、明らかにラルフのストーキング行為はエスカレートしていた。このまま放っておけば、彼女の命が危険に晒されかねない。

未来はソフィーの肩に手を置くと、緊張を隠さない面持ちで警告した。

「一刻も早く警察に言った方がいいよ。まだ証拠が揃ってないかも知れないけど、何かあってからじゃ遅いんだから。せめて、一人暮らしを止めるとかしないと」

「でも……家族に心配かけたくないのよ」

しかし、ソフィーは相変わらず首を横に振るばかりである。この期に及んで、当の本人の意識は相変わらず低い気がした。

彼女がそこまで家族に知られることを拒否するのは何故なのだろう、と疑問に思わざるを得ない。それに、警察に保護を求めることに対する姿勢も、曖昧さが残っているような気がする。ここまで恐怖を味わわされているのに、まだ最悪の結果にはならないと思っているのだろうか。

しかし、家族との仲に問題を抱えた自分がもし彼女と同じ立場になったら、同じように対応するだろう。人それぞれ事情があるのだから、今はまだ踏み込むべきではないのかも知れない。

「この大学の寮に住んでる友達のところにいるとか、できないの？」
目についた不審な点には敢えて触れず、未来は別の提案を試みたが、ソフィーはそれにも頷こうとはしなかった。

「駄目よ。それじゃ、友達に迷惑がかかるかも知れないもの」

「そう言えば、寮生活してない学生の方が珍しいと思うんだけど。ソフィーはどうして寮に入らなかったの？」

また別のことを思いついた未来の声に、僅かな苛立ちの響きが混ざる。

「私、知らない人と一緒に生活するなんて耐えられない。そういうところは直さなきゃ、って思ってるんだけど……寮に入るならせめて個室でって言うのが譲れない条件で。でも、この大学では個室って少ないのよ。すぐいっぱいになっちゃって、それなら一人暮らしさせて欲しいって両親を説得したの」

ぼそぼそと小さな声で言い、ソフィーは薄く浮いた涙を拭って鼻をすすった。

それならば、何故それなりの防犯対策をきちんとなさないのか。

あらゆることに消極的で、結局は周囲の人々に頼り切って依存している人間というのはよくいる。ひよっとすると、ソフィーもそういうった者たちの仲間に入るのではないか。

本人は意識していないかもしれないが、ストーカー対策は全て未来に任せようとしているのではと、したくはない推測も拭い切れなくなってくる。

今までしてきたアドバイスが全て暖簾に腕押しの状態になっていたことを疑い始めた未来に、ふとソフィーも疑問を投げかけてきた。「けど確か、ヨーコもホストファミリーのところにいるのよね。留学生なのに、貴女も珍しいと思うけど」

「私は、日本のママがファミリーのみんなと友達同士だからね。殆

どタダみたいなお金で、居候させてもらってるの。うちはそんなにお金持ちじゃないから、ありがたく甘えさせてもらってるってわけ」
未来が用意してあった回答をそのまま述べると、ソフィーはそれだけで納得したようだ。

アメリカの大学では、寮住まいの学生が実に8割以上を占める。それだけに学外から通っている者同士が知り合いになるのは珍しいかも知れなかった。

「私のことを心配してくれるのは本当にありがたいし、嬉しいけど……ヨーコ、貴女も大変な目に遭ってるじゃないの」

話の矛先を自分から未来に変えたソフィーは、おずおずと顔を上げた。

「昨日、警察が私のアパートに来たのよ。マサトのことで話が聞きたいって。彼、私と別れたつきり、行方がわからなくなってるんですって？」

未来の大きな目を見つめてくるカラーコンタクトの人工的な緑の瞳が、心なしか熱を帯びた気がする。この様子にやや驚いた未来が頷き、次いでふっと視線を外した。

「……うん。誘拐かもしれないって。私も、マサト兄さんを探したいんだ」

「私に話したいことがあるって言ったのは、そのことなんですよ？」

ソフィーは問い詰めるような口調になっている。

先まで怯えて泣いていたのが強い調子で発言できるようになったのは、恐怖を忘れるために備わった人間の能力なのだろうか。違和感を覚えながらも、未来はもう一度頷いてソフィーに話を促すことにした。

「そう。兄さんと最後に会ったときの様子とか、聞いたときいたんだけど。なるべく詳しく話してもらってもいい？」

未来の方では杉田のことを「兄さん」と呼ぶことの他人行儀さと、ソフィーの顔が迫ってくるような圧力で、控え目な姿勢となった。

「そうね。マサトとは7デイズのロビーで、一昨日の11時に待ち合わせたの。ラルフのことで相談に乗ってもらいたかったことがあって……彼、ヨーコからもそのことは聞いてるからって、嫌な顔もせずに話をずつと聞いてくれてたわ。電話とかを録音するのにはどんなボイスレコーダーがいいのかとか、具体的にどういう対応をすればいいのかとか、そんなことを話してたの。男の方が機械とかに詳しいだろうって思ったから」

そこでソフィーは肉付きのいい顎に指先を当てながら、細かいことまでを思い出そうと宙を睨んだ。

「話をしてたのは、確か12時半くらいまでだったかしら。その後にかフェテリアと一緒にランチを食べて、家まで送ってもらったの」「ソフィーは、7デイズまで自分の車で来なかったの?」

昨日の聴取でウィリアムに指摘された点を、未来はさり気なく確認した。

「ええ。前の日に弟に私のアパートに来てもらって、実家まで送ってもらったから。帰りはまた弟にアパートまで車を出してくれるように頼んでただけど、急な用事が入っちゃって来られなくなったって、連絡があつたの。アパートには、友達から借りたノートを下うしても取りに行く必要があつて。困ってたなら、マサトが送るって言うってくれて」

まるで弟を便利な足として使っているような印象だが、アメリカでは家族に運転を頼むのはさして珍しいことではない。

未来が頷いたのを見て、ソフィーは先を続けた。

「あそのメインエントランスを出てすぐのところに、コンビニエンスストアがあるでしょう?私、そこでスナックと飲み物が買いたかったから、先に外に出たの。その後にマサトに拾ってもらったのよ」

「マサト兄さん、どこが変わったところはなかった?」

「何だか元気がないのは、すぐにわかったわ。ヨーコと喧嘩したって言うってたわよ。美味しいお菓子をお土産に買って帰りたいとも話

してたから、リッチモンドにオーガニック素材を使ったチーズケーキの専門店があるって教えてあげたの。すごく喜んでたみたいだったけど」

ソフィーが発した最後の言葉は、氷の鏝となって未来の胸を冷たく貫いた。

凍てつくほどの痛みが胸の奥に走り、そこから血が染み出し、いくよようにじわじわと広がっていく。

ソフィーを送る道すがら、杉田は未来のために買うケーキのことで頭がいっぱいになっていたのだろう。どんな味のものを買えば未来が喜ぶのか、仲直りのきっかけになる会話を作るのには可愛らしいデコレーションのものがいいとか、あれこれ考えていたに違いない。

未来は悲しみに口許を歪めることも、声を震わせることもせず、ソフィーへ静かに問いを投げ返したただけだった。

「ソフィーの家はどの辺りなの？」

「アイレットよ。何もない小さな街だけど、平和ないところなの。アイレットは、杉田の車の遺棄場所から6マイル程北上したところにある街だ。」

彼の車は、リッチモンド方面に向かうハイウェイの雑貨屋駐車場で発見されている。ソフィーを自宅まで送り届けた直後に犯人と接触したと見ていいだろう。

平静を装った未来の質問は続いた。

「車に乗ってるときに、変な車がつけてきたりとかしなかった？」

「さあ、私は気がつかなかったけど……」

「どこかに寄り道とかしたの？」

「いいえ。まっすぐ、私の家に向かったわ。着いたのは3時半くらいだったと思うの。近所で下ろしてもらったら、すぐにまたリッチモンドに向かって走ったように見えたわ」

これは、昨日も電話でソフィーが言っていたことを確認する形となった。

「どうして家の前まで行かなかったの？」

「それは……その、そういうことをすると怒る人がいるから。いつ私の家の前にいるかもわからないし……」

何気ない未来の質問に、ソフィーは口ごもった。

今まで調子づいていた唇が急に大人しくなり、そわそわと膝に置いたバッグの持ち手を指でいじり始めている。

「ラルフだね」

ソフィーが他の男と接触することを咎める。そんなことをするのは、彼女につきまといているラルフをおいて他にいない。未来の敵意を剥き出しにした口調に、ソフィーはびくつきながら頷いた。

忘れるところだったが、彼はソフィーに何かを無理やり渡していいではないか。中身を改める必要がある。

「その袋、何が入ってるの？」

未来がテーブルの脇にある紙製の小さな手提げを指すと、ソフィーが持ち手の部分を持ってテーブルの上に置いた。紙袋はショッピングモールのロゴが印刷されている、何の変哲もないものだ。

「わからないわ。まだ中を見てないの」

「私が見てもいい？」

ソフィーが無言で頷くと、未来はまず紙袋を両手で持ち上げて重さを確かめてから、慎重に中を覗いた。ラルフとソフィーがもみ合いの最中でやりとりしていたところを見ると、とりあえず危険物ではないはずだ。本当なら手袋をつけて取り出したいところだが、人目があるこの場所ではやはりはばかられる。

紙袋の開いた口から見えたのは、パステルイエローの地にピンクのロゴが筆記体で印刷された厚手の紙箱だった。つるつるした表面になるべく指紋をつけないよう、8インチ（約20センチ）程度ある箱の角に指先を当て、紙袋から引つ張り出す。

厚紙と透明プラスチックを組み合わせた箱の中に見えたのは、ピンクのドレスが着せられた女の子の着せかえ人形「ジューン」の姿だった。

まっすぐに正面を見つめて微笑む10代の白人少女に似せた人形に描かれた瞳と、未来の視線が重なり合う。

ティアーズの遺体発見現場で、手足をもがれて転がされていたのと同じ人形だ。

かすかに開いたまぶたの隙間から、虚ろに宙を睨んでいる白く濁った死人の瞳。

死後に発生したガスで無残に膨れた顔と、変色した皮膚。

赤黒く、固まった大量の血液。

裂けた皮膚から雪崩のようにこぼれている蛆の群れ。

様々なイメージが、意識の中にあるもう一つの視界に次々と映し出されてくる。

未来の周囲に一瞬、人間の身体が腐った独特の悪臭が立ち込めたような錯覚さえもたらされた。反射的に胃がぎゅっと縮まり、喉に吐き気がこみ上げてくる。

息を止め、苦い唾を何度も飲み込んで何とか堪えると、彼女は呻くように言葉を吐き出した。

「……何これ、気持ち悪い。あいつは何でこんなもの、ソフィーに渡したの？」

「私、人形の服を作るのが趣味だったから……色々な人形の空箱を、ついこの前まとめて捨てたの。ラルフがごみを漁ったとき、中にあったからかもしれないわ」

「ラルフはこれを渡すときに何か言ってたの？」

「いいえ。とにかくお前はこれが好きだろうから受け取れって、それだけだったわ」

ソフィーも、驚きと恐怖に顔をこわばらせている。

ストーリーをはたらく異性が対象者に贈り物をするのは珍しくない。

が、つきまといがエスカレートしつつある中でプレゼントされる物品が、純粋な好意から贈られることは稀だ。それは彼らの歪んだ愛情を具現化し、呪いだと言った方が早いくらいに一方的な思いが

込められた、おぞましいものであることが多い。

例えば体液や体毛を混ぜ込んだ飲み物や食べ物、相手の全てを知る目的でカメラや盗聴器を仕掛けた人形やぬいぐるみなどが、その典型である。

このジューン人形もそういったものの一つに間違いはない。が、ソフィーの趣味が人形の服を作ることであるのを差し引いても、これがティーズ事件で使われているものと同じなのは、単なる偶然で片付けるには出来すぎのような気がする。

未来の頭の中で鳴る警告音は、けたたましさを増す一方で止もうとはしなかった。

「この人形、開けないで袋ごと取っておいたほうがいいね。多分これも警察に渡すことになるだろうし。それに……これ、盗聴器かカメラが仕掛けられてるかも知れないから。自分の家以外のところに置いたほうがいいかも知れないよ。家に置くにしても、生活音が一切聞こえないような物置に入れるとか。そこに、ビニールの袋に入れて取っておくんだよ。いい？」

すぐにも人形を箱ごと押収したい気持ちを抑え、未来はソフィーに警告した。身を乗り出し低い声で囁いてきた黒い瞳の友人に、ソフィーは気圧されたように頷いて見せる。

「……ええ、そうするわ」

誰にも迷惑をかけず、静かな日常を送っている女の平凡な日常を狂気で蹂躪する。

そんなことを平然とやってのける男が持つ狂気の権化でもあるジューン人形は、愛らしい少女の外見が却って不気味さを煽るだけとなっていた。

もしかすると、このまま放置しておいたらソフィーがティーズ事件の次なる被害者となり、無残な骸で発見される羽目になるのではないか。

自身の推測はあまりにも単純だと未来の持つ理性は冷静に突き放していたが、可能性としては捨て切れない面もある。とは言え、確

たる証拠はまだ何も無い。やはり当面はFBI捜査官の身分を隠したまま、事態を注意深く見守っていくしかないだろう。このような曖昧な状況下において、法執行官は可能性のために先回りして行動することはできないのだ。

未来が人形の箱が入った紙袋を隣のテーブルの上に移し、二人の席からなるべく離れるよう細いスチールの脚をゆっくりと右足で押した。

「でもヨーコ、私のことを心配する前に、自分のことを心配しなきゃ駄目よ」

その様子を尻目に、ソフィーが未来の耳元へ顔を寄せてきた。盗聴器、と聞いて大声を出すのを躊躇っているのだ。

「マサトがあんなことになって、ヨーコは大丈夫かなって思ってたの。私も相談させてもらってるんだから、お返しに私が相談相手になるわ。話を聞くことくらいしかできないけど、誰にも話せないと辛いでしょう?」

未来は肉親ではないにしても、愛する家族と同等の人物が行方不明になったのだ。その辛さに比べれば、自分自身に降りかかってくる災難など軽いものだ。

「とでも、ソフィーは思っているのだろうか。」

それとも、「悲しみを分かち合うことで互いを理解し合い、信頼を深め合うのが女」という世間の典型的な女性像に合致するのが彼女という存在なのであるのか。

いずれにしても、ソフィーの表情には純粹に未来を心配する気持ちが溢れているようだった。引つ込み思案なせいで友達がなかなかできない自分と、留学生でやはり他人と打ち解けるのが難しいように見える未来とでは、同調できるところもあるのだろうか。

「……うん、ありがとう」

正直未来は、あまり杉田の失踪事件について情報を外に漏らすことはしたくない。

しかし彼女はソフィーの厚意を無下にできるほど冷めた人間でも

ないため、複雑な笑顔を浮かべて頷くしかなかった。

「ヨーコ、ちゃんと寝られてないんでしょ？目の下、隈ができてるわ」

やや照明が暗いダイニングでも、間近で見ると未来の顔の不健康さがはつきりとわかったのだろう。ソフィーが肌の状態を確かめるように、もう一度未来の顔を覗き込んできた。

「今度会うとき、カモミールとジャスミンのハーブティを持ってくるわね。両方ともリラックス効果があるから、気分が落ち着くと思うの」

「楽しみにしてるよ。今日は、私もこれから見て回りたいところがあるから、ここまでにしとくね。ソフィーも、もう授業はないの？」

「ええ。帰ろうかと思ってたところだから」
申し出に当たり障りなく礼を言った未来が立ち上がると、ソフィーも椅子の背にかけてあったコートを取り上げて席を立った。そして隣の席に置いてある紙袋を掴もうとした彼女の腕をそっと押さえながら、未来が耳打ちする。

「車まで送るよ。また、ラルフがいると厄介だからね」

あまり距離が近過ぎるとレズビアンだという誤解を受けそうな気もしたが、背に腹は替えられない今は仕方がない。ソフィーが頷いて紙袋を取ると、二人は連れ立ってメインダイニングの出口である自動ドアへと向かった。

自動ドアをくぐると、古風な装飾を施した額の掲示板にダイナーメニューが張られた狭いホールになっており、そこから伸びた廊下が外に出る玄関ホールへとまっすぐに繋がっている。玄関の扉には凝ったつくりのステンドグラスがはまっており、これを保存するには自動ドアにすることができないため、今の時間は閉まっている。どっしりとした木製の扉を手で開ける必要があった。

「ソフィー！」

その扉が二人の背後で閉まろうとしたとき、大分暗くなってきた表の暗がりから怒声に近い声が響いてきた。

「……ラルフ！」

ソフィーの身体が恐怖で竦み上がり、息を詰まらせたのがわかる。未来とソフィーがいる石造りのポーチは地面から数段階段を上がったところであり、玄関ホール暖かな明かりに照らし出されていた。そこへ薄闇の中からラルフが踏み込んでくる。

「何だよ、まだいたんだ。懲りない奴だね」

未来が咄嗟に両者の間に割って入り、毒づいた。横に片腕を突き出しつつソフィーを背後に庇い、ヘンダーソン・ホールの別の出口から逃げるよう目配せする。友人の意図を察したソフィーは慌てて頷くと、今来た道を取って返し、もう一度木の重厚な扉を開けた。

「おい待て、ソフィー！」

玄関ホールに消えた元恋人の背を追おうとしたラルフの前に、険しい顔を隠さない未来が立ちはだかる。ラルフの太い腕が子どものように小柄な彼女を懸命に突き飛ばそうとしたが、どれだけ力を込めて押しのけようとしても、その細い体はびくともしなかった。

「またお前が邪魔するか。このクソガキめ」

そんなことは意にも介さず、ラルフが淀んだ視線を向けてくる。未来を力任せにどかさうとするのは諦めたのか、彼は数歩の間を歩いて未来と正面から向き合う格好となった。

クソガキとは失礼な、と未来が言い返そうとしたところで、再び押し殺した脅し文句が大柄な男の発せられる。

「いい加減にしないと、俺にも考えがあるぞ」

「考えて何だよ。彼女を拉致でもしようっての？」

いちいち突っ込みを入れるのは面倒な気がしたが、この男がテイアーズの容疑者であると疑う要素が出てきた以上、情報収集を可能な限り行う必要がある。未来は演技も織り混ぜ、なるべく多くの情報をしゃべらせる舌戦に誘導することに専念するようにした。

「横槍が入らない場所で、2人で話そうとしてるだけだろ！俺がこれだけあいつを愛してやってるのに、お前はそれを見て何とも思わないのか」

「ああ。普通の人間から見て、あんたはつくづく怖い奴だって思うよ」

これだけ、というのはいかほどのことなのだろうか。

相手の行動を逐一監視したり、言うことを聞かなければ殺すと脅したり、嫌がることをしたりするのが愛情の成せる業だという常識を、少なくとも未来は備えていない。

そして性別は関係なく、そんな行動の数々に恐怖心を抱くのが普通のはずだ。

「それは、あいつが俺の愛情に十分に応えてないからそう見えるだけだ」

未来が放った冷たい言葉にも、ラルフは全く動揺を見せない。

自分の思い通りに対象者が動かないとき、全てをその人物のせいにして自分は正しい、と主張する。これもストーカーに多いとされる自己愛性人格障害の特徴だ。彼らは自分を愛する気持ちが強いため、意のままにならないことを心から締め出し、他人の責任にすることで自分のプライドを保とうとする。

そこに相手の意思など存在しないものとして振る舞い、自分すら騙してしまうのだ。

この激しい思い込み故、一度暴走すると手がつけられなくなるのである。

「あいつは本当はまだ俺のことを愛してるんだぞ」

「何を根拠にそんな……」

自己愛性人格障害の詳しい特徴を思い出した未来にへ、更にラルフの自分勝手な台詞が飛んできた。相手の性格を知るために効果的な言葉を狙って話しているとは言え、本気で呆れたくもなってくる。「そもそも、あいつがあんのフィットネスにいるなんて俺は知らなかったんだ。でも、俺が先月会員になったら、あいつがいた。俺とあ

いつは離れられない運命なんだよ」

殆ど自己陶醉としか思えない妄想を、未来は聞き流すことしかできなかつた。

「運命」をややこしい話の中で持ち出されると、こちらがどう返しても、本人の只でさえ手に負えないくらい強固な思い込みが、ますます強くなるだけなのだ。

「とにかくだ。この後、ソフィーに2人で話をさせる」

「断る。あんたは、このままだと彼女に何をするかわからないからね」

再び未来の身体を押しつけようとしたラルフに、今度はまともに言い返すことができた。

未来は軍の特殊部隊の屈強な大男が束になってかかっても敵わない、強靱な肉体を持つサイボーグだ。ラルフ如きなど怖くも何ともないが、この男に対する生理的な嫌悪感は拭えない。彼女は肘を張り、ラルフの進路をなるべく少ない接触で阻んでいた。

「会って話をすれば、あいつは絶対にわかってくれる。あいつが俺のことを嫌うわけがないんだからな」

風が吹けば飛んで行きそうなくらい頼りなげな若い娘の身体を、どうしても目の前からどかすことができない。その事実には苛立ちを覚えたラルフの口調は、再び荒々しいものになっていた。

「あいつはこれからどこに行くんだ？俺には知る権利がある」

「あるわけないでしょ。あんたがやってることは、立派に犯罪なんだよ」

未来は頑としてラルフの前から退こうとしない。

キャンパスに行く学生たちが、目の前の通りを不審そうな顔で横切っていく。仕方なかつたとは言え、もう少し人目につかない場所にこの男を引っ張っていつて話をするべきだった。

「あいつは俺が守るんだ」

自分の軽率な行動を後悔した念と、ラルフの凶々しさに覚えた怒りを覚えた未来の齒の間から、鋭い舌打ちの音が漏れた。

この期に及んでソフィーを守るなど、どの口が言っているのだろう。

今彼女に危害を加えそうな人物のリストのトップに記されるべき名前は、このラルフ・バーンズ本人だと言うのに。

「俺はリッチモンドのフェイズでも有名なんだ」

憎たらしさを隠せない様子の未来の表情などまるで無視して、ラルフは立てた親指で自分を指し示す。彼は続けて泥で汚れた作業ジャケットの片袖を脱ぐと、アンダーシャツの袖をまくり上げ、力こぶを作つて見せた。

「どうだこれ、見てくれよ。すごいだろ？」

ラルフが得意げに鼻を鳴らすのが、どんなに好意的な目で見ても、彼の腕全体からは重力に負けた贅肉が下がってきているようにしか見えない。

普通に見れば彼の腕はかなり太く、脂肪の下には多少鍛えた筋肉がついてはいるのだろう。しかしFBI、HRTの男たちやジャクソンのように、自らの生命を的にして生きている猛者たちをいつも見ている未来にとっては、ラルフなど小太りな中年がいきがついてるぐらいにしか思えなかった。

小汚いジャケットとくたびれたジーンズに手入れが行き届いていない髪という身なりも、本人はワイルドな男を気取っているのかも知れないが、みすばらしさを増しているだけだ。

「現場でロボットに頼らないで作業できるのは、この俺ぐらいのもなんだ。それに今は、トレーニングだつて欠かさない。この身体があれば、どんなことからでもあいつを守れるつて思うだろ？」

「私に聞くな、そんなこと……」

うつとりと自分の筋肉を眺めているラルフにすっかり呆れて溜息をつき、こめかみに指先を当てた未来が目を伏せて軽く頭を振る。

しかし彼を馬鹿にした振る舞いをする中でも、ラルフが唇に上らせた「ロボット」という単語に、彼女は鋭く反応していた。視線を地面へ乱雑に散らす仕草を続けながら、素早く視線だけをラルフの

全身にくまなく巡らせて観察する。

後で性格分析官のポールに相談するために、必要な情報は瞳に全て焼き付けておきたかった。

「あいつはうつ病なんだ。今日だって、1ヶ月くらいはさぼってた講義にやっと出てきたくらいなんだぞ」

「ちよつと待てよ。彼女の予定を一体どうやって知ったのさ？」

ラルフの独演会は放っておけば翌朝まで続きそうな勢いではあったが、そろそろ切り上げさせるべきだろう。未来は彼の話す内容の要所を聞き咎めて攻撃し、反論できなくなる方向へとたたみかけた。「夜はいつもないんだ。リッチモンドの安いバーで売春して、その金は全部ヤクで消えちまう。どうしようもない中毒者なんだぜ」

「それは、ソフィーの行動を每晚每晚見張ってるってことなの？彼女にはヤク中患者の症状は何も出てないし、そもそも彼女のお金の流れを他人のあんたが把握してるってのが、おかしいじゃない」

話題を変えようとしたラルフに、未来は容赦なく先回りした言葉を浴びせかける。

「あいつが俺を避けるのは、やましいところがあるからだ」

「見張られてたりしたら、普通は怖くて逃げ出すのが当たり前だよ。やましいのはあんたじゃない。弁護士に相談してみれば？10人が10人、絶対あんたがおかしいって言うから」

未来の切り返しに答えようとはせずラルフの責任転嫁は続くが、彼女は攻撃の手を緩めようとしなない。1言われれば3返すくらいでないと、この手の人間に効果はないのだ。

それでももし逆上してラルフが手を出して来ようものなら、堂々と正当防衛を主張できる。どう転んでも、こちらの不利にはならない状況を作っておくべきだ。

「あいつくらいどうしようもない女の面倒を見られるのは、俺しかない」

「ああ、あんたの相手をできるのは最終的に警察しかないみたいだね」

そして最終的には国家権力に頼るといふ姿勢を強く見せて、未来は有無を言わさない態度であることを改めて示して見せた。

「本当にいい加減にしないと、今すぐ警察呼ぶからね」

そしてラルフが口を開く前にコートのポケットから携帯電話を取り出し、緊急電話番号である「911」をディスプレイに表示させてから突きつけた。

「バカの一つ覚えか？二言目には警察警察って言いやがって」

彼女が本当に通報するという態度をはつきりと見せると、ラルフはあからさまに不快な顔で罵り文句を口にした。

が、この100倍は酷い脅し文句を未来は犯罪現場で何十回も耳にしている。修羅場をくぐり抜けてきた経験は彼女に十分、心理的な余裕をもたらしていた。

「バカで結構。言っとくけど、私を殴ったりしたら暴行と傷害の現行犯になるからね。大人しく逮捕されてくれるなら、それもいいけど」

そこで初めて意地悪な笑みを浮かべた未来が、ラルフを茶化す態度を露にして携帯電話をわざとらしく振って見せた。

若い東洋人の娘による正当な脅しを耳にした大柄な白人の男は、はつきりしない英語を口にもらせながら踵を返した。迫り来る夕闇の中へ去る男が芝生へ盛大に吐いて見せた唾は、彼が怒りを表すのに野卑な手段しか知らないことを証明していた。

リッチモンドのダウンタウンからクワンティコへ通ずるインターステート95を時速60マイル（約96キロ）で疾走する未来の頭にあるのは、本当は思い出したくもないラルフのことであった。彼は粗野で乱暴な白人男性だが、ある一つのことに対しては異常なほどの執着を見せ、その上に自己顕示欲が強い傾向も認められる。

そして肉体労働、つまりは大型のロボットを操縦する機会に恵まれる仕事に従事していることも判明した。

そして何よりも、彼がソフィーに渡したジューン人形のことがあ

る。

非常に多くの点でティーズ事件犯人の状況的な証拠との一致が見られるのが、やはり気がかりだった。

が、決定的なものが何も挙がっていないのも事実だ。

ここで彼に任意の聴取を求めたり、警察署に連行するような行動を取るべきではない。

それはわかっているのだが、このまま何もせずにいたら、また罪もない人間の命が無惨に奪われてしまう可能性も否定できないのだ。この何かするべきなのに何もできないという状況は、一人で対処するのには手に余るし、胃が痛くなるぐらいのストレスになる。あまり長く自分だけの腹に収めておくべきことではない。

そう判断した未来がクワンティコのCVC本部に辿り着いて真っ先に向かったのは、自分のオフィスではなく行動分析チームのチーフ、ポール・アンダーソンのもとだった。

ポールのオフィスのドアをノックした後に入室すると、まず目に入ってきたのは床やキャビネット、デスクの上に積み上げられた本の塔の群れだった。精神医学や心理学、行動認知学や社会学など、電子化されていない諸々の分厚い専門書たちが、個人空間としては広めのオフィス半分以上を占有しているのではないかと思うほどだ。一番奥に据えられたデスクには、林立する本の柱の間から辛うじて入口の方を覗けるくらいの際間が開いており、そこからくしゃくしゃの金髪と眼鏡に囲まれたポールの瞳がちらりと見えた。

「やあ、ミキか。こつちだよ。僕のオフィスにわざわざ来るなんて、珍しいじゃないか」

どことなくのんびりした口調のけだるい英語がそこから上がって、本の群れのでっぺんから突き出された右手が手招きした。未来は絶妙なバランスを保っている本の建造物を崩さないように注意しながら奥に進み、ポールがいる奥のデスクへ近づく。

FBI犯罪科学研究所の職員は基本的に捜査官ではなく、各専門分野の学者や研究者たちが多い。犯罪捜査に役立つあらゆる分野の

専門家が揃い踏みしていると言っているだろう。

そしてあまり外を出歩くことがない彼らは、身だしなみや部屋の整理にもあまり気を使わない。杉田のように几帳面な者もいるが、大体はオフィスを散らかし放題にして、普段着の延長線のような服装をしている。

このポールはその最たるもので、彼が行動分析学の権威であり、幾人も凶悪犯を刑務所に送ったとは、初対面の人間は誰も信じないだろう。彼は研究者という肩書きと不釣り合いにみすばらしい身なりで、骨ばった背中を丸めて歩く様子は、威厳などというものと全くの無縁だった。

「その様子だと、何か言いたくてうずうずしてるみたいだな。君が抱えてる問題で、何か進展があったんだね？」

未来が本の間から姿を現すなり、彼は話を切り出されるよりも早くその表情を読み取っていた。

ポールが誰かに話しかけるときはいつも遠回しな言い方で、何を聞きたいのかはつきりさせないのが癖だ。そうやってまず相手の出方を探るのだが、未来が今置かれている精神の状態を誰よりもよく分析できるのもまた、彼だ。妹を労る兄のような気遣いが、そこはかとなくにじみ出ている。

「そう。でも残念ながら、一番早く片づけたい件についてはじゃないんだけど」

「とにかく座るといい。話はコーヒーを飲みながら聞こう」

かぶりを振った小柄な女性捜査官に丸椅子を勧めながら、ポールはデスクの引き出しから紙コップを取り出した。安楽椅子のキャスターを引きずって、ポールがせかせかと2人分のコーヒーをブラックで淹れる。引き出しの中には粉末のクリームと砂糖のパックもあったが、彼は同僚の好みをきちんと覚えているのだ。

「一番早く解決させたい件じゃないって言うのは、ティアーズ事件についてなのかい？最近また捜査に行き詰まって、ウォーリーの奴がよくぼやいてると思ったけど」

「それが、意外なところから進展しそうな可能性が出てきたんだよ」
色褪せた薄いブルーの紙コップを受け取りながら、未来は人差し指の先をすばめた唇の先に立てて見せた。内密の話であることを、ポールが受け取って頷く。

未来はぬるめに淹れられたコーヒーに口をつけながら、杉田との共通の友人であるソフィーのこと、彼女につきまといっているラルフのこと、彼がティアーズ事件の犯人の特徴に数多く当てはまること、自分がラルフに対して見せた姿勢、そしてジューン人形のことをそれぞれ、まとめて話した。

ポールも同じようにコーヒーを飲みながら熱心に耳を傾け、途中に一切口を挟まずに頷き続けていた。

「なるほど。話は大体わかったよ」

そして未来の話が終わると同時に、彼は自分の紙コップにまたインスタントコーヒーとポットの湯を足して、取り出してあったマドラーでかき混ぜた。

「ポールは、ラルフについてどう思う？ 犯人の可能性が高いって言えるの？」

「そうだなあ。可能性がゼロじゃない、としか言えないな」

ポールのもつと力強い言葉を期待していた未来は、危うく丸椅子から上半身を倒しそうになってしまっただけに肩すかしを喰らう格好になってしまった。

「ええ？ そんなもんなの？」

「いいかい、ミキ。プロファイリングというのはあくまで参考、そこから犯人を断定できるようなものじゃない。単に一つの素材に過ぎないんだよ。僕が言うのも何だけど、そこまで頼るべきものじゃないんだ」

自分の成績を評価しない教師に抗議する学生のように口を尖らせた未来を、ポールは手で制して宥めにかかってくる。

「事件に使われたのと同じ人形を持つてただけでそう考えるのは、ちよつと乱暴過ぎるよ。それに犯人は現場に人形を残して

はいたけど、被害者に渡していたという行動は今までに確認されていない。その違いはわかるだろうか？」

「釈然としない様子の未来だが、性格分析担当者の指摘には頷いて見せた。」

「ただ、気になる人物ではあるね。それにこの事件の犯人は犯行を色々なパターンで繰り返してきているから、途中で小道具の使い方を変える可能性だってあるかも知れない」

「そしてまた違った可能性を示し、ポールは顎に手を当てて宙を睨んだ。」

未来がまっすぐに、彼の青白い顔へ視線を合わせる。

「ラルフは今の段階じゃ犯人かどうかって区別はつかないかも知れないけど、このまま何もしないで放置するには危険だって、私は思ったの。だから警察に通報するだけ言っただけだね」

「彼はまだちょっと怪しいって程度だ。何かしたわけじゃないから人形を押収することもできないし、指紋やDNAの提出を求めることもできない。それに管轄外のいざこざについて、僕たちが直接関わるのはご法度だ。その程度だと、まず地元警察に連絡して対応してもらった方がいいだろう。ミキの判断は正しいよ」

闇雲に身分証を振り翳し、国家権力を行使するのがいつでも正しい、というわけではないのだ。自分のやるべきことを見誤らなかつた若い同僚を、ポールは素直に認めていた。

「他に、私がかかやれそうなことってない？」

「そうだな。さっき言ったように、警察に情報を連携して身辺を調査することと、奴を監視下におくってことぐらいだ。もし奴がティーズの事件に関わっているというはつきりした証拠が挙がったら、その時点で僕らも動けることになるからね」

やはりもう少し積極的な内容に少しは期待していた未来だったが、あくまで慎重な姿勢を崩すべきではないというポールの態度は、学者ならではののだろうか。

「問題なのは、君が担当外の事件の延長線上でこの情報を掴んだっ

てことだ。結果は良くても、他のチームの連中は戦闘チームに対して良くは思わないだろう」

と、未来を感じたところで、彼は自分の言葉が牽制であることを隠そうともせずはつきりと示して見せた。

言われてみれば確かにその通りなのだ。

戦闘チームは直接関わらない。そう言われているブラックヘア事件の被害者である可能性が示唆される人物の行方を探ろうとして、たまたま行き当たったことなのである。

手がかりを掴んだ経緯を聞かれた場合、面子を重んじるFBIで、捜査を主に担当するチームからの不興を買うことは想像に難くない。一人の益を追求して全体の和を乱すような真似は、一番のタブーなのである。

しかし、人の命がかかっている可能性が高いかも知れないのだ。

今回はかりは、動けるだけの手がかりを掴んだ者が先んじて動く方が賢明なのではないか。

「いずれにしても慎重に行動しなければならないよ、ミキ。下手をすれば、CVC内で君の立場が危うくなる。担当外の事件に手を出した上にトラブルを起こしたとあつては、隊長だって君を庇い切れないかも知れないから。最悪、もう捜査活動に参加できなくなる可能性だって、ないわけじゃないんだ。君はその若さで日本から特例としてFBIに入った上、普通の捜査官には許されていないような権利だつて持っている。そのことをやっかんてる連中も大勢いるつてことを、覚えておいた方がいい」

口を開きかけていた未来であつたがこうも穏やかに、しかも正論でたたみかけられては、言いたいことを飲み込むしかなかった。

自分はプロフェッショナルだ。

いくら身内に近い者のこととは言つても、感情に任せて暴挙に出たり、任務を放り出すような真似は決して許されない。そして、そんなことをやる子どもっぽいメンタリテイの持ち主だとも思われたくない。

未来は頭ごなしに怒鳴られるよりも、理屈でそう言い聞かされるほうが何倍も堪える質だった。

その辺りをピンポイントに突いたポールの静かな言葉は、効果覲面と言えるだろう。

「わかった、そうするよ。下手に自分一人で動いたりしたら、チームのためにもならなそうだし」

低く息をついた未来が顔を上げて、ポールに笑いかけた。

「また何かあったらすぐ教えてくれ。僕にとってドクター・スギタは大事な友人でもあるし、仲間でもあるんだ。可能な限り協力させてもらおうよ」

未来の顔から逸った色が失せているのを見て、ポールが優しく彼女の細い腕を叩く。彼がふとその手首につけていたダイバース・ウオッチを見ると、時刻は午後7時を回ったところだった。

「今日はもう帰って、旨い夕食と酒でも取るといいよ。何なら、クワンテイコにある僕のお勧めの店を教えるけど」

「ううん、今日は会いたい人がいるから。是非また今度教えてよ」
未来は丸椅子から立ち上がると、去り際に軽く手を振ってポールに挨拶を送った。

今日は何故か、ごつい体格をした女性に見える黒人男性が立つ力ウンターで一人、呑みたい気分であった。

「今日も私は生きていられた。しかし私には、今日が一体何日で何曜日なのか、今何時なのかもよくわからない……どうすれば、他の犠牲者のようにむごたらしく殺されなくて済むのだろうか？……何とかして彼らに取り入って、私が役に立つ人間だということをおかせなければならぬだろう。料理ができるとか、そういう特技を見せたり、話したりすることで。こんなときに他に誰かがいて、これからのことを相談できたらどんなにいいだろう。」

コンクリートで閉ざされ、冷え冷えとした空気の中に、ドイツ語の啖気が沈んでいく。

砂埃で灰色に汚れた毛布で身体をくるみ、硬い床に座り込んで、杉田は自分が書いたメモを読み返していた。これを書いている白紙のノートとボールペンは、隅に積んであったダンボールの中に突っ込んであったものだ。万一他の者に見つかってもいいようにドイツ語で記し、同じ場所に隠しているのだ。

この地下に設けられた倉庫のような小部屋には窓や時計がなく、日光による日中の気温変化も極めて少ない。杉田は疲れ果てた身体を横たえてうとうととしては目覚めることを繰り返し、男は好きなきにここへ来て、杉田を犯した。

そのため、既に何日か経過しているのか、それとも一晩にも満たない時間しか過ぎていないのか、皆目見当がつかなかった。

だが、命と精神をを保つために最低限のことは出来ているとは言っても、いつどんな目に遭わされるかわからない状況下であることは変わらない。現にここに連れて来られた時は、拳銃を突きつけられてきた。いつ殺されてもおかしくはないのだ。

それでも、自分は死ぬわけにはいかない。
生きることを諦めたら、そこで終わりだ。

もう二度と、未来と会えなくなってしまう。

今頃心配と不安で押しつぶされそうになっているであろう彼女を、裏切ることには許されない。

自分は何としても、生きてここから帰らねばならないのだ。

杉田はすっかりかじかんでうまく動かせない指先をこすり、ボールペンを握り直した。

その時である。

頭上で鈍い打撃音と何かが割れる甲高い音が上がり、淀んだ空気を震わせた。そこへ、男の低い叫びに呻きを混ぜた声が被せられる。「何かあったのか!」

反射的に杉田が立ち上がり、天井に向かって声を張り上げると、身体を包んでいた毛布が埃を舞い上げながら床に落ちた。

返事はない。

代わりに、先よりもはつきりとした呻き声が聞こえてきた。

「どうしたんだ?」

もう一度、杉田は更に声を大きくして問う。

「……うるせえ」

返ってきたのは、そう一言言うのもやっとと窺えるほど苦しげな声だった。今までに杉田が幾度となく耳にしてきた、身体に苦痛を抱えた者の声である。声の主は、何かを壊してその破片で手足を切ったか、どこからか足を踏み外して落ちたかしたのかも知れない。

上で負傷したであろう人物は、凶悪犯の可能性が高いのだ。身分証明が必要となる病院のような場所には、極力出入りを避けたいと考えているはずだ。まさに、医師である杉田を生かしておくことのメリットを知らせる最大のチャンスが巡ってきたのだ。絶対にこれを逃すわけにはいかない。

うるさいと言われたことは無視し、はつきりと杉田は告げた。

「怪我をしたのか?僕は医者なんだ。すぐにでも手当てできる。上へ上げてくれ!」

「黙れ」

杉田の叫びに投げつけられたのは、拒絶だった。

だが、やはり短い単語の中にも苦しげな喘ぎが垣間見える。

あちらはかなりの深手を負っているようだ。

「刃物やガラスで切った切り傷なら、すぐに傷口を合わせてから強く押さえて止血するんだ。その時、砂とかガラスのかけらが残らないように注意しろ。傷が汚れていたら、まず丹念に洗った方がいい。間違っても、よく言われてるような止血帯はつけるな。余程どうしようもないとき以外は、悪くすると手足を腐らせる原因にもなる…」

杉田が応急手当について、見えない相手に向かいそこまで叫んだときである。

がたん、と板がずれる音が上へ続く階段の方から上がり、電灯の明かりに眩しく照らされた四角い空間が、薄暗い中にぼっかりと口を開けた。

無意識に眼鏡を指で押し上げながら、杉田は迷わず埃が積もった階段を駆け上がった。

「あら。いらっしやい、お嬢ちゃん。今日は一人なの？」

「うん。たまには一人で呑むのもいいかなって、思ったから。先に食事するから、サンドイッチプレートをよろしくね」

「はいはい。カウンターが空いてるから、ゆっくりしてらっしやいね」

店に入るなり、銀のトレイに指先を立てて空のグラスを軽々と運んでいるルイと鉢合わせた未来は、夕食を歩きながら注文することになった。

黒人のニューハーフであるルイが経営するバー「ホワイトクローウ」は、今宵も男たちが愛を語り合う静かな喧噪で満たされている。古くどっしりとした木製のボックス席やスツールの間をすり抜け、未来は奥にある小さなカウンターを目指した。

男性同士のカップル、あるいは女装した男性が客の九割以上を占める中で未来の姿は浮いており、好奇の目が集中する。しかしそれ

にももう慣れてしまった。

ここはジャクソンに連れて来られて以降、ちょこちょこ来るようにしている。それでも、彼女は今までに他の女性客を見たことがなかった。

オーナーのルイがジャクソンの情報提供者であるということもあるが、それを差し引いても、この店に来る価値はあると未来は思っている。ルイは一度来た客の好みをきちんと把握して、酒は何も言わなくても口に合うよう整えてくれるし、グリル料理は程良い味付けに抑えており、追加の味付けは客任せにしてあるのもありがたかった。

「お嬢ちゃん、ビールはいいの？」

スツールに座った未来へカウンター越しにルイが声をかけてきたが、彼女は首を振った。

「今日はもうちょっと、違うものが呑みたい気分だからね。少し考えてからお願ひするよ」

「そう？じゃあ参考に、メニューを渡しとくわ。お勧めも見るといいわよ」

と、イタリツク体の名前がびっしり印刷された厚紙のメニューを手渡ししてくれる。その際、彼はメニューで隠すようにしながら顔を近づけて囁いた。

「相棒から聞いたわよ。あたしも、お嬢ちゃんのことには陰ながら応援するからね」

「……ありがとう」

短いながらもルイの優しい言葉は未来の胸に暖かく響き、心に沁みた。低く呟き返す彼女から顔を離し、ルイがにつこりと笑う。

「相棒もお嬢ちゃんたちも、みんなあたしの大事なお客様だからね。そのためにひと肌脱ぐのは当たり前よ。最初の一杯は、奢らせてもらうわ」

「なんか、奢ってもらってばかりで悪い気がするんだけど」

恐縮する未来に、ルイがもう一度笑いかける。

「じゃあ、何にするかはあたしに決めさせてくれるかしら？お客さんの気分を読むことも、仕事の練習になるから」

未来が頷くと、彼はいそいそとカウンターの奥に引っ込んでいった。サンドイッチプレートは比較的時間がかからない料理のため、酒と一緒に出そうとしてくれるのかも知れない。

ジャズとタバコの煙でいっぱい店内を、未来はさりげなく見渡した。

ほとんどのテーブルやボックスは男性の二人連れで埋まっており、一人で来る者は付き合う相手を求めている者として見るのが、この暗黙の了解となっている。

稀に男性に連れられた女性客はいるものの、殆どは雑誌の取材をしているライターや、この店の雰囲気そのものを気に入っている変わり者だ。未来もそのうちの一人だが、食事や酒の味だけでなく、店の空気やオーナーのルイの人柄まで全てに好感が持てるのだ。

多分、日本に彼女が持っている会社の所在地である新宿にあるバーと、雰囲気に近いせいなのだろう。新宿も、様々な人々が生活する雑多な世界有数の活気溢れる街である。しかしここは日本から遠く離れた異国の地であり、耳をくすぐるのは馴染みのある母国語ではない。

聞き覚えがないスラングと思しき崩れた英語や、微妙に抑揚の異なる笑い声に気づく度に、未来は自分一人が地元のアメリカ人たちから離れた場所にいるのだと思い知らされた。

が、どこにいるのか見当もつかない杉田の孤独は、きつと自分など及ばないに違いなかった。

恐らくただ一人の味方すらない場所で、自分だけを頼りに恐怖と戦い続けているのだろう。

今この瞬間も、愛する男は恐ろしい苦痛を精神と肉体に強いられるているかも知れない。

弱音を吐いている暇などないのだ。

未来が自分に強く言い聞かせると、思わずカウンターの上で組ん

だ両手に力が込められ、手の甲に白い骨の筋が浮き上がってくる。

「はい、お待たせ。今日のサンドイッチは、ターキーのハムとスクランブルエッグよ」

そこへ、ルイの声が料理の香りとともに割り込んできた。

白い陶器の皿に生野菜のサラダと共に盛りつけられた二切れのサンドイッチが、未来の視界にぱつと鮮やかな色を咲かせる。

ホワイトク로우のサンドイッチは薄切りのバゲットに厚く具を挟んだボリユームがあるもので、それでいて胃が重くならないように工夫が効かせてある。例えば、アメリカのレストランではつきもののフレンチフライが添えられていないのも、大きな特徴だろう。

ターキーハムサンドはセロリと玉ねぎを、スクランブルエッグサンドはトマトとズッキーニを、軽く塩と胡椒で味付けして挟んである。アンディーブとチコリ、レタスを主としたサラダにはオリーブオイルを使った軽めのドレッシングがかかっており、食欲のあまりない未来の胃にも優しいそうなものばかりだった。

「それと、お待ちかねのお酒はこれをどうぞ」

ルイが軽やかな手つきで、皿の隣に敷いたコルクのコースターの上にカクテルグラスを置いた。中では鮮やかな琥珀色に近い酒が、暗い照明を受けて静かに輝いている。

未来が細身で口の広いグラスの足を持って傾け、香りを確かめると、甘くてやや癖がある香りが鼻腔にふわりとかかってくる。

「ありがと、早いね。で、これは何のカクテル？」

「シエリー酒の傑作って言われてるカクテルでね、アドニスって言うのよ」

「アドニス？」

まだ香りを楽しんでいた未来が顔を上げると、頷いたルイと視線が合った。

「そう、花の名前なのよ。素敵でしょ？萎れたお花が、早く元気になるようにね」

アドニスは、確かアネモネの別名だ。

未来がそのことを知ったのは、つい最近だ。花言葉も、色によって意味が違つと聞いた記憶がある。

『代表的なものは『儂い恋』『恋の苦しみ』とか。色でいけば白は『真心』、赤は『君を愛す』、紫は『貴方を信じて待つ』って意味があるんだ』

そつだ。

杉田が姿を消す直前、ファーマーズ・マーケットへ買い物に行く途中の車中で教えてくれたのだ。そして、彼が好きな花だとも言つていた。

アネモネつまりアドニスは、清楚な少女がかすみ草との花束にして持つに相応しい、愛らしい印象の花だ。そんな可憐な印象をもたらす花を好む杉田もまた、繊細な心を持つ青年である。

今頃彼はどうしているのだろうか？

自分は暖かな心遣いで味付けをプラスされた食事と酒を楽しんでいるが、彼にそんなことは許されていないはずだ。

いや。もしかしたらもう、息をすることさえ許されていないかも知れない。

あの気まずさが漂っていた車内での会話があつたとき、自分たちは間違いなく幸せだった。

なのにどうしてその時を大切にせず、彼の心にもつと近寄ろうとしなかつたのだろうか。

自分のことを理解して欲しいと要求するばかりで、何故彼のことをわかるうとしなかつたのだろうか。

自分がかつと違つた態度を示していたら、杉田が一人で出かけることなどなかつたかも知れないのに。

こんな事態に陥ることを、食い止めることができたかも知れないのに。

「ど、どうしたの？お嬢ちゃん」

未来のアドニスを見つめる黒い瞳から大粒の涙が溢れたのに気づいたルイが、カウンターの引き出しから慌てて白い布ナフキンを取

り上げた。

未来は瞬きする間にせり上がってきた涙を、止めることができなかったのだ。

「ううん、何でもないの。ごめん、驚かせて」

差し出された清潔なナフキンを受け取った未来が、両の頬を拭いながら声を詰まらせる。透明な滴は、バーカウンターの上面にもこぼれていた。

「私なら大丈夫だから……仕事に戻って」

彼女が取り乱してはいないことを、低く落ち着き払った態度が示している。ルイもそれ以上の追及をせずと頷くと、カウンターから離れていった。

未来は涙が引いて息が戻ってから軽く息をつき、アドニスを一口含んだ。

芳醇なシエリー酒の香りが口の中に広がる一方で、スイート・ベルモットがほのかな甘みを添えており、少しもべたつくようなしつこさがない。個性が強い二種類の酒を見事にまとめた風味は、寒風に晒されて冷えた心に優しく手を差し伸べ、そっと包んでくれるかのような心地がした。

身体の内側がほんのりと暖かくなり、力が入りすぎていた筋肉がみるみるうちにほぐれていくのが快い。さり気なく励まそうとしてくれたルイの気配りが、未来好みの味に見事に合わせた一杯に表れていた。

二口目を口にすると、今度はもつと純粹に味を楽しむ余裕が出てきているのわかる。最後の一滴がなくなってしまうことを惜しむように時間をかけ、未来はアドニスを堪能した。

「何か、悪いことしちゃったわね。悲しいことを思い出させたみたいで、ごめんなさいね」

未来の様子を少し離れた場所から窺っていたのだろう、ルイはグラスが空いたタイミングでカウンターに戻ってきた。彼が「萎れた花」として見たこの女性客が、自慢のサンドイッチに手をつけ始め

たのを回復の兆しと見たのである。

「そんなことないよ、私が勝手に泣いただけなんだし。今度はもうちょっと落ち着いてから来るようにするから」

手のひらほどの大きさもあるターキーハムサンドをかじる未来には、微笑みながらルイに返すだけの余力も出てきていた。

「今度と言わずに、今日はお詫びにもう一杯奢らせてもらうわよ。常連さんを泣かせるなんて、バーテンダーの恥だわ」

「気持ちは嬉しいけど、私、あんまり強くないからさ。今日これ以上呑んだら、運転できなくなっちゃうかも知れないもん」

ルイのこつてりとルージュを塗った唇から出た力強い申し出を、未来は済まなさそうに断る。

彼女は普段運転するときには呑まないようにしているが、今日ばかりは誘惑に抗えなかった自分がいた。

「もう一杯の奢りは、事件が無事に解決した時まで取っておいてよ」「相変わらず、堅いのねえ。その代わり、またみんなを連れていらっしやいな」

ルイは呆れた溜息をつきつつも、いつ誰を連れて来いと具体的に言わないのが未来にとってはありがたい。

彼女はその後ルイに渡すチップを多めにしようと、財布の中身は確かめずに決めていた。

フレデリックスバーグの自宅に到着した未来の胃は、あまり飲み慣れない甘めのカクテルで少し重かった。

家に辿り着くまでの間にアルコールはすっかり抜けてしまい、暖房で暖まっていた部屋が冷気に晒されたように、内側がじわじわと冷えつつある。寒く深い夜が訪れ、他に待つ者も帰ってくる者も恐らくいないであろう空っぽの部屋には、温もりのかけらもない。

ホワイトクローでもらったルイからの心遣いには、心底から感謝していた。しかしその効力は、いつまでも続くわけではないのだ。

この日の出来事だけでも十分に未来を凹ませていたが、これから待ち受けている仕事のせいでもまた、気分がどんよりと曇ってくる気がしていた。22時半から、日本との緊急テレビ会議があるのだ。

杉田が隣にいる状態でしかやったことがないケーブル接続やチャンネル設定、カメラ位置の調整をのろりと片付けて、リビングに据えられたモニターの前に椅子を引っ張っていく。彼女が座ってからモニターに日本のAWP棟会議室の様子が表示されるまで、1分もかからなかった。

毎週水曜日の定期ミーティング時と同じように、モニターにはアイボリーの壁とオフィス用デスクが映し出されている。画面外に誰かいるようで、ファイルか書類がこすれるような雑音流れ出してきた。

「……未来、大丈夫か？」

先に画面に現れた生沢が、椅子に腰を落ち着ける前から気遣わしげな様子を見せる。数日ぶりに聞いた気がする母国語の響きはひどく懐かしく、未来の心を悲しく揺さぶった。

帰宅した未来はまだ化粧も落としておらず、いかにも疲労したように見えるのだろう。それだけ、心理的なダメージを受けているということだ。

FBIやCVCの仲間たちよりも付き合いが長く身近だった男の顔と声は、日本にいて日々を共にしていた頃の記憶を、嫌でも呼び起こさせる。

その中には勿論、杉田の生き生きとした表情も揺らいでいた。

未来は弱く頷いた。彼女がそのまま目を伏せたため、生沢は何と言葉をかければいいのか図りかねているようだった。

『では緊急ですが、ミーティングを始めましょうか』

事務的なリユーの声が響き、未来が顔を上げる。

日本時間では朝8時半で勤務時間直前の筈だったが、並んで席についている様子がモニターに映っているリユーと生沢は、出勤したてのように思えない。生沢はいつものことだが、リユーまで無精髭が濃いし、服も薄汚れて見える。

彼らも未来と同じように疲れ、身だしなみに気を配る余裕を失っているようだった。

考えてみればこの男性二人は、杉田と過ごした時間は未来よりも長い。女にはわからない、男同士の強い絆も持っているのだろう。

杉田の行方不明に強く動揺し、辛さを胸に抱いているのは皆同じなのだ。

『早速なのですが杉田先生の失踪について、何か新たにわかったことはありますか？』

ただ、その中にもってもリユーの口調は普段と変わらない。元アメリカ海兵隊の特殊部隊員であるだけに、どんな時でも心の揺れを抑えることができる強靱な精神力を身につけているのだ。

組織は違えど同じように治安のために働く者として、未来は彼のことを見習わざるをえない。彼女も極めて平静に答えを返した。

「今日の午前中、先生の乗り捨てられた車が見つかったけど……：そ
うちには、どの程度情報が行ってるの？」

一時的に国籍をアメリカに変えているとは言え、未来と杉田は日本政府から特殊な任務を帯びている身だ。連絡は通常、AWPに直接行かないと思って差し支えはない筈である。

リユーは首を横に振った。

「細かいことはあまり来ませんね。機密漏洩を防ぐ目的もあると思います。大使館からは大したことを聞いていませんよ」

「このミーティングの内容について、特に制限されてることは？」

「いや、そんなのは聞いちゃいねえな。まあ、この回線自体が監視されてるんだらうが、そんなことは知ったこっちゃない」

未来が続けた質問に、今度は生沢が答えた。

行方不明者が出たというのに、参加者がいつものメンバーしかないのも、考えてみれば妙な話だった。恐らく生沢が言った通り、このテレビ会議の通信は国防軍が警察の管理下にあるのだらう。盗聴されているのはいい気分ではないが、必要な情報を日本のメンバーに渡さないわけにはいかなかった。

それに未来自身、日本のプロジェクトメンバーに対して情報を与えるなど命令は受けていないし、リユーや生沢も遠からず渡米してCVCに参加する。

彼らもプロジェクトの機密性については熟知しているし、何も遠慮することはないだらう。

心配なのは、世間にこのニュースが流れることだけだった。

「日本のマスコミは、まだ嗅ぎつけてないんだね？」

「それは大丈夫だ。ただ、杉田の家族はかなり気を揉んでるがな。もう、母親と姉の一人がアメリカに着いてるだらう」

頷いた生沢が発した「家族」という単語に、未来の表情が曇った。彼女たちは確か、FBI本部近くのワシントンのホテルに滞在する筈である。

「先生の家族には、私から事情を説明しなきゃね」

「いえ、そこまではする必要はないでしょう」

あっさりと断言したリユーに、未来は僅かに眉を動かした。

「どうして？」

「杉田先生のご家族は未来が同じ職場にいることは知っていても、一緒に住んでいることは知らない筈です。そもそも先生の表向きの

仕事は、犯罪科学研究所の検査官ですし。捜査官である貴女との接点は少ないと、当局も説明しているでしょう。アメリカ政府も、FBIのサイボーグ保有に関係する情報を漏らさないに越したことはない、と考えている筈ですから」

言われてみれば、確かにそうだった。

未来も渡米当初は杉田と別の居を構えるつもりでいたし、杉田の家族は未来がサイボーグであることなど全く知らないのだ。全ての経緯を明らかにするとすれば、国家機密を垂れ流すことになってしまう。

自分から杉田の家族に伝えねばと気負っていた未来の肩からふつと力が抜けたが、被害者の家族に情報を与えないというのは理不尽な気がして、素直に安心することはできなかった。

それに、その状況に甘えている自分も卑怯だと感じてしまう。

しかし、個人の力ではどうすることもできない状況なのは変えられなかった。

「そっか……隊長からは、家族が望んだ場合は面会もあり得るって言われてたから」

息をついた未来は、内面の葛藤を押し隠したままで呟いた。

「恐らく彼は、貴女の反応を見るためにそう言ったのではないかと思いますよ」

「そりゃ、どうということだよ」

まだ会ったことがない上官であるCVC戦闘チーム責任者の言動について述べたリユーに、生沢が突っ込んだ。

「今回のような特殊な状況において冷静さを保てるかということは、公僕である捜査官において非常に重要です。もし未来が過度に取り乱していたり、犯人を殺害しかねないと判断した場合、何らかの対処が必要になりますからね。まあそれが特にないということは、捜査官の仕事に支障なしと思われたんでしょう」

遙か太平洋を越えたところにいる同僚女性に向けたリユーの言葉は、いつもながら的を得ていて優れた洞察に富んでいると感心する。

未来は正規の試験を受けて特別捜査官に選ばれた人材ではない。そのため、周囲の目は自分が考えているよりもずっと厳しいと覚悟しておかねばならないのは、当たり前のことだ。

未来はこの時、隊長のマックスが部下としての自分の度量を常時確かめているのだと、改めて思い知らされることとなった。

『ですが未来、日本へ強制送還される可能性は常にあると思っておいて下さい。我々にとっても、犯罪捜査は未知の領域です。私や生沢先生の力では、どうしようもないことだってある可能性もあるわけですから』

強制送還は、即ち任務の失敗を意味する。

一度捜査官としての実力に見切りをつけられて信用が失墜してしまえば、それを回復させることは極めて困難だ。日本へ戻ったら戻ったで、何らかの処分も下るであろう。

「……今回みたいに、ね」

リユーに釘を刺される格好となった未来が一言、漏らした。マックスは今朝彼のオフィスで話をしたとき、彼は杉田の失踪について未来に責任はないと確かに明言していた。

しかしあの時、もし未来の反応を見るために敢えてそう言っていたのだとしたら？

自らに責任を認め、杉田を助けるため捜査に加えて欲しいと懇願し、断固として主張を曲げない方が良かったのではないか？

守りたいものを何も持っていない、人間に対する情と熱意を持っていないと受け取られたのではないか？

次から次へと悔いが胸に沸き上がり、未来の内側に渦巻いていく。『言っておきますが、杉田先生の失踪について、未来が責任を感じることはありませんよ。四六時中一緒にいられたわけでもなかったんですから』

そこへ未来の心の内を読んだかのようなリユーの一言が、モニターのなかから発された。

何気なく、悪気の全くないそれである。しかし彼の声は、崩れか

かっていた未来の精神の脆い側面に鋭く音を立てて突き刺さり、重く鈍い痛みを深奥まで及ばせることとなった。

「違うよ、私のせいなんだよ!」

自身に対する激しい怒りに突き動かされた未来は、瞬間的にプロフェッショナルの仮面を捨てた。その後、反射に近い早さで口から飛び出てくる怒声を止めることができなかった。

「先生がいなくなる前の日の夜に、つまらないことで喧嘩して……次の日に私が起きてきたら、先生はもう一人で出掛けちゃってたんだよ。喧嘩なんかしなきゃ、一人でどこかに行くこともなかったのに。そうすれば、こんなことにならなかったのに!」

言葉の終わりに、苦い後悔の念が滲む。

激情に任せて大声を上げた未来であったが、今まで胸の中でくすぶっていた気持ちをぶちまけても、まだ彼女の感情ははけ口を求めてやまなかった。言葉では足りない思いが、今度は熱く込み上げてくる塊となって、瞳に涙という形で現れてくる。

モニターの中から未来を静かに見つめる二人の男は、じっと動かない。

彼女は目を逸らし、呻くように低く呟いた。

「もし……もし、先生が死体になって発見されたりしたら……私、どうすればいいの?」

ジャクソンやエマの前でも決して口にしなかった不安を、未来は初めて打ち明けた。

自分が何よりも恐れ、信じたくない、拒否したいと願う最悪の結果。

それに直面したとき、彼女は正気を保っていられる自信がなかった。

自分が杉田と険悪な雰囲気になることを避けていれば、こんな事態には陥らなかったのだ。

多分、一生悔やんでも悔やみきれない罪悪感から逃れられず、自分だけが生きていることに耐えられなくなるだろう。

未来は歯を食いしばって拳を握り、これ以上感情を表に出すことを堪えた。

涙が湧き上がり、押し殺した嗚咽で圧迫された胸が、酸素を求めて喘ぐ。しかし無理に息をしたら、胃の中の夕食と酒を吐いてしまふそうだった。

『……未来、お前のせいじゃない。いや、誰も悪くなんてないんだ。犯人を除いてな』

『生沢先生の言う通りです。原因が自分にあると思っていれば、怒りのやり場があるだけ幾らかはましな気持ちになるのでしょうか……自分をわざと傷つけるような真似は、やめた方がいいですよ』
俯いた未来が、膝の上で骨が浮くほどきつく両手を握りしめているのを見て、二人の男が静かに言葉を唇へと上らせた。

本当なら、彼らも泣きたい気持ちは未来と一緒にだった。

が、杉田の安否が不明の今、自分たちが崩れてしまつては、更に未来の不安を煽ることになってしまう。そうなつてしまつては、誰も異国の地で一人戦う彼女を支えられない。

強くはあつても精神的な脆さを抱えた未来を、自分たちが助けてやらなくてどうするのか。

日本に残つているリユーと生沢の自覚を強固にしているのは、仲間としてのそんな意志であつた。

『私も軍にいた時代は、よく自分のせいで部下や同僚を死に追いつたのではないかと、気に病んだものですよ』

不意にぼつりと昔を語り出したリユーに、未来は驚いて顔を上げた。ハーフの美青年の横では、生沢も意外そうな目を彼に向けている。

『フォース・リーコンにいた頃、主に中東が任地でしたからね。私はそこで多くの仲間を失つたし、作戦途中に大勢の行方不明者が出たこともありました。ですが……』

過去を噛みしめているリユーは懐かしそうで、だがあくまで静かな口調は乱さない。

以前、彼はアメリカ海兵隊時代に21歳の若さで中尉という、異例の出世を遂げたと聞いた。軍では通常、上官のポストが空かねばそうそう昇進することはない。つまり出世が早いということは、それだけ味方の犠牲が多く出る戦いを強いられたということだ。

世界第二次大戦以降のアメリカ軍は、イラン・イラク戦争以来大規模な海外派兵を実施していないが、中東は未だ混乱が収まっておらず、情勢は泥沼化の一方を辿っている。

彼はそんな場所で10代の頃から戦い、生き残ってきたのだ。

普段はとぼけて飄々としても、その下には地獄の最中で自らを厳格に律する心と、鍛え抜かれた鋼の肉体とを隠している。それが、リユーという男の真の姿であった。

そんなタフガイが発する言葉は難しくなくとも、端々に重みを感じられることが多い。

しかし、今彼が口に行っていることは、その分だけ仲間を助けようとする厚い情が込められていた。

『ですが、死体が見つかるまでは決して諦めてはなりません。そうしなければ、今自分ができることすらわからなくなってしまいますからね。今目に見えている事実を信じると言うことは、何よりも大切なことですよ』

暖かく、そして穏やかに語りかけたリユーのあとについて、生沢も固くなっていった肩から力を抜きつつ言った。

『俺も、医者 endpoint くれだからな。自分が担当した患者が亡くなったときは、無力感と後悔で何日も眠れなかったこともよくあった。でも、少しでも可能性があるうちは絶対に諦めるべきじゃないってのは、リユーと一緒にだよ』

職業は異なるが、生沢もリユーと同じく多くの人の死を目の当たりにしてきた。

医師は苦しむ者を救う使命を負っており、それが果たせなかったときの悔しさと無念さとは、命を失わせたという拭いようがない罪悪感をもたらず。

人の命を的にする者と、人の命を救う者。

両極端の立場にある二者はしかし、その裏側に同質のものを抱えていると見られるかも知れなかった。

生沢は、涙が乾きかけている未来を正面から見つめて低く続ける。「とは言え、いつもいつも気を張ってるわけにはいかねえ。今みために、言いたいことを全部ぶちまけることだって必要だ。辛ければ、いつでも言ってこいよ」

「……でも、かつこ悪いよ。私ばかり、泣いたり喚いたりして」
激情を受け止めてくれた男たちにきまりが悪そうにしている未来の声は、もう泣いていない。つい涙を見せてしまったことに、視線を背けてもじもじと肩をすくめているようだ。

「気にするな、仲間だろ。それに、前にも言っただよな？俺たち医者
は患者の抱えてることを分かち合っつて、一緒にどうにかしていく人種だつて」

「未来。我々はこの三年、ずっと苦楽を共にしてきたじゃありませんか。自分が重荷を色々抱え込んでいるなら、こっちにも分けられないと寂しいですよ」

ようやく定期ミーティングでも時折見せていた未来の姿を認め、生沢とリユーもかすかな笑みを混ぜた言葉を送れるようになってきた。

未来がモニター越しに見せた子どもっぽさの残るしぐさは、普段の毅然とした態度からは想像もつかない。しかし無防備なときに意識せずやってしまふ癖が出たということは、徐々に落ち着きを取り戻しているということでもあった。

「ありがとう、二人とも……」
今度は未来が、感情を込めて低く言う。口許には二人の仲間と同じく、穏やかな微笑みを浮かんでいた。

「とにかく今は、杉田先生を助けるためにできることを探して、手を尽くすべきです。こんな時に私たちが本土へすぐ行けないのは、本当に歯がゆいですよ」

『未来にばかり負担を押しつけて正直済まない、俺たちも思ってるんだ』

彼女の礼を区切りとしたリユーが具体的な話に内容を軌道修正すると、生沢が心底申し訳なさそうに声のトーンを落とした。

『こちらでも手はずを整えたら、上に渡米予定の繰り上げをかけ合います。今回のようなことが度々あつては、負担が大きくなるばかりですしね』

リユーの手元にあるスケジュール表らしいプリントには、きちんとした渡航時期についてはまだ未定としか書いていないようだった。未来と杉田がアメリカに来てから、7ヶ月が過ぎている。いい加減日本での残務整理や引継を終了し、AWPメインメンバーだった生沢とリユーも合流すべき頃だ。この二人がCVCに加わることは技術的面では勿論、杉田と未来の精神的なバックアップという側面においても大きな意味がある。

生沢もリユーの意見に頷いたが、この対応の遅れに関して一番やきもきしているのもまた、彼であった。

『しかし未来、くれぐれも無茶はするなよ。お前は今慣れない環境にいて、とんでもないストレスがあるってことを忘れるな。お前には俺たちだつてついてるんだ。たとえ、身体がそつちになくてもな』

『仕事をこつちで受け持つことはできなくても、精神的な負担を分かち合うことはできるんです。こんな時だからこそ、私たちに頼るようになしてください』

「何だかミーティングって言うより、カウンセリングみたいだね」

生沢とリユーが口々に寄越すアドバイスに、未来が苦笑する。

『いいじゃねえか。お前や杉田は、ただでさえ気が滅入るようなものを毎日扱わなきゃならないんだからな。精神面での支えが必要だつてのは、最初からわかつてたことだ』

「確かに、どうして人間がここまで酷いことができるんだらうって、そう思わない日はないよ」

その気が滅入るようなものを、生沢もFBIに来たなら日々手にしなければならぬのである。わかつてはいることだが、生沢の髭だらけの顔から視線を外した未来の声が温度を下げた。

「だから、良心を持たない人間って言うのが本当にいるんだって割り切らざるを得ないんだよね。他人を傷つけることに対して、何も感じない奴。人間の面をした鬼か悪魔で、自分たちとは違う存在なんだって思わないと、やっていけないんだよ」

恐らく大丈夫だとは思いますが、未来は生沢への警告も含めて語調を少し強めていた。

僅か2、3歳の幼い子どもをレイプした挙げ句に頭を叩き割ったり、やはりレイプした女性をバイクで引きずり、硫酸を喉に流したりと、どんなに現場慣れした捜査官でも目を覆いたくなるような、悲惨な事件は後を絶たない。

戦場で地獄に幾度も身を晒したりリユーと違い、生沢は医師だ。今まで苦勞に満ちた人生を歩んできてはいるようだったが、基本は性善説を取る立場にある筈である。

敢えて彼からの答えを待たず、未来は半呼吸の間を取った後に語気を静めていく。

「……色々話したら、少し落ち着けたみたい。ありがとう」

「礼なんていらねえよ。お前のやつれた顔を見ると、こっちまで落ち着かなくなってくるからな」

その意図を汲んだかどうかはつきりとは示さず、モニターの中の生沢が照れくさそうに彼女からの視線をよけた。

「今のところ、我々が頼れる情報源は未来だけですからね。状態が何とかわかりましたし、良かったですよ」

未来が話に込めた意味は、頷きながら言ったリユーに強く伝わっていた。

彼女が自分以外の人物に気を回す余裕を取り戻したのを確認したリユーの態度もまた、普段と同じ明るさがあるそれに戻っていた。

言いにくそうにしつつ、未来が溜息と共に本音を口こぼす。

「実は私、このミーティングが怖かったんだ。お前がついていながらどうしてこんなことになったのかって、二人から責められても仕方がないって思ってた」

「んなわけねえだろ。お前はもしリユーが不治の病にかかったとして、一緒に仕事してる俺を責めるってのか？」

大げさに呆れて見せた生沢は、ジャクソンが何てこった、と言いたげに肩をすくめる様子と重なって見えた。

熊のように大柄で、一見するとがさつに見える担当医の問いに、未来は首を横に振って答えた。

満足そうに軽い調子に言葉を乗せ、生沢が笑って見せる。

「それと同じってこった。むしろ、そんなに懐が浅い奴だと思われただことの方が堪えるぞ」

「まあ、懐が寂しいのはいつものことですよですけどね」
「うるせえよ！」

すかさず突っ込みを入れてきたリユーに、ひねりがなく荒っぽい返しを生沢が叩きつける。

「未来には本当に申し訳ないですが、もう暫くそちらで踏ん張っていてください。私たちも、予定の先が見えたらすぐに知らせますから」

そうかと思うと、次の瞬間にはもうリユーが真面目くさった顔でまじめに入っていた。

彼はミーティングを締めるこの話まで終始、落ち着いた物腰を崩すことはなかった。しかし仲間のために何もしてやれず、苛立ちを隠し切れないのは間違いない。

「二人が来てくれるのを、首を長くして待ってるよ。それまでも、頼りにしてるから」

こんな時くらいは、彼らに遠慮などせずに頼るべきだ。

以前の未来なら、こんな何気ない台詞を口にするのにも勇気を必要としていたが、今は違う。

誇るべき、愛すべき仲間たちに力を貸してもらうのは、何も恥じ

ることではない。

心からそう思えるくらいに、生沢とリユーの存在は未来の中で大きなものとなっていた。

どこかで、携帯電話の呼び出し音が鳴っている。

強化されている筈の鼓膜をちゃんと震わせないその電子音は小さなもので、どこから聞こえてくるのかもわからない。

眠りにある意識から這い上がる途中にある感覚は、厚い岩壁に邪魔されているかのように、ぼやけた感触しか未来に届けてくれないようだった。

だるい右腕をそれでも無理矢理伸ばし、側に置いてあった固くて小さな箱を握りしめる。

「ミキか？」

手の中で受話ボタンを押す前に、特殊捜査チームのウォーリーの声が聞こえた気がした。

「……残念だよ。本当に残念だ」

心なしか、彼の声が震えているのがわかる。

同僚の捜査官が伝えんとしていることは、その先を聞く前からわかっていった。

心臓が一瞬大きく跳ね上がり、止まり、次に激しい鼓動を打ち出した。

胸の中で暴れる脈動は未来の背中に冷たい汗を噴き出させ、手足に沸騰しそうな思いに支配された血を瞬時に運んだ。

「待って、やめて！ウォーリー……！！」

絶叫に近い自らの声と、狂おしいほどに乱れた脈とが、耳の奥で重なった。

未来は叫んだ自分の声で目を覚ますことになった。

顔の側にある右手が軽く握られているが、何も持つてはいない。

身体はしんとして寒い寝室のダブルベッドに横たわり、暖かい毛布にくるまっている。が、額と背中汗で濡れており、呼吸が乱れていた。スエット地のパジャマが汗に濡れて肌にまとわりつき、気持ちが悪い。

寝返りを打ってから額に張りついてた髪を払うと、彼女はそこで初めて携帯電話が本当に鳴っていることに気がついた。身を起こしてサイドテーブルのスタンドをつけ、細めた目で充電器に差し込んである仕事用の携帯電話を覗き込む。

白熱灯に照らし出されている青っぽいディスプレイでは、ウォーリーの名前と携帯電話番号が点滅を繰り返していた。他の物音が何一つしない、静まり返った家の中に無機質な呼び出し音が小さく響き渡り、早く出ると目に訴える催促が続いている。

夢で聞こえていたこの音だけは、現実のものだったのだ。

胸がつぶれるほど嫌な予感がする。

しかし、無視するわけにはいかなかった。

敢えて頭の中を空っぽにしてから、乱暴に携帯電話本体を掴み上げる。

『ミキか？クラークだが』

受話ボタンを押して電話を耳に当てるなり、ウォーリーの声が事務的に話し出した。

『身体をちぎられている死体が発見されたと、郡警察から連絡があった。場所はコロニアルビーチ、キングス・ハイウェイ4798。被害者は黒人の若い男だ』

彼が間髪入れずに告げたのは未来の中で最悪ではなくとも、まだ顔を知らない誰かにとっては最悪のものであった。嫌な予感は当た

らずして遠からずというところで、かなり悪い知らせであることは変わらない。

つい昨日もクワンティコのオフィスで目にした、凄惨な現場写真が頭の中で鮮明に蘇る。

その光景が彼女のまだばやけている意識を揺さぶり、覚醒へと導いた。起き抜けの声は掠れているが、はっきりとした口調でウォーリーに問う。

「例の人形も見つかったの？」

「まだ確認はしてないが、多分あるだろう。地元の駐在事務所の連中と、ジャクソンにも連絡が行ってる。CVCの担当者では多分お前が一番早く着けるだろうから、記者連中に嗅ぎつけられる前に、できるだけ現場の状況を押さえるようにしてくれ」

もしマスコミにこのことを勘づかれて現場に殺到されたら、現場が土足で踏みじられることになる。重要な証拠となり得る繊維やごみなどの微物類は、ちよつとしたことで失われる危険があるのだ。「了解。すぐ行くよ」

ウォーリーの言葉に頷いて電話を切ると、未来はベッドから飛び降りた。枕元の目覚まし時計は午前3時17分を指しており、家中はおろか外もまだ真つ暗だ。

未来が疲れ切った身体をベッドに潜り込ませたのは1時過ぎだったから、浅い眠りを2時間程度しか取れなかったことになる。しかし顔を冷たい水で洗い、長い髪を頭の後ろでひつつめて服装を整え、手袋やカメラ等の犯罪現場搜索道具を詰めた黒いナイロン地のバッグを取り上げたときには、眠気などすっかり吹き飛んでしまっていた。

10分の後、彼女は黒のダウンジャケットにインディゴのデニムNOTSの訓練でも使っているコンバットブーツといういでたちで家の玄関ドアを閉め、防犯ベルをセットした。回りの家々のポーチに掲げられた玄関灯やクリスマスツリーが暗闇にささやかな光を投げかける中、白い息を散らしながらガレージへと走る。

ダークブルーのフォードの運転席へ飛び込んでエンジンキーを回し、メーター類を鮮やかな緑色に点灯させて、冷え切った車へ命を吹き込む。ナビに目的地の住所を告げると音声認識が働き、小さなモニターに所要時間と道のりがガイドされた。

静寂に満たされた冬の早朝に未来のおんぼろフォードが滑り出したのは、11月29日午前3時32分だった。現場までは直線距離で約25マイル程度で、キングス・ハイウェイは自宅から2マイルと離れていない、フレデリックスバーグのダウンタウンから乗り入れることができる。現場到着は4時30分頃の予定だが、それまでにマスコミのヘリコプターが現场上空まで辿り着いていないことを願わずにはいられない。

ヘリコプターのローターが巻き上げる強風は付近の地上を煽り、微細な証拠を吹き飛ばしてしまう可能性が高い。故に警察関係者やFBIは、この忌まわしき空飛ぶ箱が大嫌いだった。

「まったくもう、こんな時に……」

ナビの音声に従いながらヘッドライトの先を見つめ、暗い道を疾走する未来は、日本語でぼやかすにはいられなかった。自分は杉田の行方不明の件だけで頭が一杯だと言われても仕方がなかったが、そんなことはお構いなしに事件は起きるのだ。

夜中に同僚や警察関係者からの一報で叩き起こされる日常に慣れつつはあるものの、世間を騒がせている連続殺人事件の現場に行くのは初めてだ。それにティーズの被害者の死体は、恐らく自分が扱ってきた事件の中で最も酷い状態にされているだろう。詳しい検分のためには、捜査官が解剖を含む検死作業に立ち会う必要も出てくる可能性がある。

よほど度胸が座っているか、変わった趣味をしている者でなければ、解剖に直接立ち会うことを好む捜査官はいないと言っている。刑事や警官の中にはモルグ、つまり検死局の解剖施設に決して近寄ろうとしない者もいるぐらいだ。

今の未来は姿を消した愛しい男が冷たいステンレスの解剖台に横

たわり、メスで身体を切り開かれているところをどうしても連想してしまっていた。彼の変わり果てた姿を考えると、それだけで発狂しそうになる。

もし立ち会わねばならなかったとしたら、自分は外観観察だけにしておいた方が良さそうだ。

幸いジャクソンも、未来の精神的な負担を考慮するだけの気遣いをしてくれる男である。

しかし暫くはまた、悪夢に悩まされる日が続くかも知れない。現場の搜索が終了したらクワンティコのエマのもとを訪れて、精神安定剤か誘眠剤でも処方してもらおうか。

そう考え始めた頃、未来のフォードはフレデリックスバーグの静まり返ったダウンタウンを走り抜け、一路東へと向かっていった。深夜故に全く他の車はおらず、この分ならばナビの予想時間よりも早く現場に到着できるだろう。死体発見現場は街外れの交通量が少ない一般道路脇で、街灯も殆どない。こう言うときは未来の瞳に内蔵された闇視フィルターのお陰で、先が見通せるのが非常にありがたかった。

暗闇が支配する空の様子は車の中から確認できないが、月明かりが全くないようだ。厚い雲が天を覆っているのなら、夜が明けてからもかなり寒くなりそうな予感がする。

冷たく暗い空気のうちねうねと続いているハイウェイの途中では、やたらと道路補修工事の現場が目についた。本格的な冬を前にして、傷んでいるアスファルトを今のうちに換えておく必要があるのである。車通りが絶えた真夜中は、おおっぴらに工事ができる時間帯なのだ。

未来が車窓から4回目に目にした現場では、かなりの規模でやっているようだった。白く輝く反射板をつなぎに貼りつけた作業員を腹に収め、車輪になっっている足で器用にでこぼこ道を走る大型ロボットが見える。動いているロボットは数台のようだが、足やアームの形状が異なる大小の作業用ロボットが道路脇に10台以上並んで

いた。

未来もアメリカの道路で実際に作業をしているロボットを見るのは初めてだ。しかし、はげかけのアスファルトを一気にひっぺがしたり、重い資材をアームでつまみ上げている姿をいざ確認すると、あれなら人間の身体を引き裂くことなど容易いだろうと納得できた。このような大型重機ロボットは、アメリカで一般に普及している数少ないロボットのうちの一つである。昔は工場の中でのみ使用されていたものに一定の基準が設けられ、その範囲内においての生産が許可されたものだ。

20年ほど前は高価な機械だったが、工業製品や自動車部品における新素材の開発と大量生産に伴い、ロボットパーツもコストが低下して導入しやすくなったということもある。今では人間が乗り込むタイプの作業用ロボットはピックアップトラック並に安く、重量も軽いものでは小型車とほぼ同じくらいのもも出回っている。この中でも中型タイプのロボットは用途が実に様々で、建築や工場内の運送などで幅広く利用されていた。

しかし開発が容易になった分、正式な登録がされていないロボットが横行していることも事実である。テニアーズ事件でも、違法製造されたロボットが更に改造されたものが使用されていることは、ほぼ間違いない。

CVIは、将来的に全米のロボット犯罪全般の取り締まりも視野に入れて設立された組織である。その最初の事件がロボットを悪用した連続殺人なのだから、皮肉極まりない状況だと言えるだろう。

こうした犯罪を未然に防ぐには、まず違法ロボットの製造業者を摘発せねばならない。が、まだ生まれたての組織ではとてもそこまで手が回らない。この先十何年とかけて気長にやっていく以外、確実な手段は存在しないのだ。

やがてナビが示した目的地から半マイル（約800メートル）以内に入ると、パトカーの回転灯が闇に青い光をちらちらと放っているのがわかるようになってきた。車を進めるにつれ、その数は増え

ていきている。未来がスピードを落とした頃には、道の両側の至るところに停めてある警察車両が目につくようになっていた。

その中に、見覚えがある車があった。未来がフレデリックスバーク駐在事務所に勤務していた時分によく話を聞きに行っていた、ウエストモアランド郡警察のカーター刑事のものだ。後ろに丁度1台分のスペースが空いていたため、彼女はそこにフォードを滑り込ませてエンジンを切った。

助手席に置いてあったコートを羽織り、現場用のバッグを掴んで車から降りると、制服私服が入り乱れた警察関係者たちの話し声と靴音、衣擦れの音が一気に鼓膜の奥へとなだれ込んでくる。明け方よりも早い時間の空気は、皮膚に痛みを覚えるほどに冷たい。

それもそのはずで、すっかり葉を落とした木々の枝の間から覗く真っ黒な空を仰ぐと、細かい雪が軽やかに舞い落ち始めているのがわかった。

現場は片側一車線の狭い道路から脇に逸れた林の中だ。そのため、道路自体が赤いコーンと立入禁止を示す黄色いテープとで遮られている。その手前には近所の住人らしい人々が数人固まっており、ベツドから起き出したままに上着を羽織った格好で話しているようだった。雪は彼らの髪やコートに小さな水の球を作り、アスファルトにも水の模様を描き出している。

未来は一度軽く身震いしてから野次馬の横を通り過ぎ、騒ぎの中心である道路の先へと歩き出した。道に渡された黄色いテープの前では、プロレスラーのような体格の警官が威嚇の視線を周囲に投げかけている。

巷を騒がせている連続殺人事件の発生に緊張しつつ立っているらしい彼に身分証を出そうと、未来は歩きながらコートの内ポケットに手を突っ込んだ。

「ミキなのか？久しぶりだな」

その小さな背中に、若い感じの男の声がかけられる。彼女は門番である警官が自分を追い返そうとしている気配を察してむっとしな

がらも、振り返った。

「あ、カーター刑事……」

「彼女はFBIの特別捜査官なんだ。現場には俺が案内するから」
後ろから歩いてきた男は未来の言葉を遮って警官に言つと、さつさとテープを跨ぎ先へどんどん歩いて行ってしまった。未来が慌てて身分証の写真と署名が警官にはつきり見えるように掲げ、テープを飛び越える。

「驚いたな。突然いなくなったから、てっきり余所へ転勤になった
と思つてただけだ」

「今はクワンティコにいます。一連の事件で、新しく担当にな
つたんですよ」

後ろから走つてきた未来が追いついたタイミングで、彼はちらりと視線を投げかけてきた。

「そうか。道理で、FBIが検死官よりも早く来るわけだ」

ニコラス・カーター刑事は、こげ茶色のくるくる巻いた髪に緑がかつた瞳をした29歳の白人男性だ。顎にだけ髭を生やしているのは、欧米人には珍しい童顔を嫌つてのことである。背は低めで、やや頼りなげな細い身体をしていた。

未来がフレデリックスバーグ駐在事務所の捜査官として着任した当時、ウエストモアランド郡警察にアロンと挨拶に出向いたことがあつた。そこで差し入れとして、紙箱入りの38口径の弾丸1ダースを手渡した相手が、このニコラスだつた。彼は歳の近い未来とは気さくに話してくれ、FBIが担当する事件の捜査にも協力的な人物であつたが、今は暗い影が顔に落ちていたようだつた。

道路の要所に設置された捜査用ライトの強い光を浴び、鑑識のスタッフが行き交う間をぬいながら、ニコラスは未来に説明した。

「とりあえず死体にはまだ誰も触つてないし、なるべく近寄らないようにしてある。うちの連中は、周辺の捜索に当たつてるところだよ」

「雪が降ってきてるし、早くしないといけませんね」

未来が寒さのためにかじかんできた手を擦り合わせて息を吐きかけると、ニコラスは無言で頷いた。そして腰くらいまで高さがある草が既に人に踏まれて倒れ、ちよつとした道を作っている道路脇の茂みへと入っていく。その先に、問題の死体があるのだ。

「死体には雪避け用に、ビニールシートを被せておいた。調べる時だけどければいいだろう」

雪は未来が車を降りてから、勢いを増してきている。この分だと夜が明ける頃にはもう辺りが薄つすらと白くなるくらいだろう。微細な証拠が雪に隠されてしまう前に、検分を急がねばならなかった。

「死体の第一発見者は？」

「長距離のトラック運転手だ。見ての通り、この辺りにはサービスエリアが近所にならないからな。ちよつと用を足そうとトラックを停めて林の奥に入ったところで、運悪く死体を発見したと言ってるんだ。一通りの聴取はして、今は車の中で待機してもらってる」

ニコラスの未来に対する返事は、必要以上に淡々としていた。

損傷の激しい遺体は、死体を見慣れない者にそれだけで激しいショックを与える。気の毒なトラック運転手にとって、恐らく今日が人生で最悪の日に違いない。

とは言え今が冬で、屋外が凍えるほどの寒さである分だけましな方だ。遺体の腐敗が早い夏などは凄まじい腐敗臭が現場周辺に充満して、この世のものと思えない凄惨さとなるのだ。

「その人に、私も話を聞けます？」

「もう少し落ち着いてからじゃないと駄目だな。かなり動揺してるようだし。まあ、あんなものを見せられちゃ無理もないけどな」

未来の質問に、ニコラスは首を横に振ってぼそりと答えた。

彼はまだ若く、市民の役に立ちたいとまだ青臭い使命感を引きずっている年齢である。普段は殺人事件もそんなに多くないこの平和な地区で、それはある程度叶っていると云っても良かっただろう。なのに、ここへ来て連続殺人の被害者が出たのだ。

「テレビやインターネットでの事件を見る度に、うちの管轄で被

害者が出ないことを祈ってたんだが。神様も、意地悪をするもんだ」
小さく溜息をついたニコラスの声は、明るいと言えない。刑事と
いう職業柄、肝っ玉がすわっていて男っばい人物が多い中で、彼は
異彩を放つタイプだった。

しかし彼の暗い調子に合わせたら、未来までやる気が削がれてし
まう。無言で頷くだけにして、未来は質問を続けた。

「被害者の身元はわかってるんですか？」

「いや。何も持ち物が無いみたいだし、最近搜索願が出されたとい
うわけでもなさそうなんだ。過去5年分の行方不明者のリストを確
認してるところさ。しかし……」

そこでニコラスが言葉を濁す。

「現場付近で写真入りの身分証でも見つからない限り、すぐには難
しいだろう。何せ、頭が殆ど潰れてるからな」

彼が次に吐き出した嘆息は、先のものより大きくなっていった。

未来はようやくその時になって、5番目の遺体が発見された現場
に転がっていたジューン人形のことを思い出した。確か、頭が踏ま
れたようにぺちゃんこにされていた筈だ。

自分が生唾を飲み下した音が、やけに大きく聞こえる。この寒さ
のおかげで死体はまだ腐敗していなくとも、相当酷い状態であるこ
とは想像に難くない。未来は捜査道具を入れたバッグの柄を、無意
識のうちに強く握り直していた。

やがて茂みが終わり、二人は落ち葉が地面を覆っている林の中へ
と出た。そこから右方面に22ヤード（約20メートル）程度行っ
た先では、鮮やかなブルーのビニールシートが地面に広げられてい
る。その回りでは小さな証拠物品が落ちていないかどうか探すため、
郡警察の鑑識スタッフがマグライトや金属探知機、小さな集塵機を
手に、何人も地面に這いつくばっているのが見えた。

「あれですね」

未来がバッグから手袋と一眼デジタルカメラを取り出すと、ニコ
ラスが頷いた。足を止めた彼を残し、彼女は小走りにブルーシート

へと近寄っていく。

僅かながらに腐臭と血の臭いが感じられたが、木々の間を吹き抜ける冬の風が臭いの大半を空へと散らしてくれているのだろう。未来は地面にかがみ込み、雪が白い粒を点々と残し始めているブルーシートの端をそつと持ち上げた。

途端にむつとする血の臭いが広がったが、息を予め止めていた未来は顔をそむけなかった。

死体の詳細を見るには光量が足りない気がするが、未来の場合は瞳の暗視フィルターを働かせるだけで良く、追加の明かりは必要ない。途端に視野が明るく色づいて、昼間と同じ色彩が蘇った。

まず彼女の瞳に飛び込んできたのは、卵の殻が割れた時のように歪な砕け方をした頭蓋骨のかけらと破けた皮膚、その間から押し出されている血まみれの脳だった。

加えて不自然にへこみがついた頬、黄色い脂肪組織や白っぽい筋組織が首の上にあるのがわかった。浅黒い皮膚の裂け目の下にあるものが剥き出しになっているのだ。

眼球は殆ど飛び出しており、めくれ上がった瞼は瞳を保護する役割を果たしていない。鼻は赤黒い血肉のどこにあるのかわからず、口も潰れた顎に残された歯が見える辺りにあったのだろうと考えるしかなかった。

シートの下にあった若い黒人男性と思しき遺体は、頭部が原型を留めていない有様だった。事件を知らない者が見たら、大型の車両に頭を轢かれたのかと思ってしまうかも知れない。

しかしこの遺体では首の皮膚が引つ張られたように裂けており、身体がうつ伏せになっているのに対し、顔は仰向けになっている。詳しい検死をすれば、彼の首が無理矢理捻じ切られたことがはっきりするだろう。

無惨に割れた頭から垂れた体液と血液は、落ち葉と地面をまだら模様染めていたが、ここで頭を割られたにしてはその量が少なすぎる気がする。また、ブルーシートを更にどけて全身が見えるよう

にすると、血染めの背中に穴が開いているのがわかった。

背中を上にして倒れている遺体は、ベージュのニットに色褪せたブルーのジーンズとスニーカーという身なりだ。ジーンズの尻ポケットは平べったいままで、見たところ何も入っていないようである。ニットは首と穴の開いている箇所を中心に真つ赤になっており、地面にまで血が垂れていた。恐らく犯人から逃れようとしたところを、背後から撃たれたのだろう。

しかしこれも、地面に流れ出している血液の量が少ない。今まで被害者と同じように、彼はどこか別の場所で殺されてからここに運ばれてきたのだ。

未来はCVCの備品ラベルが貼られたカメラの電源を入れ、死体の写真を様々な角度から撮り始めた。

検死官が来るまでは死体に手を触れられないため、主に傷ついている箇所と倒れているそのままの様子、上を向いた手のひらを中心に撮影していく。まだ真つ暗に近い林の中で強烈なフラッシュが稲光のように白く光り、その瞬間にあるものを切り取って電子媒体に記憶させていった。

未来が片側からの撮影を終え、死体の反対側に回り込もうとブルーシートを折り返すと、その下に隠れていた地面に小さな肌色の塊があるのがわかった。

慌てて死体の周りを回り、彼の足元近くにあつたその物体を確認する。

それが何なのか、ある程度の予想はしていた未来であつたが、それでも心臓の嫌な鼓動を抑えることはできなかった。

アメリカの幼い女の子たちが良き遊び相手としている、金髪の白人少女をかたどつたジューン人形。それは今回の現場でもまた、無惨な姿で転がされていた。

服は着せられておらず、上半身と下半身のパーツが外され、右脚も股関節の部分から壊されている。そのすらりとしたビニール製の右脚は、仰向けの胸に踵落としをするかのように重ねられていた。頭は無傷だが胴体からは外れており、長いブロンドの髪を振り乱してもなお、その顔は無邪気な微笑みを振りまき続けている。

未来は短く息を吸ってからゆっくり吐き出して呼吸を落ち着けると、まず壊れた人形の場所がわかる全体写真を撮った。続けて死体と同じく、様々な角度からの撮影を繰り返していく。

彼女は画像確認の後にカメラをバッグにしまうと、入れ替わりに証拠保管用のビニール袋と茶色い紙袋数枚を取り出した。慎重にジ

ユーン人形の各パーツをつまみ上げ、別々の袋に入れて口のチャックを閉じていく。更にそれを紙袋にしまつてから、事件のコードネームや日付などを手早くボールペンで書き込んだ。

全てが、これまでの事件と一緒だった。

未来が死体発見直後の現場に直接来たのは初めてだったが、その様子はクワンティコで見た報告書の内容とまるで同じだと言っても良かった。

ハイウェイ脇の雑木林に壊れた人形とともに打ち捨てられた、人間の壊れた死体。

人種、年齢、性別は関係なく、恐らく犯人の殺人衝動を叶えるためにのみ、被害者は命を奪われている。一連の事件は酔っぱらって喧嘩をした挙げ句、あるいは感情のもつれから起こされた殺人ではない。明らかに、異常者による快樂殺人だった。

今まで殺された6人の被害者たちには、まだ青春の入口にも立っていない子どもや、働き盛りの男性もいた。彼らの無念を思うと、やり切れないさに肩がずんと重くなる。サイボーグの自分とジャクソンが、捜査官の中でも特別製の身体を持つ自分たちが捜査に加わりながらも、次の殺人を防ぐことができなかったのだ。

例えそれが他人から責められることではないとしても、未来にとつてはこれが初めて担当した連続殺人事件だ。恐らく、この気持ちは一生忘れることができないだろう。

悔しさと悲しみで引きつった顔を少しでも緩めようと、彼女は意識して目元から力を抜き、替わりに周囲の音を探った。

強化された聴覚に流れてくるのは警察関係者たちの囁きや無線の応答、落ち葉が積もった地面を踏みしめるブーツの音、鑑識のスタッフが矢継ぎ早に切るカメラのシャッター音など、様々だ。感度を上げると細かい雪が枯れ木に当たる硬い音や、冷たい風が梢の間を駆ける甲高い音も混ざってくる。まだ早朝のせいかな、ハイウェイを通るうとして行く手を遮られる車のブレーキ音や、悪態をつくドライバーの声は聞こえてこない。

そこへ、背後から大股で近寄ってくる足音があった。調子からして、ニコラス刑事だろう。

「そろそろ検死官が到着するが、どうだ？」

その声を合図にしてしゃがみ込んでいた未来が立ち上がり、ニコラスの方を振り返った。

「死体の写真は撮りましたけど、触ってはいけません。例のものだけは回収してもらいました。見えるところにあつて良かったですよ。ここにあつたんですが、鑑識の方が後で微物を回収して頂けると助かります」

アメリカにおける通常の殺人事件では、検死官の検分が終了するまで何人も死体に手を触れることが許されない。ただしこれには例外が存在し、司法省の命令があつた場合はこの限りではなかった。テイアーズ事件では人形の情報を外部に漏らせないため、このケースに該当することになるが、捜査官は死体の扱いに精通しているわけではない。

死体を動かすことによつて微細な証拠が失われる可能性があることから、未来はなるべく死体に触りたくないと考えた。人形が死体の下敷きになつていなかったことは、幸運と言えるだろう。「そこは念入りにやるように言つておくよ」

彼女が指し示した場所を確認して、ニコラスは頷いた。

「じゃあ、検死官が来る前にシートを戻したいので。手伝つて頂けますか？」

もう一度頷き、若い刑事は未来の作業に手を貸した。避けてあつたブルーシートが二人がかりで今一度死体の上に被せられ、悲惨な状態が他の者の目から隠される。激しくなってきた雪がその間にも鮮やかなブルーに白いまだら模様をつけ始め、彼らはどちらからもなく寒さに身震いした。

「やはり、例の事件と同じ犯人なんだろうか？」

「断言はできませんが、極めて似た状況だと言つていいと思います。こいつのことは、情報が伏せられていますしね。他の誰かが模倣する

ことはできませんから」

コートの襟を立てながら近寄ってきたニコラスへ、未来が肩に掛けた黒いナイロンのバッグを軽く押さえて見せる。

ティアーズ事件の現場に残される人形のことは最重要機密で、検死局にもその情報を知られるわけにはいかなかった。だから、検死官よりもFBI捜査官の誰かが先に現場へ来る必要があつたのだ。

今のところ、マスコミへの情報流出は辛うじて防げている。しかし、気になるのは警察にこのことを知る者がいないかどうかだ。

さり気ない口調で訊ねながら、未来はニコラスの顔を見上げた。

「郡警察の方で、これを見た人はどれぐらいいますか？」

「俺と、一緒に来た警官の一人だけだな。俺たちでブルーシートを被せて、すぐFBIに連絡したんだ。そいつにもこのことを口外しないようきつく言っているし、奴は一緒に仕事をするようになって長い。彼から情報が漏れることはないと思ってくれていいよ」

「それなら、心配はなさそうですね。ありがとうございます」

呟くように言って、未来は辺りをもう一度見回した。

郡警察の鑑識スタッフや自分たちがいる場所は、林に入つてすぐのところを開けた印象がある。しかし、ここまでは背の高い枯れ草がびっしりと覆っており、ハイウェイからは見通せない筈だった。

「この辺りは、普段殆ど人が立ち入らない場所のように見えますけど」

ベージュのコートに白いヴェールを下ろそうとしている雪を手ではたきながら、彼女は警官たちが出入りする雑木林の入口に目をやった。

「どうして第一発見者は、死体を発見できたんでしょうね？」

「車のライトが当たったときに草の一部が倒れているのが見えて、中に入りやすかったそうだ。犯人と同じ場所からここへ入り込んだんだな」

ニコラスも、追加の大型ライトを運んできている警官を見つめながら答えた。

「あそこに、重機のものらしいタイヤ痕がついていた。その後を辿ると、また同じ場所へ戻っていつているのがわかる。ロボットを使って、死体をここに置いたんだろう」

彼が指差した先は、警官隊や自分たちが分け入ってきたのとはまた違った場所だ。未来が瞳の暗視フィルターの感度を更に上げて、ズームも絞る。

すると黒い土がところどころ露出している地面に、普通乗用車のタイヤ跡とは異なる深さ数センチほどの溝が何本も穿たれているのが判別できた。幅が4インチ（約10センチ）以上あるタイヤが最低4つはついていると見える大型機械のものであることは、一目見ればわかる。轍の跡はニコラスが示した方からほぼまっすぐに死体の方へ伸び、そこからまた同じ場所へと折り返していた。

「タイヤ痕の写真はもう撮ってあるから、報告書に添付して送ろう。それから、どういうルートを取ったかも詳細な図が必要だな」

「タイヤ痕の型は取れましたか？」

「ああ。ここの土はさほど乾燥していなかったから、石膏を流しても全然崩れなかったんだ。しっかりしたのが取れてるよ。犯人の足跡らしいものは見つかってないけど」

この辺りでは、ここ一週間は雨も雪も降っていない。粘り気があるって硬めの土は、人間より遙かに重量があるロボットの痕跡しか刻んでくれなかったのだ。が、手に入る証拠は何でも重要になる可能性がある。

「お願いします。この事件では、今まであまり証拠らしい証拠が出てきてませんし」

未来がまたニコラスの顔を見上げると、彼は疲れた表情で黙ったまま頷いた。

ティアーズではこれまでの被害者全員が身元を特定できているが、今回のように搜索願も出ていない人物で、顔の損傷が酷いケースは初めてだった。

そう言った意味では、犯行のパターンに微妙な変化が出てきてい

るのかも知れない。

この男性が一体誰なのかが、重要な要素だと言えるだろう。彼がどこに住んでいて、どんな職業に就いていて、どうやって犯人と接触したのか。これまでの被害者と何が違っているのか。

そして、何故殺されなければならなかったのか。

特殊捜査チームを始めとして、各チームが全力で解き明かさねばならないのだ。

「何か、被害者の身元がわかりそうなものはあったのか？」

そこへ、思考を見透かしたようなニコラスの質問が降ってくる。

未来は考えるのを中断して、首を横に振った。

「いいえ。札入れなんかは、持ってないようには見えませんでした。ジーンズの前ポケットなんかはまだ見ていないのでわかりませんが、そこは検死官が来てからでいいかと思ひまして」

死体そのものや死亡時の所持品を検分するのは、あくまで検死官の仕事である。死体を現場で確認し、モルグで調べ上げ、所持品と報告書を警察に送る役目を負っているのが彼らだ。

アメリカではそれぞれの調査機関に独自の捜査権があり、検死局もその一つだった。彼らは自分たちが持つ死体に関する権限について、他の者に侵されることを非常に嫌っている。知識がない者が死体を不用意に動かしてしまい、証拠が失われてしまうことに神経質なのだ。

従って、撃たれている被害者の身体にまだ弾丸が留まっているかどうかや、どんな銃が使われたかなどはここではわからない。

「そういえば、薬夾や弾丸は見つかったんですか？」

弾丸のことに考えが及んだ未来が自然な疑問を口にしたが、答えに期待はしていなかった。これまで、どの現場でも薬夾は見つかっていないのだ。

「いや、両方とも死体の側にはなかった。死体をどけたら、その下も調べるけど」

ニコラスの返答も、やはり想定通りである。犯人が複数の銃を所

持っているのでない限り、9ミリ口径の弾丸が被害者の体内で見つかるだろう。

今、枯れ葉の上に倒れている身元不明の黒人男性の身体は、凍てつくような風に晒されているせいで急速に冷えつつある。恐らく死後硬直も始まっているだろうが、筋肉が完全にこわばって扱い辛くなる前に、モルグへ運び込んでしまいたい。口に出さずとも、ニコラスと未来が考えていることは同じである。

未来がコートの左袖をまくり、細い手首に不釣り合いなダイバーズウォッチの文字盤に目をやったところで、聞き慣れた足音が近づいてくるのがわかった。

彼女が聴覚の感度を上げると、ジーンズとジャケットの裏地が擦れる高い音や、いくつもの雪が革の上を滑っていく硬質な響きが大きくなってくるのも感じられる。

「悪い、遅くなっちゃったな」

身の丈は2メートルに届こうかという黒人の大男が未来の姿を認め、ハイウェイに抜ける茂みから歩み寄ってきていた。

未来の次に到着したFBI捜査官、ジャクソンが音の発生源であった。

初対面であるジャクソンとニコラスが手短かに自己紹介をした後、ニコラスは鑑識スタッフの様子を見るために林の奥へと行ってしまった。

遅刻常習犯のジャクソンにしては、現場到着が早いと未来には思えた。

「誰かと一緒に来たの？」

「ああ。ウォーリーが今、第一発見者と話をしているところだ」

寒そうに背を縮めている大男に未来はぶっきらぼうに訊いたが、あんな死体を発見した気の毒なトラック運転手のことは気になった。

「大丈夫かな。まともに話せない状態だって聞いたけど」

犯罪の生々しい現実など遠い世界の出来事だと思っていた頃の自分なら、間違いなく一生立ち直れないだろう。悲惨で極色彩にまみ

れ、性善説など決して信じまいと考えさせる事実によろやく向き合えるようになった未来でさえ、そう思うくらいだったのだ。

ただ、冷静に考えれば死体は決して恐ろしいものではない。

生きている人間をただのモノに変えてしまう存在がいるという根源的な恐怖に、人は怯え、恐れおののくのである。

「死体はあれか？」

ジャクソンはジーンズのポケットに両手をつっ込み、まだ確認していないブルーシートの膨らみを見つめている。被害者が自分と同じ若い黒人男性だと知っているだけに、気になるのだろう。

未来は頷いて、ジャクソンが来た方を見やった。

「そろそろ検死官も来るみたいだから、もう近くに寄らない方がいいと思うよ」

彼の気持ちを察した未来が控え目に言うと、ジャクソンは黙って頷いた。

同僚の元軍人サイボーグ捜査官は死体を覆うブルーシートを険しい顔で眺めた後に、辺りに鋭く視線を巡らせている。まるで犯人がまだその辺りに潜んでいないかどうか、威嚇しているかのようだ。しかしもしそうだとしても、ジャクソンに攻撃を仕掛けるだけの度胸と凶太さがある犯人がいるとは到底思えない。

今のジャクソンは普段身に纏っている無駄な陽気さの代わりに、警戒心と緊張感をみなぎらせている。だが、周囲に嫌が応でも物々しさを感じさせる一方で態度自体は落ち着いており、今にも誰かに飛びかかっていきそうな不安定さは微塵もない。

罪を憎む心は魂の底に強く宿しながらも、誤った判断を誘発する怒りや焦りとの棲み分けをごく自然にやってのける。彼もまた、犯罪捜査のプロフェッショナルなのだ。

ジャクソンはひとしきり辺りを確認し終わると、先に現場入りしてしかるべきことをやっていたであろう未来に訊いた。

「写真は撮ったのか？」

「確認するんなら、どうぞ」

未来が肩に担いでいたナイロンのバッグからカメラを取り出して、ジャクソンに渡した。

本当は二人とも、カメラの電子記録媒体から直接電子データが読み取れるスロットが後頭部に仕込まれている。しかしそこにメモリを差し入れて画像を確認するのは、流石に人前では憚られた。

ジャクソンは受け取ったカメラの電源を入れ、小さな液晶を見つめている。浅黒くごつい手が画像を送るスイッチを押す度に、表情の厳しさは増していった。

途中でふとその指が動きを止めたのは、画像が壊れた人形のものに変わったためであろう。

「例のモノも、もう回収したんだな？」

「ここに入ってるよ。私が直接、クワンティコまで届けるようになるから」

未来が答えてバッグを軽く叩いても、ジャクソンの目はカメラの画面に釘付けになったままだ。

彼が全ての画像を見るまで、10分はかかっただろうか。その間は寒さも忘れていたらしく、きつく巻いたごく短い髪や茶色の分厚い革ジャケットが雪に濡れたほどだった。

「毎度のことだが、ひでえな」

低く呟いたジャクソンから、無惨な死体の様子を収めたカメラが未来へと手渡される。

「被害者の身元はわかってるのか？」

「今のところは、手がかりが何もないんだよ。車も近くにないし、搜索願が出されてるわけでもないみたいだし。まだ服のポケットなんかは調べてないから、所持品に関しては何とも言えないけどね。わかるのは、若い黒人の男性だったことぐらいだよ」

「顔があの状態だと、誰なんだか外見じゃ判別できねえな。まった
く」

吐き捨てて、ジャクソンは再びブルーシートの方を向いた。雪は降り続いており、乾いた枯れ葉とシートの上に次々と舞い降りては

白い化粧を施そうとしている。まだ雪が降る時期としては若干早いため、積もる速度はさほどでもないようだった。

「服はそこそこにきれいだから、ホームレスじゃないと思う。かと言って、いいものを着てるってわけでもないみたいだけど」

被害者が着ていた服があまりくたびれたものではなかったことを思い出した未来がつけ加える。

「つまりは俺たちと似た、そこら中にいる若い奴だつてことか。結婚指輪もしてないし、独身で一人暮らしの奴だな」

「そう。少なくとも、家族や恋人と一緒に暮らしてる人ではないつてことだよ。突然いなくなつても、誰も騒がないんだから」

捜査官二人の見解は一致していたが、そこから言いたいのは被害者の身元を突き止めるのは難しいのではないか、という懸念もまた同じであった。行方不明者が年間何十万人と出るアメリカでは、身元不明の死体と捜索願が出されていない失踪者が結びつけられることは滅多にない。

ジャクソンが先ほど見たばかりの被害者の画像を思い出しつつ、眉根に皺を寄せる。

「死んでからまだそう時間が経つてるようには見えなかったけど、詳しくは調べてからじゃないとわからねえな。今はもう冬だから、腐敗もゆっくりになるだろうし」

「後は検死局から証拠品と報告書を回してもらつて、身体的な特徴を見る方が早いかもね。DNAを調べて、前科者のリストも当たつてみてもいいかも」

未来が提案したDNAの照合は被害者が過去に犯罪を犯していて、且つ、起訴されていた場合に限つて有効な方法だ。望みは薄いけど、やらないよりはましだと言える。

DNA分析は各検死局に付属する研究所でも可能ではあるが、やはり最新鋭の機器が揃っているクワンティコで実施する方が早く結果が出る。解剖時に死体から各種サンプルを採り、ジャクソンが届けるのが一番手っ取り早いだろう。

「それにしても、検死官の到着が遅いね」

未来が腕を組んで苛立ちを口に出したとき、金属がぶつかる音がハイウェイの方から上がった。それはジャクソンの耳にも届いたらしく、2人が同時に振り返る。彼らの視線の先に、警官に誘導された救急隊と、私服姿の男性2人が一緒に茂みから出てくる姿があった。

死体を載せるステンレス製のストレッチャーが車輪を軋ませ、救急隊に引つ張られてくる。頑丈な死体袋も携えた彼らを待機させ、私服姿の男性たちが未来たちに近寄ってきた。

「やあ、二人とも随分早いじゃないか。流石に元軍関係者は鼻が利くな」

「この地区の担当の割には随分ごゆっくりですね、ランチエスター捜査官」

いかにも、と言う印象の作り笑いを浮かべるジェイコブ・ランチエスター捜査官に向かって、未来は嫌味を遠慮せずにつけた。

このウエストモアランド郡は未来が以前担当していた地区だったが、それをジェイコブが引き継いでいたとは知らなかった。杉田の車が発見された先日、女性及び人種偏見を持つ彼から喧嘩を売られたことを思い出し、未来の眉が僅かにつり上がる。

「ドクター・スミスをここまでお連れしたんだ。雪が降っていて、しかも深夜に運転するのは不安だとおっしゃるのでね」

ジェイコブのもつともらしい言い訳だったが、彼の隣に立つ初老の男性には、未来も見覚えがあった。

「リッチモンド検死局のスミスです」

スミスはまず、自分から近い位置にいたジャクソンに挨拶して手を差し出した。170センチに届かない彼の視界は、きつとこの黒人サイボーグだけでいっぱいになってしまっているに違いない。

ビリー・スミスはリッチモンド検死局長を務める検死官だった。歳は50代半ばの痩せた紳士といった印象で、昔気質で気難しい町医者と言つに相応しい雰囲気がある。てっぺんがかなり薄くなつた金髪は身につけているグレーのコートと同じようにくたびれていて、いつもかけている老眼鏡を通した青い瞳は細められることが多く、目尻には深い皺が刻まれている。

未来が以前に検死局を訪れた時も、彼は女が物騒な仕事をするもんじやないと言いたげな態度と口振りを隠そうとはせず、未来をうんざりさせることが度々あった。

そのスミスがジャクソンの後ろに控える未来の顔を見た時、特に顕著な反応を示さなかったのは当たり前だと言えるだろう。

「お久しぶりです、ドクター・スミス」

「こいつはまた縁起が悪い場所での再会になったもんだな、ミス・ハザマ」

未来が礼儀を守って差し出した手を胡散臭そうに握り返す辺りに、

スミスが彼女との再会を歓迎していないことが現れている。握手もそこそこにして、ぷいとスミスは死体の方を向いた。

「雪が積もらないうちに、とっととモルグへ死体を運んでしまわなけりゃな」

「死体はあそこです。まだ誰も触ってはいませんから」

そこへ、救急隊の到着に気がついたニコラスが走って戻ってきた。軽く息を弾ませている彼の後につき、林の奥に横たわる死体の側へ一同が移動していく。

「確か、被害者は黒人の若い男だったね。この辺りは黒人人口は少ない上に、中産階級以上の住民が多いんだ。誰かがいなくなれば即座に騒ぎになるから、地元の奴じゃないだろう」

「被害者の身元を示す物は、まだ何も見つかってない。確認するまではわからないだろう」

ジェイコブの発言にニコラスが眉を顰め、辺りを見回した。彼の前には黒人の警察官がいたが、幸いジェイコブの言葉は届いていないらしい。

黒人は皆貧しくて中流以下の生活を送っていると決めつける発言は誰に向けたたというものではないが、ジェイコブの前はジャクソンが歩いている。その状況でよくそんなことが言えるものだと、未来は怒りを通り越して呆れていた。

しかも今は死者が相手だというのに、無神経にも程がある。

今この場にジェイコブと2人しかいなかったなら、多分未来は怒りをぶちまけていただろう。彼女は、他の担当者もいる今感情を露わにするほど子どもではなかった。

当のジェイコブは自分の差別主義を改める気は全くないようで、ニコラスともうまく付き合えていないことが、今のやりとりからも窺える。未来は自分がCVCに転勤になったのが早すぎたのではないかと、必要のないことまで気にし始めていた。

しかし他人の気遣いなど毛ほども気にかけないジェイコブは、無意識の下に差別的な発言を続けていた。

「なら、DNA採取して犯罪者リストと突き合わせた方が早いかも知れないな」

「行方不明者のリストと突き合わせる方が先だよ」

今度は未来が鋭い睨みと突っ込みを放ったところで、皆は死体を隠すブルーシートの際に辿り着いた。

スミスが抱えていた医療靴を地面に下ろして開け、ラテックスの手袋と外科用マスクをつける。その横でニコラスと未来がシートをめくり上げて、死体の全身が見えるようにした。

既に無惨な死体の有様を確認していたニコラスと未来は無表情を保っていたが、ジャクソンは顔をしかめ、スミスはすぐに仕事の顔となって死体を観察し始めた。

ひゅっ、と誰かが息を強く吸った音が鋭く上がる。

ブルーシートを重ねていた未来が、反射的に聴覚の感度を上げた。間近から上がる3つの落ち着いた心音に、一つだけ調子の違うそれが混ざっている。ひどく苦しげで不安定な、落ち着かない鼓動だ。加えて、不自然に深い呼吸を繰り返す気管と空気の摩擦音も重なっている。この鼓動と呼吸の持ち主が千々に心を乱されており、必死に自分を律しようとしていることの証拠だ。

未来が顔を上げると、しゃがみ込んでいるスミスの後ろに立つジエイコブの様子が明らかにおかしいことがわかった。死体に釘付けになっている目は大きく見開かれ、血の気がまるで失せた青白い肌の色は、貧血で倒れる寸前のように見える。その上膝が震えているのか、上半身がふらついているようだった。

「どうかしたのか、ランチエスター。まさか、死体を見たのが初めてってわけじゃないんだろ？」

未来の怪訝そうな表情につられてジエイコブの顔を見たジャクソンが、我を失っているジエイコブにゆっくり言う。すると未来の元同僚は、夢から醒めたばかりのように目頭を指で揉んでから軽く頭を振った。

「僕は今日、殆ど寝てないんだ」

「それはここにいる全員がそうだ。邪魔になりたくなけりゃ、もつと後ろに下がってくれねえか」

やはり、先程の差別的な物言いが引つかかっているのだろう。ジヤクソンの言葉と態度には、刺々しさがそこかしこに窺える。自分よりずっと大柄で筋骨逞しい黒人捜査官から必要以上に凄まれたジエイコブは、無言でコートポケットに手をつ込みながら後ずさった。

「おっと、ちよつと失礼」

短い一言を残してジエイコブがそのまま一同に背を向け、警官たちが出入りを繰り返している林の入口へと走っていく。誰かからの電話を受けたようだったが、それにしても遠くまで行きすぎだった。そして未来のまだ感度を下げていなかった耳には、いつまでたってもジエイコブが電話に出る声が聞こえてこない。彼の走り方も足を引きずるような重いもののように、動かない身体を鞭打って無理に走っているような印象がある。

死体を見た時の動揺した態度と言い、ジエイコブの振る舞いは明らかに不自然だった。

「ふむ。こいつは酷いな」

そこで、死体の体温を計り終わったスミスが呟いた。彼はブルーシートを避けてから、周囲の動向を一切気にしていないようだ。手にしていたクリップボードの用紙に書き込みをしてから温度計を靴にしまい、入れ替わりでピンセットと証拠品を入れるためのビニール袋、一眼デジタルカメラを取り出す。

スミスは皆が見守る中で、先程の未来と同じように様々な角度から写真を撮り出した。短い間隔でフラッシュが白く発光し、割れた頭や傷口を汚す血液を鈍く光らせる。彼は一通りの写真を撮り終えた後、今度は死体に顔を近づけて小さな証拠品を探し始めた。

「頭を撃たれていたかどうかはまだわからないが、恐らくこの銃創が致命傷の一つだろう。背中のは射入口だな。ここところが、煤で汚れているだろう？至近距離から撃たれたと見ていいと思う」

途中で手が止まり、ラテックスに覆われた手で死体の背中が指さされる。そのしぐさは、大学の解剖実習で教授が学生に手本を示すようだった。

「弾丸は、体内に残ってるでしょうか？」

「死体をひっくり返して、射出口があるかどうか見ないとわからんね。それと、弾丸の種類にもよるが」

ニコラスにスミスはむっつりと答えたが、この頑固そうな検死官にはこの場で死体を仰向けにする意志はなさそうで、しゃがんだまま立ち上がるうとはしなかった。

しかしスミスに信頼を置いているらしいニコラスは特に気にした素振りも見せず、顔を上げたスミスと視線が合っても表情を変えなかった。

「薬夾は見つかってるのかね？」

「この付近には落ちていませんでした」

スミスの質問に、ニコラスが続けて答えて首を横に振った。

「まあ、そうだろうな。被害者は、死後にここへ運ばれているようだから」

「そう言い切れるんですか？」

「上半身の血のつき方を見てみるといい。ニットが腰の辺りまで染まって、それが右側に集中しているだろう？背中の左側を撃たれているのに」

今度は未来が疑問を口にすると、初老の検死官は頷きながら死体の上半身全体を確認しろと言わんばかりに手を大きく振って見せた。「もしここで殺されて頭を潰されたんなら、こうはならない。死んでからずっとこの姿勢でいたんなら、左側に血が垂れる筈だからな。周りの土に血がしみこんでいる様子はないし、血溜まりも殆どできていない。もつと別の場所……たとえばコンクリートの床みたいにな、水はけが悪い場所に倒れたか、放置されたかしたんだろう。そうなら、身体の下になっている部分から何か見つかる可能性もある。死体周辺の土も、証拠品として持ってきてくれ」

言いながら、スミスは被害者のジーンズの尻ポケットを探った。ラテックスの手袋をはめた手は体格の割に大きく、小さな手がかりも見過ごすまいと、細やかで慎重な動きを見せている。

「それに被害者はコートを着ていないし、脱がされた様子もない。この寒空の下で上着を羽織らない奴なんて、普通はいないからな。室内で殺されたんだろう」

下を向いたままスミスが補足すると、マスクから漏れた息が冷えた眼鏡を白く曇らせた。

彼が死体を調べる指先を見ながら、ニコラスが溜息をつく。

「被害者の身元特定につながるものが出てくればいいんですけど」

「ジーンズのポケットには、特に何も入っていないようだ」

尻ポケットを探し終えたスミスが顔を上げたところで、ジャクソンが首を傾げた。

「やっぱり、犯人が抜いたのかな」

「可能性としてはある」

答えつつ、スミスが今度は被害者の手に顔を近づける。指を見てからピンセットで爪の間を広げ、手際良く事件の痕跡の有無を確認する様子には無駄がなかった。

「手や腕に防御創はないし、爪の間にも格闘の跡はない。しかし微物は見つかるかも知れないから、手に袋は被せておこう」

眼鏡を直しながら、スミスは傍らの鞆から紙袋と輪ゴムを取り出した。

「頭がいつ割られたかは、傷の生活反応を見ないとはいつきりせん。しかし、死んでここに放置されてからはまだあまり時間は経っていないだろう。この寒さの割には体温もあまり下がっていないし、硬直の度合いも思っていたより低い。腐敗も殆どしていないようだしな」

死体の手の保護を終えたスミスが鞆の口を閉めて立ち上がり、それでもまだ10インチは上にあるニコラスの顔を仰いだ。

「死体は今の姿勢でモルグに運ぼう。このまま検死をやっておきた

い

「すぐに解剖するんですか？」

確認しながらも、ニコラスは驚いていない。スミスの仕事熱心さはよく知っているのだ。

「ああ、なるべく早い方がいいからね」

「解剖には俺が立ち会うことにしましょう。CVCからはあと一人、クラーク捜査官も行くことになるかと」

検死に立ち会うかどうか未来が躊躇いを見せた時、すかさずジャクソンがスミスの前に進み出てきた。彼女が反射的に振り返ると、黒人の大男が目を合わせて頷く。

「僕も行きます」

そしてニコラスも力強く進言したが、スミスが返したのはむっつりした顔と、迷惑そうなぼやきだった。

「うちのモルグは狭いんだよ。でかい男に3人も入られたら、助手が一人締め出されてしまう」

「じゃあ、誰か一人は外で待機するようにします。証拠やサンプルを一通り渡してもらったら、クワンティコですぐに分析にかけたいので」

「それなら、うちの研究所で分析する手間が省けるな。ありがたいことに」

検死官は尚もしゃしゃり出てきたジャクソンから目を逸らし、更に低い声をこもらせる。口ではありがたいと言いつつも、検査の申し出をスミスが快く受けてはいないのが明らかだ。

検死で死体から血液や肝臓片等を採取した後は、特殊な検査を除き検死局付属の研究所で分析されるのが普通だ。いくら捜査の中心がFBIだとは言っても、専属の検死官がクワンティコの犯罪科学研究所にいるわけではない。言ってみれば事実上仕事の横取りになるわけで、縄張り意識の強い警察機関でのこうした行為は、誰もが嫌うのである。

その上、CVCはまだ発足して日が浅いため認知度も低い。協力

機関に納得してもらい潤滑に運用するためには、まだまだ時間がかかりそうだった。

「検死報告書が出来上がるのはいつです？」

しかし、今の時点でそんなことを現場で気にしても仕方がないというのは、皆の共通した認識である。ジャクソンは態度を変えずミスに訊いた。

「早くても、今日の夕方になる。毒物検査やDNA分析なんかを、そっちでやってくれるんならな」

「それで十分です。夕方には、ハザマが取りに行くので」

やはりむつつりと言葉を返した検死官に答えてから、ジャクソンはもう一度未来と目を合わせて頷いた。

死体はうつ伏せの姿勢のまま死体袋に入れられ、ストレッチャーの上に移された。被害者は背が高く体格もいい黒人の若者だったため、ストレッチャーに乗せるのも苦労すると思われたが、20人前の筋力を持つ2人のサイボーグのお陰で、スムーズに行ったと言っていただろう。

バンドで死体袋を固定したストレッチャーが救急隊員たちに押され、茂みの中からハイウェイへと移動してくる。その頃にはもう時刻が午前7時近くになっており、辺りは明るくなっていた。しかし雪は相変わらず降り続いており、道路脇の藪やまだ葉をつけている常緑樹の枝は、すっかり白くなっている。これが犯罪現場でなければ、その静けさを感じさせる風景を美しいと素直に思えたことだろう。

未だ脇の茂みに捜査関係者が絶えず出入りする道路で、ジェイコブが一人佇んでいた。足元に散らばっている何本もの吸い殻が、彼の落ち着かなさを物語っている。タバコを今もせわしなくふかしている若い捜査官は、行き交う警官や捜査員たちをそわそわと目で追っていた。

「死体は、これからモルグに運ぶのか？」

救急隊員の後ろについていた未来に、珍しくジェイコブから声をかけてきた。しかし足を止めた彼女には近寄ろうとせず、一定の距離を保ったままだ。

「ドクター・スミスはすぐに解剖するっておっしゃってるよ。うちのトルーマンとクラーク捜査官に、カーター刑事が立ち会うことになってるから。そっちはどうするの、ランチエスター？」

未来はゆっくり状況を説明しながら、注意深くジェイコブを観察した。

やはり彼の目は泳いでいて視線が定まらず、怯えた小動物のよう

に不安定だ。心音も早く不規則な上に、顔色は先よりも悪くなっている気がする。今手を開かせてみたら、かなり冷や汗をかいているかも知れない。

ジェイコブは未来と目を合わせないようにしながら地面にタバコを捨てて靴の裏でもみ消し、もう一本新しいそれをくわえて火をつけた。

「僕はこのまま事務所に行つて、報告書を作るよ。その後は、被害者について色々調べることにしようと思う」

「調べるつて、被害者については何もわかってないのに。何か心当たりでもあるの？」

「何もわかっていなくても、警察から先に上がってくる証拠品から調べることはできるだろう」

未来が顔をしかめたのは、ジェイコブが吐き出す煙を被ったからという理由だけではない。

軽い突っ込みを入れてきた未来に対して、あからさまに動揺した鼓動を彼の心臓が放っていたせいもある。感情を抑制し、表に出さないための訓練を受けている捜査官でも、身体の奥底までもコントロールすることは極めて困難なのだ。

くわえたタバコを深く吸い込んだ後、ポケットに手を突っ込んだジェイコブは更に続けた。

「被害者の身元が判明次第、自宅の搜索もしなきゃならないからな。そのための準備もしておかないと」

内容はもつともだが、これも取つてつけたような言い訳にしか聞こえない。

不審さを隠し切れていない元同僚に、未来は思い切つてかまをかけることにした。

「ランチェスター。ひよつとして、被害者のことを知ってるんじゃないの？」

瞬間、一際大きな鼓動が未来の感度を下げている聴覚を刺激した。ジェイコブの心臓はそのまま早い調子のリズムを刻み、徐々に

それが乱れたものになっていく。

しかし彼は身体の内側に起こっているパニックとは裏腹に、慌てた素振りはどこにも見せなかった。すぐには言葉を発しなかった唇が動き、横目がじろりと未来を一瞥してくる。

「どうしてそう思うんだ？」

「私よりも経験が長いのに、死体を見た時は随分シヨックを受けてるように見えたからね。それに、その後もなるべく死体を見ないようにしてたじゃない。だから、知ってる相手なのかと思ったんだよ」「全て、僕の行動を見て判断したってことか？」

ジェイコブの身体が嘘をついていないことを胸の内に留めている未来に、ジェイコブは馬鹿にしたような薄笑いを投げつけた。

「確かに、あの死体を見てシヨックは受けたさ。あんな凄惨な死体は、僕の担当した事件じゃまだお目にかかったことはなかったからな。でも、それが人間として当たり前の反応つてもものだろうか？誰もが君みたいに、心臓に毛を生やしてるわけじゃないってことぐらい、わかると思うけど」

未来は何も答えない。

ジェイコブが何か隠していることはまだ可能性の段階であり、今は深く追及するべきではないのだ。が、彼の行動について油断しないことを未来に決意させる材料としては、十分だった。

「どうした？」

2人が無言での睨み合いに入ろうとした直前、死体を救急車に積み終えたジャクソンが近寄ってきた。それを合図にジェイコブがタバコを投げ捨てて踵を返し、側に停まっているパトカーの無線で連絡を取っている警官の方へ向かっていく。

「うん、ちよつとね……」

ジェイコブの足がくすぶっているタバコを踏み消す様子を見ながら、未来は言葉を濁した。CVCの同僚であるジャクソンとウォーリーには、後でこのことを話しておかねばならないだろう。

その時、未来のコートのポケットに入っている携帯電話が着信を

告げて震えた。

「隊長からだ。ちょっと失礼」

戦闘チーム責任者のマックス・レイヤードから、現場にいる捜査官へ直接連絡があるのは珍しい。驚いた未来が、受話ボタンを押し、耳に本体を押し当てつつ小走りにその場を離れていく。

そのタイミングを見計らっていたのか、ジェイコブが警官との話を中断してジャクソンの側に歩み寄ってきた。

「検死報告書が上がってきたら、すぐにこっちへ回せよ」

「ミキが検死局に直接取りに行くことになってるよ。CVCで内容を確認したら、そっちにも渡すようにするさ」

ジェイコブの高圧的な物言いに対してジャクソンは不愛想に応じたが、殆ど命令に近い口調で言ったことが流されたことに、ジェイコブは少なからず反感を覚えたようだった。

「僕はすぐに欲しいって言ったんだ」

そして、ジャクソンに対するこの文句のつけ方と上から目線である。

ジャクソンは最初ジェイコブが単なる白人至上主義者なのかと思っていたが、どうも違うことに勘づいていた。

この若い美形の捜査官は、自分より優れている有色人種が最大の嫌悪対象なのだ。実際にティアーズの捜査指揮権を持つCVCにいるジャクソンや未来を毛嫌いしているのは、あからさま過ぎてむしろ笑えるくらいだ。

先の未来と同じように、ジャクソンはすぐに応えない。

白人の自分に生意気にも反抗しようとした黒人捜査官が萎縮しているとも考えたのだろう。ジェイコブは身体ごとそっぽを向き、横目でジャクソンを見て偉そうにつけ足した。

「勘違いしないで欲しいのは、この事件はCVCの担当かも知れないが、あくまでうちの管轄で被害者が出た殺人事件だってことなんだ。あんまり出しやばった真似をしてもらつと、捜査に支障が出る。あんたにもわかる……」

ジェイコブが言い終わらないうちに、ジャクソンがずいといと進み出る。正面を向いていなかったジェイコブはとっさに反応できず、素早く前に回り込んできたジャクソンを避けられなかった。

「勘違いしてるのはどっちだ？確かに地方局との連携は必要だが、この事件全てに対しての主たる捜査権は、CVCにとづくに移管されてるんだ。勝手なことを抜かした挙げ句にこっちの指示を無視してみる。次は、あんたがロボットに身体をちぎられる羽目になるかも知れねえぞ」

目を合わせようとしないジェイコブの顔を、わざわざ背をかがめて下から覗き込むようにし、包み切れない迫力を低い声に乗せたジャクソンが凄んだ。

ジャクソンは陸軍の特殊部隊デルタ・フォースの出身であり、捜査官になってから数年のキャリアを積んでいる。200センチを越える逞しい体格と言い、経験の差と言い、ジェイコブなど問題にもならなかった。

想定外の反撃を喰らったジェイコブは、相手をそれ以上刺激しないように唇を結んで再び顔をそむけることしか手段を持たなかった。「心配すんな。こっちの手垢がついてない検死報告書をお望みなら、今日の夕方に間違いなくミキが届けてやるから」

結局何も言い返せずに振り返り、警官たちの方へと取って返したジェイコブの背に投げつけられたジャクソンの声は場違いに明るい。彼の言う手垢のついていない報告書とは、各種鑑定や検査を一切やっていない報告書のことである。今回は死体から採取されたサンプルや微物の分析作業を全てクワンティコで実施することに、ドクター・スミスが承諾しているのだ。

重要な情報は全てCVCが握り、地方局の一捜査官に好きなようにはさせないと暗に警告したのである。

「その検死報告書のことだけ……」

ジャクソンにやりこめられた元同僚と入れ違いに戻ってきた未来が、携帯電話をポケットにしまってから戸惑ったような顔を向けて

きた。

「クワンティコには、駐在事務所よりも後に持つて行くことになりそうだよ」

「そりゃ、どういうこった？」

彼女につられ、ジャクソンも眉根を寄せかける。

「隊長からの命令なんだよ。私は一通り捜査の目処がつくまで、フレデリックスバーグ駐在事務所にいるってさ。NOTSの訓練もお預けだって。まあ仕方ないよね」

未来の視線がジャクソンの脇をすり抜けて死体を乗せた救急車に注がれるが、その表情は複雑そうだ。

確かに未来はごく最近までフレデリックスバーグ駐在事務所に勤務し、郡警察のスタッフとも馴染みがある。そのことを考えれば、スムーズに捜査を進めるために地方局との連携を彼女に任せるのはある種当然の流れだろう。

しかしそれはCVC本部にいて各種連絡やデータ、証拠品の引き渡しなどを彼女に全て任せれば済む話だ。それをわざわざ駐在事務所に留まっっているというのだから、何かしら意図があると思って間違いない。

未来は現在身内に近い人物が行方不明となり、別の凶悪事件に巻き込まれている可能性があるという微妙な立場だ。それ故、隊長であるマックスがなるべく捜査を担当するチームから彼女を遠ざけておこうと考えても不思議ではなかった。

未来を物理的に遠くへ置くということは即ち、マックスが彼女を信用していないということでもある。冷静さを失った未来が何かしでかす可能性ありと見られていない限り、今回のような措置が執られることはないはずなのだ。

ひょっとして、未来の自尊心はいたく傷つけられたのではないか。そんな懸念がジャクソンの頭をよぎったが、当の本人である未来はすぐに自身を納得させたらしく、特に落ち込んだようには見えな

「メンテナンスの時にはそっちに行くから、そんな顔しなくても大丈夫だよ。CVC自体から外れるわけじゃないんだし、いつまたすぐに戻って言われるかわからないんだから。それに、ちょっと気になることもあるし」

浮かない顔を見せたジャクソンを気遣う余裕も、まだ未来には残されているようだった。決して鈍いわけではなく、逆に他人の心の動きには鋭い彼女は、隊長の考えを察していることだろう。

だが、いいとは言えない状況の中で自分の立ち位置をしっかりと把握し、最大限に動こうとするだけの強さを備えつつある。この小さな少女にしか見えない東洋人の同僚は、僅かな期間で着実に、静かな成長を遂げているのだ。

一人満足げに頷いてから、ジャクソンは未来に訊き返した。

「気になるって、何がだ？」

「ウォーリーはどこ？彼にも一緒に聞いて欲しいんだけど」

未来が辺りを見回す素振りを見せると、ジャクソンが片手を上げてついでくるように合図した。

身長差が親子ほどもある2人は、雪が降りしきるハイウェイを歩き出した。幾人もの警察官や捜査官たちの脇をすり抜け、ウォーリーが死体の第一発見者から聴取を行っている警察のバンを指す。

その途中、目指す方向に駐車している黒っぽいバンから降りてきたウォーリーの姿を認め、2人は歩調を早めた。

「ウォーリー。第一発見者からは何か聞き出せたのか？」

ジャクソンが近寄りながら声をかけると、同じようにこちらを探していたらしいウォーリーが足を止めた。

「いや、収穫なしだ。トラックを停めた時は他の車が走っているのを見なかったし、降りてからも誰の姿も見えていないそうだ」

首を横に振ったウォーリーは、いつものように眉間に深い皺を寄せて疲れた顔をしている。肉付きが薄い頬は艶がなく、生え際が後退して広くなった額も血色が良くない。それは何も彼が黒いコートと焦げ茶色のパンツという地味な格好をしているせいばかりではな

いだろう。

CVC特殊捜査チームの責任者である彼は、最初に事件の一報を受け取ったはずだ。それから地元警察と連絡を取りつつ、各チームの担当者や駐在事務所へ連携するのも彼の役目である。現場到着は早くなかったものの、稼働は誰よりも高いのだ。

杉田の車が発見された時に会ったウォーリーが急に歳を取ったように、未来には感じられた。

「その第一発見者が犯人だって可能性は？」

ウォーリーの真横まで来ると、ジャクソンが質問を続けていく。

「今の段階では何とも言えんが、恐らくそれはないだろう。ヒスパニック系の50歳台の男で、強いスペイン訛りがある英語をしゃべるような奴なんだ。あれで今まで被害者をうまく言いくるめていたとは、とても思えんからな」

「ポールが考えてる容疑者像とは、全く一致しないってわけだね」
未来が警察のバンを見やり、顎先を撫でる。

CVC心理分析チーム責任者のポールは、犯人は頭が良く慎重な人物だと分析している。これまでの被害者には犯人に抵抗した形跡がなく、暴力以外の方法で自由を奪われた上で殺害された可能性が高いというのが、その根拠であった。

被害者を支配する手段が力づくでないとするれば、策略で信用させるか恐怖で縛っていたと考えるのが妥当だ。そのような人物が見るからに怪しい風貌の持ち主だったり、聞き取りづらいほど強い訛りがある英語を話すことはまずない。

未来がポールの導いた犯人像を思い描いていると、ウォーリーが頷いた。

「そう。それに、銃は狩猟用のライフル以外持ったことがないとも言ってるんだ。念のために許可証の照合は行うが」

彼はコートポケットからタバコの箱を出して無造作に一本抜き出し、徐に火をつけた。

恐らく第一発見者が犯人ということはないだろうが、今後何かに

つけて話を聞くことはあるだろうし、疑いが晴れるまで捜査機関の監視は続くかも知れない。善良なるアメリカ市民の可能性が高い男性ドライバーの不運を、その場にいる皆が気の毒に感じていた。

軽く煙を吐き出してから、ウォーリーが未来の顔を見た。

「死体の方はどうだ？」

「もう収容は終わって、これからリッチモンドの検死局で解剖だつてさ。立ち会いはジャクソンとウォーリーがやることになったから」

「何？おいジャクソン、また勝手に決めたな」

露骨に表情を歪め、ウォーリーが語調を荒くする。

ジャクソンはこの反応を予想していたのか、さして悪びれもしない。困ったように肩をすくめただけだった。

「戦闘チームからは俺が立ち会おうし、郡警察の刑事も来るんだ。そっちからは、今ここにいるあんたが立ち会うのが筋だろう？むしろ、あんた一人じゃないことに感謝して欲しいくらいだぜ」

余程検死解剖の立ち会いが苦手なのか、ウォーリーの不機嫌そうな表情はジャクソンの説明に納得しているようにはとても見えない。しかし、特殊捜査チームからも立会人を出さないわけに行かない以上、引き受けるしかないのだ。

ベテランのウォーリーがそこまで解剖が苦手としていることは、未来にとって意外だった。

「検死が終わったら、俺とウォーリーはすぐまたクワンティコに戻ってサンプルを研究所に引き渡すことになる。検死報告書は夕方までかかるけど、ミキに頼んでおいたからな」

「ミキは本部に戻らないのか？」

コートのポケットを探って携帯灰皿を見つけたウォーリーが、その中に灰を落としながら戦闘チームの2人の方を見た。

「隊長からの命令があつてね。駐在事務所に捜査の目処がつくまで居ろつてさ。まあ、気になることもあるから丁度いいとも言えるけど」

「そうそう、それを早く教えろよ」

自分の予定について未来が答えると、ジャクソンが肘で彼女を小突こうとする。が、彼の肘は位置が高すぎるため、未来の肩の上の空間をすり抜けるだけだった。

相棒の合いの手がボケに変わってしまったことはあげつらわず、未来がやや声のトーンを落とした。

「ランチエスターが、どうも被害者を知ってるんじゃないかって気がするんだよ」

あどけなさを残した女性捜査官の言葉に、思わず男2人が前のめの姿勢となる。3人の特別捜査官たちは、互いに1ヤード（約90センチ）以内にまで顔を寄せ合うことになった。

「お前がそう考える根拠は何だ？」

ウォーリーの意見の求め方も、低い調子となる。

未来は先のジェイコブとの会話内容をウォーリーとジャクソンに説明し、その時の心音の反応から予想される心理状態について説明した。

「ふーん、なるほど。嘘をついた時の生理的反応パターンか。確かに、普通そんなことは調べられねえからな。お前は生きた嘘発見機ってわけだ」

ジャクソンは素直に感心しているようで、深く頷いた。彼も聴覚や視覚は強化されているものの、せいぜい常人の10倍程度だ。500倍までの聴力や視力をを自在に操れる未来の足元にも及ばないのである。

「余程天才的な嘘つきかサイコパスでもない限り、自分の心臓の動きまではコントロールできないからね。でも、ランチエスターはそのどっちでもないんだよ。私は暫く彼と一緒に仕事してたんだからそこは自信を持ってそう言えるんだ」

サイコパスとは簡単に言つと、良心を全く持たない生まれつきの天才的な悪人のことだ。

彼らは病的な嘘つきであり、他人の気持ちを全く省みることができないなどの際立った特徴があるが、全員が犯罪を犯すわけではな

く、社会に溶け込んで成功を収める者もいる。

しかし未来が見る限りジェイコブは単なる小悪党でしかなく、サイコパスだとは言えなかった。

「問題なのは、奴がどうしてそのことを隠すかだな」

声を潜めたウオーリーも未来の説明に納得した上で、不可解な点を指摘してくる。

ジェイコブは自尊心が強く、隙あらば他人の手柄を横取りする機会を虎視眈々と狙うような人物だ。それだけに、自分しか知らない情報を握っているとと思われる立場である動揺のしかたは不自然だった。

普段から同僚をもこき下ろす癖がある彼は、自分がさも重要人物であるかのように振る舞うことも好む。故に、今回のことでも得意気にしゃしゃり出てこない筈がない。

それとは相反する恐怖の感情が混ざった反応の裏には、何かが隠されている可能性が高いと言えるだろう。

「被害者と個人的な関わりがあつて、それが表に出ると困るようなことがあるんだろう。どんな理由があるにせよ、注意する必要があるな。場合によっては、捜査に支障が出かねない」

「あんなクソみたいな奴に仕事をひっかき回されるのは、確かにいい気分じゃねえな」

ウオーリーとジャクソンが互いに示した見解が一致していることは、傍らに立つ未来にも伝わってくる。彼らは無言で同意を求めて、未来の方へ同時に視線を送った。

「わかつてるよ。彼の動向は、私が監視するようにするから。上級主任にもそれとなく伝えておくと、一通りの証拠を回収するまではマークすることにする」

未来が男たちの有無を言わさない表情を受け止めて頷き、彼らの背後へ伸びるハイウェイに注意を向けた。

雪は少し弱くなってきたが、アスファルトの上や路肩に停まっているパトカーの屋根やボンネットは白い化粧を施され、視界も

普段の3分の2程度になっている。50ヤード（約45メートル）程度離れたところに死体を収容して控える救急車とCVCの捜査官たちとの間に、ジェイコブがニコラス刑事と話をしながら佇んでいた。

とは言ってもジェイコブは話半分のようで、時折ちらちらと救急車や未来たち3人の様子を横目で窺っている。

「何かあったらすぐに本部に知らせてくれ。頼んだぞ」
「了解」

思わず非友好的な鋭い瞳をジェイコブに叩きつけそうになった未来は、ウォーリーの一言に背筋を伸ばして低く答えた。

被害者の検死報告書はドクター・スミスの言葉通り、11月29日の夕方4時過ぎに仕上がったようだった。リッチモンドのダウンタウンにある検死局の婦人用トイレで、未来が電子ファイルのタイムスタンプを自らの身体を使い確認したのである。

「ふうん……」

電子データ閲覧用に別途の視界を持っている未来が、他人には決して見えない検死報告書を閲覧しながら軽く息をついた。彼女の目の前にはビューアでサイズを適切に調整されたファイルが広がり、解剖時のグロテスクとも言える画像が貼りつけられているのも鮮明に見ることができると。この報告書は、彼女の後頭部が開けられたメモリスロットに差し込んだメモリのファイル内容を視神経に直接映し出されたものだ。

ざっと見たところでは、被害者は頭と背中をほぼ同時に撃たれてほぼ即死状態であり、体内から検出された2発の弾丸は9ミリ口径のものということだった。着衣に乱れがなく争ったような形跡はなかったものの、身元を証明できるような所持品が何もなく、どこからも犯人のものらしい指紋は検出されていない。

それ以上の細かい内容は駐在事務所に戻ってから確認することに、未来はビューアを閉じファイル閲覧を終了した。今までトイレの壁に重なって見えていた書類画面がふっと消え、奇妙な二重視野がいつもの見慣れたそれに戻る。閲覧機器がない場所でもデータ確認ができるこの機能は、未来やジャクソンに備えられた中で日常的に使用できる便利なものの一つだ。

出来立てはやほやの報告書のデータを腹に収めている小型メモリが、未来の後頭部を開いた小さな穴から引っ張り出された。彼女の細い指先に摘まれた機密書類の電子信号は内容が変更できないように加工されており、血液検査やDNA鑑定などのデータが他の書類

フォーマットの別ファイルとして資料に追加されることとなる。そのため死体から採取されたサンプルはジャクソンとウォーリーが既にクワンティコへ運び、分析が始まっている筈だった。

未来は慎重にメモリを樹脂製の保護ケースにしまい、更にそれをハンドバッグの隠しポケットに差し入れてバッグそのものを携帯電話の認証コードでロックした。周りに人の気配がないことを確かめてから古い婦人用トイレを後にし、検死局の裏口を通過して駐車場に入る。

リッチモンド検死局はダウンタウンの古い建物が密集した地域にあり、排気ガスで汚れた金網のフェンスに囲まれた狭い駐車場は、常に日陰で薄暗かった。もっともここでは死体を扱うのだし、霊柩車や救急車が頻繁に来る駐車場があまり明るくても差し支えるのだらう。

未来が冷たく傷んだアスファルトの上に停めた捜査車両に乗り込んだのは午後4時半過ぎのことで、太陽はもう傾きだしていた。帰宅ラッシュが始まりかけているメインストリートにプリウスをのろのろと進ませてインターステート95に入ると、こちらはまだ混雑する前らしく、比較的交通量は少ないように思える。

道幅が広い高速道路の視界は開けており、未来は先まで太陽が顔を出していた空に再び雲がひしめき合っているのに気づいた。端を指でつまめば冷たい滴が落ちてきそうな雲は、恐らく雪を抱えているそれだ。

せめてフレデリックスバーグ駐在事務所に着くまでは降らずにいて欲しいと思っただが、95号線から一般道に入ったところで、白い花びらのような雪が空中を舞い踊り始めているのが未来の黒い瞳にも映った。

彼女の小さな願いはすんでのところでは叶わなかったが、この様子なら道が滑りやすくなる前に事務所まで戻れるだらう。実際雪はさやかなもので、フレデリックスバーグの公共機関が集まる施設の屋外公共駐車場に車を停めた時は、まだ景色のどこにも白い帳を下

ろしているところはなかった。

気温が低かった朝に比べ、空気を含んだ雪はふわりと軽く柔らかい。

未来は新しいコートに覆われた肩で冷たい風を切り、雪を散らしながら、赤煉瓦とコンクリートを組み合わせたモダンな建物へと急いだ。

「只今戻りました」

「……ミキ？」

数週間ぶりに姿を見せた未来があまりに普通に職員用の自動ドアを抜けて挨拶したため、受付係のマイケルは驚くことさえ数秒間忘れていたようだった。

「どうしたんだ。クワンティコへ異動になったんじゃないのか？」

「うん、そっちの仕事の絡みがあつてね。また暫く、ここにいないことになったから」

職員ではあつても捜査官でないマイケルには話もそこそこにして未来はそそくさと狭い事務所を仕切るパーティションの後ろに入つた。

「随分遅かつたじゃないか、ミキ。待ちくたびれたよ」

そして彼女が一息つく暇も与えずに立ち塞がったのは、ジェイコブであつた。

つい最近まで毎朝嫌味を言ってきた若い捜査官の顔色は見るからに悪く、目だけが異常に熱を帯びている気さえする。未来の鼻先へ無遠慮に差し出された手は汗ばんでいるようで、彼の焦りを表していた。

「検死報告書、持つてるんだろ？早く見せてくれないか」

「生憎、私もまだ全部目を通してないんだよ。こつちでバックアップを取ったら呼ぶから、それまで待つてくれない？」

その大きな手をぴしゃりと払いたい衝動を飲み込んだ未来は僅かに眉を動かしたのみで、冷やかな視線と共にジェイコブの横をす

り抜けた。

彼女にはジェイコブを呼ぶつもりはない。痺れを切らしてオフィスに来るのを待つつもりなのだ。主導権を握っているのはこちらであり、ジェイコブの思い通りには決して動かないのだと、未来は態度で示して見せたのである。

今回の件については、ジェイコブが何かしでかす前に彼が抱えている秘密を掴むため、徹底的にやる必要があった。その一方で追い詰め方に度が過ぎると、却って彼の暴走を煽ることになる。

未来は便利屋時代から相手の精神を攻撃する術を心得ており、効果的な使いどころも熟知はしていたが、個人的にこの手段が決して好ましいとは思っていなかった。

それでも、今度ばかりは仕方ないと割り切る他はない。

何も言い返せないジェイコブの視線が背中に突き刺さるのを感じるが、未来は歩調を乱さず悠然と嘗ての個人スペースに足を進めていく。

背が高い仕切板の向こう側が視界に入った途端、未来は奇妙な安堵感を覚えたが、その理由はすぐにわかった。

埃っぽい感じがする蛍光灯の光に照らされたデスクやパソコンのモニター、ブックエンドに挟まれた数冊の法令集、小さな鉢植えのサボテンがある位置まで、未来がいたときそのままの配置だったのだ。

一ヶ月近く人が入らなかつたにしては綺麗だし、逆に誰かが席にいたような印象もない。この駐在事務所の責任者であるノートン上級主任が言っていた通り、未来がいつ戻って来てもいいようにしてくれていたのだろう。

ここは使いやすいよう未来が好みでカスタマイズした空間ではあるが、個人的な匂いがするものは何一つ置いていない。つまり、何かの拍子に杉田のことを思い出したりする確率も低いのだ。

自分の担当する事件で、また新たな犠牲者が出た。

正直、今の未来には自身に起こったことに気を回すだけの余裕が

ない。むしろその方が精神力が温存できありがたくはあるのだが、自分は愛する男の心配も満足にできないほど冷たい女なのかと愕然とすることがある。

いつどんな時でも自らを厳しく律し決して感情任せの無謀な行動に出ないことは、彼女が捜査官として成長した証であり、今の状況下において最も適切な振る舞いなのである。しかし、理屈で全てを心の内におさめられないのが人間というものだった。

先生は死んだわけじゃない。

だから私は諦めない。

それに心配のし過ぎで私が倒れたりしたら、逆に先生に心配かけちゃうじゃない。

未来は頭を軽く振り、胸にずっしり重くのしかかってくる暗い気持ちを払い落とした。

コートをハンガーにかけてからフレデリックスバーグ駐在事務所の自席に久しぶりに座り、パソコンを起動させる。彼女はOSのログイン画面が開くまでの間にバッグの隠しポケットから検死報告書の入ったメモリを取り出しておいた。ログイン後、自分の仮想デスクトップを呼び出してからメモリをパソコン本体のスロットに差し込む。

メモリにあったドキュメントを仮想デスクトップの中、つまりは実体を持たないパソコンのデータを格納するサーバに移してから開いてみた。

専用のビューアが起動すると、先に彼女が確認した検死報告書がモニターいっぱいに映し出された。画像はあらかじめ目を通したため、まだ確認していなかった詳細な記述を優先し読んでいく。

検死報告書は死体の全体のサイズや重さは勿論のこと、頭髪や皮膚、主要臓器の状態と特徴などが様々な項目に渡って記されている。中には古い傷痕や先天的な疾患について記した箇所もあり、個人の肉体に関するあらゆる情報が暴かれていると言っても過言ではない。モニターに映し出されている法医学の専門用語を丹念に読み込ん

で暫くしたとき、未来はふと背後に人の気配が留まったのを感じた。耳の感度を上げて心音を探ると、不安に乱された鼓動が高い位置にあるのがわかる。今朝から聞き慣れた調子のそれは、わざわざ振り返らずとも主が誰なのかを教えてくれていた。

「報告書はまだもう少し待っててもらえない？ 後ろからこそ盗み見しなくなつて、ちゃんと渡すようにするって言ったでしょ」

「盗み見てなんかいいよ、様子を見ただけさ。それに、バックアップを取ってるだけにしっちゃやけに遅いと思つてね。ミキ、バックアップの取り方は知ってるのかい？」

未来が視線を後ろにやつたところで、パーティションの陰に立っていたジェイコブが半身を覗かせた。こそそした行動を取つていたくせにぬけぬけと言えるのは、彼がまだ未来よりも自分の方が優位に立っていると固く信じているからだろう。

未来が背もたれのついた椅子をぐるりと回して身体ごと真後ろを向くと、座つたままでジェイコブと向かい合った。大柄なジェイコブは未来を見下ろす格好となり、彼の視線は相変わらず彼女を馬鹿にしたような色合いを含んでいる。

しかし未来は、ジェイコブの青い瞳から放たれるくだらない蔑みを避けようとしなない。

折角このタイミングで、当面何とかしなければならぬ相手の方から来てくれたのだ。あちこちをつついて探りを入れると同時に、先制攻撃を仕掛けるべく、この機会を利用しない手はないだろう。

未来は腹を決めると、聴覚のレベルを下げずに答えた。

「生憎だけど、よく知ってるよ。つい最近まで雑用ばかりやつてたんだから」

「もうバックアップが取れてるんなら、早く僕のところへ送つてくれないか？ メッセンジャーで、ファイルのアドレスを教えてくださいもいいけど」

「そんなに検死報告書が見たいの？ 妙にこの被害者にこだわるんだね」

くつろいだ姿勢で見上げてきて、かつ全く揺らぎのない女性捜査官の物言いは、自尊心が強いジェイコブの神経を確実に逆撫でした。歳が若く体格で劣り、おまけに異人種である女を自分が見下ろしているのに、ちっとも優位に立っている気がしない。お前など私の前ではつまらない男だと全身で語らんばかりでいる彼女の態度が、何よりも気に食わなかった。

ジェイコブは片方の眉を僅かに吊り上げた。

「この被害者だけにこだわってるわけじゃない。でも、今回は初めてうちの管轄下で起きた事件なんだ。なるべく早く情報を確認しておきたいんだよ」

生理的な嫌悪感から沸き上がる怒りを薄ら笑いでごまかしたジェイコブが、無難な言い訳を口にする。

その直前にこの被害者に執着していることを指摘されたとき、彼の心臓が音高く踊ったのを、聴覚を予め研ぎ澄ませていた未来は聞き逃さなかった。

「確かに、この被害者は今までと多少違った側面を持つてるかも知れないけど」

やや声を落として椅子をデスクの方に半分戻し、未来がマウスに手をかける。そのまま、彼女は検死報告書のドキュメント画面を最初の方まで戻した。

「本当かい？ だったら早く……」

「待ちなつて。まずはこれを見てもらえる？」

ジェイコブが急かすが未来は彼の言葉を遮り、ゆっくりと報告書の頭からページを手繰っていく。プラスモニターの表面が彼のむつとした顔を反射しているのを尻目に、未来は目的の画像を時間をかけて見つけ出してからようやくマウスを止めた。

「これは2つとも被害者から摘出された弾丸だけど、頭と胸をほぼ同時に撃たれて即死状態だったらしいの。他の撃たれた被害者は、みんな胸を1発だけ撃たれてるのに」

画面に映し出された黒っぽい弾丸の画像を指差しながら、未来が

ジェイコブの方を振り返る。

が、ジェイコブの目はその前後にある割れた頭や背中への射入口の画像に釘付けになっていて、未来の言葉に対する反応は鈍かった。

「ああ、そうだね」

遅れて頷きはしたものの、彼は心ここにあらずという虚ろな表情だ。

それとは反対に心臓が激しく、落ち着かないリズムを響かせているのが、未来の耳にはつきりと届いている。死体を見慣れている筈の捜査官らしからぬ心の乱れと言えるだろう。

次に未来は胸部レントゲン写真を探し、胸の内側にめり込んだ弾丸の影がくつきりと写っている部分を映し出した。

ジェイコブの顔に視線を据え、未来の唇は淀みなく分析を続けていく。

「しかも背中にはほぼ水平に弾丸が入ったのに、頭には上向きに入ってたつてことがわかってる。頭部は損傷が酷くてレントゲンは無理だったけど、脳組織の損傷の具合から弾道が判別できたみたいだね。あんたは、これをどう見る？」

「どつて？」

乾いた唇を舐めたジェイコブが、両手を後ろに回して息をついた。衣擦れの音が上がリ、彼が手のひらの汗をスポンでこっそりと拭ったことがわかる。未来が投げかける質問に、ジェイコブは声にも苛立ちの響きを隠せなくなってきたようだ。

そして検察に詰問される被告人の如く、落ち着きがまるでない。

「この弾丸が撃ち込まれた角度からすると、被害者はまず背中を撃たれて倒れたところを、更に頭も撃たれたんだってこと。犯人は、彼をよっぽど確実に殺したかったんじゃないかって気がするんだけどね。明らかに、過剰な殺傷力を被害者にぶつけてるんだから」

ジェイコブが恐らく知りたくはあっても目を背けたいであろう事実を、未来は突きつけた。

僅かにジェイコブの肩が揺れて、細く息を吸い込む音が彼女の耳

に届く。

肋骨にぶつかりそうな勢いで、ジェイコブの心臓も跳ね上がったようだった。

「犯人は殺人鬼なんだ。その時の気分で、何をしたっておかしくはないだろう」

「そうだけど、あらゆる可能性を考慮に入れなきゃならないから」
未来はお決まりとも言える言葉を落ち着き払って返したが、先までのジェイコブの顔は紅潮したり、逆に青白くなったり変化が目まぐるしいことこの上ない。

未来は死体の様態に関する話はここまでにして、次の確認事項に移ることを決めた。

「それからもう一つ。この被害者は、同性愛者に特有の身体的特徴が認められるの」

再び未来がジェイコブの顔を見上げようとした時、彼の肩が目に見えてぐらりと傾いた。

更に一呼吸置いてからでないと言葉を発することもできなかったらしいが、その低い声には呻くように苦しげで、濁った呼吸が混ざっていた。

「……それが、特別なことなのか？」

「少なくとも、今回はね」

未来が頷いて見せても、ジェイコブは無表情を装っている。

今回の被害者は肛門の上皮が通常より厚くなっており、複数の裂傷が治癒した痕も認められている。アナルセックスの経験者の兆候が、はつきりと確認されていた。

合衆国では変死体が発見された場合、必ず性的習慣を調べなければならぬ。これには殺人が疑われる場合に犯人の性癖を割り出す手がかりになることや、身元を確認する情報源となることなど、幾つかの正当な理由がある。

とは言え、被害者の性的嗜好にかかわる事柄はもっともプライベートで且つ、繊細なものだ。

未来もつい最近聴取を受けた身であるし、口にしないで済むものなら、こんなことを積極的に話したくはない。が、ジェイコブが隠していることを暴くためには、まだ揺さぶりの手を緩めるわけにはいかなかった。

「今までに男性の被害者はいたけれど、同性愛者は誰もいなかったとなると、犯人の手口や行動の傾向を考え直す必要が出てくるじゃない」

一旦検死報告書を映し出しているモニターを見てから、未来は確認するようにジェイコブの目を下から仰ぎ見た。

「これまで全ての被害者に抵抗したあとは見られなかったし、今回もそう。どういうことかわかる？」

「それじゃ、何一つ今までと変わらないじゃないか。確か犯人は、頭が良くて慎重な人物だって……」

「被害者が一連の事件の犯人に殺されているのなら」

未来の回りくどい話し方に辟易としたジェイコブが投げやりな口調になるが、彼女はわざと諭すように片手を上げて乱暴な男の口を遮った。

「彼をうまく騙して、抵抗できない状態に持って行く必要があった。そのためには、セックスを餌にして釣り上げるのが一番簡単だからね。被害者は黒人の若い男性で、暴力でねじ伏せるのには手に余る相手だったんだから」

検死報告書によれば、今回の犯行でも被害者が犯人に抵抗したような形跡はどこにもない。

普通、自らの命が危険に晒されれば、死に物狂いで暴れる筈だ。

その場合は犯人を引っかいた際に抉った皮膚組織や血液が爪の間に残されていたり、犯人の攻撃から身を守ろうとして翳した腕に傷ができたりする。

そんなものが何一つないと言うことは、被害者が犯人の完全な支配下にあつたことを意味している。刃物や銃で脅されて恐怖に縛られていたか、アルコールや麻薬で虚脱状態にあつたのかはまだわかっていないが、そうでなければ死体の状況に説明がつかなかった。

「そうとは限らないじゃないか。ドラッグをやっていた可能性だつてあるんだし」

と、捜査官らしくジェイコブも未来と同じことを指摘してくるが、未来は頷いてあっさりとは肯定した。

「勿論。ドラッグやアルコールで前後不覚になってたかどうかは、毒物検査の結果を見ればはっきりするわけだけど。それに、死体からは精液も検出されてるの」

彼女がまた新しい事実をさらりと述べるが、今度は検死報告書の画面を振り返らない。

ジェイコブの上半身が大きく横に揺れる様が、今一度黒い瞳に映る。

しかし、ジェイコブは少なくとも肉眼に見える場所にそれ以上の動揺を出すことなく、ごく当たり前のことを訊ねるだけの一言を発するにとどまった。

「どこから？」

「口腔内と肛門。死体は着衣に乱れがない状態で発見されたからレイプされてるとも思えないし、もし同性愛者相手の売春をしたなら、複数のDNAが見つかるかも知れないから。今、クワンティコで分析にかけてるところだよ」

答える未来の声も極めて抑えたものだが、彼女はジェイコブの動揺がこれまでで一番激しいものであることにいたく興味をそそられていた。

心臓は激しい鼓動を打ち鳴らし、顔は話し始めてから何度目かの紅潮を見せ、瞳孔がふくらんだ視線は未来のデスクの上を忙しなくさまざましている。

未来がこっそりと瞳に熱反応センサーを重ねると、暖房がさほど効いていない室内であるにもかかわらず、体温が上がっていることを示す赤い色が彼の半身を覆っているのがわかった。この分だと、背中に大量の汗もかいているだろう。

しかし身体の生理的な変化を内に閉じこめる術は捜査官だけあつ

て徹底しているようで、表情だけは完全に取り繕っている。未来以外の者の目には、ただ興奮しているだけとしか映らないかも知れない。

ジェイコブは鼻で笑って、未来が考えているであろうことを予測し否定にかかってきた。

「被害者は、犯人と合意の上でセックスしたって言うのか？その後いきなり殺されるなんて、僕は筋が合わない気がするけどね。それに、過去の被害者には売春婦だったんだ。犯人がゲイかどうかはまだはっきりしないだろう」

「セシル・ジョーンズの死体からは、犯人の体液が検出されなかったんだよ。彼女が売春婦だって知らなかった可能性だってあるし、もしかしたらバイセクシャル（両性愛者）なのかも知れないしね。さつきも言ったけど、あらゆる可能性を考慮しなきゃならないから」

ああ言えばこう言う、という表現がここまでしつくりくるケースはないと断言できるほど、未来のジェイコブに対する切り返しは容赦がない。

確かに彼が指摘した通り、これまでの被害者には売春婦がいた。

一方で、彼女の身体からは犯人のものと思しき精液反応がどこからも検出されなかったことも事実だ。そして、男性の被害者からも精液反応はこれまでのところ見つかっていない。今度の被害者から精液が検出されたことは今までと異なったケースであり、その点において非常に重要な事柄だと言える。

もし犯人が被害者と合意の上でセックスに及び、その後やむなく殺さねばならないような状況に陥ったのだとしたら、犯人のDNAが残されていることになる。

それはそれで貴重な証拠が入手できることにはなるが、そんな単純なミスを果たして犯人が犯すのだろうか、という疑問も同時に未来の中でくすぶっていた。これまでの2年間に渡る犯行においては重大な証拠を何一つ掴ませなかったのに、決定的な証拠であるDNAをのことを失念していたとはどうも考えられないのだ。

とは言え、DNAが解析されていない今の段階ではまだ何とも言えない。

未来は内心の懸念を顔に出すことはせず、目の前に立つ当面の厄介者であるジェイコブのへの追及を優先することにした。

「それに、殺されるならそれなりの理由があつた筈でしょう。例えば、犯人をうつかり怒らせたとか……何か、知ってはならないことを知ってしまったとかね。セシルは、怒り狂つた犯人に何度も殴られて殺されたのかも知れないし」

未来が続けた話の途中で、ジェイコブの心臓が予想通り大きな音を立てた。

現在までに彼が示した反応を見れば、被害者が知人であることは間違いない。問題はどのような関係にあるのかということところだが、白人至上主義者であるジェイコブとあの黒人の青年が親しい友人であるとは、未来にはにわか信じ難かつた。

が、相手のことを好意的に思っていないければ示さないような激しい動揺が見られることから、ある程度以上の仲であろうことは容易に推測できる。ジェイコブが今までの人生でどんな人間関係を築いてきたのか、男女を問わず調べる必要があつた。

未来が僅かな時間でそこまで思い至つた時、ジェイコブがわざとらしく大きな溜息をついて首を振つた。

「そんな当て推量で考えるなんて、馬鹿らしいと思わないのか？これだから、女つて奴は気に入らないんだよ。もっと客観的に状況を分析する必要があると思うね」

「私は客観的だし、冷静にしてるつもりだよ」

彼の呆れたような口調は恐らく挑発のつもりなのだろうが、未来の獲物を追い詰める強固な態勢に露程も影響を及ぼさない。彼女を怒らせて早く会話を終わらせようとする目論見は、黒い瞳に宿された感情の見えない視線に一蹴された。

そして未来は目の前に立つ男を素早く一瞥し、冷めた唇に鋭い言葉を乗せ続けた。

「そうだね、被害者は何も殺される直前に犯人とセックスしたとは限らない。もし恋人がいたんなら、その相手のだつてことも考えられるわけだしね。いずれにしても、もっと詳しく調べる必要があるわけだけど」

「どつちにしたつて、DNAや毒物検査の結果が出るまでは何とも言えないわけじゃないか。こんな議論に意味はない」

「議論？私とあんたが？この話、いつからそうなの？」

再びジェイコブが話を投げ出そうとした時、未来の声が低く響き、普段は決して見せない迫力が込められた視線がジェイコブの青い瞳を下から射抜いた。

今現在も全米から選り選られた猛者たちと戦闘訓練を受け、数度の実戦を生き残った女戦士が持つ威圧感、その場の空気を数度は低く感じさせるのに十分な空間を瞬時に作り出していた。

「私はただ単に今の段階で判明してることと、考えられる可能性について話してるだけでしょ。何か一つのことについて論じてるわけじゃないし、この場で何か結論を出そうと思ってるわけじゃないんだから」

そしてその空気に、経験の浅い新米男性捜査官が持ちこたえられないわけがなかった。未来の言い方は穏やかで変わらずとも、完全に気圧されていたジェイコブがすぐにその場から動かなかったことは、むしろ見上げたものだ。

「もううんざりだ。早く検死報告書をよこせって言ってるだろ」

しかし顔の前で大きく手を振って目を逸らしたジェイコブは、とうとう捨て台詞とともに会話を打ち切つて、未来に背を向けた。

「もう、メッセンジャーに添付して送つてあるよ。毒物検査とDNA鑑定結果は、わかり次第また私から伝えるようにするから」

大股で去りゆく広い背中から憤りが立ちのぼっているのが目に見えるようだったが、未来が投げかけた台詞は確かな追い打ちとして、ジェイコブの自尊心に確実な打撃を加えていた。即ち、重要な情報が彼の元へ直接届くことはなく、全て未来を通さねばならないのだ

と宣言したのである。

ジェイコブの言わぬ姿は、足早にオフィスの奥へと消えていった。

が、彼との舌戦にひとまずの勝利を収めた未来の口から漏れたのは、大きな溜息だった。

「……私ってば、嫌な奴」

椅子をくるりと回してデスクに向かった直後、思わず日本語の独り言がこぼれる。

いくら必要に迫られたとは言え、職務上の権限を振り翳して相手を追い詰めるのは、自身の精神にも予想以上のダメージがあるようだった。憎まれ役を演じることに慣れてはいても、やはりいい気分にはなれそうもない。

今やジェイコブは、未来のことは秘密を暴こうとする不倶戴天の敵と見なしているだろう。

それでも、彼が隠そうとしている事実を明らかにすることにより、誰かが必ず救われるのだ。そこから犯人逮捕につながれば犠牲者たちの無念を幾らかは晴らせるし、遺族の感情にもある程度の区切りはつけられる。

しかしそれは同時に、犯人と深い関わりを持つ人々を奈落の底へと突き落とすことも意味している。

凶悪犯の友人、凶悪犯の両親、凶悪犯の恋人。

犯人が捕まると、周囲の人々の立場も苦しいものに一変する。

世間から悪い意味で注目を集め、あいつは犯罪者とかかわつていたり後ろ指を指されることもあるため、警察やFBIを恨む者も現実には少なくない。

事実は決して変えようがない、たったひとつの厳然たるものを人々に突きつけるが、それを見る瞳の数だけ真実というものは存在する。

警察機関は犯罪における事実を明らかにする一方で、事実が全ての人々を救い、幸せにするわけではない。そのことを忘れては捜査

官としての責任を全うすることはできないし、社会にある自分の存在の意味をどこにも見いだせなくなってしまう。

本来FBI捜査官には社会悪を憎む純粹さと、自己を律する強い理性とが要求される。

この相反する2つの精神を飼い慣らし、完全に操れるようになれば一人前と言えるが、そのどちらも持て余してしまう未来は、まだ自分が半人前だと言うことを痛感せざるをえなかった。

組んだ両手に顎を寄せ、デスクに頬杖をついていた未来が遠くを見つめるのをやめるまで、数分を要したであろうか。気を取り直した彼女が軽く手を振って電話を取り上げようとしたところで、マウスの近くに置いてある個人携帯電話が着信を告げて光った。

ソフィーからの電話だ。

『もしもし、ヨーコ？今電話は大丈夫かしら』

未来が本体を持ち上げて受話ボタンを押すなり、ソフィーの声が耳を打った。心なしか、先日大学で会った時よりも口調が明るくなっている気がする。

「うん。どうかしたの？」

『特に用はないんだけど……大丈夫かなと思って。この前会ったとき、全然元気がなかったじゃない。あんな貴女を見たのは初めてだったから、心配になっちゃって』

「そっか、ごめんね。何とか大丈夫だよ」

答えながらも、未来の声からは早くも精彩さが萎みがちになってきている。

職務に打ち込んでいれば辛いことを思い出さずにいられると思っただ矢先、彼女は神の悪意をひしひしと感じざるをえなかった。

『あれから、何かわかったことはあった？』

「兄さんの車が見つかったってことぐらいしか……警察からは、他に何も連絡がないの」

『元気出してね。大丈夫よ、きっとマサトは無事にいるわ。彼が帰ってきた時に貴女がやつれてたりしたら、心配させちゃうよ』

「うん……そうだね」

ソフィーは心底から未来のことを気の毒に思い、友人として支えねばと考えているのだろう。そのような気遣いは却って当人を落ち込ませる羽目になることはしばしばあるが、ソフィー一般的な女性が持つ、いかにも同情的な態度がまさにそうだった。

周囲の誰かがトラブルに巻き込まれるとそれをあたかも自身のことであるかのように心配し、お節介なぐらいに世話を焼きたがる人物はどこにでもいる。

しかし彼らにはあくまで安全な立場から事態を操ろうとし、自分が重要人物になった気分を味わいたいだけという歪んだ優越感に根ざす心理が裏に働いている場合が多い。しかもそれは本人に無自覚なため質が悪く、身近にこういった人物がいる場合は距離を置くのが一番だとされる。

所謂共依存やサイコパスにも多いケースだと言えるが、ひよつとしたらソフィーもそうなのではないかという懸念が、未来の中に影を落としていた。

はつきりした根拠があるわけではない。

以前の未来であれば人を悪く思う度に自己嫌悪に陥っていたところだが、最近は心の内に息づく野生が警告する声をないがしろにしたことはない。故に、この電話でも自らの発言を意識せずに抑えていた。

加えて周囲の雑音にも気を配っている未来の耳には、ソフィーの言葉が流れ込み続けてくる。

『私も早くマサトが見つかるように、毎日祈ってるの。ねえ、マサトが戻ったら、私の家でパーティをしましょうよ。私が元気の出るハーブを入れたケーキや料理を作るから、マサトには好きなようにお花で部屋を飾ってもらおうの。ヨーコは、彼が一番好きな花をプレゼントするといいわ。いい考えだと思わない？』

「兄さん、きつと喜ぶと思うよ。ありがとう」

未来の返事は当たり障りのないものだが、ソフィーに話す元気が

ないことを察してもらえればいいという態度は気のない口調に出してある。

更に、未来は話題をすり替えた。

「でも、ラルフのことは大丈夫なの？」

「ええ。無言電話とかはあるけど、不思議と回数は減ったのよ。ごみを漁られたり、変なものが置いてあったりもしないし」

「そう、良かった。でも、急にそっちの動きがなくなったことは、盗聴器でも……」

「それは大丈夫よ。昨日、調査の業者に来て調べてもらったの。家のどこからもおかしな電波は出てないって言われたわ。マサトのアドバイスに従って、正解だったみたい。これでとりあえずは安心してここにいられそうよ」

結局話はすぐ杉田のことに戻されてしまう。しかし、彼がソフィーに盗聴器のことまで教えていたのは未来にとって意外だった。

そしてラルフがティアーズ事件の新たな犠牲者発見とほぼ同時に鳴りを潜めたというのは、引っかかる話でもある。未来の返事が滞ると、受話器の向こうからは気遣わしげな声色が今一度向けられてきた。

「ねえヨーコ。こんな時くらい、他人より自分の心配をした方がいいわよ。マサトの情報提供を呼びかけるポスターとか、作らないの？ 何だったら私の学校にもかけあって、掲示とかチラシ配りの許可ももらうけど」

「でも、パパやママは警察に任せておきたいみだいだから。相談してみて、いって言われたらね」

如何にもそっとしておいて欲しいと言いたげな口調を作り、更に小さな溜息を混ぜて、未来はソフィーの提案を宙ぶらりんな状態に持って行く。さしものソフィーも自分が出しゃばり過ぎたことに勘づいたようで、声のトーンが幾分か落とされた。

「私、何でも協力するから。何かできることがあったら、いつでも言っちょうだいね」

「うん、ありがと。何かあったら、私から連絡するから」

恐らく大学の構内から電話してきたのである。ソフィーが頷いた気配を感じ、未来は携帯電話を切った。

今度は本心からの嘆息が胸の奥から出たようで、静かな個人スペースのパーティションに思ったよりも響いた気がする。ソフィーとはさして長い時間話したわけでもないのに、ジェイコブと話した時よりも重い疲れが残っていた。

未来は奇妙な後味の悪さを、ソフィーの周辺で2つの事件に関わりがある人物がそれぞれ出現したせいだと思うことにした。

杉田は彼女を車で送った後に失踪し、ブラックヘア事件の犯人に拉致された可能性ありとして捜索中となっている。ラルフは彼女の元恋人で現在はストーカー、ティアーズ事件に使われたのと同じ人形を送りつけていて、このまま放置しておけば何をするかわからない。

杉田が行方不明になったことはどうしようもなかったことだと思えるが、ラルフについては急に目立つ行動がなくなっているというのがやはり引つかる。

連続殺人犯は、殺人を犯した直後は刺激が満たされるために大人しくなることが多い。しかしその麻薬の如き強烈な刺激はじわじわと犯人の心を干上がらせ、やがてまた新たな犠牲者を求める禁断症状を引き起こさせる。そうなると犯人はいてもたってもいられなくなり、また誰かを毒牙にかけるのだ。

もしかするとラルフは、あの黒人の青年の頭と胸を撃つて身体を引き裂いたことで、一時的に欲望が抑えられただけではないのか。そして今度こそ、自分が人形を送りつけた相手であるソフィーを殺すのではないか。

ラルフは肉体労働の従事者で、ロボットが操縦できることをほのめかしたことがある。

男っぽくごつい顔が被害者の返り血と肉片を浴びて不気味に笑う様子が、未来の瞳に内蔵されたレンズに本当に焼きつけられたのか

と錯覚するようだった。あまりにもおぞましい自身の想像に、反射的に電話に右手が伸びる。

手遅れになる前に、これ以上の犠牲が出る前に食い止めねばならない。

血に飢えた獣がまた誰かを殺すまで待つてなどいられないのだ。

しかし、と未来は自らの理性に問いかけつつ、捜索令状を申請するために掴み上げた受話器をゆっくりと置いた。

ラルフはポールの導き出した犯人のプロファイルとあまりにもかけ離れている。

今まで何も証拠を残さなかったティアーズ事件の犯人は、恐ろしく頭が良くて慎重な人物だ。

そんな人物が、あからさまなストーキングの痕跡を気にせずにいられるのだろうか？

人目につく場所で派手な喧嘩をしたりするのか？

自分の肉体を他人に誇示するような真似をするのだろうか？

答えはいずれも否だ。

ティアーズ事件の現場から見えるのは、自分が絶対に逮捕されることはないという確固たる自信であり、神経質なほど自分の臭いを残すことに敏感な細やかさだ。ラルフが持つ粗野で粗暴な思考と行動とは、あらゆる点において合致しないのである。

そして何よりもラルフがゲイなのか、最後の被害者と接点があったかどうかについては全く証拠がない。

確かな情報がない段階で焦って動いては、犯人に気づかれてしまう危険がある。結果、逃亡されたり、最悪の場合は余計な犠牲者を出してしまうことになりかねない。今冷静さを欠いて失敗することは、決して許されることではなかった。

未来はFBI特別捜査官だ。

いつでも理性で感情をコントロールし、人間の闇を理解し、犯罪から善き人々を守り、法を守るプロフェッショナルなのだ。

勝手な思い込みや一時的な感情に任せて向こう見ずに駆け出すな

ど、言語道断だった。

頭を冷やして、もっとよく考える。

未来は懸命に自分に言い聞かせて、犠牲者たち一人一人の顔と凄惨な血だらけの死体、共に犯人を追い続けているCVCの仲間たちの顔を心に描いた。

ジャクソンやウオーリーなら現行犯でない限り、もっと確かな証拠を集めてから踏み出すだろう。彼らは自分たちが背負う被害者の無念を、遺族たちの悲しみをどんな時も置き去りにしない。

つい最近この事件の担当になったのは、未来一人だ。

そしてまともに現場に立ち会ったのも今回が初めて、身元が判明していないのもあの黒人男性だけで、性交渉の痕跡があることなども今までの被害者とも違う。

被害者について、もっとよく調べてから行動に移るべきだ。

彼が一体誰なのが、全ての鍵を握っている。

とは言え、現状でできることは全てやっているのだ。今はDNA鑑定の結果を待ち、それを基に身元を調査するしかない。

未来は乱れた呼吸を整えてから伸ばしっぱなしでいた右手をそつと引き寄せ、サボテンの鉢の側に置いた個人用携帯電話を持ち上げさせた。

このオフィスで仕事をしていた数週間前まで頻繁に連絡を取り合っていた情報提供者たちに、頼れそうな者がいないか確認するためだった。

荒く弾んでいた二つの息が、徐々に静かになっていく。

窓がなく狭いトレーラーハウスの一室は、暖房が行き渡っておらず室温は低かった。が、一糸纏わぬ二人の男が横たわるベッドは、夏の空気が切り取られて置き去りにされているかのような蒸し暑さだった。

その片割れである杉田の下半身には、無理やり押し入ってきた侵入者を受け入れた疼痛が波のように打ち寄せてきている。彼は何度も味わった傷みに慣れることはなく、唇を強く噛んで堪えるしかなかった。

横で息をついている体格がいい白人の男は、ちょっとしたことでも激昂しやすいことがわかっており、その気になればいつでも杉田を始末することができる。

杉田は汗ばんだ背中に張り付くシーツを不快に思ったが、不用意に動いて彼を怒らせないようにすることを優先し、寝返りは打たなかった。

しかし眼鏡をかけ直して倦怠感が残る手足をそつと伸ばした時、それでも男のある場所に視線を走らせたのは、杉田の医師としての性のある策を巡らせるためであった。

「腕の傷はもう痛まないのか？」

遠慮がちな黒髪の青年の声に反応し、仰向けになっていた男が顔をこちらに向けてくる。

二の腕のタトゥーが目立つ右腕に巻かれた包帯は、杉田がきつちりと手当てしたただけあって、今しがたの激しい行為にも緩むことはなかったようだった。

「こんなのはかすり傷だ」

全裸でいる杉田の左側で、同じように肌を晒している男の返事は短い。

杉田はこの男の名を知らず、男もまた教えるつもりがないようだった。

そして会話がいつも短く終わるのも、男が自分の情報をなるべく与えないようにすると同時に、杉田の人となりを詳しく知らないようにするためなのだろう。

下手に相手を知れば自然と情が移ってしまい、簡単に殺せなくなるからだ。

彼が親しげに話をしてくれないうちは用心するべきだったが、長くその状態が続けば杉田のことに興味すら持たなくなってしまう危険性が高まる。

この男は、何人も若い男を殺してきた殺人鬼だ。

人間が蚊を叩いて潰すのと同じで、殺人を犯すことに対して何の躊躇もせず、罪悪感も持たない邪悪な人間なのだ。

自分が生き延びるためには、とにかく自分を犯したこの男に取り入るしかない。

杉田は包帯と男の顔を交互に見比べながら、低い声で続けた。

「でも、あれは古いビール瓶だったんだろう？ ばい菌が入らないように、毎日消毒はした方がいい。僕にやらせてくれるなら、普通の人ができるよりも痛くはないと思うんだけど。あまり無茶もしない方がいい。折角塞がりかけた傷口が、また開いてしまう」

なるべく卑屈にならないよう注意して、杉田は男を気遣うことのみ考えようとした。

おおよそ2日ほど前のことだろうか。

杉田が監禁されている地下倉庫のほぼ真上で、古いビール瓶を片付けようとした男が誤って転倒し、飛び散った破片で右腕がざっくりと切り裂かれた。

彼の苦痛に満ちた呻き声を聞きつけた杉田により、4インチ（約10センチ）はあるうかと言う汚れた切り傷は完璧に手当てされ、炎症の兆候も幸いなことに見られていない。

普通なら病院に行かねばならない大きさの怪我であったが、男は

犯罪者の身だ。迂闊に病院に出入りして身元が明らかになることは避けたかった筈で、杉田はそこに生き延びるチャンスを見いだしていた。

医師である自分の存在は間違いなく相手にとって貴重であり、決して手放したくはないだろう。何とか外部に連絡する隙を見つけるまで、男をとことん信用させなければならぬ。そのためには意地もプライドも捨てて従い、本当の意図を悟られないようにするしかなかった。

同時に、男の存在に自らが絡め取られて吞まれないよう、強い意志も要求される。

表面上は男を慕って彼が応えてくれるのを喜びつつ、腹の中ではしたたかに計算して欺き、自身が助かることを第一に考えるのだ。

包帯の交換や傷口は、最初はいちいち男が地下室まで降りてきてやっていた。しかし回数を重ねるうち、杉田が逃げ出す意思を持っていないと思った男は、今では監禁場所を地下室からトレーラーハウスのベッドがある部屋に変えていた。

そう、少なくとも今の杉田に逃亡するつもりはなかった。

男が気弱なアジア人青年を恐怖で完全に支配し、その行動を見えない枷でがんじがらめに行っていると思えばいい。

「それに、傷口はあまり空気に触れさせないほうがいいんだ。つまり、全くの素人がやるよりは僕にやらせてもらえる方が早く治せるってわけで……」

いとおしむように、杉田は指先で男の包帯の上をなぞる。

その心配そうな……少なくとも見た目は……眼鏡の奥の瞳にある本心を読み取るうとしているのか、男は枕に頭を預けたままで視線を動かさない。今まで身体を蹂躪される度に絶叫し、泣き喚くしかなかった杉田の反応が変わってきたことに、男は興味を持ち始めたのだろう。

が、彼はふいと目を逸らして呟いた。

「自分の世話は自分でやる。余計なことはするな」

それでも、身体まではそっぽを向いていない。まだ相手の話を聞く気持ちを残しているサインだ。

杉田は地下室に監禁されていた時から考えていた言葉を、迷わず唇に上らせた。

「貴方の役に立ちたいんだ」

「俺の？」

男の馬鹿にしたような嘆息に、微かな笑いの色が見える。

頷いた杉田が、男の方へ僅かに身体を寄せた。

「僕を今この瞬間まで生かしておいてくれた、そのお礼がしたいんだ。それにこれからも、殺さないでいてくれるなら何だってする。

逃がしてくれなくてもいい。お願いだ」

彼は頭の中で何度も繰り返して完璧に覚えた文句を、一言一句漏らさずに口にしていった。

自分を陵辱した相手に感謝し、礼がしたいなど、本心では反吐が出るくらい忌まわしい台詞だ。しかし、自分が役に立つということを印象づける機会は今二度と来ないかも知れない。

今を逃してしまえば、自分は生きて未来に会うことができなくなる。

検死局にあるステンレスの冷たい解剖台の上で身体を切り刻まれ、自分さえ知らない全てを暴かれてしまう。

そうなれば、愛する女の心は凍てつき、粉々に砕け散ってしまうに違いなかった。

絶対にそんなことはさせない。

僕は、必ず生きてここから帰ってみせる！

杉田を支えている未来への強い想いは彼を千両役者へと変貌させ、自らの心を完璧に覆い隠すまでになっていた。

熱く、潤んだ黒い瞳を向けられているのを感じたのだろう。男の背けられていた視線がシャツの上を這い、杉田の顔に留まった。

「何でもか？」

男が黒髪を青年を見つめたまま、胸毛の濃い上半身をゆっくり起

こした。

二人の視線が正面から重なり合ったまま、動かなくなる。

時間にすれば10秒とない間だっただろう。ただし、身じろぎ一つしない杉田にとってはその何十倍にも感じられるような間であった。

男が片手を杉田の顎に伸ばし、顔を上向させた。

太い指の熱い感触に驚いた身体が跳ね上がりそうになるのを、杉田は必死になって抑えつけた。

心臓が胸で暴れ、四肢は逃亡を図るべく緊張するが、自分が抱いている嫌悪感をここで悟られるわけにはいかないのだ。

「お前は医者だと言ったな」

呟くような男の一言に、杉田は落ち着いた様子を装って頷いた。

「怪我を治したりする以外に、何ができるんだ？」

「料理と洗濯に掃除……それに、貴方を喜ばせること」

そしてすかさず、これもやはり予め考えていたことを英語に乗せる。

「お前が今、一番したいことは何だ？」

続いた男の問いに、杉田は緊張を隠した声で答えた。

「花を……」

単語が喉に絡む。

もう一度、はっきりと言い直した。

「花を飾らせて欲しい」

軟弱そうな青年が返した言葉に男は驚いたのか、僅かに目を見開いていた。

が、冗談だと思ったのか、表情の変化は一瞬だった。それが先と違うのは、口調に笑いが含まれていることであろう。

男が小動物でも弄ぶように、杉田の顔をゆっくりと左右に傾けさせる。

「男の俺に、花が似合うと思うのか？」

「いや」

動きには逆らわない杉田の、視線だけが男の顔に向けられた。

「彼女にプレゼントすればいいかと思って」

再び真正面から向き合う形になったところで、男の動きが止まる。含み笑いさえして見せている杉田は、男がこの話に強い関心を寄せたことを確信した。

「まだ、必要なだろうか？たまには機嫌を取った方が扱い易いんじゃないかと思うんだけど」

不意に男は杉田の顎から手を外し、ベッドの上に裸身をごろりと投げ出した。

仰向けになつた男がトレーラーハウスの飾り気がない天井を見つめ、呟くように漏らす。

「面白いな」

顔はもう杉田の方を向いていないが、男の話し方が今までと明らかに違つていた。

手の中の虫を死ぬまでつつきまわす子どものものでなく、自分とは違う発想をする年下の仲間に話しかけるような、自分がこの場を支配している満足感が滲み出たものだ。

「そうかな」

「お前が面白いんだよ。俺にはそういうのが考えつかねえ」

杉田が小首を傾げたのがわかつたのだろう。今度は、男ははつきりとわかる笑いを言葉の中に見せていた。

「花は僕に選ばせてくれるか？」

杉田も頭を男と同じ枕に落とし、怖気でざわつく胸を必死で鎮め、傍らの男の肩に頬を寄せた。

媚を帯びた黒髪の青年薄い胸板を撫で、男は黙って頷いた。

フレデリックスバーグ駐在事務所の未来のもとヘジャクソンからの連絡があつたのは、ティアーズ事件の新たな被害者が発見された翌日に当たる11月30日の朝のことである。

土曜日のため事務所に出勤している職員は未来一人しかいなかった

たが、ティアーズ事件のことを話すのには都合が良かった。

『被害者の名前はエミリオ・ハンソン、24歳だ。キングジョージに一人で住んでたことまでわかってる』

警察から送られてきた死体発見現場の証拠品リスト画面を、自席のモニターで睨んでいた未来が受話器を掴み上げるなり、ジャクソンはいきなりそう告げた。

最近をよく眠れないせいで午前中はけだるくなっている未来の瞳が、騒々しい同僚の声で一気にぱちりと開く。肩と頬の間に受話器を挟んだ彼女は、電話に出ると同時に無意識でデスクトップ画面に新しい電子付箋を作成していた。

「キングジョージ郡のどこ？住所を詳しく教えてよ」

『キングジョージ郡ダルグレン、ステートルート614、5384 - 5246だ』

早口のジャクソンが伝えてきた住所を付箋に打ち込んだ未来の脳裏に、駐在事務所の管轄地図が浮かび上がる。キングジョージ郡は死体が発見されたウエストモアランド郡の北西に位置する。この2つの郡は、偶然にも以前未来が担当していた地区だ。郡を跨いだ捜査は複数の警察組織がかかわってくるため面倒だが、幸い未来は双方の郡の警察と良好な関係を築くことができていた。

もともと、後任のジェイコブがそれを維持しているかどうかは甚だ疑問ではあったが。

「彼に家族はいないの？」

『エミリオの出身はアイオワ州で、母親がそっちにいたらしい。ただ、彼が15歳の時に両親は離婚してるんだ。親権は母親にあったが、息子は離婚と同時に家を飛び出して、一度も帰ってなかったんだ。あっちの地元警察には連絡してもらおうよう頼んでるんだが、母親は再婚してから引越してる。それ以後の足取りが、まだ掴めてねえみたいだな』

ジャクソンは電話口で溜息を交えていたが、未来も同じ気分だった。

家族の行方がわからないのでは、被害者の人となりを知るための重要な手がかりがないも同然なのだ。

が、二人揃って暗くなつたところで事態が好転するわけではない。未来は話題を変えた。

「それにしても、随分早く身元がわかつたんだね」

『エミリオのDNAが、CODISに登録されてたんだよ。鑑定が終わってすぐに照合してみたら、一致するレコードが10秒足らずで見つかったんだ』

「エミリオは逮捕歴があつたの？」

『窃盗と麻薬売買で2度逮捕されて、1度服役したらしい。その時にDNAサンプルが登録されたんだな。逮捕当時の身体の傷なんかも照合して確認したから、間違いないぜ』

CODISとはFBIにより作成され、全米各地の研究機関に提供されているDNAデータベースのことだ。システムの運用が始まつたのは1990年代で、当時は重犯罪で有罪になつた犯罪者のみが登録されていたが、近年では起訴された者全員のDNAサンプル登録が義務づけられている。加えて、凶悪事件で被害者以外のDNAが発見された場合も、漏れなく登録されるようになっていた。

各科学捜査研究所では必要な時にネットワークを通じてシステムにアクセスし、調査対象となつたDNAプロフィールを過去の事件で提供されたDNAプロフィールと比較することができる。全く同一のDNAを持つ人物は一卵性双生児しかありえず、それ以外の人間で型が合致する可能性は4兆7千億分の1以下とも言われているのだ。

身元不明の死体が発見された場合、今日ではCODISでも検索をかけることが一般的となっている。今回は被害者に前科があつたためこれに助けられることとなつたが、こういつたケースも珍しくなかつた。

『エミリオの顔写真なんかも手に入ってるからな。必要なものは、この電話が終わつたらすぐにメールでそっちに送るよ』

電話口のジャクソンが話すと、キーボードを叩くカタカタというも未来の耳に響いてくる。未来は念のためにエミリオが起こした過去の事件についても資料を添付しよう、黒人の同僚に依頼した。

「取り敢えず、彼の家を捜索しなきゃね。カーター刑事たちと一緒にやるけど、ジャクソンも来るでしょ？」

「いや、FBIからの立会は一人でいいだろう。それに郡警察への連絡は、俺よりもミキにやってもらった方が角が立たなくていい。だからそっちは任せたいんだが」

確かに事件現場以外でありFBIがしゃしゃり出ると、地元警察からの心象が悪くなることもある。ジャクソンの言うことはもっともだったため、未来は納得して頷いた。

「わかった。キングジョージとウエストモアランドは、私がこの駐在事務所に行った頃に担当してた地区だったから。多分スムーズに行くと思うよ」

とは言ってみたものの、未来の胸に一抹の不安は残った。

自分がこの駐在事務所に行った頃、親しくしてくれていた刑事や警官たちとの関係をジェイコブがぶち壊していないだろうか？

これから彼らに電話をして捜索の段取りを進めなければならないが、いささか気が重かった。

「それと、エミリオの体内から見つかった精液についてなんだが。DNAは一人分だけで、残念ながらそいつはCODISの登録がなかった」

「じゃあ、誰のかははっきりしないわけだね」

「そう。犯人のかも知れないし、違いかも知れない。交友関係を詳しく調べて、場合によってはDNAサンプルも集めなきゃならねえな」

先とは違い、ジャクソンは残念とは言いながらも口調はさらりとしていた。

そしてそれは未来にとっても意外なことではない。

今まで証拠らしい証拠を残してこなかった犯人が、究極の個人情報であるDNAをうっかり置いていってくれるとは、どうしても思えなかったのだ。それにもし犯人が過去に軽犯罪を犯して逮捕されたことがあるのなら、尚のことDNAと指紋については注意を払うだろう。

エミリオは同性愛者である可能性が高いが、直接的な性的暴行を受けて殺された可能性は低い。体内の精液は犯人のDNAが採取されない限り、証拠としての重要度はさして高くないと言ってもいいぐらいだった。

それに死体から発見された証拠物品は、被害者以外のDNAだけではない筈である。被害者は冬用のニットを着て、土の上に放置されていたのだ。ごみや繊維など、小さな証拠を山のようにくっつけていることは間違いない。

一連の事件で発見された証拠の明細を思い出しながら、未来は次の質問をジャクソンに投げた。

「他の微物はどうなの？今回も同じようなのが見つかった？」

「今分析中だ。素人目には同じような動物の糞なんかが検出された

ように見えたけど、化学分析チームの連中が報告書を持ってきてくれるのを待つしかねえな』

確か今までの事件で発見された共通の証拠はクマネズミの糞にクッキーのかけら、キウイや玉ねぎの皮などだ。これらの共通する証拠のうちで幾つかでも同じものが検出されれば、同じ場所で死体処理がされたと見なすのに事が足りるだろう。

『死亡推定時刻は、筋肉の硬直具合と胃の内容物から推測して11月28日の20時から深夜にかけて。血中アルコール濃度は0.16パーセント。かなり酔っていたようだな』

「犯人が飲ませて、抵抗できない状態にしたのかな？」

未来がジャクソンが読み上げる項目と数字をメモに書き留めながら、疑問を口にする。血中アルコール濃度はかなり高い数値だと言えるだろう。酒に弱い体質の者は、まっすぐ歩くことさえできなくなるくらいだ。

『可能性はゼロじゃない、ってことぐらいしか言えねえな』

新たに判明した検査結果はそこで終わりのようで、ジャクソンは話題を移した。

『そう言えば、そっちの事務所にいるクソガキは何か吐いたか？』

彼がクソガキと表現した人物がジェイコブであることに、未来は一瞬気づくのが遅れた。

「クソガキって……彼はあんたと2歳しか違わないよ。まあ、締め上げてはいるけどね。もう少し、時間がかかるかも」

未来はつい癖で声色を少し低くし、周囲の気配を探ってしまった。普段ならデイタイム中の事務所は受付係のマイケルと一般市民の話し声がしていたり、電話もひっきりなしにかかってきて喧騒に満ちているが、土曜日の午前中である今は静まり返っている。

自分の習慣に思わず苦笑した未来は、自然と抑え目になっていた声のトーンを元に戻した。

「ジャクソンはフレデリックスバーグに来ないの？2人で一緒にいた方が、まとまって行動しやすくていいんだけど。あんたがいれば、

あいつに対してももつとうまくいくだろうし」

『いや、俺はこっちで今日までの検査結果をまとめた詳細な報告書を作れって言われてるんだ。DNA以外にも、結果待ちの分析がまだまだあるからな。被害者宅の捜索についても、モノをこっちに送ってもらったらずくに調査を始めねえと』

提案してきた同僚女性に答えるジャクソンの声には、やはり忙しくなくキーボードを打つ音が重なっている。彼の大きな手では、既製品のキーボードは小さすぎてかなり使いづらいのだろう。

タイピングのリズムは心なしか苛立っているようにも聞こえ、2メートル近い巨体のジャクソンが、長い手足を個人オフィスの窮屈なデスクで持て余している様が見えるようだった。

「デスクワークばかりで、退屈なんじゃない？」

彼に対し、捜査車両であるダークグリーンのプリウスを駆って北部ヴァージニア一帯を奔走しているイメージしか持っていなかった未来が、からかいを込めて言った。

『ちえ、それを言うなよな。折角わざと忙しくして、ぼんやりしないようにしてるってのに』

これまた仏頂面がストレートに結びつけられるような、ジャクソンの子どもっぽい憤慨が即座に返されてくる。

「隊長にお礼を言つといてよ。ミキ・ハザマは刺激的な場所に戻ったお陰で、今のところは退屈しないで済んでますって」

『あんまり嫌味なことを言ってるなよ。ああ見えても、隊長はお前に対する処遇については最善の配置をしてくれたんだし、心配もしてるみたいなんだから』

「まあ、気遣いは嬉しいんだけど……」

皮肉と自嘲を込めて口を上らせた台詞にジャクソンが素直な感想を漏らしたことで、未来は口ごもることになった。

刺激的な場所、というのはジェイコブとの争いを指し口を突いて出たことだ。

しかしこの言葉は、もう一人神経によろしくない刺激を与えてき

そんな人物も近くにいることを彼女に思い出させた。

ここは自宅に近く、全米随一のセキュリティを誇るクワンティコのFBIアカデミーからは遠い。つまり監視の目がなく自由に動くことに関して都合が良く、こちらに危害を加えようとする人物にとっても丁度いい場所なのである。

未来の頭にふと、ソフィーに入れ知恵したことを知ったラルフが逆恨みし、襲撃をかけて来かねない危険な存在になってきていることが過ぎったのだ。

『おい、ミキ？』

不意に黙り込んだ未来を訝って、ジャクソンも探るような態度になる。

未来は話すのを一瞬躊躇った。

しかし、ジャクソンは未来が杉田のために独自に動いていることを黙認してくれている仲間の一人でもある。打ち明けるタイミングとしては、まだ可能性の段階である今において他にないだろう。

「ちよつと気になることがあるんだよ。場合によっちゃ、ティアーズ絡みかも知れないの」

間を置いてから再び口を開いた未来の声は、明らかに重くなっていた。

そして彼女は今までに自分の身を通り過ぎた事実を全て、簡潔にジャクソンに話した。

恐らくジャクソンも知っているであろうソフィーとの関係から始まり、彼女のストーカーであるラルフとその人格のことについて、そして彼がティアーズ事件で使われたのと全く同じ人形をソフィーに贈ろうとしたこと。その現場には、杉田の行方を追ううちに遭遇したこと。

加えて、エミリオの死体が発見される直前からぱったりとつきまとい行為が止んだことを、なるべく主観を交えずに説明した。

未来が話していた数分の間、ジャクソンは最低限の質問のみを挟んでひたすら耳を傾けてくれた。が、彼女が長い話を終えて小

さな溜息をついてからもまだ、彼は沈黙を守ったままでいた。

一向に自分から言葉を発しようとしないうジャクソンへ再び未来が言葉をかけようとしたところへ、彼はようやく一言だけ言った。

『どうしてそんな大事なこと、今まで黙ってたんだよ』

「確証がなかったんだよ。もっとも、今も状況は変わってないから、今もまだラルフがテイクアーズ事件にかかわってる可能性があるってだけなんだけど。最新の被害者が発見される直前くらいから鳴りを潜めたのが、どうも気に食わないんだよね」

同僚の黒人男性は未来を責めたり呆れたりするのではなく、逆に淡々とした口調になっただけで感情を殆ど込めていなかった。彼自身でも頭の中で話をまとめている最中なのだろう。

未来は怒りを露にされるより、このような反応の方に不安を覚える性質だ。つい、返事が弁解がましくなってしまうのは隠せず、無意識のうちに肩もすくめさせていた。

『このことは、誰か他の奴にも話してるのか？』

「あんたの他には、ポールにしか話してないよ。特殊捜査チームの誰かに情報が行って、突っ込まれると厄介なことになりそうだから」
続いた質問を乗せた声からも、やはりジャクソンの心の中は窺えない。

再び会話に隙間ができる。

未来の方でも、これ以上ジャクソンに与えられる情報はない。そして明確に法を犯したわけではないラルフを今すぐ逮捕できるわけでもなければ、警察機関への任意同行を求めるだけの理由もない。どんなにこの状況が歯がゆくとも、動向を見守る他はないのだ。

そうジャクソンも考えているだろうと思っていた未来の耳に、意外な言葉が響いた。

『そのラルフって奴は、証拠さえ揃えばしょっぴくことは可能だな。そうすりゃ、もっと堂々と調べることができる』

ジャクソンは殆ど独り言を漏らしたのと同じぐらいの小さな声だが、未来を慌てさせるのには十分な内容だった。

「待つてよ。ラルフを逮捕してみてもし事件とは無関係だったら、ただじゃ済まないでしょ。今はまだストーカーの容疑だけなんだから、地元警察にこっちから話を持ってって、迷惑行為の現行犯で逮捕するしかないんじゃない？被害者が証拠をきちんと押さえてるかどうかも、確認できてないんだし」

『お前に指摘されなくなつて、それぐらいのことは俺にだってわかつてるさ。ちよつと言つてみたくなつただけだよ。それにしても事務所にいるクソガキと言ひ、全くお前の周りにはいちいち面倒な奴が多いな』

本気にするなと言いたげなジャクソンの声は、よくよく聞いてみれば半分笑っている。

この仕事に就いてから生真面目な言動が嫌と言つほど染みついている未来からすれば、本気で狼狽するのには十分過ぎるほどの悪い冗談だった。

『俺の方でも一応、当つてみることにするか。ラルフに前科がないかどうか知り合いの警官に調べてもらうのと、情報提供者にも心当たりがないかどうか聞いてみよう。顔写真が手に入るといいんだけどな』

しかしそれでも、一瞬にしてオンタイムの態度に戻すのもまたジャクソンという男である。

ジャクソンに限らず、堅い仕事に就いているアメリカ人はえてしてこんな調子だ。ふざける時とそうでないときの落差に未来はまだ振り回されているが、これには慣れるしかない。

半ば呆れながらも礼を述べてから、彼女は電話を締めくくつた。「私の方でも何か新しいことがわかったら、すぐに知らせるようにするから」

最後にジャクソンが頷いたのを察してから受話器を置いた未来であったが、今まで胸の中を支配していた靄が晴れて気が軽くなつて、いることを改めて感じた。

ラルフのことについてはポールに話していたものの、性格分析官

である彼は捜査官でないため、今後の捜査についてどうこう言えるわけでない。故に未来は一人で問題に対処しどう動くかも決めなければならなかったが、これからは自分よりも経験豊富で、異なった観点から物事を捉え、具体的なアドバイスができる者が側に来てくれたことになる。

それがたつた一人の同僚であったとしても、一緒に動いてくれる味方ができたことはこの上なく心強い。そして何より、ジャクソンは未来が陰でブラックヘア事件を捜査していることを知っているのだ。

ひたすら助けを待っているだろう男と、自分を支えようとしてくれている男。

二人のためにも、暗澹たる気持ちに押し負けているわけにはいかない。

未来は心を暖かく照らし始めた大男の笑顔を思い浮かべ、デスクに向き合っている自らの背を伸ばした。続いて、担当地区の警察署で親しい刑事たちの職場と携帯電話の番号一覧のファイルを開く。

恐らく、皆今日は自宅で家族や恋人とくつろいでいることだろう。そこへ明日は捜索を行う旨を伝えるのは心苦しいが、警察機関に勤める人間の宿命と思って諦めてもらうしかない。

パソコンのデスクトップ画面を鮮やかに彩るレモンイエローの電子付箋には、彼らと相談して決まった具体的かつ短い内容だけを追加するつもりでいた。

冷たい骸となり果てた被害者の手足や腹を捻じ切るように引き裂き、血まみれの肉塊にする残虐極まりない殺人事件。

その6番目の被害者に当たるエミリオ・ハンソンの自宅は、死体発見現場から直線距離で11マイル程度離れたキングジョージ郡ダルグレン地区にあった。

小さなこの街は南と西が湾に面し、すぐ東は海軍陸戦センターの広い敷地に隣接している。縦に長い土地の中心をポトマック・ドラ

イブ・ステート・ルートが走り、小学校やショッピングセンター、レストランも点在して街としての体裁は整っていたが、住人には海軍関係者が多い。それも士官や将校ではなく、主に下級兵士とその家族が住んでいるような場所だ。

エミリオが住んでいた家は街の中心からやや北にずれた辺りに位置し、古ぼけた平屋やペンキが剥げた粗末なメゾネットタイプのアパートが並び、舗装されていない私道には雑音が酷いエンジン音や、湿ったモーター音を上げる車があちこちに停められている。

海軍の施設は平日は訓練が行われて騒がしいのだろうが、日曜日である今日はひっそりとしている。この辺りの住民も、午前中に教会に行った後は自宅で静かに過ごしている者が多いのだろう。急激に気温が下がって寒くなつたせいもあるのか、元気に遊んでいる子どもたちの姿は少なかった。

12月初日の曇つた空の下、被害者宅の搜索に訪れたニコラス・カーターは、危うく目的の家を見過ごして通り過ぎてしまうところだった。エミリオの家は荒れ放題の庭と手入れがされていない木に隠され、全体が見えなかったのだ。

「周囲の様子くらい、事前に調べて来なかったのか？」

捜査車両の助手席に座っていたFBI捜査官、ジェイコブ・ランチェスターの嫌味な一言は、今日に限って余計に腹立たしかった。ニコラスが昨日受けた連絡では、この搜索に最近ジェイコブと同じ駐在事務所に戻ってきた捜査官のミキ・ハザマも立ち会うことを聞いていたからだ。

彼女は少なくともこんなことで憎たらしい口は利かなかつたし、郡警察のような地方の組織を見下すような態度は取らなかつた。地方担当の警察機関同士が反目し合うのが如何に愚かなことであるかを着任早々に理解し、一般の警官やハイウェイ・パトロールとも友好的な関係を築くことに心を砕いていた。

それをこの優男が担当になるなり、全てをぶち壊してくれたのだ。ジェイコブは、現場を仕切りたがるくせに自分からは積極的に動

こうとせず、FBI以外の人間を馬鹿にする。協調性と相手に対する礼儀を欠くこと甚だしく、捜査官としての人格を疑いたくなると言っても差し支えはない。

ニコラスは、ジェイコブの素行の悪さをいつDCにいる知り合いの調査官に告げ口しようかタイミングを窺っていたが、今日こそは堪忍袋の緒が切れた。この捜索が終わったら連絡しよう、作業の合間に携帯電話にメモリされた電話番号を確認してしまったほどだ。今回の被害者宅の捜索にしても当初は夕方から開始する予定で、鑑識スタッフの数や実施時間など、主な段取りは地方警察が主体となって決めることになっていた筈だ。それを警察側の担当であるニコラスを通り越してジェイコブが勝手に決めた挙げ句、全ての準備を進めてしまったのである。

結局、予定を3時間早めて午後2時から始まった被害者宅の捜索は5時前頃に終了し、捜査員たちが片づけを始めた頃にはもう辺りがかかなり暗くなっていた。小さな平屋の住宅を捜査員5人に刑事とFBI捜査官を加えた7人で調べたにすれば、時間がかかってしまった方だろう。

住宅が思ったよりも広く、庭の外れにあるガレージに物が多かったことが原因だが、そもそもこの捜索のために割かれた人数が少なかつたせいだった。そして捜査員が不審なものを見つける度にジェイコブが検分していたせいもある。

今は捜査員たちとジェイコブが最後の点検に回っているところだったが、流石にここまでくればあと10分程度で終わるだろう。

ニコラスがいるリビングは、動かした家具や日用品がすっかり戻されている。しかしろくに掃除もされていなかったらしいコピーテーブルには埃が積もり、床にビールの空き缶やゲイ向けの雑誌が散乱する状態になっただけだった。ここに住んでいた男の生活が荒んだものであることは、捜査が終わった今でも一目でわかる。

ニコラスは室内をぐるりと見回してから建てつけの悪い玄関ドアを開け、外に出た。彼が主を失った平屋のポーチから証拠品が満載

されたバンの横まで出てくると、横合いから初冬の冷たい風が吹きつけてきた。家々の間を鋭く渡っていく寒風に、周囲に張り巡らされている立入禁止を示した黄色いテープが音を立てて震える。

夕暮れと共に訪れた寒さを紛らわすために一服しようとして、ニコラスがコートのポケットに常備しているタバコとライターを掴んだ時である。

間近からエンジン音が響き、見覚えのあるダークブルーのフォードが私道に滑り込んできた。車はそのまま庭の隅に停まり、エンジンが切れると同時に小柄で細身の人物が降りてくる。

「ミキ？どうしたんだ」

驚いて目を丸くしているニコラスの青い瞳に映ったのは、黒のデニムにベージュのコートをしっかり着込んだ未来だった。彼女が砂利をスニーカーで踏み鳴らしながらまっすぐにポーチへ歩み寄ってくる、普段は愛らしい顔が険しくなっているのがわかった。

「カーター刑事！」

そしてニコラスの前で立ち止まると、彼を恫喝するかの如き勢いで名前を呼んだ。

「これはどういうことなんです？私が着く前に搜索を始めるなんて」「どうということって、時間を早めてランチエスターが来るってことになってただろう」

その言い種にむつととして、ニコラスも負けじと言い返した。

最初に未来から聞いた話では、今日の夕方5時から被害者宅の搜索を開始するということだった。人員の手配や詳細な準備に関しては郡警察で決めて貰っていい、そちらの決定にFBI側が従うことにする、ということだった筈だ。彼女が話の締めくくりに、折角の休日の夜を潰してしまって申し訳ないと付け加えていたのも覚えてる。

それを今朝になって、急に都合がつかなくなったので搜索は2時からに変更し、現場の捜査員配備についても郡警察の別担当にFBIが手配して決めると、彼女の代理人から一方的に告げられたのである。

予定を強引に変更されたのだから文句が言える立場なのはこちらであって、未来に怒りをぶつけられる謂れはない。そう続けようとしたが、未来の上気した顔がこわばり、ニコラスが言葉を繋ぐ暇もなく再び荒っぽい声が飛び出した。

「私からそんな話はしてないでしょう。誰がそんなことを？」

未来の言葉に、今度はニコラスが驚く番だった。

「フレデリックスバーグ駐在事務所の人間から、搜索開始時間の変更と人員配備についての連絡を確かに僕の部下が受けてるんだ」

「いつ？」

ニコラスは一瞬未来が思い違いをしているのかと考えたが、どうやら彼女は本当に何も知らなかったらしい。驚愕に彩られた顔に信じられない、と書いてあるかのようだった。

「今朝の8時頃に。ミキからの連絡じゃないからちよつと変だとは思ったけど、別件の捜査が入って夕方以降の予定が塞がったからってことだったんだ」

「一体誰がそんなことを言ったの？」

「ランチエスター捜査官だよ。ミキの代理で自分が立ち会うからって、彼が連絡してきたんだ。搜索に向かわせる人員については、個人的に親しい担当が別についてそつちと相談するから僕は何もするなとも……」

半分愚痴になっていたニコラスからジェイコブのファーストネームが出た途端、未来が眉を吊り上げた。激情のためか顔も真っ赤になりかけるが、彼女は辛うじてそれを理性で抑え込んだようだった。「すみません。ランチエスター捜査官と私とで、認識の行き違いがあったようです。ちよつと話をします」

目を伏せ気味にして冷静さを装った彼女はしかし、押し殺された声が低くなっているのを隠せていない。予定を勝手に変えられた拳げ句、担当事件における証拠の搜索という重要な仕事を邪魔されたのだ。怒るなど言うのは無理な話である。

「ランチエスター捜査官なら、まだ中にいると思うよ」

ニコラスが半歩下がって未来を家の中へ入るよう無言で促すと、彼女は再び砂利を踏み鳴らしながらポーチへと上がっていく。

「……あん畜生！」

砂埃で汚れた玄関のドアを開けざま、まだ憤りを完全に殺ぐことができていない未来が小声で吐き捨てていた。

室内に入っすぐはリビングになっており、壁の照明と電気スタ

ンドがついていても薄暗い印象だった。型式が古いモニターが乗ったパソコンデスク、数世代前の空間投射型テレビの下にあるテレビ台など、インテリアはどれも手垢で汚れていて、当面生活ができさえすればいいというその日暮らしの生活スタイルが窺える。アイボリーの壁紙に薄いしみがあり、ところどころ浮いている箇所があるところを見ると、ろくに手入れされていない家を格安で購入したのだろう。

ワックスが剥げた床にはビールの空き缶や何冊もの雑誌が投げ出されており、表紙では逞しい半裸の白人男性が挑発的なポーズを取っているのが見える。今は亡き家主が脱ぎ捨てたらしい服も散らばっているくすんだフローリングを尻目に、未来は家の奥へ進んだ。

リビングルームの隣がダイニングルームになっているが、ステンドレスのシンクは完全に乾いていて、キッチン台とテーブルにはウイスキーやバーボンの瓶、ピザとスナック菓子の空箱が並んでいるだけだ。ごみが溢れているダストボックスにも薄っすらと積もった埃は、ここが長い間使われていないことを示している。その中で捜査員たちが手を触れたらしい箇所だけ、汚れが拭われたせいで目立っていた。

ダイニングルームから短い廊下を経た先がマスターベッドルームになっているようで、未来が少しだけ耳の感度を上げると、誰かの乱れた息遣いと衣擦れの音が上がっているのがわかった。

廊下まで出て、マスターベッドルームの中をひよいと覗く。

彼女が部屋の中を見回した視線の先には、右奥の壁にあるクロウゼットの扉を開け放った前にしゃがみこんでいるジェイコブの姿があった。

「ランチエスター捜査官？」

彼の背中に刺々しさを突き刺すべく未来が声をかけると、擦り切れた青い絨毯に膝をついていたジェイコブがびくつとして顔を上げた。

「やあミキ、随分と早かったじゃないか」

未来は、ジェイコブが嫌味な優越感にまみれた笑顔を返してくるものと思っていた。

しかし立ち上がった彼は疲れ切った顔で腫れぼったいまぶたをし、目を赤く充血させている。

これまで傲慢な態度を崩したことがなかった同僚の憔悴した様子に、未来は一瞬近寄ることを躊躇したが、悪びれない彼の言葉で大きく勢いを取り戻した。

「どうしてあんたがここにいるの？」

つかつかと目の前に進んできた未来の強い感情を避けるように、ジェイコブは顔を逸らした。

「僕はこの被害者が殺された地区の担当なんだ。ここにいたっておかしくないだろう」

「私が聞きたいのは、そういうことじゃないよ」

あくまで言い方は静かなままでいる未来が壁に軽く拳を叩きつけると、薄い石膏ボードの仕切り壁から予想よりも大きな音が上がり、天井から細かい塵が落ちてきた。

未来はジェイコブにエミリオの自宅を搜索するという連絡は入っていないし、勿論開始時間を変更すると話したこともなかった。

もともと、この搜索は自分とカーター刑事指揮の下、もっと多くの捜査員を動員してもらってやるつもりでいたのだ。

それなのに、ジェイコブは一体どこから情報を嗅ぎつけたと言うのだろうか？

搜索のことを知っているのは直接話したカーター刑事と、キングジョージ郡警察の関係者だけだ。当時フレデリックスバーグ駐在事務所には未来以外誰もおらず、電話が盗聴されている筈はない。加えて、警察関係者が普段見下した態度を取ってくるジェイコブにわざわざ情報を教えるわけがなかった。

鈍い音にちらりと視線を戻したジェイコブに、彼女は更に追及を続けた。

「この搜索のことを、どうしてあんたが知ってるかってことだよ。」

私は事務所内の誰にも予定は話してないし、あんたが知ってる筈が……」

鼻息も荒く続けようとした未来の言葉を遮ると、ジェイコブはいつものように薄笑いを浮かべた。

「おいおい、寝ぼけたことを言うなよ。今日のスケジュールを掲示板に出しておいたのは君だろう？ 搜索の時間に他の捜査が引っかかってたみたいだから、僕が代わりに時間を変更してわざわざ出てきたんじゃないか」

未来はすぐにはジェイコブが言っていることが理解できず、目を丸くするばかりだった。

晴天の霹靂とは、このことだ。

ジェイコブの言う掲示板とは、グループウェアの電子掲示板のことである。

グループウェアとは、情報を共有するためのコンピューターシステムのことだ。

そして、スケジュール把握のため、所属部署の電子掲示板を毎朝確認するという運用になっている。掲示板には各個人の予定を書き込むことになっており、同じ部署の所属であれば他のメンバーのスケジュールを自由に確認し、編集ができる仕様なのだ。

しかし未来は、ジェイコブが搜索に加わると不測の事態が起きかねないと考えて、敢えてスケジュールを公開しなかったのだ。通常、FBIの搜索現場立会は一人いればいい筈で、ジェイコブがいなくても捜査に支障は全くなさくない。

存在するわけがないスケジュールについて持ち出したジェイコブを見る未来の目は、疑いを通り越して呆れたものになりつつあった。

「はあ？ そつちこそ、寝言は寝てから言いなよ。私は掲示板に予定を書いてなんかないよ」

「嘘だと思っなら、事務所に戻って更新日時を確かめてみるといい。とにかく、ここでの搜索はもう終わりなんだ。さっさと警察署に押

収物を運ばないと」

「ちよつと、待ちなよ！」

クローゼットを静かに閉めたジェイコブは、未来を押し退けてさつさと玄関へと行ってしまった。慌てて未来が小走りに後を追うが、彼は振り向きもせず一度鼻をすすってから外に出た。

普段に増して自分を無視するジェイコブに憤慨しながら未来も外に出ると、ポーチで立ち尽くしていたニコラス刑事と鉢合わせる格好になった。未来の様子を心配し、様子を窺っていたのだろう。

「どうかしたのか、ミキ？」

「まあ、ちよつと気になることがあったので」

彼女の視線はまだ、数メートル先にある砂利道を歩いているジェイコブの背中を追跡していた。

先の掲示板についての発言が当然気にはなっていたが、それ以上に興味を引かれたのは、彼がマスターベッドルームにいた時に泣いていたのではないか、ということだった。その表情はモルグで死体と対面した遺族や恋人そのもので、死者を悼む悲痛さを感じさせたのだ。

検死結果から、エミリオは同性愛者であった可能性が高いとされている。

そしてジェイコブは女嫌いの気があり、エミリオの死体を確認してから明らかに動揺しているようで、行動に不審な点がしばしば見られることがある。

この街は海軍の施設に隣接しており、すぐ近くに屈強な独身の男たちが住んでいる。エミリオは、付き合う相手には事欠かなかったことであろう。

そしてここは、フレデリックスバーグからもそう遠いというわけではない。

もしかすると、ジェイコブとエミリオは単なる顔見知り程度という仲ではなかったのではないか？

未来はそこまで考えてから、それ以上の推測を止めた。

今大事なのは、目の前にあることなのだ。まず最初に、今日の捜索のことについてニコラス刑事に確認しなければならない。

「捜索はもう終わりなんですか？」

「ああ。狭い家みたいだからそんなに人数は必要ないって、ランチエスター捜査官からも聞いていたしね。実際は意外と広さがあったんだが、作業もそんなに大変じゃなかったから」

ニコラスは短くなったタバコを携帯灰皿に突っ込むと、もう一本くわえて火をつけた。非喫煙者の未来を気遣って風下に移動する間も、ひっきりなしに吸っては煙を吐き出している。

捜査時間とは関係なく、彼を相当に苛立たせることがあったようだ。

「ランチエスター捜査官ですけど……その、何か失礼なことをやったりとかしてませんか？」

「大丈夫だよ。僕らが彼の後始末をするのも、最近はもう当たり前になってきたから。ミキがいた頃はこういうことはなかったし、慣れるのには丁度いいさ」

「何か余計なことをしたんですね、彼は」

あくまではつきりとした言葉には出そうとしないニコラスの気持ちを含み、未来はやれやれと溜息を漏らした。

「現場で警察にああしろ、こうしろ、っていちいちうるさいのはいつものことだよ。でも今日は率先して部屋に入って行って、他の捜査員と一緒に捜索をしたからな。誰かが何かを見つけてる度にすっ飛んで行って、色々とケチをつけてみたいだけだ。あの様子じゃ、そのうち指紋の採取も自分でやるって言い出しかねない勢いだっただな。そのくせ、とっとと捜索を終えて早く署に戻るって急かすんだ。奴の気分でこっちの仕事を引っ掻き回されたら、たまらないよ」

抑えていた愚痴の一端を吐き出したニコラスの苦々しげな顔を見て、未来の溜息が一層深くなる。

どうやらジェイコブは、未来が危惧していた状況をもうとつくに作り上げていたようだ。地元警察とフレデリックスバー駐在事務所

の間にある深い溝は、今回の事件で更に深まってしまったのではないかと思わざるをえない。

それにしても気がかりなのは、ジェイコブの態度が今までと違っていたらしいことだ。

エミリオが所持していたものが証拠品として押収されることを恐れていたようだが、それが何なのかは今のところわからなかった。そしてもしジェイコブが捜査員から証拠品を預かったりしていたら、こっそりと重要な証拠を隠滅していた可能性も否定できない。

やはり捜索に立会いができなかったのは、未来にとって大きな痛みだ。

しかし、FBI内部の揉め事を郡警察のニコラスに知られるわけにはいかない。あくまで同僚の浅慮を嘆くふりをして、彼女は申し訳なさそうにうなだれた。

「そうですか、申し訳ありません」

「ミキは関係ないんだから、僕に謝る必要はないだろ。ノートン上級主任にでも報告してもらえば、僕としては十分だよ」

ありがたいことにニコラスはたばこにストレスをぶつけていて、

目の前で意気消沈している未来に八つ当たりをする気はないようだ。

ジェイコブの様子をさり気なく見てみると、彼もたばこをふかしながらカーター刑事の捜査車両の横で寒そうに立っている。証拠品を積んだバンの後ろには見張りの捜査員が立っているため、この状況であれば証拠品にはもう触れない筈だ。

捜索に立ち会っていない未来は、少しでも被害者宅の情報を集めておく必要がある。気を取り直して頭の中で質問事項を整理し、ニコラスの顔を見上げた。

「捜索のことについて、お聞きしておきたいんですけど。この家の様子に、何か変わったところはありませんか？」

「家の窓やドアの鍵は全部かかっていて、派手に荒らされた様子はなかった。サイドボードの引き出しの奥に本人名義のカードと、裸の現金が100ドルほどあったことも確認してる。ただ、色々なも

のが最近動かされたような形跡があったな。指紋は複数見つかったけど、照合がまだだから何とも言えないけど」

「家の鍵は、発見されてなかったですよ？」

「ああ。だから鍵業者を呼んで開けさせたんだ。彼がここを買ったときに、流石に玄関の鍵は交換したらしかったからな」

ニコラスがやや上を眺めて、室内の様子を思い浮かべつつ説明した。くわえっぱなしになっているたばこの薄い煙が、弱く冷たい風で後ろにゆっくりとたなびいていく。

未来とニコラスが話しているポーチでは、作業を終えた3人の捜査員たちが家の奥から出てきていた。もう捜索の目処がついたのか、手には細かい押収物を入れた証拠品袋を抱えている。

最後の一人がリビングの電気を消すのを見ながら、ニコラスは煙を吐き出した。

「捜索の合間に周辺の住民にも聞き込みをしたんだが、どうもエミリオは売春で生計を立てていたらしい。色んな男がしょっちゅう出入りしてたのが目撃されてるんだ」

「彼、自宅で商売してたんですね」

「そうらしい。この辺りは海軍の独身者も多く住んでるから、やりやすかったんだろう。でも、家の明かりが消えた日が何日も続いたこともよくあったそうだ。だから部屋に誰かを連れて来るだけじゃなくて、外でも仕事をしてたんじゃないかな」

「このご時勢で珍しいですね。私なんか、知らない人は怖くて家に上げられないですよ」

未来がカーターの話に眉を顰める。

「そう思うのが普通だろう。だから今に面倒なことが起きるんじゃないかと、この辺りの住民もあまりエミリオとはかかわりあいになりたくなかったらしい。外から様子は見るけど、積極的に話しかけるような仲じゃなかったみたいだ」

「ということは、もし客の中に犯人がいたとしても、住民は顔を見てない可能性が高いつてことですね」

「残念ながらそうなるな」

ニコラスがポーチから周辺を見渡したのにつられ、未来も辺りに視線を巡らせた。雑草が伸び放題になっている庭を突っ切っている砂利道はベイン・ストリートにつながり、その反対側に建つこぢんまりとした平屋の玄関が木々の隙間から見えている。ポーチの手すりには金色のモールやサンタクロースの小さな人形が飾られ、玄関の周囲は可愛らしくデコレーションされていた。家には小さな子どもがおり、きつとクリスマスを心待ちにしているのだろう。

この辺りは基地の近くとは言え、完全な住宅街だ。日本と違って隣家との間はかなり離れているし、特にエミリオの家は手入れされていない常緑樹や雑草で囲まれている状態だった。

これでは住民からの目撃証言が期待できそうもない。

「住民が彼を最後に目撃したのはいつなんですか？」

また溜息をつきたくなるのを抑え、未来が質問を続けた。

「ええと、11月25日の13時頃だな。車が走っていくのを、隣の家の奥さんが窓から見ていたそうさ。旦那が海軍の職員で朝早くから仕事だったのに、あいつはいい身分だと思ったからよく覚えてるそうさ」

「そう言えば、エミリオの車はガレージにあったんですか？」

捜査情報専用端末を片手で器用に操って証言内容を確認していたニコラスに、未来が確認する。

「いや、ガレージは空だった。まだどこかに停めっぱなしになってるんだろうが、そっちはまだ搜索中で、ナンバーがつけ替えられてないことを祈ってるんだが」

11月25日は、死体が発見される5日前だ。

エミリオのものらしい車は、死体発見現場周辺でも発見されていない。運がよければまだどこかの駐車場に停めっぱなしになっているだろうが、恐らくもう盗まれているだろう。

そして車がないと言うことは、エミリオは自宅以外の場所で殺されたと思っただけだ。先に未来が室内に入ったところでは、血痕も血の臭いも確認できなかったのだ。

「念のために確認しますけど、室内で被害者が殺害された形跡はなかったんですね？」

「ああ、見たところは全くなかった。周辺住民も、この辺りで銃声があった覚えはないと確認は取れている。それに血液の痕跡を消すのには、手間も時間もものすごくかかるんだ。被害者が殺害されたのは、別の場所なんだろう」

「第一、この家で彼が殺害されてその痕跡を跡形もなく消そうと思ったら、周辺住民に気づかれないわけじゃないですね」

確認のための質問に答えたニコラスの返答に、未来も呟きながら頷いた。

「エミリオは胸と頭を撃たれて死んだ。」

死体から流れていた血の跡を見ても、かなり大量の出血に見舞われた筈だ。室内で撃たれた場合は専門の業者に依頼でもしなければ、フローリングの床や壁紙から血痕を短時間で完璧に洗い流すことは不可能なのだ。

そして、大型のロボットをここまで運んで死体を引きちぎるというのも不自然だった。これは屋外でやるほかがなかっただろうが、大型ロボットが住宅街に置かれていれば嫌でも人目を引くだろうし、ロボットを他所から持って来るためにはトラックかローダーが必要になる。

いくら近所づきあいじゃなかったとは言っても、そんなものが運ばれていれば一人ぐらいは見たと言う者がいてもおかしくない筈なのだ。

「死亡推定時刻はいつごろだったっけ？」

「11月28日、23時頃とされてはいますけど。検死報告書にも記載がありましたよ。」

それとなく聞いてきたニコラスへ、未来は不思議そうな表情で答えた。

「検死報告書、ご覧になってるんですよね？」

「一通りはな。僕は細かい数字を覚えておくのが苦手なんだ。」

ニコラスはばつが悪そうにコートの袖をまくって腕時計を見ると、頭を掻いた。

そのまま短くなったタバコを携帯灰皿に押し込み、背後にある窓から家の中をもう一度覗く。

「でも、大雑把なことは流石に忘れてないよ。エミリオは同性愛者の可能性が高いということだったから、そのことは頭に置いて捜査はしたつもりだ。」

いつものことだが、未来は被害者の最もプライベートな部分に立

ち入ることに抵抗があった。自分がもつと詮索好きな性格なら良かったのにと、真剣に感じることもある。

努めて事務的に、彼女は話の先を促した。

「何か気になったことはありませんか？」

「生活が荒れていたということ以外、特に変わった点はないように僕には思える。バスルームの引き出しに、ドラッグらしい包みも見つかったよ。それから、開封したコンドームの箱。1グロス入りだったけど、何個かは使ったようだったな」

この点もエミリオが同性愛者であり売春を生業としていたのなら、周辺住民の証言とも矛盾はなかった。彼にドラッグ絡みの逮捕歴があることを考えれば、現在も足を洗っていないことは別に不思議ではない。

残念なことに、アメリカ社会において薬物とセックスは切っても切れない関係にある。

エミリオが殺される前に薬物を使用していたかどうかはまだ毒物検査の結果が出ていなかったが、発見された薬剤らしきものを分析し、入手方法も調べる必要があった。

そして未来にとって気になったのは、エミリオが商売相手にも薬物を使用していなかったかどうかとすることだった。もし彼に恋人がいたのなら、恋人に対して使用することもあったかも知れない。

彼女の口に疑問が自然と出た。

「そう言えば彼、恋人はいなかったのかな」

「もう少し詳しく調べないとはつきりしないが、特定の誰かと付き合ったりはしてなかったようだ。男でも、女でもな」

ニコラスが言葉を切ったとき、未来の頭の中をラルフの姿が一瞬横切った。

ここはリッチモンドから離れているわけでは決してなく、彼はここ最近は大人数になつてきているという。それに彼は大柄な上、並の男より遙かに筋肉質だ。エミリオが海軍の兵士たちを相手にしていたのなら、タイプが似たラルフと付き合っていたとしてもおかしくは

ないだろう。

ラルフが両性愛者だという証拠はないが、エミリオの体内に精液を残した相手が犯人だとは限らないし、彼を殺すのにセックスをする必要があったかと言われれば、そうではない。

今の段階でもまだはつきりとしたことが言えない状況に、未来は軽い苛立ちを覚えていたが、やはりまだ軽々しく口にするべきことではないのはわかっていた。

逸る気持ちを振り切り、頭を素早く切り替えてから、未来は当たり障りがない質問を続けた。

「お客としても、常連はいなかったってことですか？」

「近所の住民も、どんな奴がどれぐらいの頻度で出入りしていたかまでは知らないようだ。知りたくもなかったんだろうしな」

「そうですね。もし海軍の兵士に常連客がいたとしても、名乗り出てくれるとはとても思えないですし」

アメリカの軍隊において、個人の性的嗜好について不問にするとオバマ政権時代に宣言されてから、30年余りが経過していた。更にエイズの特効薬が開発されたことにも後押しされて、同性愛者に対する風当たりも徐々に弱まってきてはいる。それでも多くのゲイたちは、自らのことを積極的に曝け出そうとはしないのが普通だった。

「それにもし恋人がいても、エミリオが変なところで用心深い性格で、部屋に連れて来なかった可能性もありますよね」

「それは勿論そうだな。これからは彼の生前の行動を洗って、交友関係を徹底的に調べる必要がある」

冷えた両手を擦り合わせてコートのポケットに突っ込んだニコラスは、もう新しいタバコを取り出そうとはしなかった。捜索現場の最終確認が終了するのを待つばかりとなっている今、手持ちのごみを増やそうという気にならなかつたのだらう。しかしニコラスのコートからは、長年に渡る喫煙の習慣ですっかり染みついたヤニの匂いがぶんぶんしている。

たばこの匂いは、未来にクワンティコのルームとジャクソンの情報提供者であるルイが経営する店、ホワイトクロウを思い出させる。どちらも常時人がいて話をしているイメージがあるため、不思議と重なるのだ。

考えてみれば、ホワイトクロウは異性装愛好者と同性愛者たちが集まる店だ。ヴァージニア全体でもそんな店は多くないし、ルイならリッチモンド周辺にある似たような店の情報にも詳しいかも知れない。

「どうかしたか？」

ニコラスが、未来の顎に細い指を当てて前方を睨んだ視線の先と顔を見比べる。

「私、その手の場所にちょっと心当たりがありますから、そっちを調べてみようかと思って。詳しくそうな知り合いもいるし」

「ああ、そうしてくれるとありがたい。僕は行方不明の車の搜索と、財政記録について調べてみるよ。現金と一緒に、カードもあつたら」

「そっちはよろしくお願いします。私の方も、何か新しいことがわかったらすぐにお伝えしますから」

未来とニコラスはどちらからともなくお互いの顔を見て頷き合った。

もうかなり陽が傾いているため、二人の後ろにあるポーチの明かりが自動的に灯り、暖かな光を冷え冷えとした空気の中に投げかけている。

彼らの姿が暖色の光で黒く浮かび上がっているところに、もう一つの影が近づいてきた。

ニコラスがなかなか自分の車に戻ろうとしないのを待ちかねたジエイコブだった。

「お取り込み中のところ悪いけど、証拠物品をとつと署に運ばないか？また雪が降ってきそうだからね」

「うちの連中の片付けがもう少しで終わる。寒いのが嫌なら、あん

たは僕の車に乗って待つてくれよ」

と、ニコラスはその場から動かずに捜査車両のキーだけをジェイコブに放った。手の中に飛び込んできたリモコンを受け取ると、まだ何か言いたそうにしながらも、ジェイコブは捜査車両の方へと引き返していく。

「ランチエスター捜査官は、いつもあんな調子なんだ。お陰で、僕の部下の間ではフレデリックスバーグ駐在事務所の印象が悪くなる一方だよ」

「そうなんですか」

またもげんなりする台詞を漏らしたニコラスに、未来は適当な返しを見つけかねた。丁度いい英語の言い回しが咄嗟に思いつかずに視線を泳がせている未来を見て、ニコラスが苦笑して見せる。

「正直僕も、ハザマ捜査官にずっと欲しかった。君は知らないだろうけど、うちのスタッフの間じゃ結構人気があっただんだぞ」

「そりゃ、どうもありがとうございます。でも、私も平の捜査官ですから。上からの命令にはどうしても逆らえないんですよ」

困ったように続けたニコラスに、未来も思わず苦笑を投げかける。既に吐く息も白くなりかけてきた中、未来は一度身震いしてコートの際を直した。周囲の家々の玄関先では雪だるまやサンタクロースのオブジェが光り出し、この時期ならではの美しい光景になり始めている。

彼女が現場に到着してから、少なくとも20分程度が経過していた。周囲では片づけを終えた捜査員たちが停めた車の側に集まり出していたが、最後の一人らしい捜査員が家の裏手にあるガレージからポーチに上がってきた。

「あの、カーター刑事」

「やあ、片付けは終わったか？そろそろ引き揚げよう。雪が降ってきたら、帰るのに苦労するからな」

「はい。立入禁止のテープはこのままにしておきますが、後はもう全部積み込みましたので」

おずおずと話しかけてきた捜査員は、未来には馴染みのない若い男性だった。

郡警察の所属である彼らは全員、お揃いの濃紺のナイロンジャケットにキヤップを着用している。背中に反射塗料で警察の白いロゴが入っていないければ、たちまち闇に紛れて見失いそうだ。

「今頃すみません。追加の押収物があつたので、報告に来ました」
彼が運んでいた4つの茶色い紙袋が、ニコラスの前に差し出される。

「ここじゃ暗くて、きちんと確認することもできないからな。署に戻ってから確認しよう。押収物はこれで最後だな？」

ニコラスが証拠品袋を受け取って穏やかに訊ねると、捜査員が緊張した様子で頷いた。

「すみません、遅くなって」

「いや。トム、お前はいつも仕事が丁寧だからな。感謝してるよ」
ニコラスが笑うと、トムと呼ばれた捜査員もほっとしたように口許をほころばせた。恐らく、ジェイコブに叱責されると思っていたのだろう。

ニコラスがついてくるように空いた手で合図をしてポーチから下りると、未来とトムが後についた。

「ガレージの中、徹底的に調べてくれたんですね」

未来が隣を歩くトムに明るい声をかけると、彼は照れたようにキヤップのつばに触れた。

「はい。色々ともものが多くて手こずりましたが」

はにかんだ笑顔を向けてくるトムは、未来よりも若そうな初々しい印象がある。彼女とは比較的歳が近いと思ったのか、彼の声には親しみが込められていた。

「貴女は、FBIの捜査官なんですか？」

「短い間だけど、ランチェスター捜査官の前にこの地区を担当してたの。特別捜査官のミキ・ハザマです」

「ああ！カーター刑事から、よく話を聞いてますよ。見た目は可愛

らしいのに、ものすごくパワフルで凄腕の女性新人捜査官がいたって。貴女のことだったんですね」

弾んだ調子で言われた未来は頬を赤く上気させたが、「パワフルで凄腕」というニコラスの評価には何となく引っかかっていた。褒めてくれるのは嬉しいが、ちょっと聞き間違えると傍若無人な鬼捜査官という印象を与えるのではないだろうか。

微妙な空気になりかけたのを笑顔でごまかすと、未来はさり気なく訊ねた。

「私の後任のランチエスター捜査官ですけど、今日の現場ではどうでした？」

「ええ……」

トムは視線を未来の顔から外すと、先と逆の低い調子で言った。

「これまでは、じっくりやった現場での見落としがあった場合は怒っていたんです。でも、今日は私たちの仕事が遅いと嫌味を言われたんですよ。こっちもお返しのつもりで、最後まで粘ってたんですけどね」

3人で砂利を踏む音に紛れたが、トムの愚痴が混ざった言葉はきちんと聞き取れる。若い彼が負けん気を発揮して、見落とすかも知れなかった証拠品を回収してくれたのは感謝しなければならぬだろう。

「じゃあ、その分の嫌味は私がお返しさせてもらいますから」「それはどうもありがとうございます……いえ、滅相もない」

未来流の礼である悪戯っぽい口調に乗せられかけたトムは、慌てて首を振って自らの発言を取り消した。そして未来とニコラスに一礼し、他の捜査員が分乗している車の方へ走っていく。

ニコラスと未来が証拠品を積んだバンの後ろに回ろうとした時、ニコラスの車の窓が開いて、ジェイコブの不審そうな顔が覗いた。

「何だい、それは？」

「追加の証拠品だよ」

それに対する未来の返答は、しごくそっけない。

「たった今、全部の搜索が終わったところ。随分丁寧にやってみただけだからね」

捨て台詞を残した未来は、ジェイコブの顔を見ようとしなかった。

バンに詰められた証拠品入りの紙袋やビニール袋の数は、大小合わせて50か60を上回るだろうか。ジェイコブが証拠隠滅を図った否かは別として、今日はこれから警察署まで戻り、これらの数を数えて最初の検分を行う必要がある。

この場にいる一同にとって、長い夜になりそうだった。

未来とジャクソンがホワイトクロウのカウンターで落ち合ったのは、ほろ酔い気分になった客たちが店を後にする、午後11時を回った頃だった。

未来は搜索先から郡警察署に移動してニコラス、ジェイコブらと証拠品の検分を行ったが、証拠品の点数が多かった分時間を要し、終了した頃には9時半過ぎになった。

一連の作業の主体となったのは郡警察のスタッフであり、証拠品を後で引き取るようになっていくFBIの担当者2人は、手を貸したという程度である。未来は、今後の捜査についてニコラスら郡警察担当者と打ち合わせを行うのが主な仕事となり、証拠品に張り付いているわけにもいかなかった。

当然その間別行動を取っているジェイコブの動きは気になったが、検分中に彼には気をつけるよう他のスタッフにこっそり耳打ちしていたものの、彼は特に怪しくはなかったと言質を得たのみだった。この検分は、ジェイコブが証拠品をどうにかする最後の機会だったはずだ。

そこで何かしたように見えなかったということは、彼はやはり捜索中に証拠を隠滅したか、改竄してしまったと言ったことだったのだろうか。

「どうも、面白くねえ話になってるようだな」

ホワイトクロウのカウンターで未来の説明を聞いていたジャクソンは、舌打ちを漏らしそうな顔でグラスに注いだビールをあおった。「逆だよ。私のことを憎たらしく思ってる連中にとっては、さぞかし面白んじゃない」

「まあ、ちよつと昔なら女でアジア人のお前をやっかむ奴らはいっぱいいたろうな。事件をちゃんと捜査できるだけ、今はましになつてるってこつた」

ジャクソンがグラスから投げやりに言いつつ顔を上げたところで、未来が自分のポストン・クーラーに口をつける。ステーキサンドやミートローフプレート夕食を終えた二人の間にはサルサを盛ったバスケットがあったが、お互い考え込むばかりであり手をつけていなかった。

ジャクソンは、事の顛末を未来から聞いてから未来以上に考え込んでいた。

黙っていても内心の不快感がひしひしと伝わってくる彼の表情からは、ジェイコブの言動に対して激しい怒りを覚えていることが読み取れる。

この黒人捜査官は勤務中にふざけることはあっても、根は極めて真面目であり、自分の職務に誇りを持ち、忠実であろうとする素朴な人柄だ。ジェイコブのように姑息な男は、許し難いであろう。

彼はきつく巻いた黒髪に指先を突っ込むと、タバコの煙でぼやけた宙を一瞬睨んでから視線を未来の方へ向けた。

「しかしわからねえのは、あのクソガキがどうやってエミリオの家の搜索予定を知ったかってことだな。お前は掲示板になんか、予定を書き込んだんじゃないかってんだろう？」

「もちろん、それは誓ったっていいよ。私がランチエスターに教えるような真似、するわけないじゃない」

ジャクソンにそう未来は断言したものの、未だにわけがわからず困惑が残っていた。

ジェイコブが特に女である自分を見下しているのは日常茶飯事だったが、彼は5秒ではれるような嘘をつく男ではない。

だからこそ、彼が話していたのが事実だったことを自分の目で確認してから、彼女は動揺してますます混乱したのだ。

「その掲示板の書き込み、お前が実際に見たんだってな？」

「確かに私の名前で、ちゃんとスケジュールが書き込まれてたのは確認したよ。ご丁寧に、私が緊急で行かなきゃならないって言うって嘘の捜査のことまでね」

未来もジェイコブに言われたことを信じる気など全くなかったし、スケジュールを入れた覚えが全くなかったのだが、掲示板で公開された情報をいざ見てみると、途端に自分の言動に疑いを持ちたくなってくる。

捜査を妨害しかねないジェイコブに重要な情報を晒し、あまつさえ彼に一切を任せるなど、一時的に気が狂ったとしか思えない判断だ。いくら杉田のことがあつて精神的に不安定とは言っても、記憶が欠落するほど混乱することなどありえない。

しかし彼女は重い口を開き、触れたくない事実を口にせざるをえなかった。

「ただ、エミリオの自宅の搜索についての内容は、日時を除いた一言一句があんたに送ったメールと全く同じ内容だったみたいで」

「何だつて？」

ぎよつとしたジャクソンが、まだ髪に突っ込んでいた指をこわばらせる。

「掲示板の書き込みは、決まったメールのテンプレートを使つてもできるでしょ？」

未来はジャクソンにグループウェアの特徴を思い出させるようにゆつくりと言つた。そのままボストンクレーターのグラスを取り、嫌な緊張で乾きがちな口と喉を潤す。

「私、掲示板にスケジュールを書くときはいつもメールを使つて、一昨日そつちにメールを送つたときも、同じテンプレートで宛先のアドレスだけをジャクソン宛に変えた奴を送つたの」

掲示板書き込み用のメールテンプレートは、日時や場所、参加者などの要点をまとめて書くように体裁が整えられている。通常の用件を伝えるのにも使えて便利なことから、こうした使い方をしている職員は多かつた。

ただし、テンプレートは宛先が自動的に指定されるため、必ず書き換える必要がある。これを忘れたために必要のない情報を掲示板に書き込んでしまうトラブルも日常的に発生しているが、閉鎖ネッ

トワークでは大した問題にならないため、本部も特に対策をしていないのが現状だった。

「ひよっとして私、宛先から掲示板の書き込み用アドレスを消し忘れてたのかも」

認めたくはないが、未来にはそうだとしか思えなかった。やり切れなさから深い溜息が漏れて、意識せずに瞳が閉じられる。

「本当かよ。まさか、送信先をミスしたのか？」

「予定を誰かに送るときは、いつも宛先を確認してから送ってるよ。でも、もしかしたら私がそう思ってるだけなのかも知れない」

ジャクソンも信じられないようだったが、未来は自分の口から言えと言うほど、自信を失っていく羽目になっていた。普段は習慣であまり意識せずにやっていることのため、正確に思い返すことができなないのだ。

心底から困り果てている未来に、ジャクソンが決して豊富ではないネットワークセキュリティの知識を探って助け舟を出そうとする。「実際の検索の日は、俺が見たメールに書いてあったのは違うじゃねえか。お前が送ったメールは、送信ログが残ってるだろ？その本文を確認すればはつきりする」

「私、メールの送信ログは残してないんだよ。あつという間にデスクがいつぱいになっちゃうから」

しかし、それも未来本人からあっさり否定されてしまった。

「けど、俺のところに届いたメールには、掲示板のアドレスは含まれてなかったぞ」

「掲示板のアドレスは、BCCに入るように設定してたんだよ。ジャクソンにはTOで送ってるから、見えない筈なの」

再び救いの手を差し伸べてくれたジャクソンに領けない未来は、指先で摘んだサルサを申し訳なさそうな様子で弄んでいる。チエダーチーズ味のチップスを所在なげに口に運んだ彼女を、ジャクソンはまだ見捨てていなかった。

「掲示板の書き込み時刻はどうなんだ？」

「ええと、確か11月30日のお昼くらい。その時間は私、事務所でまだ仕事してたから。何度かグループウェアにもログインしてたよ」

「でも、掲示板には書き込みしてないんだよね？」

「掲示板は見てもない。でも、それを証明できる簡単な方法はないと思う」

それでもだんだん抑揚がなくなってきたジャクソンの質問に、未来が力なく頷く。

そこで、両者の唇が動きを止めた。

四つの強化された耳が、男たちの低いざわめきで満たされていく。そこに流れ込んできたのは、一晩の相手を見つけた者がこれからどこまで行くかとか、手っ取り早く相手を落とすにはどうするか、などという他愛のないことばかりだ。たまに海兵隊の隊員のものらしい話も混ざっているが、自分たちの話がどれだけ場違いであるのか、つくづく思い知らされる。

瓶に残っていたビールを一気にグラスに注ぎ、飲み干したジャクソンが話を再開させた。

「そもそも、俺に送ったメールの内容が間違いだったってことはないよな？」

「それはないよ」

こうなると、自分に送られたメール内容がもともと間違っていたのでは、と疑い出しているジャクソンに、未来が今度は即答した。

「私、電話で話をするときは、いつも電子付箋を使ってメモを取ることにしてるの」

彼女の頭の中は、個人仮想端末のデスクトップ画面に新しく作成した電子付箋の派手なレモンイエローに彩られていた。

電子付箋は、文房具の付箋紙と同じコンセプトのソフトだ。パソコンのデスクトップ画面に色や形などを好きなように作成して貼り付ける台紙のようなもので、そこに文字を打ち込むことができる。

未来はこの便利なソフトを日本にいる頃から使っていた。

「今回もそれから内容を全部コピーして貼り付けたから、送ったメールの情報が間違ってたってことはない。絶対に」

絶対、とまで言い切った未来を前に、ジャクソンは呻くしかない。「しかしランチェスターが搜索の情報を知るためには、メールか電話の盗聴しかないわけだろう。もしくは、個人端末への不正侵入とか」

「もし不正侵入や電話の盗聴なんかがあったとしたら、もうとつくに本部で騒ぎになってるんじゃない？それに、彼はそんなに情報技術に精通してるわけじゃないみたいだし」

コンピューターのセキュリティに詳しくないジャクソンは、頭痛を覚えているかのようにこめかみに指を当てていたが、対する未来はしれっとしている。

「しかしだ。現実としてあのクソガキが予定変更のことをお前から聞いて、郡警察の連中に指示を出して、掲示板に書かれた予定通りに動いてる」

そんな彼女を尻目にして頭を抱えて唸り、ジャクソンは先を続けた。

「それで、土曜日は事務所にいたのがミキ一人だつて言うじゃねえか。それじゃ、お前が俺に間違つた情報を書いたメールを送つてかつ、掲示板に正しい情報を書いたんだつてことになつちまう。何とか、メールや掲示板のログを確認する方法はねえのかよ」

「問題はそこなんだよね。本部から許可を取つてサーバのログを取り寄せるしかないけど、何があつたのか怪しまれるから。あんまりことが大きくなると、隊長が出なきゃいけなくなるのかも」

未来の声がどんどん低く小さくなってくる。

メールサーバやグループウェアサーバのログには、BCCに書かれていたアドレスや掲示板に書き込みを行った端末のIPアドレスが記録されている。

ただし、サーバはフレデリックスバーグ駐在事務所ではなく、ERF（技術開発研究所）があるクワンティコのサーバールームにある

のだ。そこには許可を受けた者しか入れないのは勿論のこと、情報の持ち出しに關しても嚴重な管理が敷かれていた。

冷静に言えば言うほど、彼女は自分を追い詰めている自虐的な気分になった。

「そいつは駄目だ、なるべく大事にはしたくねえ。もしこれでCVCの危機管理能力が問われるようなことになつたら、どこに皺寄せが来るかわかつたもんじゃないからな」

そして今度は未来の呟きにジャクソンが即答する番であつたが、それには未来も同意だつた。

CVCはFBIでも本格運用が始まつたばかりの部署ではあるが、専用武器の開発やサイボーグのメンテナンス施設の保有などで金食い虫な上、化学・毒物学課や成分分析部などの主要部門から優秀な人材を引き抜いていた。

どこも人員と予算が削られている中、CVCが特別扱いを受けていることを腹立たしく思っている者は大勢いる。今回のようなトラブルが表に出た場合、CVC全体がどのような打撃を受けるか予想もつかない。

「くそ！これ以上、俺たちだけじゃどうしようもねえじゃんか」

「だから、困つてるんだつてば」

八方塞りな状態にジャクソンが吐き捨て、未来が溜息をついた。

ジャクソンが乱暴にカウンターの上のビール瓶を取ってグラスに注ごうとしたが、とつくに空になっていたことを失念していたようだった。鋭い舌打ちを漏らし、彼はカクテルのグラスを運んでいたルイを呼び止める。

「ビール、もう一本くれよ」

「あんた、この後運転して帰るんでしょ？あたしは儲かるからいいけど」

立派な黒人男性であるルイは一度たしなめはしたものの、すぐにジャクソンのために追加のビールをカウンターに持ってきた。肩に届く豊かな髪をひつつめたルイが手を伸ばして空のビール瓶を取ると、かすかなコロンの香りが未来の鼻をくすぐる。

「もうちよつと頭に血を回さねえと、いい考えが浮かんでこねえんだよ」

確かにジャクソンは、まだ酔っているようには見えない。だから敢えて、ルイも本気で止めようとは思わないのだろう。客が少し減って手が空いたのか、ルイは未来たちのいるカウンターの向こう側にそのまま回った。

「でも、お嬢ちゃんとジャクソンだけって言うのは初めての組み合わせよね」

「最近は何時間帯が合わなくなっちゃったからね」

天井近くを彩るネオンに照らされたルイが、ボストン・クーラーをもう一杯作ろうとラムのボトルを取り上げる。苦笑を浮かべている未来は、控え目に彼を制した。

「あ、私はもうアルコールはいいよ。ダイエットジンジャーエールがあれば嬉しいんだけど」

「コークとか普通のジンジャーエールでいいじゃないの。お嬢ちゃんも、もうちよつと脂肪をつけた方がセクシーなのに」

「ミキは、余計な男を引つ掛けようとしなくても生きていける女だからな。これ以上セクシーになる必要なんかねえんだよ」

「うるさいな、悪かったね」

ルイに続いて、未来がジャクソンのからかいに口を尖らせる。

未来も、自分が欧米人に比べてずっと幼く見えることが話の種にされるのにも慣れていたし、いつまでもジャクソンと2人で重苦しい空気を抱えていたくはない。そこにルイが混ざったことで、多少なりとも周囲の喧騒に馴染む雰囲気が変わったようだった。

「でも、恋愛より夢中になれることがある強い女って素敵じゃないの。あたしなんか、いつも恋してなきや苦しくなっちゃうつてのに」
「ルイに似合う相手って、相当ガタイが良くなきや無理なんじゃないの？」

未来はルイの広い肩と、白いブラウスを捲り上げた袖から突き出た、筋肉が目立つ腕に目をやって笑った。彼が未来の見た目に関して発言をしたことへの、軽いお返した。

「あたしは可愛い子も、男らしい大人の男もどっちも好きよ」

ルイも笑顔で返してくれるが、濃いルージュとアイシャドウ、くつきりとしたマスカラが暗い中でもわかるメイクで女言葉に乗せられたこの台詞は、多分冗談ではないのだろう。

異性装嗜好者であり同性愛者でもあるルイは、遅い時間で席が空きつつもまだまだ賑わっている店内をぐるりと見渡した。

「この辺りには、色んなタイプがいるわ。軍の施設が多いからね。もともと彼らのために開いてるような店でもあるわけだし」

「やっぱり、趣味と実用を兼ねてるってわけなんだ」

未来も何気なく、ルイの視線を追った。

ホワイトクローウは地下にあるこの手の店としてはかなり広く、7、80人分程度の席数はあるだろうか。客は若い男性が中心だが、老紳士と言っていいくらいの年齢の二人組みがテーブルの下で指を絡ませていることも、よく見ることができる。

彼らの人種は様々だが、きつと職業や家庭事情も個々で違っはず

だ。

ティーズで一番最近の被害者であるエミリオも多分、同じような店で自分を一晚だけ買ってくれる相手を探していたのだろう。

「ここでひと商売してる連中もいるのかもな」

「そりゃ、いるでしょうよ。あたしは、お客さん同士のことには首を突っ込まない主義だけど。ただ、変な連中が入り込まないようだけ気を使ってるわ。だから、ここまでやってこられたのよ」

未来と同じことを考えたらしいジャクソンが何気なく話を振ると、ルイは肩をすくめて見せた。

「まあ、うちみたいな店って意外と多いのよ。人目につかないだけでね」

「でもお前んところは、結構な老舗だろ？」

「そうね。近くにあるお店のことは、大体耳に入ってくるわ」

ルイの口調が、僅かに緊張を帯びたものに変わった。ジャクソンと未来がそれとなく視線を交わし合うのを視界の隅に留めたのだろう。彼らの纏う気配がくつろいだものでなく、仕事のそれに変わったことも察しているようだった。流石にジャクソンの信頼を勝ち取っている情報提供者だと、未来は素直に感心した。

ルイがカウンターに肘をついて、2人の捜査官の方へ半身を寄せた。

黒い瞳が、無言で質問を促してくる。

ジャクソンはジャケットの内ポケットからハンドターミナルを指で挟んで取り出すと、エミリオの顔写真を画面に素早く呼び出してカウンターの上に置いた。

「なあ、この男は見たことあるか？」

小さな液晶画面に現れた黒人の若者の顔を見ても、ルイの表情は動かない。

生前のエミリオは鼻筋が細く唇も薄めで、繊細な印象がある顔立ちだった。同年代の黒人たちに混ざると、かなり目立つ存在だったに違いなかっただろう。

ルイはマスカラを塗りたくった睫毛の隙間で視線をゆっくり巡らせているが、懸命に思い出そうとしているような素振りは見せなかった。本当に見たことがないのかどうか、それとも誤魔化そうとしているのか、未来には判断がつかない。

「そうねえ……」

溜息をつくようにルイが一言こぼすと、ジャクソンが片方の眉をぴくりと動かし、濃いメイクの顔を至近距離からずっと見つめた。

彼もルイの考えを探っているのだ。

が、二人のサイボーグの四つの目でじろじろ顔を見られている当の本人は、平然としたものだ。ルイが口を開いてから数十秒の間、ジャクソンと未来それぞれの瞳を見返す余裕すらあるのである。ルイは日頃から強烈な個性を持つ人間を大勢相手にしているのだ。度胸の据わりっぷりは、その辺の警官よりも上なのかも知れない。

しかし、時間が経過するにつれてジャクソンの肩が徐々に下がっていくことに、未来は気がついた。ルイのしぐさが、望み通りの回答が用意できないときのそれなのである。

息をついたジャクソンが、ハンドターミナルを引っ込めようとした。

「もちろん、見たことあるわよ」

その太い声で反射的にジャクソンのハンドターミナルを握った手が跳ねて、丸まっていた未来の背筋が一瞬でまっすぐになる。

ルイは彼らの反応には殆ど気を留めず、店の中ほどにある二人がけのテーブルをそつと指差して見せた。

「彼、ふらつと一人で来ることが多かったのよね。だから、あたしもよく覚えてるの。いつもあの辺りに座って、同じような相手を探してたわ」

引き伸ばされたセピア色の風景写真が後ろにかけられているそのボックス席は、店のドアをくぐるとすぐに目に入る場所にあった。きつとエミリオはドアが開く度に顔を上げ、客の顔を見ていたのだらう。

「確か、甘めのカクテルをよく飲んでたわ。それに、来たときはいつもキスチョコとナッツを頼んでね。事件のことは一応知ってたけど、あの子が被害者だったってのは今日のニュースで知ったところよ」

バラバラ殺人事件であるティアーズのことは当然各メディアでセンセーショナルに報道され、身元が判明した被害者の顔写真も公開されている。空の席を見つめるルイは、何も言わずに深く頷いていた。だんだんはつきりと思い出してきたのだ。

思わず視線を交し合ったジャクソンと未来が、更にルイへと半身を寄せる。

「知ってるかも知れないが、彼の名前はエミリオ・ハンソン。住んでいたのはキングジョージ郡だ。個人で売春をやって生活してたらしい。でも、恋人がいるような様子はなかった」

「彼を見かけたのって、いつごろからだったの？」

ルイはまず未来の方を見て、質問に答えた。

「彼がうちに来るようになったのは、ここ2か月くらいかしらね。」

多いときは週に2回か3回は来てたわよ。大体夜の10時くらいが多かったと思うけど」

「彼を最後にここで見かけたのって、いつ？」

「11月25日かそこらだったと思うわ」

ルイの答えに、未来とジャクソンは目配せし合った。

エミリオが自宅付近で最後に目撃された日、彼はそのままここに来ていたのだ。そうなれば、ここで犯人と接触した可能性は高い。

未来がメモを取るために一旦質問を止め、膝に置いていたバッグを探る。彼女がハンドターミナルを取り出したのと入れ替わりで、ジャクソンがカウンターに肘をついて更に身を乗り出した。

「エミリオは売春してたんだ」

強調して、ジャクソンは繰り返した。

「この店でも、もしかしたら相手を探してたのかもしれない。いつも一人で来てたってことなんだからな」

表情を変えずに軽く頷いたルイの視線を正面からとらえ、未来も新たな質問を投げかけた。

「彼、出て行くときも一人だったの？誰かと一緒だったこともあった？」

「流石にあたしも、そこまでは覚えてないわよ。担当はいつもあたしがしてたわけじゃないしね。まあ、あたしからお嬢ちゃんへのサービスはここまでよ」

女装の黒人店主は、そこで未来たち2人の顔から視線を意図的に外して呟いた。

「そうねえ。カメラに映ってる可能性があるわ」

彼が動かした視線の先を、2人の捜査官が素早く追う。

店内の天井近くを見渡してみると、幾つかの赤い点が弱々しく光を放っているのが見えた。防犯カメラの作動ランプである。注意して見なければわからないほど暗い灯りだが、全ての席の様子が映るように工夫して配置してあるのだろう。

未来が赤外線フィルタをオンにして見直してみると、カメラは透明なドーム状のアクリルに覆われている旧型のものであることが判別できた。

「カメラ映像のコピーを渡してもらえねえか？」

「急ぐならすぐ誰かにやってもらうけど、生憎機械の扱い方がわかるのはうちの若い子だけだね。彼、お店の看板なのよ。後ろに引っ込めなきゃならないかしら」

ジャクソンの要求には勿体ぶった応答をまず返す辺りに、ルイが情報提供者であることを改めて感じさせる。ルイにとってここから先は善良な一般市民のボランティアではなく、立派なビジネスになるのだ。

早々に諦めたジャクソンが、やれやれと両手を上げて溜息をついた。

「わかったよ、そいつの給料分だけだぞ」

「彼の時給、高いわよ」

ジャクソンは映像をダビングできる店員の給料分を、情報料としてルイに支払うと提示したわけだ。捜査上は極めて重要な情報になるため、その程度の金銭のやりとりが発生するのは当然だったが、ルイは首を縦に振りつつもまだ言いたいことがあるようだった。

「今すぐ、25日の分だけでも渡せるけど？あたしにも、チップを弾んでくれるならね」

意味ありげに含み笑いをして見せたルイを、ジャクソンがじろりと睨む。

その気になりさえすれば、ルイも映像のコピーができるのだ。こうなると、先に話が出た看板店員が実際にいるのかどうかすら怪しくなってくる。

「くそ、人の弱味につけ込みやがって」

ジャクソンが舌打ちしてデニムのポケットから付箋紙とボールペンを取り出し、走り書きしてルイに手渡した。そこに書かれた金額を目にしたルイが、一呼吸置いてから笑顔を返す。

「あんたみたいな、懐の広い男は大好きよ」

一番上の付箋を剥がした女装の店主の目はしかし、まだ笑ってない。彼の目はジャクソンや未来の背後の客に怪しい動きがないかどうかを、さり気なく確認していたようだった。

まだ仕事の顔を保っているルイに、今度は未来が低く言う。

「防犯カメラの映像って、どれぐらいあるの？」

「いつからの分が欲しいのかしら？とりあえず、3ヶ月分は残してあるけど」

ルイがビジネスの姿勢を崩していないことに、未来も便乗することにしたのだ。とりあえず、無難と思われる要求を提示する。

「ここ1か月の分、全部もらえる？」

「あら、お嬢ちゃんも要求がちよっと激しくなってきたわね」

ルイが唇の端を皮肉っぽく曲げて笑ったが、決して困らせる意図でそうしたわけではないようだった。彼が捜査官として成長しつつある未来のことを好意的に見ているのは、もうわかっている。

「勿論、私からもチップは弾ませてもらうから。2人分ね」
そして未来も、ルイへの初めての依頼にやや高い報酬を支払うこ
とを約束した。

監視カメラの映像がすぐに手に入るとは言っても、全てを確認す
るのには時間がかかるし、映像解析用の特殊な設備も必要だ。

今日はこれからクワンテイコのCVC本部へジャクソンと取って
返し、早朝から作業する必要があるだろう。既に日付けは12月2
日に変わっていたが、地下の暖房の効きすぎた部屋で無機質な映像
を見続ける夜は、まだこれから訪れようとしていた。

12月2日、未来はCVC本部がある「防空壕」から出て陽の光を浴びることが叶わなかった。暗いうちからクワンティコの地下にこもり、画像解析担当のスタッフと共に監視カメラの映像の解析を続けていたのだ。その作業が終わったのが夜の8時で、当然のことながら冬の弱々しい陽光はとくに地平線の果てに去っている頃である。

そして限界まで酷使した目と肩の重さを堪えてCVCの自分のオフィスに戻り、個人仮想端末にログインすると、未来はそこで激しい不快感から来る胃の痛みに襲われることになった。

デスクトップ画面の隅に表示されたレモンイエローの電子付箋には、エミリオの自宅の住所や郡警察の担当者名とともに「12月1日、午後2時より捜査開始」と入力されていたのだ。

もう疑いようがなかった。

彼女はこの付箋に誤った捜査開始時間を打ち込み、メールの掲示板書き込み用フォームにコピーし、宛先をミスして送信してしまったのだ。単純なミスを重ねた結果情報がジェイコブに漏れたのだと、認めるしかない。

結局彼女は帰宅する気にもなれず、FBIアカデミージェファーソン棟の硬いベッドで悶々としながら一夜を明かす羽目となった。

翌朝も体中に淀む敗北感にまみれて動きたくなかったが、仕事は待ってくれない。未来は自宅に比べて寝心地が悪い宿泊室から、フレデリックスバーグ駐在事務所に渋々出勤せねばならなかった。以前と違って朝一番に出勤しなくて良くなった分まだましたが、それでもなお足取りは重い。

彼女はジェイコブとだけは顔を合わすまいと、わざわざ聞き耳を立ててから職員用のドアをくぐり、自分のオフィスの椅子にどすんと腰を落とした。未だに自分のミスを認めたくないと言う気持ち

胸の中で渦巻いていて、気を抜くとやり場のない憤りが独り言として零れそうになってくる。

が、それでもまだ幾つか腑に落ちない点は残っていた。

ジェイコブは、未来が2時から急な別件の捜査が入ったため、同時刻に始まるエミリオの家の捜索に参加できないから、代理で自分が行ったのだと主張していた。

もしこの付箋に最初から間違った情報が書かれていたのだとしたら、郡警察との電話打ち合わせ段階では5時に捜査開始予定だったと、何故彼は知っていたのだろうか？

予め郡警察側のスケジュールも知らなければ、掲示板に未来の嘘のスケジュールをでっち上げることもできないし、わざわざ郡警察に連絡して捜査開始を2時に繰り上げることも不可能だった筈だ。

しかし、11月30日の土曜日に駐在事務所に出勤していたのは未来一人だったのだ。

もしかして、本当に電話が盗聴されているのではないか？

未来はいい加減そう疑いたくもなってきたが、すぐにその短絡的な発想を打ち消した。FBIはたとえ地方の駐在事務所であっても、情報の流出に関しては極端に気を使っている。電話に細工されていたら、たちまち発見されて大騒ぎになるはずだ。

考えれば考えるほど、頭の中が混乱してわけがわからなくなってくる。

とにかく情報がどこから漏れているのか不明である以上、個人仮想端末も迂闊に触らないほうがいいだろう。

釈然としないために苛立っているのを抑え、未来はそう判断を下した。クワンティコから持ち出してきた映像も携帯ターミナルから個人仮想端末には移さず、外部メモリを差し入れた状態で鍵つきのキャビネットに保存せねばなるまい。

持ち出した映像は、ホワイトクローの防犯カメラから抜き出した一部の動画を拡大し、ノイズを除去して鮮明にしたものだ。11月25日のものが最新で、それ以前では11月19日、11月16日

の分からず、エミリオの姿が映っている箇所が見つかった。

ただ、その中に溜息をつきたくなるようなものが一緒に映っていたことを、昨日の時点で確認している。

「……これって、やっぱり」

未来はデスクで頬杖をつきながら、携帯ターミナルの小さな画面を見つめた。小さくとも解像度が高い画面に映し出されているのは、ホワイトクロウの防犯カメラが11月25日の夜8時前後に記録した映像だ。

カメラのレンズが店の入口の上から広い店内を見下ろしており、その真正面にあるボックス席で若い黒人の男が飲み物を傾けている様子が映っている。そして彼の隣には、互いの脚が触れ合うほど近くに寄り添う、白人らしい金髪の男がいた。その白人男性は人目を気にしているようで、さり気なく席の仕切りが作る影を利用して顔を隠している。

が、画像処理担当のスタッフが処理を施した映像は皮肉なほどに鮮明だった。顔全体がはっきりと見えるわけではないが、拡大した映像の横に写真を並べて見比べれば本人だと断定できるぐらいのレベルではある。

未来の溜息が深くなる。

ある程度は予想していたものの、ここまであからさまだと逆に扱いに困るし厄介だったが、ルイにはエミリオの隣に映っている人物と思しきの写真を見せておくべきだろう。

「ミキ、今時間は空いてるか？」

そこで普段滅多に声をかけてこない同僚が、未来の後ろにあるパーティションの隙間から顔を覗かせて呼びかけてきた。

「ブラウン？大丈夫だけど。何かあったの？」

未来が椅子をぐるりと回して振り返ると、オリヴァー・ブラウンがパーティションの狭い隙間をすり抜けるのに苦労しているのがわかった。

ブラウンはフレデリックスバーグ駐在事務所で、主任に次いで寡

黙な男だった。詐欺やマネー・ロンダリングのような知的犯罪をほぼ専門としている元会計士の特別捜査官で、いつも皺のないスーツといかつい表情を身につけている。声を立てて笑うことも滅多にないが、サービス規定や勤務態度には人一倍うるさく、未来がある意味ジエイコブと同じくらい苦手な同僚だった。最初の頃に丁寧な言葉遣いをしなくてもいいと注意されたことがあるが、未だに軽口を利く気にはなれない。

その彼が無表情に、未来の小さな身体を見下ろしてきていた。

「今朝の2時頃、オフィスで仕事してたか？」

「え……してないけど、どうして？」

ブラウンから低い声音で最低限のことしか聞かれないと、却って落ち着かない気分になってくる。未来は居心地の悪さを感じながらも素直に答えた。

「ミキの仮想端末に、その時間にアクセスがあつたらしい。仮想端末管理ソフトのログに履歴が残っていると、マイケルから注意されてね。そんな時間まで仕事をしてるなら、ちゃんと勤怠記録をつけておいて欲しいとのことだ」

「私、昨日はクワンティコにいたけど、そんな時間に仕事してないよ。私のIDでログインされてるのは確かなの？」

ブラウンの言葉にぎょっとした未来は、つい早口になってしまった。

個人仮想端末から最後にログアウトしたのは、昨日の夜9時頃だったのをはつきり覚えている。それからすぐにしたくもない食事をしてジェファーソン棟に行ったのだから、アクセス履歴が残っている筈がないのだ。

「いや、端末のローカル管理者IDでのアクセスだったらしい。だからってつきり、端末をメンテナンスでいじっていたのかと思っただが」

未来が何も知らないことにすぐ勘づいたブラウンの声に、早くも訝しげな響きが混ざった。

ローカル管理者IDはOSのアップデートなどを行うシステム管理のユーザーで、各々が通常の業務で使用する個人IDとは扱いが全く異なる。個人IDはFBIのシステム自体に対してアクセスできるのに対し、ローカル管理者IDはそれぞれの個人端末、つまりパソコンそのものに対してアクセスの権限を持つものだ。

ローカル者管理IDは、個人IDでは閲覧さえ許されないシステムファイルを操作できる強い権限を持つ。個人仮想端末にトラブルが発生した場合、ローカル管理者IDでなければ復旧作業できないため、IDとパスワードはどの個人仮想端末でも同じに設定されていた。

そのため、ローカル管理IDとパスワードを知ってさえいれば、誰でも重要なファイルにアクセスすることができるのだ。

もし捜査官の個人仮想端末に不正な侵入があったとしたら、FB Iの信用を揺るがす一大事だ。

未来の表情に緊張が走る。

「その管理ソフトのログ、今見られる？」

「マイケルに頼んでみよう」

2人はすぐに駐在事務所の受付係であり、セキュリティ管理担当者でもあるマイケルがいる窓口へと向かった。幸い一般市民からの問い合わせも一段落していたらしいマイケルは、仮想個人端末を管理している端末のロックをすぐに解除してくれた。

ブラウザがオフィスの隅にある管理端末用デスクの椅子に座り、彼の後ろから未来が画面を覗き込む。インターネットブラウザを起動すると、すぐに画面が仮想個人端末管理画面に移動し、ブラウザが管理者用IDとパスワードでログインした。

画面が管理画面に切り替わり、小さなパソコンの形をした仮想個人端末のアイコンが白い画面にずらりと一覧で表示される。ブラウザは真っ先に未来の個人仮想端末のアクセス履歴を呼び出した。

新しく開いたウィンドウには未来の仮想端末のログイン、ログアウトの履歴が秒単位まで表示され、その時に使用されたユーザー名

も記されている。

それによると、未来が自分の個人IDとして使っている「mhazama」は今日の朝と12月2日の午後9時7分20秒に使用されていたが、仮想個人端末のローカル管理者IDである「Lpresident」が12月2日の午前2時台、11月30日の日中や夜中に使われた形跡がはつきりと残っていた。

無論、未来はローカル管理者IDでアクセスした覚えなどない。だが、彼女はまだ慌ててはいなかった。

「確かに履歴はあるね。でも私の端末だって、結局は仮想でサーバの中にあるデータに過ぎないんだから、外部からだってログインはできるわけでしょ。OSのアップデート作業とかは、ローカル管理IDを使って大体夜中にやることが多いんだし。誰かが代わりに作業してくれたんじゃないの？」

未来は、FBIの堅固なセキュリティがそう簡単に破られるとは考えていなかった。ブラウンが背後に立つ同僚女性の落ち着いた声に振り返る。

「しかし、他の個人仮想端末ではOSのアップデートなんかされていない。ミキの端末だけ、というのは不自然だろう」

ブラウンの口調は、とことんまで調べてやると言う圧力を否応なしに感じさせる。

彼は、合点が行かないことはとことんまで突き詰める性分だ。目に見えるほどの迫力に押され、未来はやれやれと頷いた。

「じゃあとりあえず、誰かが私の個人端末に何かした、って言う前提で見えてみることにしようか」

未来の返事に、今度はブラウンが無言で頷き返してくる。2人は揃って前を向き、管理画面に出力されたアクセスログのブロック体を見つめた。

「ええと、ちよっと状況を整理させて。まず私の仮想端末だけど、システムへの接続を許可されたパソコンと、仮想端末接続用のソフトと、私かローカル管理者のIDとパスワードがあれば、アクセス

はできることになるんだよね」

「そう。通常、私たちが仕事で個人仮想端末を使うのはその方法だ」
基本となるシステムの構成について確認を始めた未来に、ブラウ
ンがいちいち合槌を打つ。

仮想個人端末は、実体がサーバ上にあるパソコンだ。それを使う
には家庭にもある普通のパソコンと同じように、ログインが必要と
なる。違いといえば、情報漏洩対策に厳重なセキュリティが組み
まれていることぐらいだろう。

未来は小首を傾げながらブラウンの顔を見て、先を続けた。

「もしくはFBIから接続を許可されたパソコンがあつて、管理画
面のアドレスがわかつていれば同じことができる。ただしこの場
合は管理画面に入るための管理者IDとパスが必要だし、今回の場
合はローカル管理者のIDとパスワードもいるってことだね」

外部からのシステム侵入が困難である以上、考えられるのはこの
いずれかのアクセス方法だろう。アドレスや各ID、パスなどは、
内部の者であれば比較的容易に知ることができる情報でもあるのだ。
未来が眉間に皺を寄せながらも正しいところを突いていることを
確認したブラウンが、鋭く突っ込んでくる。

「問題はそこだ。管理用画面からはIDとパスを使った通常のログ
インもできるし、その時に個人仮想端末にログインしているユーザ
ーの画面を、こんな風に操作することもできる」

と、ブラウンは実際に管理画面に自分の仮想端末のデスクトップ
画面を呼び出して見せた。その中にマウスカーソルを合わせると、
二重に重なった白い矢印がブラウンの手の動きに合わせて、グリー
ンのデスクトップをゆっくり移動していく。

感心したように、未来が呟いた。

「ありゃ、本当だ」

管理者画面からユーザー画面を呼び出してマウスを動かすと、個
人仮想端末にログインしている本来のユーザーは、マウスカーソル
が勝手に動いていると勘違いしてしまうだろう。

だが、もしここで本来のログインユーザーが離席でもしていたら、画面さえ元のものに戻しておけば何かされてもわからないのは間違いない。

未来の頭に真っ先に浮かんだのは、自分のデスクトップに貼ってあった電子付箋のことだ。彼女が付箋に正しい情報を書いておいたとしても、同じ手段を使えば管理画面から内容を書き換えることは可能だったのだ。

管理画面を開くには、一般的なインターネット用ブラウザと管理用のアドレスさえあればいい。事務所にいなくても、未来の仮想個人端末の様子を窺うことはできたはずだ。次第にある疑念が湧き上がってきて、雨雲が広がっていくかのように心に影が落とされていく。

が、表面上は平静を装い、未来はブラウザが開いている彼のデスクトップ画面を眺めていた。

「厄介なのは、この管理画面からログインしたのと私たちが通常やっているログインとが、管理画面上のアクセスログで全く区別がつかないことだ」

ブラウザが自分のデスクトップ画面のウィンドウを閉じ、もう一度アクセスログを開いて見せる。確かにそこには対象の個人仮想端末にアクセスしたユーザー名と、時間とが羅列されているだけだ。それ以上の情報は何も表示されていないのである。

「個人端末側のアクセスログも？」

未来が言い及んだのは、仮想個人端末のOSに残されるアクセスログのことだ。

しかし、ブラウザは小さく溜息をついて首を横に振った。

「管理画面を介したのと通常ログインは、どちらもネットワーク経由のアクセスになる。それにさつきみたいにユーザーの画面に割り込んで操作した場合は、何もログが残らない。これ以上の追跡は、このままだと無理だろうな」

無骨な印象の同僚はコンピューターセキュリティが得意分野なせ

いか、未来に説明する口調がいつになく滑らかである。それと同じようにこの問題の答えが簡単に導き出されれば良かったのだが、考えていたよりもずっと手強いようだった。

未来が仮想端末についてなければなしの知識を頭の中から検索し、手がかりを探るべく必死に話を繋いでいく。

「この管理画面、どのIPのパソコンからアクセスされたかとか、個人仮想端末で何をしてたかって履歴までは見られないの？」

「残念ながら、そこまでは記録できないんだ。ミキが昨日の深夜に何もしていなかったと言うのなら、このローカル管理者IDで入った奴が何をしていたかだな」

仮にこれが内部の者の仕業だとすると、ローカル管理者IDをわざわざ使ったのは、自分の身元を隠したいという理由があったからに他ならない。ローカル管理者IDは全ての個人仮想端末で共通の設定にしてあり、誰が使ったかは突き止められないのだ。

ふと、未来はIDとパスワードの管理について気になったことを口にした。

「この管理画面のパスとIDとか、個人仮想端末のローカル管理者IDとパスワードが書いてあるファイルは、鍵付きのキャビネットに入ってるじゃない。最近それが持ち出されたってことはないの？」

「キャビネットの鍵はマイケルが管理してるはずだが……」

オリヴァーが言葉を濁す。

仮想端末のローカル管理者IDとパスワードは駐在事務所単位で決まっており、管理も事務所任せられている。そのIDとパスワードが書かれたファイルは、必要な時に氏名と年月日を申請欄に書き込んで借り受ける運用だ。このファイルは鍵付きのキャビネットに入っており、鍵の管理と夕方のファイル申請欄チェックは受付係のマイケルが行っていた。

しかし、実はこのキャビネットは仮想端末管理専用の場所ではない。

ファイルは他の機密書類が入っているキャビネットの中に一緒に

入っていて、何かのついでに持ち出すこともそう難しくはない。キヤベネットの鍵の管理は帳簿でしているが、中に入っているファイル類はその都度の管理をしていなかった。

未来は納得したように頷くと、押し黙って再び管理画面に見入った。

ここ数日間で起こった端末のトラブルの不明点について、だんだん全貌がわかってきた気がする。事務所内での書類管理の隙を突いてきたことから、やはりある程度事情を知っている者の犯行である可能性は高い。ただ、ここに来てもまだ部外者の犯行でないとは言い切れなかった。

彼女はまだ出し残していた質問を、ブラウンにぶつけてみることにした。

「この管理用画面って、ブラウザなんだよね。ってことは、接続用サーバのIPアドレスと管理者用IDとパスがわかれば、外部からでもアクセスできるってことじゃない」

「しかし管理画面の接続用サーバは、許可されたIPの端末からでなければ接続できない。それに、ローカル管理者のIDとパスは変更されたばかりだ。やはり、ミキのIDとパスワードを知らない内部の誰かがやった可能性が高いと言えるだろう」

「FBI内部で盗難に遭ったり、紛失したパソコンはないんだよね？」

「今朝の時点では、そういう情報はない。あればすぐに本部が騒ぐはずだからな」

知的犯罪に明るく、FBI内の規定にうるさいブラウン捜査官は、そういった情報を掴むのが誰よりも早い。その彼が断言するのだから、外部からの不正アクセスである可能性は除外しても差し支えないだろう。

そうなると問題になるのは、所有者以外の者がメンテナンス以外の目的で仮想個人端末に勝手にログインしたということだ。

「外部からの不正侵入じゃないならまだいいけど、私の仮想端末で

何をしたかったんだろ？何も無いことくらい、みんな知ってるはずなんだけど。メールもローカルには残さないようにしてるし」

未来に犯人の見当はもうおおよそついていたが、それでもまだ胸の内はすっきりしない。

仮にジェイコブが一連の侵入をやったのけていたとして、果たして彼に今日の深夜、未来の個人仮想端末で何か探らねばならないことがあったのだろうか？

唯一彼が気にかけてそうなものとしては、郡警察から12月1日に送られてきたティアーズの証拠品リストくらいのものだ。しかし彼も郡警察スタッフ同席の上で証拠品検分に立ち会っているのだから、わざわざそれをどうにかしようとして危険を冒すとも考えにくい。

証拠品リストは、検分時に手書きで作成された証拠品一覧を元にして作成されているものである。もし実際の証拠品と食い違いがあったら、調べればすぐにわかるのだ。

念のため駐在事務所の証拠保管室の入室記録も確認していたが、ジェイコブはこの数日一度も入室していなかった。彼が未来の仮想個人端末にアクセスしてくる理由が、さして思い当たらない。

目的がわからないと、却って不気味さを感じさせる。

まさか嫌がらせ目的とも思えず、未来は動揺を抑えて話を続ける他はなかった。

「サーバ側の接続ログは見られないのかな？」

「ERFの連中に問い合わせれば教えてはくれるだろうが、理由を聞かれるだろうな」

どうやらブラウンは本部を通さなくてもERFに話を持って行けるようだったが、これも決まっていた顔はされないう。普段からむっつりしている同僚がますます気難しそうな表情になったことを受け、未来は溜息をついた。

「……連絡したくないね。あくまでこの駐在所内でのことみたいなんだし」

だからと言って放置するわけにもいかず、本部に言えばますます面倒なことになりかねない。頭を抱えたいくなるような事態に、ブラウンも渋い声と顔を隠そうという気をそろそろなくしてきたようだった。

「どうしようもなければやむを得ないが、その前にできるだけこちらで調べなければな。ミキの端末にアクセスした奴が何をしていたのか、調べる必要がある。OSのログを見てみることにしよう」

「そうだね」

それでも、ブラウンが咎める口調にならないのは未来にとってありがたい。

取り敢えずはできることを調べるしかないのである。未来が疲れた様子で提案に同意したのを確認してから、彼は管理画面に未来の仮想個人端末の画面を呼び出した。

画面がスクリーンセーバーになっていたところで未来が手を伸ばし、キーボードからパスワードを打ち込んでロックを解除する。そこから先の操作はブラウンが替わり、OSのシステムメニューを起動してアクセスログを表示させた。

が、ログの全てがおかしいことに、2人はすぐに気がついた。1

2月3日朝3時以前のログが全く存在しないのだ。

個人仮想端末は全てログアウト後もシャットダウンできない設定になっているため、誰も使わない状態でも何らかのログは必ず残るはずなのだ。

「OSのログが全部削除されてるみたいだね。何も出てないなんておかしいよ」

「どうも、今日の深夜に何かやった奴が消していったみたいだな」
ブラウンが、通常であればそれぞれ数万を越えるログが吐き出されている筈の画面を睨んでいる。流石に彼も、ここまで手が込んだやり口を相当不審に思っているようだった。

「でも……私が担当してる事件の情報は、全部本部のファイルサーバに上がってるはずなのに。個人端末には大したものなんてないよ。一体何がしたかったのか、見当もつかないや」

「まあ待て。わざわざローカル管理者でログインしてOSのログまで消したということは、何かを削除したか、改竄したかのどっちかしかない。その痕跡を消すために、OSのログを削除したとしか考えられないからな。ここ最近手に入れた情報で、他人が欲しがりそうなものはなかったか？」

ブラウンが鋭いヘイゼルの瞳を閃かせると、未来は一瞬たじろいで言葉を詰まらせた。

「情報って……マスコミが目の色変えるようなのならいっぱいあるけど、盗まれた端末もないんだし、記者風情がFBIのサーバセキュリティを突破するなんて、できっこないよ。そもそもデータの不正アクセスは重罪になるんだから、たかだかジャーナリストの連中がそこまでのリスクを犯すと思えないし。それに今回私がCVCで捜査してる事件は、今のところ政治的なスキャンダルも絡んでないんだから」

「でも、ミキが持っているのは最近全米を騒がせてる連続殺人の情報だ。マスコミには情報を漏らさないように捜査しているし、何よりセンサーシヨナルな事件ではあるだろう？とにかく売り上げを伸

ばしたいゴシップ情報番組の類だったら、情報を盗もうとするのだってありえないことじゃない」

ブラウンの指摘は、未来に反論の余地を与えない。

言われてみれば、確かにそうなのだ。マスコミには常に情報のリスクがある危険を意識しなければならぬのである。未来は今更ながらに、自らの情報漏洩に対する認識の甘さを痛感させられた。

「警察周りの記者連中には、強力な情報提供者を抱えてる者がいる。それに、金で買収された関係者が手引きをしたということだって考えられなくはない」

「まさか、駐在所の人間が情報売ってるって言うの？」

ブラウンの考察に未来はうっかり驚きの声を上げそうになり、慌てて声を抑えねばならなかった。

「人の欲を甘く見てはならないんだ、ミキ。私は金に汚い上に頭が良くて、出世にも貪欲な連中をうんざりするほど相手にしてきたからわかるが」

ブラウンは未だ狼狽している未来のことはあまり気かけず、管理画面に呼び出された端末のデスクトップを睨みつけている。彼の口調は淡々としたものだが、今まで仕事で経験した事実を語って聞かせている重みを感じさせた。

「君はまだ若い上に経験が浅い。どんな小さなことでも可能性はある、と思わなければならぬ」

続いて投げかけられてきた視線と言葉には、さりげない警告と気遣いとが込められている。そう若い女性の同僚が思うに足るだけ、言い方は柔らかくなっていた。

「何か、ローカルだけに持っているようなファイルはないのか？例えば、まだ編集作業中のドキュメントとか」

「郡警察からもらった、例の殺人事件の証拠品リストくらいだよ。まだ、現物とざっと突合せした程度だから」

話が端末上のデータに戻ったところで、未来は心のしこりとなつて残っているものを持ち出した。誰かが欲しがりそうな情報

として思い当たるのは、本当にその程度しかないのである。

証拠品リストは、12月2日にメール添付で送付されてきたものだ。未来はメールを確認してからすぐにデスクトップ領域にデータを保存しておいたが、それ以降は開いていない。

「では、仮想端末のローカルディスクにあるファイルのタイムスタンプを確認してみよう。まずは今日の深夜以降に変更されたものがあるかどうか、証拠品一覧に限らず全てだ」

むつつした喋り方に戻り、ブラウンが未来を促す。そこから先は未来と席を替わって、彼女が個人端末の操作を管理画面から実施することになった。

まずは更新日時を12月3日午前2時以降で指定し、個人仮想端末の全ディスクに対して検索をかける。

結果はすぐに検索画面に出力されたが、システムファイル以外で更新されたファイルは数えるほどしかない。それも全て未来が今朝方に保存したもので、普段使っているフォルダを見てみても、なくなっているファイルは一見してないようだった。

「今日の早朝に更新されたり、削除されたファイルはないみたいだけど」

一番気になっていた証拠品リストのファイルは、検索結果一覧に表示されていない。未来が保存してから、誰も編集していないのだ。

「ふむ、妙だな。何もしていないならログファイルを消す必要はない。消したからには、何かログに残るような作業をしていたはずだ」

ブラウンの眉間に深い縦皺が寄り、未来の戸惑いを孕んだ視線が検索結果をもう一度さらっていく。彼女は奥に開いていたログ表示のウィンドウを手前に持ってきた。

「確かにファイルに手を加えるだけなら、セキュリティログだけを消せばいいはずだし。アプリケーションログやシステムログまで消さなきゃならない理由なんて……何か私の端末に仕込んだのかな？ 変な監視ツールとか、スパイウェアとか」

「それだな」

「え？」

通常に比べてすかすかのログをしつこく見ていた未来は、ブラウンの声の調子がやや高くなったことに驚いて顔を上げた。彼は核心に触れたことで頬を僅かに上気させていたが、話し方には既に落ち着きを取り戻させていた。

「ファイルユーティリティソフトには、タイムスタンプを変更できるものがある。侵入者はファイルを改竄して、その痕跡を消すためにタイムスタンプを変更したんだろう。用が済んだらユーティリティソフトをアンインストールしてログを消せば、それ以上のことがわからなくなる」

「……そうか！」

ほんの一瞬だけ未来は大きな目をしばたかせると、彼女も先の同僚と同じく裏声になりかけた。

確かにブラウンが説明した通りの手順を踏めば、形跡を殆ど残さずにファイルを改竄することが可能だった。一度削除したログファイルは特殊なソフトを使わなければ復旧できないし、パソコンに相当詳しい人間でも追跡するのは困難を極める筈だ。

未来が大きく頷いて、ブラウンの顔を見上げる。

「なるほどね。そう言えば、日本にいる頃にもそういう話を聞いたことがあるよ」

そうになると、もうOSに記録されている日付や時刻はあてにできない。ファイル内容を一つ一つ直接確認して改竄の有無を判断するしかないだろう。

「ミキ、君がここに戻ってきてから作ったファイルの中を確認したほうがいい。何か手が加えられている可能性が高いぞ」

幸い、ローカルに保存しているファイルは10もない。

ブラウンに促され、未来はすぐに証拠品リストのファイルを開いた。リストには発見場所と簡単な説明が記述され、項目の一つ一つに通し番号が振られている。しかし、実は彼女も細かい内容を記憶しているほどじっくり見たわけではない。

にもかかわらず、確認を始めてからものの数十秒でそれは発見されることとなった。

「……あ！」

未来が一声上げてから身を乗り出してモニターを覗き込むと、ブラウンも彼女の視線の先を追おうとする。

「どうした？」

「郡警察からもらったリストの証拠品の数が違うの。4つ少なくなってるみたい。それにこのファイルの保存時刻、私がデスクにいなかった時間になってるんだよ」

間違いない。

12月1日に警察署で検分に立ち会った際、未来は証拠品を仕分けして個数が確定した段階で、その全体数を数えておいたのだ。流石にどこから何が幾つ出たのかなどの詳細は覚えていないが、証拠品袋の個数がぴったり70個だったのは、確かな記憶として残っている。

そしてファイルの更新時刻である12月2日の午後8時13分は、丁度FBIアカデミーのカフェにジャクソンと2人で行った時刻だった。毎週末のこんな時間まで仕事をしなければならぬのか、まともな休日の前はいつ取ったかも覚えていないと、時間のことを話の種にしていたため、こちらもはつきり覚えている。

彼女は興奮のために椅子から浮きかけた腰を静かに落とし、モニターに表示されている一覧表を指差した。

「警察で証拠品を見たときに袋の数を数えておいたし、12月2日の夜はクワンティコのカフェでチームのメンバーと食事して、メニューまでよく覚えてるから。証拠品もぴったり70個だったはずなの。でも今は66個になって。証拠品が減ることは絶対にならないですよ？」

「確かか？」

軽く高揚している未来に比べ、ブラウンは平坦な態度を崩していない。

短く息を吐いて身体に残る興奮を静めた後、彼女は今一度マウスを手にした。メールの添付ファイルが一時的に保存されているフォルダも確認したが、そこにあるファイルも全く同じものだった。改竄した一覧表のファイルをコピーしておいたのだろう。

大した念の入れようだと、逆に感心したくなってくる。

だが、未来も今度ばかりは自分の記憶に自信を持っていた。

「何度も数えたから確実だよ」

未来がまだ疑わしげなブラウンの顔を正面から見据えてみても、彼は否定したい方の可能性を完全に排除する気になれないらしい。

「一応、現物と数が合っているかどうか見ておこう」

ブラウンは決して悪気があって言っているわけではないのだろうが、しぶとく考える性分は未来の神経を容赦なく逆撫でしていた。

苛立ちから毒の一つでも吐きたくなっていた未来は、破裂しそうなかんしゃく玉を鎮めて証拠品リストを印刷し、立ち上がった。

ジェイコブのことが気がかりだったが、彼は夕方まで戻ってこない筈だし、今のところ未来の端末にこれ以上いじれそうな情報は無い。捜査官の男女は、FBIの占有となっている地下フロアに通ずるエレベーターへと向かった。

証拠保管室は地下一階の大部分を占める広い部屋だ。

光彩と声紋認証でロックされた厚い金属製の扉をくぐると、古い空気清浄機を通った空気の人工的な匂いが彼らを出迎える。

ここは湿度と温度が常に一定に保たれた、今までこの駐在事務所が扱った証拠品と記録を収めている部屋である。壁際には天井まで高さがあるスチール製のキャビネットが隙間なく並び、部屋の中も規則正しく並べられたグレーのスチール棚で埋まっていた。

ブラウンが借り受けてきた鍵束をじゃらじゃら言わせながら、エミリオの事件の証拠品が入っているキャビネットを探した。年度別のキャビネットや棚は更に事件のコードネーム順に整理されていて、目的のキャビネットもすぐに見つかった。

ところが、自分の記憶が正しいことをブラウンに証明して見せる

という未来の目的は、すぐには達成することができなかった。

キャビネットの中ぎっしり詰まっている証拠品袋の数は66個で、一覧表と同じだったのだ。

「そんな、おかしいよ……」

未来が首を傾げ、信じられないという表情で呟いた。

1つ2つの数え間違いなら、確かにあるかも知れない。だが、100もない袋を4つも多く数えてしまうというのは、明らかにおかしいのだ。

「本当にミキの記憶は確かか」

キャビネットの鍵を開けたブラウンが、今は乱れた袋の列を整えている。彼の方でも、もう一度数を数えてくれているようだ。そのまま口をつぐんだのは、数に間違いがないからなのだろう。

「もちろんだよ。特に今回は私、CVCからこっちに移っての捜査で勝手に違ってたから、どんな小さなミスもできないと思って。いつも以上に気をつけてたよ」

対する未来に、自分の思い違いだと認める気はない。そのため、語調が自分でもわかるくらいに強くなっていた。

「袋の通し番号が振られたのはいつだ？」

「署で私が数えたときは、まだ通し番号がついてなかった。だからその後だと思うけど」

ブラウンの一本調子な話し方にかすかな抑揚がつく。むっとしている同僚女性を宥めようとしているらしいことに、未来の方が新鮮な驚きを覚えていた。

同時に彼女は、12月1日の捜索当日に自分が見たことを頭の隅で思い出していた。

搜索を直接指揮していたのは、不覚なことにジェイコブだった。しかし彼も、証拠品の全てを直接見たわけではない。

確か最後の最後でトムという若い捜査員が見つけたものは、その場で確認できなかったはずだ。数は思い出せないが、袋が小さなものだったことぐらいは覚えている。

検分の時、自分は郡警察のスタッフにジェイコブを見張るようこ
とづけたが、果たして本当に彼から常に目を離さずにいられたのだ
ろうか？ほんの十数秒もあれば、小さな証拠品を服のポケットに滑
り込ませることぐらい、簡単にできたかも知れない。

恐らくジェイコブは、未来が証拠品の数を予め数えていたとは思
っていないからだ。だから証拠品に管理用の番号が振られる前に
一部を隠し、未来に送られてきたリストを改竄する方法を思いつい
たのだろう。

それにしても不可解なのは、何故ジェイコブがそこまでして証拠
を隠したがるかである。

だが、もし本当にジェイコブとエミリオがホモセクシャルの関係
にあったのなら、全ての辻褄が合う。ジェイコブは証拠品の中に2
人にとって、あるいはどちらかにとって都合が悪いものを見つけ、
隠滅を図ったのだ。

「何か心当たりがありそうだな」

証拠品袋の群れを見つめたまま手を止めている未来の様子を見て
いたブラウンの言葉が、思考に沈んでいた彼女の意識を現実へと引
き戻した。

「……うん、まあね。そいつをとつちめることができるかも」

未来は呟き返したものの、本当はあまり気が進まなかった。

証拠物品が奪われたことが確実なのだから、取り戻すしかない。

それでも、ジェイコブが生易しい方法で尻尾を出すとも思えない。
脅しても奪い返す必要があつたが、そのためには彼の精神へ効率
的にダメージを与えられる攻撃を仕掛けなければだめだ。

どこを攻めればいいのかはもう、未来にはとっくに見当がついてい
る。その材料のことを考えると、正直気が滅入ってしまうのだ。

「それより先に郡警察に問い合わせ、もう一度リストを送っても
らったほうがいいと思うが」

「でもそうしたら、この事務所内で何かあつたんじゃないかって思
われるでしょ。なるべくなら騒ぎは大きくしたくないし」

ことがはつきりしない状態で動くのを嫌うブラウンが口にした意見はもつともだ。が、今回のような殺人事件絡みで内部の人間が働いたであろう不正行為に関しては、どんなに小さなことでも外部に漏らすべきではないと未来は考えていた。

一つ間違えば、また人の命が失われるかも知れない。

「しかしもし内部の人間による捜査妨害なら、とことん追及するべきだろう」

「それはそうだけど、もう二度とこんなことをしないように懲らしめる方法も思いついたから」

「そんな輩には甘いと言わざるを得ないぞ。公の場で吊るし上げの刑にするのが相応だ」

あくまで妥協しようとしないう姿勢を貫こうとするブラウンの口調が、珍しく乱暴になってきていた。未来は、ここまで感情を表に出した彼の姿を見たのは初めてだ。流石に少し申し訳ない気分になってくる。

今度は先と逆に、彼女がブラウンを宥めに回る番となった。

「まあ、確かに甘いかも知れないけど。大丈夫だよ、相手の精神にダメージを与えて叩きのめすのは、私も得意だから」

敢えて未来は不敵な笑みを口の端に上らせて、自分が考えている方法に絶対の自信があるとブラウンに表情でも語って見せた。彼の方でもまた、未来がこんな態度を取ったところを見たことがない。女の不気味さを感じてくれれば、説得が成功する確率は高かった。

「ミキも意外と悪い女の面を持っているようだな」

ブラウンがやれやれと言いたげな顔で首を振って、溜息をついている。彼は呆れはしているものの、もう反対意見を掲げる気はないようだった。

未来が予想していた反応とは違ったが、自分が何か言っても無駄だということは受け入れてくれたのだろう。

「現実的って言うてよ。とにかく、この事務所から近いうちにいなくなる奴がいれば、そいつは悔しがってキャンキャン泣いてる哀れ

な負け犬だからね」

とにかくブラウンが黙ってくれることになったのだから、感謝はしなればならない。その分、失敗は許されないと考えるべきだ。

未来は低い声で言うてからもう一度笑っておいた。

これから戦おうとする相手の心理を徹底的に利用する憎たらしい女になりきるため、その笑顔は自分の内面に対しても向けておく必要があった。

その日は暗い朝だった。

12月に入ると、まだ温もりを残していた大地は霜に覆われ始め、陽光は日に日に密度を薄くして、空気に広がる寒気を御しえなくなってくる。そのため冬の早朝は、人をベッドから追い立てるのではなく、安らかなまどろみの中へもう一度引き込もうとする。

だが、フレデリックスバーグ駐在事務所の地下にある証拠保管室には、もう明かりが灯っていた。いくらFBI捜査官の朝が早いとは言っても、呼び出されたのでなければ6時に出勤してくる者などいない。

少しだけ黴臭さがある空気の中、一人の捜査官が奥の通路にしゃがみ込んでいた。開け放したキャビネットに詰まった証拠品袋を一心不乱に漁っているため、エアコンのフィルタを乾いた空気が通り抜ける音と、がさがさと紙袋が引っかきまわされる音が、しんと静まり返った部屋にこもっている。

証拠の劣化防止のため適温に保たれているはずの部屋であったが、大柄な白人男性捜査官の額には大粒の汗が吹き出していた。頬を上気させ、厚手のニットの下に着込んだワイシャツにも汗を滲ませている男は、決して長時間しゃがんでいるために暑くなったのではない。

彼の青い瞳は忙しく袋のタグを飛んでいるが、注意力は散漫でしかなかった。不安を湛えた口許は歪んでおり、そこにも内面の苛立ちを感じさせる。

彼が焦っていることは、時折漏れる鋭い舌打ちにも窺うことができた。

「ランチエスター。いつからあんた、指示もなしに証拠品を漁るようになったわけ？」

だしぬけに、女の冷たい声が男の背後から上がった。

ぎくりと彼の筋肉が硬直し、一瞬手の動きも止まる。そこには、やっと探し当てたらしい証拠品袋が一つ、掴み上げられていた。

「やあ、おはようミキ。君こそ随分と仕事熱心じゃないか、こんな暗いうちから。これ、変なところに置いてあったから、元に戻しておこうと思っただけさ。ティアーズの証拠品なんだから、これ？」

顔を上げて振り向いたジェイコブ・ランチェスターは少しも慌てた素振りを見せず、右手の証拠品袋を未来に振って見せた。

彼にすぐには答えず、未来がゆっくりと歩み寄っていく。一箇所しかしかない出入口は、無言の彼女によって塞がれることになった。開いていたキャビネットを閉めて立ち上がったジェイコブが、無意識のうちに後ろへ半歩後退した。

「あんたが持つてるのは違うでしょ」

ジェイコブが大切そうに持っている証拠品袋に一瞥をくれた未来の口調には、刃のような鋭さが加わっている。その攻撃を何食わぬ顔ですり抜けたジェイコブが、視線を下に向けて小さな紙のタグを確認した。そこには乱暴な字で「tears」と書かれているが、事件のコードネームの正しい綴りは「tears」のはずだった。

「あれ、本当だ。スペルが違うね」

「どうしてそれが私の担当事件だってわかるの？」

未来が足を止め、20センチ以上上にあるジェイコブの顔を睨みつける。

彼は小さな同僚の視線など意に介さず、軽い笑いを浮かべていた。「だって、現場でも言っただろう？」

「私は部隊の人と話するとき以外、一度も事件のコードネームを言ったことがないよ。CVCはまだ本格稼働を始めたばかりだし、運用も厳しくてね。それに、あんたは女嫌いでしょ。現場でも、私の側に寄ろうとしなかったじゃない」

対する未来は、ここで反撃の手を緩めようとはしない。

機密保持の観点から、CVCでが担当する事件のコードネームは、部隊内だけで通用する暗号の扱いとなっている。一般の駐在事務所

や支局では、CVCのそれとは異なるコードネームが使われているのだ。ティアーズ事件の一般通称は「スクラップ」で、間違えようがなかった。

「そもそも、今日ここに新しく届く証拠品なんて存在しないんだよ」「何だつて？それはおかしいじゃないか。確か、郡警察からメールで……」

ジェイコブの顔が怪訝そうに曇るが、彼はまだ証拠品袋を手放さうとしない。

「今日朝一番に届く証拠品があるから確認してくれって連絡があった、ってこと？」

「君だつて、そのメールを受け取ったからここにいるんだらう？」「未来が大げさにかぶりを振って見せると、ジェイコブはますます苛立ちを募らせたようだった。

「それ、一体どこの警察から来たの？そんなの、届いてないと思うけど」

「じゃあ、メールが僕だけに来たのかも知れない。まあ、大した問題じゃないけどね」

吐き捨てるなり、ジェイコブは未来を押し退けて出入口へ向かうとする。

勿論、彼女にジェイコブを逃がすつもりはない。

小柄な女の腕に似合わない力で腹を押し返され、逆にジェイコブの大柄な身体がよろめいた。

「あんたがここにしていることは、大した問題だと思っけど」

身体ごとジェイコブを弾き返す格好になった未来は、鉄の根を生やしているかのようにびくともしていない。彼の敵意に満ちた視線が、細い身体に突き刺さろうとする。

「僕をからかっているのか？君もここにいてるってことは、警察から何かしらの連絡を受けたからなんだらう？」

「あり得ないって言ってるでしょう。昨日の夜、警察の担当者に全ての連絡はCVCを通すように指示しておいたんだから。あんたが

私のデスクトップで見た予定は、私が勝手に書いただけで全くのたらめなんだよ」

ジェイコブは黙っている。

彼の瞳は未来の顔の辺りをさまよっていたが、決して彼女の黒い瞳に掠めさせようとしない。あからさまに顔をそむけないのは、彼の負けん気の強さ故だろう。

「警察からのメールなんて、本当は来てない。それにあなたが今持っているのは、私が昨日入れておいたダミーの証拠品だからね。でも、来てる筈がない警察からのメールを見て、あなたはここに来たって言う。どうして、そんなわけのわからないことが起こったの？」

対する未来は事実の一つ一つをわざわざ説明し、積み上げ、目に見えない檻で相手を囲い始めている。その様子は裁判で犯人を追い詰める検察官さながらだ。

事の真相はこうだ。

未来は個人仮想デスクトップにまだ貼ってあった電子付箋に、新しい証拠品が届いたので、今日の朝に仕分け作業をやり直す旨を追記した。

勿論そんなことは真つ赤な嘘で、それらしい証拠品袋は古新聞を詰めてでっち上げたものだ。彼女は、ジェイコブがまだ自分のパソコンを管理画面から覗き続けているのなら、この偽の情報に引っかかってくれる可能性が高いと踏んだのだ。

そうして罫を仕込み、監視カメラの映像を確認しながら待ち伏せていると、ジェイコブが思惑通りに現れたのである。

「あなたのことは色々調べさせてもらったよ、ジェイコブ・ランチェスター捜査官。証拠品リストを改竄したはいいけど、変更の時間にまで気を配らなかつたのは失敗だったね。捜査の足を引っ張るような真似はいい加減、止めてくれない？」

ジェイコブを詰問する未来は、厳しい表情を崩さないでいる。

昨日ブラウン捜査官が調べてくれて、新たにわかったことがあった。

リッチモンド支局のノートパソコンを、ジェイコブが数日間に渡って持ち出していた履歴があったのである。

恐らく彼は出先でそれを使って仮想端末管理画面に入り、そこから未来の個人仮想端末にローカル管理者IDを使ってログインしたのだ。そして証拠品リストのファイルを改竄した後、ファイルユーティリティソフトをインストールし、タイムスタンプを変更した。その上でソフトをアンインストールしてからOSのログを全て削除すれば、痕跡を残さなくて済む。

パスワードや管理者用IDはたやすく入手できるのだから、仮想環境についての知識さえあれば造作もなかった筈だ。今までも未来の裏をかくため、頻繁にデスクトップを覗いていたに違いない。

FBIが所有している貸出し用ノートPCは、返却後すぐにハードディスクをフォーマットし、OSを再インストールすることになっている。厳しいルールにのっとった運用では、何をしたかの履歴を追うのにも時間がかかってしまう。彼はこのことを悪用したのだ。なくなった証拠品については、郡警察での作業時、未来が席を外した機会に一部を抜き取ったのだろう。通し番号が振られる前、誰かに見咎められることさえなければ万事がうまくいく寸法だ。

このように、セキュリティの穴を幾つもすり抜けるやり方をジェイコブ一人で考えついたのなら、見事なものである。未来の口許が皮肉そうに曲がった。

彼女と時を同じくし、ジェイコブも表情を歪めた。嘲笑に近い、憎悪が乗った笑いが漏れてくる。

「何のことを言ってるんだ？僕にはわけがわからないけど」
「どうやら、この後に及んで彼はしらを切り通すつもりでいるようだった。」

だが確かに、ジェイコブのやったことについては何の証拠もない。こうでなければ他に説明がつかない、という推測と理屈があるだけだ。

一方で彼は、自分が何故ここに来たのかという理由をまたも無視

している。

ここまでいけしゃあしゃあと開き直られたら、未来としても攻撃を強める以外の方法がない。いつまでも往生際が悪い方が悪いのだと自分に言い聞かせ、もう一段階上に進むことを決めた。

「ホワイトクロウ」

未来が店の名前を呟くと、ジェイコブの顔色が途端に変わった。上半身の血管が一気に縮まって、やや赤かった頬が瞬時に蠟人形のように色を失ったのだ。

音を立てて血の気が引くとは、まさにこの様子を言うのだろう。

未来が思っていた以上に効果覲面だったようだ。

「悪いけど、裏は取ってあるの。被害者のエミリオとあんたが、しよっちゅうあの店で会ってたってこともね。パートナーが殺された悔しさや悲しさはわかるよ。でも……」

「やめる！」

未来の言葉は、ジェイコブの低い叫び声に遮られた。

今や彼の広い肩は激情のため震えを抑えられなくなっており、先程まで蒼白だった顔が今度は朱に染まっている。

自分の最もプライベートな一面を、あろうことか心底から蔑んでいる女の新米に暴露されたのだ。その屈辱は、プライドの高い彼には耐え難いほどだろう。

昨日色々ホワイトクロウで調べてわかったことだった。

ジェイコブは、自分よりも劣っていると感じた有色人種の男性しか、恋愛対象にできないのだ。

エミリオと親密になるずっと以前から他の店にもよく出入りしており、ホワイトクロウではジェイコブのことを知っている常連客も多かった。何故彼がそのような性癖に至ったのかまではわからなかったが、エミリオ肩を寄せ合っている姿が監視カメラにとらえられ、モーターに何度も姿を消していたことは、少なからず確認できている。

ジェイコブは怒りと憎しみを、目の前にいる未来に無言で叩きつ

けていた。

今にも飛びかかってきそうな同僚を警戒した彼女は、意識せずに膝を緩めていつでも動けるように身構えた。

「彼は僕の情報提供者だった。それだけだ。それ以上何か言ってみる、侮辱罪で訴えるぞ。このジャップ……」

「あんたが証拠品のリストを改竄したり」

感情に任せて日本人の差別用語を口走ったジェイコブを、今度は未来が遮った。

「証拠品を盗んだのは、見つかると不利になるようなものがエミリオの家から出てきたから。でなきゃ、そんなことをする意味はないからね。単に私がしゃしゃり出てきたのが憎たらしくて手柄を横取りしようと思っただけだったら、もつと他にやりようがあるし」

激しい呼吸を押し隠そうとするジェイコブの様子を油断なく窺う未来の糾弾は続く。

しかし、ジェイコブはまだ抵抗を諦めようとしていなかった。血走った目が子どものような姿の同僚をぎろりと睨み、薄笑いで口調をコントロールしようとしているようだ。

「これは君たちCVUだけの担当事件じゃない。フレデリックスバーグ駐在事務所の仕事でもあるんだ。そして、こいつは僕の担当地区で起こった。警察から提出された証拠品をチェックしてクワンティコへ届けることに、何か問題でもあるのかい？」

必死に話をすり替えようとしているジェイコブは、正論で戦うのは勝ち目がないと既に悟っているのだろう。当然、そんなつまらない誤魔化しに引かかるとは思えない。

「郡警察の担当者にもう一つ、指示しておいたことがあるの。もし何か新たな証拠品が出てきても、地方局や駐在事務所は通さずにクワンティコへ直接回してくれって。だから、ここに何か来ることはもうないわけ」

つまり未来が言わんとしているのは、彼女のデスクトップに書かれた偽の情報を見てかつ、証拠品を不正に入手しようという意図が

なければ、ここに姿を現す筈がないということだった。

今度こそ、ジェイコブはもう言い逃れができなかった。

未来が一步、彼へにじり寄る。

「何をどこにやった？白状しないつもりなら……」

「白状するって、何をだい？僕がリストを改竄したり、証拠品を盗んだって証明できるとでも？」

視線が定まらないジェイコブは、事実関係の証明という最後の砦にすがろうとしている。

たじろいで後ろに下がったついでに発せられた苦し紛れの言い訳であったが、未来の足が止まった。

確かに仮想端末管理画面のログからでは、誰がどの端末から管理者IDを使ってログインしたかまでは特定できない。決定力に欠けると言われれば、それまでのことだ。

大きく息をついたジェイコブが、肩を揺らして笑った。

「おかしな言いがかりはよしてくれよ。僕だって、騒ぎを起こしたわけじゃない。ここで僕に言ったことは全部取り消して、今後捜査と一緒にやるなら、訴えはしな……」

「これ、何だかわかる？」

未来が革ジャケットのポケットに手をつ込んで何かを取り出し、目の高さに掲げた。

透明なビニール袋が、ジェイコブの前に突きつけられる格好となる。

「まだ詳細な検査結果が上がってきてないから知らないと思うけど、死体の肛門部からは本人のものじゃない体液が検出されてるの」

未来が手にしている袋の中身は、ジェイコブが吸ったタバコの吸い殻だった。

再び、ジェイコブの顔色がみるみるうちに青くなっていく。

「これを、DNAの比較対象として提出してみようか？」

未来はわざと無表情に言ってから、更にもう一步詰め寄った。

吸い殻に付着している唾液には口内の粘膜細胞が含まれており、

DNAの検出が可能なのだ。

ジェイコブがエミリオと一緒にホワイトクロウにいたのは11月25日、つまりエミリオが最後に外出した当日である。2人が親密な関係にあるのなら、その後肌を重ねていたと考えるのが自然だ。

エミリオの体内に残されていたDNAはFBIのデータベースにも登録がないため、現在の時点では誰のものなのか判明していない。が、比較対象があれば話は全く違ってくる。もし被害者の体内に残されたのと同じDNAを持つ人間が見つかったなら、その人物は極めて重要な参考人となることは間違いないのだ。

冷や汗にまみれ、既に自身の力で身体の均衡を保つことすら困難になっているジェイコブは、キャビネットに背を預けて呻いた。

「同意を事前に取りらずに採取したDNAが、証拠として認められると思うのか？」

「さあ？ FBI捜査官が同性の恋人に容疑がかかるような証拠を同僚から盗んでいて、捜査記録の一部を改竄。これだけでも、立派に犯罪だと思うけど」

未来はスニーカーを履いた片方の爪先で床を軽く叩きながら、指先に引っかけたビニール袋をくるくる回している。

「その上に問題の捜査官が、連続殺人の被害者でもある恋人の体内から検出された体液と一致するDNAの持ち主だった。そうなれば、世論は一体誰の味方になるんだろうね」

続いて彼女がとどめとしてジェイコブに突き刺した言葉には、同情や憐れみのかけらもない。

DNAがジェイコブのものだと断定されれば、当然彼は重要参考人か、悪くすれば容疑者として扱われる。犯罪捜査におけるDNA採取については、本人の同意がなければ証拠とされないケースもあるが、最終的に有用性が認められ証拠として採用される可能性も少なからずある。

更に証拠品リストの改竄が証明された場合、ジェイコブは偽証罪で即、逮捕されることは確実だ。それにどの道、ジェイコブとエミ

リオの関係が明るみになれば、任意でのDNAサンプル採取も拒否できる筈がない。

そして、同性愛者に対する差別はFBI内にはないとされるが、実際はそうではなかった。同性愛者であることが露見すれば、最低でも彼の捜査官としてのキャリアが終わりを告げることを意味する。だからこそ今までジェイコブは自らの恋愛をひた隠しにし、今日までやってきた。

エミリオとの関係が明るみに出たなら、ジェイコブは一巻の終わりだった。

そうなったら、どうあがいても逃げ道はない。

暫し、重苦しい沈黙が証拠保管室にたゆたう。

苦しげに胸を押さえ、まるで生気を失ったジェイコブから、未来はいつときも視線を離さない。

彼の弱々しく乱れた呼吸と未来の静かな息遣いが交互に、僅かに空気を震わせている。

やがて、ジェイコブが蠟人形のような顔で口を開いた。

「僕に、どうしろと？」

「簡単だよ。盗んだ証拠品を今すぐ返して、今後の捜査から一切手を引くこと。それだけだよ」

未来は感情を差し挟まない、厳しい声で言い放った。

しかし、彼女とて本当はこんなえげつない脅しを望んでいたわけではない。

ジェイコブが素直に自らの過ちを認め、法を守る者としてそれなりに真摯な姿勢を見せてくれれば、デリケートな問題を土足で踏みこじる真似は決してしなかった。

これは何人もの犠牲者を出している連続殺人事件だ。解決を妨げる障害があるのなら、非情に徹して排除する以外に道はないのである。

捜査官という仕事の本質が、やはり他人を信じる純粹さとは対極の位置にあるのだということ、今更ながらに痛感させられる。

一方で、人や国を守るといふ強い信念に支えられなければ、辛い任務をやり遂げることなど勿論不可能だ。その意味でいけば、法執行官は非常に純粋な正義感のもとに立っていることになる。

自分たちは常に、そんなジレンマとも戦わなければならぬ。
今は完全に心を忘れた鬼だ。

そう自身のことを叱りつけ、未来は再び口を開いた。

「こんなことをして、エミリオが本当に喜ぶとも思ってたの？あんたがやってることは捜査の妨害以外の何物でもない。事件解決を遅らせて、犯人を喜ばせてるだけだよ」

ジェイコブは放心したように立ち尽くしている。

青い瞳は虚ろで宙のどこかを睨んでおり、未来の言うことなど耳に届いていないのであろう。

彼のことを告発すれば簡単に片はついたが、今後の人生の全てを失わせなかったのは、せめてもの情けだった。

「安心して。証拠品さえ返してくれば、私はもう何も言うつもりはないから」

少しだけ語調を緩めても、ジェイコブは目立った反応を見せない。恐らくもう、このいけ好かなかった同僚に反撃してくるだけの気が残されてはいるまい。

半ば夢遊病者と化しているジェイコブの様子に未来がそう判断を下すまで、時間はかからなかった。

ジェイコブがふらふらと足を前に出した。

未来が道を譲っても、歩調は遅く安定していない。

彼は上半身を左右に揺らしながら証拠保管室のドアをくぐり、オフィスへの階段を登っていく。無意識の所作なのか、未来がすぐ後ろについても一言も喋ろうとはしない。

まだ朝6時半の駐在事務所のオフィスは暗く、電気をつけなければパーティションやデスクが見えないほどだった。未来は瞳の暗視フィルターを作動させたが、歩き慣れたジェイコブは非常灯の小さな灯りで十分らしく、自分のスペースへと迷わずに足を進めていく。

やがてジェイコブは薄い壁に囲まれたパーソナルオフィスに入り、隅にしゃがみ込んだ。鍵を開ける小さな金属音が上がり、続いてスチールのキャビネットが開く摩擦音が聞こえてくる。

その音は淀みなく、彼のしぐさも同じように引つかかるところはない。

立ち上がったジェイコブは、手にしている大きな茶色の紙袋を未来の両腕に押しつけた。

彼女が中を覗いてみると、見覚えがある識別用のタグが取り付けられた証拠品袋が4つ、収まっているのがわかった。パーソナルオフィスの出口を小さな身体で塞いだまま、ジャケットのポケットから手袋を取り出して両手につけると、全ての証拠品袋を手早く確認する。

どれもビニールの中袋を開けた様子はない。奪ったものとは言え、中身に不用意に触ったり、処分しようとしなかったのは、ジェイコブに捜査官としての良心があつたからなのだろう。

「……確かに本物みたいだね。後のことは、CVCが必ず始末をつけるよ。エミリオの仇も、絶対に討って見せるって約束するから」

未来が頷いてから顔を上げたが、声に明るさはない。

それでも彼女の顔に達成感が見えたのか、ジェイコブは顔をそむけて吐き捨てた。

「女のお前に何がわかる！」

まだパーティションの隙間を塞いでいた未来を突き飛ばさんばかりに押し退けて、ジェイコブは事務所から出ていった。耳を澄ますと、職員用の通用口らしい鉄扉が軋んだ音が続いたのがわかる。

灯りがなく夜のように暗い事務所に、未来は一人残された。自分が大きく吐き出した息が、寒々とした空間に響く。

目的の証拠品はようやく戻ってきたものの、後味の悪さを感じずにはいられなかった。恐らくジェイコブは、余所の地方局へ異動を申し出るだろう。恋人が殺され、女の同僚が自らの性癖を知るところとなり、自分の犯した罪を見逃されたという事実は、プライドの

高い彼には死にたくなるほどの屈辱になるはずだ。

勿論不正を犯した方が悪いのだが、結果的に一人の人間の居場所を奪ってしまったことは、未来の心にざらついたしこりを残していた。

もう一度、大きな溜息が漏れる。

同時に、オフィス全体の灯りがついた。暗闇に慣れた未来が、天井から不意に降ってきた白い光に思わず目を細める。

「やはり甘いな、ミキ」

狭くなつた視界の中に入ってきたのは、オリヴァー・ブラウン捜査官だった。

「あ、見てたの？」

「たまたま、防犯カメラのモニターでな」

答えたブラウンの声は、やはり起伏に乏しかった。

今朝未来が動くことは、調査を手伝ってくれた彼も知っていた。

手出し無用であることは伝えられていたものの、女である未来が危険な状況に陥った場合に備えて待機してくれていたのだ。

「もうあいつに反撃してこようって気力はないよ。今日はあのまま、帰ってこないかもね」

場都が悪そうに未来が肩をすくめる。ジェイコブとのやりとりは、防犯カメラを通して会話内容までもが筒抜けだった筈なのだ。

「彼が玉なしの腰抜け野郎で良かった。そうでなければ、君は撃たれていたかも知れないんだからな」

玉なしとはまた、生真面目を絵に描いたようなブラウンらしからぬ表現である。

確かに逆上し理性が消し飛んだ人間は何をするかわからないが、それでも常人では未来に毛ほどの傷もつけられないだろう。彼女は困ったように、手袋をつけた指先で頬を掻いた。

「あいつが武器持ちで何十人束になろうと、私を殺すことはできないよ」

「しかし、ミキは女だ。自分を過大評価しない方がいい」

これでも精一杯、過小評価しているつもりなのだが。
そう言いかけたところで踏みとどまり、未来はさりげなく話をす
り替えようとする。

「私より、ランチエスターの心配をしてやった方がいいと思うけど」
「まあ、心配はしているが」

咳払いを一つしてから、ブラウンがジェイコブの消えた出口を見
やった。

「私になるのは、やけになったジェイコブがDNAを手当たり
次第、今度は女に撒き散らさないかということだよ」

「そうだね」

先からブラウンが品がない言い方を続けているのは、嫌な雰囲気
に沈みそうな場の空気を変えようとした冗談だったのだ。

遅時に気づいた未来だったが、それにしても今一つだったため
素直に笑えない。ブラウンは知的犯罪に明るいただけあって切れ者だ
が、センスの良さは必ずしも比例しないらしい。彼自身に自覚があ
るのが救いだらう。

故にもう後悔したのか、ブラウンの普段から下がり気味の口角が
ますます下に引っ張られ、見事なへの字に曲がる。

未来は苦笑いと愛想笑いを混ぜた、微妙な笑顔を返す他にいい反
応を思いつけなかった。

「でも彼はやけになるとしたら、『bi』（両性愛）じゃなくて多
分『buy』（買春）じゃないのかな」

ジェイコブが証拠品を奪ったのは、是が非でも自分がティアーズの犯人と戦いたかったからではないのだろうか。

そして、何も話せなくなってしまった恋人の名誉を守りたかったのではないか。

未来がそう考えるようになったのは12月4日午後、取り返した証拠品をクワンティコへ運び、一通り改めてからである。

証拠品袋に収まっていたのは、それぞれ別の人物の名前が入った4枚のポイントカードだった。カードはヴァージニア州の個人商店や小規模なチェーン店で作られている団体である「プライベート・マーケット・オブ・ヴァージニア(PMOV)」のものだ。ヴァージニア州の住民であれば持つていない者が少ない類で、CVCの隊員もほぼ全員が持ったことがある。

仕組みは日本に数多くあるポイントカードと同じく、このカードの加盟団体に加わっている店で買い物をする、1ドルごとに2パーセントのポイントがつく。鮮やかなエメラルドグリーンに太字のブロック体で白いロゴが描かれたカードはプラスチックでできていて、裏側に顔写真と署名が入っていた。

署名はそれぞれ癖のある字体でスコット・ヤン、ケビン・ヤマダ、フィリップ・チャオ、ブライアン・リーの名前が、それぞれ記されている。

全てブラックヘア事件被害者のものであり、彼らが生前所持していたものだった。

ブラックヘアの被害者は皆全裸で死体を遺棄されていたため、これまで所持品は一切発見されていなかったはずだ。

犯人によって処分されている可能性が高いと思われる被害者の私物を、エミリオは一体どうやって手に入れたのか。本人亡き今、その入手経路は全く不明のままとなってしまう。

彼はジェイコブの情報提供者だった。

恐らくあの黒人の青年は、ブラックヘアの犯人と接触した際にあのカードを目にし、被害者のものと気づいてこっそりと手に入れたのだ。それを恋人に渡す前に運悪く犯人に勘づかれ、始末されたに違いない。たまたま入手した証拠品が皮肉にも愛する人の立場を危うくし、破滅させる手前にまで追いやる羽目になるとは、考えもしなかった筈だ。

多分FBIで唯一ジェイコブとエミリオの関係を把握している未来だが、そのことをCVCのミーティングの場で言うべきかどうかを、決めあぐねていた。

「驚いたな。この4枚のカード全部から、エミリオの指紋が検出されたよ」

特殊捜査チーム責任者のウォーリーが、ビニール袋に入れられたままのカードを他の出席者に回す前に指先でつまみ上げ、しげしげと眺めていた。

「エミリオの指紋だけしか見つからなかったの？」

ミーティング室のテーブルで正面に座っている未来が問うと、彼は潜在指紋部が寄越してきた報告書にちらりと目をやった。

「部分的に見つかってる指紋はあったけど、殆ど消えていて鑑定できるほどの跡が残ってなかったらしい」

「残念。決定的な証拠を掴んだと思ったのに」

ふつと息を漏らして椅子の背もたれに体重を乗せた未来は、言っ
てから恐ろしい想像に襲われた。

もしエミリオがブラックヘアの犯人だったなら、今現在行方不明の杉田は一体どこに消えたと言うのか。あの黒人青年が住んでいた家には誰も監禁などされていなかったし、快樂殺人に溺れる人物が好む類の過激なポルノを匂わせるものは何もなかったのだ。

杉田がとつくにもうこの世からいなくなっているのではないか。

そう考えたくはなかったが、彼女は血が凍りついたかと思うほど
急激に身体中の温度が低くなった気がしていた。

「……まさか、エミリオがブラックヘアの犯人なわけないよね？」
未来が苦しげに胸を押さえ、一呼吸置いてから掠れた声で言った。
「少なくとも、彼のDNAプロフィールはブラックヘア事件の犯人
のとは一致していない」

ウォーリーが首を横に振って、カードが入った4つのビニール袋
を順に隣のジャクソンへと手渡ししていく。

このCVC緊急ミーティングは、未来によって新たに提出された
証拠品が調べられたのち、ただちにクワンティコの本部で行われて
いた。時間は午後7時と若干遅かったが、戦闘チームの全員と特殊
捜査チームのウォーリー、心理分析チームのポールらの主要なメン
バーが雁首を揃えている。

世間を賑わしている凶悪事件の被害者宅から別の事件の被害者の
所持品が発見されるというのは、滅多にないケースだ。このミーテ
ィングはこれからの捜査方針を決める重要なものでもあるため、各
チームの関心も高かったと言える。

他のメンバーが戸惑いを隠し切れておらず、発言の様子がまだな
いことを見て取ったウォーリーが再び口を開いた。

「考えられるパターンは幾つかある。まずは、エミリオが本当にブ
ラックヘアの犯人だったというケース。だがこれはさっきも言った
ように、DNAプロフィールの不一致から、少なくとも彼単独の犯
行だったという可能性は除外できる」

話をしながら、ウォーリーは手元の携帯端末にスタイラスペンで
要点を書き出していた。

電子ホワイトボードに書かれた単語の群れは、会議室にいる者が
持つ端末全てに同じ像を送っている。共有された画面に現れた箇条
書きを読み、その場に集まっている誰からともなく、ほぼ全員が無
言で頷いた。

「次に、ブラックヘアの共犯のケース。これだと、彼が被害者の所
持品を持っていることも、DNAプロフィールが一致しないことも
説明がつかない」

続けられたウォーリーの仮説に、思わず未来が顔を上げた。
ブラックヘアに共犯者がいるなど、今まで考えもしなかったこと
だった。

しかしブラックヘアは、単独犯の犯行にしては手際が良すぎるよ
うに思える面が確かにあった。例えば、被害者の死体を遺棄すると
きは肉付きが良く若い身体を持ち上げねばならず、かなりの筋力が
必要となる。加えて死体は全て街中や比較的目につきやすい場所に
捨ててある一方、遺棄時の目撃者は誰もいない。これも誰かが見張
りに立っていれば、達成することは難しくなかった筈なのだ。

ウォーリーは電子ホワイトボードに書かれたメモの要点にアンダ
ーラインを引き、残る可能性について言及し始めた。

「そして、彼はブラックヘアと全くの無関係だが、たまたま被害者
の所持品を手に入れたということもあり得る。どこかに捨てられて
いたのを拾ったりして、その後運悪くティアーズの被害者になった
ケースと言えるな」

「運悪くってことなら、他のケースだって全部そうだろ。連続殺人
事件の被害者になるんなら、飛行機事故に遭う何分の一の確率なん
だよ」

ジャクソンが顔をしかめつつ吐き捨て、端末の小さな文字を睨ん
でいる。

彼の隣に座すエマは、無意識のうちに眼鏡を直して小さく溜息を
ついた。

「いずれにしても、エミリオがどうして殺されたかと言うことが一
番の問題よね」

「そう、そこが一番重要なんだ。ティアーズの犯人は何故、エミリ
オを殺さなければならなかったのか。あるいは殺したいと思ったか
だ。エミリオについては、他の被害者とは明らかに違う点がある」

大きく頷いて、性格分析担当のポールが声を少し大きくした。

「違う点って？」

死体をあれだけ傷つけているのだから同じではないかと言いたげ

に、未来がポールの方を見やる。彼は伸び放題で艶がない金色の前髪を指先で梳きながら、電子ホワイトボードの画面を見つめていた。「まずは人種について。黒人の被害者は初めてだし、ゲイということもそうだ。それに、死体が遺棄されてから発見されるまでの時間についても、ここまで短いのはやっぱり初めてだ。現場の写真からも、今までより随分と雑な印象を受ける」

そこまでは顔を上げず独り言のように言っていたが、ポールは視線だけを上げてぐるりとメンバーの顔の上を一巡させた。

「恐らく犯人にとって、エミリオは本来の獲物ではなかったんだろう。何か突発的な事態が発生して、どうしても殺さなければならなくなつたのかも知れない。だから死体を捨てる場所もあまり選択の余地がなくて、比較的にわかりやすい場所にせざるを得なかった」

「その突発的な事態に、ブラックヘアの被害者が持ってたカードが絡んでるといふことなの？」

エマが投げかけた疑問は、皆の胸の内にも至極当然な流れとして浮かんだことであるが、ポールの言葉は曖昧だった。

「それもありえなくはない。しかし、全くの無関係である可能性だってある」

「要するに、はっきりしないってことだ。今の段階でまだ、どうこう言える話じゃない。何せ、ティアーズの犯人とブラックヘアの犯人を結びつけるものは何もないんだからな」

不足している説明をウォーリーが補い、電子ホワイトボードに書き込んだブラックヘアとティアーズのコードネームの間に赤い線を引いて、二つの凶悪事件を隔てる。

別々の大きな事件が証拠品で接点をもたらされるなど、確率の話で言えばどれだけ低いかわからない。それでもFBIは推理に頼った捜査をするのは論外で、物理的、科学的にその証拠に関連があると断定できなければ、事件同士を結びつけて考えることは、単なる道筋の一つでしかなかった。

事実は恐らく、今ウォーリーが挙げた3つのケースのうちのいずれ

れかだろう。とは言っても、取るべき道がどれなのかを示す確かな道しるべはまだ霧の中にあり、誰もそこまで辿り着けてはいない。

不確かな考えを表すことを嫌うチームメンバー全員が、電子ホワイトボードを睨んで口をつぐむ。

僅かな沈黙が声を発する空気を奪い、重い空白がたちまち会議室を支配した。

未来には一つ心に引つかかっていることがあったが、それはこの場にいる他のメンバーも同じく最も疑問に思っているであろうことだと思われた。それがあまりに単純な発想のため、皆口にするのを憚っているのだろう。

これ以上閉塞が続くのを嫌った未来は、確認を兼ね敢えてそれについて触れることにした。

「ブラックヘアとティアーズの犯人が、同一人物だっていう可能性はないの？」

ぽつりと響いた彼女の声に、はっきりと反応を示すメンバーはいない。

誰も言葉を継がないことを読んでから、未来はもう少しはっきりとした口調で言った。

「ブラックヘアの犯人は、明らかなゲイなんでしょう。それならエミリオを騙して口説くのだって容易かっただろうし、彼が被害者のカードを持っていたことだって説明がつくよ」

「それは俺も考えた。エミリオは偶然、ブラックヘアの犯人に接触した。そこであのカードを手に入れて、運悪く気づかれた犯人にティアーズの被害者として始末されたって筋書きだな」

ジャクソンが顔を上げ、未来の方を向いて頷く。

「しかしそれだと、エミリオの体内に残っていたDNAの型が違うことの説明がつかないだろう」

「奴は男相手に売春してたんだぞ。他の客のが残ってたっただけかも知れねえじゃねえか」

そして意を唱えてきたウォーリーに、もっともな理屈で反論した。

ジャクソンも、釈然としないもやもやとした気持ちを胸にずっとしまっていたのだろう。

「確かにこのケースでは、エミリオの体内に残っていた精液が誰のものかと言うのは、さして重要じゃない」

そこでポールが同意の意見を挟む。

「が、次に彼の口から出たのは、やはり一同が想定していた考察だった。」

「ティーズとブラックヘアの犯人が同一人物だとすれば、一番しつくりくる。しかし残念ながら、それは恐らくありえない」

「どういうことなの？」

さして気を悪くした様子は見せず、未来はだらしない外見の同僚に話の続きを促した。

「ティーズとブラックヘアは、犯行の個性が全く違うんだ。同じ思考を持った者の犯行である可能性は、極めて低いと言わざるをえないんだよ」

ポールが摘んだペンの先が、電子ホワイトボードに書かれた2つの事件名を何回も往復している。かと思うと、彼はティーズの頭文字を集中的につつき始めた。

「何度も説明してるけど、ティーズの犯人は恐ろしく慎重な人物で、全く証拠を残さない。今回のように一見雑に見える犯行でも、これといった手がかりはまだ発見できていないんだから」

次いで、つつく対象がブラックヘアの頭文字に移る。

「一方ブラックヘアの犯人は体液もあれば、被害者の肌から部分的な指紋すら検出されている。自分の正体を知られることに無頓着な無秩序さがあるんだ。両方とも異常性欲に駆られた人物の犯行であることは間違いないけれど、この二つは他に共通するところがない。共通の物的証拠でも出ない限り、同じ人間が犯行をやったのけているとはとても言えないんだよ」

ポールのもつともな見解に、今度は未来が反論した。

「けど、被害者のカードにはエミリオの指紋しかなかったじゃない。」

そんなの、犯人がカードを手に入れてから丹念に拭いて保管してた
としか思えないよ。ブラックヘアの犯人だって、綺麗好きでまめな
奴だって言えるんじゃないの？」

他人から奪ったカードの指紋を拭き取るなど、普通に考えれば常
軌を逸した行動のはずだ。犯人はある種の潔癖性だと言つてもいい。
そう顔に書いてある未来だったが、ポールにまたもあつさりと返
されてしまった。

「無秩序犯にも他人に理解できないルールを作つて、戦利品に偏執
的にこだわる奴だつている。恐らくブラックヘアの犯人はそういう
タイプなんだろうと、僕は考えてるんだ」

「それに、エミリオがブラックヘアの共犯だったケースでも、うま
く説明をつけることはできる。我々は常に、あらゆる可能性を考え
なければならぬ」

ウォーリーが再び手元に戻ってきたカードを取り上げて、ポール
に続く。

あらゆる可能性を考慮するというのはFBI捜査官全員の口癖だ
が、今日ばかりはそれを繰り返すウォーリーのことが未来にとって
一層鬱陶しかった。

「俺はエミリオがブラックヘアの共犯だったという可能性が、一番
濃いように思えるけどな。主犯の近い位置にいなけりゃ、少なくとも
も被害者の所持品は手に入らなかつた筈なんだから」

片手でスタイラスペンを弄んでいたジャクソンが、頬杖をついた
まま皆の顔に視線を巡らせる。

「エミリオは、PMOVカードをガレージの中に隠してたんだろ？
ということ、モノの重要性はわかつて、そんなところにしまつ
ておいたんだと思つていいわけだよな。普通、他人のポイントカー
ドなんか役には立たないんだから。換金できるわけでもないし」

確かに彼が言う通り、カードは埃で覆われたガレージの隅に置か
れた工具箱から発見された。他人に見つかることを恐れていないの
なら、そんなところには入れておかないだろう。

ジャクソンの指摘に暫し考え込んだポールが、別の仮説を持ち出そうとした。

「もし彼がブラックヘアの共犯だったんなら、気が変わって主犯の奴をゆするうとしていたのかも知れない。被害者のカードは、その取引のために隠した可能性もある。自分は脅されて協力させられていたとか、警察には何とでも説明できるしね」

ポールが頭を軽く振って呟くと、ぱさついた金髪同士が擦れ合う乾いた音が未来の耳についた。

彼女はやや論点がずれてきたことに、戸惑いを感じ始めていた。

エミリオはランチエスター捜査官の情報提供者であり、たまたま手に入れた貴重な証拠をランチエスターに高く売ろうとしていたであろうことは、多分間違いないはずだ。ここですますます外れた方向に話が向かう前に、軌道修正を図るべきだろう。

彼女が知っている事実は、隠しておくには重大すぎるものだったのだ。

「エミリオは、FBI捜査官の情報提供者だったんだよ」

努めて静かで平坦に告げられた未来の一言であったが、それでも周囲の空気を一瞬固めた。

人間としての無意識の行動なのだろう、一同の視線が意外すぎる言葉を発した未来へと一気に注がれる。

「……何だと？」

すぐに小さく咳払いをして自分のペースを取り戻したのは、ウォーリーである。続いて我に返ったジャクソンが、荒い口調と共に身乗り出した。

「本当かよ。一体誰の？」

「私が秋までいたフレデリックスバーグ駐在事務所の、ランチエスター捜査官だよ。カードは多分、彼に見せるために隠しておいたんだと思う」

「あのクソガキ、そんなことを今まで黙ってやがったのか」

ランチエスターが差別的な暴言を繰り返していたのを思い出したのか、ジャクソンはやや興奮気味のようだった。

「そう言えば、彼に不審な点があると言ったのはお前だったな」

自らの記憶を探っていたウォーリーが未来の顔を改めて見ると、彼女は頷きつつも申し訳なさそうに肩をすくめた。

「早く伝えなくてごめん。けど、ランチエスターもエミリオがカードを持ってたことは知らなかったみたいなんだよ。もし知ってたんなら、私たちを出し抜くつもりでもっと積極的に動いてただろうし。カードが私に届いたのも、今日になってからだったしね」

ウォーリーの鋭い視線を受ける我が身と態度とが、限りなく弁解がましく思える。

この期に及んでエミリオとジェイコブの関係を暴露する気にならないのは、我ながら不思議だった。

未来はこの世に実に様々な愛の形が存在することを知っており、興味はなくとも認めてはいる。

下手をすればFBI捜査官としての自分を失いかねなかったジェイコブの行動は、エミリオのことを深く思っていてこそのものだ。故に、ジェイコブのことを心底から憎み、嫌悪する気にはどうしてもなれないでいたのである。

「だから、死体発見現場でもあんなにびびってたのか」

「ランチエスター捜査官からも、話を聞く必要があるな」

死体発見現場で見たランチエスター捜査官の行動を思い返しているらしく、ジャクソンとウォーリーがぶつぶつ呟いている。幸い彼らの中では、エミリオとランチエスターの間柄は情報の売り手と買い手、ということとで完結したらしい。

しかし、ここまで事情が割れているのだ。今後はエミリオの身边に徹底的な捜査の手が及ぶのだから、彼の収入源の一つであり、一番親密だったランチエスターも対象とならないわけがない。死亡推定時刻にはつきりとしたアリバイが証明されれば早々に疑いは晴れるとしても、彼がゲイだということは情報としてCVCや地方局に伝わってしまうだろう。

遅かれ早かれジェイコブは、ヴァージニアから遠く離れた地方局に異動になるか、退職せざるを得なくなるかも知れない。

未来には、何とも後味の悪い結末になりそうな予感がした。

「そう言や、ブラックヘアの犯人はカードを取り返そうとはしなかったのかな？」

ふと気づいたジャクソンがまた新たな疑問を唇に上らせたが、ウォーリーは否定的だった。

「取り返そうとしたかも知れないし、そもそもカードがなくなったことに気づいていなかったのかも知れない。何とも言えないな」

「もし共犯だったんなら、エミリオの家が荒らされてもおかしくはなかったんじゃない？あの家の状態じゃ、誰かが上がり込んで引き回してもすぐにはわからないと思うけど。それに、ブラック

ヘアの犯人の指紋は見つかってないんでしょ？」

未来は搜索時の荒れた小さな一軒家を思い出し出していた。

汚れたフローリングに雑誌や衣類が散乱し、開きかかっている引き出しやドアさえあったのだ。エミリオの生活自体が相当だらしなかつたのだろつが、あれでは空き巣が入つたのではないかと勘違いされても不思議ではなかつた。

「手袋をつけていた可能性はある」

「いや、ブラックヘアの犯人は証拠を残すことを気につけないんだ。それはないだろう」

今度は、ポールがウォーリーの言葉に首を横に振つた。

「でも本当に、エミリオが共犯だつたのかしら？」

「今の時点では、あくまで可能性の一つに過ぎないだけだ。そこだけに固執するのはタブーだろうな」

再度自らの考えに耽り始めているジャクソンを尻目にエマも疑問を口にするが、ウォーリーの姿勢は相変わらずだ。

「鍵になるのは、このPMVカードだ」

と、ウォーリーの隣に座っているポールが、カードの入つたビニール袋を勢いよく摘み上げた。

「ブラックヘアの犯人は何故免許証や装飾品でなく、これを戦利品として選んだのか？奴は、これに何か特別な思い入れがあることが、そこに見て取れるんだ。このカードに深く関わる仕事をしていたり、日常的によく目にする場所にいたんだろう。犯人はカードの発行会社や取り扱い元、これを使える店にいた可能性が高いと思う」

特殊捜査チームを預かるウォーリーは、ポールの見解を耳にして腹を決めたようだ。鋭い眼光で一同の顔を一通りさらい、しかし落ち着いた調子は崩さないまま言つた。

「これ以降のティアーズの捜査では、エミリオの身边を徹底的に洗おう。俺たち特殊捜査チームと戦闘チームは、彼が最後に取つた行動まで全力で調べ上げる。必ずどこかで、彼は犯人に接触していた筈だ」

「了解した。頼んだぞ」

今まで一言も発しなかった戦闘チーム責任者のマックスが、皆に異論がないことを瞬時に読み取ってウォーリーの方針に同意を示して見せる。

このミーティングは、もともとティアーズで発見された証拠の扱いを検討するために開かれたものだ。

が、押収されたのがブラックヘアの被害者のものであったという奇妙な状況となると、必然的にその件についての話も出てきてしまう。ブラックヘアは本来戦闘チームの担当ではないのに、メンバーの一人が被害者となっている可能性があり、その恋人もチーム内にいるという複雑さだ。

かと言って、担当範囲の棲み分けが曖昧だと後々面倒なことになりかねず、一方で純粋な戦闘担当部隊があまり捜査の前面にしゃしやり出るわけに行かない。ウォーリーが決定した方針は、戦闘チームを今後もまともに動かすことを望んでいたマックスの思惑とも、見事に一致していた。

「そしてブラックヘアでは、このカードが使える店も全て調査しなければならぬ。被害者がこれを使ったのはいつ、どこなのか。その周辺で不審な人物が目撃されていなかったか。勿論、店のオーナーや店員も調べていこう」

ウォーリーは次にポールにだけ視線を向けてから言うと、徐に立ち上がった。

P M Vカードを入れた証拠品袋とハンドターミナルを手にした彼に、戦闘チームの皆も倣う。

立ち上がったから椅子を元の場所にきちんと収めた未来だったが、どこか視線が定まっていなない。

彼女の脳裏には、大柄で粗野な白人の男の姿が描かれていた。

ラルフ・バーンス。

恋人だったソフィーにつきまとい行為を繰り返している、どうしようもない男だ。

彼については殆ど何もわかっていない。わかっているのは、ソフィーにティアーズで使われている人形を渡したということと、エミリオが殺害される少し前からストーキングも鳴りを潜めているということだけだ。

彼は確かロボットに頼らないで作業できるのは自分くらいだ、と威張っていた。

そう言えば、彼は一体どこで働いているのだろうか？

ロボットを使わないと豪語していたのは、操縦ができないと言う意味で言ったのではないだろう。あんな鉄の固まりなど自在に操れるが、そんなものを使わなくて済むほど腕力があると誇張していたのである。

ロボットを力仕事に使う場所は何種類もあった。工事現場や建設現場、工場、大型のスーパーの倉庫でも、荷の上げ下ろしに使っているところは多い。

そして、ティアーズの被害者はロボットのアームで身体をねじ切られている。彼らには玉ねぎやキウイの皮、クッキーのかけらといった食品のかすがくつついていて、そういったものは主にスーパーの倉庫に山積みされている類の品々だ。死体遺棄現場に残されているジューン人形も、多少規模の大きなスーパーであれば置いている。

ラルフは状況だけで言えば、未来の中で極めて怪しい人物であることは間違いない。

しかし、彼が一体どこでエミリオと接触し殺害に至ったのか、まるで見当がつかないのも事実であった。普段あれだけソフィーに固執している男が、同性相手に売春している黒人青年を狙うなどとは考えにくい。

連続殺人犯は似たようなタイプの被害者を獲物に選ぶ者と、誰でも見境いなく手当たり次第に殺す者とがいるが、ティアーズは後者に当たる。ラルフの今までの言動を見ると、彼の気質はどちらかと言えば前者に近い。

未来が周囲の協力を得て令状を取ることを躊躇うのは、どうしてもそこで引つかかっているからだっただ。

「……だから、お願いね」

突然エマの手に肩を触れられ、未来はぎよっと身体を固くした。

「え？」

「明日の朝にテストするから」

未来は慌てて妙齢の白人女性の顔を見上げたが、穏やかな青い瞳からは何のことを言っていたのかまでは読み取れない。

「えっと……ごめん、聞いてなかった。何の話？」

「特殊通信のテストよ。前からやるって言ってたけど、やっと準備が整ったから」

話を聞き漏らしていたことを素直に謝ると、エマが特に声を荒げることもなく説明してくれる。

それを耳にして、未来はCVCに來た直後から特殊通信装置のテストをやるという話があったことをようやく思い出した。

特殊通信は、未来がAWPにいたときに追加実装されたものだ。

脳の言語野に埋め込まれた小さな送受信器を通し、言葉さえ声に出せば彼女と音声通信が取れる便利なものである。これは全通信手段が絶たれた状況下でも外部と情報のやりとりができることから、非常に有用な機能の一つだ。が、杉田が行方不明になって以来は遅々として準備が進んでいかなかったのだ。

彼が忽然と姿を消した影響は、自身の身体にすぐ現れてくる。

その事実を突きつけられ、未来の胸はちくりと刺されたかのような痛みを訴えた。

「お前、耳の調子が悪いのか？俺にだってちゃんと聞こえてたっただのに」

彼女の表情に微かな翳りが浮かんだことに気づいたのが、ジャクソンがすぐに茶々を入れてきた。ちりちりの短い黒髪に覆われた自分の頭を人差し指でつつき、笑顔を作って見せる。

「どうせまた、何か考え込んでたんだろ。あんまりばやっとしてる

と、犯人が目の前を通っても取り逃がすぞ」

「ミキやジャクソンが、ただの人間を逃がすわけないじゃないか」

「トリスの言う通りだよ。私たちに勝てるのなんて、バイクか車くらいじゃない」

先の会議で発言する機会に恵まれなかったトリスがすかさず反応すると、未来も彼に同意した。

「そう。ティアーズの犯人と予測されるような、大型ロボットに乗った人間が相手でも大丈夫だろう。十分、素手でも戦えるよ」

未来が同調したことに満足感を覚えたらしいトリスが何度も頷くと、首についた肉に顎がめり込んで深い皺ができる。

彼は自分のオフィスにこもっては武器製作と研究に没頭し、食事は全てデリバリーに頼るといふ有様だ。おかげで20代なのに見事な太鼓腹で、エマからの警告が毎日の挨拶代わりになるほど血糖値と中性脂肪の数値も高かった。

しかしピザとフライドチキン、山ができるほどの砂糖が溶けた炭酸飲料にまみれた生活を送っていても、当の本人は一切ストレスを感じていないのが現実だ。彼が自分の身体のことと嘆くときがあるとするば、どんなに緻密な作業でもこなせる指先か、大好きなカートゥーンのことを考えられる脳を失った時ぐらいだろう。

「そう言えば、対ロボットの戦闘訓練プログラムを組むって言うてなかったか？」

ジャクソンが楽しみにしているらしい予定について触れると、トリスは困ったように笑った。

「まだ具体的な日にちが見えてこないんだよ。予算の承認がなかなか下りなくてね」

「中古のロボットを安く買って改造するって言うてるのに、相変わらず上の連中はケチなもんだ」

呆れたジャクソンが軽く宙を仰ぎ、ため息をついた。

年齢が近いことと、お互いに陽気な質なのが手伝っているのだろう。ジャクソンとトリスは、妙にうまの合う間柄であった。

「それでも、今現在流通してる中で一番パワーがあるのにしたんだ。まあ、この手続きで隊長にはいつも通り泣いてもらってるけどね」

「あの隊長を泣かせてるの？」

トリスの思いもかけない話に、未来が驚いた顔を見せる。戦闘チーム責任者であるマックスの鉄面皮が困って冷や汗をかいているところなど、彼女にはどうしても想像できなかった。

しかもトリスの語るところでは、命令など意も介さずに要求を通すのが日常茶飯事だと言うではないか。それも当然、隊長が泣く子も黙るエリート部隊であるHRT出身と知ってのことなのだ。

彼のマイペースぶりには、改めて舌を巻く思いである。

会議室に残っている他のチームメンバーからトリスに注がれる視線は、感心よりも呆れの方が強かったが、本人は都合が悪い解釈を通さないフィルターをかけているらしい。

胸を張ったつもりが丸々とした腹を突き出した格好ではあるものの、トリスは自信たっぷりで、しかし邪気のない笑顔をたたえていた。

「おかげで、あいつは人の話を聞かない奴だつて言われてるよ。でもまだ僕としてはロボットの性能が足りないと思うから、そんな装備で大丈夫かって返したいくらいさ」

「そういうところは、CVCの中で貴方になう人材はいないわね」毛玉だらけのネルシャツが包んだ腹を見て、エマが苦笑する。

「僕はFBIーのオタクなんだ。自分で譲れないと思ってるところは、絶対に妥協しないよ」

「トリスはきつと、まだ日本にいる私の同僚と話が合うよ」

オタクという表現で未来が真つ先に思い浮かべたのは、遠く太平洋を隔てた極東の地に残っている元アメリカ軍人、田原隆三ことリユ一の姿である。彼がどういう経緯で二次元にかぶれるようになったのかは知らなかったが、何と言っても元アメリカ人なのだ。きつといい仲間同士になれるに違いないだろう。

「ああ、元フォース・リーコンのミスター・タハラだろ？僕も早く

会ってみたいと思ってるからさ、次に話す機会があったらそう伝えておいてくれよ。是非日本とアメリカのカートゥーン文化についてじっくり語り合いたいんだ。僕が好きなのは主に1980年代に発表された近未来を舞台とするSF作品郡で、その頃にジャパニメーションって……」

自分の得意分野と踏むと、束ねた言葉を機関銃の如く乱射するのがオタクという人種である。トリスもその例に漏れないのだと皆が嫌な予感に顔を引きつらせた瞬間、ジャクソンが割って入った。

「それにしても、この小さな部隊に日本とアメリカのオタクが2人か。世間は狭いつてのは、本当だよな」

「でも、僕たちオタクは今や様々な分野で活躍する人種なんだ。みんな子どもの頃に見た作品を実現させようって、頑張ってるんだからね。すごいと思うだろ？」

「まあ、そういう発想は大事だと思うわ」

トリスの分野に話が戻らないよう、今度はエマもジャクソンへ助け船を出す。

「そう言えば、ジャクソンとミキにはサイボーグの利点を活かした捜査をやって欲しいと、僕は常々考えてたんだ」

そこで不意に話の矛先が自分たちへ向いたことに、未来は少々面食らった。

「サイボーグの利点？」

「そう。主に君たちが持っている、人間よりもずっと優れた感覚器を活用した捜査だよ。もうミキは相手の心音から心理状態を探ったりとかしてるけど、今後はそういうことにもっと注目すべきだと、僕は考えてるんだ」

「ああ、そういうことか。確かに私もそのことが考慮されて、軍事用から保安用になってるからね」

トリスの話に納得した未来が頷いて、電極が内蔵されている両手を無意識の所作で軽く握った。

「だったら話は早い。ミキはこれからの捜査でどこかに行くときは、

常に聴覚の感度を上げておくようにしてみなよ」

話に夢中になっているトリスが勢いこんで、未来に詰め寄ってくる。太い身体が目の前に迫ってきた圧力に引きつつも、彼女は話を何とか続けた。

「それはもうやってるけど……だから、ランチエスター捜査官の行動がおかしいことにも気がついたんだし」

「今は、ミキが怪しいと思った時だけそうしてるんだろ？そうじゃなくて、捜査のときはいつも高感度にしておくってことだよ。特に、事情聴取に行く場合なんかはね。犯人が近くに隠れてることだってあり得るんだから。それに今回みたいにロボットが関係してる場合は、僅かな駆動音だって拾えるわけだし」

相変わらずトリスの鼻息は荒い。

彼が言っていることはもっともだ。

アカデミーの教官の昔話からしても、犯人の家族に聴取を行った時、家の中にその張本人が匿われていたというのはよくあるケースなのである。

そして特にロボットの駆動音まで聞き分けるといえるのは確かに前例がなく、サイボーグの卓越した聴覚を以て、初めて可能になるとだ。やってみる価値はあるだろう。

しかしまだトリスに対して引き気味の未来は、素直にやるとは言えなかった。

「あんまり感度を高くしたまましていると、かなり疲れるんだけどね」

「でも、是非やってみてくれないか？初めて行く場所でも、周囲の音からかなりの情報を拾えるようになると思うんだ。僕はそれを実証してみたいんだよ」

「わかった、やってみるよ」

やはりまだ後ずさりしたくなる気持ちを抑えて、未来はようやくよく頷くに至った。

白いシンクに溜まった水は暫く手を浸していると痺れてくるほど冷たく、今が冬なのだと指先に思い知らせてくれる。

その透き通った中に何本も浸され、天井から下がる薄いオレンジ色の白熱灯の明かりに照らされた紫のアネモネは、本来ならこの時期の花ではない。しかしこの可憐な面影を見せる花の美しさが、冷えた水で削がれてしまうことは微塵もない。むしろ自信に満ちて凜と咲き誇っているようにさえ見える姿は、茎を鋏で切る杉田の心にも清らかな光を投げかけてくれるような気がした。

今杉田が手にしている紫のアネモネとかすみ草、安っぽい園芸用の鋏だけが、彼に与えられた精神安定剤だった。

凶暴な男に拉致されてすぐに陽の光すらない場所に監禁され、とつくに日付の感覚は狂ってしまった。この狭いトレーラーハウスのベッドルームに場所を移されてからも、どれぐらい時が過ぎたのか皆目見当がつかない。

自分に銃を突きつけて捕らえ、陵辱を幾度も繰り返してきた男。

暴行及び誘拐犯である白人の男の態度は、徐々に軟化してきていた。恐怖に心を縛られた杉田が逃亡する気をなくし、完全に屈服したと思っているのだ。

彼はことあるごとに杉田をいつでも殺す準備があると脅し、犯し続けたきたのだから、そう考えるのも当たり前と言えばそうだろう。その上彼は自分がアジア人男性連続殺人事件、つまりFBIではブラックヘアのコードネームを与えられた事件の犯人であることをほのめかしていた。

「今までにやった奴の中で一番良かったのは……名前は何て言ったか忘れたが、ちょっと体格が良くて、営業成績が会社でもトップだと抜かしてた奴だった。大口叩いてやがったくせに、軽く縛り上げてぶち込んでやったら、ガキみたいに泣いて喚きやがる。死体を捨

てる時、ついでに奴の鞆にあつたボールペンを何本もケツに刺して
いてやったんだ。だらしなくクソを垂れてる格好は、今思い出して
もスカツとする」

ある時ビールを片手にした男が薄笑いを浮かべて語ったのは、身
の毛もよだつ話だった。

今年8月に死体が発見されたハンク・ナカノのことだと、杉田は
すぐに察した。

既に杉田が犯罪科学研究所でDNA分析を担当していた頃に発生
した事件だったため、腐敗しかけた死体のDNA分析を、杉田自身
も一部担当したのである。

一連の事件についての報道は世間の混乱を避ける目的で、被害者
の死の詳しい様態はどのメディアにも情報を開示していない。なの
にこの男は、ハンク・ナカノの肛門に異物が挿入されていたことと
それが何であつたかということまで知っているのだ。

もはや彼が犯人であることについて、疑いの余地もない。
が、その裏に見える狂気は到底理解できないし、理解しようとも
思わなかつた。

何故、黒髪の若者だけを狙うのか。

何故、死体にわざわざ眼鏡をつけさせるのか。

何故、そこまでの暴力をぶつけ、相手を貶めなければならないの
か。

これらのことは、まさに事件の核心である。迂闊に触れようもの
なら瞬時に大爆発を引き起こしかねない、気化したガソリンのよう
なものだろう。

触れない方が賢明だ。

地獄の底にくすぶる陰鬱な炎を思わせる影がうつろう瞳の奥など、
覗き込みたくはない。彼の目を間近に見返すことはあつても、杉田
はそこに籠絡されないよう必死に自らを奮い立たせていたのだ。

それだけに、精神的に疲労もする。監禁場所が埃まみれの冷えた
地下室よりずっとましになつてはいるが、自らの消耗は激しいよう

に感じざるをえない。

自然と、杉田の口から小さな溜息が漏れた。

嫌なことを考えて無意識のうちに硬くなっていた肩から、ふっと力が抜ける。

同時に視線を巡らせると、彼の正面にある鏡の中からこちらを見つめる顔があることに気づいた。杉田の細い身体をざわりとした戦慄が走り、心臓が一瞬震え上がったかのような感覚が突き抜ける。

肩越しで暗い空間に浮かび上がっていた顔がいきなり大きくなつたかと思うと、だしぬけに毛むくじやらの太い腕が背後から伸びて、上半身に絡みついてきた。汗臭く濃い体臭が、むっと鼻をつく。

背中から抱きすくめてきた男は、杉田の耳元に唇を寄せて囁いた。「最近お前が活けるのは、同じ花ばかりだな」

粘つく痴情を孕んだ吐息に首筋をくすぐられると、嫌でも思い出すのは激痛を伴う陵辱のことだ。杉田の心が黒い恐怖で覆われ、悲鳴を上げそうになる。

空気の塊とともにその衝動を胸の中に吸い込んだが、幸い男はこの反応に気づいていないようだった。

「僕は、この花が一番好きなんだ」

与えられた薄手のシャツの下にある若い医師の肌は、冷や汗で湿り火照っている。彼が媚びた声色で腕を絡ませ返してきたことから、男はそれも劣情のためだと勘違いしてくれたのだろう。

「その花なら、大体いつも俺の店の生花売場に在庫があるからいい。だが、他にも好きな花はないのか」

「気になる？」

杉田は男に都合のいい思い違いを継続させるべく、甘えた表情を作って返す。

この男は未だに名前すら教えようとせず、ブラックヘアの犯行以外は一切の過去を語ろうともしないが、そうする理由は、杉田に情が移らないようにしているからに他ならない。いざというとき躊躇せず殺せるよう、感情を抑えているのである。

男が完全にこちらに心を奪われてくれればやりやすいが、そうすれば今度は杉田自身が男に共感しないことが難しくなる。この状況を受け入れて男の存在を認めてしまい、最悪、本当にここから逃げ出す意志をなくしてしまうかも知れない。

普通であれば連続殺人犯を認めるなどありえないが、捕らわれの身となれば事情は全く異なる。そのような極限状態では、敵対者に親しみを持った方が生き残りやすい。

そう判断を下すのは自らの意志と無関係な、命を長らえるために存在する反応である。

生存本能に基づいた自己欺瞞的心理操作、俗に言うストックホルム症候群だ。

今の杉田が、何よりも恐れている変化である。そうならないためには従順になり過ぎず、危険をぎりぎり回避できる接し方を見極める必要があった。

この微妙なバランスを崩さないことこそが、助かるための鍵となる。

そう自分に言い聞かせた杉田にとって、男が次に口にした言葉はある意味ほつとできるものだった。

「別に。俺が興味があるのは、自分のことだけだ」

「僕のことだって、興味があるんだろ？でなきゃ、そんなことを言うわけがないんだから」

不敵な顔を作り、生意気に言ってみたつもりだった。

杉田を抱いていた両腕が突然解かれ、乱暴に彼の顎を掴んで強引に振り向かせられる。上半身に回されていた片腕が、杉田の腰をがっちり押さえ込んでいた。

「暫く生かしておいてやったら、偉そうな口を叩くようになりやがって」

何を考えているか読めない表情に低い声を乗せ、男がぐつと顔を迫らせる。

赤茶色の髪と同じ色の無精髭を生やした、彫りが深くて男臭い顔。

緑がかった、明るくも淀んだ瞳。

杉田に逃げ場はない。

胃がぎゅっと締め、痛みと吐き気さえ訴えてくる。

しかし杉田は身体が硬直したことに逆らわず、目をそむけなかった。ゆっくりと腹で息をし、恐怖で乱れた呼吸だけを整える。落ち着き払ったふりをして、アンドリューの目を正面から見返して見せた。

「僕が間違ったことを言っただけで言いたいのか？」

「いや、違っちゃいねえさ」

思っていたより強気な態度に不意を突かれたのだろう。

杉田を捕まえたまま、男が薄く笑った。

「ただ、ますます虐め甲斐がある奴になったと思ってるだけだ」

「ありがたいね。その分だけ、僕はまだ生きていられるってことなんだから」

杉田の声は、自身でも驚くほど乱れがなかった。男の挑発を受けても揺るぎがない心が確かに在ることが、更に一歩進む強さを与えてくれたようだ。

「それに、花のことは僕のもう一つの専門分野だ。彼女のご機嫌を取るのにも、これ以上価値がある人間はいないと思ってるんだけど」

濃厚で滅多に怒りを露わにしない杉田が嫌味なほどの自信をちらつかせると、この状況では相手の神経を逆撫でするだけだ。が、そうとわかっていて、彼は敢えて鼻持ちならない態度を崩さなかった。男がにやりと笑う。

彼がもう片方の手で眼鏡を掴み取った時は、流星にびくつと身体が震えた。

「自分の立場つてものを、よく弁えてるじゃねえか。やっぱりお前は面白い奴だよ。簡単に手放すわけにはいかねえな」

男はむしろ、杉田の控え目な反抗を楽しんでいるようだった。

そして杉田が拒む暇も許さず、噛みつくように唇を奪う。

男の熱い舌が強引に杉田の歯を割って侵入し、未来にしか許した

ことがなかつた場所を蹂躪する。

男二人の吐息と喘ぎが重なった。

逃げることもできない杉田は溢れようとする涙を抑え、屈辱の責め苦に耐え抜く以外の術を持たない。

数十秒が数分にも感じられた後、ようやく男は杉田の顎から手を引いた。

バスルームと隣あつたベッドルームに向かう筋肉質な男の後ろ姿を、虚ろな杉田の視線が追う。その黒い瞳がふと、握ったままだった園芸用の鋏に留まつた。

自分が心の安定のためにすぎる小さな刃が、電灯の光を受けてきらめく。

表情を動かさず、筋肉の流れも意識しない。

杉田が男の背に鋭い先端を振り翳したのは、ごく自然なことだ。

そう見えてしまうほど、彼の動きには無駄がなかつた。

だが、刃先が振り下ろされた先は己の手首だつた。真新しい鋏の突端が、静脈が透けて見えるほど白い手首に食い込む。

金属の冷たさと痛みが神経に伝わつた瞬間、杉田の理性がそれ以上の自己破壊を阻んだ。

この場で男を殺して脱出することなど、非力な自分で叶えられるわけがない。それどころか、下手に反抗すれば、精神が破壊されるほどの虐待が待っていることは間違いない。

それに何より、自分が死んでも何の解決にもならない。

今できる最大限のことは、生き続けて救出を待つこと。

そして、アジア人の若人を何人も毒牙にかけた犯人の事実を世間に知らしめ、裁きの場で罪に相応な法の鉄槌を喰らわせることなのだ。

杉田の内なる声が衝動を押しとどめ、鋏の先は皮膚に僅かな窪みを残したところで持ち替えられた。

今ここで軽はずみなことをしては、未来を裏切ることにもなってしまう。それに犯人に身体を踏みじられても、心までは決して渡

したくない。

杉田を今まで支えてきたのは、この強い二つの思いがあつてこそだ。

負けるわけにはいかない。

「で、君はいつ僕の友達を連れてきてくれるんだ？」

彼の口からこの問いが出たのは、未来のことがふと頭に浮かんだからである。何気ない口調での問いかけは、凶悪犯である男にとつても他愛のないものだったようだ。

「もうすぐだよ。仕込みに時間がかかつてるだけだ」

男の声が妙に響いて聞こえてきた。ベッドに身を投げ出して、天井を見上げているのだろう。慌てて杉田が銃を置き、ベッドに駆け寄る。そうしないと、すぐ機嫌が悪くなるのだ。

隣に腰を下ろした杉田の顔を見上げた男は、天井を見回す視線とともに考えも巡らせている。その思考が邪悪なものであることを、微妙な色の瞳に冷たく閃いた光が物語っていた。

「お前の友達……いや、妹って言うていいの。警戒心が強くて、なかなか頭も切れる厄介な奴だ。あいつも手懐けるのに苦労してるらしい。しかし、それくらいの手応えがなきゃつまらねえからな」「どうやって連れてくるつもりなんだ？」

いかにも興味をそそられた素振りを見せた杉田の腰に、ごつい男の腕が回される。細い身体が、殆ど力任せにベッドの上へ倒された。「至つて古典的なやり方だよ。あいつの部屋に連れ込んで、眠らせてからこつちへ運ぶんだ。人目の多いところは避けたい」

寝そべつたまま杉田を抱き寄せる男が普通の会話として口にしている話題は、他ならない人間の拉致方法だ。

以前、彼は言ったのである。

「今にお前の友達も、ここに招待してやるよ」と。

それが未来のことであると察したとき、心臓麻痺を起こしそうなほどの衝撃に襲われた。

しかし、サイボーグの肉体を持ちFBI捜査官の彼女をさらうというのが、まさに自殺行為であることに男は全く気がついていない。杉田個人としては、未来を余計な危険に巻き込むことなど避けたいに決まっている。一方で、人間相手の戦闘ならまず負けない彼女がここに踏み込みさえすれば、これ以上の犠牲者を出さずに済むという現実がある。

最愛の者を守りたい気持ちと何もできないもどかしさ、殺人を未然に防げるという希望は、どれもおざなりにできるものではなかった。

が、結局のところ、自分は助けにすぎるしかないのだ、という無力感が一番重く心にのしかかってくる。

自分は大人なのに。
男なのに。

それなのに弱い存在で、何もできない。

こんな状況で自分を責めるなどお門違いだと、頭でわかってはいない。そう自分を納得させようとしても、感情が止められるわけはなかった。

「薬は、僕が処方箋を書かなくてもいいんだね？」

演技のため自分が発する言葉も、まるで他人が喋っているように無機質に感じられる。

杉田は自己嫌悪の悪循環に沈みそうな自分に気づき、とりあえずはそれ以上考えるのをやめた。

「まだ、俺が不眠症だった頃のがたんまり残ってる。この手は何回も使ってるからな。心配せずとも、必ず成功する」

「楽しみだよ。まあ、彼女がここを気に入るかどうかわからないけど」

相手の反応を先回りして言葉を用意し、冷たく微笑むことが出来るようになったのも、杉田には人格が変わっていく課程を押しつけられるように感じられる。

自己否定を繰り返すというマイナスのルーチンワークにいつまで

耐えねばならないのか、未だ見当もつかなかった。

「気に入らなくなつたつて、別に構いやしねえよ。どうせ、すぐにいなくなつちまうんだらうから」

自らの考えを映し、表情を硬くした杉田をリラックスさせようと思つたのだらう。男がやや痩せた杉田の頬を指先でなぞつた。

彼はまだ熱を帯びている感触にぞくりとして、跳ね起きて手を払いのけたい衝動に駆られた。が、暴れようとした反射反応を何とか抑え込むことに成功し、横たえた姿勢を変えずにいられた。

「そうだな。でもその前に、じっくり遊べるさ。僕が保証するよ」
「そこまで言い切るのか」

隣の青年の細かい反応は気にせず、皮肉っぽく男が笑う。捕らえた獲物がそう簡単に懐かないことなど、最初から承知しているのだ。

「何せ、体力は20人前くらいある自慢の妹だからね」

何もかもがお前の思い通りになると思つたら、大間違いだ。

杉田が自分を奮い立たせるために喉まで出かかった言葉だったが、今の彼はそれとない皮肉返しをするのが精一杯だった。

「俺はうるさいのは嫌いだが、お前の妹がどんな声で泣くのかは今から楽しみだよ。ぞくぞくしてきちまうな」

既に手中にある獲物が自分に背くことはないと思つて居る男が、愉快そうな笑みを唇の端に浮かばせる。先に杉田の頬を撫で回していた片手が今は黒い髪を撫でているが、興奮している様子は特に見えない。この後すぐにまた犯されるのではないかと恐れおののいていた杉田の胸の内が、少しだけ軽くなる。

大人しくベッドに添い寝をする黒髪の青年の顔から、ふと男は注意をそらした。

緑がかつた瞳が見つめる先は、隅にある古びた白木のサイドテーブルの下に届いている。

そこに手足がひしゃげた裸のジューン人形が投げ出されていることを、杉田は知らなかった。

未来の仕事用携帯電話が着信を告げたのは、彼女が捜査車両からフデイズ・フィットネスの駐車場に降り立った直後のことだった。コートのポケットから覗いていたストラップを摘み、本体を引っ張り出す。

『ミキ？今、こっちから特殊通信で発信してみたんだけど。聞こえてたかしら？』

通話ボタンを押すなり未来の耳に届いたのは、エマの期待を込めた声だった。だが、未来には今の今まで、車の中では誰の声も聞こえていない。車には音声認識でなくリモコンでロックをかけると、未来は申し訳なさそうに答えた。

「うっん、何も。今話してることは、そっちで受信できてるんだよね？」

『ええ、結構はつきり聞こえてるみたいよ』

「そっか。私はオフィスを出てからスイッチに触ってないし、やっぱりこっち側の問題じゃないね」

未来がフデイズのエントランスを目指し、駐車場を横切りながら事実のありのままを伝えると、エマが電話口で溜息をついたのがわかった。

『そのようね。どうして、そっち側からの一方通行になるのかしら』
手元の端末を操作しているのか、エマの音声にキーボードを叩く軽い音が重なっている。

今朝から何度もこの特殊通信のテストを繰り返しているが、未来からの発信は研究所に届いても、その逆は一度も成功していない。

未来の脳の言語野に直接働きかける特殊通信システムは、日本から持ち込んだ未来の装備では調整が最後に回されたものだ。生命維持に直接響くものでなく、緊急時にしか使用が見込まれなかったため、優先度が低く設定されたのである。加えて、整備作業にさほど

手間を要しない装備だからという理由もあった。

が、それも全て仕組み全体について詳しい技術者、つまり杉田がいればという前提だ。

エマは杉田と同じく優れた医療技術の持ち主だが、流石に初めて触る生体機器についてはなかなか思い通りにはならないのである。

『もう少し設定を変えてから、またテストしてみることにするわ。いきなり意味がない話が聞こえてびっくりするかも知れないけど、勘弁してね』

「私がいけないときにどういいう話をしてるのか、ちょっと楽しみにしてるよ」

珍しく少し疲れている様子のエマに軽く笑って返してから、未来は通話を終わらせた。

携帯電話のディスプレイを確認すると、時刻はそろそろ午後2時を回ろうとしている。テストは朝からずっと続けているようで、消耗気味なエマの様子だとランチもまだなのだろう。

「特殊通信の仕組み自体、実はそんなに複雑じゃないんだ。ただ、モジュールの調整にちよつとしたこつが必要だっけくらいなんだよ」

まだ日本にいた頃、杉田が笑顔で教えてくれたことを思い出す。それも、彼自らが開発した機器であるからこそ言えたのだ。

今はまだ重要度が低い機器の問題で済んでいるくらいだからいいようなものの、もし今の状況で未来の身体に致命的な欠陥が発見されたら、一体どうなるのだろうか？

エマでも、ある程度までの修理やパーツ交換の手術はできる。しかし本格的に対処するとなると、もう一人の担当医である生沢を日本から呼ぶしかない。それも生命の危機に瀕している場合、到着が間に合わない可能性の方が高いだろう。

こんなことにまで影響が出るのだと、未来はこの数日でようやく実感していた。ただ、不思議とそれがさほど恐ろしいこととは感じられない。

先生は多分、生きるか死ぬかぎりぎりのところで戦ってるんだも

の。

もし私の身体の機能に何か問題があっても、先生を責めるようなことは絶対にしない。

先生が戻ってきた時のことを、ちゃんと考えて行動しておかなきゃ。

声に出さず、自分に対して繰り返しそう言い聞かせる未来の拳が握り締められた。今は余計なことを考えず、自分にできることに専念するべきなのだ。自然と、白い吹付けタイルに覆われた建物のメインエントランスに向かう足も早くなる。

久しぶりにこの7デイズ・フィットネスに来たのも、彼女にできることをやるためだ。

杉田と一緒に来ていた頃と何一つ変わらないエントランスの自動ドアを足早に抜けると、明るいロビーと白い床に反射する暖かな照明が、視界に一気に飛び込んでくる。

未来は、愛する男と一緒にいたことを思い出させるソファが並んだ空間から目をそむけ、反対側にあるカフェテリアへとまっすぐ進んだ。

黒とシルバーを組み合わせたカウンターでダイエットジンジャーエールを買ってから奥へ進み、エントランス付近を見渡せる窓側のテーブルにつく。

平日の午後早い時間のためカフェテリアには人もまばらで、閑散とした印象だ。ビジネスアワーを過ぎれば、オフィス帰りに汗を流した男女で賑わうモダンな空間も、随分と寂しげに見える。この時間帯の客は裕福な家で専業主婦になっている女性や、リッチモンドに点在する大学の学生たちが主なのだろう。

未来が高いスツールに腰掛け、店内で控え目に流れている流行のポップソングに耳を傾けたとき、見覚えがある姿が視界に入ってきた。

「ソフィー？」

恐らく見間違っことはない顔を見た未来の声が疑問形になったの

は、大抵はきちんとした身だしなみを心がけていたソフィーが、赤く長い髪をやぼったく顔の周りに垂らしていたせいだ。1週間くらいの間に、急に老けてしまったような印象さえある。

未来の呼びかけに気づいたソフィーは何も買わずに未来のテーブルへとぼとぼと歩み寄って来ると、スツールへ重たげに腰を乗せた。彼女はそれ切り黙ったまま、白いテーブルに映る自分の影を見つめている。

先立って、未来が話を始めた。

「ごめんね、急に呼び出したりして。ここ一週間くらい連絡もないし、ラルフのこともあったから。ちょっと気になっちゃってね。元気だった？」

相変わらず俯くままのソフィーに対して明るく切り出す自分の声が、妙に空々しく聞こえる。まるでソフィーの周りだけ空気が灰色になっているかのように、雰囲気为重苦しく淀んでいた。

「飲み物、買ってくるよ。何がいい？」
「いらないわ」

未来がドリンクが1つしかないことに気づいて立ち上がるうとすると、まだ目を伏せていたソフィーがようやく、首を横に振って呟いた。横顔を覆っていた艶のない髪が動き、カフェテリアに差し込む午後の陽光に頬が晒される。

未来がソフィーの白い顔に異変を見咎めたのは、その一瞬のことだった。

「今の何？ちょっと見せてみて」

返事も聞かず、未来は素早くソフィーの顔に手を伸ばして赤い髪をひと房、持ち上げた。

赤黒く大きな痣が、曇った表情を浮かべる顔の左側面を醜く、悲痛に彩っている。ひどく腫れ上がった頬を見た未来が息を飲む音が上がり、小さな手がソフィーの頬からゆっくりと引かれた。長い髪が再び揺れ、痛々しい顔をふわりと隠す。

「すぐ戻ってくるから、ちょっとだけ待っててね」

一言断ってからドリンクカウンターに向かい、戻ってきた未来が手にしていたのは、ソフィーが以前に注文していた生キウイジュースだった。透明感がある緑色が美しいドリンクをソフィーの前に置き、改めてスツールに座り直す。

「どうしたの、それ？」

できるだけ穏やかに聞いたつもりだったが、やはりソフィーは答えない。見れば、暖房が効いているのに黒いコートを脱ごうともしない肩が、細かく震えているのがわかる。涙を堪えているのだろう。未来が今日この場にソフィーを呼び出したのは、実はラルフのことを探るためだった。彼女を呼び出せば、つきまとっているラルフも引つ張り出せることを期待したのである。

が、ソフィーが顔に痣を作っていたのは全くの予想外だった。

怪我の理由は言わずとも察しはついたが、ソフィーの心を軽くするためにも話は続けるべきだ。未来は気まずさをダイエツトジンジャーエールと一緒に少しだけ飲み下し、穏やかに続ける。

「今、痛くはない？」

無言でソフィーが頷くと、また髪の間から痣が見えた。

ソフィーのかさついて荒れ気味の唇が、きゅっと噛みしめられているのがわかる。

「事故にでも遭ったの？」

未来がもう一度訊ねるが、ソフィーから答えは返ってこない。

「ラルフにやられたんだね？」

「……ええ」

僅かに声を低くし、確認するように未来はソフィーの顔を覗き込んだ。ようやくソフィーが呟いて頷くと、瞳に溜まった涙が頬を伝い落ちた。圧倒的な力の差があることを承知の上で女の顔を殴るなど、ラルフは男として最低だ。彼女も余程恐ろしかったに違いない。未来は知らなかったとは言え、そんなソフィーを捜査に利用しようとしたのだ。ソフィーは親友とまでは行かないものの、やはり良

心の呵責が罪悪感となって、心の中に残っている。

気まずさを感じながらも、未来はできるだけ優しく話を続けた。

「良くないよ、このままじゃ。ソフィー、本当に殺されちゃうよ？」
すすり泣きを抑えようとして不規則に揺れるソフィーの肩へそつと手を置き、未来がテーブルについた肘に体重を乗せて身を乗り出した。

「最初にラルフのことを話してくれたときに、言ってたよね。別れ話をしたら、ナイフを持ち出されて脅されたって」

ソフィーはその問いに、一度だけ頷いた。目と鼻を真っ赤にしているのが痛々しい。

「もう、自分たちの力だけじゃどうにもならないよ。怪我までさせられたんだから、立派な傷害事件じゃない。犯罪なんだよ。わかるでしょ？警察に行こう。何なら、私が一緒に行ってもいいから」

実際にラルフはソフィーに手を上げたのだ。この先、暴行はエスカレートすると見て間違いはないだろう。しかし、今にも立ち上がろうとする未来に対して、ソフィーはスツールから降りる気配を全く見せていなかった。

「警察は、だめ」

弱く首を横に振るソフィーは、まだ涙が止まらないようだった。

またか、というのが未来の正直な感想だ。

これまで何度警察に行こうと言ったかわからないが、ソフィーは頑として聞き入れようとしない。生命の危機も感じているだろうに保護を求めないなど、一般的に見れば認識が甘すぎると言わざるをえなかった。

やれやれ、と溜息を胸の奥に押し込めてから、未来がスツールに座り直す。

「どうして？」

「警察なんか信用できないもの。もう二度と、かわり合いになりたくないわ！」

泣きはらした顔を上げたソフィーがだしぬけに強い口調になると、

カフェテリアの少ない客たちの何人かが彼女の方を振り向いた。が、口論をしているわけではないと悟ると、彼らは再び電子書籍端末や音楽プレイヤーで、自分の世界に戻っていく。

冬の光が斜めに差し込み、全てが長く薄い影をかたどる空間に静けさが戻ってから、未来はソフィーを宥めようと試みた。

「じゃあせめて、家族に相談しなよ」

未来がやや声色を高くして譲歩案を提示しても、これにもソフィーはうんと言ってくれない。再び無力感が身体にまとわりついて、ずっしりと重くなる。未来は今度こそ深い溜息に襲われた。

「じゃあ一体、どうしたいの？」

うんざりしてはいても見捨てはしない、という若い東洋人女性の姿勢が伝わったのだろう。ソフィーは取り出したハンカチで鼻をかみ、おずおずと口を開いた。

「ヨーコだけが頼りなの。女の子の友達は、貴女だけだから」

「でも私だって、結局警察に頼るしかないんだよ。ラルフを逮捕でもしてもらわない限り、何の解決にもならないんだから」

いくら友達を頼ると言っても、できることとそうでないことはある。

この期に及んで優柔不断なソフィーに、いい加減未来は苛立ちを覚えていた。最後は結局堂々巡りに陥っているのもさることながら、彼女の問題解決に対する姿勢が曖昧なものも、既に不信感が募る一方となっっているのである。

本人が無意識のところでは周囲の人間を引っかき回し、混乱させて面倒の種をばらまく。

ソフィーはその種の厄介な女なのだ。

未来も正直、もうかかわりあいたくないというのが本心だった。ソフィーの個人的トラブルはとつと警察に任せ、ティアーズに絡んだラルフの動向を未来単独で探るほうがよっぽど効率的だ。

まだ押し黙っていたソフィーが、寂しげに目を伏せた。

「もしかして、私が友達でいて欲しいって言うのは迷惑？」

「そんなことないよ」

心を見透かしたかのような一言に驚き、未来は慌てて首を横に振った。

本音で言えば確かに迷惑ではあるのだが、この状況で正面切って突き放せる者はまずいない。

安心したらしいソフィーが、かすかな微笑みを浮かべて見返してきた。

「良かった……あの、迷惑じゃないなら、今日私と一緒に家にいて欲しいの」

「え？」

まだ涙が乾いていないソフィーからの申し出に、未来がまた驚かされて黒い瞳を見開いた。

「またあいつが来るかもしれないわ。誰かが家の中にいれば、あいつは警戒して帰ると思うの。だから、お願いよ」

「いや。だから、そんなんじゃない根本的な解決にならないからだめだつて……」

さしもの未来も、流石に返す言葉を探しあぐねて困った顔になる。本気で言っているらしいソフィーを片手で制しかけるが、そこでふとあることを思いついた。

「ラルフは働いてるんでしょ？あいつの職場の上司にでも言いつけてみたらどう？勿論、匿名で。彼がどこで働いてるのかは知ってる？」

ソフィーが頷くが、意外そうな色が表情に見て取れる。職場に連絡する、という手段に今まで思い至らなかったのだろう。

「もし自分で言うのが怖ければ、私が電話してもいいから」

「前はクローガーのソーンバーグ支店で、日用品売場にいるって聞いたけど。今はどうだか知らないわ」

クローガーは、アメリカでも有数の大手スーパーマーケットチェーンである。主に食料品を取り扱う店であり、支店は全米各地に散っている。

ソフィーからラルフが働く支店を聞き出して頷いた未来の表情が、瞬間的に厳しさを帯びた。

「わかった、ソーンバーグ支店だね」

ソーンバーグ支店は、リッチモンドとフレデリックスバーグの間に位置する。そして休日に未来、杉田ともによく買い出しに行っていた店でもあり、つい先日二人で園芸用品を買ったファーマーズマーケット「マーガレット」と同じショッピングセンターにあったのである。

有益な情報を耳にした未来は何とか態度を取り繕えたが、内心の動揺を顔に出さないようにするのは容易くなかった。

スーパーマーケットでは、倉庫の荷捌にロボットを使うのが普通だ。

もしラルフがブラックヘアとティアーズの犯人なら、杉田の姿を見かけて目をつけた可能性が高いだろう。ブラックヘアの被害者たちが持っていたPMVメンバーズカードも、ショッピングモールに入っている店なら使えるところは多い。カードそのものを目にする機会は、頻繁にあった筈だ。

「じゃあ、後で電話して聞いてみることにするよ。マネージャーにこの前大学の敷地内でもめてるのを見たって言えば、多分注意が行くだろうから。店員のことなら、まず内々に済ませようとするだろうしね」

未来の突発的な申し出と勇ましい行動に、ソフィーは不安な面持ちを隠そうとしない。

「今日、私とは一緒にいてくれないの？」

上目遣いで顔を見上げてくる人工的な緑色をした瞳は、まるで母犬にしがみつく仔犬のようだ。

彼女にとっては、目先の恐怖を取り除く方が先なのだろう。ラルフほど大柄な男に殴られたりすれば、無理もない。途端に未来は、この気弱そうに見える女性の願いを聞き入れないことに対する罪悪感に駆られた。

だが、今日はこの後ジャクソンとエミリオの自宅近辺に捜査へ向かう予定になっている。

それにソフィーは、一度依存できる対象だと判断したらなかなか離さないだろう。比較的時間に余裕はあったが、ここで情に絡め取られ、事態を面倒な方向に向かわせたくはない。

「ごめんね、今日は本当に無理なの。私も兄さんのことで話が聞きたいって、警察から呼ばれてるから」

流星に警察から呼ばれているとあっては、さしものソフィーも引き留め辛い。彼女は渋々ながら、頷いて見せてくれた。

形の上ではソフィーのトラブル解決に一案を提示することができ、未来はようやく肩の荷が下りた気がした。軽くなった身体でスツールから下り、黒いスニーカーの足先をタイルの床につける。

「その代わり、何かあったら連絡してよ。できるだけのことからはするから」

「待つて、もう行くの？」

颯爽とコートとバッグを取り上げて出口に向かおうとした小さな背に、ソフィーはまだすがりついてくる様子を見せた。内心煩わしいと思いつつ、未来は笑顔で答えておく。

「うん。警察から、なるべく早く来て欲しいって言われてるから」

「私も一緒に行っちゃだめ？」

「えっ？」

自分でも、きつと間抜けな顔で返してしまっただろうと思う。

今日の未来は、ソフィーに何かと不意を突かれることが多かった。まだ二の句が継げないでいる未来に向かい、ソフィーは不自然なほどはつきりとした態度を取った。

「マサトと最後に会ったのは、私なんだもの。私も、まだ何か役に立てることがあるかも」

頬には薄く涙の跡が残っており、先まで泣いていた名残はあるが、少なくとも彼女の気持ちには揺るぎがないように見える。演劇でもやっている人物であれば見事だと却って感心するぐらいだが、何故かソフィーには底の知れない無感情が潜んでいるように思えてならない。

やはり、無意識のうちに他人を振り回そうとしているからなのだろう。

落ち着き払って、未来はソフィーをたしなめた。

「いくら被害者の家族と親しくても、一緒に聴取なんてしてくれないと思うよ。それに、警察は嫌いなんでしょう？」

「今、家に一人にいるよりもましなもの。警察署の駐車場に車を入れたら、そこで待つてるから」

ああ言えばこう言うものである。が、もしかしたら純粹に一人でいることが怖いのかも知れない。

未来は今日何度目かの溜息をついたところで、ふと妙案を思いついた。

「じゃあ、ソフィーの家まで一緒に行くから。それで我慢してよ」

「え、でもヨーコだって急ぐんでしょう？」

今度は、ソフィーが未来の案に驚いた顔を見せた。すかさず自分のペースに持ち込むため、未来が笑って頷く。

「時間を指定されてるわけじゃないからね。私がいつでも駆けつけられるんだって思わせれば、かなり違うだろうし」

「でも……」

ソフィーは未来と一緒にいられない不満をまだ口にしたが、未来もそれ以上譲るわけにはいかない。結局ソフィーが家までの同行を受け入れてスツールから降りるまで、更に5分程が過ぎていた。

「待って！」

ソフィーの気が変わらないうちに早く移動しようと先に立っていた未来が、低く鋭い警告を放って立ち止まった。ソフィーを後ろに庇い、カフェテリアの広い間口を彩る観葉植物の隙間から外を窺う。未来の目には、メインエントランスの外に動く不審な人影が捉えられていた。瞳のズームを調整すると、一週間前とほぼ同じ服装でうろつくラルフの姿が、汚れたジーンズのしわの数がわかるほどはつきりと見えてくる。

友人の警戒した様子で、何があったのか察したのだろう。ソフィーが青ざめた顔で、未来のコートのベルトをきつく掴んでいた。

「裏口から出してもらうように、フロントに頼もう」

顔色を失って震えているソフィーに耳打ちしてから、未来はベルトを握る手をそつと離させた。

その代わりに黒いコートで覆われている肉付きのいい腕を取ると、ラルフが入口から離れた隙を狙い、ロビーの奥にあるフロントへと走る。幸いフロントにいたスタッフは未来やソフィーの顔をよく知っているアジア系女性で、すぐに駐車場の奥に出る通用口へと案内してくれた。

彼女に一言礼を言ってから風情のない鉄のドアを開けると、冬の冷たい空気と柔らかい日差しがスタッフ専用の薄暗い廊下に飛び込んできた。

「やっぱり、今日は実家へ行くわ。部屋には戻らないようにする」
音を立てないようにドアを閉めている未来に、ソフィーがおずおずと言ってくる。

ラルフに尾行されている現実を突きつけられて、自分の部屋に一人でいる危険を改めて認識したのだろう。

「一人で大丈夫？」

「ええ。彼、実家の場所は知らないから」

心配そうな未来の言葉に、ソフィーは寂しげに微笑んだ。

今は、そうするのが最良の選択なのである。

本当にベストなのは一人でも警察に行ってもらうことだが、悪いタイミングで本当にラルフと遭遇したことで、未来の心に再度罪悪感が湧き上がってきていた。

ただ、ソフィーも一人でいないよう心がけることにしたのだ。当面の危機を回避できただけでも良しとせねばならない。

「わかった。車までは送るよ」

頼もしげに頷いて見せてから、未来はソフィーの前に行くことにした。

ソフィーの車であるシルバーのフュージヨンは、メインエントランスからかなり離れた場所に停めてあった。長い赤毛を背中に垂らしたオーナーが乗り込み、エンジンをかけたところで、未来が手を振って別れを告げる。

窓から見えたカーナビの画面に出た住所は、リッチモンドの北東に位置するウォーソー方面だ。ソフィーの部屋からは結構な距離があるが、場所を知らないラルフから逃れるには遠い方がいいだろう。フュージョンが低いエンジン音を響かせて無事に駐車場から滑り出たのを見送ってから、未来はアスファルトを蹴って走り出した。車が少ない駐車場のほぼ真ん中を横切って、メインエントランスへと急いで戻る。

しかし、彼女が求めていたラルフ・バーンズの姿は既に消えていた。

悪運の強い奴だと内心で舌打ちしながら、聴覚の感度を上げる。すぐに複数の心音と忙しなく移動する足音が近くにあるのがわかったが、流石にそれだけで個人を識別するのは不可能だ。

あまり一人で派手に動いていては目立ちすぎてしまい、今後の捜査に支障をきたしかねない。

未来は面白くなさそうにフィットネスクラブの建物全体を一瞥すると、自分の捜査車両が停めてあるブロックへと足早に向かった。

12月初旬、ヴァージニアの夜は寒い。

特に海に近い場所では寒風が岸に容赦ない攻撃を浴びせ、冬の間は道路沿いにある店のネオンもろくに灯らないだけに、一層寒々しい。暗闇の中でひっそりと息を潜めているレストランやバーは、夏のハイシーズンだけ営業しているところが大半なのだ。

ジャクソンの運転するプリウスがダルグレンから通ってきたのは、おおよそそんな道ばかりである。時間は19時を回ったところで、決して遅いとは言えない。しかし早朝からずっと外に出ずっぱりで現在に至っているのと、ろくな食事をしていないせいで、今がもう真夜中近くだと錯覚しそうだった。

これも助手席に美女でも乗せていれば、もう少し楽しかっただろうとも思う。

今彼の隣でむっつりと黙り込んでいる人物は、20代前半の若い同僚女性であることは違いない。

ついでに彼女の出身国の基準で行けば、美人と言えるくらいの外見を持つてはいる。

それでもアメリカ人から見ると、彼女は顔立ちも体格も10代の少女とさして変わらない。そして健全な成人男性たるジャクソン・トルーマンには、子どものような外見を持つ女性を異性として意識することがないのだ。

もっとも彼女は、その点を指摘すると烈火の如く怒り出す。

しかしジャクソンは、どんな状況でも必ず減らず口を返してくる

彼女の元気さには、好感を持つていた。ところが今、生き生きとした光を湛えていた黒い瞳は、車の外を流れていく夜の森見つめ続けるばかりだ。

プリウスの車内では、スクヤナーが捉えた警察関連機関の無線に乗った雑音と男たちのだみ声が、ひっきりなしに流れている。生きている人間が二人いるのに、この狭い空間は機械的な響きに支配され続けていた。

「元気ねえじゃんか。何かあったのか」

ますます疲労感を増大させそうな閉塞感に耐えられなくなったジャクソンは、助手席で窓枠に頬杖をついている未来に言った。

すぐの返事はない。

二呼吸ほど置いてから、ぼそりとテンションの低い声が返されてくる。

「考えなきやいけないことが、多すぎるだけだよ」

未来は疲れているわけでも、答えるのが面倒という風でもない。本当に自らの思考に沈んでおり、会話にまで気を回せないだけのようだった。

ジャクソンと未来はダルグレンでエミリオの身辺調査を行い、リッチモンドへ向かう途中だった。まだ今日の捜査スケジュールは終わったわけではなく、リッチモンドではエミリオがよく行っていたバーで聞き込みを行うつもりでいる。それが終わってからは、またクワンティコへ戻らねばならなかった。

二人が捜査車両に同乗したのは、午後遅くのFBIフレデリックスバーグ駐在事務所の駐車場である。

エミリオの自宅があるダルグレンには日暮れに到着したが、周辺住民への聞き込みは殆ど手応えが感じられなかった。これなら直接リッチモンドで落ち合った方がましだったと、彼らは互いに考えているのだらう。

合流するまで未来はリッチモンド近辺で、ジャクソンはそれよりも北の地域でそれぞれの捜査を進めておき、最後は情報交換も含め

た捜査を二人一緒にやるという予定だったのである。

自分の担当範囲のことをまだ頭でこねくり回していると見える未来へ、ジャクソンが何気ない情報を投げた。

「ランチエスターの奴、今日は休んでたな」

意外な人物の名前がジャクソンの口から出たことに、未来は僅かに肩を揺らした。間をおかず頷いて見せたただけで、彼女は特に顕著な反応を示さない。

「みたいだね」

「お前、奴とエミリオとのことは知ってたのか？」

ジャクソンの無遠慮な質問に、思わず未来は頬杖をやめて振り返った。僅かに警戒した響きを含ませて、彼女はもう一重に質問を返す。

「何を？」

「あの二人の間柄についてだよ」

聞きたいことを単刀直入に聞いてくるのは、ジャクソンらしいやり方だ。

考えてみれば彼は同じ事件の捜査を担当し、未来がこっそりとブラックヘア事件を捜査していることも知っている。遠慮がないのは当たり前だ。

そして、フレデリックスバーグ駐在事務所所属の捜査官であるジエイコブ・ランチエスターが仕事を休んでいることも知っているということは、他ならぬジャクソンが聴取を担当したからなのだろう。念のために、未来はまた質問を返した。

「ジャクソンが聴取したの？」

「今日の昼間にな。奴はリッチモンドのアパートに一人で住んでいるんだ。女のお前が聴取に押し掛けてくるより、遙かにましだったろうさ」

未来は黙って前に向き直ったが、視線はハンドルを握っているジャクソンの顔から外していなかった。

「リッチモンドで色々調べてみて、ランチエスターの個人的なこ

とがかなりわかった。奴はリッチモンドでも、幾つかのゲイバーで常連になつてゐる。どうやら、今までの人生で女と長続きしたことがなかったらしい。若い頃からずっと、黒人の男しか愛せなかつたよ
うだな」

続けられたジャクソンの言葉にも、未来はすぐに言葉を返さない。ランチエスターにとつて、捜査上で極めてプライベートな情報を他人から聞き出すことは普通だつただろうが、それに伴う精神的な苦痛については考えたこともなかつただろう。

未来も先日、被害者の家族という立場でデリケートな事柄について情報を提供し、激しい疲労に襲われたことがある。

ましてランチエスターの聴取を行った人物は、いつも下に見ていた黒人の同僚だ。かなり憔悴したと見ていいはずだつた。

「ランチエスター 捜査官から、そんなことを簡単に聞けたの？」

「まあ、そう容易くはいかなかつたけどな。ただし奴から話を聞いて俺が感じたのは、奴の異性差別や白人至上主義は、全部自己嫌悪と劣等感の裏返しだつてことだ。自信がないばかりに、常に誰かの上に立っていないけりや気が済まねえ。だから自分が常に優位で完全に支配できると思つてゐる黒人の男しか、愛することができねえんだ」

「随分と的確に分析できるじゃない」

同僚の黒人サイボーグに対して頷きながらも、未来の声には、軽い皮肉が込められている。

ジャクソンが聴取内容からランチエスターの人格を位置づけるまで、きつと長い時間と内面を的確に突いてくる質問、話術を要したことだろう。

個人的に言えば未来もランチエスターのことを好きではなかつたが、心に受けたダメージのことを考えると、どうしても少しは同情的になつてしまふのだ。

「似たような奴は、どこにだつてゐるさ。自己愛と恋愛感情を取り違えてる奴も、珍しいもんじゃない。歪んだ愛情つてのは、特に犯

罪に繋がりやすいしな」

「けど私が調べた限りでは、彼はエミリオの殺害にかかわってはいないよ」

そこで未来が犯行の可能性を否定したが、今度は決して同情からではない。

それでもランチエスターが現場で見せていた動揺や涙を思い出し、わざわざ言葉を選んでしまう自分の甘さには、思わず呆れそうになった。

「ああ、それはこっちでも裏が取れてる。エミリオの死亡推定時刻の前後には、海軍の若い黒人兵士とよろしくやってたことがわかってるからな」

「DNAサンプルは採ったの？」

「意外と素直に応じたよ。無駄に疑われたくなかったからなんだろうが、奴はもう見知った顔がない地方事務所に行くしかなくなるな」

淡々と説明を続けるジャクソンに対し、未来は僅かな苦さを瞳に滲ませていた。

結局未来がランチエスターの性的嗜好について口を閉ざして乗り切ったことも、彼とエミリオと接触があったことが判明すれば、当然捜査の手は回る。多少回り道をしただけで、行き着くところは同じなのだ。しかし彼女は、ランチエスターが働いた最大の不正行為である証拠品隠蔽のことにまで話が及ばなかつたことに、どこかほっとしてもいた。

二人のサイボーグ捜査官が話すことと同じように、夜の森を通る道は闇の中で歪に曲がっている。ヘッドライトが照らす舗装の荒れた道から視線を外し、未来はポケットに入れていたハンドターミナルを取り出した。右に左に大きく揺れる環境をもともせず、電源を入れて捜査情報呼び出して細かい字を確認する。

暗い車内を、小さなモニターの白い光がぼんやりと照らし出した。「エミリオの携帯電話の履歴も見たけど、やっぱりランチエスターと一番頻繁に連絡を取り合ってたんだね」

未来が細い指先を画面に滑らせて眩く。そこには携帯電話会社から提供されたエミリオの携帯電話の通話履歴が呼び出されており、細かいアルファベットと数字が雪崩のように流れていた。その様子を横目でちらりと見て、ジャクソンは頷いた。

「そりゃそうだろう。エミリオは情報だけじゃなく、自分の身体も売ってたんだからな。ランチエスターは、さぞかし上客だったんだろっさ」

「でも、エミリオの相手は一人だけじゃないよね。少なくとも、死亡前に5人くらいとはやりとりしてたみたいだし」

未来が直近の履歴を記したリストファイルを呼び出して見たが、並んでいるのはランチエスター捜査官を除いて全て見覚えがない男性の名前ばかりだ。

そして、その中にラルフ・バーンズの名前はない。

だが、こういったやり取りの中では、本当の名前を相手に教えない者も多い。ラルフを要注意人物から外すのはまだ早いと言える。

「この中に、ティアーズの犯人がいればいいんだけど」

曲がりくねった道を行く中でまだ小さな画面に見入っている未来に、ジャクソンは首を傾げた。

「そいつはどうだろうな。ティアーズの犯人は今のところゲイじゃない可能性の方が高いように思えるし、偶然エミリオを被害者として選んだのなら、今まで連絡を取り合ったこともないだろう」

「……まあ、そうだよな」

未来は一度画面から目を上げて息をつくとき、シートの背もたれに上半身をもたせかけた。

「それに身体の関係があったとしても、連絡先どころか相手の名前さえ知らないってこともあり得るからな。特にゲイで売春なんかやる場合、エイズをうつされたとかって相手に怒鳴り込まれたりしちゃ、たまらねえし」

「エイズくらい、ワクチンがあるじゃない」

現代医療において、エイズは早期治療さえすればさほど恐ろしい

病気ではないはずである。ただジャクソンは、病気の治療というものが単純に嫌いで、怪我やパーツの劣化以外で身体の調子が悪くなったら治せばいい、とは考えていない節があるようだった。

「それでも、厄介な病気であることに変わりないだろ。昔の検死局じゃ、スタッフがいつもびくついてたって話じゃねえか」

エミリオの解剖を思い出したらしいジャクソンの機嫌が悪くなり、合わせて語調も荒くなった。

「そんなことより、お前は今日も夕方まで例の件を調べてたのか？」
突然話題が異なる方向に向いたのを意識するのに、未来は数秒の時間を要していた。

ジャクソンの言う例の件とは、ブラックヘア事件のことを指す。
行方不明になっている杉田が最後に見せた悲しげな顔がたちどころに心を支配し、胸の中がどっと重くなった。

「……そうだよ、って言いたいところだけどさ。私一人じゃ、調べられることにもどうしたって限界があるよ」

苦しげに呟いた未来に、ジャクソンの言葉も少なくなる。

「収穫なしか？」

無言の頷きが一瞬の空白を作る。

そのすぐ後に振り向いてきた未来の顔は、笑っていた。

「でも、ドクターは絶対にどこかで生きてるって信じることにしてるよ。これまでの犯行のパターンならもうとっくに死体が見つかっててもおかしくないけど、ドクターはそうじゃないから。きつと、生き延びるために頑張ってるんだよ」

未来の声は、話の途中から次第に震え出していた。

ジャクソンがヘッドライトの照らすでこぼこした道路から視線を動かさなかつたのは、懸命に涙を堪えている彼女の痛々しさを目の当たりにしたくなかつたからだ。

荒れかけた未来の唇から出た最後の単語に、嗚咽にも似た苦しげな吐息が重なる。

いくら未来とジャクソンがサイボーグだからと言っても、精神までもが人為的に強化されているわけではない。時には弱音を吐いたり、感情を出すことも必要だ。そのことに気づいている彼らだからこそ、言葉をかけなくてもいい時間というのが存在することも理解している。

プリウスは、未だに手探りするように闇の中を走り続けている。
黒一色近くに塗りつぶされていた視界に、いつしか違う色が混ざ
っていた。

未来がその変化に気づいたのは、窓に硬い雪が当たる音が僅かに
鼓膜を震わせたからである。上体を前に傾け、フロントガラスを覗
き込む要領で夜空を見上げると、白く細かい粒が周囲の全てに降り
注いでいるのがわかった。

「また降ってきたね。酷くなる前に、クワンティコまで戻ればい
いんだけど」

掠れ気味ではあるが落ち着いた調子を取り戻している彼女の声に
頷いてから、ジャクソンはワイパーのスイッチを入れた。

「なあ、もう一度エミリオの死体発見現場に行ってみないか？」

「えっ、今から？」

同僚の気まぐれに近い予定変更の提案に、未来は目を丸くする。

「結構近いところを通るから、ついでだよ。この時間だと、エミリ
オの死体が捨てられたと思われる時間帯と大体条件が同じになる。

俺たちなら、何かわかることがあるかも知れねえからな」

「……ああ。この前トリスが言ってた、現場で感覚を澄ましてみ
て言ってたこと？」

「そうそう。何て言ったって、俺たちの感覚を二人分合わせりゃ、5
00人前以上だからな」

未来が意図に気づいてジャクソンの顔を見返すと、人好きのする
笑顔が口の端に浮かべられているのがわかる。彼が持つ純粹な温か
みは、未来の眉間に寄っていた皺も減らしてくれたようだ。た。
余計な力が抜けたところで、今度は未来が思いつきを口にした。

「じゃあ、そのついでにお願いなんだけど。ブラックヘアの死体発
見現場にも行ってもらっていい？」

「なに？」

これには、ジャクソンがつい未来の方を振り返ってしまう。

一番近いブラックヘアの現場はヒースビルであり、最後の死体

発見場所だ。

ただし現在位置からは近い場所であっても、エミリオの死体発見現場から22マイルは南東に離れている。その分だけ最終目的地としているリッチモンドからは遠くなるため、到着が必然的に遅くなることは目に見えていた。

言いだしつぺはジャクソンであったが、自分で考えていた以上に夕食の時間が遅くなることは胃袋に辛い。が、そもそも自分が黙っていたれば良かったという負い目もある。

渋々、ジャクソンは未来のわがままを認めた。

「ちえ、わかったよ。その代わり俺の身体に入れる分のガソリンは、お前が奢れよ。今日は恐ろしく寒いんだからな」

「フライドチキンでもステーキサンドでも、何でもどうぞ」

「ビールとフレンチフライとチエリーパイもつけるよ。それから、ヒースズビルからリッチモンドまではお前が運転してくれ」

「もう。いくら太らないからって、食べ過ぎだよ。それに注文多過ぎだから、相棒！」

呆れつつも、未来は心を楽にできる方へ見事に持って行ったジャクソンに感謝していた。

彼が持つ人柄の良さのお陰で辛い捜査も続けていけると実感できているのだから、一回で三倍の金額がかかる夕食代くらい、安いものだった。

プリウスが30分ほどかけて到着したコロニアルビーチは、一見したところ今まで通ってきた森の道と全く変わらなかった。冬の郊外で時間も夜というのが同じであるため、他に車が全く通らないことも同じだ。

ただ一つ違うのは、暗闇にひしめく木々に渡されていた黄色い立入禁止のテープの残骸が、時折風に揺れることぐらいだろう。

辺りは静かで、鋭く吹き付ける寒風や雪が枝とテープかすの間を抜けていく音くらいしかしない。ジャクソンと未来は、他の車の邪

魔にならないよう路肩に停めたプリウスから降りた。

傷んだアスファルトの外側は雪に覆われ始めており、黒々とした土についたブーツの足跡やタイヤ痕を歪な模様として浮かび上がらせている。

顔や手を容赦なく刺してくる寒気に身震いしながら、未来は聴覚の感度を上げた。

僅かだが、遠くから金属が擦れ合う機械的な響きがあるのがわかる。

恐らく、この付近の道路工事に使われているロボットの駆動音だろう。今の時期は頻繁に夜間工事を行っているようで、事件当日も現場到着まで工事現場が延々と続いていたのが、記憶に新しい。

ジャクソンが後をついてくるよう、未来に手で合図を送ってくる。二人は足元に注意を払いながら、連れだって道路脇の草むらにできた細い道に分け入った。

巨体と言っているジャクソンの腰ほどまで高さがある枯れ草は、捜査の時に踏み荒らされたままだ。未来が赤外線フィルタ越しに見ると、死体を積んだストレッチャーの車輪跡もくつきりと残っているのがわかる。

ごく最近にそうして人為的に作られた道を暫し進んだところで、やがてぽっかりと視界が開けた広場に出た。ここでも足元を見ると、犯人が死体遺棄時に使ったと思われるロボットのタイヤ痕が剥き出しの土に残っているようだった。

雪は二人が現場に到着して僅か数分で激しさを増してきており、彼らの濃い髪の上にも凍りかけた水滴を残していつている。それが鬱陶しいのか、ジャクソンは革ジャケットの下に着込んだパーカーのフードをすっぽりと被った。

「最近ここまで来た奴は、ほとんどいないようだな。死体が発見されてから2、3日は、野次馬も結構いた感じだが」

エミリオの死体が横たわっていた辺りまで足を進めて、ジャクソンが周囲を見回した。

数多くの足跡は地面についているが崩れかけているものも多く、捜査時以降にあまり荒らされた様子がない。群警察が立入禁止を解除したのが、ここ数日のことなのだろう。

「そうだね。その辺の草は、捜査の時に倒されたまんまみたい。特にこれからは雪が深くなるだろうから、もうここに来ようなんて言う物好きはいないんじゃない？」

未来がコートに手を突っ込んでから答えると、ジャクソンと同じように周囲を見渡した。

しんと静まり返った闇には街灯の光も届いておらず、墨で塗りつぶしたように真っ暗だった。粒が細かい雪だけが地面を叩く音を小さく響かせ、色が違う自分たちの存在を主張しているかのようである。

ジャクソンは視力感度を上げて辺りを確認しているらしく、あちこちを飛んでいる鋭い視線を、時折木々の間にびたりと留めている。「一応家も近くにないことはないようだが、結構遠い感じだ。これじゃあ表を車が通ったかどうかなんてわからないし、多少大きな音がしたとしても聞こえねえな」

ジャクソンと同じく未来の瞳にも、付近の家の灯りは殆ど捉えられない。彼女は道路に出る小径と死体があった場所とを交互に眺めた。

「死体を捨てるのに、条件が揃ってたってことだよな」

「しかし、その割に意外と発見が早かった。そこがどうもおかしいんだよ」

うろつろつと木の間を歩いているジャクソンは、見つけ損ねた証拠がないか探しているように見える。

「ポールも言ってたじゃない。エミリオのケースは、今までと違って雑だつて。あんまり捨てる場所を選んでような余裕がなかったんじゃないかな。だから手つとり早く、道路からは見えにくいここにしたんだよ」

「ということは、ある程度の土地勘がある奴だつてことになる」

ジャクソンの足が止まり、納得が行かないと言いたげに自分が踏んできたばかりの地面を睨みつけた。

「どうして、ここじゃなけりやならなかつたんだ？」

ひとりごちて、彼は片手で顎を撫でた。

その横で、未来が地面にしゃがみ込んでいる。

自分たちが今立っているのは丁度死体の足元に当たる場所で、人形が捨てられていた辺りだ。コートのポケットから両手を出して息を吐きかけてから、雪と地面を覆っている落ち葉をどかす。まだ僅かに湿り気を含んでいる程度の土は、鑑識スタッフが表面を採取したためえぐれているが、それ以外一見して変わったところはない。

死体が横たわっていた場所も、今やその痕跡は殆どないと言って良かった。

数少ない名残りは、死体を乗せたストレッチャーの轍と僅かな血の跡、死体を引きずった跡ぐらいであろう。捜査当時は血の臭いが鼻についたが、一週間が経過した今はかき消されている。

死体を引きずった跡は救急隊員たちと共に死体を動かした時にできたもので、死体遺棄時についたものではないこともはっきりしていた。

何か新たな発見はもうないかと、未来は目を閉じて聴覚の感度を上げた。

が、やはり聞こえてくるのは工事現場で働いているロボットたちの音ばかりで、他に注意を引くようなものは感じられない。

「この辺りの道路、よく工事をやってるよね」

「ああ。アスファルトが雪だらけになる前に、とつと張り替えなきゃならねえんだ。ロボットたちもたくさん動いてるみたいだな」

何気なく呟いた未来がふとジャクソンの顔を見上げると、彼も目を瞑って耳に神経を集中させているようだった。その縮れた髪の上を覆っている黒いパーカーのフードは、雪のせいでまだら模様になっている。

「もう車に戻るか。今日のところはこんなもんだろう」

無表情に未来に言ったジャクソンであるが、表情には期待が外れた時の何とも言えない脱力感が見えている。更に路肩に停めたプリウスまで辿り着いた時、彼の胃が空腹を訴えて大きく唸った。

「これと言った収穫はないけど、死体遺棄当時の様子がわかったのは良かったかもね」

それに気づかないふりをした未来が、エンジンがかけられたすぐ後にヒーターの温度を上げた。

「ああ。目撃者はもう期待できそうもねえな」

どんな人間にも言えることだが、血糖値が低下するとえてして悲観的になるもので、ジャクソンもその例に漏れないようである。

未来が車を走らせるよう提案したヒースズビルはここから20マイル以上あり、リッチモンドで温かい夕食にありつくまで、最低でもあと2時間はかかるだろう。こんな時にキャンディーの一箱も持っていない自分に、未来は本気で悪態をつきたくなった。

ジャクソンはきつと、夕食を人三倍と言わず五倍は食べる気でいるに違いない。

冬眠から覚めたばかりで飢えている熊と一緒にいるような気持ちにさせられるドライブは、いくら相手が親しい同僚だと言えど辛い。警察の無線の音声さえ、ジャクソンの空腹を刺激しないかと気になつてしまう。

ヒースズビル到着までの約40分間は、未来にその倍くらいの所要時間を体感させる羽目となった。幸いだったのは、途中で渋滞に引つかかることもなく、21時過ぎに到着できたことだ。

「ここ？結構、車を通りそうな感じの場所だけど」

「間違いねえよ。ほら、道路も周りの配置も一緒だろ」

未来がシートベルトを外しながら辺りを窺うと、ジャクソンがハンドターミナルに呼び出してあった現場写真を見せてきた。

ブラックヘアの最後の被害者であるハンク・ナカノの死体発見現場は、サンドイッチチェーンレストランの裏手にあるごみ捨て場だった。

とは言っても、ごみ捨て場自体には金属製の巨大なごみ容器たるダンプスターが並んでいるだけで、汚れている印象はない。近隣にあるレストランで出たごみは全てこの中に収容されるが、蓋はがっちりロックがかかるようになっていて、カラスや野犬が中身を漁れない仕組みとなっている。更にダンプスターの設置場所は、ごみ回収業者が車を横付けできるように広めの駐車スペースを備えていた。

しかしその駐車スペースは、違法駐車防止用の鉄柵がぐるりと取り囲んでおり、今は入れないようになっている。そのため、ジャクソンも柵の外側に捜査車両を停めていた。

「死体があつたのは、あのダンプスターの陰のところだ。夜間にごみの回収業者が来て、その時に発見されてる」

先に車を降りたジャクソンが携帯ターミナルを片手に、死体発見当時の位置関係を確認する。彼が指した先には、派手なオレンジ色のダンプスターが連なっており、腰を据えていた。報告書に添付されている画像は夏場のものだが、今はしんと降り続けている雪が至る所に半透明のヴェールを下ろしているせいで、随分と違った感じに見える。

「あれ、ごみの回収って普通は朝じゃないの？」

「料金さえ払えば、メールの一本でいつでも回収しに来る業者もいるんだよ。そいつらも、その手の連中だったんだろ」

未来とジャクソンは言葉を交わしながら、ダンプスターに近づいていった。

足元は、薄く積もった雪のためにかなり滑りやすくなっている。駐車スペースを取り囲んでいる鉄柵は間が狭く、小柄な未来でも身体を横にしなければ通れないほどだ。

柵はコの字を地面に伏せたような形のよくあるものだが、日本で見かけるそれよりかなり高さがあり、未来の腰より上に届くくらいだ。そんなものが狭い間隔で二重に並んでいるのだから、鬱陶しいことこの上ない。

「もう。邪魔だなあ、これ」

まだジャクソンが柵の間を抜けて来ないうちに、未来は毒づいた。雪が身体に積もるかと思うほど寒い中で余計な神経を使わされると、尖った神経に更に障るのだ。

「死体が発見された時も、あんなのがあったのかな？」

「写真じゃ、全部引っ込められてるな。けど、普段はこういう風になってるんだろ」

やっと未来に追いついたところで、ジャクソンが柵の方をいまいましげに振り返った。

彼がターミナルに呼び出している画像を未来も横からちらりと見たが、確かに事件当時は柵が全て地面に引っ込められた状態になっているようだった。

「この柵、死体を置いたときはどうなってたんだろ？これじゃあ、ダンプスターの横に車をつけれないじゃない」

「どっかにコントロールパネルがあるんだろ。ごみの回収業者も、そいつで柵を引っ込めてる筈だからな」

未来が錆の浮いた鉄柵に手を置くと、恐ろしいほどの冷たさが指先の体温をあつと言う間に奪っていく。ジャクソンが言う通り、レストランの裏口らしいドアの横に制御盤と見えるパネルのようなものがあるようだった。

彼はグレーの保護扉に隠されているらしいパネルを眺め、ついでダンプスターへと視線を送る。

「それに、犯人は死体を担いであそこまで運んだんだ。この柵があつても、あんまり関係ねえよ」

「でも、私だって隙間が狭いと思うくらいなのに。大人の男を抱えた奴がこんなところを通ろうと思ったたら、間違いなく引っかかっちゃうじゃない」

そこでジャクソンが僅かに片方の眉を上げた。

大きな背中が反対側を向き、もう一度柵の間をくぐって道路側へと抜けていく。彼はすぐに振り向くと、また柵の間を通って未来の

側に戻ってきた。一連の様子は決してスムーズとは言えず、脚のあちこちをつかさねながら、ようやく通ってきたという風に見える。

「なるほど、確かに。死体は確か、70キロくらいはあったはずだ。それもひどい状態で、裸の奴を」

ジャクソンはターミナルの現場写真と自分の周囲を、しきりに見比べている。そのまま自らの考えに耽り始めたようで、足を動かさうとする気配が消えていた。

未来はそつと同僚の側を離れ、ダンプスターの側へ向かった。彼女も自分のターミナルを取り出し、ハンク・ナカノの捜査資料を呼び出しておく。

流石に現場は当時のままとは言えないようで、ダンプスターの場所も添付画像の位置から微妙にずれているのがわかる。

正確な位置関係を確認するため、未来はダンプスターを20インチ（約50センチ）程度押し動かして、更に角度を調整した。ハンクの全裸死体が横たえられていた地面を詳しく見ようとしてかがむと、全身がダンプスターの影に覆われ、狭い周囲が真っ暗に等しくなるのがわかった。

駐車場に面している道路は比較的開けていように見えるが、実は表通りよりもかなり暗く、交通量は思っていたよりずっと少ない。今が冬で夜遅いせいであるとしても、人目を避けるには好都合だっただろう。

「ここにしゃがめば、道路の方からは完全に見えなくなるみたい。ほら、丁度街灯の影になるから」

未来がダンプスターの陰から顔を出して呼びかけても、ジャクソンは彼女の方を向こうとしない。革靴の爪先で積もり始めた雪を静かに蹴り散らして、しきりに考えているようだ。

普段と違う彼の様子を不審に思った未来が立ち上がり、大きな立ち姿に駆け寄っていく。

「どつかしたの？」

全く集中力を乱さずに佇んでいるジャクソンは、髪に水滴がついていることにも気づいていないようだった。寒さに頬を赤くして走ってきた未来の足音が大きくなってから、ようやく顔を上げて彼は言った。

「いくら犯人が証拠を残すことに無頓着でも、こんなところに死体を捨てる気になったってのが妙に引つかかるんだ」

ジャクソンの黒い瞳は、弱々しいオレンジ色の街灯に照らされたダンプスターの真っ黒い影と、ターミナルの薄明るい画面とを交互に飛び回っている。次いで、雪がつき始めた鉄柵を爪で弾いた。

高く短い響きが、表通りを走る車の音の届かない駐車場を渡っていく。

「見てみるよ。この柵はお前みたいなチビならいざ知らず、並の体格の男だって、間違いなく通るのにちよっとは気を使う。死体を抱えてたんなら、足元だってよく見えなかった筈だ。運が悪けりゃ、そのまますっ転んじまう」

ジャクソンが白い息を吐き散らして未来の顔を見ると、小柄なことを気にしている彼女は最初の一言にむっとしていているようだった。

「チビで悪っござんしたね」

未来が一言文句を言ってから精一杯顔を上向かせ、15インチ(約28センチ)は上にある同僚の目を睨んでくる。しかし、彼女はすぐに視線を鉄柵に落とした。

「けど確かに、死体が遺棄されたのは夜だったんだからね。いくら人通りがないからって、リスクが高すぎるような気はするよ」

コートのポケットに手をつ込み、駐車スペースを一通り視線でなめてから更に続ける。

「それに私も、どうも何か見落としてるような気がして仕方ないんだよ。今の現場の様子と、死体が見つかった頃と時期が違うせいもあるんだろうけど」

「ここで死体が発見されたのは、確か夏だった筈だ」

ジャクソンがターミナルで報告書の日付を確認したところで、未来が頭に浮かんだ何気ない疑問を口にした。

「ハンク・ナカノは、死後どれぐらいで遺棄されたって話だったんだっけ？」

「ええと。死亡推定時刻は、8月20日の午前2時から8時の間。死体発見は8月21日の21時半頃。同じ日の夕方にごみを捨てに来たレストランの店員の話じゃ、その時は何もなかったそうだ。ということは、殺されて丸一日以上経過してから置かれたんだな」

ジャクソンが顔をしかめ、未来も眉間に皺を寄せた。

ヴァージニアはアメリカでも北の方に位置する州ではあるが、それでも夏場は摂氏30度を越えることも珍しくない。そんな中に一日半も死体を放置しておいたらどれだけ悲惨なことになるか、彼らは知っているのだ。

人間の腐乱死体がある場合、まずその辺り一帯の空間に充満する凄まじい悪臭で気づくことが最も多い。

いかなる化学兵器でもあの悪臭に勝るものはないと、断言できる

ほどだ。どれほど現場慣れした捜査官であつても、吐き気を覚えな
い者はまずいない。

加えて腐敗が進んだ人間の肉体は脂肪や筋肉、内臓が液状化して
汚泥となり、床や壁に染み込んで、消えない跡を作る。

そこまでの状態になるまでは数日以上時間を要しはするが、最
も早く腐敗し始めるのは内臓だ。体内に充満した暗褐色の腐敗液が
身体の穴という穴から漏れ出す様は、たとえ絶世の美女のものであ
ろうと、命なき身体をおぞましい物体に変えてしまうのである。

ハンク・ナカノの死体も、遺棄された時点である程度の腐敗は進
んでいた筈だった。

「夏の暑い頃なのに、どうしてすぐに死体を捨てなかつたのかな？」
「昼は仕事をしてるような奴が犯人の場合、深夜に殺しちまったら
遠くに捨てに行けないんじゃないか？」

ジャクソンがダンプスターの方へ歩き出し、未来がその後が続く。
静かに積もり続ける雪に、歩幅も大きさも異なる足跡がついた。

「それに、死体の硬直は半日くらい後まで続くんだ。単に扱い辛か
っただけなのかもな」

彼は、先日触ったエミリオの死体の感触を思い出していた。

硬直した死体というのは、検死官や病院関係者のように専門の
仕事に携わる者でも、扱いに手こずる代物だ。知識を持ち合わせて
いない者がやすやすと運び、特異な姿勢を取らせられるわけがない
のである。

捜査資料の画像でも、死体は仰向けで脚と手を大きく広げた状態
だ。この姿勢のまま別の場所から運んで来たとはとても思えない。

「でも、死後硬直が緩んでから捨てたんだとしても、暑い時期だつ
たわけじゃない？今度は結構な速さで腐敗していくわけだよ。体
中の穴から腐敗液だつて出てくるし、臭いだつて耐えられるもんじ
やないのに」

ダンプスターの裏側に辿り着いてから、未来も再び自分の携帯端
末で報告書の画像を確認した。

発見された当時に撮影された死体の画像を拡大してみると、全身の皮膚が赤くただれて腐敗し始めていることがはっきりとわかる。口や肛門からも腐った体液が流れ出しており、不気味な粘液が捜査用ライトでてらてらと光っていた。

画像をスライドさせていた未来の手が、ふと止まる。

彼女の寒さで赤くなっていた細い指は一瞬の間を置いてすぐまた動き出したが、今度は何かを求めているかのように素早く、忙しく画面を辿っている。

暫しそうやって複数の画像を交互に見ていた未来が、やがて低く呟いた。

「おかしいと思わない？」

「何がだ？」

「ある程度時間が経過した死体なんて、ちゃんとした処理をしないと状態が悪くなる一方だよ。しかも、夏だったんだよ。死体を捨てた時も、腐った体液が体中からただ漏れで、悲惨な状態になっていた筈じゃない」

ジャクソンが背をかかめ、未来の端末の画面を覗き込む。

不幸なレストランの店員によりここで死体が発見されたのは、遺棄されてから長くても3時間程しか経っていない筈だった。腐敗の度合いは一気に進むものではないのだから、犯人が死体を運んだ際も、ある程度状態が悪かったものと見て間違いない。

ジャクソンが自分の端末に検死報告書呼び出す。その検査項目では、胃の内容物も鑑定ができるくらいには残っていたし、口や肛門に布が詰め込まれた形跡はなかった、という記載が確かにあった。その間も、未来は疑問を口にし続ける。

「それなのに、どうして死体の周りにしか体液が溜まってないの？道路に車を停めて死体を担いできたんなら、絶対途中のどこかに垂れるはずだよ。布にくるんでたんだとしても、かなり厚いものじゃない限り、防げなかったと思うんだけど」

眉間に皺を寄せている若き女性捜査官が探していたのは、捜査報

告書で路面の状態について触れている箇所だった。

が、報告書には、血痕や腐敗液の飛沫について何も記述がなかったのだ。

人間の腐敗液がついた跡は、そう簡単に落ちるものではない。まして、死体発見当日の天気は快晴で湿度も低い夏である。

死体をビニールシートのようなもので覆っていたとしても、テープなどで隙間を完全に密閉しなければ、肩に担いで運ぶ途中で必ずどこかに腐敗液が落ちる筈だった。そしてもし死体を完全防水のシートで密閉状態にしていたなら、腐敗液が死体を置いたときに広がっていないのはおかしいことになる。

「けど、布団みたいな厚い布を使ったら、今度は持ち上げられなくなっちまうぞ。何せ、相手は大人の男なんだ。腐敗液だって、洒落にならないぐらいの量と臭いだった筈だぜ」

今度はジャクソンが険しい表情を浮かべ、捜査報告書のページを手早く送った。やはり未来が指摘しているように、死体を運んできたルートに落ちたと思しき腐敗液の記述がどこにもない。

死体運搬ルートという、捜査上極めて重要なことだ。鑑識の調査漏れとはとても思えない。

そして死体の扱いにそこまで気を使うというのは、この事件の犯人の性格上考え難いことでもあった。

「実は、俺にも気になることがある」

ジャクソンが緊張した面持ちで携帯端末から顔を上げると、自分たちの周りを取り囲んでいる鉄柵をぐるりと見回した。

「さっきお前に言われて気がついたんだが、大人の死体を抱えてあの柵を抜けてくるのは、体格がいい奴ほど大変なんだ。しかも、犯人が死体を捨てに来たのは夜だろ？足元は相当、おぼつかなかっただろう」

「そりゃ、そうだろうね」

同僚の指摘に今度は未来が同意すると、ジャクソンは柵の方へ歩きながら彼女を招き寄せた。

「もしお前がでかい荷物を持って、ここを抜けるときに転びそうになったら、どうする?」

そして、15インチ(約32センチ)程度しかない柵の隙間を指す。

「こつするけど?」

未来は柵に積もった雪を手で払い、片手について体重を預けつつ通り抜ける。

今は雪が降っているために一層滑りやすくなっていて危ない上、柵の隙間は元からかなり狭い。小さな子どもでなければ皆、足元を見ながら注意してくぐることになるだろう。

その様子を見て、ジャクソンが深く頷いた。

「そう。むしろ転びそうにならなくても、注意して最初から柵に掴まるのが自然じゃねえか。けどな、この柵のどこからも犯人の指紋は検出されてねえんだ」

コートについていた水滴を払っていた未来が思わず手を止め、驚いてジャクソンの顔を見上げた。ダンプスターからは犯人の指紋が検出されているという記載を、彼らは手元の端末でつい先刻目にしたばかりなのだ。

ただでさえ暑かった夏、犯人が死体を運んだ時だけわざわざ手袋をしていた筈がない。

暫し、二人の間に言葉がない時間が流れた。

不自然な点が多いことに、現場へ足を運んでみて改めて気づかされたのだ。

『……捜査のときはいつも高感度にしておくってことだよ。特に、事情聴取に行く場合なんかはね。犯人が近くに隠れてることだってあり得るんだから。それに今回みたいにロボットが関係してる場合は、僅かな駆動音だって拾えるわけだし……』

トリスが会議の際に言っていたことが、未来にはそれとなく聞こえた気がした。

彼女の感覚に、硬い雪が鉄柵に降りる音や傍らにいるジャクソン

の心臓の鼓動がとらえられ、近くの林の枯れ枝を渡る風の音が被さり、厚い壁の向こうで談笑する若い男女の声が流れ込んでくる。

やがて覚えのある金属の軋みが、小さな棘となって彼女の頭の奥に引っかかった。感覚の隅に留まって神経を刺激してくるその音を集中して拾い集め、感じ方を研ぎ澄ませる。

様々な部品が一度に動いて複雑な響きを作っているモノがあり、更にそれが種類の異なるまとまりとなつて、別々に動いている。

この現場に来るまでに何度も耳にした、道路工事用ロボットたちの駆動音であった。この付近でも、広い範囲に渡って作業を行っているのだらう。

ついさつき行ったエミリオの死体が発見された現場でも、似た音を聞いたばかりである。あそこではロボットのタイヤ痕が見つかっており、ロボットを使って死体を置いたものと推測されていた。

強い作業灯の光に照らされた夜の工事現場でも、犯行に使われたのであるうものと同じタイプのロボットたちが、トラックに積まれていた。人は彼らに乗り込んで長い鉄のアームを操作し、重い資材を掴んで運んだり、組み上げたりすることができる。

だから、生きている時の倍は重さがあると感じる人の死体でも運ぶことができるのだ。

そう。

死体を運べるのである。

人間が手で扱うのが難しければ、ロボットにやらせればいい。至極簡単な理屈だ。

腐乱しかけた死体もそうだ。防水シートに乗せてその端をアームに固定し持ち上げれば、腐敗液を垂らさないことなど容易にできるのだ。

死体を下ろした後に犯人がダンプスターの側に行き、最後の仕上げをゆつくりと施せばいいではないか。それなら腐敗液が死体の側にしか溜まっていなかったことも、ダンプスターにしか指紋が残っていないことも、全て説明がつく。

と言うよりも、それ以外に考えられる方法はないのではないか。それに、ダンプスターから一番近い柵の際までは、5メートル程度しか離れていないのだ。アメリカで最も普及している小型のロボットでも、十分足りるだろう。

「ブラックヘアでも、ロボットが使われたんじゃないのかな」

自らが導き出した道筋に、未来は呆然と瞳を見開いて呟いた。

「……何だと？」

それまでぼんやりと考えていた未来が突然口走ったことに、ジャクソンはぎよっとした。

彼女は考えることに没頭していた空気からまだ完全には抜け出せていないようで、独り言のようにくぐもった声で言葉を繋げている。「この近くで道路工事をやってるでしょ？音が聞こえてくるんだよ」「それと事件と、何の関係があるんだよ」

訝しげな黒人の同僚に説明しようと手を軽く挙げかけた未来だが、次第に興奮が襲ってきているようだった。頬が赤く上気しているのも決して寒さのせいではなく、アドレナリンで激しくなった血流のためだろう。彼女は神経の高ぶりに吞まれないよう、懸命に自身を落ち着かせようとしていた。

「ほら。死体が遺棄された場所と道路とは、せいぜい5メートルしか離れてないでしょ？柵の外から防水シートでくるんだ死体をロボットが持ち上げて運ぶことは、十分にできるはずだよ。シートの端をまとめておいてそこをつまめば、腐敗液も漏れない。それならダンプスターの周り以外に跡はつかないし、柵に指紋がないことだって説明がつくよ」

彼女が柵とダンプスターを指し示して説明する口調はゆっくりでしゃべりたいことと説明しなければならぬことを整理しつつ、言葉を選んでいくらしかった。

いつも理路整然と理屈を述べる未来がここまで動揺するのも珍しいが、ジャクソンは彼女の冷静さを計るために質問を返すことにした。

「でも、いくら人通りが少ないからって、ロボットなんかで作業してりゃあ目立つだろ」

「さっきジャクソンも言ってたでしょ、ごみの引き取り業者は時間を問わず呼べるって。ごみの回収でもロボットは使われてるし、この辺りはレストランが何件も続いているんだよ？もし誰かに作業中のところを見られたとしても、またごみの収集が来てるんだなって思われるだけじゃないかな」

確かに、不意のごみが多く出る飲食店では、公共のごみ回収で間に合わない時も多い。周辺住民とのトラブルを避ける目的でも、民間の業者を使うことはよくあるのだ。

そして今現在もそうであるようにこの裏通りは街灯の数が少なくかなりの暗さになる。その中に止まっている作業用と見える車両が法に触れることをやっているなど、一目でわかるはずがない。

「それにロボットを小さいトラックの荷台に乗せたままにしておけば、すぐに逃げることでできてできるしね。工事現場に、そういうロボットがたくさん置いてあるのを見たから」

もう一言追加した未来の説明は、そこで終わりだった。

自分で説明できる範囲は全てジャクソンに教えたのだろうが、黒く大きな瞳に不安そうな光がちらついている。的外れの推測に同僚が呆れているのではないか、と心配なのだろう。

ジャクソンは、すぐには未来に言葉を返さなかった。

柵の外側に停めたプリウスとダンプスターに、代わる代わる鋭い視線を走らせる。たっぷり30秒は空白を作ってから、彼は未来の顔を改めて見やった。

「確かに、それなら筋は通るな。ロボットは小型のものならトラックの荷台に十分積めるし、ワイヤーで固定したままでも、荷台でアームを動かすことくらいできる」

そこで言葉を切ったジャクソンが、やや上の空間を睨んでから再び言った。

「俺にも、この近くでロボットが動いてる音くらいは聞こえるな。」

距離はかなり遠いみたいだけど」

ロボットの駆動音は未来の耳にはらつきりと聞こえるのだろうが、強化の度合いが低いジャクソンには、ぼんやりとした音としてしか知覚できない。しかし、道路工事で振動ローラーのような工事車両が動く騒音は、それよりも遙かに大きく聞こえてくる。付近で作業をしていることは間違いなかった。

「犯人は、死体を運んだロボットをそういう場所に隠した可能性もある。全ての死体発見現場で、事件発生当時に近隣で道路工事をやっていなかったかどうか、確認した方がいいな」

「そうか、そこまでは考えつかなかったよ。そこに見慣れないロボットが紛れてなかったかってことも、調べた方がいいね」

ジャクソンに否定されなかったことに安心したのか、未来の声が少しだけ軽くなる。

ただし、彼女の顔に笑顔はない。状況が開けたことよって生じた新たな緊張の影が、表情を緩めるだけの余裕を一瞬でさらったのである。

「お前が言いたいののは、ブラックヘアでロボットが使われているとわかった以上、戦闘チームも捜査に加わる必要があるってことか」

ジャクソンが察してくれたのは、未来が喉の手前で止めていた言葉の一部であった。

「そうなるね。それともう一つ」

「ティアーズとブラックヘアに、大きな共通点が見つかったんだ。ウォーリーや隊長にもかけ合おう」

深刻そうに顔を上げる未来に、ジャクソンは大きく頷いて言葉を補う。

彼は未来の言いたかったことを、全て察してくれていたのだ。

「ありがとう、ジャクソン」

思いがけずこぼれたのは、黒人男性の同僚捜査官に対する礼の言葉だった。不意を突かれたらしい彼は一瞬呆気にとられ、次いでぶいとそのぼを向く。

「何だよ、気持ち悪い。俺に礼を言うのは、両方の犯人を捕まえてからにしろよ」

と、照れた態度がむしる根が純朴なジャクソンらしい。

ロボットというキーワードは、少し前まで点と点に過ぎなかったが、タイプが同じロボットが犯罪に使われるケースはそう多くはないため、それが線で結ばれて繋がっている。

二つの事件には、何らかの繋がりがあある可能性が出てきたのだ。杉田の行方に大きく近づけた可能性も、何より大きくなってくる。

しかし、杉田を確実に保護するためには今まで以上に慎重に行動する必要があつた。捜査の手が迫りつつあることを、決して犯人に悟られるわけにはいかない。だからもし戦闘チームが捜査に加わることがあつたとしても、未来が直接関わることを隊長が許さないだろう。

「お前がブラックヘアの捜査に加われるように、俺から直接隊長に頼んでみよう」

「ううん、それはいいよ」

ジャクソンの心の内を読んだかのような発言に、未来は反射的に首を横に振っていた。

「どうしてそう思うんだ」

「どうしてって……」

「お前、まだ自信がないとでも言うつもりなのか？」

彼女が口ごもったところへ、核心を突いた言葉が続く。

捜査中にもし、杉田の死を知ってしまったら。

もし、彼の無残な死体を目の当たりにすることがあつたら。

その場で発狂してしまうかも知れないし、悲嘆に暮れて銃で頭を撃ち抜くかも知れない。自分がどうなってしまうのか全く想像できないというのが、未来の正直な気持ちだった。

それだけに、現実を認める時が来るのが余計に怖い。

しかしそれは自らの精神的な弱さ、脆さを認めているようなものだ。そして、連邦捜査局が弱い者を受け入れてくれるような甘い世

界ではない、ということもわかっている。だからこそ、その一線を乗り越える勇気が湧いてこないのだ。

「まあ、無理にとは言わねえよ。ただ俺は、お前に後悔して欲しくないと思っただけなんだ」

黒い宙に舞う雪を苦い顔で見つめる未来に言ったジャクソンは、どこか遠い目をしていた。

彼も犯罪被害者の家族という立場だ。

どんな現実が待ち受けていようと、自分の手で真実に触れなければきつと悔やんでも悔やみ切れない。だから、この機会を無駄にするな。

そう言いたかったのだろう。

「気持ち嬉しいよ。でも……」

未来が戸惑いを押し隠して返しかけたところで、彼女のコートのポケットでプライベート用の携帯電話が震えた。慌てて黒い革のストラップを掴んで本体を引っ張り出すのが、青く光るディスプレイの表示に出ている名前は『Unknown』、つまり非通知の電話だ。普段であれば非通知の電話は取らないことにしているが、この会話を続けていたくないという不純な動機で、未来は電話を取ることにした。

ジャクソンを軽く手で制してから通話ボタンを押し、本体を耳に当てる。

「もしもし?」

未来が先に話し出すのが、相手の声は聞こえてこない。そのまま5秒ほど待ってみたが、やはり何も音がしなかった。

電話を当てている右耳だけ、感度を上げる。

すると空気が流れる雑音に混ざって、車のエンジンやガラガラと石の上で何かを引きずるような乾いた音、更に男性の声が一定の調子で何かを読み上げている声が聞こえてきた。

ひょっとして、ラルフに追われたソフィーが恐怖に駆られて電話をしてきたのではないだろうか。

携帯電話を取り上げられて、公衆電話から電話してきているのではないか。すぐに声が出せないのも、彼が近くにいるからなのかも知れない。

悪い想像ばかりが頭を横切っていく。

未来はソフィーの名前は出さないようにし、当たりをつけて言葉を選んだ。

「どこからかけてるの。自分の家？それとも実家？あの後、変わりはないの？」

矢継ぎ早に質問するが、電話口の向こうから聞こえてくるのは先と同じ雑音と、やや不規則に思える呼吸音だけだ。

不意に、ひゅっと鋭い空気の摩擦音が響く。

『俺たちにもう関わるな』

通話の主であつたらしき相手がそれだけを告げ、今まで聞こえていた雑多な音がぶつつりと途切れた。

ソフィーの声ではない。チープなバラエティ番組でよく聞いたことがある、変声器を通した重たげな男のそれだった。

わざわざ「俺たち」と自らが複数であることを教えてくれたのだ。最近未来の周辺でトラブルを起こしている人物など、ごく限られた者しかいない。心当たりなど、思い当たるのには一瞬あれば十分だった。

「誰からだ？」

寒さに身震いしているジャクソンが、終話ボタンを押して電話を耳から離れた未来に問う。

未来が今日ソフィーから聞いた話だと、ラルフはスーパーマーケットチエーンのクローガーに勤務していた筈だ。先の電話で聞こえた雑音は、店のものだったのだろうか。

携帯電話をポケットに滑り込ませた未来の中で、ジャクソンと交わしていた先の会話は続けるだけの意味を失っていた。

「そつえば、ラルフ・バーンズのことについて何かわかったことってある？」

「あ、ああ。ちょっと待ってくれ」

瞳をまっすぐに見上げてきた未来に突然満ちた迫力に圧された形で、ジャクソンが携帯端末を探った。

「傷害で、過去に一度しよっぴかれてる。まあ、よくあるバーのいざこざだったようだが」

「起訴はされてたの？」

「いや、不起訴で釈放されたようだな」

起訴されていなかったのなら、エミリオの体内に残されていた精液と一致するDNAの持ち主であったとしても、CODISに登録されていないことは間違いない。

ロボットを使う仕事場において、ソフィーに事件と同じ人形を送りつけ、友人である未来に声を変えて脅迫じみた電話をしてくる。

異常な行動を繰り返す男であるラルフを、これ以上野放しにしておくわけにはいかなかった。

未来がクローガーのソーンバーグ支店に足を運んだのは、皮肉にも最後に杉田と同じショッピングセンターの敷地内で園芸用品を買って以来のことだった。通い慣れた道を通って駐車場に車を止め、黒い買い物カートが群れを成して置いてある店舗の入口に向かうと、何故傍らに杉田がいないのだろうか、素朴な疑問に駆られて胸が重くなる。

喉元にせり上がってくる悲しみをぐつと堪え、未来はポケットに入れたFBIの身分証を握りしめた。足早に他の買い物客の間をすり抜け、クローガーの自動ドアをくぐる。

スーパーマーケットチエーンの一支店であるソーンバーグ店は、ファーマーズマーケットやカフェ、郵便局や日用品店と言った複数のショップが集まるショッピングセンターの一角にあった。

クローガーの入口を入つてすぐは、食料品の売場になっている。山積みになされたクラムチャウダーの缶詰やジュースの紙パックを見ると、今はいない男と二人で買い物に来ていた頃のことか嫌でも思い浮かんでくる。

しかし、自分の状況を嘆くためにここへ来たのではない。深い闇の中、ようやく見えてきた道を迷わず踏みしめるためだ。

ラルフ・バーンズが今日の早番であり、どの売場を担当しているかと言うことまでは、店長に問い合わせをして突き止めてある。その際は案内された商品について聞きたいことがある旨を伝えただけのため、強権を発動させるような真似はできないが、特に問題はないだろう。

ラルフが担当しているという日用雑貨のコーナーは、店の奥に位置していた。

他の客と同じように、高い天井に届くほど高い棚に所狭しと並べられたドッグフードや密閉容器、チャック式ビニール袋のロールや

トイレトペーパーなどを見て回る。

ゆっくり歩いている未来の足が5つ目の通路に入った時、棚の前にしゃがみ込んでいるラルフの姿があるのがわかった。品出しの最中らしく、ダンボールに詰まった洗濯用洗剤を次々と掴んでは棚に並べている。

未来は棚の商品を見るふりを続けながら、金属探知フィルタをオンにした。さりげなくラルフの全身をスキャンすると、ユニフォームである青いエプロンのポケットに忍ばせているらしい銃とカッターナイフの形が、紫色の光となって浮かび上がってくる。

武器に使えるようなものはその程度で、銃は所持していない。

そのことを確認して頷くと、未来は足早にラルフに近づいた。

「ラルフ・バーズだね」

フルネームを女の硬い声で呼ばれ、ラルフはしかめ面を上げた。

「誰かと思えば、あのチビか。何しに来た」

背後に仁王立ちしているのが何かと突っかかっていた女だと知り、への字に結んでいた口許から鋭い舌打ちの音が漏れる。それを聞き咎めた未来は、余計に神経を逆撫でされた気がした。

「買い物に決まってるでしょ。それが客に対して取る態度なわけ？」

棘を含んだ女の声が上から振ってくるのが鬱陶しいらしく、ラルフは立ち上がって在庫確認用の端末をエプロンのポケットから取り出した。

「俺は給料分の働きしかしねえ主義だ。とつとと失せる。てめえの顔を見てると、反吐が出そうだ」

「じゃあ、遠慮なくその辺に吐けば？どうせ掃除すんのは、あんたなんだし」

皮肉そうに未来が顔を歪めて笑うと、端末を操作しようとしたラルフの手が止まる。

「あんたに聞きたいことがあるんだけど」

「売り場案内なら、他の奴に聞け。俺は今忙しいんだ」

「あんたに話があるって言うてるでしょ。店長の許可は取ってる

よ。ある女性に対してつきまとい行為を繰り返してる件で、内密に話がしたいってね」

あくまで強気な態度を崩そうとしない未来に、ラルフはようやくまともに視線を合わせてきた。その瞳に強い敵意が宿っていることは、一目でわかる。流石に他の客の目があるところで話すのはまずいと思っただのか、彼は未来に自分の後をついてくるようにぞんざいな手振りで示してから歩き出した。

二人が足を止めたのは、クローガの出入口を抜けて建物の裏側に回った、人が全くない倉庫の出入口の陰だった。午後の低い陽光は当然建物の中に届いておらず、薄暗い電灯のせいで一層寒々しい。

窓がない灰色の壁とダンボールに囲まれた倉庫の中をさりげなく確認した未来の目が、ある一点に留まる。

奥の暗がり、黒光りするロボットが威嚇するように控えていたのだ。

型は一般的な中型汎用タイプの一人乗りで、様々な現場で使用されているものだった。足に当たる部分がタイヤになっているため小回りが利き、目的に合わせて二本のアームパーツも交換できることから、状況に応じた使い回しが可能である。

ティアーズとブラックヘアの犯行に使用されたのも、同じタイプだ。

そして被害者の遺体には、スーパーの倉庫で頻繁に見られる微生物が付着していた。

まさかラルフは、こちらを脅迫する気でののか。

未来は、心臓が大きな音を立てて肋骨にぶつかった気さえた。意識せず膝が緩んで、大きくジャンプする直前の猫の如く、いつでも動けるよう身構えた姿勢となる。

彼女の前では半袖のポロシャツとジーンズといういでたちのラルフが、ロボットを背にして立っていた。沸点の低い怒りを今にも爆発させそうな形相で、未来の小さな全身をじろりと睨んでくる。

「お前がソフィーの件で、俺に何の用だ」

「とぼけないでよ。女の顔を痣がつくまで殴っておいて、ただで済むとも思ってるの？」

「あいつは感情を抑えられなくなると、刃物を投げってくるような女なんだぞ。だから力づくで言うことを聞かせたまでだ」

対する未来は気丈にラルフを睨み返して言い放ったが、ラルフのソフィーに触れた発言を意外に思っていた。恐らく、ソフィーが身の危険を感じて必死の反撃に出た際のことを誇張しているのだろう。

この手の人間は虚言と自覚しない嘘、つまり本人が空想したことを現実と思いこんで他人に吹聴することがよくある。普通ならこころりと騙されるところだろうが、未来は生憎その手に乗らなかつた。

「彼女はあんたを怖がってるんだよ。そもそも、あんたがソフィーとちゃんと別れば、そんなことにはならなかつたはずじゃない。

それに彼女に怪我をさせた時点で、立派に傷害罪になるんだから。つまりもう、あんたは犯罪者なんだよ。いつ警察に逮捕されたつておかしくないんだってことを、いい加減に自覚しなよ」

あくまでソフィーの友人として警告する未来の表情は厳しく、言葉も強い。

だが、ラルフ鼻で笑って目の前の小柄な女の脅しを一蹴した。

「あんな後ろ暗いところがある奴が、警察に届け出たりするかよ。あいつにはもう、俺しかいねんだ」

「随分と自信満々じゃない。ごみを漁ったり、プレゼントを押し付けたり、散々嫌がらせしておいて。まあ、ここ一週間くらいは大人しかつたみたいだから、私も油断してたけど」

未来も負けずに嘲笑を浮かべると、あからさまに馬鹿にした目つきでラルフを一瞥し返した。ラルフは間違いなく未来を格下の相手だと見下げていおり、捜査官であることに全く気づいていない。挑発すればするだけ、こちらの望む情報を吐き出してくれるだろう。

しかし、相手を怒らせる才能はラルフも負けてはいなかつた。

「ソフィーのボディガード気取りか？だとしたら、お前も相当なお

人好しのバカ女だぞ。かわいそうにな、まともな友達が一人もいないってのは。お前の頭が余程弱いのか、周りの連中が友達を選べないかのどっちかなんだろ」

自分は素晴らしい仲間恵まれていると自負しているだけに、未来にとつて今の文句は彼らのことまで馬鹿にされたような気がして、癪に障ること人一倍だ。

彼女は上がりかけた溜飲を下げ、軽く息を吸ってから違う話を振ることにした。

「あんた、ここでずっと働いてるわけ？」

「3年前からだ。売り場じゃ俺が一番の古株だからな。この店の連中に俺の悪い噂をばらまこうつたって無駄だぞ。俺の実力は、この店で一番なんだからな。前に他の店の店長候補になったことがあったんだが、どうしてもここで働いていて欲しいからって、店長から頭を下げられたくらいなんだ。まあ、そこまで言われちゃあ仕方ねえからな。俺がいるからなんだよ、この店が潰れずにいられるのは」と、未来が聞きもしないことを、ラルフは唾を飛ばして大きな身振りと共に熱を込めて語った。

自分のことを話すが、何よりも大好きなのだ。

自らがいかに優れた人間かを相手に聞かせ、絶対的な賞賛を欲しがるのである。

彼の歪んだ自己愛にまみれた熱弁は、嘗ての未来の母を思い起こさせた。記憶に上らせることにさえ嫌悪感を覚える出来事が頭の中を掠めていき、未来は表情を保つのに余計な精神力を使わねばならなかった。

彼女は何とか取り繕った無関心の仮面をつけたまま、ラルフに話を続けさせるべく言葉を補っていく。

「ふうん。じゃあその人たちも、あんたがロボットを使わずに力仕事できるってことは、知ってるわけだ」

「当たり前だ。俺はここに来る前、工事現場でも働いてたんだからな。ロボットの操縦くらい寝てたってできるが、あんな機械なんざ

信用しねえんだよ」

背後に控えているロボットを振り返ると、ラルフの話しぶりはより尊大かつ傲慢になった。大きな力を持っているロボットが背中を守ってくれるとも思っているのだろうか。

だが、幸いラルフは未来の立場に何の疑いも抱いていないらしく、個人情報曝け出すことへの警戒心も全くないようだ。未来が引き出さねばならない情報の本題はここからだだったが、これなら難なく必要なことををべらべらしゃべってくれそうな印象である。

思いを寄せる相手につきまとうような真似を繰り返す者の根底にあるのは、自分に対する自信のなさだ。だから素の姿を恋人が愛してくれないと考え、一度思いこんだら執拗にしがみつく。

そして彼らは自らを支えてくれる強さを持たないが故、自分は偉大な人間であると暗示をかけ、そこにすがらざるをえない。そうしなければ、弱い自分を守ることができないのだ。

ありがたいことに、そこにつけ入る隙はいくらでもある。

おだてて調子に乗せるのも手だが、逆にけなして違う側面を突くのもありだ。

未来の口許が歪み、小馬鹿にした笑いと悪意を込めた突っ込みが入られる。

「へえ、信じらんないね。だってさ、大口叩いてる割には貧相な身体じゃない？」

「……何だと？」

力仕事をし、ジムにも通うラルフの一番の自慢は鍛え抜いた身体であろう。

他にこれといった取り柄がなければ、この挑発には必ず反応するはずだ。

そう未来が読んだ通り、ラルフの眉が見る間に吊り上がっていく。瞳のサーモセンサーをついでに入れると、彼の顔が高温であることを示す真っ赤に変わっていくのがわかった。怒りのために血流が活発になり、まさに「頭に血が上った」状態になったのだ。

更に彼を怒らせるつもりでいる未来の悪口雑言は続く。

「それにそのロボットも操縦しないんじゃないかと、本当はできないんでしょ。口でだけなら、何とでも言えるからね」

「このガキ、言わせておけば！」

ラルフの怒声が倉庫に響き太い腕が躍りかかってきたが、未来は僅かに身体を逸らしただけでやすやすとかわした。彼女の細い身体を捕らえ損ね、それならばと突き出された拳も、小さな顔を掠めもせずに空しく通り過ぎていく。

続けて繰り出された足蹴りもあっさりとよけられ、見事に空振った足は未来の後ろにあった発泡スチロールの空箱を崩しただけだった。大きさだけが派手な軽い音と共に、幾つもの白い箱が地面へ投げ出される。

普通の女性なら、ラルフのように大柄な男が襲いかかってきたらそれだけで恐怖に駆られるだろう。が、残念なことに未来は普通の人間ではない上、軍事訓練を長きに渡って受けた身だ。彼女を相手に素人がいくらいきり立ったところで、むずかる子どもの鼻息程度にしかならない。

「殴ってみれば？従業員が客に手を出したらどうなるか、あなたの足りない頭でもわかるでしょ。あ、今の時点でもう暴行罪が成立しちゃうね。きつと」

両手をコートのポケットに突っ込んだままで身を翻していた未来の言い方は、聞かん坊な弟に優しく言って聞かせる姉を思わせる。

若い女から明らかに見下されていることを思い知らされ、ラルフはますます激昂する様子を見せていた。

「ふざけるな、そっちがやらせたんだろ！いい加減にしねえと、本当にロボットでつまみ上げて道路に放り出してやるぞ！」

確かに未来はわざとラルフを激怒させたが、他に目撃者がいないこの状況で不利になるのは彼の方である。過去に喧嘩で警察の世話になったことがあるのだから、その辺りのこともわかっている筈だ。「ふんだ！そんなの、先に手を出した方が悪いに決まってるじゃない

い。それもでかい男がこんなちっこいのが向かって暴力を振るつたんなら、尚更だよ。出るところに出たら、負けるのはあんたなんだからね」

痛いところを突かれたらしく、ラルフは怒りに燃える目を未来に鋭く向けつつも、一旦足を止めた。

未来は逆に、彼にもう少し喋ってもらわなければ困るところだ。まだ怒らせ足りないと言ふことなのだろう。まだまだ攻撃の手を緩めるわけにはいかない。

彼女はラルフに半歩近づいて上目遣いになると、子どもが大人をあげつらうのと同じ要領で、憎たらしい笑顔を作った。

「どうせ先週だって、フデイズにもひとりぼっちで行くのが辛くて引きこもってたんでしょ？そりゃ、あそこでも女の尻ばかり追っかけ回してたんだからさあ。健全な精神を持つ人が集まる場所で、友達なんてできるわけないよね。じゃなきゃ、急激に締まりがなくなるわけないんだから」

愛らしい顔で生々しい毒を吐き、それが見事に相手の急所を突いているのだから、悪口の技術は未来の方がラルフより何枚も上手だ。にやにやと生意気な笑顔をしみつかせている未来に、ラルフが抱えている堪忍袋の緒はあっさりと二度目の臨界点を突破した。

「インディアナポリスに、おふくろの世話をしに行つてただけだ！」先よりも盛大な怒号を轟かせ、ラルフが未来に再度掴みかかる。

感情の爆発に任せて飛びかかってくるのだから、申し訳ないほどに隙だらけだ。

未来は薄暗い電灯の下でひらりと鮮やかに身をかわし、猛牛の如き突進をいなした。

「ほら、凶星じゃない。やっぱり友達がいないんだ」
避けるついでにとどめの一言を、ラルフの大きな背中目掛けて放つ。

未来が確かめたかったのは、エミリオが殺害された前後にラルフがどこにいたかということだった。彼は今のところ犯人に近い重要

人物という位置にいるが、そろそろその行動や発言についての真偽をはつきりさせておかねばならないところまで達している。疑わしい場合は任意同行を求めることが出来るだろうし、行方不明の杉田の所在も判明する。

とりあえず情報は引き出せたのだからこの辺りで一度引くべきだと未来は考えていたが、むしろ問題なのは、ラルフが腹の虫を治めていなさそうなことだった。自分よりずっと小柄で、社会的地位などないに等しい若い女に振り回されっぱなしなのだ。彼が苛立ちを募らせるのも、当然と言えばそうだろう。

腕を捕らえることさえできなかった未来を睨みつけるラルフの目は、獲物を獲り逃した猛獣さながらである。今にも唸り声を上げそうな口から出た罵りの言葉は、憎悪にまみれていた。

「くそっ、てめえが出てきてから全部がおかしくなってきたんだ。

ソフィーの奴、あからさまに俺に逆らうようになりやがって。あいつはクズ女だが、あいつに付き合うお前もクズだ」

悪党には似合いの口汚さだ、と未来は心で悪態をつきつつ言い返した。

「クズで結構。私がクズなら、あんたはごみだよ。どうせ私の携帯番号だって、ごみでも漁ったついでに見つけたんだろ」

まだ油断なく身構えている未来が指したのは、前日の捜査でジャクソンと一緒にいる時にかかってきた電話のことである。

もとより悪いことだとは思っていないのである。凶星を突かれても、ラルフは全く動じていない。

「あいつが悪事を働いてないか調べてたんだ。その何が悪い」

「悪事って何だよ？」

鼻で笑いそうになりながらも、未来は答えを促すことにした。

「あいつは尻軽で、最近別の男のところを頻繁に行ってる。それでも許してやってる俺は寛大なんだ。あいつをこんな目で見られるのは、俺ぐらいしかいねえんだぞ」

やはり彼の回答は予想通りで、自分勝手極まりない解釈である。

ソフィーは、周囲の男が放っておかないタイプの女性だ。恐らく今回の件で、大学の男友達にでも相談していただけなのだろう。それを勝手に浮気だと決めつけているのだ。

浮気どころか、彼女の気持ちはとくに離れているのだから、それ以前の問題である。

似たような者は、フレデリックスバーグ駐在事務所の市民用相談窓口にもよく現れる。妄想と現実の区別を全くつけられなくなっているこの手の輩は、質が悪いことこの上ない。

未来は溜息をつきたい本音を押し殺し、言っても無駄であろう決まりきった台詞を口にした。

「そんなの、とつくにソフィーの心が離れてるって証拠でしょ。彼女は怖がって、あんたと完全に別れたがってるんだよ」

「それは全部あいつの演技だ。てめえがソフィーに騙されてるんだよ」

未来の眉が僅かに動いた。

これもよく聞くお決まりの台詞には違いなかったが、ソフィーの曖昧な態度は確かに目に余るところはある。

目の前の女がとつさに反撃してこなかった空白を掴んだラルフは、更に続けた。

「おおよそ、お前もソフィーに泣きつかれたんじゃねえのか？あいつはいつもそうだ。俺のあることないことを吹き込んで自分が困ったことになってるって言って、すっかり相手を信用させちまう。それがあの女の恐ろしいところなんだよ」

今度は、未来の眉間に皺が寄った。

ラルフが無意識のうちに自身のことを指して喚いているもの今まで思っていたが、ソフィーを主語に置き換えてみても、どこことなく話に通ることに気づいたのだ。考えてみれば、彼女が悩みを打ち明けてこなければ、短期間のうちに彼女とここまで接近はしなかっただろう。

最初に彼女の力になろうとしていたのは、杉田だった。

彼との仲がおかしくなりだしたのも、その頃だった。

もしソフィーもラルフと同じような人格障害を持っており、目をつけた者の信頼と人間関係を壊して支配しようとしていたのなら？ そのせいでラルフの手に余り、別れ話がつれていたのでしたら？

そして何より、悩みを利用して杉田と未来を引き裂こうとしていたのだとしたら？

自分が彼女の正体を見抜けず、ずっと掌の上で転がされていたのだとしたら？

恐ろしい仮説が、未来の中に疑念となつて一気に湧き上がってくる。きつと、瞬間的に顔も青くなっていたに違いない。

「今のうちに何とかしないと、てめえもそのうち男を寝取られるぜ。悪いことは言わねえから、あんなのと付き合うのを止めな。あいつには俺しかいねえんだよ」

未来の顔色が変わったことから敏感に彼女の胸の内を見抜き、こぞとばかりにラルフが攻撃に転じてくる。

が、この程度で心が折れるほど、未来は弱くない。彼女は瞬時に我を取り戻し、声も荒げることなく返そうとした。

「それは自分自身のことなんじゃないの？ 周りに相手を悪く言っておいて……」

「ソフィーどころの話じゃねえ。あんまり人のことにかまけてると例の殺人事件みたいに二人まとめてバラバラにされるかも知れねえぞ」

未来を遮り、ラルフが鬼の首でも獲ったかのように勝ち誇った時である。

鈍い音が、彼の耳のすぐ横で上がった。

鼓膜にその名残りとあると気づいた時には、彼の6フィート（約180センチ）を越えるがっしりとした身体が仰向けになって宙に浮いていた。一瞬遅れて、頭全体に重い衝撃が響く。

ラルフが目の前の小柄な女に顔を拳で殴られ、身体ごと後ろに吹

つ 飛んだのだとおぼろげに理解したのは、彼の身体が隅に積み上げ
たごみ箱の上に落下してからだった。

ラルフの横っ面に右の拳を叩き込んだ未来自身も、自分が何をしたのか全く自覚できていなかった。

彼がティアーズのことに触れた途端、反射的に身体が動いてしまったらしい。

誰も、杉田の死を思い起こさせることを言うてはならない。

まして、犯人の可能性が高いラルフが取り調べ以外で発言することなど、許されるはずがない。

下手をすれば精神破壊をも招きかねない言葉を、聞いてはならない。

恐らく未来の深層で自己防衛本能が働いて、ラルフを強制排除しようとしたのだろう。

しかし、やはり強い動揺のために力加減をコントロールできていなかったようだ。

その証拠に、優に5フィートは殴り飛ばされたラルフが呻きながらもすぐに身を起こせているのである。

あの男に、何かを言わせてはいけない。

未来は尚も運動神経に直接命令を下してくる言葉なき声に、逆らうことができなかった。ごみまみれで必死に立ち上がるうとしているラルフに、無言のまま歩み寄っていく。

「……この、ガキめ。よくも、やりやがったな」

赤く腫れ上がった顔の左半面を襲う激痛を堪え、やっとの思いで面を上げたラルフが息を飲んだ。

目の前で埃だらけの地面を踏みしめて見下ろしてきている若い東洋人の女の黒い瞳は、どこまでも果てが見えない闇を思わせるほど不吉だった。

何の感情もなく、ただ本能が赴くままに。

そうする理由はありもせず、必要だからお前を殺す。

声もなくただ立っているだけなのに、彼女がそう言っているのがラルフの頭の芯まで響いてくる。

殺意が不気味な青白い光に形を変え、細い指先から迸っているようにさえ感じられた。ばちっ、と火花が散る音もかすかに聞こえたのは錯覚だろうか。

「やめて、ヨーコー！」

その時である。

突如として割り込んできた別の女の悲鳴が硬直した空気を打ち、空間を震わせた。

その場にいた男女がよく知るその声は、彼らの止まりかけていた精神に理性という動きも与えることになった。

「ソフィー！何で、こんな所に来たの！」

ぴしゃりと頬を叩かれたように我に返り、未来は叫んでいた。遠のいていた意識が自我の中に勢いよく引き戻され、指先に纏っていた200万ボルトの高圧電流も同時にかき消えている。

「お願いだから、それ以上はやめて。この人を傷つけては駄目よ！」
迫力のある未来の怒鳴り声など意にも介さず、後ろから走ってきたソフィーが身体ごと腕にぶつかってきた。温かさと柔らかさがある友人の身を感じ、今更ながらに未来の背筋にどつと冷や汗が湧いてきていた。

危なかった。

もし本気でラルフを殴打していたら、ただの一撃で頭蓋骨を粉砕し、彼の頭は割れていたに違いない。奇跡的に即死を免れたとしても、未来の電撃をまともに喰らっていれば生きていられるはずがなかったのだ。

その意味では、理性を呼び戻してくれたソフィーの行動に感謝しなければならぬかも知れない。反面、まだ全力で腕にしがみついて争いをやめさせようとしている彼女は、鬱陶しく動きを妨げてもいた。

ソフィーがラルフに手を出す素振りがないことだけを確認してか

ら、未来はラルフの方を振り返る。彼は軽い脳震盪を起こしているらしく、まだ満足に動けないようだ。ごみまみれの頭を揺らし、倉庫の奥の壁に手をつけて、何とか立ち上がるうとしているのが薄暗がりの中に見える。

「大丈夫だよ。もうこれ以上、ラルフには何もしないから」

まともな肉弾戦を挑んだら未来にとても敵わないことは、ラルフも先の一撃でわかっただろう。これ以上、余計に事を荒立てるつもりは未来にもない。店側にこのことが伝わって騒ぎになってしまつたら、その分後始末も厄介だ。

未来が未だ腕を絡めたままにいるソフィーに、やんわりと手を離すよう促した時である。

彼女たちの耳にどんよりと暗く、濁った怨嗟に満ちた呻きが届いた。

「許さねえぞ……てめえら二人ともまとめて、地獄に送つてやる」
今まで耳にしたラルフの怒声とは明らかに質が違う、ぎらつく殺意を感じさせる声だ。

慌てて未来が振り返り、倉庫の奥へ焦点を合わせる。

彼女がソフィーに気を取られている間にラルフはロボットの足元まで這い進んでおり、操縦席によじ上ろうとしていた。彼の行動を予測できていなかった未来の身体が緊張にこわばって、反応が僅かに遅れる。

ラルフが操縦席に潜って制御用コンソールに指紋を読み取らせるのには、その一瞬があれば十分だった。一時的な主を認めたロボットの心臓部に動力が供給され、小さく硬い音が断続的に黒いボディから上がり、コンソールがぼんやりと緑色に光り始める。長い二本のアームと脚部にも途切れていた活力が流れ込み、動きを止めていたそれらは唸りを上げるモーター音で意識を取り戻したかのように、細かく震えていた。

「くそっ！」

反射的に身構えた未来は、とっさにソフィーを背後に庇って悪態

をついた。

ここでロボットを相手に戦うのは、いくら何でも被害が大きくなりすぎてしまう。加えて、今は武器を何も所持していなかった。今更捜査官の身分を明かしても逆上されるだけだろうし、こちらから先に手を出したこともあって、大事にするのはまずい。

となれば、取る手段はただ一つだ。

「ごめん、私の肩にしっかりとつかまってて」

「え？ち、ちよっと、ヨーコー！」

いきなり女友達の細い肩へ後ろ向きにひよいと抱え上げられ、ソフィーが困惑の声を上げる。

彼女が驚いて足をばたつかせる前に、未来は力強く地面を蹴って走り出していた。

倉庫の間の狭い通路を抜け、建物の裏を横切り、その間に転がるごみの山やダンプスターの上を軽やかに飛び越え、一陣の風の如き速さで疾走する。

その人間離れた身のこなしに、ソフィーはただ口を目をぼつかり開けることしかできなかったようだ。サイボーグが有する肉体力の一部を一般人に見せることになってしまったが、素手でロボットと互角に渡り合う姿より幾分かましだろう。

不謹慎ながらもそう考えた未来の足が止まったのは、数十秒後にショッピングセンターの広大な駐車場の隅に辿り着いてからだだった。周囲を見渡してみても、こちらに注目している者は誰もいない。続いて聞き耳を立てたが、後を追ってくるロボットの駆動音も感じられなかった。あつと言う間にこちらの姿が見えなくなったこと、一般客用駐車場にあの大きさのロボットが来るには必ず店内を経由せねばならないことが幸いしたようだ。

ほつと息を吐き出した未来は、肩の力を抜いてソフィーを慎重に地面へ下ろした。

「ごめんね、荒っぽいことしちゃって。大丈夫だった？」

駐車場に自分の足で立つてもまだ啞然とした表情を隠し切れてい

ないソフィーだったが、心配そうにしている未来の顔を見て我に返った。

「え、ええ。何とか……けど、ヨークこそ平気なの？私、結構重いよ」

「うん。まあ、これぐらいならね。鍛えてるからさ」

鼻の頭を指先で掻きながら視線を逸らした未来は、どう頑張っても口ごもってしまった。肉体能力について、これ以上突っ込まれることは避けたい。

彼女は何食わぬ顔で明るい表情を作ると、やや高い声でソフィーに質問した。

「それよりソフィー、どうしてここにいるの？ここ、リッチモンドからは結構遠いのに」

「だって……昨日のヨーク、すごく怒ってたみたいだから。朝から何度か電話してたのに、一度も繋がらなかったし。きっとここに来てるんだって思ったの。本当に心配だったんだから」

「え、本当？」

驚いて目を丸くした未来に、ソフィーは頷いた。

「たまたま貴女の車が電波の悪いところを通ってたのね、きっと」
「そっか、ごめんね」

いい答え方を思いつかなかった未来は照れたように笑って見せたがソフィーの話には違和感が残った。

このショッピングセンターは州間道路であるインターステート95を降りてすぐの場所に位置し、未来と杉田の自宅から1時間もかからない。周辺には住宅地が集まっている大きな道路沿いであるが故、携帯電話の電波状況はさほど悪くないのだ。

なのに、ソフィーからの着信は1度も履歴がない。

他の誰かに間違っかけて続けたのだろうか？

頭の隅に引つかかっている疑問は小さなものだが、ソフィーという女性と一緒にいると、この妙な感覚を覚えることはしばしばある。ただ、それが何であるかまではわからない。

筆筒の隙間に入り込んだコインに精一杯腕を伸ばして取ろうとするが、どんなに頑張ってみても取れない。そんな時のもどかしさによく似ている気がした。

「それにしても、ヨーコがあんなに強くて力持ちだなんて知らなかったわ。何かやってたの？」

「ああ、ちよつとばかりカラテをね」

そして、呆然状態から抜け出したソフィーは一転して興奮気味である。明らかに言葉を濁して苦笑いする未来に、彼女は潤んだ尊敬の眼差しを向けていた。

「すごいわ。本当に私のボディガードになつて欲しいぐらいよ」

「ううん、私は興奮しやすいからね。喧嘩は強いかも知れないけど、ボディガードはちよつと難しいかもよ」

「そういえば、まだ息が荒いみたいね」

まともに目を合わせることを避けている未来の顔を無遠慮に覗き込んで、ソフィーが首を傾げた。

赤毛に囲まれた人工的な緑色の瞳は、やはりカラーコンタクトの色だ。

未来の呼吸は全力疾走で走つたためにまだ乱れ気味だったが、作りもののような眼差しで見つめられると余計に落ち着かなくなる気がしてくる。

ソフィーは瞳孔の大きさが変わらないその目で暫し未来の顔を見つめてから、不意になつこりと笑つた。

「ねえ、今からうちに来ない？ラルフもあれで懲りただろうし、お礼がしたいの。本当にすつとしちゃったわ」

そして先に諍いに割って入つた時にやったように、未来の腕を取る。

突然の申し出に、面食らつたのは未来である。

「え……いやまあ、ここを早く離れるのは賛成だけど。まだラルフが私たちを探してるかも知れないし」

と、東洋人の友人が戸惑いを示していることに気づいたのだろう。

やや声を落とし、それでも笑顔を浮かべてソフィーは言った。

「いけない、何だか私も興奮してるみたいね。うちに、高ぶった心を鎮めてくれるパッションフラワーのハーブティーがたくさんあるの。私が焼いたケーキもあるから」

自重する素振りを見せているがはしゃいでいるソフィーは、強引に引いている未来の腕を離さない。

彼女の浮かれっぷりが普通に見えないのは、目の前で暴力沙汰があったせいなのだろう。自分の身を脅かす状況に陥った場合は怯えたり、パニックに陥るのが一般的と考えられているが、シヨックから自分の精神を守るために敢えて陽気になる者もいるのだ。ソフィーも、怖い思いをした反動が現れているだけなのかも知れない。

「それはいいけど、今日授業はないの？」

「ええ。だからこっちに來られたのよ」

一応未来が窘めようとはしたが、嬉しそうに応えたソフィーは未來を招くのが楽しみで仕方ない、と顔に書いてある。

しかし今はラルフが動きを見せていなかった時期の動きが判明しかけているだけで、全体的には特に何かが変わったというわけではない。むしろ、彼を怒らせたことによる報復に用心しなければならぬのだ。

「私の車、一度見せたからわかるわよね？1時間もあれば着くから」
そして、ラルフが叩きのめされて万事が解決したと思いついて入るらしいソフィーを放っておくわけにも行かなかった。

「わかったよ、案内はよろしくね」

やっと友人が同行を承諾すると、ソフィーは幼い少女のような無邪気さを窺わせる笑顔で頷いた。足取りも軽い赤毛に黒いコートという目立つ後ろ姿に、未来がついて行く。

たっぷり数分は歩いたところで、つい昨日見たばかりであるシルバーのフュージョンを広大な駐車場の中に見つけることができた。偶然、未来のフォードが隣の列に停めてあったことに驚かされる。未來はソフィーのフュージョンについていくことを手を振って示す

と、乗り慣れたダークブルーの車体に滑り込んだ。

念のため、助手席の下に隠したホーネットのグリップを手探りで確かめる。45口径の大型拳銃が持つ手触りは、未来の心に確かな安心をもたらしてくれた。

ホーネットの下に、コートポケットから出したFBIの身分証も突っ込んでおいた。もしラルフがしつこくソフィーの自宅まで追いかけてきたら、その時こそ身分を明かして逮捕できるだろう。

更に彼女は、エンジンをかける前に聴覚レベルを上げた。

周囲の買物客の話し声と足音、カートや台車の車輪が地面をこする音はひっきりなしに上がっているが、こちらに近づいてくる気配があるロボットの駆動音はないようだ。

軽く息を吐き出してからコートを脱ぎ、ポケットに入っていた業務用の携帯電話をダッシュボードの脇にあるホルダーへ放り込む。

「相棒に繋いで」

未来がエンジンをかけながら呼びかけると、即座に音声認識システムが反応してジャクソンの携帯電話に発信を開始した。数回の呼び出し音の後、聞き慣れた同僚の太い声が本体のスピーカーから上がってきた。

「ミキか。どうした？」

電話をホルダーに差したまま、未来は通話を続ける。前に行くシルバーの車体にソフィーの後ろ姿を認め、彼女はのろのろと駐車場を進んでいった。

「ちよつと調べてもらいたいことがあるのと、今日の予定を変更して欲しいんだ。そうだね、3時間もあれば足りるかな」

「何があつた？」

ジャクソンが怪訝そうな声になる。

未来が手短に事の顛末を話している間に、彼女らが運転する車は駐車場から一般道路に乗り入れていた。

「おいおい。俺たちの力で人間をぶん殴ったら、始末書どころの騒ぎじゃねえだろ。ちよつとは自重しろよ」

まるでジャクソンが首を横に振り、大げさに呆れているのが目に見えるような抑揚がつけられた声が車内に響いて、エンジン音と混ざる。彼が隣にいるときと同じように、未来は口を尖らせて反論した。

「だからちよつと平手打ちしただけだし、ちゃんと手加減もしたつてば。で、問題のラルフ・バーンズが先週本当にインディアナポリスに行つてたのか、調べて欲しいんだけど」

言いながら、未来がゆっくりとブレーキを踏む。ソフィーの車はすぐ前で信号待ちのために停まっていた。

この交差点を越えれば、間もなくインターステート95に上がることになる。リッチモンド方面にまっすぐ南下し、その後は東に向かうことになるだろう。

「それはわかった。しかし、ラルフが女のところにお礼参りに行く可能性もあるな。所轄の警察に連絡を入れて、ラルフの周辺を見張らせておこう」

「まだ警察は動かさないほうがいいと思うけど」

ソフィーの車の速度に合わせて未来はクラッチとアクセルを交互に踏み、ギヤを変えた。アメリカの一般的な車はオートマチックが殆どだが、日本でもマニュアル車を愛用していた彼女は、この一台の中古車を捜すのにも苦労したのだ。

クワンティコのオフィスにいる様子のジャクソンは、肩に電話を挟んで話しているらしい。カタカタとキーボードを打つ音が声に重なっていた。

「奴はもう女に対する傷害と、お前に対する暴行未遂とで立派な再犯候補者だ。警察の監視をつけることぐらい、特に問題もねえだろう」

「じゃあ、そつちは任せるから。なるべく目立たないようにやっつね」

余計な未来の一言に、ジャクソンが突っ込みを入れてくる。

「それはお前もだろ。念のために、特殊通信のスイッチは入れてお

「だよ。いざつて時に、そつちの会話の様子がわかるだけでも違うからな」

「あれっ？私の装備のこと、知ってたんだ」

未来の特殊通信は便利だが、外見から実装が判別できる装置ではなく、使用時も目立つものではない。まだ調整中の装備をジャクソンが知っているというのは意外だった。

「当たり前だろ。本部にいるときは、いつも俺がエマの仕事を手伝わされてるんだぞ」

如何にも仕方なくやっていると言いたげだが、ジャクソンの態度からは本気で面倒がつている時の苛立ちはあまり伝わってこない。未来はにやりとして言った。

「文句言ってる割には楽しそうじゃない」

「余計なお世話だ。くそっ、早く俺も外に行きてえな」

エマの手伝いは嫌でなくとも、彼がデスクワークに飽き飽きしているのは本音のようだ。

いつもであれば、この先は退屈しているジャクソンの愚痴に付き合わされることになる。こちらは運転中ということもあるため、早々に通話を終わらせる方が良さそうだった。

「じゃ、そういうことで。また夜の7時に本部でね」

未来は相棒からの返事を待たず、ダッシュボードに手を伸ばして携帯電話の終話ボタンを押した。

車はその間にインターステート95の入口まで来ていた。

さほど混雑していないハイウェイの上り車線に入ると、ソフィーと未来の車が揃って速度を上げる。時速60マイル弱程度で速度が安定してからは退屈な運転となったが、オートドライビングシステムに切り替えていないだけだった。

ハイウェイの両脇には灰色っぽい冬の枯れた草地が広がり、その合間にぽつりぽつりと家がある程度で、何とも物悲しげな印象だ。空も雲に覆われてきたようで、大地全体が薄い影の中にあるように見える。

それは未来の心も一緒だった。

ラルフを警察の監視下に置けるようになったのはいいが、まだ決定的な証拠に欠けている今は、任意同行を求めたり逮捕するまでに至らない。状況証拠であれば一通り揃っていることが、歯がゆさに拍車をかけていた。

未来の視線が、ちらりと助手席に置かれた真新しいベージュのシートに送られる。右のポケットに、予めクローガーの倉庫の床を擦ったセロテープを忍ばせた証拠品袋が収まっているのだ。これに付着している微物をクワンティコまで持ち帰って鑑定し、ティアーズの被害者の身体から検出されたものと比較すれば、より多くのことが判明するだろう。

それに、自分の後頭部にも網膜画像記録用のメモリを差し入れてあった。先の倉庫での揉め事や使用されているロボットの姿も、全てこれに書き込まれている。

未だ光が差さない胸の内を、これらの証拠品が必ず照らしてくれる筈なのだ。決して悲観するべきではない。

ソフィーの車を追う未来の気持ちは、早くもCVC本部に向けられていた。

二人の女性が駆る2台のアメリカ車がアイレットの住宅街に着いたのは、午後2時を回った頃であった。まずソフィーが私道に乗り入れて車を停めてから、未来には建物の裏側に車を置くよう身振りで示して見せる。

ソフィーが住んでいるアパートは煉瓦と白漆喰を組み合わせたメゾネットタイプで、彼女の住まいはその一番左端に当たっていた。未来が日陰になっている裏手から出てくると、土と芝生の香りがふわりと漂ってくるのがわかり、周囲が静かで落ち着いた住宅街であることが感じられる。アパートの周りは常緑樹に囲まれていて道路から見え辛いが、これが常に住民たちのプライバシーを守ってくれているのだろう。

ここに辿り着くまでプールつきの家も多く見かけたことから、生活に余裕がある市民が暮らしている場所であることが想像がつく。このアパートも、学生の一人暮らし用としてはかなり贅沢な造りに見えた。

ソフィーがポーチで防犯ロックを解除し、櫛のドアを開けてから未来を手招きした。

「さあ、入って」

「どうぞお構いなく」

「とんでもないわ。ヨークは私の恩人なんだから、ゆっくりしていいってね」

ぎこちない笑顔を浮かべた未来が、ソフィーに従ってどっしりとしたドアをくぐる。

そこで彼女を迎えたのは、思いもよらないものだった。

まず、白いビニール袋に入った山積みのごみが目に飛び込んできた。次いで、むっとする湿気が顔に当たる。

今は冬なので、身長と同じ高さにまで積み上げられたごみはさほ

ど臭っていないようだ。が、それでも普通の家庭より明らかに汚れ、濁った空気が籠もっているのが肌で感じられる。

「ラルフに荒らされて以来、ごみ袋は回収日まで外に出さないようにしてるの。リビングのドアを閉めればここは見えないから、早く奥に行きましょう」

嫌悪感を顔に出しかけている未来に、ソフィーは申し訳なさそうに言った。

「ああ、そうだったよね。早く片づけられるようになればいいんだけど」

驚いた様子は見せはしても当たり障りのない返事を返した未来が、気を使っていると思っただろう。ソフィーはほっとしたような表情を浮かべて再び先に立った。

玄関ホール of ドアを開けて奥に進むとリビングがあり、その手前がカウンター式のキッチンに通じている。リビングはソフィーの勉強部屋も兼ねているらしく、古い本がぎっしり詰まった本棚と、パソコンが置かれた簡素なデスクが壁に沿って据えられていた。そしてハーブが植えられたプランターや植木鉢も幾つか隅に固まって置かれており、その向こう側に2階へ上がる階段が見える。

「ヨーコの上着も貸して。かけておくから」

と、部屋の主が友人の肩から素早くコートを脱がせ、階段の横に佇んでいる木製のコート掛けに向かった。

未来は視線をソフィーの背中からリビングの中へ移した。

デスクや本棚の他には白っぽいカウチと、それに挟まれたコーヒーテーブルがある。アメリカではごく一般的なインテリアだと言えた。

ただ、場所を問わず無秩序に物が散乱している点を除けばの話である。床には書き損じのレポートらしいプリントアウトが数え切れないほど、テーブルにはボールペンや何本ものメモリーカード、カウチの上を読みかけの本が伏せたままの状態で何冊も乱雑に放り出されているのだ。

更に色褪せたフローリングの床には細かい埃が乗っており、紙の隙間から覗いている部分は玄関ホールのそれと色が異なっている。その有様はまるで何ヶ月も掃除をしていない部屋を嵐が通り過ぎたような、矛盾した印象を見る者に与えていた。

まともな神経の持ち主なら、お世辞にも片づいていると言えないこの中に他人を招こうなどと思わないのが普通だろう。

「座って待ってて。今、とっておきのハーブティーを持ってくるから」

ところが、当のソフィーは困惑気味の未来をみじんも気にしている様子はない。友人ににこやかにカウチを勧めた後は、さつさとキツチンへ引っ込んでしまった。

座れと言われてもカウチに行くまでは足の踏み場が、カウチそのものには腰を下ろす場所がない。未来は仕方なく床のプリントを束にしてどけてからリビングの真ん中まで進み、カウチの本を脇に寄せて座った。

カウチそのものは古いものらしく表面に細かい傷が走っており、クッションもあまり効いていない。あまり長時間座っていると、腰が痛くなりそうだった。

何とか座る位置を落ち着かせようと軽く腰を上げた未来の黒い瞳に、見慣れないものが割り込んできた。コーヒーターブルの下から肌色の細い棒が突き出ている。子供がよく持っている類の、着せかえ人形の腕のようだ。

もう少し腰を上げてみると、コーヒーターブルの下から布製のキヤビネットがはみ出しており、中に裸にした何体ものジューン人形が放り込まれているのが見えた。

10体以上はありそうな人形は皆、手足が歪に折れ曲がっている。ジューン人形はポーズを取らせやすいよう柔らかい樹脂で作られているが、同じ顔で微笑みを凍りつかせた少女の人形が金髪を振り乱して絡み合っている様は、不気味にさえ思える。

生きている人間にはありえない方向に曲がっている四肢に、未来

は嫌でもテイアーズの死体を連想した。嫌悪感を抑えられず、彼女は元と同じ位置に腰を下ろして視線を足元に移した。

そこにも書きかけのレポートが散らばっており、今度は硬い活字がぎっしりと並んでいる中に、仕事で見慣れた単語を見つけたことになった。「Mass Murderer（大量殺人者）」「Bizzarre（猟奇的）」「Paraphilia（性的倒錯）」「Ripper（切り裂き殺人）」など、若い女性が書く文章に使われる単語としては眉を顰めなくなるものばかりである。

その上に重なっている別の紙にはアンドレイ・チカチロ、ジェフリー・ダーマー、チャールズ・スタークウエザーなど、世界的にも有名な殺人鬼の名前が並び、これらの人物が殺人を犯すに至った動機に関する考察が簡単に記されているようだった。

見ていて気持ちがいい内容ではないが、多分ソフィーが大学で専攻しているゼミのレポートなのだろう。

未来は顔を上げ、コーヒーターブルの上に目を落とした。裸のまま何本も散らかしてある黒いプラスチック製のメモリは、犯罪心理学や猟奇犯罪の研究書、警察の科学捜査関連のデータがタイトルされたものであることがわかる。

しかし、殺伐としたものに占領されている部屋で一際異彩を放っていたのは、2つあるカウチの隅に座らせてあるジューン人形であった。

この2体も、どういうわけか服を着せられていない。

何故、わざわざ服を脱がせてから飾る必要があるのだろうか？

笑顔に作られているジューンの瞳は、黙して何を語りかけてくるわけでもない。

だが、日常の世界から切り離されたようなこの部屋で一方的な視線を向けられていると、人形の無言の訴えに自分が耳を傾けようとしているのか、という錯覚さえ覚えてしまう。

ここはどこかが、何かが違うっている。

はつきりとは指摘できないが、ここという場所はおかしいと叫ぶ

本能から発せられた警告は、未来の肌と胸ををちくちくと刺していた。

ラルフが襲つてこなければ、ここには1時間としない予定だ。だから、気を抜かなければ大丈夫だ。

言い知れない不安から遠ざかるうとしてすぐにでも動きかねない自らの足を、未来はそう言い聞かせて抑え込んでいた。

まだお茶の支度をしているソフィーと話せば、少しは気も紛れるだろう。

ごく自然な考えで、未来がキッチンの友人に声をかけようとした時である。

ふと、大きく乗り出した半身の動きが途中で止まった。

キッチンの側にある出窓にも、カントリー調の服を着せたジューン人形が座らせてある。

しかし未来が目を奪われたのは、その横にあるガラスの花瓶に活けられた花だった。

紫のアネモネとかすみ草をセンスよくまとめた、小さく可憐な花束。

『……代表的なものは『儂い恋』『恋の苦しみ』とか。色でいけば白は『真心』、赤は『君を愛す』、紫は『貴方を信じて待つ』って意味があるんだ』

今の状況からすれば、幸せ過ぎたと思えたついでこの間のことだ。

愛する人が教えてくれた、色の違うアネモネを持つ様々な花言葉。紫のそれが秘めたメッセージは「貴方を信じて待つ」。

杉田の声を心に閃かせ、反射的に小さな悲鳴を上げそうになった未来は、過呼吸になるかと思うほどに息を吸い込んだ。叫び声を上げたい衝動を、必死で抑える。

これは単なる偶然だ。

仕事以外では最も身近な友人であるソフィーが、杉田の行方不明にかかわっている？

いや。

そんな証拠など、どこにもない。

最後に彼の姿を見たのがソフィーであっても。

彼女が現れてから、信頼という絆で結ばれていた自分たちに、おかしな亀裂が入ったとしても。

彼女が犯罪に関する知識を持ち合わせ、一風変わった趣味を持っていたとしても！

個人的な感情を捜査に介入させることは、断じて許されない。

だからこそ今まで自分を厳しく律し、ここまでやれてきたのではないか！

未来の中で理性と疑いとが真つ向から衝突し、そこで生まれる激情が、今にも外に溢れ出そうだった。額にじつとりと汗が湧き、全身ががくがくと震えているのがわかる。

未来は固くを閉じてから両腕を絡め、抑えつけるように自分を抱きしめた。

荒い呼吸と暴れまわる心臓の鼓動が、部屋に響いてしまうかと思っただけだった。

「ごめんなさい、待たせちゃって。さっきも話したと思うけど、リラックスするにはこのパッションフラワーのフレージャーがいいのよ」「あ……ああ、うん。ありがとう」

そこへ入り込んできたソフィーのゆったりした口調に咄嗟に反応できず、未来は思わず間の抜けた声で返事を返していた。

呼吸はまだ乱れており、手足の震えも完全には治まっていない。彼女は手の甲で額を拭うと何食わぬ表情を作って、リビングに戻ってきたソフィーの手元を見やった。

ソフィーは身をかがめ、カントリー調のトレイに乗ったティーセットとポット、切り分けたケーキをコーヒーテーブルの上に置いている。カップはまだ洗ったばかりらしく、内側に少しすすいだ時の水がたまっているようだった。

コートを脱いだソフィーは、色褪せたブルージーンズに黒いタートルネックという地味ないでたちだ。タートルネックの袖は肉付き

のいい腕の半分ほどまで捲り上げられており、青白い肌が際立っている。

慣れた手つきでポットから注がれたパッションフラワーのハーブティーは、鮮やかに透き通った黄色だ。ゆっくりと立ち昇る湯気からはどこか懐かしい草木の香りがし、一緒に出されたバターケーキにも入っているらしいハーブとはまた、違った香りがする。

しかし本来なら鎮静効果を持っているであろう優しい香りも、流石に未来の興奮状態までは鎮めてくれないようだった。

未来が部屋の中を落ち着かなく見回したり、居心地が悪そうに身を固くしていたのを察したソフィーが、くすりと笑って未来の前に座った。

「ああ、その辺りに散らばってるプリント？私、犯罪心理学のゼミに入ってるの。人の心理について、色々調べるのが好きだから」

「そうなんだ。そう言えば、専門についてはまだ何も聞いたことがなかったよね」

未来がうろたえているように見えるのか、ソフィーはおかしそうに笑いながら訊いた。

「ヨーコは何を専攻してるの？」

「私はまだ1年だから、一般教養しかやってないよ。専門についてはまだ先のことだし、まだ全然考えてなくて」

「あら、まだヨーコは1年生だったの？考え方とかが落ち着いてるから、てつきり2年か3年かと思ってたわ」

ハーブティを一口をすすってからそう返したソフィーは、言葉の内容そのままに驚いた顔を見せている。

しかし表情は純粹な感情を表したそれではなく、やや演技がかつている匂いがした。見る人によっては、嫌味と取れるような返しだろつ。

未来は気づかないふりをして、ティーカップを手に取った。

「アメリカに来てからは中学生と間違われることが多かったから、お世辞でもそう言ってくれると嬉しいよ」

とりあえず素直に喜んでおいてから、温かなハーブティに口を付けようとする。

その手前で、あることに気がついた。

「これ、ハーブ以外にも何か入ってるの？」

「ええ。ブレンダーをほんの少しだけ垂らしてあるわ。その方がリラククス効果も高まるし、本当にちよつとだけよ。酔っ払うことはないから、心配しないで」

先から笑顔で話していたソフィーが、またにっこりと笑って見せた。

考えてみれば、ソフィーも同じポットから注いだハーブティを飲んでいるのだ。それ以外の意図があつてブレンダーを入れたわけではないのだろう。

あまり温度が高くないドリンクを飲んでいる未来に、ソフィーがパウダーシユガーをまぶしたケーキをのせた皿を押しやつてくる。

「こつちにはラベンダーが入ってるの。昨日、実家で焼いてみたのよ。マサトが帰ってきた時に焼こうかと思って、練習してみたの」
最愛の男の名前を思いがけないところで出され、未来のカップを持つ手が揺れた。

今の話が、近い者が行方不明になつて途方に暮れている人間の傷口に塩を摺り込むような真似なのだと、果たしてソフィーは自覚できているのだろうか？

いや。

それどころか、それがわかつていたとしても、その何が悪いのか理解できていない可能性もある。

だとしたら、ソフィーは極めて厄介な人物だ。

とにかく、動揺を悟られてないようにしなくてはならない。

「そつか、ありがとう。兄さんもきつと喜ぶと思うよ」

声には不安定さを出さなかつた未来は、あくまで友人の気遣いに感謝する友人としての姿勢を保つことには成功していた。が、手が僅かに震えているのは抑えられず、持ち上げたカップに残ったハー

ブティの表面が揺れている。

未来は残っているハーブティを、一気に飲み干した。

「美味しいでしょう、それ。私が熱いのが苦手だからちよつと冷まして出したんだけど、その方が飲み易いから」

ハーブティのことに触れるソフィーは普段に比べると饒舌だが、曖昧な微笑みを浮かべている未来はソフィーの顔をとても直視出来ない。

未来はカップをコーヒーターブルに置くと、ケーキの皿を手にとった。

「あ、でもアジア系の人って熱いものの方が好きなのよね？余計なお世話だったかしら」

「確かにそうだけど、今は喉が渴いてたからね。すぐに飲めて良かったよ」

ソフィーはまるで自分がアジア系人種ではないと言わんばかりだが、目鼻立ちや肌の色にはどう見ても東洋人の特徴が色濃く出ている。だから緑色の瞳や赤っぽい髪があまり調和せず、余計な違和感を見る者に覚えさせているのだ。

モンゴロイドに特有でエキゾチックな魅力があるとされている黒い髪と瞳を嫌っている人間も、確かに少なからずいる。ソフィーもその一人なのだろう。

人種のことについては考えるだけに留めておき、未来はフォークでケーキを口に運んだ。

素朴なバターケーキの風味とともにラベンダーの甘く爽やかな香りが口いっぱいに広がったが、粉末のハーブが入っているためなのか、微かな苦味が舌に残る気がする。ラベンダーはよくある人工的でしたっこのい芳香剤っぽい香りではなく、控え目な天然物であることが感じられた。

「味はどうかしら？」

「うん、美味しいよ。ハーブが入ってるケーキは初めて食べるけど」
「良かった。これなら、マサトもきつと喜んでくれるわよね」

心底から嬉しそうにしているソフィーから、杉田の名前が出たのは二度目である。

未来もまたフォークの動きを止めそうになったが、今度は最初のときよりも心を乱されずに済んだ。更に何口かケーキを食べて再度感想を言おうと顔を上げたとき、ソフィーの後ろに位置している窓辺に座っているジューン人形と目が合った。

「そう言えば、あの人形の服はソフィーが作ったの？前に、人形の服を作るのが趣味だって聞いたけど」

瞬間的に湧き上がった嫌悪感を誤魔化そうとして、未来はジューン人形の話ソフィーに振っていた。

「ええ、私の後ろにあるのだけね。結構凝った服を作っちゃうから、時間がかかって仕方ないの。でも、ああするとまるで生きてるみたいに可愛くなるでしょう？この上がベッドルームなんだけど、そっちにはもつと沢山飾ってあるわ」

「うん、レースとかリボンの感じが可愛い服だよね」

古き良きアメリカを思わせるブルーのワンピースに白いエプロンドレスを着せられた人形は、誰が見ても可愛いと思えるものだ。がこの殺風景な部屋ではこの人形とその隣にある花だけが却って浮いて見える。

「そこにあるのには、何か着せてあげないの？」

未来がソフィーの座るカウチの隅に置かれた裸の人形を指すと、ころころと笑った。

「ああ、この子はまだうちの子じゃないから」

「え？」

「私が作った服以外のを着てる子は、まだ私のものじゃないってこと。順番待ちをしてる子だって、まだまだ沢山いるのよ」

ソフィーはテレビ番組のことを種にした他愛のないお喋りをするのと同じ態度で、ごく当たり前のことを話している。

そう未来が思うほど普通に、自分の世界のことを他人に教えていた。もし同じタイプの女性が日本にいたら、「不思議ちゃん」と呼

ばれて距離を置かれる存在になっていただろう。

変に突っ込むよりも話を合わせておく方が無難だと判断し、未来は頷いて見せた。

「それは、その箱にいったい入ってる人形のことを言ってるの？」

「ええ、そう。みんな早く私の子にしてあげたいんだけど、なかなか追いつかなくて」

人形をいとおしげに見つめるソフィーには、無垢な子どもと同じように邪気の存在を感じさせない。

成人を超えた人間としては珍しい、純粋な感性の持ち主だと言える。一方で、精神が十分に大人になっていない分、思い込みの激しさも幼い子ども並みだと思って間違いはない。

冷静に自分を観察している未来の目には真意を見出さず、ソフィーは夢中で話を続けていた。

「あの子たちは、スーパーを経営してる親戚からもらったの。入荷の数を間違えちゃったから、是非引き取って欲しいって言われたのよ」

「その箱を捨てたときに、ラルフに見つかったんだね」

「そうよ。よく覚えてるのね、ヨーコ。さすがだわ！いつそのことのままアメリカに住んで、探偵にでもなったらどう？」

軽い興奮から手を叩いたソフィーに、未来の不信感が増す。

話題に出た人物のせいであつさりさつき暴力沙汰になりかけたというのに、この娘には危機感というものがないのだろうか？

未来は悪ノリするのも程があると窘めるつもりで、話題の矛盾を異なる方に向けた。

「でも、それならソフィーの方が向いてるんじゃない？犯罪者の心理にも詳しいいでしょ」

「私は駄目よ。人の心の動きがわかつたって、それを何とかできるわけじゃないもの」

あつさり首を横に振って答えたソフィーに、未来がもう一度質問を返した。

「将来そついう関係の仕事に就きたくて、研究してるってわけじゃないの？」

「どうしてもってわけじゃないわよ。ただ、人がどうして誰かを騙したり、傷つけたりするのかってことを知りたいだけなの。でも、今のところは色んな犯罪者を調べれば調べるほど、わけがわからなくなってくるわ。それがまた、興味深いところなの。人間って、本当に憎たらしいんだけど面白い存在なのよね」

僅かに顔を下げた未来の顔を下から覗き込みながら、ソフィーが言った。

作られた緑色の瞳を通して向けられた視線と僅かに低くなった口調に、未来は背筋に鳥肌が立つような怯気を感じていた。

女の媚を含んだ響きがある声色の裏に隠された、こちらの心の奥に尖った爪を伸ばそうとする無遠慮さ。

子どもが何も考えずに悪質な悪戯をするとき、大人を煙に巻こうとする欲望を穢れない笑顔に忍ばせた姿。

相反する2つを同時に感じさせたのが、今のソフィーであった。

何を考え、何をするのか全く予想がつかない不気味さが、黒い蛇の形を取って彼女の中にとぐるを巻いているようだった。

未来が動作を止めたのはほんの僅かな一瞬で、ソフィーは友人の緊張を見抜いてはいない。

赤毛の後姿がのんびりとトイレの方に向かって立ち上がったのがその証拠で、未来は肩に込められていた力を意識して抜いた。

「……気持ち悪」

日本語で一言こぼすと、少し気分が落ち着いた気がする。

先のソフィーの異常な気配は主観的なもので、ソフィーに不信感を抱き始めている自身の偏見も反映したものになっていったのだ。そう自身に言い聞かせた未来は、空になった2枚のケーキ皿を持ってカウチから立ち上がると、キッチンへと向かった。木のカウンターの向こう側へ回り、シンクへ皿をそつと置く。

シンクは乾き切っているが白い水垢は全く見え、殆ど使われた様子がない。ガスレンジの下に備え付けてあるガスオーブンの取っ手にも薄く埃がついており、ろくに料理に使われたことがないのは同じようだった。

しかしそれとは対照的なのが、冷蔵庫の前を殆ど塞ぐように置かれているごみ箱である。

比較的大きなごみ箱から溢れ出ているのは、食べ残しがこびりついた捨てられて間もないと見える、冷凍食品の皿が大半だ。それも同じピザやグラタンの皿がきつちり2つずつ重なっているのも気になる。

2つずつ同じ食品が同じタイミングで捨てられたということは、誰かに食事を出していたということだ。

ストーカーの影に怯えていたソフィーだが、確か相談できる女友達は未来しかいないと言っていた筈だし、誰かを巻き込みたくはないと常々言っていた。なのに、誰とこのリビングで食事をしていたというのだろうか？

そしてごみ箱の周りには捨て切れないビールやコークのボトルが散乱しており、その間からは割れた皿の破片らしき細かい陶器の破片が散らばっているのも見えた。それも割れたのは1種類ではないらしく、様々な模様や色の鋭い欠片が混ざっている。更にリビングとの仕切りとなっている壁には、目の高さのところまで4インチ（約10センチ）程度に渡って壁紙が切り裂かれた跡があるのがわかった。

「あいつは感情を抑えられなくなると、刃物を投げてくるような女なんだぞ……」

未来の中に、ラルフから聞いた話が蘇る。

ソフィーのことを知れば知るほど、彼女が未来に向けていた態度と噛み合わないのがわかってくる。

この部屋に入った時、いや、それよりもずっと以前から感じていた違和感の正体は、この矛盾だったのである。ソフィーの話の端々に嘘があることを未来の本能が感じ取り、散々警告音をやかましく鳴らしていたのだ。

急に、このキッチンでじっとしてられない衝動が起こった。

このアパートの一室で自分が異質な存在であるという自覚がそうさせたのか、自然と足が瑞々しいアネモネの花の飾られている窓辺へと向く。

ソフィーの牙城において、そこもまた切り離された場所であると未来には感じられたのだ。

しかし、アネモネが活けられた花瓶の隣に座っているジューン人形も同時に視界に捉えられ、やはり落ち着かない。

人形の服は花柄の上品な布を使った丁寧な造りで、アメリカ開拓時代の女性が纏っていたようなデザインのドレスだ。愛らしい少女の顔をした人形と花束とは釣り合いが取れた組み合わせではあるものの、いささか過剰な少女趣味の一角が荒れた部屋に突然現れたとなると、やや不自然な気もした。

厚い直方体のガラスでできたシンプルな花瓶に活けられたアネモ

ネは今が盛りのもよう、5輪ほどで束ねられたこの花も見事に咲き誇っている。きっと花屋でうまく保管されていたか、手入れが行き届いているかのどちらかだろう。

杉田が好きな花だと明言し、楽しそうに花言葉や伝説について語っていたのが、このアネモネだ。その花が女友達の部屋にあるというだけで、まるで彼が彼女のために活けたようだとありえもしない嫉妬を抱かせようとしてくる。

しかし未来の暗い負の感情は、花束全体をよく見ようとし意識せずに瞳のズームを使った時、吹き飛ぶこととなった。

ガラスに囲まれた水の中で、黒いものがゆらゆら揺れている。細く、黒い糸のような何かだ。

ソフィーがまだ戻ってこないことを確認し、思い切って花束をそっと花瓶から持ち上げてみた。

水が滴り落ちる茎の真ん中辺りから黒い糸が垂れ下がり、一段低い場所から水の玉をぽたぽたと落としている。手で触れてみると、その黒い糸は5本ほどに枝分かれして未来の指先を濡らした。糸ではない。

黒い髪の毛だった。

根本は真ん中の一輪に、束にされてしっかりと結び付けられている。

ソフィーの髪とは明らかに長さや色、髪質も異なっている髪の毛だ。そして更にズームで見ると、全ての髪には毛包部がついていることも判別できた。

DNA鑑定には毛包がついた髪が5本以上必要だと、以前杉田が話していたのを聞いたことがある。自然に抜け落ちた頭髪には毛根部がないため、この髪の毛は誰かが地肌から引き抜いてアネモネの茎に結びつけたことになる。

あなたを信じて待つ。

杉田が姿を消す直前に教えた、物言わぬ花が密やかに持つメッセージ。

そしてそこに隠されていた、明らかにソフィーのものではない髪の毛。

この2つが意味している事実を、未来は一つしか導き出せなかった。

杉田が生きている。

自分の存在を、何とか未来に伝えようとまでしているのだ！

それをはつきり意識に留めた時、未来の身体を電気に打たれたような衝撃が走り抜けたような気さえた。

このアネモネの花束を用意したのが行方不明となっている杉田なら、ソフィーがそのことを知らないわけがない。

彼女と杉田が一緒にいたスポーツクラブでは、女嫌いとも言える杉田が不思議とすぐに打ち解けていた。更に、彼女が現れてラルフのことを相談するようになってからは未来と杉田の間に溝が生じ、それが急速に深まっていった。

極めつけは、最後に杉田と一緒にいたのがソフィーであることだ。杉田は、ソフィーのことを親しい友人だと思っていたのである。

彼女をアパートまで送るために車を運転している隣で凶器をちらつかせ、そのまま別の場所まで運転させることも容易かっただろう。その後は指紋がつかないようにして彼の車を運転し、放置してくれるばいいだけだ。

しかし、とそこで未来の理性が逸る思考に停止信号を出した。

ブラックヘアもティアーズも犯行に極めて強い暴力性が認められており、女が犯すような類の事件ではない。

それに第一、ブラックヘアの犯人はゲイであることが確実だ。と言うことは、ソフィー単独の犯行ではあり得ないことになる。

つまり、男の共犯者がいることを指している。

その上でソフィーは、被害者の家族という立場である未来と親しくなることで、自身のサディスティックな欲望を満たそうとしていたに違いない。

未来の背筋に、緊張と戦慄が走る。

もしソフィーが2つの事件を起こした犯人の共犯者だったとしたら、今までの矛盾した行動全てに納得の行く説明がつけられる。

同じ時に初対面となった未来と杉田のうち、真っ先に彼に取り入ったのは、次の獲物として目をつけたためだ。

ラルフのことを決して表沙汰にしようとしなかったのは、警察が介入するとまずいことになるからだ。

何かにつけて未来に頼ろうとしたのは、自分が弱い女だと見せかけるためだった。

そして杉田のことをやたらと口にしていたのも、自分が手込めにした男のことで未来が苦しむ姿を見て、歪んだ快楽を得たかったせいだ。

ソフィーが大学で専攻している犯罪に関する研究も、そのための道具なのだろう。

過去の犯罪者たちが何を感じ、どうやって被害者を痛めつけ、周囲の者がいかに悲嘆に暮れたかを想像して興奮を高めていたのだ。

ただ、ロボットを使って遺体を傷つけるやり方は極めて暴力的な発想で、ロボットについて全く知らないソフィーが考えつくような方法ではない。彼女は自分が直接手を下すのではなく、側で残虐行為を傍観して満足を感じているのだろう。

そう考えていくと、これらの事件では二人に明確な役割分担があったと考えるのが自然だ。

被害者を直接殺さないなら、そこまでの手筈を整えるのが彼女の役目で、これには研究で得た知識が役に立つ。どんな手段を取れば警察の目を欺けるかわかる筈だ。

今までの被害者の選び方がばらばらだったのも、ある程度の選別を行って、最もリスクが低い方法を選択していたからに違いない。今回初めて面識がある人間である杉田を標的に据えたのは、自分たちに捜査の手が及ばないことに警戒心が薄れ、大胆になってきている証拠だ。

彼の事件でうまく逃げ仰せたら、次は更にエスカレートする可能

性もある。

これまで彼らに殺された者は、周到に計画された悪魔の儀式の生け贄になっていたので。

「……許せない……」

口の端に再び日本語の呟きを上らせた未来であったが、その声は震えていた。

ソフィーに対する怒りだけではない。

ある事実気づいたことが、新たな暴風を彼女の心に吹き込ませたのだ。

彼女は一体誰と組んでいると言うのだろうか？

その点を考えると、今までずっと犯人としてマークしていたラルフがパートナーである可能性は、極めて低いと言わざるを得なかった。

ラルフがソフィーの顔につけた傷は本物だったし、彼がソフィーの目をつけた相手を精神的に追い詰められるほど巧妙な嘘をつける器用な男だとは、とても思えないのだ。

そうになると、別のパターンを考えねばならない。即ち、ラルフの他に真犯人の男が別にいて、ソフィーがその人物と組んでいる可能性だ。

もしかすると、自分とはんでもない思い違いをしていたのではないのか？

余りに大きすぎるミスで考えたくもないことだが、状況は悲しくもそのことを否定してはくれない。ラルフはソフィーとしても厄介な存在だったことは間違いないだろうが、彼につきまとわれていることそのものを利用していたとも考えられる。

「……あいつはいつもそうだ。俺のあることないことを吹き込んで自分が困ったことになってるっ言って、すっかり相手を信用させちまう。それがあの女の恐ろしいところなんだよ……」

再び、ラルフの粗野な英語が頭の中で繰り返される。

彼のソフィーを評した言葉が事実だったことが、皮肉にも今わか

ったことになったのだ。

未来の震える手が、髪がついたアネモネをそつと抜き取る。そのまま足音を忍ばせてカウチに戻ると、花をつぶさないよう慎重にハンカチに包み、バッグに忍ばせた。

とにかくこの髪の毛を鑑定すれば、誰のものであるかがはっきりする。

この部屋から花を持ち出したことは、自分の後頭部に挿入されたメモリに網膜の画像として記録されており、確実な場所の証明が可能だった。そして髪の毛のDNA鑑定結果が杉田のDNAと一致すれば動かぬ証拠となり、ソフィーを重要参考人として手配できるのだ。

「あら。お皿、下げてくれたの？別に良かったのに。ヨーコはお客様さんなんだから」

リビングに戻ってきたソフィーから唐突に声をかけられ、未来はカウチから座ったまま飛び上がりそうになった。

「うっん、お構いなく」

破裂しそうな心臓の鼓動を必死に抑え、未来は笑顔を作った。

Vネックのニットに重ねたパーカーの下にある肌が、冷や汗にまみれて濡れている。

ソフィーが事件に関与している可能性が強まった今、彼女が持つ裏の顔に気づいたことを絶対に悟られてはならなかった。万一勘づかれれば最期、杉田の命運も同時に尽きると思って間違いはない。

頭が切れるソフィーのことだ。

身近な人間からこれ以上被害者を出すリスクを冒すべきでないと思悟っているだろう。この場で何か手出ししてくるつもりはないと思っ
つていい筈だ。

未来は慎重に言葉と行動を選び、まずはここから出ることを最優先にするべきだった。

「遠慮しないでっいたら！それにまだ、ハーブティーとケーキのお替りもあるのよ」

しかし、ソフィーの語調が笑顔と裏腹に荒くなっている気がした。彼女は下げられていなかったカップにもう一杯、ぬるくなったハーブティーを注いでテーブルに置いておく。

「これ以上はもういいよ。それに私、実はアルコールの匂いに弱いんだ。もし何かあった時、動きが鈍ったりしたらまずいしね」

未来のラルフのことを盾にした言い訳は自然だったが、ソフィーは自信たっぷりと言った。

「大丈夫よ。ヨーコがいてくれれば、あいつが来るわけないわ」

「そうとも限らないよ。だって、つい最近までラルフはここに来てたんでしょ？」

思いもよらない指摘だったのか、ソフィーは驚いて未来の顔を見た。

「どうしてそう思うの？」

僅かに間を置いて小首を傾げる仕草が続くと、長い赤毛が音を立って揺れる。心なしか、警戒して未来の腹を探る響きがソフィーの声に混ざった気がした。

「だって、入口のごみの量がすごいんだもん。あれはどう見たって一人分の量じゃないし、キッチンにある冷凍食品のごみも、2人分同じがあるなって思ったから」

がしゃん、と陶器が激しくぶつかる音が未来の声に重ねられた。

ソフィーが両手で包むように持っていたティーカップを、乱暴にソーサーへ叩きつけたのだ。

今までは柔和で純真そうな印象しかもたらさなかった表情も、豹変していた。

彼女は眉を限界まで吊り上げると、怒りで爛々と輝く緑色の瞳で未来を睨んだ。頬も赤く上気しており、本気で激怒しているようだった。

「もう、どうしてそんなところまで見るのよ！詮索好きな女は、マサトから嫌われるわよ！」

私生活のことに触れられるのを極端に嫌がる人物はそう珍しい存

在ではないが、ほんのちよつとした指摘を一度しただけで激昂する者に出くわしたのは、未来もこれが初めてだった。

が、それも自分の本当の姿を見抜かれまいと気を張っているのなら、別に意外なことではない。未来は大げさに振る舞って見せた。「ごめん！そんなつもりはなかったんだけど、つい気になっちゃって」

日本式に頭を下げ、顔の前で手を合わせつつ謝るが、やはりソフィーの態度はやはり不自然に思えた。先まで未来が知っていたソフィーの性格なら、細かいところを観察していた友人に素直な感心を覚えてもおかしくない筈なのだ。

今まで未来はソフィーのことを素直で傷つきやすく、従順な女性だと思っていた。だからラルフに暴力を振るわれても何もできなかったのだとばかり思っていた。それが全て未来や杉田を欺くための演技だったと言うのなら、ハリウッド女優顔負けの役者だと言える。

「人の部屋の中のを勝手に見るなんて、それじゃあいつと同じだわ。結局みんな同じなのよね。人をうまく騙しておいて、めっちゃくちやにするんだから」

そっぽを向いてくれたソフィーは、わがままが通らない子どもを連想させる。

あいつというのはラルフのことを指しているのだろうが、同時に自分のことも無意識に言い及んでいると思っただけ。そして、彼女が今まで騙してきたのは杉田と未来である。他人の領域に土足で踏み込み、そこに築かれていた人間関係を徹底的に破壊するのだ。

これはラルフのように、自己愛が強すぎる者に特徴的なもの言い方だった。

「勝手なこと言わないでよ。あんた、そろそろ化けの皮が剥がれてきてるってことを自覚したら？周りの人間を全員騙せたままにいると思っただら、大間違いなんだよ！」

と、舌先も鋭くソフィーに言葉を投げつけてFBI捜査官の身分

を告げたかったが、銃も身分証も車の中だ。それにそんなことをすれば、全てが水泡に帰す恐れがある。

未来は喉元まで出かかっていた声を、腹の中にぐっと押し込めた。「そ、そんなに機嫌悪くされちゃ、私も困るんだってば。悪かったって。謝るから、もう怒らないですよ」

大きくなりがちな声を抑えようとしてどもる様子は、都合良く困惑しているように見えるだろうと思いたい。未来は頬を指先で掻くふりをして、こっそりと特殊通信のスイッチである真珠のピアスを捻った。

今の時点でこれは発信の一方通行であり、クワンティコの検証用設備で運良く誰かが聞いてくれているかどうかもわからない。が、少なくとも電波だけは発信できるし、状況を伝えようとすることは無駄ではないはずだ。

「自分が失礼なことをしたって、少しはわかってもらえた？」

「さつきから悪かったって、言ってるじゃない。これ以上、どうしろって言うの？何なら、もう帰るよ。ラルフだって、私に一発喰らって懲りただろうしさ。それに、ソーンバーグ支店からラルフがお礼参りに来るにしたって、1時間以上かかるよ。私のことが嫌で、なのに一人でいたくないって言うんなら、家族でも呼べばいいじゃない」

未だ収まらない怒りにそっぽを向き続けるソフィーに、未来も腹を立てた口調で返した。

誰かが通信を聞いてくれていることを期待して具体的なキーワードも織り交ぜると、妙に説明的な内容になってしまふ。自分でも違和感を禁じ得ない台詞だと舌打ちしたくなかったが、ソフィーは甲高い声でこれに反応し、カウチから勢いをつけて立ち上がった。「そんな！ヨーコ以外に頼れる人なんかいないって、何度も言ったでしょ？誰にも迷惑はかけたくないのよ。あいつがもうここに向かつて来てるかも知れないって言うのに、私にこの家で一人きりになれって言うの？」

彼女は哀れっぽく言いながら未来のカウチまで駆け寄ると、すぐ隣に座って懇願してきた。

「お願い、帰ったりしないで。ここで私と一緒にいて」
ソフィーが泣きそうな顔を上げてすがりついてきたのには、未来も正直戸惑った。

怒ったり悲しんだり、忙しく変わりすぎるのだ。本気で悲しめば涙はなかなか止められないし、笑いすぎれば腹筋が痛くなったりして、必ず後を引く。一度激しい感情にとらわれれば、そこから瞬時に抜け出すことなど不可能だ。

未来は聴力を上げ、ソフィーの心音を聴いてみた。もし彼女が不安な気持ちでいるなら、心臓の鼓動はそれを表している筈である。

が、彼女の心音は一定の極めて安定したリズムを刻んでおり、動揺している様子は全く伺えなかった。全く心音が乱れないのは、嘘つきに特徴的なものなのだ。

ソフィーが偽っているのは、髪や目の色だけではない。
自身の感情までもが作りものだというのだろうか？

「わかったよ。じゃあ、一緒に警察に行こう」

対する未来の切り返しは、極めて理性的なものであった。

「……え？」

友人からの意外な提案に、ソフィーが目を丸くする。

「折角一緒にいるんだからさ。私が付き添うから、一緒に警察に行こうよ。ラルフのことなら、いくらでも証言してあげるから。何なら、ソフィーが車で待っていてくれてもいいし。私が相談すればいいでしょ？」

安心させるように、未来はソフィーの肩に手を置いた。

散々警察を嫌っていたソフィーのことである。この発言に逆切れし、こちらを追い出しでもしてくれればしめたものだ。

「……ええ、そうね」

ところが、未来の思惑は見事なまでに外れた。今まであれほど警察行きを拒否していたのにあっさりと頷かれて、拍子抜けしたと言

ってもいい。

未来が聞き耳を立ててみても、伝わってくるのはソフィーの心音が変わらず落ち着いているということだけだ。特に何も考えていなさそうな表情からも、その意図は読むことができない。

「今までラルフがやったかも知れないっていう、無言電話の記録とかある？ポストに入ってたかごみの画像とか、怪我の診断書とか。とにかく、何をされたか証明できるものを出さなきゃいけないんだけど」

とりあえずはソフィーが本気で警察に行くことを承諾しているという仮定で、未来は話を次の段階へと進めることにした。

「ちよつと待つて。無言電話は一覧表にしてつけてるのが、その辺りにある筈だから」

友人からの具体的な話を受けたソフィーは立ち上がると、テープルの下や床に散らばっている紙の群れをこそごとと漁り始めた。一通りリビングに散乱した紙を集めたかと思うと、彼女はそれをざっと確認して軽く溜息をついた。

ソフィーは次にキッチンへと入っていった。何をしているかはわからないが、引き出しを開けたり、ごみ箱の紙屑をひっくり返しているらしい音が、未来のいるリビングまで聞こえてくる。

「ヨーコモ、こっちで一緒に探してくれない？どっかに紛れちゃったみたいなのよ」

「私が引き出しとか調べるのは嫌でしょ？」

「ややくぐもつて聞こえるソフィーの声がする方へ、未来は顔を向けて答えた。

「証拠提出のためだもの。構わないわ」

どうしようもない気分屋としか形容できない、ソフィーの言い種である。

呆れた未来は、思わず舌打ちを漏らした。これまで振り回されていた家族や友人も、さぞかし大変な思いをしていたに違いないだろう。つい数分前に抱いた懸念に動転していたのは取り越し苦労だっ

たのか、と言う疑いが一瞬頭の隅を掠めていく。

軽い脱力感も覚えつつ、未来はカウチから立ち上がった。

しかし、それができなかった。

視界が定まらず、目が回っているのかと思うほど激しいめまいが、突如として襲いかかってきたのだ。

バランスが取れなくなった身体を支えようとコーヒーターブルに手をついたが、既にまっすぐ立つことすら難しくなっている。よるけた未来は、今一度カウチにどすんと腰を落とした。先に感じた倦怠感も異常に強くなっており、まるで手足の全てが金属性の義肢に変わってしまったような重さだ。

いくら何でも、尋常ではない。

急速に自分の意志から離れていこうとする身体に、未来は愕然とした。

サイボーグの改造手術課程で、強すぎる睡眠薬を服用していた時に経験した反応が、これと全く同じだった。

薬を盛られたのだ！

いつ？

どこで？

どうやって？

もはや自身の体重さえ支えられなくなった身体を鞭打ち、意識を覆い尽くそうとする闇に未来は必死で抵抗した。

そう言えば、ソフィーがハーブティを注いだカップは濡れており、底に水が溜まっていた。

あれが本当は薬の水溶液だったのだろうか？

それとも、ケーキにまぶしてあったパウダーシュガーだったのか？
確かにあれにはほんの僅かな苦みを感じたが、ハーブティーに入っていたブランドーも、もしかしたら薬の匂いを消すためのものだったのかも知れない。

いずれにせよ、今更それがわかったところでどうしようもなかった。

ソフィーの狙いが、杉田の近親者である未来にもあったとは、彼女の大胆さは予想を上回っていたのである。

「……ソフィー……私に、何を……」

恨みを込めた声で呻いた未来は、リビングに戻ってきたソフィーに鋭い視線を向けた。

まともな言うことを聞かない下半身を何とか踏ん張り、立ち上がろうとする。

しかし力を失った脚は膝をがつくりと折ることしかできず、未来は床に肩口から転倒する羽目となった。

渾身の力を振り絞っているのに、震える腕でテーブルにしがみつくのがやっとなという有様だ。動かない体に引きずられるように目に映る全てが暗くなっていき、意識の全てが飲み込まれていくのを感じる。

カウチとテーブルの狭い隙間へ、未来の細い身体がずると沈んでいった。

「貴女にはもつとゆっくりしてもらいたいのよ、ヨーコ」

そのすぐ横まで歩み寄ってきたソフィーが、くすくすと子どものように笑っていた。

彼女の足元で横倒しになっている未来は、まだ辛うじて開いている瞳で必死にソフィーを睨もうとしている。睡眠薬がもたらす脱力感に歯を食いしばって戦いを挑む表情には、激しい敵意がありありと窺えた。

「警察なんかより、もつと安心できる場所に連れて行ってあげるから」

ソフィーの室内履きを履いた足が、未来の白いニットに包まれた肩を小突く。

未来は何も言えなかった。

最後まで半身を支えようとしていた腕から力が抜けた後、燃え上がる怒りを湛えていた黒い瞳は完全に閉ざされた。

関節が痛くて、息が苦しい。

多分たつた今まで見ていたであろう悪夢は、不思議なことに内容が何も思い出せない。ただただ、身体の節々が軋みを上げている音と、自分が漏らす吐息ばかりが聞こえている。

その息の音に見合うだけの酸素が、肺の中に入ってこない。息苦しさは増すばかりで、未来は口を開けて喘いだ。

なのに、大きく開いているはずの喉には、全く空気が流れ込んでこなかった。

喉が何かに塞がれていて、息がうまくできていないのである。

そのことに本能的な恐怖を感じ、未来は慌てて喉を塞ぐものを口から引つ張り出そうとした。

が、手が全く動かせない。

それどころか、目を開けることすらできない。

正確には瞼を開けたつもりなのに視界が真っ暗で、手首は腰の後ろで交差された状態のまま、前に持つてくることができないのだ。

血管を汚れた血が流れる音が、耳の奥でごうごうと響く。

叫びを上げようとしても、くぐもった呻きにしかない。内部から喉を圧迫しているのは布のようなものらしく、舌を強く押すそれに思わず嘔吐感がこみ上げてくる。

酸素を求めて苦しんで汗ばむ身体が、死に物狂いで暴れた。

「あら。気がついたのかしら」

女の声が、未来の身体の上に降ってくる。

流暢で呟くような英語は、若い女の声に乗っているようだった。誰か側にいるのなら、どうして助けてくれないのか。

必死に声を絞り出して訴えても、女には聞こえていないらしい。

「口を取ってやれよ。窒息しちまったらつまんねえだろ」

未来が舌で口の中のものを押し出そうとした時、今度はやや遠く

から男の低い声がした。

そこでようやくよく、未来は鼻で息をすれば楽なことに気がついた。ゆっくり鼻だけで深呼吸し、パニックを起こした頭と身体を宥めて四肢から力を抜いていく。

余分な緊張が解けたおかげなのか、未来の普通の感覚が戻り始めてきた。

新たにわかったのは、どうやら自分は手足が動かせない状態で地面に倒されていること、布の目隠しで視界も遮られているらしいことだった。

そして今まで力の限り暴れたと思っていたが、実際には殆ど動けないでいたらしいこともわかった。寒さのためなのか力が入らず、今も指先一つ満足に曲げられないのだ。

言葉にならない声を上げ、芋虫のようにもぞもぞと身体を動かしている様子を見ていたらしい女が、嫌悪感を隠さずに吐き捨てた。

「けど、取ったらよだれが落ちるじゃない。汚れるから嫌だわ」「どうせ掃除するのはお前じゃねえだろ。いいから、目隠しも一緒に取ってやれ」

再び、男の声が嘲るような調子で言った。

「わかったわよ。ヨーコ、騒がないって誓いなさい。私、女の喚き声って嫌いだから」

ヨーコ、と呼ばれた未来は反射的に頷いた。

ヨーコ。

ヨーコ・イシダは、連邦政府によって未来に与えられた偽りの名前の一つである。

その名前で彼女を呼んでいる、いや、本当の名前を知らない女は、つい最近では一人しかない。

フルネームは確か、ソフィー・アイコ・フジミだった筈だ。

最も近いアメリカ人の友人で、しかし普通からかなり離れた場所にひっそりと立ち、自分の世界を楽しんでいた大学生の女性。その染められた赤毛と、鮮やかなカラーコンタクトに彩られた緑色の

瞳が脳裏に描かれた時、未来はやっと最後の記憶を手元に手繰り寄せるに至っていた。

ソフィーの部屋で昏倒してからどの程度の時間が経過しているかは定かでないが、あの場で睡眠薬を盛られていたであろうことは明白だった。未来の意識を奪った上で、恐らく別の場所に拉致したのだ。わざわざ目隠しをしたのは、場所を知られないためだろう。

何故、そんなことをする必要があったのか。

ソフィーが、いや、ソフィーたちがティーズとブラックヘアの犯人であったのなら、答えは一つしかない。彼らは次の犠牲者として、未来を選んだのだ。

しかし幸か不幸か、彼らは未来がFBIの特別捜査官であることを全く知らない。

犯人の手中に落ちたこの状況は、未来にとって逆転のための千載一遇のチャンスでもあったが、下手をすればこちらが窮地に陥りかねない。ひとまずは突然さらわれて混乱している一般女性として振り舞い、ぎりぎりまで反撃の機会を窺う必要があった。

口の中に押し込まれていた布が引っ張り出され、未来の喉にひやりとした空気が流れ込む。

「ちよつとソフィー！あんだ、一体何のつもりで……」

舌が解放されるなり掠れ声で怒鳴ろうとした未来の言葉は、顔に鈍い衝撃を受けて中断されることになった。まだ真つ暗な視界に白い光が走り、一瞬遅れて左の頬を重い痛みが襲う。

顔面に強過ぎる刺激を受け、未来は反射的に咳き込んだ。

「喚くなつて言ったのがわからなかった？今度大声を上げたら、次は鼻を潰すわよ」

倒れている未来の横っ面を靴の先で蹴りつけたらしいソフィーは、やれやれと言いたげに溜息をついた。まるで躰が悪くて吠える犬を、叩いて服従させる主人さながらだ。

自由を奪われた人間が目の前に転がっているなど、普通の日常を送っている者にはありえない異常事態の筈である。まして、それを

平然と足蹴にできる神経の持ち主も、そうそういない。

やはりソフィーは、暴力を体感することに慣れているのだ。

未来が友人だった赤毛の女性に対して抱いていた、遠慮という最後の壁が崩れ去る。

彼女は敢えてそれ以上抗わず、蹴られた頬の内側を舌で探って確かめた。

顔の骨に異常はなく歯も折れていないようだが、どこかが切れたらしい。鉄の臭いがする血の味が感じられる。こういう時は人工物が6割以上を占める自らの身体の頑丈さに、我ながら呆れる思いだった。

傷の具合を見るために口を閉ざした未来が、恐怖で竦み上がって黙ったと思っただろう。ほどなく、視界を遮っていた目隠しが外された。

未来の黒い瞳が最初に捉えたのは、グレーのジーンズに包まれた自分の細い両脚だった。今の姿勢が身体の右側を下にして地面に転がされ、両手首を後ろ手に縛られていることがわかる。曲げられた膝の先にある足首は、重ねたまま動かすことができない。ご丁寧なことに、足首も縛ってあるのだろう。

何時間か同じ姿勢で放置されていたようで、床に接している右半身と全身の関節が痛む。その割にロープが肌に食い込む苦痛が弱いのは、服の上から縛られているからだだった。肘を張ろうとしても叶わないのは、厚手の白いニットを着込んだ上半身にも、腕の上から何重かにロープが巻きつけてあるせいだ。

だが正直、時代遅れのカウボーイが使うようなロープで未来を抑えることなど不可能だ。屈強な兵士20人前に匹敵するパワーを持つ彼女を本気で拘束するなら、鋼の鎖と手錠でなければ耐えられない。

ちよつと力を入れればあっさりとこの戒めは解けるが、今は状況把握が先決である。

未来の頭は、睡眠薬を使用した眠りからの覚醒直後の割にはつき

りしていた。

「日本みたいなアジアの片田舎から来たばかりの雌猿に、私の英語は聞き取りにくかったのかしらね」

再び倒れた未来の上に投げかけられたソフィーの言葉は傲慢そのものであるが、先と同じく高飛車さは全くない。どこまでも出来が悪い相手を見下し、価値のないものとして見ているのは同じだが、強い感情がどこにも感じ取れないのだ。

未来が聞き耳を立てて心音を探るが、予想通りソフィーの鼓動に興奮は表れていない。

彼女は息をするのと同じくらい自然な振る舞いで他人を罵倒し、暴力を加える。その際、微塵も心を動かしていないところが普通の犯罪者と違い、不気味だった。

未来は乾いた唇を湿してから精一杯顔を上げ、倒れたままソフィーを睨みつけた。

「私をどうするつもりなの？」

「やっぱり、あんたもそうやって聞くのね。みんな一緒なんだから、もう」

傍らに立つソフィーは見るからにつまらなそうに、足元の未来を見下ろした。

「みんなそうよ。自分をどうするつもりなのかって、一番最初に聞くのよね。つまらないわ。もうちょっと違うことが言えないのかしら」

ぶつぶつ言いながらソフィーがウエスタンブーツの踵を軽く下ろすと、乾いた木の音が上がる。

未来は改めて視線を周囲に巡らせた。

今いるのはどこかの家の一室らしく、床は古く汚れた赤茶色のフローリングだ。ろくに手入れがされていないらしく、ワックスが剥げて綿埃がそこらじゅうに散っているのが見える。床に倒れたままの未来の頬も砂にまみれており、ざらついた不快な感触がした。

部屋は横に広いらしく、やや遠くにある壁はフローリングと似た

素材の木材だが、窓はない。時計もかかっておらず、今が何時なのか全くわからなかった。

家具は未来の正面にベッドと出入り口らしいドアがあるのが見え、後ろには何かがあるか察することはできない。

ソフィーが横にしゃがみ込んでくるのを察し、未来は視線を床の上に這わせた。これ以上何かを探ろうとしてまたソフィーに暴力を振るわれるのは、得策ではなかった。

「でもね、それで私はこう答えるのよ。それは全部、これからのあんた次第だつて。自分で自分の運命ぐらい、決めてもらわなきゃ。変に恨まれたりしたら困るもの。誰かからの恨みをいちいち受けられるほど、私は暇じゃないんだから」

ソフィーの話し方は無表情で、相手を弄ぶことを楽しんでいるようにも見えない。

どうなるかがこちら次第ということとは、どんな行動を取るかによって、ある程度の違いが結果に生じてくることは間違いない。ならば、なるべく会話を引き延ばす必要があった。

とにかく話を絶やさないとするのは、人質交渉の際にも有効なテクニックである。

自分の身を守るべく未来が口を開こうとした時、別の声が割り込んできた。

「よく言うぜ。相手に決めさせる気があつた時があるのか？」

「それはお互い様でしょ。あんただつて、自分の好きにするくせに」

「ああ、俺はいつも好きにしてるよ。少なくとも、お前みたいに余計な期待を持たせたりはしねえ。その分だけ、俺の方が優しいと思うがな」

鼻で笑つてソフィーに応えたのは、聞き覚えがない男の声だった。ラルフのそれとは全く違つて、若くても落ち着いた印象がもたらされてくる。

未来は床に近い位置にある視線を何とか上向かせ、声がした方を見た。

まず見えたのは、ベッドサイドに投げ出された毛深い裸の臍だった。それを上に辿るとしわくちやのシーツに覆われた下半身が繋がっており、引き締まった筋肉が目立つ上半身のてっぺんに笑いを浮かべた顔がある。

白人の男の歳は、30歳台くらいだろう。赤茶色で波打った長めの髪を自然に流したヘアスタイルで、やや細面ではあるが整った顔立ちだ。雰囲気はどちらかと言えば人好きのする類に入るように思え、ぱつと見の印象だけなら、やり手の営業マンか会社の経営者にも見えなくはない。

それは初めて見る顔であり、やはりラルフとは別人であることは間違いないかった。未来の予想が全く外れていた現実をやつと目の当たりにする羽目となったが、ある程度の覚悟ができていたせいか、あまりショックではない。

むしろ、これまでの捜査資料の写真でも目にしたことがないこの男が、一体誰なのか。未来にはその方が重要だった。

「誰、あんた？」

「さあ、誰だろうな。もし俺が、今アメリカ中を騒がせてる殺人鬼だつて言つたらどうする？」

未来が至極当然な疑問を投げかけると、男はからかうように言うてからサイドテーブルに置いてあった缶ビールを一気におおった。

未来のしかめていた眉が、僅かに上がる。

男はビールを置くと、手を小さく振つて見せた。

「ああ、これじゃあ言い方が悪いか。最後にやったのは……まだ2週間前も経つてないな。確かこう、首をちぎつてやったんだ。お前もヴァージニアに住んでるんなら、どっかの林で黒人のかい男の惨殺体が見つかった、ってニュースを知ってるだろう？」

彼が世間話でもするように話しているのは、エミリオの事件のことだ。

死体がどんな状態で発見されたかという情報は、一般に公開されていない。

未来の目の前で裸身を晒しているこの男がティアーズの、ブラックヘアの犯人であることに、もはや疑いの余地はなかった。

確信を抱いた未来の中で抑え難い憎しみの炎が一気に燃え上がり、黒い瞳が激情に染まる。

お前たちが杉田先生を私から奪ったのか。

今すぐ彼を引き渡せ。

もしそれが聞けないというのなら、この場で私が国家に代わって死の裁きを下してやる！

今にも身体を縛るロープを引きちぎり、この場にいる人間ごと部屋を破壊せんばかりの怒りが、未来の小さな身体を乗っ取るうとする。

しかし。

怒号が舌に達する寸前で、鍛え上げられた理性が立ちはだかった。二つに裂かれた腹から血塗れの内臓をこぼれさせて絶命し、一面の蠅にたかられている白人の少女。

頭を潰されて頭蓋も脳もめちやくちやになり、どこに目鼻があったのかですらわからなくなった青年。

彼らの命なき姿を暗示していた、壊れた人形。

そして同性に陵辱され、人に一番見られたくない姿を晒された、アジア人の血を引く若者たち。

捜査資料で目にしてきた生々しい写真が、フラッシュバックのように未来の心を流れていく。冷静になれ、と声なき意志が警告の証として心に突きつけてきたのは、これまで犠牲になった人々の無惨な姿であった。

今ここで男とソフィーを殺すのは、たとえこちらが丸腰であったとしても容易い。

だが、彼らを殺しても、全ての被害者の無念が晴らされるわけではない。

自分は、法を侵す犯罪者から市民を守る使命を負っているのだ。その自分が、情に負けて法を無視することは許されない。

公の場に罪人を引きずり出して全てを暴き、裁きにかけて、相応な罰を下す。そのために捜査官は国家に忠誠を誓い、様々な特権の行使を許されているのだ。

本来あるべき姿を忘れて本能に従ってしまったら、それこそ犯罪者と同じになってしまう。そして、同志たちにも世間から蔑みの目が注がれることとなる。自分一人の軽率な行動がCVCの仲間を、FBIという組織を、ひいてはアメリカという国を裏切ることになる。

それだけは断じて避けねばならないのだ！

怒りで血流が増し、膨れ上がった未来の全身の筋肉から力が抜けていく。意識して身体の強張りをほどいた彼女は、心に燃え盛っていた黒い炎が勢いを落としていくのを感じた。

次いで、歪みかけていた自らの表情に気づく。そのまま、大ぼらを吹く男とは話にならない、と言いたげに顔をしかめ続けた。

「質問の答えになつてないじゃない。私は、どうするつもりなのかつて聞いたんだよ。私のホストファミリーから、身代金でも取るつもり？」

未来の感情を抑えに抑えた声は、低い呟きとなっていた。

熱くなっていた全身から吹き出していた汗が、今更ながらに気持ちが悪い。

「……そうか。そうだよな、普通はそう考えるか」

未来の葛藤など知る由もなくベッドに座る男には、相変わらず緊張感のかけらもなかった。縛られている若い女が気丈に見返してくるのを、薄笑いを浮かべて眺めるばかりだ。

「お金目的の誘拐だと思ってるのね。けど、まあそうよね。普通なら」

「普通なら、ってどういうこと？」

男と同じことを敢えて繰り返したと見えるソフィーを、未来が見比べる。

立ち上がった嘗ての友人女性からも、先と変わらず感情が込めら

れてない言葉が返ってきた。

「お金のためなら、わざわざ苦勞してあんたを捕まえる必要なんか
ないわよ」

「じゃあ、何のためにこんなことをするの？」

未来が不安そうな言い方を装って聞いてみても、2人は何も答え
なかった。

示し合わせたように口を閉ざし、目配せしては床に伏す未来を見
下ろしてくる。

外で鋭く吹きつけている風の音と、生きている者の息遣いが、や
けに大きく響いている気がした。

突如として非日常的な異空間に放り込まれ、情報が何一つ与えら
れない。なのに、この胸のむかつく沈黙を作り出した者たちは、言
葉を交わさなくても何かを伝え合っている。

人間が本能的に嫌悪し、不安を感じる状況である。恐らく彼らは
今までの被害者も似たような目に遭わせ、耐えられないほどのスト
レスを与えたのだろう。

未来は単身でこの状況が打破できる肉体の持ち主ではあったが、
不意の静けさに対して反射的に覚える感情までは操れない。

運悪く頭をよぎったのは、その不安を掻き立てるものであった。

そう言えば、一方通行の特殊通信はどうしたのだろうか？

スイッチとなっているピアスに不具合がないのだから、ソフィー
の家で交わした会話は少なくとも本部に届いていたはずだ。

まさか、意味のない通信として見過ごされてしまったのだろうか？

それとも受信側のスイッチが切られたままで、何一つ伝わってい
ないのだろうか？

最悪、会話の内容が伝わっていなくても、電波を辿れば場所の特
定は可能な筈だ。それなのに、とっくに到着していてもおかしくな
い筈の応援が来る様子が全くない。

「ソフィー、これは一体何の真似なの？私たち、友達の筈じゃない。
悪い冗談にも程があるよ。早くこのロープをほどいて」

しかし未来は表情に影が浮かんだのを利用し、おどおどとソフィーに声をかけた。

とにかく会話を続け、情報を集めながら相手の様子を窺うしかないのだ。

「駄目よ。あなた、見かけによらず力持ちなんだもの。暴れられると面倒なんだから。それに私、あなたを友達だなんて思ったことは一度もないわよ」

ソフィーの言葉に、未来は身じろぎして見せた。

「じゃあ、私って一体何だったの？」

「そうね。強いて言うなら、道に落ちてる石かしら。蹴ったり投げたりして遊べるし、投げつけて何かを壊すことはできるけど、結局はその辺に捨ててすぐ忘れるところは同じだから」

ソフィーの話し方は、子どもがおもちゃのことをあれこれ語るのと同じであった。もっとも彼女は、これのことが好きと楽しそうにしたり、あそこが気に入らないと強く否定したりもしないため、子どもと全く同じだとは言えなかった。

一体彼女の中の、何が本物なのだろう。

その時々によって不安定に姿を変えながら中身は空っぽで、他人が何をどう感じているかということが理解できない。そのため良心の枷が働かず、誰にどんな仕打ちでも重ねることができると。

そして自分が感じることでできないから、逆に人を傷つけるとどうなるのかということに異常な興味と執着を示す。

もともと持ち合わせていない他者への関心を持つているかのよう
に演じ、がらんどろろな自分を満たそうとする、不気味なほどの無関心の塊。

それがソフィーの姿なのではないか。

わざわざ筋道を立てて考えた未来の背中に、ひそやかな鳥肌が立っていた。

「しかし、こいつは俺が考えてたよりも面白そうな女だな。今も傷ついたような顔をしてねえし、ふんじばられて知らない場所に連れ

て来られてるのに、泣きも喚きもしねえ。お前に顔を蹴られても、悲鳴の一つも上げやしねえ。俺たちを全く怖がってもいないようだし、妙に落ち着いてやがるな。お前があれだけ欲しかったわけがわかったよ」

ふと気がついてみれば、しどけなく枕にもたれていた男が未来をしげしげと眺め回している。

捜査官としての冷静さが、裏目に出た形となっていた。

まずい、と未来が警戒した時である。

「アンデイもそう思うでしょう？マサトもいい妹がいるものよね」

「先……兄さん？」

ソフィーの口から出た名前に、未来は鋭く反応していた。

先生、と危うく言いかけるところであった。

「ここに、兄さんもいるの？」

うるたえて、未来はアンディと呼ばれた男とソフィーの顔を交互に見やった。彼女の声がうわずつたのは半分演技であったが、半分は本気で動揺したせいだ。

やはり、ソフィーもアンディもすぐに答えようとはしない。

先も未来に質問の答えを返さず、結局ははぐらかした。彼らが未来を支配し、思うまま操ろうとしていることは明らかだ。

10秒ほど無言の間を保ってから、アンディがベッドの上でぞんざいに絡んでいたシーツと毛布を脇へ避けた。

「さつきからずっとここにいるぜ。気がつかなかったのか？」

ベッドの方を振り返った未来の心臓が大きな音を立てて跳ね上がり、呼吸が瞬間的に止まる。

アンディが座るベッドの奥に、ぐったりとうつ伏せになっている杉田の姿があった。顔をこちらに向けてはいるが瞳は閉ざされており、瘦せた身体の上半身は、眼鏡以外に何も身につけていない。

そして、やや青ざめている裸身はぴくりとも動かなかった。

倒れていた未来の身体が、肘で床を叩いて跳ね起きる。

逸る気持ちを抑えた彼女は、まず聴覚を最大にして心音を全力で探った。

この部屋にある鼓動は、自分のものを入れて4つだ。

そのいずれも不規則になっていたり、極端に弱まっているものはない。念のために呼吸音も拾ってみたが、全てが安定したものであることがわかった。

これなら大丈夫だ。

杉田は恐らく、命に別状がない状態で生きている。

しかしとりあえずの無事が確認できたのはいいが、ここで少しも

取り乱さないのは、ソフィーやアンディに不審がられるだろう。

未来は膝をついた姿勢で前のめりになり、泣きそうな顔を作った。

「先生……ねえ、先生！大丈夫？私の声が聞こえる？先生つてば、返事してよ！」

甲高い声に日本語を乗せ、未来は声の限り呼びかけた。家具の少ない横長の部屋に、悲痛さを感じさせる声が響いていく。

杉田に聞こえていないはずなのに、彼は全く反応を示さなかった。呼吸も心音も安定しているのだから心配ないだろうが、気を失っているという可能性もある。

「心配すんな。こいつは、さつきまでピンピンして楽しんでたんだ。今は疲れてこうなってるだけだよ」

アンディが杉田の顎に手をかけ、まだ不安と心配をこびりつかせた表情でいる未来へ顔を差し向けてやった。

すると、杉田は微かな呻き声を上げた。意識が朦朧としているのか、彼はアンディにされるがままで。

今更ながらに、未来は愛する男があられもない姿にされていること、アンディもまた裸であり、ブラックヘアの犯人がゲイであることを頭に閃かせた。

杉田が暴行されていたであろうことは、誰の目にも明らかだ。

身体の底から突き上げられたような憤怒が、未来の口から迸った。「てめえら、この人に何を……」

しかし彼女が本気で上げたかけた怒号は、ソフィーに激しく胸を蹴りつけられたせいで中断された。起き上がっていた未来は再び肩から地面に突っ込み、横倒しにされた。肺に受けた衝撃で、息が詰まる。未来は先よりも激しく咳き込んだ。

「さつきからうるさいわね、ヨーコ。あんた、自分の立場ってものを弁えてる？どうして、私たちがあんななんかの質問に答えなきゃなんないの？」

加減することを知らないソフィーは、未来の胸板を力を込めて思い切り蹴り下ろしたようだ。未来が普通の身体をしていたなら、肋

骨にひびくくらいは入っていたらう。

だが、これくらいは杉田が受けていただろう痛みには比べれば、屁でもない。

むしろ暴行を加えられて、怒りはそこそこにおさまっていた。杉田と2人、何とか窮地を切り抜けるためには、決して感情に飲まれてはならないのだ。

荒い息の下、未来はありったけの敵意を込めてソフィーを睨みつけて見せた。

「こつちを見ないでよ、気持ち悪いから。その黒い目って、本当にむかつくわ」

自分こそ人間のふりをしただけの生き物のくせに、嫌いという感情はあるのか。

未来はソフィーへの侮蔑を込めて、今度は床から嘲笑を叩きつけてみることにした。

「へえ、だから自分の髪と目の色は変えてるってわけ。同族嫌悪って奴？だから余計に、作りものくさく見えんだ」

言い終わるか否かのうちに、無言の蹴りが今度は未来の腹に叩き込まれた。

「く……！」

未来が初めて呻き声を漏らし、縛られた身体をくの字に曲げた。強化された身体とは言え、流石に少しはきつい。

ソフィーは凶星を突かれてよほど癢に触ったのか、そのまま何度も未来の身体を爪先や踵で蹴り続け、体重を乗せて激しく踏んでくる。未来の上半身を包む白いニットが、たちまち黒い靴跡だらけになっていった。

「おい、いい加減にしろよ。俺の楽しみがなくなっちゃうだろ」

「大丈夫よ。こいつ、まだ笑ってるもの」

ソフィーは赤い髪と呼吸を乱しながら未来の顔を踏みつけ、アンディの制止する声に応えた。

彼女の靴の下にある未来の頬は腫れて歪み、汚れと痣がつきなが

らも、口許の不敵な笑いが消えていない。

相手に少しも苦痛を与えられていないことが、ソフィーの神経を逆撫でした。足を未来の顔からどけると、両手でニットの襟を掴み、乱暴にか細い半身を引き起こす。

「私ね、アジア人で大嫌いなもの」

あまり顔を寄せず乱暴に言い放つと、ソフィーは未来の上半身を床へ再び叩きつけるように放り出した。

「だから貴女も大嫌いよ、ヨーコ」

「そいつはどうも。ついさっき、私もあんたが大嫌いになったところだよ」

背中から後頭部を打ちつけんばかりに転がった未来であったが、痛みを堪えつつなお憎まれ口を呟くだけの余裕はまだある。

しかし、相手を怒らせて会話を長引かせるのにも限界があった。

自分一人しかこの場にいないのならまだいいが、あまり彼らを激昂させると杉田にも害が及びかねない。性格異常者の犯人というのは、本当に扱いが難しいと実感する。暴行を受け続けてなお平然としているのも、余計な疑いを持たせてしまっただろう。

「何？聞こえないわ。言いたいことがあったら、はっきり言ってみるのね」

歯を食いしばり、身体を曲げて痛みに耐える未来をソフィーが見下ろしてくる。

どうせ何を言っても暴行の種にしかしないのだろうが、この辺りで抵抗を一度引く必要があった。顔を上げた未来が、血が滲む口で今一度問いかけてみる。

「私をどうするつもりなの？」

不安に声を揺らしつつもまだ冷静さを保っているように見える未来に、ソフィーは小首を傾げて見せた。

「へえ、そこで寝てるマサトのことはもう心配しないのね。意外だわ」

「こいつはさっきまで、大声でよがって楽しんでたんだぜ。心配す

るまでもねえんだらう」

2人の女のやり取りを見物していたアンディに、下衆な笑いが浮かんでいる。

彼が杉田の下半身を覆っているシーツの下に片手を滑り込ませるのを目にした未来は、怒気を露にして眉を吊り上げると、肘で床を叩いて跳ね起きた。

「黙れ！その人に、それ以上触るな！」

犯罪者を威嚇するときには出さない低い声に乗った未来の迫力が、狭いリビングを制圧しかける。しかしそれさえも面白がっているのか、アンディの態度は軽い。

彼は更にシーツを持ち上げ、杉田の汗に濡れた肌を未来に晒そうとする。

「何だ、お前も見てみたいのか？」

「そんなわけあるか！てめえら、絶対に許さない。たとえ神様が許したって、私が地獄の底から永遠に呪ってやるから！」

腫れ上がった顔を痛みに歪ませ、それでも勢いを少しも落とさず未来がアンディに食ってかかる。だが、ソフィーは未来の顔をブーツの底で打ち据えた。

容赦ない蹴りを受けて、未来は声も上げる間もなくまたフローリングに倒れた。鼻を直撃されて激痛に声も出せなくなった未来が、床の上で縛られたままうづくまる。

「不細工な顔で、汚い文句を並べないでくれる？私たちの耳が腐っちゃおうでしょ」

ソフィーが吐き捨ててから、汚物でも見るような目で震えている未来を一瞥する。その際、革のブーツに未来の鼻から散った鮮血がこびりついているのに気がついたらしい。歯の間から鋭い舌打ちを漏らした。

「やだ、汚らしい血もついたじゃないの！」

ソフィーはすかさず右足を倒れている未来の腹に当て、白いニットに爪先をねじ込むようにして擦りつけて血糊を拭き取る。目の端

に涙を滲ませながらも、まだ挑戦的な瞳を捨てない嘗ての友に気が収まらないのか、彼女はすぐ後ろにあるデスクの引き出しを開けて中にあるものを取り出した。

「そうね。あんたたち二人揃って、面白い格好にしてから放り出してみるのもいいわよね」

まだ乱れた息の下、初めて含み笑いを見せたソフィーが右手に握っているのは、アメリカで最も手に入りやすい拳銃のひとつであるベレッタM92だ。

自分が激しく反応し過ぎて必要以上に彼らを刺激したか、と未来の身体に緊張が走ったが、すぐにM92の口径が9ミリであることを思い出した。ティアーズの被害者の体内から見つかっている弾丸も9ミリだったはずだ。

「面白い格好って、何のこと？」

鼻血が肌を伝っていく不快感と鈍痛に顔をしかめながら、未来が掠れた声をソフィーに向ける。もともと小づくりな童顔に流血を伴っているだけ、痛々しさは増すばかりであった。

「ニュース、見てないの？最近、アジア人の男ばかりが死んでるでしょ」

ソフィーはベレッタの引き金に指をかけると、無造作に銃口を未来の頭に向けた。

未来の腫れで細くなった目が、静かに理性の光を閃かせる。

遂にソフィー自ら、ブラックヘア事件のことを唇に上らせたのだ。特殊通信が通じていることを信じて、犯人しか知り得ないことを話させるしかない。

顔の角度は変えず、未来はちらりとベレッタの側面に視線を走らせた。安全装置はかかったままになっているのが見える。

ソフィーはただ脅すだけのつもりなのか、すぐに殺す気はないのだろうか。

万一の場合もこの距離なら、足のロープだけ引きちぎって体当たりを食らわせれば、速さで何とか勝つことができる。

未来は確信すると呼吸の間隔を短く早めにして、狼狽しているふりを装った。

「……まさか、あんたたちが、あの事件の？」

言葉も途切れさせつつ、視線だけはソフィーを観察することを忘れない。

未来の後頭部には、目で捉えた全てを記録するメモリが挿入されている。そこに彼女の本性を全て暴き出すつもりでかからねばならないのだ。

「さあ。そうしたら面白いと思っただけよ」

「あの事件では、男しか狙われなかった筈じゃない。なのに、何で私が！」

はぐらかしたソフィーに、未来が声を裏返らせて金切り声を張り上げた。

ソフィーは面倒そうに鼻を鳴らすと、改めて銃口を突きつけてくる。

「でも、そうね。あんたをあんな風にするつもりはないわ」

「殺さないでいてくれるの？」

我ながら他人の瞳に見苦しく映るだろうと思うほどの媚びた色を含めて言い、未来はさすがのようにソフィーを見上げた。

「違うわよ。普通に殺すのはつまないってこと。どう殺されてたかってことはニュースじゃ残酷過ぎて伝えないから、あんたは知らないでしょうけどね。私が持つてる専門の本に、そういう写真がいっぱいあるわよ」

今まで自分が殺した人々の姿を思い描いているのか、ベレッタを構えたソフィーは視線を左上に逸らしている。何を言っているのか理解できない、と未来は首を傾げて怪訝そうな表情を作った。

「要するに、あんたをここから逃がすつもりはないってこと。後始末をどうしようかってことだけ、迷ってるどころなの」

しかしソフィーは銃の安全装置を指で弄んでおり、口から出す言葉は相手を脅すためのものではなく独り言のようで、視界に未来を

入れようとしてもしていない。

彼女が被害者を虐待することに性的興奮を覚えるタイプの異常者なら、この状況に刺激を覚えて高揚した様子を見せそうなものだが、どうも違うらしい。

ティアーズの事件現場はちくはくな印象を受ける、と確か心理分析官のポールが言っていた。もしアンディが被害者を殺して欲求を満たし、そこまでの計画と課程を考えたり、残虐行為を見て楽しむのがソフィーなら、犯行に異なったタイプの特徴が混ざっていることも納得がいく。

それに彼女は、自分が研究に使う専門書のこと口にしていたではないか。

やはり大学で学んだことを、犯行の材料にしていたのだ。

「あんたたち、何回もこんなことをやってるの？そこにいる奴と一緒に？」

暫し考えをまとめるために口をつぐんでいた未来が、まだベレッタの安全装置を指先で触っているソフィーに声を震わせて言った。

「いけない？」

ソフィーは、鮮やかな緑の瞳を床で呻く未来に向けようとしない。開き直るわけでもなく、感情が込められてもいない、突き放した印象をもたらす態度だ。

未来にとってはありがたいのは、ソフィーがこれが誘導尋問だとは露ほどにも思っていないのがわかることだが、抵抗する力を持たない者にとっては血も凍るほどの恐怖を感じるそれだろう。

「誰だって、嫌いなものはあるじゃない。それが人か物かだけの違いよ。貴女だって、むかつく奴を殴りたいって思ったことがあるでしょ？」

肯定も否定もせず論点をずらすのは、宙ぶらりんな状態であることを相手に聞かせれば不安を煽れるのをわかっているせいだ。そして彼女は、そうやって人を不安に陥れるのが悪いことだと、全く思っていない。聞かされる方が不愉快になるほど落ち着いていられる

のも、どんなに犯行を重ねてきても逮捕されなかったことに自信を持ち、余裕があることの証拠である。

未来はやや疲れてきた首を伸ばしてきつと顔を上げると、怒りの演技を続けた。

「だからって、こんなことをやっていいと思ってるの！」

「アジア人を傷つけたって、私は痛くないもの」

何の躊躇もなく返してくるソフィーには、未来が目を覚まして以来全く態度に変化がない。今までに何人も凶悪犯を逮捕してきた未来であったが、恐るべきパートナーを得た女の殺人犯でここまで動じない人物は初めてだ。

ソフィーとアンドリユーが2つの事件で殺してきた被害者は、ざっと11人である。

いや、もしかしたら余罪もあるかも知れない。

彼らが隠しているおぞましき闇は、白日の下に晒すべきだ。

良心というものを切り捨てている人間を、決して許すわけにはいかない。でなければ、理不尽に命を奪われた人々の魂が永遠に浮かばれないのだ。彼らの痛みに比べれば、犯人の女に足蹴にされて顔を傷つけられることぐらい、屈辱ではあっても堪え切れないものではない。

「嘘でしょ」

俯いた未来が発した呟きは低く小さなものであったが、抑え難い怒りをわななきに変えた未来の誘導尋問はまだ続いていた。

「何が？」

肩を震わせる未来を恐怖で支配していると思っっているのだろう、

ソフィーはやはり面倒そうにしか答えてこない。

「アジア人だけじゃなくて、誰を傷つけても痛くないくせに」

「ああ、そうね。自分じゃなければ、みんな同じだわ」

今度は軽い笑いを交え、ソフィーはベレッタのグリップを持ち直した。

「私が好きなのは、生きてる誰かが苦しむところなの。そんなの、

滅多に見られるものじゃないしね。自分が痛いのは最高に嫌だけど、痛みで誰かを好きにできるのは最高よ。身体も心も、同時に私が自由にできるんだから。あんたを殺せば死ぬ瞬間に私のことしか考えられなくなってるわけだし、その後には身体をどうやって扱おうと、私の自由になる。どんな相手でも、好きなだけやっつけられるんだもの。本当に最高よ」

どこか現実感のない台詞を長々としゃべる様子が、夢遊病者を思わせる。ソフィーは右手の銃を惚れ惚れと眺めているようだったが、彼女の視界には一体何が捉えられているのか、まるで見当もつかない。

この作られた赤毛の娘が口にした言葉の端々には、これまでの事件を裏付けるキーワードが幾つも含まれている。

しかし、あの武器を見つめる緑の目の不気味さは計り知れない。瞳孔の大きさが全く変わらない瞳は、心を持たぬ人形の顔に嵌め込まれた色つきガラスと同じだった。濁ることを知らず、どこまでも透明に、純粋な邪悪さを秘めることができる禍々しさを放っているのだ。

ソフィーの全身に淀んでいる黒い気配がじわりと忍び寄ってきた気がした未来は、これ以上の言葉を発するのは危険だと本能が警告するのを感じていた。

彼女は側に立つソフィーから瞳を逸らしたが、今度は逆に視線を向けられてくるのがわかった。

「ああ。折角、ヨーコが悲鳴くらい上げて怖がると思ってたのに、銃を向けても全然平気みたいだし、どうしてそんなに度胸が据わってるの？」

ソフィーはベレッタの銃口にふっくらとした唇を寄せると、未来の横にしゃがみ込んできた。

いつの間にか、ベレッタの安全装置が外されている。

未来の心臓が大きな音を立てて跳ね上がり、筋肉が硬直した。歯の間から、ひゅつと短く息を吸う音が漏れる。

その一秒もない間であった。

未来の僅かに開いた血塗れの口に、ベレッタの銃口が突っ込まれた。

「いつも気が強いあんたが子どもみたいに泣いてるところ、是非見てみたいのよね。お願いだから命だけは助けてって、今までの奴らはみんなうるさいくらいに喚いてたんだもの。ねえ？」

未来の見開かれた瞳に、引き金にかかったソフィーの指が映り込む。

誰かの感情を感じるといふ経験がなく、共感することができない上っ面の音声は、テープに吹き込まれた自分の声を思わせる。子どもが遊びでぬいぐるみや人形に話しかける時のように、ソフィーの言葉は虚ろに、空っぽのまま未来の鼓膜に届いていた。

この女は本当に他人の心が何であるのか、命がどうなるのか、本質的に興味がないのだ。

だから誰かの運命を手中に収め、命を弄んでいるときさえも、何も感じない。

未来の頭の中で氷の刃の如き現実と自らの心臓の鼓動の音が交錯し、全身の血を凍りつかせんばかりの戦慄へと突き落とそうとした。冷たい銃身が舌と唇を冷やし、それが手や足の温度までも下げようとしている気さえする。

口の中から脳幹を撃たれば、いくらサイボーグでも即死だ。会話を引き延ばそうとした結果がこれか。

散々全身を足蹴にされ、顔を傷つけられた挙げ句にこの体たらくか。

油断したお前が悪いのだ。

結局このまま殺されて、自分は誰も救えない？

やっと再会できた杉田と、一言も言葉を交わさずに死んでいくのか？

そういえば、日本に残してきたたくさん仲間たちは元気になっているのだろうか。

国防軍の横山幕僚長にも、ずいぶん長らく会っていない気がする

……

とりとめののない様々な想いが、一気に未来の心に広がっていく。

しかし相手の気まぐれで全てが決まるこの時さえ、未来の中の理性は必死に感情の渦に逆らい、押し流されまいと必死に働いていた。

落ち着け。

奴はまだ本気じゃない。

暴れて刺激するのは却って危険、かと言って、あまり怖がらないのも危険だ。

適度に取り乱せ、だが必要以上に騒ごうとするな。

今まで学んだこと、現場で経験したことの全てを思い出せ。

命を繋ぐ答えは、きつとその中にある。

撃たれても、意識がなくなる瞬間まで考えるのを止めるな！

熱くなった頭の芯で理性と感情とが凄絶に争い、未来の全身に汗が噴き出す。

彼女は未だ口に押し込まれているベレッタの銃身と、ソフィーの顔とを交互に見やった。

ソフィーとは正面から目を合わせることにならないよう、主に顔の下半分に視線を走らせる。

「あ、マサトに何かするのが一番いいのかしら？」

ところが出し抜けにソフィーの明るい声がしたかと思うと、不意にベレッタが未来の口から外された。

極度の緊張で固まっていた筋肉が、急速にほどけていく。生命の危機を一旦脱してどっと噴き出してきた大量の汗が、腫れ上がった頬や額から流れ落ちていった。荒れた心臓の鼓動は未だ鎮まらず、

手足は縛られていてもがくがくと震えているのがわかる。

ソフィーはまだベレッタを離さず、ベッドの方を向いていた。彼女の視線の先には、2人の裸の男がいる。

今まで様子を眺めるばかりだったアンデイが、笑顔のソフィーに頷いて見せた。

「待てよ、こいつは楽しんでたんだぜ。何かもつと他のことにすりゃあいいだろう」

「やめろ！その人に手を出すな！」

未来は声の揺れを押さえつけて怒鳴ったが、顔から血の気が一気に引いたことは隠せない。

アンデイがベッドの毛布とシーツを乱暴にはねのけると、今まで隠されていた杉田の裸身が晒された。

反射的に、未来は目を背けて目を閉じた。

ソフィーがまだ銃を手放していない今、動くのは危険すぎる。素人が撃つ銃弾はどこに飛ぶか予測できず、下手をすれば杉田の身も危うくしかねない。

しかし未来が全力で自分を抑えていても、アンデイが杉田の横に身を寄せたことは、空気の動きと音で嫌でも伝わってきた。

「お前はもう、俺なしじゃ生きられないんだ。なあ？」

「ああ……もう、女なんていらぬよ。僕は、君さえいればいい」
情欲と媚びを感じさせる2人の男の声が未来の聴覚に届いた時、彼女は目を開けた。

そこで彼女の方に顔を向けられなかったのは、本能的な動きに恐怖と驚きが勝ったからだ。

そう。

未来は怖いと思っていた。

杉田の、誰かに見られたら自殺したくなるほどにまで傷つくであろう姿を見ることが、何よりも恐ろしかったのだ。

だが、それは今や冷たい驚きと絶望という闇に、黒く覆われようとしていた。

今、彼は何と言ったのか？

君さえいればいい。

恐らく自分を最も傷つけた男に向かって、そう確かに言っていたのだ。

彼女は、極限状態に追い込まれた人間が限りなく弱い存在で、それまで築いてきたものを犯人の毒であっさりと崩壊させてしまう現実を、嫌と言うほど知っていた。

それでも、未来は目の前の事実を認めることができなかった。心の中に入れるまいと、全ての感覚器が拒否していた。

目の前は真っ白になりかけ、そこから先の音は聞こえず、部屋にこもっている体臭もしない。暑くも寒くもなく、舌に広がっている血の味も感じられない。

時がそこで止まり、何も感じなくなってしまうばい。

未来の願いが、彼女の肉体の上だけで叶ったと思えた時である。

彼女の視界に、ふと見覚えがあるものがぼんやりと浮かび上がった気がした。

ベッドと床の狭い隙間に、しおれかけた一輪の花が落ちている。

紫のアネモネだった。

あなたを信じて待つ。

活力を失いかけてもなお可憐さを損ねない姿とともに、この花がいただいている意味が未来の心に蘇った。

杉田は、ここで花を活けていたのだ。

誰よりも大切に、信頼するパートナーである自分のことを待ちながら。

いつ殺されるともわからない状況の中、何とか命を繋いできたのだ。

なのに、彼を必ず助けると誓った自分が、信頼を揺るがせてどうすると言っただろう。

今まで耐えに耐え、遂に未来と再会するまで生き抜いてきた杉田の強さを、まず自分が信じなければ。

「へえ？貴女の場合は、こういふ方が堪えるのね」

床で青ざめながら懸命に絶望と戦う未来の顔を、ソフィーが面白そうに覗き込んでいた。顔を蹴られても全く堪えていなかった未来が、僅かな間でパニックを起こしかけていることに気づかれたのだ。しまった、と我に返った未来が次に見たのは、床にタートルネツクを脱ぎ捨てるソフィーの足元だった。猟奇殺人犯の女が何をしようとしているのか飲み込めず、未来は次々と重ねられていく服をただ見つめるだけとなった。

「女なんていらなくてマサトに、そんなことはないって私が教えてあげるわ」

色欲の塊を剥き出しの言葉としたソフィーの行動をようやく理解した未来だったが、既に遅かった。一糸纏わぬ白い肌を全て晒した赤毛の女が、空いている手で自らの豊かな身体の線をなぞってから男たちのベッドへと向かっていく。

未来の喉が形を持たない何かに塞がれ、息も漏らせなくなる。やめろ。

もうやめてくれ。

立ち上がって叫びたくても唇すら満足に動いてくれず、縛り上げられた足には全く力が入らない。

愕然として力なく横たわる未来を、ソフィーが勝ち誇った顔で一瞥した。

たっぷりとした胸や尻を揺らして近づいてくる彼女を迎えるため、アンデイが奥へ、杉田が手前へと身体をずらす。興奮に甘い吐息を漏らしながらベッドに上がったソフィーが、ベレッタをサイドテーブルに置き、熱い肉体を2人の間へと割り込ませた。ベッドが3人分の重さに軋んだ、その時。

金属がこすれる音が上がり、日本語の叫びが轟いた。

「未来、今だ！」

それが誰の声だったのか。

大切な、この世で一番大切な男に本当の名前を呼ばれ、未来の手

足で血液がかつと熱を帯びる。

彼女は何も考えずに両手足で床を叩き、立ち上がっていた。力を取り戻した未来の手首を、腕を、足を締めつけていたロープが全て弾け飛び、空中でもつれる。

長方形のリビングの真ん中を舞っている黒いベレッタが、戒めを解かれて跳んだ女の右手に吸い込まれた。

そして柔軟な膝が着地の衝撃を吸収し、シーツをひつつかんで部屋中央まで転がってきた青年の前に、法を守る小さな身体が下り立った。

「動くな！ FBIだ！」

揺るぎなく、低く、冷静で威圧感に満ちた声が、離れた位置にある壁に当たって響く。

武器を手にした未来から発せられたのは、これまでに幾度となく叫んだ台詞だった。

が、今ほどの一言を欲していた時はない。

ワックスが剥げた床に片膝を立て、油断なく銃を構える未来の後ろには、シーツで身体を覆う杉田がいる。これで、もうアンディとソフィーは杉田に指一本触れられない。

形勢は完全に逆転したのだ。

「……FBIって？ ヨーコ。貴女、頭がどうかしちゃったの？」

まだ事態が飲み込めていないのだろう。ソフィーは裸を隠すことも忘れ、きょとんとしたまま小首を傾げた。状況を理解していないと言っよりは、突拍子もないことを喚く未来を馬鹿にした様子であることが窺える。

「私は、連邦特別捜査官のミキ・ハザマだ！ 両手を上げて、そのまま壁に手をつけ。誘拐及び監禁、暴行と傷害の現行犯で逮捕する！」
未来が罪状を告げても、ソフィーはぼかんとしたままだ。

しかし、アンディはそうではなかった。裸のままベッドから飛び降りて駆け出したのだ。

未来が瞬時に反応し、走るアンディに銃口を向けて警告した。

「止まれ！それ以上動けば撃つ！」

だが、彼女は引き金を引こうとしたその時、引きつったように指を硬直させた。アンディに向けたベレッタが、無意識のうちに頭を狙っていたからだった。

CVCに籍を置く捜査官である以上、犯人を殺すわけにはいかないのだ。

だが、未来が照準を急所から外す間もなく、アンディの身体は素早く一つしかないドアをくぐっていった。何重にも縛っていたロープをやすやすと引きちぎった未来が、普通の人間ではないではないと気づいたのだらう。

このリビング兼ベッドルームは横に長く、部屋のほぼ中央にいる未来と杉田から壁までは、大人数人が並べるくらいの距離が開いている。杉田を背後に庇っている彼女が手を伸ばしてアンディを確保するのは、場所が離れ過ぎていた。

未来は、杉田を残してすぐさまアンディの後を追うのを躊躇った。彼が裸で逃げ出すことを想定していなかったり、一つしかないドアを塞ぐ位置まで最初に移動できなかったのは、痛恨のミスであることが否めない。

それに、目の前にはアンディの共犯であるソフィーがいる。

この女を確保しないでもいいわけがない。

ところが今は手錠どころか身分証さえ携帯しておらず、先に未来がちぎったロープで拘束しようにも、それでは時間がかかり過ぎてアンディに逃亡されてしまう恐れがあった。

「未来、あいつを追うんだ！応援は僕が要請する」

逡巡している女性捜査官に、再び日本語が飛んだ。

杉田は自由を得てからの僅かな間に、ジーンズとアンダーシャツまでを身につけていた。彼は未来の後ろに立ち、暗い怒りがくすぶる瞳でソフィーを睨みつけている。その表情が、今はまだ再会を喜び合える時ではないと吼えていた。

ここまで負の感情を露わにしている杉田の姿を、未来は初めて見

た気がした。

もともと細かった彼の身体は更に痩せて、顔色も良くはない。行方不明になる前と、明らかに印象が異なっているのだ。

ソフィーたちに捕らわれている間、彼の身体と心にどれだけの痛みがもたらされたことだろう。

「早く！今、あいつを捕まえられるのは君だけなんだ！」

しかし、今はそんなことを考えている暇はない。杉田が今一度張り上げた叫びは、未来の精神に更なる活力と理性を与えていた。

「電話はあるの？」

パートナーの掠れ声に、杉田が頷いて見せる。

彼は右手を差し出した。

「ここに何かがあるかは、僕もよく知ってる。だから、ここは任せて早く行け！」

彼の手が武器を求めていると、未来はすぐには思い至らなかった。

以前の杉田は、武器を持つことを極端に嫌っていたのだ。

強い感情を宿した瞳で、彼はもう一度未来の顔を見た。

「……わかった。必ず戻ってくるから！」

促された未来が力強く返す。彼女はやや大きな杉田の手に、安全装置がかかったベレッタを握らせて踵を返した。

勢いをつけて、未来はリビングを飛び出していった。

「うわっ！」

小さく声を上げた未来は、思わず汚れたニットに包まれた腕を上げて目を覆った。

玄関から外へ走り出た彼女を迎えたのは、墨を流したような暗闇と土砂降りの雨であった。風もかなり強く、横殴りの雨が未来の全身を容赦なく叩いてくる。時間が何時なのかまるで見当もつかないが、周囲の様子がろくに見えないことから、夜であることは間違いないようだった。

未来は瞬く間に冷たい雨水に薄められた顔の血糊を袖で拭い、辺りを見回した。

先程までいた建物は開けた場所に建つトレーラーハウスで、両側に古い自転車やダンボール、破れて泥だらけになったビニールといった生活用品のごみが積み上げられている。そのすぐ後ろには黒々とした森が迫っており、周囲を細々と照らしている自前らしい街灯の明かりが、ひどく頼りないものに見えた。

聴力を上げながらトレーラーハウスのポーチから駆け出すと、深い水溜りの泥水が足元で撥ね、ジーンズの裾に染み込んでいった。12月上旬の気温は低く、氷のように冷たい雨は、みぞれに変わる直前のように思われる。

アンディは、凍えるほどの寒さと雨の中を全裸で走り抜けていったのだ。そう遠くに行ける筈もない。

トレーラーハウスの外壁に沿って走りながら、未来は瞳の赤外線フィルターを稼働させて暗闇に視線を巡らせた。

すると、左手の奥に大きな倉庫のような建物が浮かび上がった。顔を打つ雨の中に目を凝らしてズームを絞ってみると、閉ざされたシャッターの横にある入口のドアが僅かに開いているのも確認できる。

更に、その倉庫の脇に見覚えのある車が停めてあるのが見えた。未来の車であるダークブルーのフォードだ。

彼女は慌てて自分のジーンズのポケットを探ったが、やはりソフイーの家に入る前に入れてあった車の鍵は見つからない。

未来は舌打ちを漏らして前髪から滴り落ちる水滴を指先で払い、まず自分の車へと走った。助手席側に回ってドアノブを軽く引き、ロックがかかっていることを確かめてから少し後ろへ下がる。

彼女は濡れそぼった愛車の窓目掛け、鋭い回し蹴りを食らわせた。孤を描いたスニーカーの踵が強力な鈍器となってガラスに叩き落とされ、窓が派手な破壊音と共にあっさりと粉碎される。

続いて脱いだニットを巻いた腕をぼつかりと開いたガラスの穴から突っ込んで、内側からドアロックを外し乱暴にドアを開けた。助手席のシートを引っぺがさんばかりに持ち上げ、隠してあったFBIの身分証とホーネット、ゴム弾を装填したマガジンを2つ掴み上げる。

ホーネットは45口径の大型拳銃ではあるが、非殺傷兵器のためこの状況にはうってつけた。テフロン加工の黒い銃身が未来の小さな手にずっしりとした手応えを感じさせ、安心感を与えてくれる。

銃身に片方のマガジンを装填し、もう片方を身分証とともにデニムの尻ポケットに押し込んでから、未来は氷雨の中に再び駆け出した。

上に着ていたニットにはサイドガラスの破片がこびりついて捨てざるを得なかったため、今は濡れた薄手のパーカー1枚しか身につけておらず、寒気が急速に体温を奪っていくのがわかる。吹き付けてくる風よりも冷たくなった手を庇い、彼女は倉庫の入口の横へと足早に進んだ。

アンディがここに逃げ込んだのは間違いないが、彼が中に武器を隠している可能性も十分にある。何と言っても、相手は今までに10人以上の命を奪ってきた殺人鬼なのだ。用心しなければならぬ。ホーネットを下げた両手に構えた未来は、聴覚を調整しながら倉

庫の中へ足を踏み入れ、すぐ側に積み上げられたダンボール箱の陰に駆け込んだ。警戒を怠ることなくダンボールの向こう側の様子を窺うと、倉庫の内部に無数の巨大なスチール棚が規則正しく並び、その間がビニールパックやプラスチックの折りたたみ式コンテナで埋め尽くされている様子が目に入ってくる。

赤外線フィルターのお陰で中は電灯の下と同じように見通せるが、実際には明かりが殆どない。陽の光が全くない今現在は、緑色の非常灯だけが寂しげな光を冬の空気にちらつかせているだけだ。

ふと入口付近の床を見ると、濡れた裸足の足跡がまっすぐ奥へと続いているのが見えた。

間違いないアンディはここに逃げ込んだのだ。

ポテトチップスやスポーツドリンクのロゴが描かれたダンボールを背にし、未来が聴力を更に調整する。フィルタ機能に意識を集中させて外の激しい雨音を限界まで排除すると、かすかな足音がそう遠くない場所で移動していることがわかった。しかも平たく硬いものが石の床を擦る音を響かせているようで、裸足の足音ではない。

ここは見たところ食品の倉庫のようだが、靴や衣類もあるのだろう。アンディは逃げながら、それらを身につけたに違いない。

「精密機械並みの探知能力を持つサイボーグが相手なのに、逃げる途中で着替えるなんて。大した余裕じゃない」

未来は呟いて、不敵な笑いに口許を歪めた。

しかしアンディがこの暗闇の中でどこに何があるかを掴んでいるということは、ここは彼がよく知っている場所であり、未来にとつては不利であることに同時に気がついた。

未来の位置からでははつきりとはわからない足音の発信源は、止まったり動いたりを繰り返している。彼がすぐに出て行かないのだから、この倉庫で他に脱出できる出入口がないのか、こちらと一戦交えるつもりでいるかのどちらかだろう。

未来は踵を浮かせて立ち上がると、忍び足でダンボールの壁の間を移動した。滑るような動きで棚の隙間から隙間へと走り、壁を背

にしてしやがみ、辺りを見回すことを繰り返す。

真夜中の倉庫には全く人の気配がなく、がらんとした空洞の中で撒き散らされる自分の白い吐息の方が目立つ気がする。外で荒れ狂う雨と風より、自らの息遣いのほうが気になるのだ。

夜気で塗りつぶされた倉庫の中、11ヤード（約10メートル）以上はある天井近くまでそびえる棚に収まっている商品で目立つのは、オートミールクッキーやシリアルなど加工品を中心とした食料品だ。かと思うと、奥にある棚には玉ねぎやブロッコリーのような青果を入れていると思しきコンテナがあり、納品をチェックするための小さな机にはつぶれたホッチキスの芯が散らばっていて、納品伝票の束が重ねられているのが見える。

そして荷捌きに使っているとと思われる小型ロボットたちも、壁際に沿って置かれていた。目立つ黄色に塗られたボデイは、非常通路を示す緑色の明かりで輪郭をぼんやりと浮かび上がらせている。

ロボットは道路工事で使われるのと同じタイプで、足が車輪になっており、2本のアームが取り付けられているものが殆どのような。電気を活力としている彼らは充電器に繋がれたままびくりともせず、エネルギー充填中を示すオレンジ色のランプを操縦席でちかちかと光らせて、静かな眠りにについている。

そう言えばティアーズの被害者の身体には、玉ねぎの皮やクマネズミの糞、ホッチキスの芯も付着していた筈だ。

アンディとソフィーは、この倉庫の中で被害者の死体を解体していたのだろうか？

そこまで思い至った未来は、辺りの床が血と臓物だらけになっている様を想像してしまい、思わず顔をしかめた。ここに並んでいるロボットを使って犯行を重ねていたのかと考えると、吐き気がこみ上げてくる。

が、今まで通ってきた床に全くその痕跡がなさそうなのは不可解だ。

血の跡は水で洗い流したくらいでは落とし切ることができず、床

を剥がして取り替えなければ完全な隠蔽は不可能だと、現代でも言われているくらいなのだ。

彼らの犯行現場はここではないのだろうか？

すると奥へ移動する未来が疑問を感じた時である。

金属が軽く擦れ合い、ぶつかると音が響いてきた。そこに、早いリズムを刻む足音が重なり、次第に遠く小さくなっていった。ただし、風雨が吹き込んでくる空気の摩擦音が聞こえてこないことから、アソビが外に出たのではないことは明らかだ。恐らく、別の倉庫に通ずるドアがもっと奥に控えているのだろう。

未来はチョコレートバーの棚の陰から奥の様子を窺い、安全を確認してから音がした方へ急いだ。

問題の場所へ近づくとつれ、大型の機械が唸るような重低音が空気に重みを加えてきているのがわかる。そして、倉庫の入口付近よりも冷たい空気の流れがあるように思えてならない。冬の雨に濡れたデニムやパーカーは、薄い氷の衣のように肌にまとわりついて体温を奪い続けているが、それでも室内で更なる気温の低下と強い空気の流れがあると錯覚するとは思えなかった。

急激な体感温度の変化を不審に思いながらも冷えた肌を手で擦って進む未来が、ふと足を止めた。

「……なるほど」

倉庫の一番奥に辿り着く直前、身長よりも高く床に詰まれた発泡スチロールの梱包材の山から顔を覗かせた未来が頷いた。

突き当たりの壁に金属製の大きな観音開きのドアがあり、そこに作られた僅かな隙間から明かりが漏れている。鉄のレバーを抜き差しするタイプの古風な錠は、つい先程手荒に開けられたばかりらしい。強化された聴覚に、金属が揺れた際に上げる軋みが僅かに運ばれてきている。この型の錠はしっかりと密閉しなければならぬ場所につけられるものだが、ドアの向こうから足元に流れてくる冷気がその理由を物語っていた。

この倉庫の中にあるもう一つの部屋は、冷凍室になっているのだ。

アンディは衣服と靴を手前の倉庫で手に入れて、この中に入ったのだらう。

しかし、彼が何故わざわざこの中に逃げたのか。

普通に考えれば、冬用の服を着ていても凍死する危険がある冷凍室へ隠れるなど、自殺行為のはずだ。

畏かも知れない。

が、単純に外へ出るための最短距離が冷凍室を経由するルートである、という可能性も捨て切れなかった。どの道、このまま躊躇しては、まんまとアンディに逃亡されてしまうことは確実だ。

未来は濡れた薄手の衣服を纏っており、冷凍室の中であまり長くもたせることができないのは既にわかっていることだった。体内電池を使って体温をある程度調整する機能はあったが、せいぜい手足の凍傷を軽くし、壊死させない程度にするのが関の山である。

低体温症に陥る前に何とかアンディを捕まえて、外に出る覚悟を決めるしかない。

未来は床に落ちていたぼろ布でホーネットと手の水滴を拭い、改めて構え直した。

スチールの扉は見るからに頑丈そうで、「Danger!」という警告のブロック体が躍る黄色いステッカーが貼られている。彼女はがっしりとした防熱扉に手をかけると、狭い隙間に身体を滑り込ませた。

中に数歩進んだだけで凍てつく風が冷えた肌を鋭く突き通し、パーカーやデニムの端が白くごわごわに凍っていく。

未来は急いで意識を集中させ、体温調節機能の作動を試みた。

冷え切って萎縮していた毛細血管に身体の中から暖かい血液を送り込まれると、かじかんでいた指先にはすぐ感覚が戻り、動かしにくさが消えるのが実感できた。

これうすれば暫くは動けるだろうが、気を抜けば強烈な冷気があつという間に全身を蝕むことは確実だ。加えて体温調節機能使用の際は、体内電池の消耗も激しくなる。活動のための適温を維持する

分、他に回すエネルギーを抑えねばならないのだ。

冷凍庫の中は非常灯以外にも薄い明かりがついているが、未来の瞳は赤外線フィルター以外にも熱反応センサーや金属探知機能など、複数のセンサーを稼働させている。これらの機能を停止するのは目隠しされた状態になるのも同然で、やすやすと切り捨てるわけにはいかなかった。

あとは聴力強化を犠牲にするしかないが、もともと大型の冷却ファンがひっきりなしに唸りを上げている室内である。ここで相手の足音や心音を探るのは、恐らく困難な筈だ。

未来は短時間で判断を下すと、聴力を通常の感度に戻した。

その間にも、みるみるうちにパーカーのフードや袖が、デニムの膝下が凍りついていく。

襲い来る冷気は寒さを通り越し、もはや痛みに感じられるレベルだ。雨でずぶ濡れになった普通の人間なら、10分足らずで動けなくなってしまうだろう。

このまま体温を調節し続けて、長くもっても20分というところだろうか。

未来は白い息を吐き散らしながら、辺りの様子を確認した。

冷凍室にははかなりの大きさがあり、幅も奥行きも軽く50メートルはあるだろう。ちょっととした地方都市の市場に備え付けられた冷凍庫並みの広さくらいはある、と言える。

ただし、中にあるもの自体は普通の倉庫とそう変わらない。防熱扉から一番太い通路が伸び、その左右に金属製の高い棚が所狭しと並べられ、それぞれの棚板に冷凍食品やパック肉が詰まったダンボールが整然と積み上げられている。外と様子が異なるのは、壁が波打った断熱素材に覆われており、ロボットが見える範囲にないことくらいだろうか。

断熱扉の横の壁には温度計が取り付けられており、室温はマイナス24度に保たれていることが確認できる。予想以上の低温に晒されていることに顔をしかめてから、未来は一番手近な棚の陰に走っ

た。

試しに少しだけ聴力フィルターを稼働させたが、やはり聞こえるのはファンで攪乱される空気の音ばかりだ。しかしそれだけでも指先が鋭く痛み、感覚が失われていくのがわかった。慌てて体温調節機能の稼働率を元に戻す。やはり他の機能にエネルギーを回すことは身体能力を鈍らせ、生命の危機を招きかねない。

彼女は強いまばたきで睫毛についた霜を落とすと、人の気配が近くにないことを探ってから冷凍室の奥へと走った。

ところが、彼女が冷凍ピザの箱が押し込まれた棚の後ろまで数回、移動を繰り返したした時である。

背後でがしゃん、と厚い金属が衝突し合う音が響いた。

反射的に棚の陰から振り返った彼女が目にしたのは、今まで開いていた筈の断熱扉が閉まり、錠になっている太いレバーがずれてがつちりとロックをかける光景だった。

「ちょ…… ちょつと待ってよ！ まさか……」

思わず小声で漏らしてから引き返しかけた足を、未来は止めた。

棚の陰から通路に出る手前で顔だけを覗かせ、瞳のズームを断熱扉に向けて絞る。大きな錠の部分を拡大すると、がつちりと嵌った金属棒が閉ざされた扉を更に固く守っており、「LOCK」の文字が赤く浮かぶランプも扉の横に点つていることがわかった。

扉のロックは機械式で、人力で開けられるような構造ではない。

更に扉の近くには幾つもの制御パネルらしい金属ボックスが見えるが、一体どれが扉のロックを操作するものなのか、素人の未来にはまるで見当がつけられなかった。

遠隔操作を使い扉をロックしたのは、間違いなくアンディだ。今慌てて出口の確保に向かえば、無防備な背中を晒すことになってしまふ。彼が冷凍室のどこにいて何を隠しているか不明な状況下では、危険極まりない行動だと言えた。

彼女は一旦壁際まで後退すると、全面を覆っている厚い断熱材を指先で押した。

断熱材はウレタンらしき発泡材を樹脂で裏打ちしてあるようで、厚さが数センチはある。指先を押し込んでみると強く跳ね返ってくるのがわかり、思ったより弾力と衝撃の吸収力がある素材のようだ。そしてその後ろには、更に厚い倉庫本体の壁が控えている。

筋力を10倍程度に引き上げてくれるハヤテを装着していれば話は別だが、これでは未来のパワーでも短時間で壁を破壊し突破することは難しいと見ていいだろう。

もしアンディを捕まえられなければここに閉じ込められて凍死することは必至だが、あそこまで手の込んだことをして自分を拉致してきたのだ。慌てては相手の思う壺だし、このまま凍りつくのを待つてくれるほど生易しい敵であるはずもない。

殺人鬼のアンディは、絶対にこの中にいる。

何人もの命を勝手に奪ってきた彼を捕らえずして、死んでなるものか。

未来は凍気に当てられた身体と一緒に縮こまりそうな心を叱りつけ、再び奥へと足を進めることにした。

ここが常温の部屋ならばきつと緊張から嫌な汗をかきまくっているだろうが、今は冷や汗など浮かべればたちまち凍りついて、余計に鳥肌を立てる羽目になるに違いない。そうになると、もう体温を上げているのか下げているのかわからなくなり、気にするのが馬鹿らしくなるのではないか。

場違いなことを考えながらも冷凍室の奥へ進む未来であったが、足跡が残らないコンクリートの床には、誰かが最近通ったような痕跡を見つけることは容易ではなかった。

緑色に塗られた床には細かい埃があるばかりで、霜などはついていない。この冷凍庫の温度管理が適正になされている証拠である。霜や氷柱がつく原因があるとすれば、余計な水分を含んだものがある場合だけだ。

そう思った矢先に大小の塊が2つ、向かいの壁際に置いてあるのが見えた。

今進んでいるのは冷凍室かなり奥に当たる場所で、両方とも薄暗い中に浮き上がっているのが確認できるくらいに白っぽい。大きさは、大きい方は未来の身長以上の高さで幅がありそうだが、小さい方は大人2人で抱えられるくらいで、壁際の床の上にさりげなく置いてある印象だ。

未来はすぐにそこには近寄ろうとせず、まず瞳を凝らしてズームを絞った。

途端、強い痛みが身体表面を襲ってくる。凍った服の更の下にある皮膚が危うく凍気の餌食にされる寸前、未来は体温調節の機能にエネルギーを流すように意識した。

壁際にある物体は両方ともビニールシートで、小さい方はぴつちりと巻かれた工事用のそれであることまでは、一瞬のズームによって判明した。

しかし、そんなものが何故冷凍庫にあるのかが不可解だ。

未来の胸では不安がさざ波のように揺れる一方で、遂に決定的な証拠に辿り着いたのではないかという期待が同時に弾けた。

氷の服を挟んで棚に身を寄せ、肩の力を抜き、警戒を怠ることなく少しずつ中央の通路に近寄る。身を隠すものがない通路は全力で走り抜けてから、再び反対側の棚の陰に隠れた。

どきどきする胸を抑え、一番奥に転がっている霜だらけのビニールシートの塊に近づく。すると、白く見えたのは霜のせいで、実際は2つとも鮮やかなブルーであることがわかった。

未来はまず大きい方のビニールシートの塊の横へ行き、そつとシートの上を持ち上げた。

そこから姿を見せたのは、思った通り大きなタイヤと黄色に塗られた金属のボディだった。

外の倉庫にあつたのよりも、やや大型の重機ロボットである。

倉庫内で使用するにしては大きめだが、トラックの荷台には十分乗せられる大きさだし、万一目撃されても何ら怪しまれることはないだろう。もう少しシートをめくらなければアームまでは確認できないが、気になるのは脇に置いてある小さなシートの包みの方だ。

床に置かれたシートの束に目をやると、何重にも簞巻きにされたシートがビニールの平たい紐で何力所もきつく縛られたものであることがわかった。

慎重にシートの中に足先を突っ込んで端を広げてみたが、ぱらぱらと表面から霜が落ちるばかりで大して中を探れず、目にしみるブルーが白い氷の下から現れるばかりである。

未来は溜息をつく、今度はシートを縛っているビニール紐に両手をかけた。なるべく指紋をつけたくはなかったが、この際四の五の言っていられない。彼女が力を込めて梱包用の頑丈な紐を左右に引くと、何百冊というペーパーバックの重さにも耐えられる紐の太い繊維の束があっさり破壊され、弾け飛んだ。

同じ要領で、未来は次々と紐を切っていく。

最後に当たる4つ目の紐がちぎられたところで、ビニールシートががさりと音を立てて広がった。かなり小さく折り畳まれていたらしいシートになるべく触らないようにしながら、未来が異なる色をグリーンの床に広げていく。

乾いた、大きな折り目を何度か返したとき、不意に違う色が視界に捉えられた。

明るいブルーとの境目があまりにもくっきりした赤茶色の真円や楕円が、幾つも重なっている。無秩序に描かれた不気味な水玉模様は、大量の液体が一度に滴った跡であった。

その中には、水分の抜けきった肉の残骸や、かさかさに乾ききった黄色い脂肪のようなものもかなり大量に混ざっていた。髪の毛が絡んだ人間の頭皮らしきごみも、ぺちゃんこになってシートにへばりついている。

更にシートを広げると、色の濃淡はあれど、ほぼ全面が赤褐色に汚れているようだった。

顔を近づけて、臭いを確かめてみる。すると血と肉の忘れ得ない腐臭がかすかに、しかしはつきりと未来の鼻の奥を刺激した。

息を止めて、胃からせり上がってきた嘔吐感を堪える。間違いない。

アンディとソフィーはこのビニールシートを広げ、その上で被害者の死体を解体していたのだ。ここにこびりついている血痕や組織片は乾いており、DNAの保存状態は極めて良好な筈である。鑑定を進めれば、被害者の中の誰がここで死体を傷つけられたのかということや、どのような姿勢で身体を引き裂かれたのかなど、身のものもよだつ事実を全て明らかにできるだろう。

やっと、アンディとソフィーに被害者が直接結びつく証拠を掴むに至ったのだ。

しかしその達成感に浸る間もなく、未来は鋭く顔を上げていた。

普通の人間並にしか働かない今の聴力に、冷却ファンが立てる風の音以外の物音が後ろから上がったのが、はつきりと捉えられたか

らだ。

本能が教えてくれた警告のまま大きく飛び退いた未来がいた場所に、何かが落ちかかっていた。

いや。

落ちてきたように見えたのは、先に調べたロボットが覆いのシートごと、両アームを叩きつけてくる様だったのだ。強化スチールのアームがコンクリートの床に激突し、耳の痛くなるような金属の悲鳴が嫌というほど鼓膜を震わせる。

すぐそばにあったロボットに乗っているのは、アンディに違いない。

やはり彼は、未来を逃げられない状況に追い込んだ上で殺すつもりでいたのだ。

最初の不意打ちをうまく避けた未来は、ある程度予測していた戦闘に突入したことで、精神と肉体を一気に臨戦態勢へと切り替えた。身体を流れる血という血がかつと熱を帯び、手足で待ち構えていた筋肉に注がれると、全身の感覚までが研ぎ澄まされる気さえする。「ようやく、真打ちのお出ましってわけ！」

冷凍室内にこだまする衝突音の残響に眩きを重ね、未来はいつでも発砲できるよう握りしめていたホーネットの安全装置を弾いた。ある程度離れてからロボットの方を振り返り、改めてその全貌を確認する。

ビニールシートの覆いを三本指のアームで器用に筆り取るロボットは、高さが4メートル、2本のアームの長さが6メートル弱程度というところだろうか。足に当たる部分は6本のタイヤが取り付けられており、これのおかげで素早く走れ、平らな場所ならその場で360度の旋回も可能というのが特徴だ。

がつしりとしたタイヤで組まれた下半身の上に操縦者が乗り込む胴体部分があり、その更に上には、各種のセンサーやカメラが搭載された半円型の小さな頭が乗っている。胴体以下に比べて小さめの頭に丸い複数の目があるような顔、不釣り合いに長いアームは、ち

ぐはぐでユーモラスな印象だ。

それだけに、悪意を向けられた場合にもたらされる不気味さが倍増するのは皮肉だった。

「よく避けられたな。さすがはFBIってところか」

外部スピーカーを通して発せられた男の声がロボットから響き、ロボット内部の映像が空中に映し出された。

そこには、オレンジ色の分厚い防寒着のフードまで被り、操縦席に座るアンディの姿があった。

彼は全米を騒がせ続けてきた殺人鬼だ。このロボットを使って犯行を重ねていたのなら、操縦にもかなり長けていると見ていい。

マイナス24度の低温でも電気で問題なく稼動するということは、このロボットは寒冷環境専用の作業ロボットなのだろう。常温稼働型のそれとは違って電池が特殊仕様のため、全体の設計も異なっている。

厄介なのは操縦席が鋼の板と部品で囲まれた閉鎖型で、動力部も操縦席の下になっている点である。動きを停止させるには何とか側面のロックされたドアをこじ開け、アンディを引きずり出すしかない。

しかし、手持ちの武器は破壊力の全くないホーネットのみだ。

それでも何とか戦いようはあると未来は自らに言い聞かせ、両手でホーネットを構え直した。

「往生際が悪い奴だね。大人しくしないと、あんたの身の安全は保証しないよ」

まっすぐにロボットのカメラへ銃口を向けて警告した未来に、形がないスクリーンに大写しにされたアンディが冷たい嘲笑を浴びせた。

「安心しな。そっちの身の安全なんか、最初からねえんだよ」

と、彼の平たい像が空中からかき消えると同時に、横合いから鋼の巨大な手が未来目掛けて殴りかかってきた。すんでのところを身を投げ出し、床に転がってその一撃から逃れた未来は、ロボットの

手の内側が全て黒くなっているのに気がついた。

厚いゴム素材が、掌に当たる部分を覆っているためだ。このせいで、引き裂かれた被害者の身体はアームに掴まれても塗膜片がつかなかったのだ。

それにこのアームは、市販されている同型のロボットよりもかなり長い。一般のロボットには、有機体を掴むと停止する緊急回避システムが組み込まれているが、恐らくそれも解除されているのだろう。死体の解体という目的に合わせて、違法に手が加えられていることは間違いない。

未来は中央通路の手前まで全力で走り抜けると、振り返ってロボットにホーネットを3発撃った。45口径の拳銃が連続で吠え、爆発した火薬が凍りついた空気を叩き、特徴的な破裂音を撒き散らす。黒き銃口から吐き出された弾丸は、恐ろしい勢いで迫り来るロボットの顔に狙いたがわず全て命中した。が、衝突時に平たく潰れるようなゴム弾では、金属製の顔に傷一つ与えられていない。

やはり駄目か、と床に転がる葉夾を後目に、未来が鋭く舌打ちを漏らす。

ホーネットは非致死性兵器であることが売りの拳銃で、だからこそそのCVC専用装備なのだ。生物に対してなら極めて有効でも、機械にはまるで歯が立たない。

「何だそりゃ、FBIはいつからおもちゃの銃で遊ぶようになったんだ？」

迫るロボットのスピーカーから、再びアンディが笑った。

ロボットの足は車輪だけに、バランスさえ崩さなければ人の足より遙かに速く走ることができる。たちまち追いついて中央通路まで出てきたロボットは、ブレーキをかけながら手近なコンテナを掴み上げた。恐ろしい勢いで、石のように凍りついた真空パック肉が入ったプラスチックコンテナが投げつけられてくる。

未来が小さなつぶてをばら撒きながら飛んできたコンテナを横に跳んで避けた先に、次のコンテナが叩きつけられた。ロボットは手

当たり前次第に辺りのものを投擲してくるが、長いアームで放り投げられた際、遠心力がプラスされるプラスチックコンテナの威力は馬鹿にできない。

目標を捉えることなく次々と床に衝突し、ばらばらに破壊されるコンテナをかくぐり、未来がロボットへと疾走する。最適な距離を計算した小柄な身体が鋭くブレーキをかけ、金属製の巨体の正面で向き合った瞬間、彼女は再びホーネットの弾丸をロボットの顔面に撃ち込んだ。

ゴム弾は、ロボットの目に当るカメラのレンズから僅かに横に逸れて命中した。

視界がなくなれば、いかに強力なパワーを誇るロボットとて役に立たなくなる。

ホーネットが破壊力に劣る銃とは言え、至近距離で急所に撃ち込めば対象を死に至らしめる威力はある。ロボットの金属ボディを撃ち抜くことはできずとも、カメラのレンズを破ることぐらいなら可能なのだ。

ただし、激しく動く2インチ（約5センチ）未満の標的に拳銃の弾丸を命中させるなど、たとえHRTの狙撃手でも不可能に近い芸当である。が、今のところ一番有効な攻撃方法はこれくらいしか思いつかない。

辛くも狙いが外れたことを確認した未来が飛び退ろうとしたその時、またも真上から握り締めたアームが襲いかかってきた。瞬きする間に足に力を溜めた未来が強く床を蹴り、後方へ跳んで攻撃を空振りさせる。

着地時にやや崩れた態勢を立て直すため、未来が横に迫った柵に手をつけて体重を預けた。

その指先が感じたのは、明らかな違和感であった。まるで吸いつけられるような感触に、慌てて指先の温度を上げて離す。

危うく、スチールの柵に手の皮膚をこっそり持っていかれるとこ

るだったのだ。この低温の室内にある全ての金属が、触れた途端に皮膚の表面を凍らせてくつつける凶器であることに、今更ながらに気づかされる。

状況は、防寒装備を何も身につけていない未来にとって圧倒的に不利だと言って良かった。この分だと、ロボットのアームに体温調節なしで触れたら同じことになりかねない。

しかし同時に、ロボットのボディが金属であることが、未来にある可能性を示していた。

「やってみる価値はあるかもね……」

ホーネットの安全装置をかけた未来が、ぼそりと呟いた。グリッブから手を離せば、やはり金属製の銃身が短時間のうちに凍りつき、もう持つことができなくなる。ホーネットを左手に持ち替えてから、彼女はみたびロボットへと突進した。

臆することなく向かってきた女性捜査官を今度こそ仕留めんと、アンデイの操るロボットが両方のアームで掴みかかってくる。そのぎりぎりのタイミングを計って巨大な手をかわした未来は、側面に回り込んで一抱えもあるスチールのアームに指先を当てた。

冷えた細い指先から青白い火花が迸り、未来の服についた霜を一瞬、きらきらと輝かせた。

同時に、加速的に熱された空気の膨張する衝撃が、ばちつと派手な音を何度も周囲に響かせる。

が、未来が攻撃に使える最大の力を集中させた電撃を喰らっても、ロボットの動きは止まらない。横に振り払われたアームに逆に弾き飛ばされそうになり、未来はやむなく攻撃範囲から逃れた。

「うそ、流れていかないの！」

驚愕を声に滲ませて、未来は叫んでいた。

彼女の体内に内蔵された電池から指先の電極を経て放出できる最大の電圧は200万ボルト、電流は70アンペアに匹敵する。これをまともに浴びせられたのだから、どこかしらの電気回路がショートして内部から破壊されなければおかしい。

それでも、電撃による攻撃が失敗した理由は幾つか考えられた。ひとつは、ロボットの内部全面が凍結対策用として、ゴムなどの絶縁体で裏打ちされている可能性。

そしてもうひとつが、未来の電流の出力が上がっていなかった可能性だ。

今の彼女は低体温症や凍傷を防ぐため、普段より多くのエネルギーを体温の維持に回している。そのせいで、考えていたよりもずっと弱い電流しか絞り出せていなかったのかも知れない。加えて、手の電極も低温の金属との接触を避けるため、最低限の面積で瞬間的にしか触れさせていなかった。そのことも、電撃の威力低下に拍車をかけた恐れがある。

生身の自分が持つ最大の攻撃手段である電撃が、事実上封じられた。

そのことは少なからず未来の精神に衝撃を与えていたが、心が折れそうになったからと言って、事態が好転するわけではない。次の手を考えて、何とかロボットの動きを止めるしかないのだ。

戦闘における環境が最悪だとは言っても、NOTSの訓練では燃え盛る炎の中に突入したり、身動きのままならない沼の中に数時間は身を潜めたこともある。

それ以前に、戦闘用サイボーグや武装集団に戦いを挑み、そのいずれにも勝利してきた。

今度の相手は重罪人ではあるが、決して戦闘訓練を積んだ兵士やテロリストではない。

こんなことで挫けていては、自分を庇って死んだP2に顔向けできないではないか！

未来は自分に活を入れると、ホーネットの安全装置をもう一度外した。

アンディは人間離れした動きを見せる未来を警戒しているらしく、10メートル程度の間合いを保ったまま手を出そうとしない。ただ、逃がすつもりはないらしく、広い中央通路いっぱいにアーム

を広げて彼女の行く手を阻んでいた。

ホーネットを持つ未来の手は酷寒で小刻みに震え、息がかなり荒くなってきている。息さえ瞬時に凍りつく低温が、確実に身体を蝕んできているのだ。

いくら体温調節機能である程度の体温は維持できても限界はあるし、その分戦闘に使えるエネルギーが枯渇していく。今の筋力も、恐らく常温下の半分程度しか働いてくれないだろう。

電撃がロボットに対して決定打にならないとわかった以上、困難ではあっても確実な手段を取るしかない。つまり、何とかしてロボットのカメラを破壊し、視覚を失わせてから操縦席のドアを壊す方法だ。

視点カメラが故障した場合の対策用として、操縦席前面のどこかに視界を確保するための窓が開く筈だ。そこが口を開けた時にホーネットを撃ち込めば、アンディに命中する確率が高い。もしくはロボットのカメラを破壊したと同時にジャンプで本体を飛び越え、アームの届かない背後からボディに取りつく手もある。

決着をつける方法は一つだけに限られないが、まずはカメラを壊すことが先決だった。

ホーネットの弾丸は予備を含めてあと10発だが、今装填されているマガジンにはあと3発しか残っていない。この分だけで、何とかカメラを壊しておきたいところだ。確実に標的に命中させるには、もつと近寄って撃たねばならない。

未来が勢いをつけて、横にある棚に向かって走り出した。

力強く床を足で叩いて鋭角的に空中へ飛び、半回転して棚に蹴りを喰らわせるように足から突っ込んでいく。天井まで届く巨大なスチール棚の柱が、サイボーグの飛び蹴りを受けて鈍い音と共に全体を揺らした。

踏み台を経た未来のしなやかな身体が、4メートルの宙へと躍る。敵が予想外の行動に出たことに驚いたアンディは、反射的にロボットの首を空中に向けさせた。

彼が見つめる操縦席のモニターに映し出されたのは、空中で大型の拳銃を構えた女の姿だった。映像の中の女と目が合ったと同時に狙いが定められた銃口が震え、マズルフラッシュの炎が瞬間的に辺りを照らす。

ドン、と外で乾いた破裂音が響き、モニターの映像が揺れた。

もう一度同じ音がアンディの耳を打ったとき、唐突にモニターがぶつりと音を立てて黒く沈んだ。視点カメラに弾丸が命中したのだ。未だ空中にその身が在る未来は、小さなカメラのレンズにゴム弾が当たり、細かいガラスを散らして粉碎される様をはっきりと目にしていた。

成功だ！

会心の笑みが幼さが残る顔を横切り、縮み上がっていた手足に血流を与える。すかさず通路の反対側に立つ棚の柱を蹴り、三角飛びの要領で彼女は床へ見事に着地した。

その間に、慌てたのだからアンディがロボットを旋回させる。未来が降り立ったのが、そのために丁度黄色いボディの側面に当たる場所となった。

突如視点スクリーンが使い物にならなくなり、アンディは肉眼で未来を探しているらしい。長いアームは低い位置に下ろされて、ボディは申し訳なくなるほど隙だらけだ。

目の前に現れた操縦席を守るドアへ、未来が猛然と疾走して飛びつく。

「きゃっ！」

寸前、その口から高い悲鳴が漏れた。

硬い何かに弾き飛ばされた小柄な身体が鈍い音を上げて床に叩きつけられ、冷たい床を転がる。

重い衝撃に耐えてすぐさま起き上がった未来は、それでもまだ自分の手がホーネットを放していなかったことに安堵した。床には上半身から突っ込む羽目になったが、幸い骨折したような激痛はどこにもない。

肩と腕の一時的な鈍痛を堪えて、彼女は顔を上げた。

そして、目に入ったものを見て呆然と呟いた。

「ちよつと……聞いてないよ、こんなの」

彼女の瞳にはアンデイの操るロボットに加え、寸分違わぬ外見を持つロボットがもう一体、映っていたのである。

ロボットの操縦席にすんでのところまで辿り着けなかったのは、不意にアームがもう一本、横合いから割り込んできたせいだ。ジャンプで滞空していた未来はそれを避けることは叶わず、なすすべもなく叩き落とされたのである。

彼女を虫のようににはたき落としたアームは、このもう一体のロボットのそれであった。

「おいおい、別に驚くことはねえだろう？ ロボットが一体だけだなんて、誰も言つてないんだからな」

どこにも破損がなく五体満足のロボットの後ろから、スピーカーに乗ったアンデイの声が響いてくる。恐らくこのロボットは、冷凍庫のもつと奥に控えていたのだろう。

しかし、今この空間にいるのはアンデイと未来だけの筈だ。新手は、一体誰が操っているというのか？

「こいつは色々作り替えた、俺の特別製だ。まあ自動運転だし、単純な命令しか聞かねえけどな。俺がお前をぶつ殺してやるんだから、うまく避けるよ。でないと本当に即死しても知らねえぜ」

言うが早いか、新たに現れたロボットがタイヤを軋ませてまっすぐに未来の方へ走ってきた。

その巨体は暴走する重機を思わせ、アームで何かを捕まえるのに速過ぎる速度である。

こちらを跳ね飛ばすか、轢き殺すつもりだ！

未来は攻撃側の意図を悟ると、慌てて通路の隅に身を翻した。突っ込んできた無人口ボットは更に10メートルほど余分に走り抜け、くるりと小さな弧を描いて方向を変えてくる。

今度はスピードを落とし、様子を窺っている未来へとアームを振

り翳しながら再び迫った。半球状の顔で音もなくちかちかと光る目が、無言の悪意の恐ろしさを煽る。

ホーネットの空になったマガジンを素早く入れ替えた未来は、無人口ボットに背を向けて走り出した。無論、アンデイの乗るそれと方向は逆である。

無人口ボットは、全力疾走で遠ざかる未来の姿を追跡し始めた。自動車のタイヤに近い足を持つ鉄の塊の走行速度は人間を遙かに凌ぐが、プロアスリート以上の脚力を誇る未来との差はなかなか縮まらない。

ロボットがもう一体増えたことで更に不利にはなっても、彼女の作戦に変更はなかった。

無人口ボットは未来だけを攻撃対象として認識しているようだが、命令を下しているのがアンデイであることには間違いない。ならば、何をあいても彼を先に確保するのが妥当だ。

それに無人口ボットがどうやって攻撃目標を定めているのかということも、素人の未来は知らない。恐らく、センサーで生き物だけを区別できるようになっていることぐらいしかわからず、そのセンサーがどこにあるのか、何を壊せばいいのかも見当がつかないのだ。闇雲にホーネットを乱射して、貴重な弾丸を無駄遣いするわけにもいかない。

考えをまとめながら逃走を続ける未来の足先には鈍い痛みが走り、速度も満足に出していないことを自覚せざるを得なかった。やはり体内電池に蓄えたエネルギーの消耗が激しく、筋力に回せるだけの余裕がなくなってきたているのだ。

彼女の身体が凍りつくのは時間の問題であることが、浮き彫りになりつつある。

幸い、何列にも並んだ柵の間を不規則に走り抜けることで、無人口ボットを一時的に捲くことには成功している。足音も冷却ファンの音でかき消されるため、こちらの位置もすぐには割れない筈だ。

この間に何とかしてアンデイを抑え、双方のロボットの動きを止

めさせなければならなかった。

未来は足を止め、柵に並んでいるくたびれたダンボール箱の間を覗き込んだ。すると、2つ柵を隔てた先を、ロボットたちが連なっており過ぎていくのがわかった。

アンデイは外界を黙視確認できる範囲を大幅に失い、操縦するにもかなりの支障をきたしている。無人ロボットに先を行かせ、自分は少し後ろをついていくのが最も安全だと言えよう。

柵の間は、ロボットが横に2台並べるだけの幅がない。彼らに挟み撃ちにされれば一巻の終わりだが、逆に2台一度に襲いかかられることはないとも言える。

縦列の後ろにいるアンデイを仕留めるには、どうにかして振り向かせ、ボディに開いた緊急用の覗き穴にホーネットのゴム弾を見舞わねばならない。簡単なのは大きな音を出して注意を引くことだが、ファンがうるさく唸る冷凍室では、並の大きさの音では効果が薄いだろう。

多少は力押しで行く必要がありそうだった。

「今度こそ、観念してもらわなきゃね」

小さく呟いてから、未来は忍び足で再び走り出した。

数秒で、2台のロボットがのろのろと進む通路の端へと躍り出ることとなる。彼らはまだ彼女の動向を察知していないらしく、タイヤに乗った金属の塊が進む速度は変わらない。

通路の奥に無防備な後ろ姿を認めた未来は、迷うことなくホーネットを3度撃ち込んだ。乾いた爆発音が立て続けに上がり、鈍く重い衝撃音が同じ数だけその後を追う。銃口から放たれたゴム弾は、全て後ろについていたロボットの背中に命中したのだ。

黒いゴム弾の残骸を張り付かせたまま、黄色い巨体がくるりとその場で回転し振り返る。正面で未来と向き合ったロボットには、よく見るとボディの右側に小さな、四角い窓がぼっかりと開いているのがわかった。

思った通り、アンデイの乗っている機体だ。スチールのボディを

貫く破壊力もない銃しかない未来を打ち負かすのは容易いと考えているのだろう、そのままスピードをつけてこちらに迫ってくる。

ここは平らな床の倉庫で、彼の機体は殆ど揺れることがない。ボディに穿たれた小さな窓の中に見える顔へ射撃を行うには、もってこいだ。更に走り寄ってから立ち止まり、未来はホーネットを正面に構えた。

細い指がトリガーを引き絞ると、硝煙と火薬の臭いとともに黒いゴム弾が撃ち出される。

しかしそれは僅かに狙いが逸れ、窓枠に着弾した。弾はあと3発ある。

今度こそ外さない、と目の高さでホーネットを構え直した未来だが、そこでとんでもないことが起こっているのに気がついた。

ホーネットのスライドが戻っていない。

だらしなく、弾倉の内部を開いたホルルドオープンの状態になっていたのだ。

まさか、と慌てて銃身を確認する。

弾丸がまだ詰められていることは間違いない。

それなのにスライドが戻らないなど、考えうる限りでかなり酷い動作不良である。これでは暴発どころか、トリガーを引くことすら不可能だ。

こうなった原因はただ一つ、低温である。

ホーネットも従来の銃火器と同じく、撃鉄が弾丸の底に仕込まれた火薬を叩いて発火させ、銃口から弾を撃ち出す仕組みだ。そしてこの火薬が燃える時、副産物として水分が発生する。

連続して射撃を繰り返す度に内部についた水が少しずつ氷結してとうとうスライドの動きを妨げるまでになってしまったのだろう。

「くそっ！」

未来は吐き捨てたが、敢えてホーネットを離さない。

彼女が銃を確認している間に、アンデイとの距離は目測11ヤード（約10メートル）以下まで縮まっていた。

唯一の飛び道具が役に立たなくなったのだ。作戦を変更するしかない。

未来が突き出されてくるロボットのアームから逃れようと振り向いて走り出したところへ、通路の反対側に回り込んだ無人ロボットが姿を現した。

最も陥りたくなかった、挟み撃ちのポジションだ。彼女の歯の間から鋭い舌打ちが上がる。

柵の間の通路は狭く、ロボットの脇をすり抜ける際にアームに捕まる危険性は高い。攻撃の空振りを誘ってからジャンプし、機体を踏み台にして上に抜け、そのまま後方へと逃れる方がいいだろう。

取るべき行動を決め、未来は動きの予測しやすいアンディの機体へと再び走った。

幸い助走距離は十分にある。

ロボットの頭まで一気に跳ぶつもりで、彼女は力強く跳躍した。

地面を叩いた足に、少なくともいつもと同じ感覚はあった。

なのに足の裏が大きく横に滑り、身体は柵の方へ斜めに跳んでいた。

真上には殆ど行けなかったのだ。

「え……」

踏み切りに完全に失敗したことに、体温の維持が身体の末端まで行き届かず感覚が鈍っていたことに、未来は瞬時に気づくことができなかつた。

驚愕の表情に彩られた黒い瞳が見開かれ、しなやかな手足が硬直する。

「叩き落とせ！」

アンディの命令が聞こえたその時、空中にある未来は何も抗う術を持っていなかった。

細い身体を、後ろからアームの黒い影が覆う。

三本指の巨大な鉄の手が、暴走車の如き絶望的な勢いで落ちかかる。

五体がばらばらに吹き飛ぶかと思うほどの衝撃が全身に響き、内臓が潰れんばかりの圧力が内側に襲いかかってきた。

無人口ボットの鉄の手にはね飛ばされ、コンクリートの床に激突した未来が上げた悲鳴は短かった。

「よくまあ、ここまで派手に暴れたな。人間技とはとても思えねえよ」

操縦席から漏れてくる純粹に感心しているらしいアンデイの声には、今はあまり嘲るような色が見えていない。彼は、ロボットのボディに開いた前方確認用の窓のすぐ前でうなだれている女の姿をじっと見つめていた。

血と埃で汚れた服を纏う東洋人の若い女は、肩から腰にかけてを無人ロボットのアームに掴み上げられている。彼女の力が抜けた足先は、床から5フィート（約1.5メートル）上にあつた。

鉄のアームに腕の上から拘束された細い身体は、つい先ほどまでこの冷凍室を縦横無尽に駆け回り、妙な銃まで撃つてこちらを攻撃してきていたのだ。アンデイが2台のロボットで応戦した痕跡は、床のそこかしこに散乱する砕けたプラスチックコンテナの欠片や、ロボットの破壊された視点カメラなどに生々しく残されている。

彼女はマイナス24度という低温の室内に濡れた服で侵入し、本来は道路工事に使われる重機ロボット2体を相手に立ち回りを演じた。

普通に考えれば正気の沙汰ではない。

しかしこの女は低体温症に陥らず、鉄の柱さえ薙ぎ倒すロボットのアームの殴打を何度喰らっても死ななかつた。こちらが精神的に普通でないのなら、彼女は明らかに肉体的に普通ではないのだ。

そのことは、捕らえられて無様な姿を晒している今もそうであった。

「おまけに、恐ろしくタフときた。ま、諦めたところで楽になれるわけでもないが」

再び素直な感想を口にしたアンデイの言葉を受けても、女は顔を上げず、肩を震わせるばかりだった。

それも当然で、女を掴んでいる無人ロボットのアームが今も力を込め続けているからだ。屈強な筋肉を誇る男でも鉛筆のように骨を折られ、内臓を握り潰されるぐらいの圧力がかかっている。それを、彼女は必死に肘を張って食い止めているのだ。

女は、常識では考えられない腕力の持ち主だった。

「お前、本当に人間の女なのか。エイリアンとか、ミュータントが化けてるんじゃないだろうか？」

最初は彼女を大人しくさせる目的で両腕と肋骨を折ろうと、無人ロボットにその身体を掴ませた。事実、今までちぎってきた人間の体は、少し強めの力を込めさせればあつけなく骨が砕け、腹に詰まっていた臓器も簡単にひしゃげていたのだ。

ところが今のアンディは、目の前の女がどの程度の力まで耐えられるのか、試してみたいという好奇心に駆られていた。

女が荒い息をつきながら僅かに視線を上げ、窓から見えるアンディの顔を睨みつけてくる。

「……うるさい」

低く掠れ、喘ぐような一言ではあったが、細められた黒い瞳に宿る光は少しも衰えていない。

幾度も蹴られたり、床に叩きつけられた時の打撲傷で、未来の頬はすっかり腫れ上がっていた。唇の端も裂けて血が滲み、愛らしい顔は痣だらけで見ても無惨な状態だったが、ただそれだけだ。セラミックコーティングと強化プラスチックで強化された骨に響くような傷はなく、それらに守られた臓器も無事であることはわかる。

しかし、体温の維持に使えるエネルギーは明らかに枯渇してきている上に、今は身体がロボットに握り潰されないように踏ん張ることしかできない。少しでも力を抜けば、その瞬間に腕と胴体を砕かれそうだった。

みしみしと身体が上げる悲鳴が聞こえてきそう。今、悔しくもこれが精一杯だ。

未来はアンディから目を逸らし、万力のような力で絞め上げてく

るロボットの手に注意を向けた。指を始めとして、関節部分の奥に鮮やかなコードの束が走っているのが見える。そこに直接触れてありったけの電撃を喰らわせれば、いくらアームの内側が絶縁体に覆われていても意味をなさず、絶大な効果が期待できるだろう。

そのためには何としてもアームを振りほどき、両腕を自由にしなければならなかった。

「まあ、お前が誰かなんて興味がねえよ。これ以上は……いや、さつきはFBIだって言ってたっけな。随分と間抜けな女がいたもんだ」

所属機関のことに言い及んだアンディに、未来は僅かに片方の眉を上げる。が、何も答えずに沈黙を守った。

「見てたよな？」

「何を？」

アンディのわかりきった問いに質問で返すのも馬鹿げている気がするが、未来は敢えてそう返す。

「このシートだよ」

アンディのロボットが、傍らに置いたブルーシートの塊を指した。彼は自動運転のロボットに未来を捕まえさせた後に中央通路に移動させ、自分は奥に置きっぱなしになっていたシートを取りに行っていたのだ。

「あんたが、ここで人間の解体ショーをやってたって証拠のこと？」
肘を外に向かって張り続けている未来は、歯を食いしばりながら呻いた。

この状況を脱するために未だ抗い続ける彼女を見て、いかにも愚かしく無駄な努力だと言いたげに、アンディは溜息をついた。

「そりゃあ、見ないわきゃねえよな。いくら胡散臭くても、やつぱりFBI様ってことか……それにしても、よく頑張るじゃねえか。男でも、このアームを押し返せる筈がないんだが」

「今に、局からの増援がこっちに向かって来るよ。私の消息がわからなくなつて、ある程度の時間が経ってるから。私を殺せば、あん

たも蜂の巣にされて死ぬことは間違いないね」

微妙に誇張した内容ではあったが、未来が脅すつもりでそれとなく口にしたことは間違いではない。ただしそれは、CVC本隊が未来の発する特殊通信の電波発信源を速やかに突き止め、迅速に対処を開始していればの話である。

しかしアンデイにとって、最も優先して考えるべきは目前の生け贄をどうするかということで、それ以外のことは耳にすら入れていないようだった。

「でもそこまで知ってるんなら、お前を生かしておくとかやばいことになるか。お前が男だったら、何もかもめちゃくちゃに壊してやりたくなるくらいに、好みの顔なのに。死ぬ前に楽しませてやることもできたんだが、残念だったな」

未来を横目で見ながらぶつぶつと続けるアンデイには、およそ他人の意志や気持ちを読むとうという空気が全く感じられない。興奮も高揚もせず、むごたらしく人の身体を引き裂くのが自分の仕事であり、仕方のないことだと思っている節さえあるのではないか、と錯覚してしまう。

恐らく未来が自分の意に反する行動をとったせいで、楽しんで殺す気が失せたのだろう。

だから、これから自分と同じ姿を持つ生き物を殺そうとしているというのに、まるでちょっとした手仕事を始めるくらいのもりでしかないのだ。

この男の精神は、明らかに異質だ。

良心をどこかに置き忘れた、人間とは別の生き物なのだ。

アンデイが持つ深淵なき心の闇に触った気がした未来は、背筋に寒さとは別の悪寒が走るのを改めて感じた。

今までとは異なる方向から、しかし彼女のすぐ側で金属の軋みが上がった。

はっと視線を下へ向けると、腹のすぐ下に無人口ロボットのもう片方のアームが迫っていた。蹴りを見舞おうとしても、体温を失う寸

前の脚はうまく力を入れることができず、主の言うことまるでを聞いてくれない。弱々しく宙ではたつのがせいぜいだ。

黒いゴムが貼られた鉄の三本指が、空しくもがく未来の腰から膝までを握る。

凍ったデニムが肌に張りついて、更に体温が奪われた。

このままロボットがアームを捻れば一巻の終わりだ。

「待てよ！私が女だって、どうしてわかる！」

「何だと？」

苦し紛れに未来が叫んだのは、子どもに笑われてもおかしくないほどありえない嘘に繋がるものだった。

この際、話の内容など問題ではない。

何とかして会話を引き延ばし、意図する方向へアンディを誘導するのが、攻撃方法を封じられた未来に最後に残された手段なのだ。唯一頼れる言葉というツールを、そう簡単に手放すつもりはない。

「そのまま手のものをゆっくり上げる。あまり力を入れるな。よし、そこで止まれ」

アンディは無人口ボットに音声で命令し、未来の身体を少し上に持ち上げさせていた。すかさず、未来が覗き窓から見えるアンディへ懇願するような視線を向ける。

「実際に自分で見たわけでもないのに、何で性別がわかるのさ」

幸い未来の声は女性としてはあまり高くない方で、変声期前の少年より低いくらいだ。

アンディは、これまでアジア人男性ばかりを暴行し殺してきた。

彼らの人種が実際の年齢よりずっと若く見え、自分たち白人から見たら皆、子どものような印象を持つことをよく知っている筈だ。それだけに、未来が唐突についた嘘も頭から否定できないところがあるのだろう。

事実、彼はこれまでに見せなかった動揺を言葉の端にほんの少し滲ませていた。

「お前が薬で気絶した時、車に運んだのは俺だ。お前は確かに……」

「妙に重いとは感じなかったのか？」

彼の戸惑いを利用して一気につけ入るため、未来は更に把握されているであろう事実を持ち出した。サイボーグである未来の身体には、強化のための金属や樹脂を始めとした様々な人工パーツが埋め込まれている。その比重は本来の器官よりもずつと重いものが多く、彼女の体重は高い密度に比例して体格と釣り合わなくなっているのだ。

「性転換でもしてるのか？」

未来を拉致した時、気を失った身体が考えていたよりもずつと重く、持ち上げるのに苦心したことを思い出したのだろう。正面の未来から視線を外したアンディは、明らかに気持ち揺らいでいるように見受けられた。

「近年のFBIでは、優秀で前科がなければ身体的特徴について差別はしないんだよ。それに、私はアジア系だ。見た目や声だけじゃ、性別なんてわかりやしないだろ」

少年つばい口調を意識し、未来は命惜しさで必死に媚びているように見せかけた。

先にあまり力を入れるなど命じられたせいで、肩から腰を掴んでいるロボットのアームが緩んでいるのが感じられる。彼女は肘を張りながら密かに呼吸を整え、上半身の筋力を一気に解き放つべく力を貯めていた。

「命を助けてくれるなら、あなたの相手でも何でもする。私なら、あんたを満足させられるよ。もうFBIにも戻るつもりもない。お願いだ」

腕さえ自由になれば、この忌々しいロボットに電撃を叩き込んで破壊することができる。

ただ一つの目的のため、未来は偽りの訴えにありつただけの感情を込めた。

同時に、両腕に意識を集中させて一気に腕を外側に開く。

「ぐ……あ、ああー！」

しかし未来が発したのは気合いの声ではなく、大きな喘ぎと激しい咳であった。

彼女の上半身を掴む鉄のアームが一息に握りしめられ、これまで以上の圧力が襲いかかってきたのだ。予想していなかった一撃を食い止めはしたものの、外側へ張っていた肘は最早身体に押しつけられ、肺と心臓が肋骨ごと絞め上げられている状態だった。

呼吸すらままならなくなっても、歯を食いしばって耐え続ける未来に、アンデイが無感情な言葉を投げつける。

「三文芝居だ。お前が本当に女だっことは、ソフィーから聞いているよ。本当に助かりたいんなら、もつと巧い嘘を考えるべきだったな」

そこで一旦言葉を切ったアンデイの視線が、また正面へと戻される。

「ただ、こいつの最大出力でも潰れないお前が、普通の女じゃないのは確かみたいだな。まあ、ばらす間くらいは観察することにするか」

アンデイの口振りには、やはり感情のぶれが感じられない。

かといって、氷のような冷酷さがあるわけでもない。

彼にとつては人間をばらばらにするのが日常の一部であり、普通なのだ。

他人に対して心理的ブレーキが働かず、他人の心を考えることができない。

人がどこまで残酷になれるのかということ、このアンデイという男が体現しているようにさえ思えた。

普通の人間と全く相容れず、あまりにも異質な内面を持つという点において、アンデイとソフィーは極めて近い者同士だと言えよう。その不気味さを間近に感じた未来の心に、ざわりと波が立つ。それに揺さぶられるように、彼女の呼吸は荒く切れ切れなものに変わっていった。

「なあ。この腹をちょん切ったら、一体何が出てくるんだ？まさか、

お前がロボットな訳もねえだろうし。それとも、俺が今までに見たこともないもんでも詰まってるのか。青い腸とか、肺が金属でできてるとか。それでもここで腹ん中を漁ったら、肝臓から湯気が立つくらいのあつたかさはあつて欲しいね。うん……そう考えると、色々面白いな」

怪訝そうにして未来の全身をじろじろ眺めていたアンディの顔が、ふつと下へ沈んだ。がさりと乾いた音が、ロボットの関節から上がる金属的な軋みに重なる。先に運んできていたビニールシートをアームで摘み、床に広げているのだ。

未来の下へおざなりに敷かれたれたブルーシートから、吐き気を覚える悪臭が上がってくる。

元は人間の一部分だっただろう、干からびて白茶け、くつつき合った肉と臓物の臭い。

夏場に腐乱死体がある現場よりはましだったが、生理的な嫌悪感を際限なく煽る異臭だ。

立ち上がってきたロボットのボディに覗くアンディの顔と向かい合うのを無意識に避け、未来は正面から目を逸らす。しかしその先であるシートの上に、茶色の血をこびりつかせてしわくちやに乾いた皮膚の残骸が、大量に残されているのを見つける羽目になった。

さしもの未来も、息を止めて反射的な嘔吐を堪えねばならなかった。

「この際だ。腹ん中も、腕や足もどうなってるのかじっくり見といてやるよ。そういうやり方で捨てるって決めておいて、大正解だったよ」

アンディの手元に、無人ロボットの遠隔操縦用コントロールパネルがあるらしい。彼の視線が再び下を向くと、手も足も出ない状態にされた未来の下半身を握るアームがぎゅつと絞まった。

未来の大きな瞳が、絶望と恐怖に見開かれる。

その顔を待ち望んでいた、とばかりにアンディが口の端を吊り上げて薄笑いを浮かべた。

「あんまり喚くなよ。俺はうるさい女の叫び声は好きじゃない。俺のために何でもするなら、静かにしろ」

子どもに言い聞かせる口調を思わせる、囁きに近い声が未来の耳に忍び込んできた。

不規則に息を吸い込んだ彼女の苦しげな喘ぎを耳にしたアンディの視線が、苦痛と戦慄に彩られた最期の表情をじっくり観察すべく、蛇のように絡みついてくる。

「両手で捻れ。ゆっくりやれよ」

主人である殺人鬼が放つ酷薄な言葉に、従順な無人口ロボットは頷きもしない。

命令のまま、獲物の下半身を握り締めるアームの角度をゆっくりと変えていく。

「や……！」

やめる、と言いかけた未来の声が、腰がよじれていく異様な感覚に凍りついた息に飲まれる。必死で腹筋に力を入れて抵抗を試みても、無理やり腹をねじる不自然な力に対しては殆ど意味を持たなかった。

腹の皮膚がつっぱり、引き伸ばされていく激痛が走る。もしここで腹に小さな傷を一つでもつけられれば、そこからあっさりと肌が裂け、血飛沫と破れた腸の内容物を噴き出させるであろう。

最初に捜査資料で見た、まだ11歳のモイラ・マックスウエルのように。

最後の現場で見た、上半身と下半身が外され、首と右脚をもがれたジューン人形のように。

今まで見た被害者たちが晒した無残な死体と、無機質な肌をしたジューン人形の姿が未来の頭の中でぐるぐる回り出した。

痛いのは嫌だ。

死ぬ覚悟などできない。

このまま終わりたくない！

命ある全てのものが同じ考えを持つように、様々な思いが一気に

未来の心に溢れる。

彼女の口から迸ったのは、言葉を持たぬ獣の如き絶叫だった。

死にたくない！

生きたい！

誰でもいいから助けてくれ！

この上なく強い生への執着を滲ませた声が空気を震わせ、凍りついた空間に轟く。

そこへ異様な音が響いた時、苦鳴は唐突に途切れた。

身体を最後の衝撃が襲い、暖かい何かが肌に触れた気がした。多分、引き裂かれたところから流れ出た血液だろう。

不思議と痛みはない。

しかしそれは、残酷な救いによってもたらされる錯覚であることはわかっていた。

死に瀕した肉体の生理反応が持ち主を守るべく最後に発揮する力が、脳内麻薬であるオピオイドの分泌である。これが働くことによつて精神活動や感情が鈍くなり、安らかな死に向けて旅立てるのだ。死の瞬間に全てを失い、苦痛を感じずに済むのは、むしろ幸せなことなのかも知れない。

目の前は暗く、手足の感覚も既にない。先に感じた悪臭も、もうわからなくなってきた。

だが、消失する一方を辿る筈の感覚の一つである聴覚が、必死に呼びかけてくる誰かの声を拾い上げて彼女の意識に届けていた。

「……おい！ミキ、大丈夫か？しっかりしろ！」

肩を身体ごと強く揺さぶられ、心に誰かの想いが入り込む感触に、未来はいつの間にか閉じていた瞼を薄つすらと開いた。

ぼんやりと、しかし間近に見えたのは、鮮やかなスカイブルーと銀色に輝く金属のヘルメットに包まれた人の顔のようなものだった。浅黒い肌をした口許以外の表情は隠されているのに、声の主が酷く心配していることは痛いほどに伝わってくる。

この部分的にしか見えない黒人青年の顔には見覚えがある。

粗暴だが、どこか温かみがある英語にも聞き覚えがある。

今の未来は、それを思い出すのに数秒を要していた。

「……ジャク、ソン？」

最も頼れる同僚の名を掠れ声で口にした未来は、自分の命がこの世に繋ぎとめられていることをようやく把握した。

まだ靄が漂い、うまく考えられない頭を軽く振ると、脱力した手足が視界に入ってくる。

彼女は、オーデインに身を包んだジャクソンの両腕に横抱きの姿勢で抱えられていた。

2人のすぐ前で、激しい火の手が上がっている。オレンジ色に渦巻いている炎の中心に、ぴくりとも動かなくなった無人ロボットの黒い影が佇んでいるのが見えた。

「って……うあっちい！」

床に膝をついているジャクソンに抱えられた未来が、びくんと全身を撥ねさせる。炎上するロボットの熱波が凍ったパーカーを溶かし、その下の肌をなぶつたのだ。

「あ、悪い。もうちょい離れとくか」

耐熱服を兼ねたパワースーツ、オーデインを纏ったジャクソンにはさほど熱が感じられないのだろう。彼は未来を腕に抱えたまま5ヤード（5メートル弱）程度後方へ跳躍し、鮮やかに着地を決めた。

現代科学の粋を集めた鎧に覆われた彼の腕に支えられた未来は、自分が無事であることが未だに信じられなかった。

迫り来る死の感触を味わった手足はまだ小刻みに震えており、息も乱れたままだ。

一方で本能は生命の危機を脱したことを既に察しているらしく、筋肉にはもう余計な力が入っていない。ジャクソンの聞き慣れた声を耳にし、ハヤテ以上のパワーを誇るオーデインを纏った姿を見たことが、四肢に安心からくる脱力感を与えている気がした。

と同時に、今まで気にならなかった全身の打ち身や打撲が一斉に疼き出し、鈍痛の波で未来を押し流そうとする。が、逆に痛みのおかげで飛びかけた意識を失わずに済んでいるようでもあった。

「……ようやく、来てくれたんだね」

細く息を吐き出し、やっとの思いで微笑みを浮かべると、彼女は頼もしい同僚の顔を見上げた。

「間一髪だったな。ヒロインのピンチに駆けつけられて良かったぜ」
「良くないよ、待ちくたびれちゃったじゃない。来るのが遅過ぎだ
って」

早くも憎まれ口を叩き返す未来に、ジャクソンも負けてはいない。

「しかし、ひでえ顔じゃねえか。折角の女子中学生が台無しだ」

「うるさい。暑苦しい顔のあんたに言われたかないよ」

「いちいち文句の多い女だな。ちつとは感謝しろよ。今にも途切れ
そうな特殊通信の弱い電波を辿って、ようやくここを見つけたんだ
ぜ？」

「さつさと米軍仕様のGPSを組み込んでくれないからでしょ！」

痣のついた顔を痛みにしかめをしながらも的確に突っ込みを返し
続けてくる未来に、ジャクソンも普段とまるで変わらない調子で応
えていた。

「やっぱヒーローは、一番いいところに遅れて駆けつけるもんなんだ
よ」

一度やってみたかったのか、偉そうに胸を張ってから、彼はまだ
抱き上げた格好になっている小柄な同僚女性に白い歯を見せてにや
りと笑った。

「それより、お前はヒーローにお姫様抱っこで助けられた女なんだ
ぞ？カートゥーン流に、キスの一つでも礼に返してくれよ」

「あのねえ、かつこつけないの！日本の女は、唇の安売りはしない
んだよ」

この非常時に軽口を叩くジャクソンに呆れながら、未来もまた冗
談じみた言葉をさらりと返す。

しかし、不謹慎とも言える会話のキャッチボールは全く不愉快な
ものではない。この軽さは、逆に極限状態でこちこちに固まってい
た彼女の心を見るうちに解きほぐし、ほっと息をつく余裕さえ
与えてくれている。

こんな時にどう振る舞えばいいかを、ジャクソンは自然に弁えて
いるのだ。

未来の表情が普段のそれに戻りつつあることを確認した黒人サイボーグ捜査官は、かすかな安堵をお茶らけた声に織り交ぜて言った。「まあ、そんだけの口をきけるなら大丈夫みたいだな。立てるか？」未来が頷くと、ジャクソンは膝について細い身体を床に下ろし、片手を差し出した。ごついガントレットに包まれたジャクソンの手を借りて、2人一緒に立ち上がる。

彼らが立つのは、冷凍室の中央よりやや出入り口に近い中央通路の隅だった。

未来は自らが把握できなかった空白の時間に何が起きたのかと、今の状況を把握するために周囲を見回した。

自分たちの遙か後方に当たる厚い金属製の断熱扉は、真ん中の辺りがでこぼこになり、がっちりロックをかけていた筈のスティール棒が鉛細工のようにねじ曲がっている。ジャクソンが扉を殴打したのちに力づくで開け、ロックを破壊したのだ。

ハヤテを装着した未来でも、金属扉を短時間のうちにここまでめちやくちやに壊すことは難しい。オーデインに身を包んだジャクソンの誇る圧倒的なパワーには、唸らざるを得なかった。

扉とは逆方向に当たる彼らの前方10ヤード程度では、まだ無人ロボットが大量の黒煙を上げてくすぶっている。動力が電気のため、激しく燃えたのはほんの短い間だったのだろう。

煤で真っ黒になった本体を乗せたタイヤの足元には、大きな筒状の金属も転がっているのが見えた。

「まさか、あれでロボットを撃つたの？」

見咎めた未来が金属の筒を指す。

ジャクソンが使ったのは、AT4（対戦車擲弾発射器）だったのだ。普通は装甲車や戦車の堅固な外装を破壊するのに使用される重火器で、所謂ロケット砲の一種である。装填する弾頭によって貫通力や爆発の度合いに差は出るものの、間違っても屋内で撃つような武器ではない。

「ああ。てつきりロボットは1匹しかいねえもんだと思って、派手

にぶちかましちまったんだが……まさか、もう1匹いたとはな。ちよつとした計算違いだ」

ジャクソンがそうこぼすと、未来が高い位置にある彼の顔を下から睨んだ。

「あんたね、私まで殺す気？」

「なあに、心配ねえよ。こいつは火力を調整したトリスの特別製で、対大型ロボット用の試作品なんだ。軍で使ってるのより全然、安全だからな」

悪びれる様子もなくしらつと云つてのけるジャクソンに、未来はやれやれと頭を振った。確かにロボットは拳銃では歯の立つ相手ではないし、本体に走り寄つて攻撃を加えるのでは手遅れになる可能性が高かつたのだ。彼の下した判断が最も適切だったと言えるよう。

結果としてロボットはAT4の弾頭に動力部を撃ち抜かれ、機能を停止させると同時に捕らえていた未来を床に落としたのだ。その際に彼は2体のロボットの間を駆け抜け、彼女を救い出したのだらう。

未来が先に感じた温かさはロボットの爆発による熱で、衝撃は緩んだアームから床に落下したときのものだったのである。

「さあて、バーニイがAT4は一発しか許可しなかつたんだがな。どうしてやるうか」

と、ジャクソンがオーデインの腰に取りつけられた樹脂製のホルスターからホーネットを抜いて呟いた。手持ちの武器が心許なくて困っている様子はなく、むしろ楽しそうな様子が口振りから伝わってくる。

間近に上がった火の手で多少は体温を上げられた未来だが、早くも鎮火した今は再び凍てつく寒さが押し寄せてきていた。身震いしながら、彼女はジャクソンに注意を促す。

「気をつけて。あれは自動運転だけど、もう片方にティアーズとブラックヘアの犯人が乗ってるんだよ」

「ちっ、道理でぶっ壊した方から誰も出てこねえ訳だ。そっちにい

る奴を、無傷で押さえるってことか」

停止したまま立ち尽くすロボットの残骸からもうもつと上がり続ける煙を睨んで、ジャクソンは少しだけ立ち姿に緊張感を含ませていた。黒に近い灰色の煙は、きな臭い臭いとともに冷却ファンでかき回され、周囲を薄く曇らせている。

ジャクソンの眼は極端に高感度のセンサーやカメラを内蔵しているわけではないため、本体近くの濃い煙の中では、あまり正確に相手の位置を掴めないでいるのだろう。それはまだエネルギーを体温の維持に使っている未来も、ほぼ同じであった。

しかし、アンデイがこの短時間で壁を破って逃走できる筈もなければ、ジャクソンや未来に気づかれずに外へ出たとも思えない。ジャクソンが気配を探るのは別の方向に意識を向けながら、未来が呟いた。

「奴はどこに行ったんだろ。別の出入り口から外に行ったのかな」

「いや、冷凍室の出入り口は俺たちの後ろにあるドアだけだ。奴がどこかに隠れてることは間違いねえだろう」

全身を白銀と鮮やかな青の金属鎧に包まれたジャクソンが言葉を漏らし、装甲がない口許の周りだけ吐く息で白くなった。見た目が殆どロボットのように見えるだけに、彼の存在もここではまた異質だ。

未来が視界の端でを彼を捉えると、丁度眼の高さの辺りにホーネットが構えられているのがわかる。こちらは未来と同型だったが、オーデインと同じく派手な光沢を放っていた。ジャクソンの手に握られたそれは45口径であるにもかかわらず、おもちゃの銃のように見えてしまう。

形が違う銃であることを意識させたホーネットは、未来が忘れそうになっていたあることを思い出させた。

「そう言えば……ベレッタがあるのは確認したけど、ブラックヘアで使われてた22口径の銃はまだ見てないんだ。もしかしたら奴が持ってるのかも」

彼女が早口でジャクソンに伝えようとしたところだった。

くぐもった銃声で乾燥した冷凍室の空間が振動し、煙を突っ切つて飛来した銃弾をジャクソンの胸甲が弾いた。

鉛の弾がけばけばしい鏡面加工の装甲に跳ね返され、甲高い音が発射音の残響を打ち消す。

「ふん、煙に隠れて撃つてきやがったか。なかなかの腕をしてるじやねえか」

とっさに未来を庇って前面に立ち塞がったジャクソンは、不敵な微笑を浮かべてから胸部の装甲にちらりと視線を走らせた。命中したのはオーバーアーマーの胸当てで、多少の衝撃が走り表面に傷もついたようではあったが、着用者であるジャクソンには痛くも痒くもない。大型アサルトライフルの連射にも耐えうる設計で製作されたオーデインは、この程度の攻撃など無に等しかった。

一方、彼の後ろから煙の向こうへ眼を凝らす未来は、言った側からの銃撃に身構えている。

「あれには、主犯の男が乗ってるんだよ」

「なに？二人が一緒に乗ってるんじゃないのか」

驚いたジャクソンが、思わず未来の方を振り返る。

「それに、ドクターはどこだ？どつかにいるんだろ？」

「ドクター・スギタなら、もう一人の犯人を……」

そこまで言い、口ごもった未来の顔色が変わった。

あの状況では杉田にソフィーの身柄を委ねてアンディを追う以外になかったが、長時間放置したままでいいわけがない。杉田に銃を託しはしたものの、彼は誰かを撃つた経験がないのだ。まして、彼がとっさの場合に躊躇なくトリガーを引けるほど、暴力の行使に抵抗を持たない人物であるはずがない。

未来は腫れた顔に不安の影をよぎらせた。

更に、彼女の耳へ耳障りな金属音が飛び込んでくる。もう一発銃弾が撃ち込まれ、オーデインの肩が今一度弾き返したのだ。

「ボーっと突っ立ってる暇があったら、余計な機能は全部停止して

さっさと体温を上げとけ。そのままじゃ、本当に顔が女子中学生のまま死んじゃうぜ」

ジャクソンは軽い調子をあくまで崩さずに未来を気遣ってくれが、言い方が気に入らない。彼女はむっと口を尖らせた。

「余計なお世話だよ！」

そこへ三度目の銃撃が襲ってきた。しつこく狙ってくる相手に苛立っているのか、今度は背中の厚い装甲で弾丸を弾かせたジャクソンが口許を歪める。

「おっと、とりあえずこのクソツタレ冷凍庫の外へ出るぜ。しっかりつかまってる！」

言うなり、彼は断りもせず未来の身体を片手でひょいと脇に抱えて走り出した。

彼女が抗議の声を上げる暇もなく、ジャクソンは暗い照明に輝く白銀の疾風となる。

無惨な姿にされた断熱扉の前に2人が辿り着く時間すら、ほんの一瞬あれば足りた。

まるで荷物扱いされたことに改めて不満を述べようとした未来が口を開く前に、ジャクソンが妙な調子で言った。

「ドクターのところへ行けよ。ここは俺に任せとけ」

鎧姿の同僚が前に進み出て提案したことは、相応な装備を有するのが彼しかいないことを考えれば、別段以外ではない。しかしいざ行けと言われると、彼一人に戦闘を押しつけているような気分が襲われる。

未来はつい先刻、ロボットに殺されかけた。

彼も同じ目に遭わされるのではないか、2人で協力してアンディを捕らえてから杉田の様子を見に行くのが妥当ではないのかと、どうしても考えてしまうのだ。

「でも……」

「心配すんな、こっちはフルアーマーなんだ。びびりの素人が乗ってるポンコツロボットなんざ、俺一人だけで十分だよ」

視線を逸らしてまだためらう素振りを見せている未来の手を、ジャクソンが強引に取った。

「こいつを持って行くといい。俺にはホーネットもあるし、素手で暴れる方が性に合ってるからな」

言いながら彼が小柄な女性捜査官の手のひらに押しつけたのは、脚部の装甲に予備として差し入れていたグロックだった。驚いた未来が顔を上げると、更に力強い頷きを返して見せてくる。

「俺一人抜け駆けはしたが、FBIと地元警察の応援もすぐそこまで来てるんだ。お前はドクターを守れ。もう一人の犯人の居場所も、わかってるんだろ？」

未来は答えないが、握らされたグロックを見つめる黒い瞳には徐々に冷静な光が戻りつつある。

ジャクソンは仲間である自分を信じ、任せようとしてくれているのだ。

その温かな思いに報いるには、この場を彼に預けて自分の役目を果たすことしかない。

「早く行ってやれ、相棒！」

だめ押しの一言に、未来はようやく無言で頷きを返した。これ以上心を残さぬよう勢いをつけて振り返り、冷凍室の外へと駆け出していく。小さな背中は今まで凍死しそうになっていたハンデを全く感じさせず、あつという間に遠ざかっていった。

未来ほど感度のいい聴覚を持たないジャクソンには、彼女の走り去る音は既に聞こえなくなっている。彼は通信を切り替えると、すぐ側まで来ているだろう戦略担当のバーニイに呼びかけた。

「バーニイ、聞こえるか？ミキは無事だ。たった今、パツケージの保護と共犯者の確保に向かった。俺はこのまま、ロボットとの戦闘を継続する」

『了解。私は倉庫敷地ゲートに到着した。ここを確保して、後発組と連携を取ることにする。お前たちの健闘を祈っている』

ジャクソンの耳元で響いたバーニイの声は、普段と変わらないま

まだ。彼も新入りの女性捜査官のことは心配しているが、決してそれを態度に出そうとは思わないのだ。

ノリの悪い奴だ、と思いつつ小さな吐息を漏らしても、後味はさほど悪くない。

自分は早くこの冷凍庫に隠れている主犯をひっ捕まえて、未来と再び合流すべきだろう。それが単身の先行を黙って認めてくれたバーニイとの信頼の下、交わされた無言の約束を守ることに他ならない筈だった。

昨日の午後、未来から送信されてきた特殊通信からは断片的な内容しか伝わってこなかった。

にもかかわらず状況が危機的であることを判断し、戦闘チームのみが先行して現場に急行することを隊長に提言したのは、普段は滅多に発言しないバーニイだったのだ。

かくして緊急で武装を整えたジャクソンとバーニイは電波の解析をエマとトリスに依頼し、夕方にはトレーラーを出発させた。その途中、未来の通信を聞き続けていたジャクソンが先に走って現場へ行くことを主張したが、彼がトレーラーから飛び出す寸前にグロツクを持たせたのもまた、バーニイであった。

バーニイは戦闘という命懸けの任務を負う2人を誰よりも気遣い、重んじてくれている。

無事に戻れたなら、そのことを未来にもよく言って聞かせねばなるまい。ジャクソンが未来に渡すことを見越した上で、バーニイはグロツクを渡してくれたのだ。

殺傷能力を持つ唯一の武器であるグロツクを未来に渡したのは、ジャクソンの全身が高速で稼働する鈍器そのものであるという理由もあった。一般的な銃が有効と言い難いロボットを相手にするには、この方が都合がいい。

彼は自分に可能な範囲で目と耳に意識を集中させた。

やはり未来のように隠れた相手を熱反応センサーで炙り出したり、呼吸音を捉えたりはできなかったが、それでもこの冷凍室から犯人

が脱出していないのは確実だ。突入する前にこの倉庫の構造を予め分析し、逃走経路に使用できるのはここしかないことを断定した上で行動したのである。

犯人は、目の前のロボットをロケット砲という強烈な武器で唐突に破壊されたのだ。十中八九、こちらに驚きと恐怖、そして不安を感じていることは間違いない。

普通の銃でいくら攻撃されても通用しないこと、これ以上抵抗すれば身の安全は保障しないという警告の意味も含め、ジャクソンは通りのいい声を鋭く響かせた。

「さあ、来やがれ。予め言っとくが、俺は彼女みたいに優しかねえぜ！」

その時が来るのを、どれほど待ち望んだことだろう。

未来が自分と同じ部屋に連れて来られれば、ソフィーとアンディはまず武器を手にして彼女を脅し、その上で精神的に痛めつけようとすることは間違いなかった。

FBI捜査官である未来に手を出そうとしたことが破滅の始まりだと、知る由もなく。

サイボーグである彼女の怒りを爆発させることが、どれほど愚かな所作であるかを理解することもなく。

杉田には、未来がパートナーの身の安全を守るために極端な抵抗はしないだろうと予測できた。

現実はその場面が訪れたとき、杉田は自分の感情を抑え込むのに全精神力を傾けた。

薬で意識を奪われ、縛り上げられた未来が床に転がされた時、どれほど駆け寄って彼女を助け起こしたいと思ったことか。目を覚まさないでいる彼女の前でアンディに犯された時、どれだけ屈辱に泣き叫びたかったことか。そして、愛しき者に自分の今の姿が見られないよう、願ったことか。

全ては一瞬のチャンスを作るため、アンディとソフィーという忌むべき2人の殺人犯を欺き、彼らを捕らえるためだったとは言え、それはあまりにも無謀で確率の低い賭けでもあった。

が、彼らに監禁されていた杉田には、それしか残された手段がなかったのだ。

来たるべき裏切りを確かなものにするためには、まず2人の凶悪犯を徹底的に信用させることから始めねばならなかった。だからアンディの怪我を治療し、身体を蹂躪される苦痛に耐え、ソフィーのために花を活けてやった。

こちらの企みを見抜かれれば、速やかで且つ残酷な死が手をこま

ねいて待っていることは、ひしひしと感じられた。ごく普通の青年にとつては、毎秒が命を削り取られていくような消耗戦だったのだ。本心がアンディとソフィーに同調しなかったのは、杉田がその掘り所を花と未来との思い出に求めていたからだろう。心から愛するものの助けを借りて彼は自らを厳しく律し、彼は悪魔の二人組に引導を渡す種を仕込み続けた。

アンディには、心で醜く嘲笑いながら、彼の虜になったことをことあるごとに見せつけた。

ソフィーには、未来のことなどどうでもいいが弄んだ方が面白いからと、精神的に追いつめてここへ連れ込むようにけしかけた。

彼らの自分に対する仕打ちも、ドイツ語のメモにして細かいことまで漏らさずに残しておいた。

その結果の全てが、まさにこの瞬間目になっている光景である。

銃を奪うことに成功し、未来はFBI特別捜査官の身分と本当の名前を明かし、彼女はアンディを逮捕すべく駆け出した。

杉田は今や未来に託された銃をソフィーに突きつけ、完全に行動を分断させた。

彼はここに至るまでのパターンを幾通りも考え、シミュレーションを繰り返して、迷わずに行動できるように備えていたのだ。

「酷いわ。マサト、私を騙したのね」

その杉田を、恨みを込めて見上げる人工的な緑色の瞳があった。毛布で裸の胸から下を覆い隠し、身を縮こまらせているソフィーである。ベッドの隅に身を寄せて座り、きつく毛布の端を掻き合わせている赤毛の女は、涙を浮かべて哀れを誘う表情を見せている。だが、杉田は向けられてくる感情を全て跳ね返す不可視の盾を目前に翳し、彼女を冷ややかに一瞥しただけであった。

未来がアンディを追って飛び出して行ってから、まだ5分と経っていない。

杉田はベッドルームの開きかけたドアにちらりと目をやると、すぐにソフィーへと視線を戻した。

ベレッタの安全装置に指をかけたままにいる杉田は、ソフィーが怪しい動きをしていないか見張るばかりである。地元警察とCVC本部には部屋に置いてあった電話で既に連絡し、彼自身も上着まで身につけて、すぐに動けるようになっていた。あとは応援が駆けつけてくるか、未来が戻ってくるまで待つて、ソフィーの身柄を引き渡せばいいだけだ。

が、杉田のベレッタを持つ手は震えていた。

今までのように、誰かの命の灯を簡単に消してしまう武器を持つことが恐ろしいからではない。心の底から染み出し、ゆっくりと満ちていく怒りと憎しみが抑え切れないでいるせいだ。

目の前に半裸で座っている女は、今までにどれだけ自分の心を踏みじり、傷つけてきたことだろう。彼女が杉田を拉致し、アンディに差し出しさえしなければ、こんなことにはなっていなかったのだ。

なのに、騙っていたなどどの口が言えるのか。

杉田は低く、押し殺した声で言った。

「騙すだって？どっちがだ。アンディを抑えたらすぐ、彼女が戻ってくる。もう諦めろ」

今までの人生においても、ここまで激しい感情を込めた声を出したことがない。彼自身でも、自らが暴れ出す寸前の獣のように思っていた。

杉田がソフィーを車で自宅まで送り届けたあの日、彼女は自宅に辿り着く直前にこのベレッタを突きつけてきた。その上で人気のないところまで運転させると、待ち構えていたアンディの車に乗り換えさせたのである。

そのままこのトレーラーハウスまで連れて来られ、杉田の悪夢の日々は始まった。

彼がアンディに犯されて苦痛に絶叫を上げていた時、ソフィーは傍らでそれを無邪気に笑いながら眺めていた。ソフィーにとつての至上の快樂が、人が苦しむ姿を見ることなのだ。杉田が悟ったのは、

その時だった。恐らく、今まで殺してきたブラックヘアの被害者についてもそうだったのだろう。

更にそれが精神的、肉体的な双方であるとわかるようになるまでも、そう時を要さなかった。

事実、ソフィーは未来の人柄の良さに付け入って見事なまでに振り回し、心を消耗させ、杉田を手中に落とした確信した時も、得意げに笑っていたのだ。

杉田や未来には彼女がしおらしい女性という印象しかなかったが、今は違う。

ソフィーは「サイコパス」と呼ばれる危険人物の典型だったのだ。自らの欲望を満たすため、あらゆる手段を行使するのが許されると思っているが、他人のことは決して許さず、理解もしないのがサイコパスだ。だから自分の意に添わないことがあると性格を豹変させ、周囲を混乱させることも珍しくない。

しかし非常に知恵の回るソフィーの場合、目をつけた人物の前では完璧な演技でイメージを固め、依存して見せることでじわじわとその毒素を広げていった。そして二人だけになり、最適な状況に誘い込んでから一気に牙を剥いたのである。

加えて、彼女はストーカーであるラルフまでも杉田と未来を襲うのに利用していたのだ。

この女を許せる隙など、一分もないに決まっている。

「そんな怖い声で言わないで。私、貴方のことを信じてたのに！」
激しく頭を振って否定し、泣きながら訴えてくるさまは、理不尽な暴力に怯える子どもを思わせる。今まで彼女が行ってきた犯罪行為を目の当たりにしてきた杉田には通用しないが、経緯を知らない者が見たら、杉田がソフィーを脅してレイプしようとしているようにしか見えないだろう。

しかしこの銃は数分前、杉田にとって一番大切な異性にソフィーが向けていたものだ。

そしてソフィーは、未来をここにさらって来てから遠慮なく暴力

を浴びせていた。女性にとって一番大切である顔すら何の躊躇もなく足蹴にした事実は、決して消えるものではない。

彼は安全装置から指を動かさずに言い放った。

「もう騙されないぞ。おかしいな真似を試してみろ、本当に撃つからなら強く、揺るがぬ杉田の声に、ソフィーは短く息を飲んでびくりと身体を震わせる。」

不安で大きく見開かれた彼女の瞳が潤み、みるみるうちに大粒の涙がせり上がってきた。

「……私がちよつと風邪気味だったときだって、心配して手当てもしてくれただじゃない。私、優しくしてもらって本当に嬉しかったのに。全部嘘だったって言うのね」

ソフィーはぼろぼろと頬を伝い落ちていく透明な涙を指先で拭いながら、杉田の裏切りを嘆く台詞を口に始めた。

彼が今までの行動全てを嘘で塗り固めて、裏切り者を演じて見せたことは間違いない。ただしそれは全米を恐怖の渦に叩き込んだ殺人犯を逮捕するため、これ以上の犠牲者を出さないため、正義のためだった。法的にも人道的にも、責められる余地など微塵もある筈がない。

とは言え、一般的な道理の中に身を置かずして生きているのがサイコパスという人種だ。

ソフィーにとつては自分が意図したもの以外の全ては排除すべき存在であり、受け入れることができない。だから今見せている涙も演技ではなく、本心からのそれなのかも知れない。

毛布の上に晒け出した白い腕で裸の肩を抱きしめるさまが痛々しげに見えるのも、そのせいなのだろう。

ソフィーの切々とした独演会は、杉田の耳に沈黙をもたらすことを許さずに続けられた。

「信じてたのよ。無茶なことばかり言ってくるアンディと、貴方は違つて。本当に素敵なお医者様だつて。それなのに、今は私に服を着ることも許してくれないの？それじゃ、アンディと……あの

「けだものと一緒だわ」

顔の造形の一部を思い出すことさえ汚らわしいアンディと一緒に言われ、杉田の胃がぎゅっと縮まり痛みを訴えた。

あんな人の姿をした悪魔と一緒にするなど、被害者である杉田にとって到底許すことのできない言い種だ。

しかし、目の前でさめざめと泣いている女性に対して感情のままに暴力をぶつけることも、杉田にはまた許されない行為だった。それこそ、自らをアンディと同じ位置まで墮とす卑怯な行為なのである。

無意識に眼鏡を直してから、杉田は足元に脱ぎ捨てられていたソフィーの黒いタートルをベッドに投げた。無言のまま、同じようにデニムと下着類も放り投げていく。

未来よりも大きなサイズの服が次々と宙を舞い、目の前に重なっていくのを、ソフィーは驚きの表情を浮かべながら眺めていた。彼女は杉田の顔と服の小山を黙って見比べていたが、数秒の後に頭から毛布をすっぽりと被った。もそもそと毛布の塊が動く、一枚ずつ端から引っぱり込まれていくのがわかる。

次にソフィーが毛布から顔を出したのは、杉田が投げた服を全て身につけてからだだった。身を隠す必要のなくなった彼女は毛布を足元に寄せて座り直すと、再び杉田の持つベレッタに視線を注いだ。

「お願い、銃を下げて。これじゃ怖くて動けないの」

「できるわけがないだろう。この期に及んで、君を信じるって言うのか？」

懇願してくるソフィーに対して、杉田の冷たい態度は変わらない。彼の反応は予想の範疇だったのか、ソフィーは溜息をつくと弱々しげに頷いて見せた。

「ええ、そうよ。だって私、誰かがいないと何もできない女だもの。今まではアンディと一緒にいたから、何だってできたのよ。でも、彼は今ここにいないわ」

悲しそうなソフィーは、悲劇のヒロインを気取るつもりなのか俯

いて目を伏せている。

確かに彼女は他人を利用する才能に抜きん出ており、自分に足りない能力を誰かに補わせることが常だ。従って言うていることは筋が通っており間違ってもいないが、だからと言って彼女を信じていい理由からかけ離れていることは間違いない。

もうこれ以上、騙されるわけにはいかないのだ。

が、銃を持つ右手を下げる気配がない杉田に、ソフィーは更に食い下がった。

「お願いよ。私、女なのよ？そんなもの向けられて、平気でいられるわけないじゃないの。それとも、貴方も人に銃を向けて笑ってられるような人なの？」

「君だつて、さっきまでこれを未来に向けてたじゃないか。大切な人が銃なんか突きつけられて、平気でいられる男がいると思ってるのか！」

演技がかったソフィーの言葉に、杉田はこれまでになく強い調子で怒鳴り返した。

彼が今ソフィーの動きを抑えるために手にしている武器が確かに未来の口に突っ込まれたことを、強烈に覚えている。あの時の絶望的な気持ちは、恐らく誰かを心から愛したことがないサイコパスには決して共感できるものではないのだ。

「ミキつて、ヨーコの本当の名前？そんなことも私に教えてくれなかつたなんて、酷いじゃない」

しかし、ソフィーの返事はやはり普通の感覚を持つ人間のそれとずれている。これでは、杉田が何に怒りを抱いているのか正確に伝わっているか、甚だ怪しい。肝心なことを聞き入れるつもりは全く持たず、ソフィーは勝手に嘆き続けた。

「それにあの子がFBIの捜査官なら、私を助けてくれても良かったのに。私、苦しかったのよ。ずっと誰かに助けて欲しいって、そう思ってたわ」

「馬鹿なことを言うな。今まで自分たちの勝手な理由で人の命を散

々奪つておいて、助けて欲しいだつて？」

呆れて開いた口が塞がらない、とはこのことだ。

若い医師が咄嗟に二の句が継げないでいると、ソフィーは突然叫んだ。

「だつて！仕方がなかつたんだもの！」

握りしめた両の拳を膝に大きく振り下ろした女の悲鳴に近い金切り声が、鋭くベッドルームの空気を震わせる。

大声を間近で浴びせられた杉田は驚いて多少身じろぎはしたものの、話の内容にとても同意する気になれないのは変わらなかった。ソフィーの態度が豹変したことに、却つて警戒心が強まつたくらいである。

余程興奮したのか、白人であるソフィーの頬は朱に染まり、ぜいぜいと荒い息をついていた。

「ねえマサト、貴方はいいつから私を助けてくれるのよね？私、怖かつたのよ。あいつの言うことを聞かなければ、何をされるかわかつたもんじゃなかつたの」

と、不意にソフィーはベッドから身を乗り出し、銃を構える杉田に手を伸ばしてこようとしたりした。これには杉田も驚いて後ろに飛び退き、彼女がすがりついてくるのを慌てて逃れるしかなかった。

反射的に銃を撃つ、という発想には至れなかつたのだ。

「いい加減にしろ！誰かを傷つけても笑つていられる奴に差し伸べてやる手なんて、僕は持つてないんだ！」

「何よ、私の苦しみなんて何も知らないくせに……あれは、そうするしかなかったからよ。でなきゃ、私だつてあいつにバラバラにされてたんだから。言う通りにしなければ殺すつて脅されて、それでも貴方は逆らい続けることができるつて言うの？」

ただ一人優しくしてくれていた杉田が身をかわし、完全に拒否されたショックが加わつたのかも知れない。ソフィーの語調はしがみつくと言つよりも、恨み節のような粘着質のものに変わつてきている。ただ、続いた話はやはり自分の行いを悔いたり、誰かに詫びる

ような内容ではなかった。

「貴方はアンディが本気で怒ったところを見たことがないから、そんなことが言えるんだわ。他の人のことなんか、気にしてる場合じゃないよ。」

杉田を悲しげに睨むソフィーの瞳に、今一度涙が湧き上がってくる。それも悔恨の涙ではなく、自分が受け入れられない、理解されていないということに対する子どもっぽく悲しみのそれであろう。

「マサトはあいつと違うわ。貴方は銃が似合うような人じゃない。人を殺す道具なんか持たないで。私、本当はアンディから自由になりたいのよ。お願い、私を助けてちょうだい。」

最早なりふり構っていられないのか、ソフィーはベッドから下りと冷たいフローリングの床にぺたりと座り込んだ。低い姿勢から卑屈な視線で杉田を見上げ、低く頭を垂れて見せる。手に何も持っていないことを示すように、手のひらも上に向けているところから彼女なりに敵意がないことを示そうとしているのかも知れなかった。ソフィーは、とにかく銃を向けられるのが嫌なのだ。

サイコパスは自分が暴力を振るうのが大好きでもその逆は大嫌いとはよく言ったもので、彼女もその例に漏れないのだろう。

どんな状況でも、涙目の女性から自分を否定する言葉を投げつけられ、こちらが攻撃するための物理的手段をちらつかせるという立場は、まともな神経の持ち主の心を確実に消耗させる。直接的な方法を使わずにソフィーの動きを抑える方法があるのなら、杉田にとつてはその方がずっとありがたかった。

数秒考えた後に、杉田は息を軽く吐いて頷いた。

「……わかった、銃は使わないよ。その代わりに、FBIの応援が来るまで君の手を縛らせてもらう。強くはしないから。」

彼の足元には、未来を縛っていたロープがまだ散らばっている。彼女が力づくで引きちぎったものだが、ばらばらの長さに切れているために使えそうなものもあったのだ。

「本当？」

その彼の言葉を聞いたソフィーが顔を上げてほっとした表情を作り、低い体勢のまま杉田の方へにじり寄った。まだ警戒心を解いていない杉田が、間合いが詰まらないように壁の方へと同じ分だけ下がっていく。

「けど、縛られるのは嫌よ。昔、アンディがいつも私を縛って面白がってたの。この部屋は外から鍵をかければ逃げられないから、私をここに閉じ込めて。このベッドルームは窓もないし、出入口がひとつしかないのは貴方も知ってるでしょう？」

自分の言い分が聞き入れられたことを無邪気に喜んでいるソフィーは、声を弾ませて意外なことを申し出ている。

しかし、銃を使わずソフィーの身体も拘束しないのであれば、それが最適な手段であると言えよう。それに、杉田自身もここに軟禁されたことは何度もあったのだ。

ベレッタは手放さないままで、杉田は視線を部屋の中を巡らせた。

「鍵はどこにあるんだ？」

「サイドテーブルの上か、デスクの引き出しの中だと思うわ」

そう言えば、アンディがいつもそこへ携帯電話や車の鍵を入れるのを目にしていた。

杉田がつい昨日までの行動を思い出し、まず傍らのデスクの引き出しに手をかけようとす。

彼の視線がソフィーから引き出しの取っ手に移った、その時だった。

杉田はソフィーの柔らかい身体が足全体に勢いをつけて体当たりしてきたことを、瞬間的には理解できなかった。

組みつかれた足がよろけて重心がずれ、膝が曲がり、ざらついた壁を広げた手と曲げた肘がこする。

彼が仰向けで無様にフローリングへ倒れたとき、後頭部も壁に打ちつけていた。頭全体に衝撃が走ったときは白い火花が視界いっぱいに散ったが、その後意識が暗転することはなかった。気絶は免れ

たのである。

が、まだちかちかする光が目に見える範囲に残っている中に、異様に黒い部分があった。

それがついさつきまで自分が握っていたベレッタの銃口であり、鼻先に黒光りする金属の筒が突きつけられているとわかったのは、杉田が倒れたときにずれた眼鏡の位置を直し、やっとピントを合わせる事ができるようになってからであった。

ベレッタは白い手に握られていて、安全装置がいつの間にか外されていった。

手の先には黒いタートルに包まれた腕があり、腕はふくよかな胸を抱えた胴体に繋がっており、胴体の上では赤毛の女の顔がにこやかに笑って小首を傾げている。

「ねえ、マサト。何かあったときのために、私と一緒に来て。一緒に来てくれなきゃ私、何するかわからないの。自分でも」

杉田は今までに人を殺したことがなく、咄嗟に銃を撃つという行動が取れない。

ソフィーはそのことを、彼に拒否されたときに見抜いていたのだ。

北部ヴァージニアではなりえない低温に晒された身体は重く、手足の先にまだ痺れは残っている。

それでも未来は精神と肉体を必死に鞭打ち、白い息を散らして走っていた。

徐々に体温は戻りつつあるようだったが、それでもまだ歯の根が合わず、震えも止まらない。彼女は体温調節機能を最大限に働かせ、同時に地面を蹴る足の筋肉も意識しながら、全身に暖まった血液を巡らせる努力をした。

倉庫の洗剤が積まれた棚の間を突っ切り、キウイが詰まった箱の群れを横切り、トイレットペーパーの山をすり抜けながら、未来は杉田の元へと急ぐ。距離にすれば数百ヤードもないのに、障害物と寒さの影響で全力疾走することが叶わない。サイボーグの脚力を以てすれば一瞬で走破できるだけに、歯がゆさは苛立ちとともに限界に達しようとしていた。

ジャクソンに杉田のことを指摘されて以来、感じたくもない嫌な予感が未来の神経を刺激しっぱなしになっている。本来理屈に合わないことは無視できる性分だったが、今回はそうもいかなかった。

心情的に愛する男を放っておきたくないというのは勿論だったが、戦闘訓練を受けたことがない杉田が緊急時に的確な行動を取れるのか、それが一番の心配の種だったのだ。

自分やジャクソンは、制圧後の捕虜の扱いや窮地に立たされた敵の行動について心得ているが、杉田は一般市民だ。武器を持っているとは言え、射撃訓練も1度しかやったことがない彼を、凶悪犯と長時間2人きりにしておくのは危険だった。

ましてやソフィーは良心を持たない特殊な人間であり、追い詰められたら何をするかわかったものではない。

胸の中で抑え切れなくなりそうな不安を、未来はグロツクのグリ

ツプを握る両手に込めた。

が、現実是非情であった。

息を弾ませながら倉庫の出口に辿り着いた未来を出迎えたのは、どしゃぶりの大きな雨粒を反射させるまばゆいヘッドライトの光だった。しかもそれはこちらに向かつて来ると見せかけて、くるりと反回転して逆の方向を照らし出したのである。

反射的に立ち止まった未来が夜明け前の暗闇に目を凝らすと、肉体の主の意志を汲んだシステムが黒い瞳に自動で赤外線フィルタを下ろす。昼間と同じ明るい視界に捉えられたのは、ソフィーの車であるフュージョンであった。

顔までは判別できないが、前の座席に黒い人影が二つあることまではわかる。

それが意味することを、未来は瞬時に悟っていた。嫌な予感が現実のものとなってしまうたのだ。

「止まれ！従わなければ撃つ！」

倉庫から走り出た未来は、無駄とは思いつつも激しい風雨に逆らって警告し、グロックを構えた。案の定、銀色のフュージョンはエンジン音を響かせてスピードを上げにかかっている。

やむなく、フュージョンの後輪を狙ってグロックのトリガーを立て続けに絞った。連続した破裂音が小さな手元で上がり、銃口から散る火花が一瞬、周囲を光の中に切り取っていく。

しかし、全ての弾丸は狙いを外して闇の中へと吸い込まれていた。

グロックのような小型の拳銃の射程はせいぜい55ヤード（約50メートル）程度である上、距離が離れば命中精度は極端に下がる。その上、標的は乱暴な運転で走り去る車のタイヤだ。どんな射撃の名手であろうと、一発で撃ち抜くのは不可能だ。

フュージョンは大粒の雨を撥ね飛ばしながらシャフトを軋ませ、暗闇の中へと滑っていく。アメリカ車にしてはコンパクトな車体が右に急ハンドルを切ると、瞬く間に狭い道路へと入っていった。

「畜生、逃がすもんか！」

吐き捨てた若き女性捜査官は背中に手を回し、銃をジーンズのウエストに挟んで雨の中へと走り出した。そのまま砂利の広がる荒れた私道を通り切り、トレーラーハウスのドアを蹴破って、先までいたベッドルームの中へと駆け込んでいく。

誰もいない部屋にざっと視線を巡らせて状態を把握したが、血の跡もなければ硝煙の臭いもない。恐らくソフィーが銃を奪った上で杉田を脅し、運転させているのだろう。

幸いにして、未来のフォードがすぐ側に停めてあることは判明している。アンディとソフィーは彼女の車を見つかりにくい場所に処分するつもりで、この敷地内に持ってきたのだ。エンジンキーはどこかに必ずある筈だった。

未来の瞳が忙しなくベッドのサイドテーブルの上やデスクの上を飛び、デスクの鍵がかかった引き出しを力任せに引っ張って強引に開ける。

高く軽い音を響かせて最初の引き出しの鍵が壊れたところで、運よくエンジンキーが見つかった。シルバーのプレートがついている見慣れたキーを浅い引き出しからひっ掴み、ワックスが剥けたフロアリングの床をやかましく踏み鳴らして、トレーラーハウスの玄関へ取って返す。

木のドアをくぐって再び真つ暗な中に走り出ると、冬の冷たい雨粒が激しく顔を叩いてくる。未来は額から伝う雨の滴に目を細めつつ、先に見つけた自分の車を目指して倉庫の脇に開いた細いスペースに急いだ。

濡れそぼったダークブルーのフォードは、助手席側の窓を碎かれた無惨な姿のままそこにあった。逸る気持ちを抑えて運転席に回ってロックを解除し、シートベルトを締めてからエンジンキーを回す。

命を吹き込まれたフォードから低い唸りが上がり、メーターやナビシステムが点灯して、車内がぼんやりとした光に照らし出された。

燃料計が0を指していないこと、現在地がウォーソーで、暫く一方通行の道が続いていることだけを確認すると、未来はハンドルとギヤに手を置いた。

一旦ギアをバックに入れて車体を倉庫の脇から出し、片手で鋭くハンドルを切って方向を変えると、再びギアを変えてフュージョンが消えた道路へ向かい、クラッチを繋ぐ。

急加速でタイヤが上げた悲鳴が割れた窓から大きく聞こえ、雨は冷えた風とともに助手席に降り込んできた。助手席のシートには未来が叩き割った窓ガラスの細かい破片が散乱しているが、今がまだ深夜で他の車が殆ど通っていないさそうなのはありがたい。

未来が運転するフォードは倉庫とトレーラーハウスがあつた敷地から走り出すと、スピードを上げて右方向へと向かった。ナビによると、車が通れる幅の道路は暫く分岐がなく、一本道で続いているらしい。この分なら、何とか追いつけそうだった。

この車に乗る時は、杉田の黒いシボレーが前を走っていることが多かった。彼の安全運転は快適な速度に欠けるきらいはあつたが、安心して彼の後ろ姿を眺めていたことが思い出される。

「……先生、待ってて。必ず助けるから」

呟いた未来は、スピードメーターが時速44マイル（時速約70キロ）を指しているのを視界の隅に留め、更にギヤを変えて深くアクセルを踏み込んだ。寒風が割れた窓から車内に流れ込んで未来の体温を奪おうとするが、先の冷凍庫よりは遙かにましだ。

ウォーソーの整備が甘い道路はアスファルトがでこぼこで道路を照らすライトも少なく、頼みはヘッドライトと自らの視力のみだ。ソフィーと杉田が乗っているフュージョンはかなり速度を出しているらしく、一本道なのになかなかテールランプが見えてこなかった。「サイボーグの私の目から、逃げられるとも思ってるわけ！」

ハンドルを握る未来は、日本語でこぼしてから瞳を前方に凝らした。暗視フィルターがおろされた視界に更にズームがかかり、雨降りの闇夜を鋭く貫いていく。何度か調整しつつまっすぐな道路の先

へ先へと焦点を合わせていくと、ようやく赤いランプがぼつんと浮かび上がっているのを捉えることができた。

数少ないライトに時折照らされる車体は白っぽい光を反射し、アメリカ車にしては丸い特徴あるフォルムを浮かび上がらせている。流石に誰が乗っているかまでは確認できなかったが、フュージョンはアメリカ全土で流通している数がそう多くはない。ソフィーの車に間違いはないだろう。

未来はちらりと視線を下にやり、ナビシステムのマップ画面があると5マイル程度で360号線に合流する地図を示していることを確認した。

360号線はリッチモンド方面へ向かう道路で、幅が広く交通量も多いハイウェイだ。それだけに走りやすく、夜中でも他の車両が通行している可能性が高い。更に雨で見通しが悪い上に路面もスリップしやすいとあっては、一步間違えば追跡中に複数車両を巻き込んだ大事故につながりかねない。なるべくなら、その手前でソフィーの逃走を食い止めねばならなかった。

彼女はそう決めると、今一度ギヤチェンジをかけて速度の上乗せにかかった。急加速のため相応の重力がかかり、背中がシートに押しつけられる。スピードメーターが時速60マイル（時速約96キロ）に達すると、おんぼろの車体は細かい縦揺れを増したように思える。

舌を噛みそうになるのを数十秒は堪えた頃、未来は前方の闇の中でモンスターの眼光のように赤く滲むテールランプを、ズーム機能を使わずに発見できた。

しかし今現在開いている距離を考えると、360号線でのカーチエイスは避けられそうもなかった。操る車両がスピーカーと取り外し式の回転灯、通信スクヤナーを備えた覆面パトカーでないことが、今になって悔やまれる。こうなった以上は、覚悟を決めて行くしかない。

未来が改めてハンドルを握り直した時、テールランプが左側に流

れていった。ソフィーのフュージョンが360号線に入ったのだ。未来も少しだけ速度を落として緩やかに左へ曲がり、狭い道路からハイウェイへと滑り出る。

夜中でも明るいオレンジ色のライトに照らされたただっ広い空間が、目の前に開けた。幸い、前方の見える範囲にフュージョン以外の車はいない。ここはハイウェイとは言っても郊外の道路で車道には中央分離帯もなく、周囲に広がる荒野を隔てる厚い防音壁もないような場所だ。これなら、ある程度派手にやっても被害は少なくて済むだろう。

FBI捜査官の養成機関であるFBIアカデミーでは、このような状況も想定してドライビングテクニクのカリキュラムを組んでいる。彼女は頭の隅で教官の叱咤を聞きながらハンドルを切り、クラッチを繋ぎ換え、アクセルを踏んだ。

雨で濡れた路面はスリップを誘い、いつもと違う走りの感触がハンドルとペダルを操る手足の動きに戸惑いと緊張を与える。だが、未来の鍛え上げられた運転技術は、巧みに車体を安定したスピードに乗せ続けた。

おんぼろの車が比較的新しいそれに猛然と追いつがって、じりじりと距離を詰めていく。先まではビーズくらいにしか見えていなかったフュージョンのテールランプは、どんどん大きくなっていった。未来が操る車体は先刻より激しく揺れ、窓の滴を拭うワイパーががたつき、年老いたエンジンが低い叫びを上げているのが聞こえてくる。スピードメーターに視線を送る余裕も、そろそろ残っていなかった。

それでも、追跡を諦めるわけにはいかなかった。

ここでソフィーに振り切られたらおしまいなのだ。連続殺人犯という自分の正体を知っている杉田のことを、彼女が生かしておく筈がない。何としても追いつき、逃走を止めねばならない。

未来は一旦解いたズームを、再度目標である赤き光に向けた。瞳の倍率を上げると、雨粒を纏って夜のハイウェイを疾走する銀の車

体の輪郭がはつきりと浮かんでくる。

その丸みを帯びた形の右側面に、不意に小さな突起が突き出たかと思つた時である。

濁つた音とともにエンジンとは別の衝撃が加えられ、車が縦に跳ねた気がした。瞬間、数え切れないほどの白い線が放射状に広がり、フロントガラスの大半を白く覆い尽くす。

「くっそ……あの女、こんな所で撃ってきたつての！」

未来は悪態をつくくと、横目でフロントガラスの真ん中から走つてきた亀裂を見やった。

網目がごく細かい蜘蛛の巣を思わせるひび割れの中心に小さな穴が穿たれ、もともと悪い視界を余計に劣悪なものにしていた。

走行中の車から拳銃を発砲して目標に命中させるのは、素人にはかなり難しい。恐らく、乱射されたうちの一発が命中しただけだろう。

しかし、未来に撃ち返すつもりはなかった。いくら夜中で交通量は少ないとは言え、他の車も通る幹線道路で運転しながら反撃するような危険を犯すわけにはいかないのだ。ソフィーはそれを知つていて、鉛弾を浴びせてきたのだろう。

それに、ソフィーの車を運転しているのは杉田だ。

未来が迂闊に手を出してこないことなど、初めから計算づくでいかに違いない。

どこまでも汚い女だ！

鋭い舌打ちで煮えくり返りそうな腹をごまかすと、黒髪の女性捜査官はシートの上で背をかがめた。フロントガラス上部から伸びる亀裂に邪魔されて、前方の確認が困難になってきたのだ。周囲のことをまるで考えない犯罪者の厄介さは筆舌に尽くし難い、とこういう時に痛感する。

それでも、ようやくここまで追い詰めたのだ。

何があつても、数時間前まで友人だと思ひ込まされていた女を逃がす訳にはいかない。

ソフィーとアンディはサイコパス同士が手を組んだ、珍しいケースの犯罪者である。互いに庇い合う気持ちをもるで持たない彼らに法の鉄槌を下すには、二人同時に捕まえなくては意味がない。

そして何があるとも、杉田を無事に救い出さねばならない。そうでなければ今まで協力してくれたCVCの仲間や、日本で彼の無事の一報を待つ生沢とリユーに、どの面を下げて会えるというのか。法執行官という立場が邪魔するせいで、未来は躊躇なくアンディとソフィーを撃ち殺す覚悟があっても、それができないでいることが悔しかった。今までの彼女は、敵対する者に心底から殺意を抱いたことはなかったが、今回ばかりは強い憎しみを感じずにはいられない。

今が雨に祟られていなければ、きっとドアポケットに放り込んであるグロツクを引っ張り出し、グリップをフロントガラスに叩きつけていただろう。胸の内に鬱積した暗い怒りをぶつけて、且つ視界も晴らすのに丁度いいからだ。

一発の銃弾を喰らったことで、詰まっていた両者の間に横たわっていた空間はまた少し広がっているようだった。360号線はリッチモンドまで大きな分岐はないが、一般道に下りる枝道は数多くある。検問も行っていないらしい今、ソフィーの車を見失うことだけは絶対に避けねばならない。

未来が確認のために瞳のズームを絞る。

その視点の中心に捉えられた赤いテールランプが、不意にかき消えた。

「わあっ！」

凍りついた表情の未来から叫びが漏れ、反射的に動いた腕が鋭くハンドルを右に切った。

一点を拡大したことによって狭まった視界は、枝道からハイウェイに上がってきたトラックが割り込んできたことを、即時に肉体の持主へ伝えられなかったのだ。

急に前輪の角度を変えられた車体は、物理法則に全く逆らえない。

雨で滑りやすくなった路面はゴムのタイヤに掴まれることなく、空回りする車輪があらぬ方向へと進む不測の力へと乗せられていく。必死にハンドルにしがみつく未来を腹に収めたまま、おんぼろフォードはアスファルトが敷かれた道から逸れた。

ぎりぎりのところで大型トラックとの衝突を免れはしたものの、殆ど黒に見える彼女の車は頼りなげにハイウェイを囲う有刺鉄線のフェンスを突き破り、冬の荒野へと突っ込んでいく。制御を取り戻せない車体が水分を含んだ土を削り取り、枯れた草を乱暴に刈り取って、遂には片輪を泥に取られて半面を浮き上がらせた。

「あ、ひっくり返っちゃったわ。あの子の車」

その様子を目にして、含み笑いをしている人物がいた。

360号線を走り続けるフュージョンの助手席から身を乗り出し、後方を眺めているソフィーだ。車外に出した顔は風になぶられる赤毛に包まれており、雨に濡れた毛先を頬に張りつかせている。

「今撃つたのが、運良く当たったみたいね。これでもう逃げ切れるわ」

彼女は半身を引いてパワーウィンドウを閉めながら、まだ手にしていたベレッタを確かめている。ふと視線を感じて顔を上げると、運転している杉田と視線が重なった。

「やだ、危ないじゃないの。ちゃんと前を見て運転してちょうだい」

こちらを呆然とした様子で見つめている杉田は、まるで前方に注意を払っていない。

しかし、ソフィーが不快感を露にしてベレッタの銃口を向けても、彼は言うことを聞くつもりがないようだった。

「前を見なさいよ。私たちまで事故に遭ったらどうするの？」

トリガーに白い指をかけると、眼鏡の青年は無機質な動きで前に向き直った。寒さのせいなのかハンドルにかけた手は白くなり、小刻みに震えているように見える。

「それで未来を撃つたのか」

手ばかりではなく肩も震わせている彼の口から、掠れた一言がこ

ぼれる。殆ど聞き取れないくらいに声が含まれていない、不安定に続いた吐息のような呟きであった。

「ええ。窓に一発当たったし、車は道路の外で横転したわ。ひよつとしたら死んでるかもね。もう、追っては来られないわよ。安心したわ」

追跡を振り切ったことで上機嫌になったソフィーは、あえて聞き返すことはしないが、言い終わらないうちに杉田が囁きを重ねてきた。

「……………よく……………」

今度は何を言っているのかはつきりとわからない。英語かどうか判別できない調子があったため、ソフィーは怪訝そうな顔で杉田の方へ顔を寄せた。

「え、何？聞こえないんだけど」

「よくも、やってくれたな！」

日本語の怒号がフュージョンの車内に響き、突如として横からの重力が襲いかかった。

外を直線で流れていたオレンジ色のライトの光が歪み、窓をまっすぐ伝っていた雨の筋が歪な方向に走り、車体から強引に振り払われる形となった雨粒が飛沫となって空中に飛び散る。

車は斜めに路面を滑りながら進んだかと思うと後輪部分が勢いに負けて振られ、全体が大きく回転した。

ブレーキから高く、耳をつんざくような高音が上がり、車内でソフィーが上げた悲鳴をかき消していく。

激昂した杉田が一気にハンドルを切り、タイヤが鋭角どころでは済まない角度に突然変えられたのである。制御を失った車体は先のフォードと同じように針金の脆い柵を突き抜け、スピンしながら真っ暗な草むらへと振り落とされた。

ちぎれた枯れ草や撥ね飛ばした泥を纏い、フュージョンは地を削り闇の中へと乱暴に突進していく。深い轍の跡を枯れた大地に数センチメートルは無秩序に刻んでから、やっとのことで車体は慣性の力から

開放された。

銀色に光っていたボディが僅かな間に泥で汚され、無様な姿となり草の上で動きを止める。

普通ならありえない力に翻弄された車のシートで、ソフィーはぐったりと身体を沈ませていた。

口から内臓が飛び出ると思っくらの暴力に晒されたのである。

シートベルトがあつたとは言え、乱暴な運転に慣れていない身体への肉体的ダメージは計り知れなかった。怪我こそなかったが、全身を思い切り振り回された衝撃は耐え難く、嘔吐寸前になるくらいに胃のむかつきが酷い。

めちやくちやな方向から加えられた重力と数度のスピンド、思考も完全に停止している。

今はとにかく外へ出て、新鮮な空気に当りたかった。

彼女は呻き声を漏らしつつ額を流れる冷や汗を拭くと、震える手でシートベルトを外してドアを開けた。

力を入れられなくなった上半身をドアにもたせかけていたため、腰から上が車外へと倒れ出る。

身体を引きずるように車から這い出ると濡れた枯れ草が身体にまとわりつき、雨粒が一斉に顔に落ちてきた。

冷たい雫に、鮮やかな緑のカラーコンタクトをつけた目を細める。倒れ伏した身体は何か起こすことができたが、まだ頭はふらついていて、側に何かがあるのかもよく見えない。

ソフィーは視点の安定を図ろうと辺りを見回してから、ゆっくりと頭を上げた。

そこに、見慣れた黒光りする金属が飛び込んできた。

丸く小さなそれは、自分が持っている筈のベレッタの銃口であつた。

数歩離れた場所、彼女の頭よりもやや高い位置であろうか。何故、そんなところにベレッタがあるのだらう。

今しがたの事故が一時的な記憶の混乱を引き起こし、ソフィーは

首を傾げるしかなかった。

しかし暗闇にベレッタを構えている人物の姿が見え、それが彼女に全てを繋がせた。

自分に銃口を向けているのは、隣で運転していた杉田だったのだ。「マサト、何してるの？」

彼は銃を構えてはいても、撃つことができない人間だ。

だからソフィーは、こくと小首を傾げて無邪気に問い返した。

「それ、私のよ。貴方が持つててもしょうがないでしょ。返して」

ソフィーがふらふらと立ち上がってから手を差し出しても、杉田は動こうとしない。声を媚びでほころばせて、今一度彼女は手を振って催促した。

「どうしたの？返すわよね？」

それでも、気弱な筈の青年は黙ったままだ。

従うこと以外の選択肢を彼に与えていないソフィーは、そこで初めてまともに黒い瞳と正面から向き合った。

雨の滴がついた眼鏡の奥にある目は、見慣れている筈の怯えた小動物を連想させる印象にない。

純粹な敵意と怒りに満ち、許さざるものを全て排除する目だ。

常に誰かを許し、何かを攻撃することを今までに思いつくことがなかったからこそ、最後に行き着くことができる邪気なき殺意。

それは自分以外の誰かを想う心を持たないソフィーにさえ、本能的な恐怖を呼び起こさせた。

「ちよつと……マサト、やだ。そんな顔しないでよ」

黙っていたら、心臓に冷たい手が伸びてきたような気さえた。

初めて目にした杉田の異様な表情に圧されて半笑いになりながらも、ソフィーはまだ杉田に差し出した手を引こうとしない。

ふと見ると、いつの間にか彼の持つベレッタの安全装置が外されていた。

ごく自然に、長く細い指もトリガーに差し入れられている。

「やめてったら。こっちをそんな目で見ないで！」

一向に言うことを聞かない、と言うより耳に入れようとしないと
言った方が正しいだろうか。眉一つ動かさず、青ざめた唇を固く結
んだ杉田の不気味な沈黙は、じわじわとソフィーの心を侵していた。
暗く沈んだ黒い瞳に淀む怒りが、他の誰でもない自分だけに向け
られている。

その事実を、ようやく彼女は掴もうとしていた。

彼が銃口を向けている者を許すつもりがないことを。

命を奪うことを受け止めた上で、殺意を向けているということ。
優しく微笑んでいた青年の冷たく動きがない表情こそが、言葉な
くして語っているのだ。

「ね、ねえ。やめて、お願いだからやめて。マサトは優しいもの、
私のお願いは聞いてくれるわよね？」

今まで他者の命を、心を、欲望のままに蹂躪してきた女は、引き
つった笑みを浮かべて杉田の慈悲にすがろうとする。

が、彼にはこの哀れで、しかしこの上なく見苦しく媚びた命乞い
の声など、遠くから聞こえてくる雑音程度にしか思えない。

「やめて……やめて。お願い、助けて。命だけは助けて。撃たない
で！お願い、助けて！」

詰まっていたソフィーの声が、次第に言葉を聞き取れない悲鳴に
変化していく。

生まれて初めて直面した生命の危機に絶望し、半狂乱で髪を振り
乱している女の姿が晒されても、杉田の感情に波風は立たなかった。

この赤毛女は、自分の愛する者に銃を何度も撃った。

車が横転するような事故を起こさせた。

それ以前に身体を縛り上げて殴りつけるような真似をして、人道
的に許されない行いを重ねたのだ。

許せない。

許せる筈がない。

この女の存在が、この世にあつていいわけがない。

杉田の心は、それしか浮かんでこなかった。

憎しみと怒りの極色彩に塗りつぶされた心が一言、声となって外に溢れ出た。

「許すものか……」

彼の手の震えが止まる。泣き叫ぶソフィーの頭に向けられたベレッタの銃口の揺れも止まった。

ごく自然に、杉田の人差し指は冷たい鉄のトリガーを引いていた。同時に、腕全体に強い反動が走る。

これがソフィーの命を奪う行為だと、頭は嫌になるくらい機械的で冷静に受け入れていた。

しかし。

確かに発砲の衝撃を感じた彼の手から、ベレッタが消えた。

手そのものは、まだグリップを握った形で宙を掴んでいる。そこにあるべき黒い無骨な金属の塊が、忽然とかき消えたのだ。

今し方自分が下した決断のせいで、全てが現実ならざるものかのようになり、ぼんやりとしか知覚できない。焦点がずれた杉田の黒い瞳は、空になっている右手からソフィーへと着地点を変えた。

すると、ソフィーまでもが消えていた。

うるさく喚いていた赤毛女の姿は、そこに立っていなかったのだ。代わりに、ハイウェイのライトを受ける黒っぽい別の影が同じ場所にうずくまっている。

突如として現れた新たな人影が歪に見えるのは、地面に膝をついて、腕に抱えた赤い髪の女を地面に横たえようとしているからだっ

た。

「……先生」

そこから、ひどく懐かしい声が出た気がする。

突然ここに割って入ってきた声の主は、ソフィーらしい人物を地面に置いてから立ち上がった。

濡れた身体が小さく、細く、髪は黒く見える。

「み……」

意識せずに呼ぼうとして、声が詰まった。

名前の途中までを耳にした人物が、ゆっくりと顔を上げた。

横に下げている片手を胸まで上げ、そこに握っていた黒いものを両手に持つ格好となる。

彼女は、左手に掴んでいたベレッタの撃鉄を慎重に戻していた。

上がりかかった撃鉄が小さな手に深く食い込んで、ひどい傷を作っているように見える。雨に混ざった鮮血が流れ出し、白い肌を毒々しく彩っていた。

ベレッタの安全装置がかちりと音を立ててセットされ、彼女の手が背中に回される。ジーンズのウエストにベレッタを差し入れたのだろう。

水に濡れた草を踏む足音が更に近づき、杉田の目前で止まった。

汚れ、びしょ濡れの服を肌張りつけ、寒さに凍え、暴力に耐えた、少女のような姿のFBI捜査官。

疾風の如く駆けつけた彼女が、発砲寸前となったベレッタの撃鉄の間に手を差し入れて発射を食い止め、杉田の手から銃身をもぎ取ったのだ。

そして喚き続けていたソフィーに当て身を喰らわせて、意識を奪ったのである。

先にハイウェイから外れて横転した車からすぐさま脱出し、走って後を追いかけて来なければ、こんな芸当は不可能だ。医者である杉田に武器を持たせて誰かの命を奪わせたくないという強い想いが、彼女に人間離れた行動を取らせたに違いない。

いくらサイボーグとは言っても、デリケートな女性の身であるのに。

目に見える怪我はしているように見えないが、車が横転した際に身体を打ちつけた激痛はあっただろうに。

自分のことは構わずに駆けつけてくれ、撃鉄が手を鈍く裂く苦痛も意に介さなかったのだ。

その彼女が、大きな瞳を見開いたままで黙っている。

瞼の縁に涙を溜めた未来は何も言わずに頷き、杉田へゆっくりと

両手を広げて見せた。

ふらりと、冷たい水滴を纏った若き医師が前に踏み出した。彼の痩せた身体が、膝を折って未来の肩へ倒れ込んでいく。しかし、その背中はずっかりと細い腕が受け止めていた。

「もう大丈夫だよ。大丈夫だから……」

精一杯の優しさを湛えた囁きが、耳元から杉田の中に忍び込む。最早立つ気力もない身は、未来が支えてくれていた。

誰よりも会いたいと願った愛しき者の息遣いも、顔を寄せた髪から感じるかすかな匂いも、冷たい服の下から伝わる温もりも、全てが懐かしい。

夜明け前、ハイウェイの光もろくに届かない荒れた大地で抱き合う二人の身に、パトカーのサイレンが遠くから響き始めていた。

2041年12月7日。

ヴァージニア北部で立て続けに被害者を出し、全米を恐怖の渦に叩き込んでいた2つの連続猟奇殺人事件は、2人の犯人が同時に逮捕されたことにより解決した。

ただし、彼らがそれぞれの事件の犯人というわけではない。FBIによつて身柄を拘束されたこの一組の男女は、恐ろしいことに双方の事件の共犯者だった。

実質的な実行犯であった男の名はアンドリュー・フランクリン。38歳のギリシャ系アメリカ人である。

彼は一見すると身なりが小綺麗でほっそりとした体格を持ち、笑顔が魅力的とさえ映る、人好きのする人物だ。

が、その外見に騙されてはならない。

中流家庭に生まれながらも母からは育児放棄され、実の父親からは「妹と人形遊びするしか能のないおかま」と罵られて精神的に虐待され、更に継父からは性欲のはけ口にされて最悪な子ども時代を過ごしたと、彼は主張する。

孤独でまっすぐな心を知らないアンドリューは、幼い頃から口がうまく病的な嘘つきで、周囲から常に浮いた存在だった。

遊び相手が妹以外ろくにいなかった彼と、それでも仲良くしていたのは2歳上のアジア系の少年だったが、この時にレイプ紛いの肉体関係を迫られることも度々あったという。このように歪んだ環境で幼年期から思春期を過ごし、周囲の大人から救いの手を差し伸べられることもなかったアンドリューの精神は、成長とともに輪をかけてまともではなくなっていたのだ。

常に劣等感に苛まれていた少年が青年になったとき、その内面に渦巻く愛への渴望もまた、歪んだものになっていた。

彼が最初に人を殺したのは33歳の時、2度目の結婚の後に3人

目の子どもも父親になった2036年のことである。

自前の店あるスーパードで万引きしたアジア系の少年に、自分の相手をすれば警察に通報しないと脅して暴行をはたらき、口封じの目的で首を絞めて殺害した。しかし、燃やされてハイウェイ脇の雑木林へ遺棄された死体は完全に白骨化するまで発見されず、容疑者不明、被害者の身元も特定されずに未解決となったのだ。

初めて犯した殺人で自分が捜査線上にすら浮かばなかったことが、この後5年に渡り、身の毛もよだつ犯行を許すきっかけになったこととは言ってもない。

そしてその陰にあったのが、アンドリューの愛人でありもう一人の犯人であるソフィー・アイコ・フジミの存在である。

21歳の日系アメリカ人である彼女は、わざわざ漆黒の髪を赤く染め、グリーンのカラーコンタクトレンズでエキゾチック美しさを捨てているのが特徴だ。これは東洋人が珍しい地域に育ち、近所の子供たちからは外見の違いをからかわれたため、アジア人的な外見を極端に憎悪するようになったことに起因する。

一方でソフィーは、フランス系の血筋である母に似た容姿を持つ弟や他の子をいじめ、火遊びをしたり、友達の家で盗みを働いてはトラブルを起こして周囲を騒がせていた。

そのせいで同年代の子どもたちから距離を置かれた彼女は、年上の子どもたちとつき合うことが多いませた少女であり、性的にも早熟だった。特に11歳で15歳年上の男性とのセックスを経験してからは、「悪い連中」との付き合いが濃厚になっていく。

勉強嫌いのソフィーが入学した底辺のハイスクールでは、ドラッグとアルコールの金欲しさに売春を繰り返す、わずか8ヶ月で更正施設に半年間送りとなったことも、彼女の人格が根本から変えられないことを示していたと言えよう。

そして更正施設で彼女が得たのは、本当はずば抜けて高い知能の使いどころを察する要領の良さと、必要とあらばいくらでも外見を取り繕う抜け目のなさであった。

模範生として施設を出たソフィーが奨学金で大学に通うまでになると、彼女にとっては最高であり、周りの人々にとっては最悪の變化が訪れる。

即ち2038年の秋、大学のカフェテリアの出入り業者となっていたアンドリューとの出会いだ。

ソフィーが社会的地位と金を持っている彼に目をつけて愛人関係に発展するまで、その時間はかからなかったのだ。

アメリカ犯罪史有数の殺人カップルが誕生したことを、主は決して望んでいなかったと思いたい――

未来は軽く溜息をつくと、空間投射型モニタに表示されていたブラウザ画面を閉じた。けばけばしい原色と細かいアルファベットに彩られたページが目の前から消え失せても、ちかちかとした残像が視界に残って鬱陶しく感じる。

「ふうん。こんな短期間で、どのメディアもよくこれだけの記事が書けたもんだね」

瞳を閉じて目頭を軽く指先で揉みながら零すと、テーブルを挟んではす向かいの席に座っているジャクソンが紙コップのコーヒーを飲んでから応えた。

「犯人の2人が弁護士を通して、同じ文面のメールを各所にばらまいているんだ。基本的な情報は同じでも、後は勝手な取材や憶測で話に尾ひれがついて、一人歩きしてるんだろう。これじゃ、何が本当のことかなんてさっぱりだ」

同僚の黒人捜査官も未来と同じ意見らしく、やれやれと顔に書いてある。

未来が今まで閲覧していたのは、ニューヨークタイムズやユーエスエートウデイ、NBCなどの大手新聞やニュースのWebサイトである。

今日は12月12日で、アンドリューとソフィーが逮捕されたのが5日前のことだ。

連日ニュースで特集を組まれていた2つの連続殺人犯がFBIによつて逮捕されたというニュースは、一瞬にしてアメリカ全土を駆け巡った。複数の凶悪事件を同一の犯人が犯していたという前代未聞の事態だったことが騒ぎに拍車をかけ、CVCでは主に特殊捜査チームの面々がマスコミの対応に追われることになった。

幸い戦闘チームの存在はその中にも表に出ることがなく、犯人逮捕の当日に収集された証拠類の整理に黙々と当たれたことは、未来の心理的な負担を軽くしてくれた。大勢の記者に囲まれてあの犯人たちのことを詳しく語らねばならない状況など、考えるだけでもぞつとする。

今は彼女の視点カメラが記録していた画像や特殊通信の音声部分、当日着用していた衣服に付着している微物、押収されたロボットのアームなどの分析を進めている最中で、戦闘チームが積極的に事件に関わる部分も大分少なくなってきた。

未来がソフィーの部屋で見つけたアネモネに結びつけられていた髪の毛について、DNA鑑定により杉田のものであることが断定されたことを始め、有力な証拠も既に幾つか挙がっている。

アンドリユーの自宅からブラックヘア被害者のPMVカードが押収されたこと、彼が店長をつとめるスーパーマーケットの冷凍倉庫にあったビニールシートの表面から、複数の人間の皮膚組織や血痕が見つかったことが特に大きい。

ほぼ同時にソフィーのアパートにも捜索が入っているが、こちらからは一目見て犯行に直結しているとわかる証拠が出てきていないため、主に玄関に積まれていたごみや集塵機で集めた微物の分析が中心になりそうだった。

2つの事件で押収された証拠品で大きなものはロボット本体から小さなものでは床に積もった埃の一粒まで、実に数が多い。特殊捜査チームの担当者たちは小躍りして喜んでいるが、分析を担当するチームの苦勞が忍ばれる。

きつと彼らにも、電子顕微鏡のスクリーンや各種分析機のコンソ

ールから短時間でも解放される時を待ち詫びていた者が多いのだろう。現在の時刻は午後2時を回ったところだが、それぞれが一息入れようと思いつつ時間が重なったらしい。CVC各チームの面々が休憩室のあちこちのテーブルに散らばってコーヒーを飲んだり、スナックを食べたり、タバコを吸ったりと、思い思いに寛いでいる姿が見える。

「フランクリンもフジミも、自分たちが注目を浴びるのが何よりもエキサイティングなようよ。そのうち、留置場からインタビューを生放送でやれとも言出しかねないわね」

と、紙コップに注いだコーヒーを手にしたエマも、未来の隣の椅子について話に加わってきた。

皆が飲み物を傍らにしているクワンティコのCVC本部休憩室、通称「ルーム」は相変わらずタバコとコーヒー、食べ物の匂いがごちゃ混ぜになつた独特の空気がこもっている。

犯人逮捕後数日は療養を兼ねた自宅待機を言い渡されていた未来には、この鼻につく匂いも落ち着きを取り戻させてくれる要素となっていた。

「けどさ、あの2人はお互いが勝手にやってるんでしょ？もしインタビューが実現したとしても、自分のことを語るっただけで済むのかな」

「まさか。あいつら、取り調べの最中から片割れに罪を被せるのに必死なんだ。インタビューだろうが何だろうが、言うことは変わらんよ」

未来がモニタの投射機を折りたたんで携帯用ケースに入れていると、今度はウオーリーが同じテーブルに近寄ってきた。特殊捜査チームを束ねる彼はいつもどこことなく疲れた顔をしているが、ここ数日のマスコミ対応で更に疲労が蓄積しているような印象がある。

ウオーリーが隣の椅子を引いて座るのを見ながら、今度はエマが呆れた表情を浮かべた。

「相手を庇うってことなんか、最初から考えていないのね」

「けど、あの2人は基本的に自分にとって有利になる嘘しか言わないようなものじゃない。メールでばらまいてる子ども時代のことと
かって、どこまでが本当なのかな」

「こっちでも調べ始めてはいるが、ある程度の信憑性はありそう
なんだ」

未来がふと疑問を口にしたとき、パイプを指に挟んだポールが口
を挟んできた。

「とは言っても、フランクリンの母親がやっと見つかって、僕のチ
ームの捜査官がまだ少し話をしたくらいだけだね。これから人間関
係を色々探って、より深く調査をしていかなきゃならない。この事
件の裏には、隠された事実が多そうだから」

「余罪がありそうだと言うこと？」

パイプから立ち昇る紫色の煙の向こうで、エマの問いにポールが
頷いた。

「可能性は否定できない。ただし捜査で事実関係が認められたもの
以外の殺人について聞くのは、彼らと信頼関係を築いた上でのこと
になる。慎重にやらないといけないのさ」

「それじゃあ事件に関することも、これからだんだんわかっていく
んだね。あの人形のこととか、どうして死体を傷つけたのかってこ
ととか」

「僕の推測ではあるけど、今出ている情報である程度の分析はでき
るんだ」

今まで積み重ねてきた経験と知識から、さり気なくそんなことが
言えるのだろう。心理分析担当のポールの言葉に目を丸くしたのは、
ふとした疑問を口にした未来だけではなかった。

「本当かよ？あんな不気味なことをやったのは、一体どういう心理
からなんだ？」

心理分析があまり得意でなさそうなジャクソンが、未来とともに
ポールへと視線を向ける。使い込んだパイプの煙をくゆらせ、ポー
ルはゆっくりと解説を口にし始めた。

「まず第一に、人形のこと。フランクリンは子どもの頃、妹と人形遊びをしていたのを父親に罵られていた。その頃何もできずにいた自分を、大人になっても無意識下ですつと憎んでいたんだ。誰かにその怒りを向けるのと同時に、人形を壊して置いて見せる。そのことで、過去の弱い自分自身をも葬り去ったつもりでいたんだろう」
彼が吐き出した薄い煙にくしゃくしゃの金髪が沈み、僅かに輪郭が滲む。

人間が他者に理由なき暴力を加えるとき、根底にはねじ曲がった欲望が必ず存在する。それは一朝一夕で表に出てくるものではなく、加害者の人生そのものを見返さなければその歪みを見破ることができない場合が実に多い。

彼らが人を殺めるに至るまでの途中で、どこかに殺人衝動を阻む壁を置くことは必ずしも不可能ではなかった筈だ。そのことは同時に、彼らの生涯において救いの手を差し伸べ、まともな人間としての感情を教えるべき理解者が必要だったことを意味している。

無論、全ての犯罪者に自分が間違ったことをしたという自覚があるわけではないだろう。

アンドリユーとソフィーが起こした2つの事件に限って言えば、どちらかがまともな良心を持ち合わせていれば、起こりえなかったはずだった。

特にアンドリユーのような、自らに対する憎しみという感情は、未来にも覚えがある。人は環境に左右されやすく、理性の裏で本能的な欲を御し得なくなる弱い生き物であることがわかるだけに、余計に恐ろしい。

アンドリユーと直接戦った上に殺されかけた未来は、彼から向けられた補食者の瞳を思い返すだけでもまだ背筋に寒さを感じるほどだった。

「よくはわからんが、人形が弱い自分を象徴してて、それを壊して見せつけることで満足を得ていたってことか？」

僅かに顔をしかめた未来を尻目に眉間にウオーリーが聞き返すと、

ポールはパイプをふかし続けながら、のんびりした口調を崩さずに返してきた。

「大雑把に言えばそういうことだ。フランクリンは被害者と人形へ、嘗ての弱い自分に対する怒りをぶつけていた。誰かを完全な支配下に置いた証を世間に見せつけたり、人形と全く同じ死体を遺棄することで、力を誇示しなかったんだ。そのことで、ある程度の欲求を満たしていたんだろう」

ポールがエマの隣の椅子を引いて座り、灰皿を手元に引き寄せる。パイプを逆さにして灰をあけるポールの手元を見つめながら、エマが確認するように言った。

「ある程度つてことは、完全に満たされたわけじゃないのね？」

「恐らくはね。そこで出てくるのが、ブラックヘアの事件だ。こっちにもネクロフィリア（死体性愛）の色が強いけど、被害者は全てアジア系の男性だろう？彼はティアーズの犯行で満たされない欲求のはけ口を、こちらに求めていたんじゃないかと思うんだ」

「どうして、わざわざアジア系男性を被害者にする必要があったのかしら？」

「フランクリンの少年時代の話を聞くと、彼は思春期にアジア系の少年にレイプ紛いの関係を結ばされることがわかっている。そこに起因していると考えられることはできるね」

「同人種への復讐ってこと？被害者が眼鏡をかけてるのも、もしかしてフランクリンをレイプした相手がそうだったからなの？」

「さあ。そこまでは、綿密に調査を試みなければ何とも言えないよ」

以前検死官をつとめていたエマは、犯人側の心理にも興味が深いのだろう。矢継ぎ早に質問を重ねてくる女性の同僚に、パイプを置いたポールが肩をすくめて見せる。

「けどよ、一人の犯人が種類の全く違う連続殺人を同時に犯すなんてことができるのか？そもそも、最初は全く別の事件だと思われてたっつのに」

ジャクソンが疑問を抱いた点について、未来はすぐさま別の要素に思い当たった。

「そこにあつたのが、共犯者の存在ってことなんだね」

彼女の鋭い突っ込みに、ポールがまだ熱いパイプを指先でいじりながら応えた。

「ソフィー・フジミは、犯罪学を専攻している学生だ。事件の質を全然違うものに見せかける入れ知恵や工作をしたのが彼女であることは、まず間違いないと思う。専門的な知識があれば、決して難しいことじゃないからね。しかしそれも、全てを隠蔽できていたわけじゃない。僕が現場写真を見て感じていた違和感は、そういう不自然さだったんだ」

「ひよつとすると、ロボットを使って一部の死体を始末することを考えついたのも、彼女なのかもな」

眉間に皺を寄せ、ウォーリーも自らの考察を口にする。

主犯のアンドリュー・フランクリンは店で日常的にロボットを使っているが、今の妻の父からスーパーの経営を継ぐ以前、ロボットの販売会社に勤めていたことがわかってる。

ただ、犯行の色を明確に分けるため、ソフィーが死体の処理方法として提案した可能性も否定はできなかった。

「こつちの記事には、被害者を選んだのも全部フジミだって書いてやがるぜ。フランクリンの情報しか元にしてないようだがな」

携帯端末を開いたジャクソンが手早く確認したのは、ソフィー・アイコ・フジミがPMVカードの顧客情報を悪用し、ブラックヘアの被害者を選び出していたという記事である。

ソフィーを個人的に知る未来が感じるのは、あの赤毛女が被害者の全てを選定していたという話は怪しくはあるが、全てが嘘というわけではないだろうということだ。快樂のためにアジア人男性をさらって犯し、最終的に殺害していたアンドリューが、他人が連れて来た相手に満足を覚えるとはとても思えないのだ。

それを象徴しているのが、エミリオの事件である。

恐らくエミリオはあのトレーラーハウスでひと商売した際に、アンドリューの戦利品であるPMVカードの束を発見したのだろう。盗みを働くつもりで部屋を物色していた可能性もある。彼はランチエスター捜査官の情報提供者だったのだ。犯罪に関する情報には、日頃から鼻が利いた達いない。故に、他人名義のカードが全てブラツクヘアの被害者のものであることに気づいたのだろう。

その現場を運悪くアンドリューに見つかったのか、カードを種にしてアンドリューをゆするうとして殺されたのかは定かではない。事件の質が他と違ったのは、予定外に犯された殺人だったためである。

それをソフィーがティアーズの被害者に仕立てることを思いついたというのが、一番しっくりくる仮定だ。

だとすれば、彼女は共犯者ではなく首謀者と位置づけにすることが相応に思える。

あの不自然な緑色をした瞳を思い返し、未来は嫌悪感を隠さない表情で言った。

「ソフィー……フジミは、フランクリンが何かやってるのを見るのが好きだったみたい。あくまで、目立つところで自分の手を汚さないようにさ。ドクターに目をつけたのも、私が悩んだり、苦しんだりするのを見たかったからじゃないか、っていう気がするんだよね」
「怖いわね、歪んだ感情っていうのは。誰でも、何かのきっかけがあつてそうなるかも知れない可能性があるのには、ぞっとするわ」
仲間からの支援が及ばない場所で、犯人の2人と孤独な対決を強いられた未来の心情を思いやっているのだろう。エマが向けてくる視線は気遣わしげだ。

「結局、フジミはラルフが言った通りの女だったってことか。いみじくも、奴が一番あの女のことを理解してたのかも知れねえな」
ジャクソンはソフィーと直接対峙してないが、その恐ろしさは実感できているらしく、零した感想は重い溜息に混ざっている。

結局ラルフはエミリオの死亡推定時刻当時、本当にインディアナ

ポリスへ行っていたことが確認されていた。ストーカー扱いされていたかの男は、今は麻薬所持の現行犯で逮捕されたため留置場の中で日々を過ごしているが、ある意味一番安全な場所にいるとも言えるよう。

ソフィーは、自分に危害を加えようとする異性さえ利用する計算高さで周囲の同性を味方につける口のうまさ、演技力を兼ね備えた女だ。

捜査官としては未来より上のキャリアを持つジャクソンも、ここまでの性悪女は未だ報告書の中でしかお目にかかったことがない。その分、女の犯罪者が持つ強烈な不気味さを無意識に恐れているのかも知れなかった。

「それにしても、心理分析チームの奴等はある連中と腹を割って話さないとならないのか。俺は真つ平ごめんだぜ」

「けど、そのためにミキもジャクソンも身体を張ったんじゃないの。全ては、事実を明らかにするためなんだから」

ジャクソンが首を振ってすっかり冷めたコーヒーに口をつけると、エマが2人のサイボーグの顔を交互に見やっつて微笑んで見せた。

「ま、俺はあんなのが操縦するロボットなんざ、軽く一ひねりだったからな。CVC初の実戦で気張ったが、拍子抜けしちまったよ」

軽く一ひねりとは言い過ぎであったが、彼がフランクリンの操るロボットを倒すのに数分もあれば十分だったことは事実だ。ただ、機関銃の連射にも耐えうるオーデインを着用したサイボーグが相手だったのだから、ハンデがあり過ぎる戦いだっことは否めない。

それでも、短時間で重機ロボットを片付けることに成功していたという事実にはジャクソンが胸を張った時である。

「そういう口は、オーデインに傷一つつけずに戦えるようになってから叩くんだな」

ぼそりとしているが的確な突っ込みが横合いから上がり、ジャクソンの身体が硬直した。

決して大きくはないのにその場を制圧できる威圧感のある声の主

は、戦術担当のバーニイである。彼はジャクソンとともに犯人のト
レーラーハウス付近に赴き、後続の警官隊や特殊捜査チームとの連
携を図った功労者の一人であったが、そのこと表立って知っている
人物はごく少なかった。

普段から目立つことを嫌い、仕事以外で発言することが少ない彼
の言葉に驚いた一同が一齐に振り向いていたが、本人は悠然と皆の
顔を見渡している。

「……いつからいたんだよ」

その中には勿論、ばつが悪そうなジャクソンも含まれている。

彼が呟くのも気にせず、バーニイは未来に無表情に声をかけた。

「ミキ、傷の具合はどうなんだ？」

「手の裂傷は少し深いところまでいきましたから、完全回復までは
あと何日かかかりますけど、それだけです。他はどこも大した怪我
をしてませんし、来週から任務に戻れると思います」

バーニイは、これまで積極的に未来に話しかけようとするそぶり
は見せなかった。心配そうな様子を見せていなくとも、突然気遣う
言葉をかけられると却って落ち着かない。

杉田の救出劇の最後、未来は手を負傷していた。杉田がベレッタ
を撃とうとした際に撃鉄に手を挟んで発砲を食い止めた際の傷で、
かなり深い裂傷である。とは言っても、予備の手につけ替えなくて
はならないほどの傷ではなかったため、縫合して処置したのみだ。
経過は良好で他の擦過傷や打撲傷、特に顔は内出血の痕が黄色っぽ
く残っているだけだった。

「そうか。しつかり養生しておけよ」

ありのままを伝えた未来に頷いて見せると、バーニイは更に気遣
う言葉を残してぶいと皆に背を向ける。

「現場に駆けつけてくれた時と言い、今と言い、バーニイは相変わ
らず神出鬼没なんだから。びっくりするよ」

去り行く後ろ姿を見つめて未来が呟いたのは、驚きで数度目をし
ばたかせて肩の力を抜いてからのことであった。

「あれが、彼の精一杯の気遣いなよ。それに、彼の言う通りだわ。貴女のメデイカルチェックはもう終わったんだから、早く家に戻りなさいな。ドクターも待つてるでしょうに」

不器用とも言えるバーニイの感情表現に、エマは慣れているらしい。

未来はまだマックスから言い渡された自宅療養期間中の身で、週に一度の身体機能確認のために本部まで出てきただけなのである。

エマに追従したジャクソンも、慌てて頷いた。

「新しい任務に就くのもいいが、ミキにはまだまだ今回の事件でやることが残ってるんだからな。早く治って、後始末に戻って来てくれよ」

ジャクソンが言っている後始末とは、裁判のことだ。

未来は2人の犯人と戦った捜査官であるし、杉田は何と言っても唯一生存できたブラックヘアの被害者である。検察側からは双方が裁判で証人として出廷することを強く要望されているが、未来としては複雑な立場であった。

「うん……これから先も、まだまだ長い戦いになりそうだからね」

苦笑した未来の口調は、今までより明らかに重くなっている。

FBIの捜査官である自分とはかくとして、杉田を証言台に立たせたくはない。

それが、彼女の正直な気持ちであった。

杉田は性犯罪の被害者だ。

裁判に必要な調書を作る際にも、証言台で陪審員に証言するときも、事件で自らの身に加えられた暴行のことを何度も詳細に説明しなければならぬ。そして、弁護士や陪審員から心ない質問が浴びせられることも覚悟せねばならないのだ。

レイプの裁判に何度も立ち会った未来は、被害者が裁判でどれだけ傷つくかを十分過ぎるほどに知っている。被害者は裁判で2度目のレイプを経験すると言っても過言ではないことも、よくわかっていた。

だから余計に、自分にとって最も大切な異性に証言させたくなかった。

それがたとえまだ見ぬ被害者を守る大義や正義のためだと理屈で理解できることであっても、感情的には許せない。

未来が沈黙して話題が途切れたのを機に、ウオーリーが席を立った。彼女の心理的負担に、気を使ってくれたのだろう。

未来の方へ顔を寄せ、エマが低い声で話題を変えた。

「あれから、ドクターの様子はどうなの？」

「病院から戻ってから、殆ど寝室に籠もりつきりなんだよ。でも、寝てるってわけでもないみたい。起きてはいても一日中陽にも当るうとしないし、食事もあんまりしてないの。誰かと話をしようって気にもならないみたいだし」

エマに答えた未来の口調は、更に沈んだ調子に変わっていた。

杉田は12月7日早朝にウオーソーで保護された後は、健康状態の確認と証拠採取のためリッチモンドのハンター・ホルムズ・メデイカル・センターに1日入院していた。

性犯罪の証拠採取には、通常だとレイプキットと呼ばれる証拠採取の器具がまとめられた専用キットが使用される。ただしこれも、使用時に担当医師の無遠慮な会話が被害者に筒抜けになるなど、使用者に対して十分な配慮が成されているとは言いがたいものだ。

付き添った未来が強固に主張し、担当医師を女性にしてもらうといった気配りをしたつもりであったが、特に問題はなかったと自信を持って言えるわけではない。

暗く重くなりがちな話題に、未来と同じ犯罪被害者の家族という身であるジャクソンが口を挟んできた。

「ドクターは、家族と会ったんだろ？ 確か、ワシントンまで来てるって聞いたぜ」

「会うには会ったけど、多分30分も面会しなかったと思うよ。ドクターのお母さんとお姉さんも、あんまりしつこく話そうとはしなかったみたいだから」

もし自分が同じ立場にあったなら、恐らく家族には羞恥と情けなさでろくに話ができないだろう。

未来がそう感じるのには最も一般的な感覚の筈であり、その意味においては皮肉にも、杉田は恵まれていると言うこともできた。

「無理もないな。何とか命は助かったとは言っても、ドクター・スギタが受けた精神的なダメージは計り知れない」

一般的な人間心理にもある程度詳しいであろうポールが深く頷くと、心配そうな色がジャクソンの表情に上積みされた。

「今日は、ドクターに何も言わずにこっちへ来たのか？」

「一応寝室に声をかけては来たよ。でも、返事はしてくれなかったと思う。本当に寝てたのかも知れないけど」

「彼は、精神科医からのカウンセリングは受けているのかい？」

あくまで冷静な態度を崩さずに、ポールも話題に入る姿勢を見せ始める。

「今、信頼できる医者を探してるところ。アメリカは性犯罪被害者のアフターケアが進んでてありがたいけど、信用できるところはやっぱり限られると思うから」

未来が答えたところで、エマが患者に話しかける医者調子になって問いかけてきた。

「貴女とドクターの関係に、何か変わったことはある？」

「さつきも言った通りだよ。ドクターは、私を含めた誰とも話したくないみたい。迂闊に話をして、取り乱したりしたくないって思ってるからなのかも知れないけどね。でも、部屋に一日こもってるくに食事もしないんじゃない、どんどん身体も心も弱っちゃうんじゃないかって」

「難しい問題よね。私たちに、何かできることがあれば……」

「私にも、一体何がどうしていいんだかわからないの。何を言っても、彼を傷つけるんじゃないかって気がして。それが怖くて話をすることができないし、何かしてあげたくてもできないでいるんだよ」

それまでエマと目を合わせていた未来が、不意に視線を外して目

を伏せた。

いつも生き生きとしていた黒い瞳が、重くテーブルの上を彷徨っている。

「私、これ以上彼に辛い思いなんかさせたくないの。もし誰かが彼を傷つけようとしたら、私がそんなことは絶対に許さない。でも…」

「…」
呟くように続けていた未来の声が詰まった。

一緒に息まで数秒間止めていたらしい彼女は、頬に零れ落ちてきそうな涙をぐつと堪えていた。

「私、どうしたらいいのかな。何とか彼を助けたいのにさ。何をしてあげればいいかわからないって、そんなの情けないし、悔しいよ。私が一番側にいるのに、何の役にも立てないなんて。私じゃ、彼を助けられないの?」

赤くなつた鼻をすする未来の小声ながらも悲痛な叫びには、その声を耳にした者の心を揺さぶってひびを入れるかのような苦しみが滲み出している。

愛する人を助けたいのに、助けられない。

すぐそばにいるのに、隣にいるのに、未来は杉田の心と彼が負つた傷の痛みが手の届かないところにあると感じているのだ。

これほどの無力感に苛まれたことは、今までに一度もない。自分が本当に杉田を救うことができるかどうか、彼と再会して以来、自らに問いかける時間は長くなる一方だった。

考えれば考えるほど自分が頼りなく、弱い存在に思えてならなくなる。

まさかCVCの本部で感情をコントロールできなくなるとは、思つてもみなかった。

エマは何も言葉を発することなく、ただ未来の小さな背を両腕の中に抱きしめた。

ジャクソンと同じサイボーグであり、屈強な兵士20人分の強さを持つ筈の身体が、今は悲しみに打ちひしがれて震えている。未だ

少女の繊細さを残している姿が誰の目にも儂く、脆い存在に見えた。そして、それを捜査官としてあるまじき弱さだとなじれる者は、ここにいなかった。

「確かに、ドクターが心に受けたダメージは深刻だ。身体に受けた傷以上にね。性犯罪の被害者が持つ痛みにも、男女は関係ないんだから」

エマに抱きしめられながら嗚咽を抑える未来を黙って見守っていたポールの口調は、やはり優しげに諭す印象がある。それにつられたのか、ジャクソンも普段とは違う話し方をしようとしているようだった。

「なあミキ、今お前にできることはなくても、絶対にやっちゃいけないことは幾つかあるんだ。よく聞いとけよ」

黒人の同僚捜査官が未来へ穏やかに語りかけたのは、エマが時を見計らいそつと身体を離れた時である。軽く咳払いをしてから、彼は未来が首を縦に振ったのを確認した。

「一つは、男なんだから傷ついたりしてないだろうとか、生きてたんだからまだいいとか、いつまでも過去のことに捕らわれるなとか……とにかく、本人よりも上の立場からものを言わないことだ。相手の傷を抉ることになるから。わかるよな？」

まだ目尻に残る水滴を指先で拭っている未来が、ジャクソンの顔を見ながら首を縦に振る。相棒が徐々に落ち着きを取り戻しつつここに少しだけ安堵して、彼は続けた。

「それから、下手に励まさないこと。多分、今のドクターは生きているだけでも苦しい筈なんだ。頑張れとか、傷は時間が癒してくれとか、迂闊に言うなよ。ぎりぎりのところで精一杯やってる人間に、それ以上の負担をかけるような真似は駄目だ」

ゆつくりと述べるジャクソンは、一言一言を噛みしめるような調子になっている。

いつも陽気な彼も、少年の頃に姉をレイプされ殺されるという十字架を背負わされた身だ。その言葉に、事実を知っている者だけが

込めることができる想いが秘めていることは、誰が聞いてもわかる。真摯な眼差しで未来を見つめるジャクソンに何度も頷いて、ポールも言葉を足してきた。

「ミキ。君はそうやって、ドクターのために泣くことができる優しさを持っている。けど、その優しさが却って彼の感情を逆撫でしやしないかって、それが不安なんだろう？自分まで泣いたりしたら彼の重荷にならないか、彼が自分のせいでミキを悲しませてしまったと思ってしまうのか、とか」

ポールは普段から浮世離れした印象があり世事にも疎い男だが、人の心の動きに詳しい彼がかけてくれる優しい言葉は、こういうときは本当に頼りになる。再び未来がこくと頷くと、よれよれの白衣を着たポールは、耳の横に垂れるくしゃくしゃの金髪に指を絡ませながら言った。

「けれど、その思いやりはとても大切なんだよ。今の涙は、ミキが真剣にドクターの気持ちに向き合おうとしている何よりの証じゃないか。少なくとも、君は彼のことをきちんと理解しようとしている。肝心なのは、相手の痛みを理解して受け入れようとする、その姿勢を見せて安心させてあげることなんだ。側に寄り添うだけでもいい。彼は何も悪くないってことを、自分の言葉で伝えてみてごらん。恐らくドクター・スギタを救う一番の力になれるのは、ミキの筈なんだ。困ったことがあるなら、僕たちに遠慮なく言ってくれ。何でもするよ」

彼の語調は相変わらず学生にものを教える大学教授を思わせるが、穏やかな人柄が表れている話し方は、滅多に崩れることがない。

その場の空気が温められて軽くなったのを機に、ジャクソンも力強く頷いて見せた。

「そつだよ！独りぼっちじゃないって伝えるだけでも、心が随分楽になるもんなんだ。ミキだって、一人じゃねえんだぞ。お前の後ろには、いつだって俺たちがついてる。それを忘れてもらっちゃ困るぜ」

「貴女は間違つてないのよ。それに、彼も貴女も私たちの大切な仲間なんですもの。直接何かできることはなくても、全力で貴方たちを支えるって約束するわ」

ジャクソンに続いてエマも、微笑を浮かべている。

一人じゃない。

後ろには、頼もしい仲間たちがいる。

安心して背中を預けられる、CVCの皆が。

遠く日本を離れ、嘗てのプロジェクトメンバーとも離れ離れとなった未来に、これほど心強いことはない。

人が支え合うなど当たり前だと常日頃は気にもしないが、本当に心が弱った時に助けとなるのは人間同士が作る絆であるということが、確かな事実なのだとは強く意識する。そして、自分はこの新天地たるアメリカで本当にいい仲間と巡り会えたのだと、誰かに感謝もしたくなる。

生粋のアメリカ人であれば、多分神に感謝の祈りを捧げるところなのだろう。

未来の大きな黒い瞳から、今度は温もりに震える喜びの涙がこぼれそうになった。

「……ありがと、みんな」

「なに、気にするな。俺たちはまだまだ、これから物騒な相手と戦い続けなけりゃならねえんだからな。助け合うのは当たり前だろ。」

トリスや隊長やバーニイだって、そう思ってるんだからな」

未来が一言だけ低く呟くのがやつのところなのに、ジャクソンが背中を叩いてくる強さは普段通りに容赦がない。

だが、思わず咽そうな彼の一撃も、今日はさほど気にならなかった。

「そうだ、忘れるところだったわ。貴方達へのクリスマスプレゼントに、ポインセチアの鉢植えを買っておいたのよ。帰る前に、私のオフィスへ行きましょう」

続けてエマが未来の肩に置いてきた手は、勢いをもたらすジャク

ソンとはまた違い、どこか安心感を感じさせてくれる。

彼女が選んだポインセチアは、赤と緑でリビングルームを明るく彩ってくれることだろう。植物好きの杉田にとっても、うってつけのプレゼントだと言えた。

同僚のことをよく理解している理知的な面影を持つ女性に、未来は深い尊敬と感謝の念を覚えずにはいられなかった。

未来がクワンティコから戻ってきたのは夕方5時、すっかり辺りが暗くなつてからだつた。白木の小さな自宅横にあるガレージに、代車として貸与されたシルバーのフィエスタを入れてから後部座席に回る。そこからコートと赤い大きなリボンのついたポインセチアの鉢を引っ張り出し、玄関ポーチの方に向き直ると、木製の柵に巻きつけたささやかなクリスマス用のライトが静かに光っているのが見えた。

最近外出するときは杉田と2人でこの車に乗ることが多いが、彼は決して自分で運転しようとはしなくなり、後部座席に頭を突っ込むようなこともない。

彼がソフィーとアンドリユーに拉致されたのが運転中で、途中縛られて後部座席に寝かされたことの後遺症なのだ。杉田の車が未来の車とともに証拠品として押収されているのも、不幸中の幸いだったと考えるべきだろう。車が手元に戻ってきたとしても、お互いにもう2度と乗るつもりはなかった。

未来は寒さに身震いしながらポーチまで小走りに行き、一度玄関のベルを鳴らしてから防犯装置をアンロックしてドアの鍵を開けた。いきなりドア付近でがちゃがちゃと音を鳴らさないのも、物音に対して過敏になっている杉田に対する配慮である。

玄関のドアをくぐっても、未来を迎えたのは外と同じ暗闇であつた。

リビングに明かりはついておらず、冷え切った室内の空気にも動きがない。恐らく、杉田は一日寝室とトイレの間を行き来するだけだつたのだろう。

温かさが無いリビングに未来が漏らした溜息が虚しく響き、直後に蛍光灯の明かりが灯される。濃い色の影がフローリングの床に落ちると、未来が抱えているポインセチアの赤と緑が眩しく感じられ

た。

適当な大きさの皿を探して、ビニールのラップがついたままの鉢をダイニングテーブルに置き、冷蔵庫を覗く。案の定、同居人の昼食用として用意しておいた白身魚の照り焼きや酢の物が、手をつけた様子もなくそのまま残されていた。

小さな棘が胸に刺さった気がしていた。

杉田の辛い気持ちは理解できるが、周囲の人間も傷つき疲れているのは同じなのだ。

特に未来は犯人と対決しており、ジャクソンが駆けつけるのがあと数秒遅ければ胴体をちぎられて殺される寸前の状態だった。また、ソフィーとのカーチェイスの際には車が横転し、並みの人間なら死んでいてもおかしくないぐらいの事故を起こしながらも、杉田のもとに駆けつけて彼を救った。

それを杉田が一言も労ってくれないのには、正直腹を立てたくない。

勿論、彼が今まともな精神状態でないことをわかった上でのことだ。

が、日常のごく些細なことに対しても怒りを覚えたその後、未来は自分自身に対して必ず激しい嫌悪の感情を感じる頻度が日に日に高くなってきていた。

被害者である杉田に見返りを求めるなどどうかしているとわかっているのに、どうしても感情がそれを許そうとしないのだ。

自分はそんなに浅ましい人間ではないと必死に否定しても、消せない負の感情がそこに存在する。

そのことが、彼女の精神を擦り減らしていた。

が、未来は冷蔵庫を閉めた後に強く首を横に振って、内側にへばりつく泥のような黒い思いを振り払ってから寝室へと向かった。

ドアの前に立って深く呼吸し身体の余分な力を抜いてから、軽くノックする。

「先生、起きてる？」

返事がなかったため声をかけるが、やはり反応はない。

脱いだコートを腕にかけた未来がそつとドアを開けて中に入ると、壁際がほの明るくなっているのがわかった。暖かい色の光を放つスタンドの明かりはついていて、その側でぼんやりとベッドに半身を起こすパジャマ姿の杉田がいるのが見える。

「ごめんね。もうちよつと早く戻るつもりだったんだけど、遅くなつちやつて」

明るい調子を作った未来がコートをハンガーにかけながら話しかけるが、若い医師はこれと言った反応を示さない。

眼鏡もかけずに宙を見つめつばなしの杉田は、自宅に戻ってもずつとこんな様子だった。

救出されてからもやつれた印象が変わっていないと言うより、状態が悪化したのではないかと疑うことの方が多い。もともと肉付きの薄い顔は一層頬骨が目立つようになり、肌の色も赤みが薄くなってきた気さえするのだ。

「この部屋、寒くなかった？何だったら、毛布を新しいのにするからさ、寒いと思つたら言つてね」

しかしそれもここ数日の寒さのせいだと思つことにして、未来は彼を気遣う言葉を口にし続ける。寒いと言えば、杉田がスエツト地のパジャマの上に何も羽織っていないことに、未来は今更ながらに気づいた。

「ほら、このままじゃ身体を冷やしちゃうから」

穏やかな笑顔で、未来が自分のベッドにあつたガウンを取ろうとした時である。

彼女の方は見ず、杉田が口を開いた。

「未来」

「なに？」

昨日一昨日から殆ど声も出さなかつた杉田の方から、言葉を発してくれた。

そのことに嬉々とした未来が無邪気にベッドに上がつて、彼の隣

まで行って顔を寄せる。

「僕は、どうして生きてるんだろう」

続いた彼の無機質な音声に乗った言葉で、未来の動きが止まった。細く息を飲む音が、杉田の耳元で上がる。

「僕なんて、あのまま殺されれば良かったのかも知れない。こんな風に、ただ何もできずに生きているだけの自分なんか、いない方がいいんじゃないかって言う気がするんだ」

馬鹿なことを考えるな。

未来は瞬間的にそう怒鳴り返したかったが、過呼吸になるほど息を吸い込んで耐えた。

彼の、誰よりも大切な杉田の言うことを頭ごなしに否定するといふことは、彼と言う人間そのものを否定することだと受け取られる危険性が非常に高い。故に、今は最もやってはならないことなのだ。けれど。

けれど、私のことも少しは考えて欲しい。

普段なら迷いなく口にする言葉を、彼女は精神力を振り絞って自らの中に留めねばならなかった。赤と黒の極色彩にまみれた頭の片隅で、自分の感情を替わりに表に出せる方法を探るが、そんなものはどこにもないと悟るのに必要な時間は、ほんの数秒もあれば足りた。

「……そんな……」

結局やっこの思いで未来が出したのは、平凡な一言だけだった。

「だって、そうだろう？こんな、汚れた身で……生きてる価値なんかないよ、僕は」

虚ろな瞳を隠そうともしない杉田が唇を動かす度に、心臓が切り刻まれるような鋭い痛みをもたらしてくる。未来が杉田を助けたことが、本当はとんでもない過ちであったのだという事実を突きつけられた気さえした。

彼を助けることが救いになるのだと固く信じて今日まで来たのに、それが根底から覆されるような態度だった。

そんなことはない、生きていけばいいこともきつとある。

だが、所詮痛みを知らぬ者から投げつけられる励ましなど、今の杉田に届くわけがない。

やはり未来ができるのは平凡な言葉を発することと、彼を抱きしめることだけだ。

彼女は若き医師の半身に両腕を回し、彼の存在全てを両腕に引き受けるつもりで受け止めようとした。

「駄目だよ、そんな風に考えたら。お願いだから、そんなこと言わないで」

自分がFBI捜査官などではなく、日頃から誰かを助ける看護師のような仕事に就いていたなら、もつと言いようがあつたのかも知れない。彼女は自分の貧しい語彙が悔しく、情けなかった。

「優しいんだね、未来は。けど……僕は、それが辛いんだよ」

しかし杉田の虚空を見つめる瞳は、大切であつた筈の未来を「自分以外の他人」としてしか映していない。

少なくとも、彼女はそう感じ取っていた。

心に灰色の霧が出て、希望と言う太陽の光を遮り、急激に温度を下げていくかのようだった。

「僕は自分がいることで、誰かに迷惑をかけたくないんだ。すぐに立ち直る勇気もないし、だからと言って自殺する勇気もない。僕がこんなに落ち込んだままじゃ、未来だって嫌になるだろう？ お互いにとつて、いい影響は何もないんだよ。何とか、楽になれる方法を考えたいんだけど……」

いくら杉田から否定の言葉が続いても、未来にそれを認めるつもりはない。

一方で明確に否定し返す術も見つけられない彼女は、ただ首を横に振り続けるばかりだった。

杉田は同じ男にレイプされた、性犯罪被害者だ。

同じ立場に立ったことがない自分では、彼の気持ちを本心からわかってやることができない。いくら彼のことを尊重し、大切に思っ

ているのだと口で言ったとしても、そこに込めた本当の思いが伝わることはないと思っただろう。

だからと言っただけで下手に同調し、あなたの辛い気持ちはわかる、だから頑張っただけで生きていこう、などという安易でお決まりの台詞もとても言えなかった。同じ犯罪に巻き込まれた身だから、同じように生命の危機に直面したからと言っただけで、捜査官と純粋な被害者とは天と地ほどの違いがあるのだ。

何と言えればいい？

どうすれば、彼に生きる希望を再び与えることができるのか？

それとも、もう彼と共に歩いていくという望みを諦める道しか残されていないのか？

もどかしさと自らに対する怒りで、未来の語調がつい荒くなった。「やめてよ！先生は悪くないよ。何も悪くないのに、どうして……どうしてそんなこと考えなきゃならないの？」

杉田の艶が落ちた黒髪に顔を埋め、呟いた未来の声が揺れる。自分に憤っても何の解決にもならないとわかっていながら、感情を止めることはできなかった。

「でも、もう消えたいんだよ……この世界から。何もかもが辛いんだ、本当に」

苦しげに返してきた杉田の言葉はどんどん弱くなっていき、最後は消えに入りそうな涙声となっていた。

肌色のすぐれない彼の手が、唇を噛んで身を震わせる未来の背中をそつと撫でる。

「ごめん、未来。僕が弱い男だから、君までこんな辛い思いをさせて。本当に、ごめんね」

「謝らないで。強くなかなかなくていい。先生は悪くないよ、悪くないんだから！」

未来が杉田を抱きしめる腕に力を込めると、堪えていた涙が彼女の白い頬を伝い落ちていく。杉田の着ているスエットの肩が、たちまち涙で濡れていった。

そのまま薄暗い寝室で2人の泣き声が重なったのが、どれぐらいの間かは定かではない。

未来が寝室をそつと後にしたのは、深夜も近くなつた夜22時を回つてからだつた。

お互いに涙を流して気持ちのある程度収めてから、杉田には枕元に置いてあつた精神安定剤と睡眠薬を飲ませてベッドに寝かせたのだ。未来は彼が眠りに落ちるまでずっと手を握っていたが、泣き濡れた頬と目は赤く腫れ上がったままだつた。

未来は普通ならもうとつくに夕食を済ませている時間帯だつたが、食欲は全くない。

彼女はクワンティコから帰ってきたジーンズとニット姿のままふらふらとリビングまで来ると、カウチに腰を下ろした。

「やだよ……どうすればいいの。誰か、教えてよ……！」

半ば倒れるようにソファーにどすんと身体を落とした未来が両手で顔を覆つと、その隙間から涙の雫が溢れた。

血を吐くような呻きを一人漏らしても、胸を刺す痛みは去ることを知らず、彼女の全身をじわじわと蝕んでくる。

今はまだ信用できる性犯罪被害者のアフターケアを担う病院を探しているところだつたが、果たしてそんな悠長なことをしているのだろうか。

今の杉田は最低限の用事を除いて殆ど外出できないし、自分が受けた暴力のことに向き合えるようにならなければケアセンターに通つても意味がないとはわかつているが、うかうかして手遅れになることが一番の懸念であつた。

もし未来が仕事から帰ってきて、杉田が自殺していたら。

物干し用のロープで首を吊っていたり、未来のグロックで頭を撃ち抜いていたたり、キッチンに置いてある包丁やナイフで首の動脈を切っていたら。

最悪の想像は何回も彼女の頭をもたげ、その度に首を振って打ち消そうとしたが、今まで仕事で見てきた死体の鮮烈なイメージは簡

単に消えるものではない。

杉田を失うなど、考えられなかった。

自分ひとりが残されたらどうなるかなど、考えたくもないのだ。

どうして非難されるべきではない被害者が、自らのことを責めなければならぬのだろうか？責められるべきは犯人である筈なのに、死ぬほど辛い目に遭わされた者が、責任など負っているわけではないのに。

『生きてる価値なんかないよ、僕は』

『僕は自分がいることで、誰かに迷惑をかけたくないんだ』

『僕が弱い男だから、君までこんな辛い思いをさせて。本当に、ごめんね』

「……あれ？」

杉田と交わした先の会話を思い返すうち、未来はそこで驚いて顔を上げた。

自分が悪いわけではないのに、感情を向ける場所欲しさで全ての責任を自分が負っている、悪いのは全部自分だと思い込む。

それと同じ状況に、思い当たったのだ。

去年まだ日本にいて、旧型のサイボーグと戦っていた頃のことである。

生きている価値がない。

誰にも迷惑をかけたくない。

自分が弱いから、誰かに辛い思いをさせている。

先に杉田の言ったことは全て、嘗ての未来が思っていたことそのままだ。1年前の自分自身の姿が今、杉田の中にあっただのである。

「同じなんだ、あの時の私と」

呟いた未来の中に、杉田によって救いを得た事件の記憶がまざまざと蘇ってきた。

自分が悪いとだけ考えていた未来は、純粹に心配し気遣ってくれていた杉田と幾度もすれ違い、最終的に彼を銃で撃ち殺害しかけるという歪んだ行動に及んだ。その時は周囲のことなど考える余裕が

なく、自分を壊すことしか助かる術はないと、頑なに信じていた。

事情は違えど、自分が世界の全てから拒絶されている、誰も自分のことをわかつてくれないと感じる孤独と絶望感は、嘗て自分がいだいたものと同じだ。

あの時の未来を救ってくれたのは、杉田の「全てを赦す」という言葉と優しさだった。

だとすれば、杉田が昔の自分に与えてくれたものと、今現在の彼が求めているものも同じではないのだろうか。

誰かに、そのままの自分と言う存在を認めて欲しいという願い。全てを許して受け入れて欲しいという望み。

自分の存在が許されていると感じること、生きていける場所があると実感することができれば、彼も助かるのではないか。そして今それができるのは、多分故郷から遠く離れたこの地において、彼と一番近い場所で信頼関係を築き、愛情を感じ合っていた未来だけなのではないか。

確かに未来は、杉田に死んで欲しくないと一番強く思っている人間だろう。

死という運命に逆らえなくなるまで、許される限りずっと側にいたいとも願っている。

が、客観的に見ればそれは自分が杉田に寄りかかり、彼という存在を自分のために欲しがっているだけだのエゴだとも言える。

しかしそうではない、と彼女は沸き上がってきた疑念を真っ向から否定できた。

違う。

自分が望んでいるのは、そんなことではないのだ。

杉田が生きていることを許されており、存在そのものに価値があるのだと、彼自身が感じること。

彼が決して一人ではなく、背中を支える仲間がいつも共にあること。

そして、彼の存在そのものを認めて理解しようとする者がいるこ

と。

恐らく杉田が無意識下で望んでいる全てがすぐ側にあるということ、を、伝えたい。

感謝などしなくてもいい、ただ感じて欲しいだけだ。

少なくとも自分を救ってくれた時の杉田はそう願っていただろうし、未来自身も自らの存在を見つけることで、それ以上破壊的にならずに済んだのだ。

問題は、どうすればそれを伝えられるかということだった。

「あの時は……」

未来は今の杉田を過去の自身に置き換え、必死に記憶を探り始めた。

自分が杉田に向かって弾丸を放った瞬間の光景を心の隅から引っぱり出すと、嫌悪感に吐き気がこみ上げてくる。正直に言えば思い出したくもない出来事だったが、愛する男の将来には代えられない。あの時、杉田は自らの命を危険に晒して文字通り身体ごとぶつかってきてくれた。

それが未来を理解しようとする強い想いを示した彼の姿勢であり、一番強く未来の本質に訴えてきた手段だったのだ。

相手のことをわかっていっているのに、間にある見えない壁を越えられない。頭が沸騰しそうなもどかしさは、きっと彼も感じていたに違いないだろう。

今になって杉田の気持ち痛みほどにわかるなど、質の悪すぎる嫌味である。自嘲気味の笑いを浮かべると、未来は溜息を漏らして顔を上げた。

考え疲れてリビングの中でふらついた視界に、ふと色合いの鮮やかな何かが入ってくる。瑞々しい赤と緑が眩しいそれは、エマからクリスマスプレゼントにともらったポインセチアの鉢植えだった。

今までの杉田なら、きっと弾けそうな笑顔を満面に咲かせて喜んでいただろう。

そう言えば、彼がアメリカに来てから一番楽しそうにしていたの

は、花や植物に触れているときだった。

が、未来はと言えば、何が面白いのかもわからずつまらなそうに彼の様子を眺めていただけだ。

彼が充実した時間を過ごそうとしていたのに、そこに興味を持つとうという気持ちが出来になかった。だからこそ彼は共通の話題を持っていたソフィーと気が合うと感じ、彼女の世話を焼きたくなったのだ。

そう。

今までの未来に足りなかったのは、日常の些細なことにも喜びを見いだし、杉田と分かち合うことだったのだ。

それも当然だった。

今にして思えば自分はいつも彼に求めて、何かしても同じだけの見返りを要求するばかりだった。そんな傲慢な考え方では、気づけなくて当たり前だ。

愛する者の姿を本当に知ろうとしていなかったのは、自分の方だったのだ。

愕然とした未来がカウチから立ち上がると、今まで完全に存在すら忘れていた、部屋の随所に置かれた観葉植物の緑が視界のあちこちに飛び込んでくる。

どれも水やりがされておらず、葉先が茶色くなっているものが多い。

これは皮肉にも、今現在2人が置かれた状況そのものを表しているといっても良かった。

ふらりとダイニングテーブルに近づいた未来が、乾いた室内で唯一生き生きとしているポインセチアの赤い葉の先をそつと撫でる。

「……何で、こんな簡単なことに今まで気づかなかっただろうか」
彼女が呟いた一言は後悔と悲しみを感じさせる色を帯びていたが、決して負の感情しか込められていないそれではなかった。

杉田が夢も見ない眠りの底から這い上がってきたのは、意識を失

つてから何時間後のことになったのだろうか。身体は十分過ぎるほど休んでいるのに頭は重く、意識もまだ夢の中にあるようで、瞼を開けるのが億劫だった。

それでも遮光カーテンの隙間から漏れてくる光が気になるのは、生き物としての本能なのだろう。うつ伏せになって毛布の中から手を伸ばし、白木のサイドテーブルに据えられた電波式目覚まし時計を掴み上げると、12月8日の午前11時過ぎであることがわかった。

カーテンの向こうに日差しが降っているのがわかったのは、雨戸がいつの間にか開けられていたせいだった。これは未来の癖で、休みの日は朝日を窓から見るために雨戸を開けて、カーテンだけを閉めておくのだ。

しかしその彼女は隣のベッドにおらず、乱れた毛布やシーツからも温もりが失せている。

未来はまだ自宅療養期間中の筈で、さほど早く起きる必要などない筈だった。なのに、何故黙ってどこかに行ったのだろうか？

まだ薬の影響が完全に抜けていない杉田では、その程度しか考えられない。

だが、表から微かに聴覚を刺激してきた音が冷たい風で頭の中の靄を吹き飛ばした。

何か固いものを土の地面に差し入れ、掘り返す音が聞こえてきたのだ。自分も趣味の園芸でしょっちゅうまき散らしている、いつもの雑音である。

途端に、家具しか置いていないはずの寝室に土の香りが満ちた気がした。

無論杉田の錯覚だったが、おかげで一気に目が覚めていた。ために、しごく当然の疑問が頭をもたげてくる。

一体誰が、何をしているというのか？

地面を掘る強盗など聞いたことがないし、この昼日中に犯行を試みるなど考えづらい。必要以上に警戒する必要はないが、やはり杉

田は不審そうにカーテンを開け、窓の外を覗いた。

窓から数フィートも離れていない場所に、忙しく動き回る小さな背中があった。

分厚いジャケットとデニムに身を包み、庭に作られている狭い花壇に思い切りスコップを突き刺し、掘り返しては土の塊をほぐすことを繰り返している。その合間に表面に転がり出てくる大小の石を、摘み上げて傍らに放り投げていた。

まだ午前中の寒い屋外で白い息を吐き散らしているのは、未来であつた。

彼女が手入れしているのは庭の一角を簡単に煉瓦で囲った、前の住人が作ったであろう花壇の残骸と思しき場所だ。随分長い間土をならしているようで、生え放題だった雑草は全て取り除かれ、代わりに黒々とした土が露出している。

未来は時折手に息をかけてこすり、温めながら、不慣れな手つきで黙々と土の手入れを続けている。その前に地面に這いつくばって雑草もむしっていたのだらう。ジーンズの膝下はかなり汚れているようだった。

花壇の外側には、地下室に置いてあつたファーマーズマーケットのロゴが入った買い物袋が置いてあるのが見える。これは確か事件前に買出しに行つたまま、一部手をつけられずに置きっぱなしになつていたものだ。

まさか、それを未来が花壇に植えようとしているのだろうか？

第一彼女は園芸に全く興味がなく、話に乗ってくる素振りすら殆ど見せたことがない。どういう風の吹き回しなのだらう。

が、やる気になつてしていることは事実のようで、時折空気を含ませた土に足を取られて転びそうになっているのに、作業を中断させようともしない。しかしその懸命な姿も、この程度の作業など朝飯前の杉田にとっては、危なっかしく見えることこの上なかつた。

それにあの元花壇は、もともと彼が手入れしようと思つていた場所でもある。

杉田は身につけていたスエットを脱ぎ捨てると、数日ぶりにタートルネックのニットに袖を通してデニムパンツを穿いた。そのどれも未来が新しいものを買っておいてくれたらしく、私服を入れてあるチエストの一番上にしまっただけのものである。

身なりを整えた彼がリビングまで出たその時、見覚えのないポインセチアの鉢がダイニングテーブルの上に置いてあることに気づいた。習慣で土の表面に指先で触ってみると、適度な湿り気が感じられる。

そしてあちこちに置いてある観葉植物も、しおれかけた葉が見られはしたが、どれも水をやったばかりのようだった。自宅にある植物は全て杉田が世話をしており、病院から戻ってから彼自身は一度も水やりをした覚えがないというのに。

未来が代わりにやってくれたのだ。

彼がリビングに置いた5つの鉢の全てを確認して驚きを顔に浮かべたところで、玄関のドアが開いて未来が入ってきた。その正面にいた杉田が顔を上げると、丁度目を合わせる格好となる。

「未来……庭で何してたんだ？」

「何って……その」

「もしかして、花壇の手入れしてた？君が？」

未来は困ったように視線を逸らして答えない。

杉田が純粹に驚いて質問する一方で、未来の表情はばつが悪そうだった。言葉に詰まった彼女が汚れた手で頬を掻くと、その跡に泥が頬にこすりつけられていく。

「だってさ、買っぱなしで放り出してた球根がもつたじゃないじゃない。それに、先生があんなに楽しそうに買い物してたから」「え？」

未来の顔が汚れたことを指摘しようとした杉田の言葉が、再び驚きで止まる。

「先生が大事にしてるものは、私も大事にしたいんだもん」

拗ねたように言ってから未来は顔を上げたが、今度は迫力のある

視線を向けてきた。

「先生だって、春に花が咲くのを楽しみにしてたんでしょ？」

彼女の真剣さに圧された杉田は、無言で頷くしかない。

しかし、次に続けられた未来の口調は再び困っているのと、拗ねた色が半々になっていた。

「でも……チューリップを植えてから結構経ってるのに、まだ芽が出てないんだよね。ここ何日か寒かったし、家の中に入れたほうがいいのかな」

もじもじと言う未来に、杉田は思わず吹き出していた。

「そんなに早く芽は出ないよ。チューリップは植えてから暫く寒さに当てないといけないし、発芽はまだまだ先なんだ。3月くらいになるんじゃないかな」

「え、そうなの？」

素っ頓狂な声を上げる未来に、杉田は笑いを堪えながら頷いた。

彼女は多分、アサガオやヒマワリと同じようなつもりでいたのだが、小学校の授業の一環で一度はチューリップも栽培しているはずだったが、そんなことはもう忘れてしまったのだろう。

「それにほら、顔が汚れてるよ。土のついた手で触るから」

一度笑ったら心が軽くなったのか、杉田が未来の頬を指差す。彼は戻ってきて以来いつになく饒舌になっているようだった。

「あ、でも、ほら。まだ途中だからさ。後で顔洗うし」

未来は言いつつも慌てて服の袖で乱暴に頬を拭ったが、袖にも泥がついていたらしく、余計に顔が汚れてしまっている。同居人の子どもっぽい反応と仕草に微笑を残したまま、杉田は応えた。

「あとは僕がやるから、未来は先に顔を洗ってくるといいよ」

「じゃあさ、私が手入れしたところを見てよ。そうすれば安心だから」

言うが早いか、未来は嬉しそうに笑うと小走りに杉田の背中に回った。上半身を軽く押された杉田は玄関ドアのすぐ横に置いてあったスニーカーに足を突っ込むと、促されるままにポーチへと出た。

未来が開けた木のドアの隙間からさつと外気が流れ込んできた次の瞬間、視界いっぱい白い光が満ちる。

杉田の目の前に広がったのは、事件前は見慣れていた我が家の素朴な庭の光景だった。

日当たりがいいポーチは寒くはあるが風はなく、からりと晴れ上がった冬晴れの空は美しく澄んでいた。

冬を迎えたヴァージニアの空気は昼でも冷たく乾き、若き医師の白っぽい手や顔の肌を冷やりと刺してくる。杉田はここ何日かぶりで直接拜んだ太陽光に、眩しそうに目を細めて身震いもしたが、不快そうな表情は浮かべていない。

眼鏡の奥の視線が早くも花壇に向けられてるのを見て、未来も彼に倣うことにした。

未来が掘り起こしかけた花壇は一面が黒々とした土に覆われており、幾度もスコップを使って盛り直しているのが一目でわかるくらいだった。多少やり過ぎのようにも見えるが、彼女は全く園芸の知識がないのだから無理もない。

しかし杉田が驚いたのは、花壇の横に腐葉土と球根の入った紙袋の他、硬質赤玉土やバーミキュライト、パーライトなど一般的に必要なとされる材料が揃っていることだった。少なくとも、彼がこれを買っておい覚えはないのだ。

「ああ、それはさっきお隣のヒルマンさんからもらったの。ここで作業してたら、これを土に混ぜるといいよって言ってくれて。いい人だよな」

土のことに気づいた杉田に、未来が補足する。彼はその隣に重ねてある大小のシャベルや大きなスコップを見比べて、まだ驚いているようだった。

「これ、ずっと一人でやってたのか？」

「うん。まあ、これくらいはどってことないし。力仕事なら、お手のものだからね」

杉田の問いに照れ臭そうにして答えた未来だったが、彼女は花や

植物のことなど全く興味も持たなかったし、杉田があれこれ語っていてもつまらなそうに聞いているだけだったのだ。

「でも、どうしてこんなことをいきなりやろうと思ったんだ？」

「それは……さっきも言ったじゃない。先生が大事にしてるものは私も大事にしたいの。それに、自分で園芸をやってみたら、先生のことをもつと理解できるようになるかなって」

素直に質問を投げかけてくる同居人に、未来はまた拗ねたようにそっぽを向いてしまった。

思わず、花壇を眺めていた杉田の視線が未来の方へと向き直る。

好きだとか一緒にいたいとか、恋人たちが当たり前に使う類の表現は、未来が口にするのを日常的によく耳にしていた。

だが、考えようによってはこれらは相手の都合を考えない、ひどく一方的な感情でもある。

言ってみれば自分から要求する一方で、幼い子どもが心のままに親兄弟に向けるようなものによく似ていると言える。

反対に、相手のことを理解するというのは、口で言うほど易しいことではない。

世界中で別離と言う結末を選択するカップルの殆どがそれを達成できないからであり、理解しようとする本人が努力しているつもりでも、客観的には自分の感情を相手にぶつけているに過ぎなかったりする。今まで求めていたばかりの未来の考え方が変わっているらしいことが、杉田には一番意外だった。

そして、彼女が自分の好きなものを知ろうとしてくれていることが、動きの鈍った心の底から純粹な喜びを思い出させてくれるようだった。

「ありがとう。けど、寒かっただろう？手もこんなに冷たくなって未来の頬と手が真っ赤になっていることに今更ながらに気づいた杉田が、思わず彼女の顔や指先に手を伸ばして言った。

杉田に比べて小振りの手が、吹き渡る寒風と比べても遜色なくらいに冷えている。軍手もせずに冷え切った鉄のスコップを握り、

土をいじっていたのだ。悪くすれば、霜焼けになりかねない。

感覚も麻痺しているだろう。一回りは小さな手を温めようと、杉田は未来の手を両手で包み込むようにして握った。

「大丈夫だよ。今、先生の手があつたかいから。それに先生だって、毎年冬場にやっつてることなんですよ？」

自分の手に土がつくのも厭わず手を握ってくる杉田に、未来は照れ笑いを浮かべている。温もりを感じる彼の手を振りほどこうとは考えていないようで、未来はそのまま裸の花壇に視線を移した。

「今はまだ寂しいけど、春にはきつとたくさんの花でいっぱいにするんだからね。種も球根も、たくさんあるんだし」

決意表明するように、未来の口調には力が込められている。その言葉が示す通り、花壇の脇に置いた袋には、春に花を咲かせるスイセンやヒヤシンス、フクジュソウの球根や種がまだたくさん残っていた。

「……でも、花でいっぱいにするのは、先生と一緒にやりたいんだ」
未来は杉田の方を向いてはいない。

しかし、声ははつきりと杉田の耳に届いていた。

未来と一緒に土をいじるなど、彼は今まで想像もしていなかったが、不思議なことに、今は隣で佇む彼女が一生懸命に草を取ったり、笑顔で水やりをしたり、咲き誇った花を嬉しさに輝く瞳で見つめる様子を自然に思い描くことができる。

自分の中に浮かび上がる未来の姿に、驚くほど違和感がない。

きっと自分は、誰かと一緒に植物を育てていくことをずっと望んでいたからだ。

日差しの中で小さな生命が伸びゆくのを見守る喜びを、心の中に陽が差すような穏やかな気持ちをかち合いたかったのだ。

そこに手を差し伸べてくれる存在を、やっと手に入れた。

言葉にすることがなかった想いをわかってほしいとしてくれる誰かが、歩み寄ってきてくれたのだ。

「私、先生のこと好きだよ。何もかも全部。だから、一緒に生きて

いきたいの。これからずっと」

「……え」

しかし未来の次に続いた言葉は、春の温かさを感じていた杉田の内面に放り込まれるには、あまりに突然過ぎた。

その趣旨を理解できず聞き返してしまった彼に、恐らく罪はないだろう。

「もう、何度も言わせないですよ。先生のこと、何があっても丸ごと好きだって言ってるの！だから支えていきたいし、花壇だって一緒に作りたいんだってば！」

自然に素直な想いをタイミングまで考慮せずに言ってしまったのか、未来はやけになったように口調を荒げて視線を逸らす。

しまった、と表情で語る杉田はしかし、彼女の手は握ったままだった。ここで手を振りほどいてはますます未来の口許がへの字に曲がるだけだろうし、それ以前にこの小さな手が自分の手の中にあることが嬉しく、離したくはなかったのだ。

おろおろと視線を泳がせているうちに、再び互いの黒い瞳が結ばれる。

未来の頬は今まで以上に赤くなっていたが、表情は穏やかな笑顔を湛えていた。

「……愛してるよ、先生」

低く呟いた未来の声が、白い息とともに空間をかすかに震わせた。杉田を見上げてくる大きな瞳は、答えを求めていなかった。

私が何もかも、全部受け止める。

だから一緒に歩いていこう。

私が支えていくから。先生は一人じゃないから。生きていていいんだよ。

彼女が向けてきた静かで優しい微笑みは、様々な想いを秘めていた。

ともに生きていこう。

そう言ってくれた未来は今自分が一番欲しがっているものを、自

分がここに存在することの喜びを与えてくれたのだ。

杉田の瞳が熱くなり、視界がぼんやりと曇りかける。

「……ありがとう……」

涙が零れ落ちる前に、彼は未来の肩を力いっぱい抱き寄せていた。「僕も……君を、愛してるよ」

杉田は自身でも聞き取れないくらいに小さく、掠れた声で囁いたが、腕の中にいる未来が確かに頷いたのがわかった。

頬に感じる未来の髪の感触がこころよい。

そして薄く開けた杉田の瞳には、ポーチに並んだチューリップの鉢の横にちょこんと置かれたストロベリーフィールドの苗が映り込んでいた。

未来が杉田に送ろうとしたもう一つのメッセージが、そこにあった。

ストロベリーフィールドの花言葉 - - 変わらぬ愛を永遠に。

- 完 -

作者あとがき

前作をお読み頂いた方は、またお会いできて光栄です。

本作を初めてお読み頂いた方は、初めまして。

作者の日吉舞です。

この度は、「SAMPLE」の続編に当る「機甲生体捜査官 弄ぶ、誰か」をお読み頂き、本当にどうもありがとうございました。本作品を公表するに当たりスペースを拝借している「小説家になるう」で数多の作品がひしめく中、本作に目を留めて頂いたことに感謝するばかりです。この場を借りて、お礼を申し上げます。

そして連載中、感想やWeb拍手、ツイッターなどで励ましを下さった方々には、重ねてお礼を申し上げたいと思います。本当にどうもありがとうございます。

さて。本作は構想数ヶ月、執筆所要期間一年半以上と、気がつけば全体のテキスト分量も前作を超えたものになってしまっておりました。内容が果たして前作を超えられたかどうかは別として、物語としてきちんと完結させられたので、自分としては充実感に満たされております。前作に当たる「SAMPLE」を書き上げるまでは設定やあらすじどまりだったので、成長したなと勝手に感じている次第です。

本作を書くことと思っただきっかけは、実に簡単です。

前作「SAMPLE」をこのまま終わらせるのが惜しかったのと、子どもの頃から大好きだったFBIもののネタで何か書けないか、という煩惱を合体させたかったから！

……いや、でもしかし、単に好きだからという理由だけで面白いものが書けるわけでもなく、それに前作では嫌と言うほどリアル志向のストーリー構成にしていたから、次でそんなにはっちゃけるわけにもいかないよなあ、ということ、やっぱり最初は色々と資料を集める作業から開始しました。

で、FBIを母体にするのはいいとして、そもそも軍事目的で作られたサイボーグが警察関連の機関、しかもアメリカに行くことになった経緯を細かく考えて、その後は何とどうして戦うのかとか、細かいことを決めて行かになあ、とか色々。

特に大変だったのが、FBIが実際にどういう捜査活動をやっているのかを調べること。テレビドラマや映画なんかではもうFBIという組織はお馴染みなんですが、情報を漁るうちに、現実ではそんなに派手なことをしてるわけじゃない、というのがわかってきました。

話の冒頭では地方の駐在事務所でビシバシ教育される未来の姿を書きましたが、実際はああいう感じのようで。やっていることは警察とあんまり変わらないなあ、というのが本当のところ。よくある連続猟奇殺人事件や超常現象の捜査なんてのは、実像から結構遠いところにあることがよくわかったり。FBIが担当する星の数ほどもあるの事件の一部、ということなんですよね。

ただ、日本では考えられないようなショッキングな事件が起きるのも、またアメリカという国が抱える現実です。今回FBIの犯罪科学研究所や元FBI長官の自伝、はたまた元FBI捜査官の旦那様がいらっしゃる女性ライターの本から犯罪心理学の本まで、色々読み漁りました。ので、やけにその辺の事情に関しては詳しくなつた筈と自負しております。

しかし今回の話においての反省は、折角だからそういう知識を活かそうとしてちと「リアル」に走り過ぎてしまい、やたら小難しい話になってしまったなあということ。一部のトリックは専門知識がないと理解できない人もいただろうし、読者の方々を置いてけぼりにした感は否めないかと思えます。すいません。

そして本人の癖なのか、中盤頃から鬱展開の連続。一部読者の方からは、鬱展開を抜けたら読み直そうというお言葉まで頂いてしまつたくらい。いや、明るい話は嫌いじゃないんですが、どうもそればかりというのはやはり苦手です。戦闘中に軽い掛け合いをし

たりとか、そういうのは好きなんですけどね。

ちなみにこの作品、本当はミステリーとして書いたのです。しかし、「小説家になろう」ではミステリーというジャンル自体が存在しないため、近いと思われるところに登録したハズが……確か、関連サイトで「推理してない」とか言われてた気がします。あはは。だから最近はジャンルをSFに移してみたり。

今回は複数のコンセプトを話に持たせていて、当初から是非要素として盛り込みたいと思っていたのが、犯罪被害者の心の傷のことです。特に、男性の性犯罪被害者のこと。

劇中の杉田先生は救出後かなり手厚く扱われていることになつてますが、現代社会、特に日本社会においては、「男なんだから傷つくわけがない」「男なんだから泣くな」「そもそも、男が性犯罪の被害に遭うわけがない」という「男らしさ」の偏見の壁が厚く立ちはだかり、泣きたくても泣けない、誰にも（親や奥さんにさえ）相談できない、勇気を出して訴えても周囲から孤立し、酷い場合は風の噂を聞きつけた心無い者たちから精神的、肉体的暴行を繰り返す受けるということが往々にしてあるのです。

その事実を知ったとき、私も息苦しさを感じるくらいショックでした。

私は思います。

傷ついた痛みに、男も女も関係ないと。

男か女かという区別以前に、皆心を持つ人間なのだと。

だから男女の区別なく、心理ケアはもつと平等にあるべきだと（あ、ちなみに私自身では男女の「区別」と「差別」は別物だと考えているクチです）。

この手の作品だと、被害者のその後が描かれているものは少ないと思います。でも精神に深刻な傷を負った被害者がすぐに立ち直れるわけがないし、心を持つ生き物なんだから、誰だって傷つくんだということ、多くの人に知ってもらいたい。

そんな思いから、もう一歩踏み込んだ辺りまで描写するに至った

次第です。エピソードでの杉田先生と未来は一応、支え合って生きていくことを決意する姿で終わられたので希望はあるかなど。それに周囲からの理解もあるし、何とか乗り越えていけるんじゃないかと思えます。そういう意味では、彼らは仲間にごく恵まれていると言えますよね。

そして、今回から登場した新キャラクター群。一度にちよつと数を出しすぎてしまい、一部は本編に覚え書き程度でしか登場させられなかったのが反省点です。アメリカ人である彼らは私の中でとくにキャラが立っているので、次回以降はみんなが活躍できるストーリーを考えたいなあ。

えと、ここで新キャラクターの中で一番活躍のしどころがあった、ジャクソンについてちよつとだけ。

典型的なアメリカ人キャラの彼。28歳の凶体も態度もでかい陽気な黒人で、アメリカ陸軍特殊部隊デルタ・フォースの出身と言う経歴の持ち主です。最初から保安目的で作られたサイボーグなので、未来とは改造のしかたが若干違います。未来を隠密機動と破壊工作が主任務の忍者と位置づけるのなら、ジャクソンは自らの体を張って市民を守ることがメインのヒーロー（今はまだ表に出てこないけど）といったところでしょうか。

まさに子どもの頃からの夢を自分の力で実現させたアメリカンヒーローなのですが、実は犯罪被害者の家族という過去も背負っています。だから未来の辛い気持ちもわかってやれる、頼もしい相棒なわけで。ただ、本当はもうちよつと表に出して活躍させるつもりだったのに、いつの間にか未来を陰から支える兄貴キャラになってしまいました。

まあそれでも、今まで登場させてきた男性キャラとはタイプがまた違うし、未来との凸凹コンビは書いていて楽しかったです。私は一定の条件下において男女の友情は成立すると思ってる（これはまたものすごく微妙なバランスを取らないとあり得ませんが）ので、これから先の話では二人のアクションを中心に据えていきたいです

ね。

で、これ以降のシリーズについては、次回とその次くらいまではこういうのが書きたいなあ、という腹案は持っていたり。今回ミステリー要素が強かったから、今回は謎少な目の純粋なアクションものとして楽しめる作品にしたいと思っています。

プラス、今回は新しいキャラが出ては来たけど目立たせてなかったし、日本残留組については殆ど出番がなかったたので、彼らも活躍させるつもり。未来と杉田先生が中心だった今作とは別の色をまた出したいので、男たちの熱（苦し）いドラマ展開を書きたいなど。デルタ・フォース時代のジャクソンやフォース・リーコン時代のリーたちの過去を絡ませてみたいとか、杉田、生沢、エマたち医療チーム面々の動きなんかも入れてみたいとか、CVCが日本政府からの協力要請を受けて来日する話を書いてみたいとか、やりたいことはたくさんです。

まあ、例によりまして、一定量を書き溜めするまで時間がかかるので、また数ヶ月間連載はお休みすることになるかとは思いますが……けれど、自分の中ではまだまだ終わらせるつもりはありませんので、どうか気長にお待ち頂ければと思います。

「小説家になるう」さんで新作を公開するのは早くて秋以降、遅ければ来年の年が明けてからになるかも知れません。かなり長く充電期間を取ることになるかと思いますが、この数年で長編作品を連続して完結させることができたので、密かな自信をつけていたりもします。

ですので、次回作もまずはきちんと話を考えて、完結させることを第一の目標に据えようかと思っています。

あ、それまでは全く何も書かないというわけではありません。

ここだけの話、実は「仮面ライダーW」の二次創作で、渡米直前の未来を登場させるといふ暴挙に出ております。Wが好き過ぎて暴走している作者の自己満足作品なのですが、こちらでは本編であまり書けなかった便利屋所長としての彼女の姿がメインです。こちら

も同じく「小説家になろう」様にて同一作者名で公開しておりますので、からかい半分でも覗いてみて下されば嬉しいです。

少し話が逸れてしまいましたが、これから暫しの休息に入ります。再び皆様と一次創作作品の作者としてオンラインでお会いする時は、きつとこのシリーズの新作を引っさげてくるつもりです。

その時まで、皆様もどうかお元気で。

また、いつか！

2011年6月某日 日吉 舞

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6648k/>

機甲生体捜査官事件ファイル vol.1 -弄ぶ、誰か-

2011年8月12日03時14分発行